真剣で最強に恋をした。

ブラックサレナ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
真剣で最強に恋をした。

【Ｎコード】
Ｎ３６３７Ｎ

【作者名】
ブラックサレナ

【あらすじ】
あらゆることには分岐がある。もしその世界があるのなら、私ならこうするがね♪

もしも、もしも川神院に川神百代よりも強いものが訪れていたら、たぶんそれは違う道（ルート）と、いうことだ。さあ、これから始まるのはそんなパラレルワールドのお話。

あ、言い忘れました。このお話はオリ主最強で、しかもヒロインが即決定という破天荒かつ、読んでいて砂糖が吐けるぐらいの所もしばしばｗｗ、それにこの話は原作のお話である大和君がどこかのルートにいきそれにオリ主を混ぜた話です。それではこの要素がお嫌いでない方は本編へどうぞ。

ちなみに作者は原作を一応していますがうろ覚えです☆

さらにこのお話の書き方は台本形式と、なっております。お嫌いじゃない方はどうぞ本編へ。

##第一話##（前書き）

新しく始めてみます。ヨロシクお願いします。それでは第一話どうぞ

##第一話##

ここはとある、有名な寺院。その名も川神院あるものは己の心を、ある者は力を求めこの地に来、そして唯一無二の資格でこの寺院に入ることが許される場所。しかしそこにあるご老人が一人、門を叩きました。

老人
「失礼ですが。ここに川神鉄心さんは、いるでしょうか？」

門下生
「鉄心様ですね。少々お待ちください。その一応お名前を」

老人
「これは申し訳ない。“神代（カミヨ）”と、言えばわかると思います」

門下生
「はい、それでは」

門下生はそういうと奥に消えて行きました。そして、ほんの数分後。袴で威厳たっぷりのお爺さん、そうこの人が川神鉄心。

鉄心
「うむ。久しいの～」

老人
「ああ、本当に久しいな。」

鉄心
「そして、その子が」

そういうと、鉄心は老人の懐にいる赤ん坊を目で指した。

老人
「はい。まったくかわいそうな子だ。生まれた年に両方の親を一気に亡くしたのだから」

鉄心
「戦いは時にして残酷じゃからな。ワシも葬式には出させて貰ったよ」

老人
「ええ、うちのバカ息子はもうあちらに居ますからね、奥さんも連れて。まったくばあさんがお説教しているでしょうに」

鉄心
「ふむそれで、こちらで養子とするのか？」

老人
「いえ、遺言には私たちの子なのだから、もし私たちが死んで養子になったとしても氏名は変えないでほしいと。」

鉄心
「うむ。それならばこの川神鉄心が引き受けよう。ちょうど去年に

孫が生まれてのう。名前は百代と言うんじゃ。」

老人
「それでは生前は息子がお世話になりました。それでは私はこれでもう先は見えている身ですから」

鉄心
「最後にこの子の名はなんというのじゃ？」

老人
「はい。『御剣（みつるぎ）　彰人（あきと）』です。」

老人はその赤ん坊を鉄心に渡し、去った。

鉄心
「それではのう。我が古き友よ」

門下生
「鉄心様。そろそろ、お時間が」

老人が去りその後をただ見続けていた鉄心は門下生の声で、振り向き

鉄心
「すまぬ、すまぬ。今行こう」

そして、門から遠ざかった。

そして、九年の月日がたち

百代
「おい、彰人。飯にしようぜ。」

彰人
「いいよ、百ちゃん。」

僕の名は御剣彰人。今はこの川神院でお世話になっている。そしてこの僕と一緒に修行しているのが川神百代。僕とは一才違いだけど家族のように育ててもらったためあまり年上だと思っていない。実際少しこちらが目を見とかないと暴走しちゃう。そして今日はいつもどおり、修行に明け暮れていた最近では僕達二人は門下生では相手にならないほど強くなった。そんなある日

百代
「なあ、彰人。」

彰人
「うん、なに百ちゃん?」

今は修行の合間の休憩。他の門下生も一緒である。

百代
「あのな。その・・だな・・・」

彰人
「百ちゃん?」

いつもの百ちゃんとは、ちょっと違った。

百代
「そ、そのだな。わ、私とっ！！」

百代
「勝負してくれ！！」

その言葉が川神院に広がった。そしてそれを聞いたのかどうか知らないけど、鉄爺（川神鉄心のこと）が道場に来て

鉄心
「なんじゃ、百代。彰人と戦いたいのか？」

百代
「ああ、そうだ。そして確かめ・・・・」

なんか百ちゃんが最後の方が小さい声で聞こえなかったけど・・・

鉄心
「うむ。ならば、外を使うがいい。おいルー」

そして、そこに百代のお父さん達を倒したことのあるルー師範代が来た。

ルー
「ハイハイ、それではおフタリトモ。こちらに来るネ」

そして、川神院の中心にある。闘技場みたいなところで勝負が始まろうとしていた。

ルー
「ハイハイ。それでは二人とも、準備ＯＫネ？」

百代
「ああ、何時でもだ」

彰人
「うん。いつでもいいよ。」

鉄心
「それでは・・・始め！！」

鉄爺の声と共に始まった。その瞬間に当てられる殺気。

彰人
「（こ、これは）」

百代
「（やっぱ、殺気だけじゃ。互角なのかな？）」

そして、先手は百ちゃんの蹴り、さすがに食らいたくはないため、避けてこちらの拳を百ちゃん、攻撃。

鉄心
「うむ。これはのう。ほ、ほ、ほ。」

ルー
「これは、我々と同じ師範代級の試合ネ」

二人だけの観客と、思いきや

？？？

「なんですか。この殺気はって。あいつらか」

鉄心

「ほほう。釈迦堂もこの殺気で気づいたのう」

釈迦堂

「ええ、この殺気。川神院全体に広がってますぜ」

ルー

「この二人は、ホント天性の才ネ」

鉄心

「それにあの二人は修行は怠らなかったからのう。まあそれは彰人のおかげなのだろうじゃがな」

そして、試合が動いた。

百代

「せぇぇぇぇぃ！！」

彰人

「g、グハッ！！」

百代の連続攻撃に彰人は一撃を貰ってしまい

百代

「終わりだぁぁぁ！！」

そして、とどめの一撃を

彰人
「悪魔の腕。スネークバイド（ボソ）」

百代
「な、なに」

“ドガァァァァァァァン”

そして、その勝負の結果は

鉄心
「そこまでじゃ。この勝負、彰人の勝ちじゃ。」

そこには倒れている百代の姿が、そして百代は初めて負けを経験した。

彰人
「ごめん。鉄爺。“あれ”使っちゃった。百ちゃんが本気なのに、こっちが本気でいかないのは、相手にとっても自分にとっても侮辱だから。」

鉄心
「うむ。たしかに“あれ”は、我々の川神流のものではないにしろ、あれは危険じゃ。」

彰人

「うん・・」

鉄心
「しかし、その心はまさに川神流じゃ。安心せい。それに」

と、鉄心が指を指した方向にはさっきまで気絶していた百代が起きた。

百代
「いててて、あれ、私？」

ルー
「百代。完全に負けたネ」

百代
「私が負け・・・た」

鉄心
「うむ。初めての負けじゃな。百代よ、いつも門下生やら、師範代の何人らかの戦闘は勝ってしまっていたからのう」

百代
「そうか。負けたか。」

彰人
「百ちゃん、大丈夫？」

百代
「百代」

彰人
「うん？」

百代
「百代と呼べ、彰人。私はいつも名前で呼んでいるだろう。だからだ／／／／」

彰人
「百・・・代」

そして、僕がそういうと、少し顔が赤かったが笑顔になり、

百代
「ああ、それでいい」

と、だけ言って戻っていった。

彰人
「なんなんだったんだろう？」

鉄心
「ほ、ほ、ほ。これは面白いもんが見れたわい」

なんか鉄爺も笑ってどっか消えた、ルー師範代も一緒に。

釈迦堂
「ほう。おい彰人。お前なんなんださっきのあの技。ま、いいか。じゃあな色男。」

色男ってなに？

そんなこんなで、一年後。

男の子
「なあ、俺らの仲間になってくれないか。その名も風間ファミリー！！」

そしてバンダナをかぶった僕と同い年ぐらいの子がそう言って川神院に来た。

##第一話##（後書き）

あはは、今回とうとう二作目を出してしまいました。なのはもよろしくお願いします。

次回からラジオをやると思います。それじゃバイバ～ィ

##第二話## #（前書き）

二話掲載です。

##第二話##

あの、後。俺らは色々あった。
まず風間ファミリーに入る際

百代
「いいか、今からお前は私たちの舎弟となるんだ」

ニヒル気味男の子
「ああ、契約する。よろしくな、姉さん、兄さん」

彰人
「いや、俺とお前同い年だろ。学校で見たことあるし・・・」

百代
「いいじゃないか。べ～つ～に～。と言うわけで今日からお前は舎弟だからな大和」

大和
「ああ。」

バンダナを付けている男の子
「俺の名は風間翔一。この風間ファミリーのリーダーだ。だから俺のことはキャップと呼んでくれ」

そして、ある台風の日にあの花を守るため、俺らが作り上げた秘密基地の空き地に大雨の中に行き、花を吹き飛ばされないようにしたな。

百代
「く、これじゃ」

百代はみんなを守りながら周りを見ていた時、急に看板が飛んできた。

一子
「え、きゃ、キャァァァァ！！」

彰人
「せぇぇぇい！！」

そこら辺は俺も居たため無事に終了。そして後日、

岳人のお母さん
「みんな～写真とるよう」

そのときに、一緒に花を守った女の子がいた。たしか学校でいじめに会っている子かな。っと俺が思っていた時

キャップ
「おい大和。あいつも呼んで来い」

大和
「あ、俺がなんで？」

キャップ
「あれ京だろ。なんかお前を怖がっている感じがするからだ！」

いつものキャップの破天荒さだった。そして、大和が京を連れてき

て、

岳人のお母さん
「あらあら、新しい子が一人居るのね。まあいいわ。それじゃはいピース♪」

そして、それからと言うもの京は風間ファミリーに入った。
てなことも有り、さらにそのグループにいた岡田一子って子をこちらで引き取り、川神一子に代わった。そのときも

一子
「よろしくお願いします。お姉さま。」

百代
「彰人。とうとう弟だけではなく。妹も出来てしまった。」

彰人
「おい、百代。弟じゃなく弟分だから・・・」

一子
「えーと、お兄様？」

百代
「お、お兄様・・・ぷぷぷ」

一子の一言に今にも笑いそうな百代。

彰人
「いや、一子。いつもと一緒でいいから。彰人でな？」

一子
「うん。それじゃ改めてよろしくお願いします。お姉さま、彰人。」

これが小学生の頃の思い出。
そして中学生に上がり、

京
「大和好き。付き合って、」

大和
「お友達で」

今日は金曜集会と言う日。簡単に言うと京が親の事情で他の県にいくことになってしまった時にキャップが「なら、金曜は必ず風間ファミリーが集まる日にする」の一言で決まった。そしていつの間にか、京は大和に溺愛していた。

キャップ
「なあ、モモ先輩。なんでいつもそこなんだ?」

キャップが指摘している。まあみんなそう思うだろうな。今ここは新しい秘密基地。どっかのビルの一室。ある意味学生が持つ秘密基地の中で最高峰であろう。そして、そこにはソファーなり椅子なり本棚があるんだが、百代は本棚の上に座るのが定位置であるが・・・

モロ
「そうだね。いつもそこだよね」

説明が遅れたがこいつは師岡卓也、ゲームなど基本ヲタクっぽいが

風間ファミリー唯一の普通の人だろう。

一子
「お姉さまの特等席なのよ。ね、お姉さま？」

いやいや、一子、それはどうだろう。さらにその後ろにすばらしく羨ましそうに見ている筋肉。もとい岳人。ああ、こいつの説明もまだだったな。こいつの名は島津岳人、土地を色々持っておりこのビルもこいつの家が管理することになっている。

岳人
「それによ、彰人はなにも言わなねしよ。ホントにお前川神院の門下生か？」

そう今現在状況は俺が胡坐をかいている上に乗っているだよこの百代さんが。発端は俺が一番最初に来てそこに座ったら、百代が俺の上に座りだし、他のところに行ったら、いきなり怒り出すし、だから俺は変えてない。ちなみにこの状態だと百代の背中しか見えない。

一子
「岳人、彰人は強いんだから、私なんて簡単にやられちゃうんだから」

岳人
「だけどよう一」

百代
「なんだ、岳人。なんか文句あるのか？」

百代の威嚇攻撃、効果は一・撃・必・殺・だ

岳人
「い、イエ。ナンデモナイデス」

モロ
「あはは、岳人ダサ」

岳人
「なんだと、モロの癖に」

と、あっちはあっちで、じゃれているし。

百代
「なんだ彰人。背中に抱きつきたいのなら、いつでもいいぞ」

ああ、なんかこの人も京化している。

彰人
「なあ、兄弟」

大和
「なんだ、兄弟」

彰人
「大変だよな」

大和
「ああ」

これが中学生の思い出、っとそうだ。忘れてはいけないことがあっ

た。それは中学の卒業式の前日の川神院でのお話。

鉄心
「行くのかのう。まあ一年だけだがのう」

彰人
「ええ、そうします。この“腕”を使いこなして見せます。」

ルー
「うん。武術の好奇心ネ。だけど、百代も一子も悲しむネ。」

う、痛いところを

鉄心
「これこれルー。そんな後ろ髪を引っ張ってどうするのじゃ。」

ルー
「おっとこれは失礼ネ。そうだネ考えた末の答えダモンネ。」

彰人
「はい。それに釈迦堂さんの行方も」

鉄心
「すまんのう。それについては、こちらの不備じゃった」

ルー
「ウンウン」

彰人
「それでは明日卒業式ですので」

ルー
「ソウネ。早く寝ること、それ一番」

鉄心
「うむ。それでは天使の腕、完成するようにのう」

彰人
「はい！！」

そして、次の日。もう卒業式が終わり、みんなにバレない様にそっと川神を出て空港に向かった。俺はこれから一年かけて旅に出て見ようとしていた。中学の始めに俺の家族のことについて教えてくれた。そして俺は父さん達が死んだところに行きちゃんとお祈りもしたかったし、この“右腕”も使いこなせるようにするための旅。これは鉄爺からの提案だった。そんなことを思い出していると、もうターミナルに着いた。しかし俺は驚愕した。だってそこには

キャップ
「おい、俺を差し置いて旅なんてうらやましいぞ！！」

一子
「ぞんな～、あぎど、いっじゃうの～」

岳人
「さすがに一声はほしいぜ」

モロ
「ホントホント」

京
「いってらっしゃい。たぶん苗字が直江に変わっているだろうから」

大和
「絶対無い。しかしお前が消えるのは俺もつらいな（精神的に姉さんの相手しないといけないだろうと予測が付いているからだ）」

彰人
「な、なんで」

大和
「ああ、それがな姉さんが彰人がおかしいっていってたからそっと着いてきて逆回りしたってわけだ」

そして、なぜか高校に行っているはずであろう、百代が居た。しかも不機嫌で

百代
「・・・・・・」

彰人
「・・・・・」

百代
「・・・おい彰人」

彰人
「・・・・・う、うん」

百代
「この際、直ぐにすませる」

そういうと、俺は殴られることことを覚悟した。まあそりゃなんも相談せず、しかも黙っていこうとしたから、一発や二発は覚悟したのだが、しかし、あったのは顔に手が触れた。そう触れたんだやさしく。変に思い、目を開けたら、そこには今にも泣きそうな百代の顔だった。

百代
「いいか。これだけは言っておく。どこに行こうが、お前の家はあそこだ。そして・・・そして」

そこで百代は少し泣きそうなのを踏ん張り

百代
「いいか。お前の好きな、大好きな美少女が居るのを忘れるな。」

そして、俺にキスをした・・・え?キス・・・・

他のファミリー
「おおおおおおおおおおおおお!!」

彰人
「お、おい。百代!?」

百代
「なんだ、彰人。女の子に恥を掻かせるのかこんな美少女に。結構アプローチはしたんだぞ」

彰人
「うん。気づいてはいたけどいつからだよ」

俺は聞いた。

百代
「うん？なにがだ」

彰人
「いつから、俺のこと好きだった？」

百代
「そ、それはだな。その十才の時からだ・・・／／／／」

彰人
「真剣？」

百代
「ああ、本当だ。この川神百代好きな文字は誠だからな」

彰人
「そうか。そうか、あはははははは」

百代
「な、なんだひ、人がこんなに。がんばったのに笑うだなんて酷いじゃないか」

彰人
「なに、俺とそんな変わらないなって思ってさ。」

百代
「え！？」

彰人
「実は俺もそのくらいからなんだよ。百代を女の子として見始めたの」

百代
「な、な！？」

そして、俺はすこし大胆になってみた。

彰人
「それじゃ、恋人記念に即海外に行ってしまう彼氏の侘びだ」

そして俺はさっきよりも長いキスをして、俺は日本を後にした。

他のファミリー
「俺ら空気じゃん！！」

##第二話## #（後書き）

ＬＯＶＥかわかみ準備中。

##第三話## #（前書き）

三話掲載

##第三話##

ああ、懐かしいな

彰人
「ははは」

軍服を着た人
「どうしたのでアキト君。急に笑い出して」

彰人
「いえ、中将殿。昔のことを思い出していたんですよ」

中将
「ほう。あの日本に君が居た時のかい？」

彰人
「ええ。もう一年も前ですけど。」

俺は今飛行機の中。この俺が中将といっている人は、とある紛争地域で会った、ドイツ軍所属のフランク・フリードリヒさん。今回はこの人が飛行機を手配してくれた。

彰人
「ホント、申し訳ないです。こんな飛行機までも」

フランク
「なに、このようなことならいくらでも貸そう。それに君には大きな借りがある。それにこの私も日本に行ってみたかったのだ、まあ

君を送ったら本国にそのまま帰らぬければいけないがね。それに君は“あの刀”もあるのだから」

彰人
「ええ、まあ、そのことについては鉄爺、あ、鉄心さんから大丈夫と言われましたけど・・・」

フランク
「まあ、まあ。ああ、そうだ。君にも言っておこう。我がクリスも日本の川神学園に留学生として来るのだが。」

彰人
「えっと、確か娘さんの？」

フランク
「ああ、この目で日本を見たいだそうだ。それでだ、マルギッテを監視役として、同じ学校に置くことにしたのだが、君にも頼んでおきたい。どうか娘を頼む、もしよからぬ連中がいたら容赦しないでほしい。」

ああ、でたこの人の親ばか。ホント娘大好きの人だな、この人、娘のためなら軍を持ってくるからな

フランク
「なに、君ならば安心してお願いできるのでね」

彰人
「はぁー。」

そのときアナウンスが入り、

アナウンス
「まもなく着陸します。シートベルトしっかり締めてください。」

そして、着陸した。荷物はもう先に着いているらしい。別れ際に

フランク
「ああ、サムライの国」

とか、言ってたなあの人・・・まあいいか。

そして俺の帰国を知る二人の人が空港に待っていた。

ルー
「おぉ、これはすごく背が伸びたネ」

鉄心
「うむ。おかえりじゃ、彰人」

彰人
「はい。お久しぶりです。ルー師範代、鉄爺」

鉄心
「うむ。久しぶりに聞いたわい。」

ルー
「ずいぶん男らしくなったネ」

二人とも俺の帰国がうれしいのか笑顔が絶えなかった。

鉄心
「うむ。それでお主」

彰人
「ええ、大丈夫です。それから」

ルー
「報告は後にするネ。」

彰人
「はい、それでは俺は川神院に？てか百代に会いたいのですが・・・」

鉄心
「まあ、うちのあの孫娘に会いたいのはわかるのじゃが」

ルー
「ちょっとしたサプライズに付き合ってほしいね。」

彰人
「はい？」

鉄心
「お主の成績なら問題は無く川神学園に合格じゃ。それでの四月の二十二日に学校に来てもらいお主らの集団をびっくりさせる手はずなのじゃ。」

彰人
「なるほど、だから帰国の際、俺の殺気を消してくれっていう手紙か。」

鉄心
「うむ。お主見事に強くなったの、心も体も」

ルー
「よかったネ。最近百代の機嫌がどんどん悪くなるのがホント怖かったね」

彰人
「そうですか。なんかすごいこと聞きましたよ。それじゃ俺はその日まで」

鉄心
「うむ。ホテルを借りておいたから、そこにいてくれ。くれぐれも、外出の際は注意をせい」

彰人
「はい。」

現在の日時、四月二十日午前五時。

それから一時間後

ｓｉｄｅ　大和

今日も普通に始まったな。

クッキー
「あれ、おはよう大和」

大和
「ああ、おはよう。あれキャップは？」

クッキー
「マイスターなら土曜からいないよ」

大和
「いつものだな」

こいつはクッキー。なんでも一子が貰ったハイテクロボなんだが一子が要らないと言うわけで、俺が誕生日にもらい、キャップがこれを貰った。

京
「おはよう。そして付き合って」

大和
「おはよう。お友達で。」

こんな風に最近パターンが決まってきている、朝の風景であった。

岳人のお母さん兼ここの寮母さんである島津麗子さんがすでに朝飯を作っていた。

麗子さん
「あら、大和ちゃんおはよう」

大和
「はいおはようございます麗子さん。いつもお美しいですね（↑社交辞令）」

麗子
「あら、やだ。いい子ね大和ちゃんは。今日のおかずの卵追、加しとくからね。」

そんなこんなで今日も学校に通学、その名は川神学園。今日も岳人と、京と、ほんとならキャップのなんだが一緒に学校に向かう

岳人
「しっかし、俺の肉体美に、なんで気づかねぇんだよ、うちの女子どもは」

京
「岳人に気がある子なんて・・・はぁ～」

岳人
「おい。京、きょうも大和に振られたからって俺にあたるな！」

モロ
「お～い。みんな」

俺らが河川敷を歩いているさい、不意に後ろから声が掛かった。今日発売の週刊ジャソプを持ってモロが来た。

岳人
「お、モロじゃねえか」

京
「おはよう。いつも影が薄いね」

モロ
「京に言われたくないよ～」

岳人
「モロ。こいつ今日も大和に振られて機嫌悪いんだよ」

そうして、俺らファミリーが集まってきたときに川の近くに俺の姉さんがいた。

百代
「はぁ～。」

たそがれていた。明日は雪が降りそうだな。

モロ
「なあ、あれモモ先輩だよね」

京
「うん。たぶんまたあの衝動。」

岳人
「ホント最近酷いな。まあ一年は過ぎたしな」

大和
「ホント、いつになったら返ってくるんだろうな兄弟は」

そう、うちのファミリーの中で唯一のカップル、いや正確にいうと夫婦に近い。といってもそんな姿は見たことがないが、川神百代、絶賛愛しの彰人を待っている。

京
「二人はいいな～。ちゃんと両思いになれて」

京の言葉。もうあれは一年以上前か。俺の兄弟が旅に出たのは、それからの姉さんは結構大変だったぞ。かえってきたら、覚えておけ彰人。

百代
「お、なんだ。お前ら、居たのなら声ぐらいかけろよ。」

姉さんが俺らに気づくと、俺らに合流。

百代
「あれ、あのバカは？」

京
「いつものように」

こんな会話をしながら俺らは多摩大橋に出た。ここはいろいろと有名である、ちなみに二つ名が変態大橋まあ理由は

井上準
「こら、ユキ。自動車が走っているほうに出ないの」

ユキ
「蝶々♪蝶々♪」

井上準
「だから、危ない行為は、め！ですよ」

ユキ
「らんらんるー」

井上準
「危ない言葉もだ！！」

とか、いろいろと変態が多い、一番の例が

？？？
「ふはははははははははは」

そうそうこいつだ。

？？？
「我参上！！九・鬼・英・雄ここにあり！！」

この派手に登場したのが九鬼財閥の九鬼英雄。いつもメイドのあずみを人力車で学校まで運ばせている、変人だ。

あずみ
「ほら、皆さん英雄様が朝から挨拶をしてくださっているんですよ。皆さんも挨拶しないとお命もらっちゃいますよ☆」

英雄
「おい、あずみ我よりも目立つのは許さん！！」

なにを基準にだよ、と思いつつ。

英雄
「おい、庶民達。我の愛しの一子殿はいないのか」

百代
「うちの妹は努力家なんだよ。」

英雄
「さすがだ、精進こそ武の賜物。ならばここ居る理由もなに。あずみだせ！」

あずみ
「了解です。英雄様～☆」

そうして、うるさい二人組みは消えていった。そしてその直ぐ後にタイヤを二つ引いたポニーテールの子が現れた。

一子
「みんなおはよう！！」

モロ
「いつも良いタイミングだね。」

岳人
「今日は二つかワン子」

一子
「ええ、そうよ。これでも毎日欠かさずトレーニングはしないと」

これで現在川神市にいる風間ファミリーは全員集合した。そして橋を渡っている時、土手に人がいた。

一子

「お姉さま。今日もいるみたいだよ」

一子のこえでみんな下をみたらそこには確かに武道家のような人がいた。

百代
「そうかそうか、今日は人一倍戦いたくてな。それじゃ行ってくるは」

そして姉さんはその武道家の前に立ち

武道家
「お前が川神百代だね？私はアジア一の武道家、だけどお前を倒し世界一になる」

百代
「ああ、いい。いかにもそういうのを待っていた。勝負の場所はここ、服装はこれでいい。武器は己の拳だ、それじゃ」

武道家
「キエエエエッエエエエ」

そして、怪鳥の如く叫んで姉さんに蹴りかかったが、

百代
「ふんっ！！」

見えない打撃で試合終了。

武道家

「g、ゲハッ！！」

“きゃぁぁぁぁぁぁぁぁ”

いつの間にか他の生徒が見ていて歓声が上がった。こいつら見慣れたもんな

百代
「おい、もう終わりか、アジア一なんだろう」

姉さんは姉さんで気絶してる相手に話しかけているし、

大和
「完全に伸びてるから、」

百代
「は～しょうがない」

そう言って、携帯を取り出し、

百代
「ああ、私だ。また同じ場所だから。ああ、ああ、そうだ。それじゃあな」

ちゃんと礼儀のあるものは礼儀で返す、これが川神流らしい。
そして、俺らは学校に行った。

##第三話##（後書き）

「それでは始まりました、ＬＯＶＥかわかみ、パーソナルティは私、井上準と」

「川神百代だ」

「しかしモモ先輩、このラジオ、なにが目的なんでしょうね」

「しらん、そこら経んわ、勝手に考えてくれ。」

「ちなみにお便りが無いため今日はココまで」

「さぁ～ていい女でもさがすか」

「あ、勝手に出て・・・え～ともう一人は勝手に出てってしまいましたので今日はホントここまで、バイバ～ィ」

ＥＮＤ

##第四話##（前書き）

四話掲載。

##第四話##

明日が学校に行く日だからな。

彰人
「ま、久々に土手でも歩いてみるか」

俺は久々の故郷の地を歩きたくなった。まあルー師範代に言われているから、顔は隠せるぐらいのフードパーカーは着ていった。そしてある橋の下に来た。確かこのさきに川神学園があるんだよな。前に揚羽さんに百代と一緒に学園祭に連れてこられたのを覚えている。まあ随分昔だが。そして、なぜか俺が立ち去ろうとした時、不意に後ろにいた人に肩が当たってしまった。

彰人
「あ、すいま」

不良A
「ああ、なんだテメイ！！」

不良B
「なあ、まずよ川神百代ってのをやるまえに、こいつぶちのめして游ばね。」

ありゃりゃ、面倒なのに会ったなしかし、川神百代ってもしかして

彰人
「なあ、お前ら川神百代って、もしかして」

不良Ｂ
「ああ、そうだな。お前に教えてやるよ。なんかそいつがこの島を仕切っていたところを一人で倒したとか言う噂があってな」

彰人
「う、噂ね・・・」

不良Ｂ
「それで、挨拶しに来たんだよ」

そして、三十人はいるであろうこの不良集団は、俺に向かい、

不良Ａ
「って、訳だから、お前、その女が来るまで俺らのおもちゃね。」

そう言って襲い掛かってきた。

～十五分前～
ｓｉｄｅ　大和

キャップ
「俺、風の如く参上」

一子
「あ、変に有名人」

モロ
「ホント、ホント」

一子
「あんたのせいで、牛乳が無駄になったじゃない」
そして一子はキャップを蹴っていた。
“ゲシゲシ”
百代
「はぁ～」
大和
「あれ、姉さん。元気ないね」
百代
「ああ、あのクソじじいが。・・・ああもうっ。いつになったら彰人は帰ってくるんだ！！」
そう言って俺の肩をもち揺らしまくった。
大和
「な、ね、姉さん。落ち着いて」
一子
「昨日の勝負はそれだったのね」
京
「昨日の勝負？」
一子

「うん。昨日の夜ね、じーちゃんとお姉さまが戦っていたから。」

百代以外一同
「あ～」

百代
「ホント、いつになったらこの美少女をあいつは抱くんだか・・・」

大和
「姉さん。女としてその発言はどうかと」

百代
「だから、弟で我慢する」

そして、俺をいじり始めた。
それからいつも姉さんの挑戦者がいるだろう所になぜか、一対三十ぐらいの完全リンチみたいになっていた。

モロ
「ねえ、あれ止めなくていいのかな？」

一子
「お、お姉さま」

百代
「もし、そうなったら止めるさ。しかしなんなんだあの一人の奴まったく顔が見えないな（気配も感じないがな）。」

キャップ
「なんだ、なんだ。面白そうだな。近くに行ってみるか」

そして、俺らも土手に行った。
まああんな人数がいるんだからさすがに目立つ。しかもいつもなら姉さんだけど、今回は見知らぬしかも顔が見えないと来た。

キャップ
「おいおい、なんだ俺よりも目立っていんじゃないか！！」

岳人
「おいおい、モモ先輩。ガチで不味いだろ。」

そして、岳人の言葉が飛んだ瞬間、その三十人がその一人に襲い掛からなかった！？

モロ
「あれ」

岳人
「ああ、なんだ。あいつら」

周りもポカンとしたいた。しかし、ワン子と京そして姉さんは驚いていた。

キャップ
「あ、あのフード。後ろ向いたぞ」

大和
「なんなんだったんだ？」

そして、フードの男が指を鳴らした

“パチン”

そして、三十人は倒れた。なんとも言えなかった。これじゃまるで

大和
「姉さんのようだ・・・」

モロ
「ごめん、京。解説できる？」

モロはなにが起きたか俺と同じでなにが起きたか分からなかったらしい。

京
「私の言われても。・・・たぶん一発ずつ、相手に蹴ったぐらいしか」

百代
「いや、京の目もまだまだだな。あれは違う、確かに蹴りではあったが、相手に各三発ずつ、しかも頭部、腹部、そして背中に入れている。・・あの人、私と同じくらいか？」

岳人
「おいおい、モモ先輩と同じってどんだけだよ」

キャップ
「てかよ、モモ先輩ぐらいって、もしかして、て？モモ先輩は？」

モロ

「もう先に学校行っちゃったよ。」

一子
「え～。て、ホントお姉さま早いわね。・・・そ、それよりも時間！」

岳人
「やべ、そろそろ行かないと遅刻だ。さすがに鬼小島に目付けたれるの勘弁」

一子
「それじゃ、誰が一番早く学校着くか競争よ。」

キャップ
「いいね。それ、それじゃ始め」

そして二人は駆けて行った。

京
「しょうもない」

俺らもそれを追いかける感じで学校に行った

ｓｉｄｅ　ｏｕｔ

しかし、やっちゃったよ。てかあいつらいきなり襲い掛かるとは・・・

彰人

「なあ、いいか。」

そして、俺は思い出の場所を転々としていた。

Ｓｉｄｅ　百代

私はあの後すぐに学校に行った。理由は簡単だ。あれは間違いない・・・

百代
「彰人」

私がずっと好きで、今でも好きな奴。だけどなんで会いに来ないんだ。

百代
「ま、まさか」

わ、私。振られた・・・

担任
「おーいＨＲ始めるぞ～」

まあいい。今日こそあのじじいに吐かせて彰人の居る所、吐かせてやる。

百代ファン１
「今日の百代さんどうしたんだろう」

百代ファン２
「たぶん、今日の朝、対戦者盗られたからじゃない？」

百代ファン１
「なるほど～」

百代
「はぁ～」

ｓｉｄｅ　ｏｕｔ

そして、今日俺は川神学園の生徒となった。鉄爺に指定されて、最初職員室に来るようにと言われてきた。そして、そこにはなぜかボロボロの鉄爺と、女の先生が居た。

鉄心
「やっときたわい。彰人、自己紹介しなさい。」

鉄爺に言われるまま俺は、その女性に挨拶をした

彰人
「あ、は、はい。御剣　彰人です。」

女教師
「ああ、君の事はルー先生や、理事長に聞いている、なんでも編入試験を満点でここに来たと、しかしＳクラスの申請が無かったため、君はＦクラスと言うわけだ。それで私が２－Ｆの担任の小島梅子だ。よろしくな」

彰人
「あ、はい。よろしくお願いします。それでなんで鉄じ、理事長先生はボロボロなんですか？」

鉄心
「なに、孫娘に、お主のことについて、聞かれただけじゃよ。」

いやいや、どう見ても喧嘩してたでしょ。

小島先生
「それでは理事長先生。これにて」

そういうと小島先生は俺を連れて、Ｆクラスへと足を向けた。そして、俺は廊下で待つように言われた。

Ｓｉｄｅ　大和

今日はなぜか小島先生が早くＨＲしに来た。まさか

小島
「実は今日。新しい仲間が入る。」

クラスがざわめいた、しかし

“ビシっ！！”と、いう縄の音で全員が黙り

小島
「質問のある奴は手を挙げていえ」

岳人
「はい、女ですか、かわいいですか、胸ありますか？」

アホ丸出し。そして女子では

小笠原
「男子ですか、イケメンですか、お金持ちですか？」

女子も女子だった、ちなみに今言ったのが、小笠原千花、２－Ｆのアイドル的な存在で友達が多く、一子、京、真与などの人気のある女子は色々な理由で敬遠されているため、その結果手頃な千花に男子が殺到している。しかし、自称現実主義者で彼氏とは長続きしないタイプ。

甘粕
「はい」

と、他が乱雑に質問する中、唯一ちゃんと挙手をするこの子、名は甘粕真与、この２－Ｆで一番身長が低くマスコット的存在のクラス委員長。なぜか対照的に見える小笠原と仲がいい。

小島
「うむ、甘粕。発言を許す。そして、島津と小笠原は後で職員室にこい。みっちり指導してやる」

二人
「ひぃぃぃぃぃ！！」

甘粕

「えーと、それでもう来ているんですか？」

小島
「ああ、そうだな。質問は本人から聞いたほうがいいか。おい、入って来い」

“ガラガラガラ”

そして、鬼小島の合図で入ってきたのは、俺の兄弟だった。

Ｓｉｄｅ　ｏｕｔ

彰人
「初めまして。名前は御剣彰人。これからこの川神学園に編入してきました。どうかよろしくお願いします。」

一瞬の沈黙、そして

女子一同
「きゃぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ。イケメ～ン」

男子一同（一部は驚愕）
「はぁぁぁぁぁぁぁ」

なんだこの温度差は、そして一子に俺にダイブしてきた

一子
「あ～き～と～だ～」

さらに、

キャップ
「おい、ワン子、俺もダイブする!!」

彰人
「さすがに、やめてくれ。てか、一子放してくれ。」

この行動により、ざわめきが増えた。そんな時

甘粕
「はい。質問です」

と、さっき廊下から聞こえていた、声がした。

彰人
「えっと、なにかな?」

甘粕
「はい。私はこのクラスの委員長の甘粕真与です。その御剣さんは風間君たちと、友達なんですか?」

まあ、いきなり一子がダイブ、さらにキャップも俺にダイブしようとしたしな・・・

キャップ
「ああ、そうだぜ。こいつは俺らファミリーの一人だ!!」

彰人
「おいおい、キャップ、俺の質問。てか、一子いい加減離れろ」

“キーンコーンカーンコーン”

救いにもチャイムが鳴ったため、これでＨＲ終了。教卓に小島先生が来て、

小島

「そうだな。川神達の傍のほうが始めはいいか。なら源、ずれてくれ。」

そういうと、俺は一子の隣の席と言うことになった。俺が机を運ぶ際

源

「久しぶりだな。元気そうでなによりだ」

彰人

「ああ、お互いにな忠勝」

このすごくワイルドな人は、源忠勝。一子の古くからの友人で俺の友人の一人である。ある意味このクラスにファミリー以外の友人はこいつぐらいだろう。そして、席替えが終わった。そして俺の周りはファミリーが包囲した。

##第四話##（後書き）

井上
「さぁ始まりました。ＬＯＶＥかわかみ、最近、ロリコンとか言うへんな言葉が出てきて、大変です、井上準です」

百代
「前置きが長すぎるんだよ、このハゲ！！。三年、喧嘩上等、川神百代だ。」

井上
「さぁ～て、今日はお便りが来ているぞ」

百代
「今日は機嫌が良いから私が読んでやろう。“最近、彼氏が冷たいんです”そうか、そんなカレシとは別れて、私の側近となれ。」

井上
「ちなみに、この人本気で言っていますから注意してください」

百代
「お、なんだこれは、作者からか。」

井上
「おいおいおい。作者が投稿ってなんだよ」

百代
「まあいい、“彰人と、女の子どっちが好き?”う～～～～～～ん」

井上
「そこはその彰人って言う、名前から男の子にしなさ～～～い」

百代
「うるさいぞハゲ！！。私は最初から一番は彰人と決まっている」

井上
「彰人さん。逃げて、川神市にいるモモ先輩ファンに殺されますから」

百代
「それじゃ、曲流すな」

井上
「勝手に閉めるんかい」

ＥＮＤ

##第五話## （前書き）

五話掲載

##第五話##

キャップ
「さ～て、彰人。色々と土産話も聞きたいが、それは金曜集会でだ。まずリーダーとして言おうお帰りと。」

最初はキャップだった。ちなみに現在、俺の周りはファミリーしかいない。他のクラスメイトは空気を読んでくれて、終わるまで待つって、感じだ。

大和
「なあ、それよりも姉さんには？」

彰人
「ああ、それが鉄爺がまだ会うなって言われた。まあ今日には会うけど。」

岳人
「おいおい、モモ先輩を一番にしないと不味いだろ。とくにあんな別れ方したんだから」

モロ
「まあまあ。けどホント元気で何よりだよ。」

京
「うん。モロの言うとおり。これでファミリー完全完成」

彰人
「ああ、ホントお前らが変わらないでいてくれたのがうれしいな」

大和
「しかし！！」

大和がなぜか、怒っていた。

大和
「姉さんはお前が居なくなった後、俺が大変だった。京にさらに姉さんってどんだけ大変か！！」

彰人
「あはは、それはすまん。だけど、しょうが」

“ドドドドドドドドドドドドドドドドドドドドドドドドド”

モロ
「うわぁ。なんだこの揺れ！！」

この学校がなぜか揺れていた。しかもどんどん強くなって

“ガラガラ”

百代
「失礼する、ここに編入せ・・・い・・・・・が・・・」

小笠原
「あれ、モモ先輩だ」

甘粕
「ホントですね、チカちゃん」

揺れの原因は百代のガチの走りだった。そして俺を見るやいな絶句
そして一言。

百代
「彰人？」

俺は我慢できず、みんなの前で抱きついた。

２－Ｆ一同
「えええええええええええええええええええええ！！！」

みんなには聞こえない位の声で、

彰人
「待っててくれた？」

百代
「ああ、ああ。」

すでに、少し泣いている百代をさらに抱きしめて

彰人
「ごめんね。待たせて、それからただいま」

百代
「やっぱ昨日のあれはお前だったか。」

彰人
「あは、やっぱバレた。ごめんね、帰国したら鉄爺に止められちゃ

って」

百代
「いい、いい、そんなの、今は。今はお前がここにいるだけでいい。」

彰人
「なあ、あの時、お前言ったよな。俺がすきって」

百代
「う・・・ああ／／／」

彰人
「今もか？」

百代
「当たり前だ。今も変わらない。ずっとずっと待って居たんだぞ。」

彰人
「そうか、百代。改めて言おう。好きだ」

百代
「私もだ」

ちなみにこの話を周りから見たら

大和
「会って、いきなりこれですか・・・」

キャップ

「ま、よかったんじゃね」

一子
「お姉さま、うれしそう」

京
「当たり前だよ。好きな人が一年待ってやっと帰ってきたんだから、私が大和を一年見れなかったら・・・この国滅ぼす！！」

モロ
「いやいや、八つ当たりにしても酷すぎるから」

岳人
「だけどよ。俺らはこの関係は知ってるけど、ここの学園の生徒は」

一同
「あ・・・」

以上でした。

そして、両者落ち着いた所で、教科の先生が来た。

百代
「それじゃ、昼休みにここに来る」

そういうと百代は去った。そしてなぜか、クラスの大部が俺に注目。
そして、大和に肩を叩かれ

大和

「ご愁傷様」

その言葉で今日初めての授業が始まった。

そして、授業が終わり俺はまたもや包囲された。今度はクラスの大半に

彰人
「え、え～と・・・」

大和
「おいおい、登校初日に人気ものだな。」

そして、一番最初に俺に質問してきた、委員長ちゃんが俺に聞いた。

甘粕
「えーと、こんな質問不仕付けでしょうが、あのーモモ先輩との関係は」

おいおい、いきなり核心な所を、てか、他もそれかよ

大和
「姉さん、すごい有名人だから・・・」

小笠原
「それで、あ、そう思えば自己紹介ね。私は小笠原千花。それでモモ先輩とはどういう関係？」

その時、一子が爆弾を投下した。

一子
「なにって、お姉さまの彼氏よ、ね、彰人」
静寂となった教室。そして三秒後
「「「「「「「「「「「「「「「「ええええええええええええええええええええええええええええええええええ！！！！！！！！！！！！！！！」」」」」」」」」」」」」」」」」」」」」」」」」」
彰人
「ああ、そうだ。」
もちろん俺も否定することは何一つ無いため、肯定した。そして、なぜか男子より、女子から睨まれた。・・・なぜ？
大和
「実は姉さん。女癖が・・・」
岳人
「ああ、お前が消えて、そのあとからさらに酷くなった。」
モロ
「なぜかね。男子よりもモテているよ」
京
「一年は、長すぎだよ」
これが、一番俺の心に効いた。

時間がたち
そして、噂が一気に広がり、お昼前にはすでに俺のクラスに見物客が多くなっていった。そして、昼になりさらに人が増えた、しかしなぜか道が出来始めていた。その先には

百代
「おお。さすがに人が多いな」

一子
「は～い、皆どいて～」

そして、なぜか教室から出た、一子も一緒だった。

そして、教室に百代が入ってきた

百代
「さ、彰人。一緒にご飯だ♪」

そして、百代は袋一杯のパンを出した。そして、お昼の時間となった。一子は川神院の弁当だった。

彰人
「あれ、百代の弁当は？」

百代
「早弁して無い」

さいですか・・・そして、大和はちゃっかりパンを確保していた、岳人はそのパン争奪戦に行っていていない、キャップは昔からどこ

かに行って、変わらずいない、モロは他の友達と飯を食べていた。
京はやはり一年前と同じ、俺ら以外には心を開いていないみたいだ、
それに弁当の色も・・・

百代
「しかし、彼氏が出来てこれとは、さすが有名人はつらいな～」

大和
「はいはい。あれ、そう思えば姉さん」

と、大和が言おうとしたら放送が入った。

『は～いエブリバディー。今日も始まりました、ＬＯＶＥかわかみ、
パーソナルティは二年Ｓ組幼女支えた隊の井上準と・・・ここでも
う一人のパーソナルティがいるんだが、』

そんな放送が聞こえた。

百代
「あ、今日ラジオだ。」

彰人
「おいおい、百代。もしかしてお前パーソナリティ？」

百代
「あははは、すぐに済ませる」

そういいダッシュで消えていった。

彰人

「大和、よく百代をここまで見ててくれた」

大和
「兄弟、やっとお前に任せられる」

一子
「二人とも、なに握手してんの？」

『おーと、ここでやっとキター』

お、百代も着いたらしい。

『ち、まったく人の祝福の時間を。まあいい、人生、喧嘩上等、三年、川神百代だ』

『さあ、今日のお便りはなんと半数が同じものばかり、しかも今日の投稿だ！』

『いいからさっさと読め、このハゲ！』

彰人
「おお、百代が怒っているな」

大和
「お前のせいだろうが」

一子
「～～～♪（↑ご飯に夢中）」

岳人

「はぁ～、やっと帰ってこれた。おい、彰人、廊下の連中どうにかしろよ」

岳人がパンを買ってきたみたいだ。

彰人
「俺に言うな。てか、そんなに百代に彼氏がいるのが珍しいのか？」

『それじゃ、なぜか不機嫌なモモ先輩のため、早く済ませますか、俺の命の保障のため』

『早くしろ！！』

『最初のお便り、好きです。付きやってください』

『無理だ。私には彰人が居る』

『すばらしい切り方だ。てか彰人ってだれだ！！』

彰人
「あいつ・・・」

大和・岳人
「「同情はしてやる・・・」」

なんか久々の学校生活にすでに雲行きが怪しくなってきたな・・・

『続いてのお便りは今日の投稿、しかも内容の過振りが二百ぐらいそれでは、百代さん（モモ先輩）、彼氏が居るって本当ですか、教室で抱き合っていたのは本当ですか、ってなんて質問だ』

『ああ、あれが彰人だ。私の物だ、そして私も彰人の物だ。それじゃ曲流す』

『って、いきなり閉めない「うるさい」“バキッ！！”ぎゃぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ』

そして、バイオレンスなラジオが終わった。

彰人
「なあ軍師大和」

大和
「なんだ？」

彰人
「酷くなってないか、前よりも・・・」

岳人
「さすがモモ先輩すごいな。それから廊下の奴らがお前に殺気しか当ててなくて近くに居る俺様たちも痛い」

大和
「まあ、今までの反動だ」

彰人
「そういわれると、なんとも言えないな」

一子
「うん。おいしかった♪（↑今まで集中してご飯を食べていたため、

まったく気づいていない）」

そして、廊下がざわめき始めた。そして、教室にさっきまでラジオをやっていた、百代が帰ってきた。

彰人
「あ、おかえり。」

百代
「・・・・」

なぜか沈黙・・・なぜ？

百代
「・・・っあ、すまん、久々にお前のお帰りを聞いてな」

彰人
「安心してよ。もう何処にも行かないし、今度は百代の連れて行くから」

百代
「絶対だぞ」

そして、俺と百代は遅めの昼が始まった。

百代
「そう思えば、今何処に住んでいるんだ？」

彰人
「ああ、昨日までホテル。で、今日から川神院」

モロ
「なんだ、なら昔となにも変わらないんだね」

モロが飯が終わったらしく、こちらの話にきた。

百代
「そうか、私の隣の部屋だな・・・ふふふ」

なんだろう、俺の貞操が危機に陥ってるようだ、まあ百代なら返り討ちにしてやろうと思う俺だった。

岳人
「だけど、彰人。気を付けろ、明日から」

一子
「そうね、お姉さまの彼氏なんて、一気に有名人だからね」

彰人
「ああ、そうするよ、てか今日の放課後みんな暇か？」

京
「私は部活の顔出し・・・」

彰人
「弓道部だよな。ま、がんばれ。」

京
「顔出しだけ・・・」

モロ
「うん、全然大丈夫だけど、なにかあるの？」

岳人
「俺様も暇だ」

大和
「今日は約束もバイトも無いから大丈夫だ。」

一子
「トレーニングになるのなら、いつでもＯＫよ」

百代
「なんだ、今日はデートがよかったぞ」

彰人
「おいおい、金無いのにデートって、まあいい。すまないけど俺の引越しで手伝いがほしい、ちなみに参加者には久々の俺の飯が夕食として出る。」

百代・岳人・モロ・一子・キャップ
「「「「「参加！！」」」」」

やはり、昔から俺の飯には定評があったため、これでどうにかなったな、って！

彰人
「キャップ、お帰り」

キャップ

「まったく、俺が居ない間におもしろそうな話をしてるじゃねえか。」

と、言うことで結局顔出しが済んだら京も来ることになり、全員放課後川神院集合となった。

##第五話##（後書き）

井上
「さあ、今日もやります、ＬＯＶＥかわかみ。今日はなんとゲストが来ています。それではどうぞ」

大和
「どうも、初めまして。２－Ｆ、直江大和です」

井上
「そう、なんと、今日はあのモモ先輩の唯一の舎弟に来ていただきました。」

大和
「いつもいつも、内の姉がすいません」

井上
「わかって、くれますか」

井上
「さて、辛気臭いのはこれぐらいにして、今日のお便りはこれだ。
なになに、
“直江君って実はＳクラスに入れるぐらいの成績が獲れるのって本当ですか”と、お、これは俺も気になるな、もしかしたらクラスメイトだったかもしれんからな」

大和
「ああ、結果から行けば可能。だけど俺はワン子とかで遊びたかったから、Ｆに行った。」

井上
「なるほどな、仲間を取ったと。おっと、今日はここまでだ。ああ、ホントラジオらしいラジオしたのは久しぶりだ。」

大和・井上
「「それではバイバ～ィ」」

##第六話##（前書き）

六話掲載です。

夏休みが終わる・・・・・・

##第六話##

そして、放課後になった。大部分のファミリーは同じクラスのため、一緒に校門に出るが、百代が居るため、校門の前で待った。てか他は先に行ってしまった。たぶん気を利かせたのだろう。そして百代が来た・・・・・・鉄爺を連れて。

百代
「おお、彰人。すまない、掃除で少し遅くなった。」

彰人
「掃除って・・・・・・」

鉄心
「まったく、いきなり学長室に来て、暴れおって」

百代
「ジジイ、お前が彰人に言ったらしいじゃないか。まったくこんな美少女に会わせないなんて、とうとう頭が狂ったか」

彰人
「まあまあ、それで鉄爺、俺の部屋はそのまんま?」

鉄心
「もちろんじゃ、大体はそのままで、逆に古いものだらけだと思うぞい。あとは何処かの孫娘が、たまに入って寝ていたぐら“ボガ!”うう、痛いぞい」

百代

「うるさい。彰人、さ、こんなジジイほっといて、行くぞ」

彰人
「あはは、それじゃ、今日は料理場貸して下さいね。」

鉄心
「うむ。それではのう」

そして百代はこっちに来て、腕に絡んできた。

百代
「さ、行くぞ」

彰人
「ああ、行こう」

そして、二人は寄り添うように、帰っていった。そしてそれを見ていた二人の影がいた。

鉄心
「うむうむ。ひ孫も早く見れるかもしれんな」

ルー
「ええ、これで少しは百代の戦う厄介な衝動の収まるでしょう」

鉄心
「それに、もしものことがあれば彰人が止めるであろう」

そういうと二人は学園に消えた。さてここから、バカップルのお話。
帰りの土手でのこと、結局ファミリーの待っててくれてたらしく、

橋の所で合流しました。

岳人
「まったく、待っていてみれば」

一子
「べったりね、お姉さま」

百代
「ああ、これはすごくいい♪」

腕にべったりくっ付いているため、すごく胸に当てる・・・・・・
ヘヴンだ。

キャップ
「しかしよ、ずりぃよな、旅なんてよ。」

大和
「キャップもよくどっかに行くだろうが」

彰人
「中々の物だったが、・・・・・・」

俺は不意に隣の百代を見た。

彰人
「ま、大変だったよ」

モロ
「けど、これで修行は終わったの？」

彰人
「ん？どうだろう。俺はただ単にいろんな所を回っただけだしな」

百代
「そうだ、彰人。どこにいったんだ？たしかお前の親の所に・・・」

彰人
「ああ行った。そしたら紛争してて、墓参りどころじゃなくて、全員制圧して、ちゃんと墓参りした」

モロ
「どこの世界に、墓参りのために紛争を終わらせる奴がいるんだよ！！」

大和
「ま、彰人だから」

岳人
「まったく、俺様の肉体美ぐらいすごいことしやがって」

一子
「すごいわ、さすがお姉さまの彼氏、そして私の師匠」

キャップ
「なんだ、なんだ。そのおもしろそうな状況は！」

彰人
「おいおい」

こんな会話が続いたときに自転車来た。あれはたしか本屋の店長

店長
「おい、バキャヤロー共、って、なんでい、なんでい。彰人が帰ってきたらしいじゃねえか」

彰人
「久しぶりです。」

店長
「おうおう、随分と背が伸びたじゃねえか。おいバンダナ、今日もバイトは休んでいいからな。それじゃあなバキャヤロー共」

そして、店長さんは消えた。

一子
「そう思えば、彰人、結構背伸びたわね。」

そうなのか、確かに今だとキャップぐらいかな。

そして、川神院に着いた。俺を見るなり、握手を求める人、奇怪な顔をする人、多種多様だった。そして俺の引越しが始まった。集まったのは、まずファミリー、京も直ぐに来てくれた。後、ルー師範代と俺がしらない修行僧や門下生だった。

ルー
「いいかい、これから引越しの手伝いをするからネ」

彰人
「それじゃ、簡単だけど模様替えしようか。まず、この机を・・・」

引越しは順調に進んだ。

百代
「なあ、彰人。この刀はなんだすごい気なんだが。私ですら触るのがやっとはどういう代物だ？」

彰人
「ああ、それね、俺の愛刀。名は御霊・フツノ」

百代
「ふーん。それでこれは何処に？」

彰人
「それじゃベットの横に置いといて」

百代
「わかった。しっかしよくもまあいろんなもんを」

彰人
「まあね。それでさ百代」

百代
「ん？」

彰人
「飯が終わったら、俺の部屋に来てくれ」

百代
「う、うん／／／／／」

京
「そこのオシドリ夫婦さん。これはどこに」

さっきまで二人だけだったはずなのに、なぜか部屋には京がいた

彰人
「あ、あ、そ、それね。それはそこに」

俺があたふたしたせいでこんな一言が

京
「しょうもない。ま、よかったね」

京はそういうとドアを開けた。そしたら他の男子のファミリーが雪崩れ込んできた。

百代
「おい、貴様ら」

百代がキレたな。ま、俺の少し怒っているが

岳人
「い、いやこれは。そのキャ、キャップが」

キャップ
「ア、ひでぇぞ。軍師大和がこれなら大丈夫っていうから」

大和
「おい、そんなこと言うな」

モロ
「そろ〜り、そろ〜り」

岳人
「おい、モロてめぇ。こういう時だけ逃げんな」

モロ
「う、うわぁ岳人。はなして」

百代
「そうかそうか、そんなにお前らは死にたいか。なら来い！」

四人
「「「「ぎゃぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁっ！！」」」」

四人は百代に連れられていった。

一子
「あれ、みんなは？」

京
「お星様になったよ」

一子
「アウ？」

それから、一時間。引越しも終了し、お仕置きも終了したらしく、

みんなボロボロになって帰ってきた。

彰人
「人の恋路を邪魔するからだ」

京
「大和、大丈夫。今から私が看病してあげるから、二人で、ベットの上で」

大和
「すまん。突っ込む気力も無い」

京
「つ、突っ込む!?」

モロ
「あはは、死ななかっただけラッキーかな」

岳人
「いや、あれは一回死んでると思うぞ」

キャップ
「さ、飯にしようぜ」

キャップは脅威の回復の速さでメンタル面を回復させていた。そして久々の俺の料理をみんなおいしく食べた。そして、みんな帰っていった、その時の一言ずつ俺に言った。

キャップ
「さすがだ、彰人の飯うまっかたぞ。じゃ明日な」

モロ
「そのがんばって」

大和
「兄さん・・・くっ。」

岳人
「ま、がんばれ」

そして極めつけは

京
「大人の階段上る～♪～♪」

彰人
「ええい、早く帰りやがれ！！」

そして、全員去った後、一子はお風呂に行った。そして百代は今現在俺の部屋に居る。

百代
「しかし、相変わらずだな。この殺風景の部屋は」

彰人
「ま、世界回っていたからね」

そして俺は百代の前で座って

彰人

「さ、おいで」

百代
「うん。これを待っていた」

そして一年ぶりの抱き合い座り（命名）を俺らはした。

彰人
「ああ、暖かい。久々の感覚だ」

百代
「そうだぞ、まったくこの美少女がどんだけ待ったか。彰人、キス」

彰人
「まったくこの甘えん坊が」

そしてキスをする俺の相当だが。

百代
「まったく、あの時別れた時の告白は私の一世一代のがんばりだぞ」

彰人
「ああ、そのあと、俺も再会した時どうしようかと思った。だけどなにも変わらないな」

百代
「そうだな、私は今お前とこうしているのが一番だ、今は戦いなんてどうでもいい」

そういうと、俺の正面を向き、俺に抱きついてきた。俺の抱きしめ

返したがその時、

“ガラガラ”

一子

「ね、彰人。お風呂あい・・た・・・わ」

そして、今日何度目かの沈黙。

一子

「し、失礼しました」

敬礼して出て行った。

百代

「妹にはすこし刺激が強かったかみたいだな。それで彰人、そのなんなら、わ、私が体を洗ってあげるが？」

彰人

「いや、洗いっこだ。百代の女癖を治さないと、なんでも大和に聞いた所酷くなったみやいだな、それならこれを機に俺に染めないと」

百代

「え、あ、彰人！？」

なんか、俺も大胆になったな。そして二人で入りました。（内容はご自由に考えてください）

そして、出てみたら案外時間も経っていた。そして俺らは久しぶりに他愛も無い話をしていた。だいたいはキスだったが。そして寝る時

百代
「一緒に寝る」

との百代の一言の撃沈。そして、俺らは熱い夜を過ごした。・・・・・・結論、俺、武でも百代よりも強いけど、こっちでも百代よりも強かった。

ちなみに、あの後の一子

一子
「すごく、アダルトの感じが・・・」

と、さっきの事を布団にもぐって、考えていたみたいだが

「Z～Z～Z」

いつもまにか寝ていた。

##第六話## ##（後書き）

今日はラジオおやすみです。

##第七話##（前書き）

七話掲載です。

##第七話##

“チュン、チュンチュン”

あれ、ここは。そうかあの後俺ら、そのまま寝ちゃったんだ。・・・寝ちゃった・・・

彰人
「おい！！百代起きろ」

百代
「いいだろう。もう少し」

いやいや、現在俺のベットの中で、淫らな格好で寝ていなければ寝ててもいいけど。

彰人
「さすがに、その格好は不味いだろ・・・」

百代
「なんだ、朝から盛んだな」

彰人
「そういうことじゃなくて！！」

百代
「わかった、わかった。相変わらず初心なんだな。まあそこはかわいい所なんだが」

彰人
「昨日はお前の方が可愛かったがな」
なんて皮肉に言ったら
百代
「う、うるさい。このバカ！！」
“ボカ”
と、一発殴られた。まあ照れ隠しなんだろうが。
彰人
「それじゃ、着替えるから」
百代
「なんならお姉さんが着替えさせてあげるぞ」
彰人
「はいはい、出てった、出てった」
百代
「うー、冷たいな。うちの彼氏は」
百代は渋々出てってくれた。まあ自分の部屋が俺の隣だから簡単だけど。そして朝飯になって前と変わらない所で食事となった。
一子
「はいは～い。今日の献立は、お魚だよ」

一子が配膳をしていた。相変わらず、食にはこだわっているようだ

彰人
「一子、おはよう」

百代
「ワン子、おはよう」

一子
「あ、お姉さまに彰人。おはよう。お姉さま、今日は鍛錬してないのに早いのね。二人ともそこが二人の朝ごはんだから」

彰人・百代
「「は～い」」

二人して、朝はあまり強くは無かった。俺らが席に着いた時にちょうど、鉄爺の来た

鉄心
「皆の者おはよう。」

修行僧一同
「おはようございます」

鉄心
「うむ。みな、早くから起き、ご苦労。うちの孫娘とは全然」

百代
「おい、ジジイ、起きてるぞ」

鉄心
「彰人も大変じゃの～」

百代
「おいこら。ジジイ」

彰人
「まあまあ、百代、頂こう」

百代
「あ、ああ、頂きます」

鉄心
「ほ、ほ、ほ、ほ。」

ルー
「うーん、今日の朝ごはんもおいしいね」

一子
「そうだ。彰人、お昼は川神院のお弁当にするの？」

彰人
「あ、そう思えばそうだな・・・」

修行僧
「あのう、申し訳ない、食事中に彰人殿」

彰人
「うん？てか、彰人殿って」

修行僧
「その不仕付けでなければ修行を見ていただきたいのですが」

彰人
「うん。別に時間的には構わないよ。な、百代？」

百代
「ああ、てか私とも勝負してほしいぐらいだ」

ルー
「お、なんだかおもしろそうネ。私も手合わせ願いたいネ」

一子
「ああ！！お姉さまも、ルー師範代もずるい」

なんだろう、朝から面倒なことになってきた。

鉄心
「ほ、ほ、ほ。」

彰人
「鉄爺、笑ってないで、助けてよ。」

鉄心
「ならばルー。お前が勝負してやれ」

この言葉で、俺の朝飯が終わった後、修行僧の練習を見て、ルー師範代と勝負となった。

鉄心

「うむ。ルールは一つ。どちらかが戦闘不能になったら終了じゃ、それでは西方、御剣彰人」

彰人
「ああ」

鉄心
「東方ルー・イー」

ルー
「よろしくアルネ」

百代
「さて、彰人の力、見してもらおう。ワン子のよく見ておけ」

一子
「はい、お姉さま」

鉄心
「それでは・・・始めい！！」

言葉どおり勝負開始、そして同時に轟音と共に、寺院の壁が崩れ去り、ルーはそれに嵌っていた。

ルー
「が、がはっ！！」

簡単に言うとルー師範代は吹き飛ばされた。

鉄心

「そこまで」

修行僧
「おいおい、なんだ、いきなりルー師範代が・・・」

一子
「彰人、さらにスピードを上げたみたいね」

百代
「う～ん。さすが彰人。（私ですら確認出来ない、攻撃か・・・）」

彰人
「久しぶりに本気出したけど・・・大丈夫かな」

鉄心
「なに、気にするでない。ルーは今日一日安静にさせるからのう」

彰人
「教師なのに」

鉄心
「なに、そこらへんはワシがどうにかしよう。彰人よさらに磨いたようじゃのう」

彰人
「いえいえ、まだまだですよ。」

百代
「おい、彰人。そろそろ準備しないと遅刻するぞ」

後ろから百代の声がした。

彰人
「あれ、一子は？」

百代
「お前の試合見て、私のがんばらなくっちゃって言って、トレーニングに行った」

彰人
「わかった。それじゃあね。鉄爺」

鉄心
「うむ。今日の集会でのう」

彰人
「それじゃ、行こう百代」

百代
「ああ、やはりこれが一番だ」

そういうと俺の腕に絡んできてそのまま通学路に出た。簡単に言うとバカップルをしていた。

Ｓｉｄｅ　大和

今日はキャップも一緒に寮をでた。

キャップ
「しっかし、モモ先輩はこれで彰人にベッタリかな」

大和
「どうだろう・・・」

岳人
「まあ、あれで少しはモモ先輩のファンは減っただろう」

京
「ところが増えた。なんてありえるかもね・・・」

岳人
「あの人、どうにかしないと」

そこにモロの合流した。

モロ
「や、みんなおはよう」

大和
「うーい。モロ、どうだ、学校の掲示板は」

そう、俺は昨日帰る時、モロに学校の裏サイトにどういう反応があるか調べてもらっていた。

モロ
「そうだね。やっぱ、彰人のアンチが中心かな。なんであんな奴なんだとか、そんなのばっか」

大和
「ま、姉さんの彼氏だからな」

岳人
「だけど、あいつの強さ、知ったらみんな黙るんじゃないか」

京
「お、岳人の癖にナイス発言」

岳人
「癖に、てなんだ癖にって」

大和
「だけど、そんなに我が兄弟は力を見せるか？」

一同
「う～～～～ん」

キャップ
「ま、なんとかなるんじゃないか」

だったらいいけど

小笠原
「あ、ナオっちに椎名っちそれに風間君。おはよう」

前に居た同じ学年の女子グループにあった

大和
「ああ、おはよう」

キャップ
「おお。おはようさん」

京
「・・・・」

大和
「ほら、京。挨拶」

京
「ん」

そして、挨拶していってしまった。

岳人
「なんで俺様には挨拶がないんだよ」

京
「まあ、クルミなんか持ってる時点で不審者。それにモロは影が無い」

モロ
「影が無いってなんだよ!!」

京
「ナイス突っ込み。さすがの速さ」

百代
「おお、居るな居るな。」

さらに姉さんが合流。すごく姉さんと彰人が注目されているが・・・

ｓｉｄｅ　ｏｕｔ

彰人
「あの、百代。さすがに恥ずかしい」

百代
「いいじゃないか、別に人なんか気にするな」

岳人
「おお、彰人。見せてくれるな」

京
「本音は？」

岳人
「なに、朝からイチャイチャしてんだよ」

モロ
「すごいね、こんなに視線浴びてるのに」

彰人
「ああ、なんか嫉妬とか殺気とか嫉妬とか・・・」

大和
「ま、がんばれ兄弟」

そして、このメンバーで、橋を渡っていたら、

百代
「お、今日も挑戦者だ。」

と、俺がこの前リンチされそうになったところに一人の武人がいた。

武人
「私は川神鉄心に勝負を挑んだものだが、川神百代、または御剣彰人を倒してからくるようにと門前払いされた。」

彰人
「あの爺さんいつの間に、そんなシステムを」

百代
「まあ、しょうがない。ちなみに両者いるがどちらにする」

武人
「決まっている。男にするに決まっているだろうが、だれが女など相手にするか」

そういうと、武人は持ち場に着いた。

百代
「バカだね。ホント」

大和
「彰人を指名するなんて」

しかし、俺がすごく意外なのが、

彰人
「なんで内の学校の生徒が見てるんだ？」

岳人
「ああ、それは」

モロ
「大体がモモ先輩を見たいがため」

彰人
「ああ、納得。」

そして俺が持ち場に着いたら、歓声から

野次馬
「なんだ、なんだ。あいつ誰だよ！」

とか、

野次馬
「あれが、例のモモ先輩の彼氏だよ」

野次馬
「ええーーーあんなのが」

すげーなんか酷い。そして、百代の一言でみんな黙った。

##第七話## （後書き）

「は～い、ヨブリダディ、あ、間違えた。エブリバディ～。今回もやるよ、ＬＯＶＥかわかみ。もちろんパーソナリティなこの井上準。そして今回もゲストだ、それは」

「どうも初めまして。御剣彰人です」

「な、なんと、今、噂の御剣君です。初めまして」

「はい、どうもはじめまして。なんか放送部の人が睨んでいるんですけど」

「まぁまぁ、そこは気にせず、それではお便り行こうか」

「え～と、それでは一通め“実は相談なんですが、好きな彼に告白したら、そしたら俺は幼女しか見れないんだって言われました。ショックです。どうしたら告白を受け入れてもらえるでしょうか？”・・・・・・あのう。これ」

「あはは、知らないなぁ～」

「そうですか。それでどうしたら受け入れてもらえるか、かう～ん」

「・・・・・・（↑今回は黙秘の模様）」

「そうですね。この場合は相手の趣味ですからね。それでも好きでその趣味すらどうにか出来るならアタックをどうぞ。そこまでは無理と思う場合は他のいい人を見つけてください」

「あのう、すいません。ホントにモモ先輩の彼氏さんですか？」

「はい、れっきとした彼氏ですが」

「お願いです。このラジオのパーソナリティを交代してくれ～～～～」

「なんか絶叫して悶えてどっか消えちゃったなあの人。まあいいや、それじゃ曲流すね」

＃＃第八話＃＃（前書き）

八話掲載。

マジ恋のドラマＣＤほしいいいいいいいいいいいいいいい

##第八話##

百代
「すまない、これは川神院での真剣勝負だ。すまないが見世物ではない。早々に学校に行ってくれ」

その時、一子のタイヤを引きながら来た。

一子
「あれれ、今日は？」

百代
「ああ、彰人が受けた。それでどうにかどけてくれ。他の奴も頼む」

岳人
「はいはい、今日は見世物じゃないから」

大和
「はいはい、どいたどいた。」

京
「ワン子、始まるみたい」

一子
「それは見逃せないわね」

武人
「それでは私の準備は完了だ、君もいいかね？」

彰人
「ああ、服装はこれで十分、元から武器は己の拳だ！！」

そして、勝負が決した。

彰人
「やっぱ、朝にルー師範代と勝負してるから、加減が効かないや・・・」

開始僅か一秒足らずで、その挑戦者は倒れていた。てか、いつ一撃入れたか、分からないほど早かったようで

一子
「さすがね～私もがんばらなくっちゃ。」

京
「私の目ですら確認できない・・・」

キャップ
「相変わらずの強さも健在だねぇ」

百代
「うんうん。さすがだ」

大和
「姉さんは、ただ単に彰人がかっこよく倒してほしかっただけでしょうが」

彰人
「あ、百代。携帯貸してくれ。」

百代
「安心しろ。始まる前にすでに連絡入れといたから」

彰人
「サンキュー。それじゃ行くか？」

校門を通り過ぎ、百代は三年の教室へその時が大変だった。

百代
「う～～～～。彰人もこっちだ！！」

彰人
「百代、駄々をこねるな」

そんな感じだった。他の生徒の目が痛かった。そして下駄箱辺りになってから、京の無口フェイズが始まり、そして俺らは教室に入った。

“ガラガラ”

一子
「おはよう♪（↑着替えて、俺らと合流）」

一子の元気な声がクラスに広がり、京は読書モード、そしてなぜか俺に注目が浴びた・・・

彰人
「・・・なぜ？」

“ザワザワ”

みんな俺を見て騒いでいた。そして一人の男子が近づいてきた。

福本
「なあなあ。お前すげえな」

彰人
「はい！？」

岳人
「おい、ヨンパチどうしたんだ、もしかしてみてたのか？」

福本
「ああ、今日いつものどおり学校に行こうとしたら、モモ先輩の挑戦者がなぜかここにいる御剣が相手になっててよ、しかもモモ先輩みたいに一瞬で勝負つけたのを俺は見たわけよ」

大和
「さっそく、お前はFクラスに馴染んだみたいだな」

彰人
「そうかな？」

甘粕
「みなさ～ん。今日は集会ですから、移動してください」

俺の注目事件のせいか委員長の声もすぐに通り、みんな直ぐに移動を始めた。

岳人
「しかしよ、これで彰人もモモ先輩並みに有名人なんだろ」

彰人
「いやいや、ただ単に勝負しただけだし」

モロ
「挑戦者を瞬殺するのは彰人とモモ先輩ぐらいだから！」

いつのもいい突っ込みの入ったことで俺らも移動した。
そこには鉄爺が台の上にいた、そして

教師
「ただいまより、朝礼を始めます。最初に理事長先生の言葉
“ザワザワ”

さすがにただ、鉄爺が立っても一年は黙らなかった、しかし二年や三年は静かだった。

鉄心
「うむ、さすがにこんな老いぼれの話なんぞ聞きたくは無いじゃろうが」

あれれ、鉄爺なのに随分とあま

鉄心
「なんて言うと思ったか、このひよっこ共めぇ！！」

鉄心

「たるんどるわ、渇っっっっ！！」

うわぁ～これはすごい、この一言で一年も全員黙った、てかこんなことに闘気使うなよ

鉄心
「うむ、聞く体制ができたようじゃのう、それでは、ワシからの言葉じゃ」

鉄心
「お前達、腹は減っておるかの？」

鉄心
「名誉や金、力に飢えてはおらんか？」

鉄心
「女や男はどうだ？　飢えてはおらんか？」

鉄心
「飢えているならそれはいい。とても正しい」

鉄心
「どんどん飢えてハングリーになりなさい」

鉄心
「奪い取り、つかみ取るために努力しなさい」

鉄心
「競い合い切磋琢磨していきなさい」

鉄心
「そのために決闘というシステムも用意しとる
白黒つけたければ活用しなさい」

鉄心
「そして“何か”をつかみ取ってみなさい」

鉄心
「勝つという快感はやめられんよ。
人生はより楽しくなる。ワシからのオススメじゃ」

鉄心
「成功する秘訣は夢ではなく野心ということよの」

鉄心
「といっても、ただ飢えるだけでは獣と変わらん」

鉄心
「理性と本能を両立させて、楽しい人生を
送ってくれることを願うぞい」

鉄心
「なーんも飢えとらん、平凡で普通の人生を
送るのが一番だと思う奴、それはそれでいい。
精神は腐っていきそうじゃが、それも生き方よのぅ」

鉄心
「ただ、その生活をするのにも、
ある程度の学力と健康な体が必要だ。
今のうちに鍛えておきなさい」

鉄心
「願わくば、皆が何かしらの野心を抱いた
飢えた若者達であることを願うぞい」

流石だ、鉄爺。

鉄心
「最後にファンレターは目安箱に入れるように」

この最後が無ければな・・・
そして、後は普通に諸事情なのど連絡事項で終わった。

岳人
「はぁ～やっと終わった」

モロ
「岳人、結構眠りそうだったもんね」

大和
「キャップは立って寝てたぞ」

モロ
「うわー。」

キャップ
「ふにゃふにゃ」

モロ
「てか、現在進行形じゃん！！」

彰人
「鉄爺、うるさかったな」

大和
「あれはもう慣れたな」

俺らはそんな会話しながら戻った、その時にクマちゃんとも仲良くなった。まあ交流関係は苦手ではないためまあまあな付き合いができそうだ。

そして昼休み。

岳人
「なあ、彰人。昼はどうしるんだ？」

大和
「今日も姉さんか？」

彰人
「あ、知らん」

モロ
「ここでそれは、一子が弁当を忘れたぐらい不味いよ」

一子
「え、私ちゃんとお弁当もってるわよ。モロ、このお弁当見えないの？」

彰人

「はいはい、一子はお弁当食べてようね」

大和
「ナイスだ。さすが彰人」

こいつ、俺がいない間、フォロー大変だったんだな。

“ガラガラガラ”

百代
「ダ～リン～。ご飯もって来たぞ～」

２－Ｆ一同
「はい！？」

彰人
「さすがにそれは似合わないよ百代・・・」

百代
「うん。私も言ってて思った。」

大和
「さすがに姉さん。今までのキャラから考えられないことを言わないでくれ、内のクラスが半壊してるから・・・」

百代
「そこは弟がどうにかしてくれ。私は彰人とイチャイチャしてるから。」

モロ

「てか、今の言葉でホントに内のクラスが精神的に半壊してるから！！」

モモ先輩ファンＡ
「モモ先輩が、だ、ダーリン・・・」

あ、ホントだ。そこにある男廊下からこのクラスに来て

モモ先輩のファンＥＸ
「キサマになんか、キサマになんか。ええい貴様に勝負を俺が挑む、そして俺が勝って俺がモモ先輩と付き合う」

おいおい、これは。本人が目の前にいるのに

大和
「彰人、じいさんが言っていただろ決闘制度」

彰人
「ああ、それ」

モモ先輩のファンＥＸ
「それじゃ、今からすぐにグラウンドだ。」

“パシっ！！”

そして、ワッペンを置いた。

百代
「うんうん、彰人。これはお前の試練だ」

彰人
「百代が原因だろうが、けど最後の言葉は癪だ！！」

“パシンっ！！”

俺もそして置いた。

～グラウンド移動～

“ガヤガヤガヤ”“ザワザワザワ”

彰人
「なんで、全校の生徒がいるんだぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！！」

そう、なぜかグラウンドに大体の生徒がいる。

百代
「あ、それは私が放送で言った。」

モロ・岳人
「「なんて？」」

百代
「私を争い、二人の男が戦う？」

大和
「はぁ～。姉さん」

彰人
「百代、今日は一人でＮＥ・ＹＯ・Ｕ・ＫＡ？」

百代
「な、なんだと。そ、それは。私に一人で寝ろと、昨日にあんなことをしといて！！」

京
「二人とも、それは昨日一緒に寝てるって言ってるもんだよ」

百代・彰人
「「あ・・・／／／／」」

そんな話をしている時、なぜか放送が入った。

『はぁ～い。皆さん、今日は臨時の放送だけどこの二年、可愛いこそ正義が信念の井上準が進行。そして、今日は実況と解説に川神鉄心さんを呼んでるぜ』

『ほ、ほ、ほ。内の孫の話じゃからのう』

彰人
「鉄爺め！！」

『それじゃあ、両者共に持ち場についてちなみに武器は一つまで貸し出しだ』

『うむ。これは正式ルールじゃ。』

『そして、今回はなんとダウン制だ。これは相手が地について三秒数えて終了だ』

彰人
「あっそ」

岳人
「ま、がんばれ」

モロ
「うん、一応言っとくけど、殺しはダメだよ」

彰人
「おい、モロ。」

大和
「それじゃ、兄弟。お前の強さ、見せてやれ」

百代
「うーーーーー。彰人～～～～～～～」

なんかさっきの言葉が効きすぎた様だ。

一子
「なんで、彰人勝負になったの？（↑例の如く例のとおりだ。）」

京
「・・・しょうもない・・・」

一子
「（？３？）」

『それでは両者、自己紹介じゃ』

モモ先輩のファンＥＸ
「うい、俺は剣道部の主将。そして、モモ先輩のファン会員の００ナンバーだ！！そして武器はこの竹刀を使用する。」
“ワァァァァァァァァァ”
なんとも面倒だな。しかし
彰人
「俺は２－Ｆ、御剣彰人。武器は拳一つ！！」
キャップ
「なんだ、なんだ、また彰人が目立ってるのかよ。俺もまぜろ」
大和
「キャップ、流石に決闘なんだから」
甘粕
「がんばってください。御剣さん」
福本
「お前ならやれるって」
俺にも歓声があった。なんだかうれしいな。
モモ先輩ファンＡ
「がんばって、そんな奴から、モモ先輩を～」
モモ先輩ファンＢ

「がんばって００ナンバー」

『それでは決闘・・・始めいっ！！』

##第八話##（後書き）

は～い、今日はないよ。てかおやすみです。はい

それでは次回、会いましょう。バイバ～ィ

##第九話##（前書き）

九話掲載。

##第九話##

鉄爺の言葉で開始はされたが・・・

彰人
「俺にどうしろと」

そう、まあ皆さんもご存知の通り、俺は百代よりも強かった、今はわからないけど・・・で、普通の、まあこの川神学園の部活の主将だから、強いだろうけど、生徒と俺じゃ・・・はぁ～、だるい

モモ先輩のファンＥＸ
「はぁーーーーーーーーー・・・せぇぇぇいっ！！」

剣道部の一撃は、確かに鋭い。たしかにこれなら主将というもの分かる、フェイントも入れている様だ、剣を使う俺から言えば中々だ。しかし、

百代
「しかし、相手が悪い。」

キャップ
「そうだよな。相手が悪い」

岳人
「ああ、ホント」

京
「く、く、く。」

大和
「こら京、笑うな」

モロ
「けど大和、うん。ホント、相手が悪い」

一子
「そうね、相手が悪いわ」

ファミリーの全員はこの反応。他は、

三年男子
「おいおい、アイツの攻撃、簡単に避けてるぞ、あの二年」

三年女子
「確か、彼って、今回のインターハイでの優勝候補よね」

甘粕
「す、すごいです。あんな簡単に避けれるなんて」

小笠原
「ホントね、あのサルの言っていたことあながち間違えじゃ無いかも」

羽黒
「てか、チカリン。あれ、ホントに人間？」

小笠原
「あんたよりも、人間よ」

彰人
「（しかし、いい加減。避けてるのも）、つ、疲れたな」

モモ先輩のファンＥＸ
「き、キサマ、それでも百代さんの彼氏か、そんな避けているようじゃ俺は倒せんぞ」

百代
「あ～あ」

一子
「あのう、お姉さまどうしたの？」

百代
「いやな、さっきあの対戦者、それで百代さんの彼氏かって言っただろ」

一子
「う、うん。」

キャップ
「そんなことまで聞こえるのかよ、モモ先輩・・・」

岳人
「てか、それがどうしたんすか？」

百代
「我が弟ならわかるだろうさ。な、兄弟なんだろ」

大和
「ああ、あれはキレたな、我が兄弟は」

京
「どうして？」

大和
「簡単てか、俺から言うのは少し嫌だ、てか滅入る」

百代
「ようわな、京。もし勝負している奴に大和のこと言われたらどうだ？」

京
「もちろん、コロ・・・っあ！！」

モロ
「なんか、大和が滅入る理由がわかったよ」

キャップ・一子・岳人
「「「は、どういうことだ（よ）？」」」

三人は分からなかったようだ、その時動きがあった

彰人
「終われ」

彰人の一言が聞こえた時、相手の竹刀は無かった。

モモ先輩のファンＥＸ

「は・・・はい！？」

“ワァァァァァァァァァァ”

歓声が上がる。彰人が、相手の武器を吹き飛ばしたのだ。

『おおっと、ここで新しい動きだ、な、なんと御剣選手が相手の武器を吹き飛ばした？』

『うむ。これは相手の動きを封じたのも同じじゃ。考えてみい、武器を叩くよりも、相手を叩いた方が簡単じゃ、ということは？』

ああ、鉄爺そこまで言わなくても。

彰人

「て、訳だから、降参してくれる。あまり俺、人を叩くの好きじゃないんだ」

これは本音だ。人を叩くのはあまり好きではない。たとえばこれが、ルー師範代、鉄爺、百代、釈迦堂さん、揚羽さんなら話は別だが・・・。

そして、相手は素直に、

モモ先輩のファンＥＸ

「ああ、わかった」

そう言って、降伏を、

モモ先輩のファンＥＸ

「するわけないだろうが、このバカが！！」

そして、俺の顔面を殴った。

“ガシッ！！”

もちろん掴んだけど。

彰人

「俺さ、嘘つき嫌いなんだ。だから、キエロ」

そして、俺の右フックが相手の腹を直撃。

“バキッ”

なんか不味い、音だったが・・・

「んじゃ、次、間接外すか？」

と、俺が詰みに入りそうになった時

『そこまでじゃ。すぐに担架を、すでにそこの三年生は動けんだろう。それではこの勝負、二年御剣彰人の勝ちとする』

鉄爺はそう言うと、消えていった。

『それでは、皆さん。クラスに戻るように、』

彰人

「ちっ！」

三年男子
「おい、あいつ、学長の言葉が無ければ、まだやる気だったぞ」

三年女子
「まるで、モモさんみたいで、かっこいい」

モモ先輩ファンA
「あいつには関わらないほうが得策のようだ」

この日を境に、モモ先輩ファンは彰人になにもしないことを誓った。

その頃、勝負が終わって、ファミリーが彰人の傍に行った。

キャップ
「相変わらず、つえぇな」

岳人
「てか、お前容赦ねぇな、おい」

京
「お疲れ」

一子
「さっきの武器を飛ばすのどうやるの？」

大和
「おいおい、みんな。彰人も疲れて」

彰人

「一子、あれはな」

モロ

「全然、疲れていないじゃん！！」

俺が一子に説明しようと思った時に背中にやわらかい感覚がした、まあ簡単にいうと抱きつかれた。

百代

「うんうん。お姉さんは彰人の姿にさらに惚れてしまったぞ。しかし、一撃の後にさらに追撃を入れようとするのは彰人らしくなかったぞ」

彰人

「うん？そんなつもりは無かったけど・・・やっぱ、」

俺は自分の左腕を見ながら言った。

彰人

「最近、鈍らしているからかな。なあ、百代、帰ったら死合いしよう。」

百代

「なんだ、私のことを、バトルマニアと言っていたのにか」

彰人

「だって、欲求不満だ、全然満足がいかん」

百代

「それで、夜は大丈夫なのか？」

おいおい、今日もスル気かよ・・・

彰人
「俺をなめるなよ、てか、それはお前も一緒な」

百代
「ふふふ、そうだったな」

大和
「あのう、そろそろ戻らないと、授業に遅れるよ、二人とも」

大和の言葉に我に戻った。

彰人
「げ、そろそろか。それじゃ百代。帰りは門の前で」

百代
「う～～～～～～。」

朝の二の舞になった。
そして、クラスに帰ると

“ワァァァァァァァァ”

すごかった・・・はぁ～。

彰人
「なんか、疲れた」

大和
「お、おい。静かに」

歴史教師
「うるさいでおじゃる!!。御剣、編入したてだからって容赦はしないでおじゃる!!」

彰人
「あ、すいません。編入したてで、ノート取り方を直江君に聞いてました。」

歴史教師
「そうで、おじゃったか。うむ、麻呂の授業に対する良い態度じゃ」

これで、どうにかすごした。ちなみに大和に親指を立てられてグッってされました。そして、この歴史の授業が今日の最後の授業だった。

“キーンコーンカーンコーン”

彰人
「ふう、疲れた。」

大和
「お疲れ。」

一子
「ふにゃふにゃ」

彰人

「未だに、寝ている奴も居るがな」

源
「おい、彰人。ちょい」

あれれ、忠勝が呼んでいるなんて珍しい

彰人
「ああ」

そして、俺と大和が

源
「お前は呼んでねぇ」

大和
「ゲンさん、つれない」

源
「うっせい」

彰人
「あはは・・・」

そして、大和は渋々戻った。

彰人
「それで、どうした？お前から呼ぶなんて」

源

「ああ、お前らの仲間に言っといてくれ、親不孝通りに最近、変な薬（モノ）が回っている。だから近づくなってな。」

彰人
「そんなに不味いのか？」

源
「ああ、今回はな、今までの薬（モノ）とは違うからな」

彰人
「そうかありがとな、だけどお前から言えばいいのに」

源
「勘違いするんじゃねえよ。俺の仕事に支障が出たら困るからだ」

彰人
「そうか。それじゃあな」

やっぱ忠勝はツンデレ（↑大和情報）なんだな。

大和
「なんだんだったんだ？」

彰人
「うん。ああ」

俺が言おうとした時に、

“ガラガラガラ”

先生が入ってきてしまった。

小島
「それではＨＲを開始する、委員長」

甘粕
「起立、礼。」

小島
「それでは連絡だ。今日の決闘は素晴らしかったぞ、と、学長が言っていたぞ。御剣」

御剣
「あ、どうも」

小島
「それでは連絡だ。明日は人間測定がある。これは身長だけでなく心技体と人間の度合いをはかる物だ、そしてもう一つ、今度の金曜に転入生が来る」

“ガヤガヤガヤ”

“ビシッ”

小島
「えい、黙れ。質問があるなら挙手しなさい」

大和
「はい」

小島
「うむ。直江、発言を許可する」

大和
「この前、彰人が来たのにですか？」

小島
「ああ、編入ではなく、転入だからな」

ああ、あの中将の娘さんだな。

小島
「他には無い様だな。それでは最後に川神、明日にはなにがある？」

一子
「はい、明日は人間測定です。」

小島
「よろしい、それでこれで終わりにする、委員長」

甘粕
「起立、礼」

そして、解散した。

##第九話## ##（後書き）

今回はおやすみで、バイバ～ィ

##第十話##（前書き）

十話掲載

##第十話##

今日も終わり、一子は修行に、モロはゲーセンへ、京は大和と一緒に、本を買いに行ったらしい、岳人はジム、キャップはバイト、と言うことは自然的に俺と百代だけになるわけで、こうなると

百代
「なぁ～彰人、帰ったら直ぐに勝負して、終わったら一緒にお風呂な」

彰人
「あのな、百代・・・」

百代
「なんだ、私と、一緒は、嫌なのか？」

彰人
「いやで、誰が抱くかっての！」

百代
「う、そういう奇襲は・・・・・やるなさすがだ私に奇襲をかけるとは」

彰人
「はあ～。そんで、今日は帰ったら即行勝負でいいな」

百代
「ああそれでお願いする」

彰人
「ああ、それからもう一つ、勝負ついでだ」

百代
「なんだ？」

彰人
「まだ、一子に言ってないんだな」

百代
「！！」

彰人
「お前も分かっているんだろう」

百代
「ああ、あいつの夢は川神院の師範代・・・・・」

彰人
「努力だけではどうにもならん領域」

百代
「分かってはいる、だけど」

彰人
「おいおい、まだ誰が諦めろって言ったよ、まだ諦めるのは早いぞ。百代」

百代
「し、しかしもうあいつの高二、後一年ちょっとで社会に出る年齢

だ」

彰人
「いいか、百代。奇跡と努力が重なった奇跡てのがこの世にはあるんだぞ、だからさ、百代。もう少しだけ俺らの“妹”を信じようぜ。あいつの努力は俺らが一番知っているだろう」

百代
「うん・・・」

やはり、この話題はさすがにまだ早かったかなと、俺は思ったが

百代
「やはり、お前が居てよかったよ。これではお前の方が年上だ」

彰人
「それよりも先に俺はお前の彼氏だ」

百代
「まだ、夫では無いんだな」

百代が意地悪く言ってくる。しかし、だてに幼馴染兼彼氏をしている俺はこう返した。

彰人
「安心しろ、俺があと一年したら、俺が結婚できるから」

百代
「／／／／／／／／／／」

今回は完全勝利のようだ。そして、こんな感じにバカップルをしていたら、川神院に着いた。

彰人
「んじゃ、ちょいどこで戦えるか、聞いて」

鉄心
「うむ、それならば百代、九鬼の、戦ったところを使うがいい」

どこから出てくるんだ、このじいさん。

百代
「いいのかジジイ？」

鉄心
「なに、構わんよ。百代も最近まともに戦える奴が居ないと言っておっただろう」

彰人
「それじゃ、遠慮なく。百代服装は？」

百代
「これで、構わん」

そういうと、俺らは闘技場に向かった。
そして着いて見ると、審判に鉄爺、そして観席にルー師範代が居た。

彰人
「ルー師範代。もう大丈夫なんですか？」

ルー
「大丈夫ネ。一日フルに回復に専念したからネ、だけど彰人、結構効いたネ」

彰人
「あはは、それはよかった」

鉄心
「それでは二人とも準備はよいか？」

鉄爺の言葉が入り

鉄心
「それではゴホン。西方、川神百代」

百代
「ああ」

そして、俺に向ける殺気。

鉄心
「東方、御剣彰人」

彰人
「いいぞ」

そして俺も本気モードに切り替える。

百代
「（な、なんだこの殺気、これジジイよりも上じゃないか。）」

ルー
「（おお、これは、百代を軽く越しているネ）」

鉄心
「それでは・・・・・・はじめい！！」

百代
「はぁぁぁぁぁぁ！！」

百代の攻撃、最小に避けるポイント見つけて俺がその隙にはいるが

百代
「はっ！！」

さすがに、無理か。

百代
「いいぞ、いいぞ、彰人。こんな死合い、揚羽さん以来だ」

彰人
「ああ、俺も久しぶりだ、こんなに胸が躍る戦いは、だけど」

百代
「！」

俺は一旦、百代から離れ距離をとり

彰人
「いくぞ、“悪魔の腕”解放」

その言葉は始動キーだ、俺の左腕は蛇に包まれた。

百代
「（あ、あれが悪魔の腕、見るだけで気が強い）」

ルー
「（あれが、釈迦堂が求めてしまったモノネ・・・・・）」

鉄心
「（しかし、昔の彰人とは違い完全に掌握しているわい、まったく一年足らずでここまで成長するなんてのう。）」

彰人
「行け。」

俺の左腕に居る、俺の気で生成された蛇が百代のに襲い掛かるが

百代
「そんなの！！」

見事に気で消滅された。

彰人
「さすが百代」

百代
「当たり前だ。彰人」

しかし、これ以上戦っていると、俺のこの腕が暴れそうだ。だから、

一番最初で最後の百代に勝ったあの技で

彰人
「行くぞ。」

そして俺は自分の左腕の封印を解いた。

“その呪わしき命運が尽き果てるまで”

“高き銀河に下りたもう”

“蛇遣い座を宿すものなり”

“されば――我は求め訴えたり”

“喰らえ――その毒蛇の牙を以て！！

俺は左腕に気を集め、蛇の如くの速さで迫った。しかし百代も

百代
「ああ、私の一つの目標が、この技に勝つんだ！！行くぞ、川神流奥義無双正拳突き！！」

百代も右腕に気を込めて、俺に放った。そして

“ドガァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァン”

強い、爆心音と、凄まじい風がそこを吹き荒れた。そして両者は自

分の居た場所から相手が居た場所に移っていた。

彰人
「なぁ、百代。蛇の鱗は硬いんだぜ」

“ドサ”

そして、百代は数年前と、同じに

百代
「ああ、その様だな」

成らなかった。

彰人
「さすがに、俺のスネークバイドが、力負けするとはな」

百代
「だけど、あの技、防御力の半端ないだな」

彰人
「なぁ、百代」

百代
「なんだ？」

彰人
「また今度にしようぜ、こんな楽しい戦い簡単に決着を着けたくないな」

百代
「ああ、私もだ。ここまでいい死合いは無いかも知れんからな。」

彰人
「と、言うわけだから鉄爺」

鉄心
「うむ。この戦いはここまでじゃ。二人とも休むが良い」

ルー
「二人とも、すごかったヨ」

そして、俺らの数年ぶりの死合いは引き分けとなった。そしてここは川神院の大浴場。川神院では、門下生や修行僧が多くいるため、大浴場となってしまう。しかし

彰人
「おい、百代。貸し切って大丈夫なのか？」

百代
「安心しろ、彰人。今の時間は女性専用の時間だ。しかもここにいる女性は、ほんの十人ぐらいだ。妹はまだトレーニングだろうし、他のメンバーはすでに上がっていたから、大丈夫だ」

彰人
「百代の癖に――ちゃんとしている」

百代

「なんだ、なんだ。その言い方は、折角二人で入れると思ったのに、その言い方は」

彰人
「ごめんごめん、百代の姿にちょっと脳みそがイカれた。」

百代
「まったく、一年前はここまでエロくは無かったのにな～」

彰人
「それはどうだろうな、だけど、百代のせいではあるな。まあ、いいや、おいで」

俺はそういうと、すでに産まれたままの姿になっている俺らはいつもの通り、俺の上に百代が座る甘え座りで浴槽に入った。

百代
「しかし、昨日は激しかったな、彰人」

彰人
「いきなりかよ。てかこればっかりは一年間の衝動だ。」

百代
「そうだな、私も変わらないな」

彰人
「ホント、結局俺らさ、あんま変わらないな」

百代
「ああ、ただ」

彰人
「ただ？」

百代
「簡単に彰人に甘えられる」

そういうと、俺の方に向いて抱きついた。

彰人
「まったく、一年前から変わらないな、まあ昨日の寝る時ですごく実感したがな」

百代
「いいだろう。彰人もこんな可愛い抱き枕があるんだから」

彰人
「ああ、そうだな」

そう言って、俺らはキスをした。

さらに時間が経ち、就寝時間。

彰人
「あのな、百代」

百代
「なんだ？」

彰人

「普通に俺の部屋に入って、普通に布団に自分の枕を置かないでくれ」

百代
「いいだろう、いいだろう。これは一年間の衝動だ。」

彰人
「うっ・・・」

一年間と俺が言われると弱腰に変わってしまう。

彰人
「はぁ～、じゃ。電気消すぞ」

百代
「ああ、そうしろ♪」

これで今日が終了。

これは彰人達が死合いが終わった後の闘技場での話。

鉄心
「どうじゃろう、百代の様子は」

ルー
「ええ、さっきの死合いを見ている限り、あの戦闘による衝動は皆無なってきていると思いますネ」

鉄心
「それに彰人が効いておるのう」

ルー
「ええ、確実に。今回の死合いで、百代はさらに自分を強くしようとしますがそれは目標がありますからね、一年前のようにただ、力を上げるものではないネ」

鉄心
「それに、衝動だけなら、彰人との恋愛に行っておるようにも見える。まったく若いものは良いのう。」

ルー
「それに、彰人。まだ、“右腕”を使ってないネ」

鉄心
「そうだのう。しかしルー、今朝のは無様じゃったの」

ルー
「ええ、ですからこれからももっと精進しますよ、さすがに今朝のは驚かせられたましたネ。しかもあれでも腕は使っていないですし。それに」

鉄心
「そうじゃのう。さらにあの刀、百代は持てたみたいじゃが、彰人はあれを使うからの」

ルー
「ホント、一年で飛躍的に進歩したね。」

鉄心
「うむ」

その頃の二人は、お風呂でイチャイチャし始めていました。

##第十話##（後書き）

ああ、ネタが・・・・・無い

##第十一話##（前書き）

十一話掲載。

##第十一話##

さて、今日も始まったな。さて、まずは、この俺の上に寝ている百代を起こすか。

彰人
「おい、起きろ百代。もう朝だぞ、今日は鍛錬があるだろ」

百代
「ふわぁ～。うん、彰人おはよう」

彰人
「ああ、おはよう。さ、準備して」

百代
「ああ。」

そういうと百代はいつの間に用意したのかわからんが俺のクローゼットから胴着を出した。

彰人
「い、いつまに」

半分、呆れながらも、俺も着替えた。そして朝のランニングには一子も一緒のようだ。

一子
「おはよう、お姉さま、彰人」

百代
「ああ、今日も早いな。一子」

彰人
「おはようさん、一子。それでどこまで行く？」

一子
「そうね、あのなんとかタワーがあるところまでどうかしら？」

彰人
「了解だ。朝飯前にやって、遅刻しないように行くぞ」

そして、俺らは久々の三人でのランニングをした。
そして、一子は一人でさらにトレーニングをしに行った。

彰人
「んじゃ、俺らも学校いくぞ」

百代
「ああ、さて、今日はどれだけの注目をされるか、楽しみだ」

彰人
「ああ、憂鬱だ・・・・・・」

その頃の島津寮。

大和
「今日は人間測定か」

クッキー
「なんだい、大和。あまり乗る気じゃないようだね。」

京
「大和は軍師派だから」

クッキー
「なるほどね、だけどモモさんとかにある意味鍛えられてそうだけど」

大和
「耐久力だけあっても、ってまあいいや、それじゃ行って来る、クッキー」

キャップ
「じゃあな、クッキー」

京
「いってきます」

クッキー
「いってらっしゃい」

そして、大和達は寮の前で岳人を待った。

岳人
「よ、お前らおはよう」

大和
「遅いぞ、まったく」

京
「しょうがないよ、時間も読めないんだから」

キャップ
「マジかよ岳人」

岳人
「てめえら、朝から喧嘩売っているのか」

そういうとクルミを握り潰した。そして俺らは河川敷まで来たところでモロとも合流。

キャップ
「はぁ～、しっかし眠いな」

大和
「その気持ちはわかる、この前、俺もそう思った。」

キャップ
「なら、サボろうぜ。」

大和
「だが、断る。今日は人間測定だろうが、」

キャップ
「ああ、そうだったな」

岳人
「俺様の、晴れ舞台だ」

京
「それはどうでしょう」

モロ
「うちのクラスにはただでさえキャップが居るのに、今回はさらに彰人もいるしね」

大和
「彰人は測定不可が多そうだな」

岳人
「噂をしてれば、あの傍からのバカップル。彰人達だろ」

岳人が指差す方向には、腕を組んで話している、姉さん達がいた

キャップ
「お～い。」

まあ、キャップだから、二人きりにさせようとも思わず、普通に呼んだ。

百代
「おお、お前らか、すこし話を聴いてくれ、」

大和
「なにかあったの姉さん」

百代
「実はな」

彰人
「俺が携帯を持ってないことに驚かせられた」

百代
「まったく。普通あるだろうが」

大和
「けど、姉さんの今月不味くて、あまり携帯の意味が無いはずだけど」

モロ
「似たもの同士ってわけね」

キャップ
「だけど、彰人が携帯ないのは不味くないか軍師大和？」

大和
「確かに、無いのは不便だな。だけど、どうせ姉さんと一緒にいるだろ、大体」

彰人
「ああ」

大和
「なら、大丈夫だろう」

岳人
「確かに、この二人なら、軍隊でも倒せそうもねえな」

キャップ
「しかし、暇だな・・・・・・っあ！！おい誰か笛持ってきてるか」

大和
「勿論だ」

京
「ブリーダーとして当然」

モロ
「これ、面白いもんね」

岳人
「ホントだよな。なんで来るんだか」

彰人
「ま、まさか。未だに通用しるのか。高二にもなって」

百代
「私に似て、純情なんだろう」

モロ・彰人・大和・岳人
「「「「・・・・・・」」」」

百代
「なんか、言～え～よ～」

そういって、俺の頬を抓った。

彰人

「いひゃいひゃい（痛い痛い）」

キャップ
「それでは呼んでくれ」

“ピィィィィィィィ”

大和の犬笛と同時に足音が聞こえてくる。

“ドドドドドドドドドドドドドド”

一子
「誰か呼んだ～てか、おはようみんな」

京
「ホントに来たね」

モロ
「これはこれで人外だよね」

一子
「なによ、呼んどいて、けなす気。まあいいわ、それよりもなにか頂戴」

大和
「それなら、このキャラメルをやろう」

一子
「そんなの要らないわよ。肉系がいいわ」

岳人
「んなもん、通学中に」

彰人
「ほいよ、一子。ジャーキー」

モロ・岳人・大和
「「「持ってやがった!!」」」

一子
「うまうま」

彰人
「まったく。」

京
「だけど、なんでジャーキー」

彰人
「いや、俺のおやつにしようかと」

大和
「ちなみにお昼は？」

百代
「もちろん私の手料理だ」

キャップ
「明日、槍がふるだろうな」

大和
「（ああ、言っちゃった）」

京
「（しょうもない）」

モロ
「（南無阿日陀仏）」

百代
「槍だと・・・・・・」

彰人
「キャップ、骨は拾ってやる」

キャップ
「ん？なんだか分からんがこのままだと、俺の命が無さそうだ、というわけで俺は逃げる」

百代
「待てぇぇぇぇぇ」

さすが、キャップ。しかし相手が百代だとな

キャップ
「ギャァァァァァァ」

二人は追いかけっこに行ってしまった。

彰人

「それじゃ、俺らは平和的に行きますか。」

モロ
「だけど、モモ先輩、最近随分丸くなったね」

京
「そりゃ、彼氏ができれば」

一子
「そうね、なんかじいちゃんも恋愛に力が行ってよかったわいたか言ってたわ」

岳人
「それで、そこのプレイボーイ」

彰人
「ああ、岳人。そこの川に沈まれたいのか?」

岳人
「あ、や、あ。」

大和
「岳人、腰が引けてる」

京
「かっこ悪い」

一子
「ダッサ」

モロ
「まあ、彰人に睨まれたら、普通固まるね。」

彰人
「さ、ガッコ行くか」

そして俺らは学校に向かった、途中岳人は無口だったのは言うまでもない。教室の前でやっと岳人は復活した。

モロはゲーム仲間のところに、岳人はヨンパチのところに、キャップは直ぐに来てげんなりな顔をして寝てしまい、京はいつもの通り、一子は、

甘粕
「ワン子ちゃん、今日もトレーニングですか？」

一子
「ええ、勿論。毎日の食事と、睡眠と、鍛錬は私の生活の基礎よ。」

甘粕
「今日の宿題は」

一子
「委員長のをみしてもらう、覚悟はあるは」

“ゴチン”

一子
「い、痛っ。だ、誰よ」

彰人
「おい、こら一子」

一子
「げ、彰人」

彰人
「げ、じゃねえよ、お前・・・・・・まあいい。あとで覚えておけ」

一子
「ぎょえぇぇぇぇぇ。、御免なさ～い」

甘粕
「なんだか、ワン子ちゃんのお兄さんみたいですね、御剣君は」

彰人
「ま、昔からこうだしたな」

小笠原
「それよりも、御剣君、昨日の決闘すごかったね」

甘粕
「あ、チカちゃんおはようです。あ、そうでした、御剣君、昨日はすごかったです。相手は先輩なのに」

大和
「二人とも、こいつを普通と見てはいけないぞ。こいつのレベルはルー先生や、学長、さらに言えば姉さんレベルだから」

小笠原

「ま、マジで」

甘粕
「そ、そうなんですか。」

小笠原
「まああのモモ先輩の彼氏だもんね。」

こんな感じに俺もFクラス面子になれて話していると、岳人たちと話していた、ヨンパチがきて

福本
「お、おい。お前モモ先輩を抱いたって本当かよ!!」

なんてことを鼻を荒くして聞いてきた。

彰人
「おい、ヨンパチ。いきなり朝からなんだ」

福本
「やべぇ〜、すまん、俺、トイレ」

なんなんだ、あいつ。

小笠原
「ああ、やだやだ、ホント同い年の男子ってなんでこうもガキっぽいのかしら」

大和
「キャップとか?」

小笠原
「風間君は良いガキ、ヨンパチとかは悪ガキ」

大和
「じゃ俺は？」

小笠原
「ませガキ、案外クールな所あるからね」

大和はなんとも微妙のようだ。

彰人
「それじゃ、俺とかは？」

小笠原
「ああ、御剣君とか、源君は例外。源君はああだし。君は昨日ですごく怖いってわかったわけよ」

甘粕
「え、そうでしたか？」

そんな感じの朝の学校だった。

＃＃第十一話＃＃（後書き）

やはり、ラジオのネタが無〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜い

##第十二話##（前書き）

十二話掲載です。

##第十二話##

さてはて、今日は人間測定の日でもあった、俺らは着替えて直ぐに体育館に来た。てか、なんでドーム状なんだ。そして、そこで俺らは身長や体重などを量っていた。

小島
「さっさと、効率よく測定するように」

鞭を鳴らしながら、内の担任は指導していた。
最初に身長だった。

モロ
「うわーーーーー、やっぱもう身長止まっているよ」

岳人
「モロ、俺のように肉を付けろ、肉を」

モロ
「いや、筋肉つけたら、逆に伸びないような・・・・・」

彰人
「そうでも、無いと思うが。」

ちなみに俺は１８１センチだった。

そして次の握力計。

モロ

「ん～～～」

小島
「４２、もう少し上げてみなさい、師岡」

モロ
「は、はい～」

小島
「次、御剣か、お前はこれだ」

そういうと、俺はみんなとは違う物だった、なになに、上限が二百か、

彰人
「あのう、これって本気ですよね」

小島
「なにを当たり前なことを、さっさとしろ」

彰人
「わかりました。はぁ～。・・・・・はっ！！」

そして、無残な握力計ができました。

小島
「うむ。測定不可と」

大和
「おいおい、マジかよ」

彰人
「あはははは」

モロ
「てか、普通の限度で１２０なのに、２００でさらにそれを壊すって」

キャップ
「さすがだな、彰人」

その時、俺の次に計っていた忠勝が終わったらしいが

源
「ちっ。７８か、８０はあると思ったんだがな」

福本
「おっと」

ヨンパチ達が道を開けていた。まあ見た目がああだからな。

彰人
「ま、握力なんて、簡単に上がるもんじゃないから」

源
「うっせ、てめぇに言われたくねぇよ。このブレイカーが！！」

なぜか、俺だけは案外フレンドリー、てかこいうは根が優しいからな。そして次に座高

キャップ
「岳人って、座高も高いんだな」

岳人
「バァァカ、身長も高いからだよ、このバァァカ」

ちなみに俺は脚のほうが長かった、よかったよかった。そして大体が終わった頃

小島
「終わった奴らは、グラウンドに行け。今、女子が測定中だから、それが終わったら交代だ」

その言葉に

岳人
「女子が測・定・中だとぉぉぉぉぉぉ」

とか、言いながら、岳人率いる男連中はダッシュで消えて言った、まあ一人だけ

キャップ
「なんだ、なんだ。分けわかんねえけどみんな走っているから俺も走る」

とかいう完全に違う趣旨の奴もいたな・・・・・・

大和
「俺らも行くか?」

まあ、完全に出遅れしている奴らもいるがな。
そして、行ってみれば・・・・・ヨンパチが輝いていた。

福本
「遅いぞお前ら、それでも盛りの年代か。俺なんか、ベストショット連発でよ～」

岳人
「マジかよ、あとで見せろ。」

彰人
「はぁ～」

俺はまあ、彼女がいるため、興味は無かった。そして女子が終わり、男子になった。
最初は１００メートル走

キャップ
「よぉし賭けしょうぜ、だれか俺に挑戦しないか？」

陸上部
「なら僕が、僕は走り高跳び屋だけど、陸上部、君には負けないよ。」

キャップ
「それじゃ、よーいドン」

陸上部
「な、な、なんて早さだ」

まあ、うちのリーダーだもんな。

小島
「次、御剣と、師岡」

彰人
「ありゃりゃ。他の連中は終了していやがるか。」

モロ
「そうみたいだね。じゃ、走りますか」

俺らがラストの走者である。まあ、結論から言うと俺は測定不可・・・・だって音速超えるもん。
そんなこんなで、無事終了。しかし俺の大体の表記が・・・・・・

モロ
「測定不可だもんね。」

岳人
「てか、普通よお。ボール投げて後ろから飛んでくるってなんだよ」

大和
「まあ、姉さんと同じで、兄弟も規格外なんだよ」

彰人
「勝手に規格外にするな、てか今日はおしまいか？」

大和
「ああ、これで、後は飯食ったら、終わりのはずだ。」

彰人
「な～る。なら、熊ちゃん、体重がクリアできた祝いに、おいしいお菓子屋おしえてくれるか？」

クマ
「うん。構わないよ、え～とね、洋菓子だと、ココとココ。和菓子だと、この仲見世通りのココとこれかな」

彰人
「サンキュ」

キャップ
「なんだ、彰人、一人でうまいもんでも食いに行くきか？」

彰人
「いや、一人じゃない」

キャップ
「はぁ～？じゃ、誰と」

モロ
「はいはい。」

岳人
「こっちこようねえ。」

そういうと岳人とモロに腕を引きずられながら、購買の買出しに行った。

彰人

「なあ、あいつは何時になったら、性に関心を持つんだ？」

大和
「あれはあれでキャップだよ」

百代
「おおい、彰人。飯だぁ～。」

大和
「ホントに、弁当だ」

彰人
「すまん、俺も信じてなかった」

一子
「あら、彰人知らなかったの」

百代
「まったく、こんな美少女が折角作ったのに、やらないぞ」

彰人
「ごめんなさい」

大和
「すでに餌付けされている」

百代
「よろしい、じゃ食べるか」

そして、ここ最近のお昼、俺と百代、一子に大和、という状態が普

通になってきた。

大和
「しかし、俺らに所に転入してくる奴って一体」

一子
「腕があればそれはそれでおもしろそう」

百代
「なんだ、そっちは転入生がいるのか、羨ましいかぎりだ」

大和
「あのな、二人とも・・・・・・」

彰人・百代
「「なんだ？」」

大和
「普通に会話に参加しながら、食べあいっこしてるんじゃないよ、目の毒です」

彰人
「なんだ、羨ましいのか」

大和
「うっ（↑図星のご様子）」

百代
「なら、お前も食べさせて貰えばいいだろう、京に」

大和
「姉さん、わざと言っているでしょうが、あんな真っ赤の」

京
「これはこれでおいしいよ、脳天に突き刺さるような感じ」

一子
「うげぇ！今回はさらに赤い」

いつものようにすばらしいこの京コーティング。

彰人
「あ、そうそう。今日百代暇か？」

百代
「安心してくれ、お前からの誘いは断らないことにしているんだ」

彰人
「よし、いい子だ。そんな良い子にご褒美だ。今日デートしよう」

百代
「うんうん。それはいい」

京
「ほんとしょうもない。大和、私たちもああなろうね」

大和
「ならねえよ、てか勝手に付き合っている設定にするな」

京

「おお、これは二段突っ込み」

“ガラガラガラ”

そこにキャップたちも帰ってきた。

モロ
「ほら、やっぱり、目の毒だったでしょ」

岳人
「ホントだったな。」

キャップ
「意味が分からん。俺は寝る」

大和
「あれ、お前ら」

岳人
「食べてきたよ、食堂で」

百代
「あ、そろそろだな。それじゃ彰人♪」

“チュ”

一瞬だがキスをして消えていった。

モロ
「お願いだから人前では避けようね」

モロにジト目で・・・・・クラスのほぼ全員にジト目を浴びました。と、その時廊下から

???

「ふはははははははははははは」

素晴らしい高笑いが聞こえてきた、てかこの笑い方は揚羽さんだな、と言うことは。

英雄

「九鬼英雄、ここに推参。なんでもココ最近にこのFクラスに編入生が要ると聞いてな、そして一子殿！！」

一子

「あはは、九鬼くん」

九鬼

「うむ、今日は貴方に会うために来たのでないので挨拶だけとさせていただく」

一子

「あはは、ありがとう？」

九鬼

「それで、編入してきたのは「よ、英雄。」うん？」

俺は普通に手を振って挨拶した。なんか他の連中が驚愕しているが。

九鬼

「なんだ、彰人でなはないか。そうかそうかお前が編入生か、うむ、お前は冬馬と同じく我の友だからな、困ったことがあれば隣のSクラスに居る。それではな、あずみ、貴様も彰人と話すことがあるだろう、だから我は先に戻る」

あずみ
「はい、英雄様～☆」

そして、英雄がなんか最後に一子のほうになんか言っていたが、まあいいか。そして英雄が消えた瞬間

あずみ
「久しぶりじゃねえか。彰人」

彰人
「相変わらず、お前のそのモードチェンジはさすがだな」

あずみ
「へ、当たり前だ。あたいは英雄様の前では完璧なメイドなんだからな。まあいい。英雄様では無いがなにか困ったことがあれば言え、あたいもあんたには借りあるしな。それじゃあな」

そういうと学園でもなぜかメイド服のあずみも消えた。俺のクラスは後の祭りのようにポカンとしていたが、次の教科の先生が来て、どうにかなったかが・・・・なぜ?

##第十二話##（後書き）

やはりネタが無い。

なのはも書けない・・・・・・災厄だ。

##第十三話## #（前書き）

更新！！

##第十三話##

なぜか英雄が来てからシーンとなる我がクラス、な～ぜ？

彰人
「な、なんか俺、変だった？」

大和
「変というか」

福本
「めちゃくちゃ、変だぞ。お前、ただせさえあの九鬼がお前を名前で呼ぶなんてさ」

彰人
「そうなのか。しかし、一子が人を苦手にするなんて」

一子
「あはは、ちょっとね。」

若干、苦笑いの一子であった。そんなに苦手なのか？・・・・・自論を持っていて俺的には素晴らしい人材だと思うが。

“キーンコーンカーンコーン”

そして、昼休みも終わった。

彰人
「ま、いいや。てか思ったんだが、この人生なんたらって授業なん

だ？」

大和

「あ、そうか彰人は知らないんだな、この授業は案外役に立つんだ。」

？？？

「案外とは酷いな。これでもおじさん。頑張っているんだぞ」

そういうと、たしかに自分で言うようにおじさんではあるがこの人・・・・・中々隙がないな。最近思うのだが、この学校って変人てか特殊なのか？

？？？

「おっと、そうだそうだ。こんなこと言いに来たんじゃねえや。小島先生が急用のため、俺が変わりに着たんだ。てかお前らこのあと俺は隣もＨＲしないといけないんだから、さっさとしてくれよ」

甘粕

「それじゃ、宇佐美先生。みなさ～ん起立、礼」

そういうと、すぐにＨＲ始まった。この人は宇佐美というらしい。

宇佐美

「それじゃ、連絡事項ね、まあ小島先生が残してくれたメモがあるからこれ読んだら勝手に解散だ。それじゃ読むぞ。明日は転入生が来る、ちなみにその子は川神の姉妹都市のドイツのリューベックに来る、皆、粗相のなにように。だそうだ、それじゃ委員長解散を」

甘粕

「あ、はい起立、礼」

そして解散を向かえた。俺はそのまま百代の教室に向かった。なんか途中凄く見られたような・・・・・・・
そして、百代のクラスの３－Ｆに到着、少しクラスを覗いて見たら、そこにはなぜか焦っている百代が居た。

三年女子
「それで何時になるので候？」

百代
「あ、そ、それは」

彰人
「はぁ～。またか百代、相変わらずお金には転でダメだな」

百代
「あ、彰人」

俺は完全に呆れながらも、口を挟んでしまった。これが惚れた弱みと言う奴だな。

三年女子
「あら、確か貴方は百代さんの」

彰人
「彼氏だ。それでこのアホがどうせ金を借りていて何時になっても返さないと」

三年女子

「はい、それで間違いないで候」

なんで、この人、候なんて使ってんだろう。まあいいが。

彰人
「はぁ～。まったく、それでいくらですか？」

三年女子
「え、あ、はい。え～と占めて三千六百円ですって、・・・・・・で候」

一瞬、素に戻ったな。まあいいか。

彰人
「それじゃ、これで今回は許してやってくれ。こいつには俺がきつく言っとくから」

百代
「さっすが、頼れる彼氏」

彰人
「百代、今日のデートは無しで」

百代
「え・・・・・・」

俺もさすがにそこまでお人好しでも無いし、てかさっきの借金の建前で大体の俺の小遣いが消えた。これじゃなにもできん。

彰人

「んじゃ、帰る。」

百代
「え、ちょ、ちょっと、待ってくれ彰人～～～～～」

そして、俺たちが出てった後の３－Ｆは。

三年女子
「案外さ、あの二人ってバランス取れてるみたいね」

三年男子
「あんな百代さん始めて見たぜ。てかあの後輩何者だよ」

三年男子２
「おいおい、忘れたのかよ、あの剣道部の主将を」

三年男子
「あー、あの後輩。」

そんな感じで俺はドンドン有名人になっているのは俺はまだ知らない。

俺は自分の下駄箱から出ると、百代のことを無視してそのまま出てきた。

百代
「う～～～～～。彰人。機嫌直せよ～」

彰人
「――――――」

ガン無視である。

百代
「私が悪かった。これからは金もそんな借りないし、女の子遊ばないから」

お、これは結構いい条件。

彰人
「絶対か？」

百代
「ん？うんうん」

彰人
「そうかそうか。そこまで言うんだな百代」

百代
「ああ、その分お前が居る」

彰人
「なら許そう。さ、おいで」

俺はそういうといつもの様に腕を出した。

百代
「やった♪」

百代はうれしそうに俺の腕に抱きついた、てかそんなにいいのか、

この腕?蛇が居るのに・・・・・・

彰人
「しかし、これで今月は俺もピンチだしな・・・・・」

百代
「ああ、別に構わん。私はこうして彰人の傍に居ればそれでいいのだ。」

いやいや、満足そうにそう言われても、まあうれしいが。

彰人
「あ、そうだ。バイトでもしよう。キャップとかがいいの知ってそうだし」

百代
「ええ～～～～。なんでだよ。私と一緒に居ろよ～～～～」

彰人
「あのね～。お金ためてパァーっと二人で旅行したいわけです、俺的には」

百代
「なんだ、それなら最初からそう言ってくれ。それなら私もするぞ。なんせ二人で旅行だもんな」

彰人
「あ、そうしよう。まあどうせ大型連休の際はあいつらが何処かに連れっててくれるだろうが」

百代
「ああ、今度はお前もいっしょだからめちゃくちゃ楽しみだ」

彰人
「そうと決まれば明日にでもキャップに聞いてみるか」

百代
「そうだな。それがいい」

そして、俺らは川神院に続く仲見世通りを歩いている時、なんとも異名モノをみた。そこには同じクラスの小笠原が、なんとも和菓子屋の店員さんになっていた、よく見るとそのお店の名前は小笠原だった。

小笠原
「あれれ、御剣君にモモ先輩、こんにちは」

百代
「おお、今日もご苦労だな」

小笠原
「はい♪」

この小笠原、見た目がすごく今の女子高生っぽいが案外、ちゃんと親の手伝いをしているのは意外だ、まあの委員長と仲はいいのはそのせいなのかな。

百代
「な、彰人、ここの和菓子は凄くおいしいんだ。だから」

彰人
「すまん、餡蜜二つ」

俺は百代が言う前に俺が言った。

小笠原
「は～い。餡蜜二つね。それじゃそこらへん空いてるから」

そういうと、小笠原は奥に行ってしまった。

彰人
「まったく、お前はよう」

百代
「♪～♪」

彰人
「はぁ～、ホント惚れた弱みだよな・・・・・・」

百代
「安心しろ、こんな奔放だけど、浮気はしないぞ」

彰人
「ああ、もし、したら殺す」

百代
「私も殺すぞ、まあそんなことは無いだろうが（しかし、コイツは天然のジゴロだからな）」

小笠原

「あのう、そこのお二人さん」

彰人
「あ、すまん、すまん。」

なんか俺らが話してした時に既に運んできていたらしい、てか来たのなら声を

小笠原
「声は掛けたんですけどね～」

彰人
「あははは・・・・・・」

小笠原
「それじゃ、ゆっくりしてってね。」

百代
「うふふ、これで彰人と私はバカップルとして見られるだろう」

彰人
「安心しろ。たぶんもう遅い」

さっき百代のクラスに行く際に、すごく見られていたからな・・・・・

百代
「そうだ、彰人。明日、お前のクラスに転入生が来るらしいがどんな奴なんだ？」

彰人
「知らないよ、ただ女ってことは知っているけど」

と、俺がいうと

百代
「ふ～ん、彰人、なんでお前はその転入生が女だと知っているんだ」

あれ、あれれ。なんで百代は怒っているんだ、てかなんで覇気が出てんだ。

小笠原
「あはは、お邪魔みたいね」

あ、あいつ、逃げやがった。

百代
「さあ、彰人キリキリ吐いてもらおうか？」

彰人
「百代、お前なんか勘違いしていないか、俺はその転入生の親と知り合いで俺がここに帰る際に教えてもらったんだぞ」

そういうと、百代の覇気は無くなり

百代
「なんだ、ならば最初からそう言えよ、彰人。さ、食べよう」

彰人
「はぁ～」

そして、俺らは餡蜜を食べ終わり、店を後にした。

彰人
「しかし、ここも変わらないな、ホント」

百代
「たった一年でそこまで変化しないだろう、町は。まあ明日になれば秘密基地も見れるわけだが、人の心は一年で大きく変わるがな」

彰人
「百代？」

百代
「一年なんて、と考えていたんだが、案外、大変だったぞ。」

彰人
「ああ、そうだな。」

俺は今絡んでいる腕、握っている手を少し強めた、そしたら返してくれた。まあこれが俺ら、スタイルなんだろう。俺はそう思った。

百代の携帯が鳴った。相手は大和だった。

百代
「ああ、ああ、ココに居るぞ。私の横だ、ああ、ああ。分かったそれじゃあな弟」

そして、携帯を切った。

彰人
「大和がどうかしたの？」

百代
「ああ、なんでもお前と話したいから、島津寮に来てくれだそうだ。」

彰人
「あれ、百代は」

百代
「なんでも彰人一人で、だそうだ」

彰人
「う～ん。よく判らんけど、いってきます」

百代
「ああ、だけど早く帰ってこないとおしおきだからな」

なんか拗ねちゃってるよ、ああ、かわいいな畜生。

そして、島津寮に到着。そして入った。

彰人
「お邪魔しま～す。」

そして、久々に会う、岳人のお母さん、麗子さんにあった。

##第十三話##（後書き）

「さあ、今日はできるよ、ＬＯＶＥかわかみ、司会はもちろん、この２－Ｆのハゲこと井上準、そして、なんと今回はモモ先輩がまたもやいないため、こいつが来た。」

「どうも、ブラックサレナです」

「そう、なんと作者だ！！って、なんで来てんだよ」

「うるさいぞ、ハゲ」

「なんと、まさかの突っ込みが軽くスルーかよ。てか何で居るんですかあなた」

「いちゃ、とうとうなのはが第二次スランプ大戦に入ってしまって・・・・・・」

「こっちが書けるんだからがんばれ。」

「うん、俺頑張るハゲ」

「結局ハゲかい」

「あ。ここで告知です。みなさ～ん。このお話の大和君はどのルートに進まれるかアンケートを取りたいと思います。選択肢は

一子ルート
まゆっちルート

クリスルート

と、今はこのルートで、アンケートを実施したいと思います

##第十四話## （前書き）

ああ、なのはが書けない・・・・・・・

##第十四話##

麗子
「あら、彰人ちゃん、お久しぶりね」

彰人
「はい、お久しぶりです、相変わらず、名前の通り麗しいですね。」

麗子
「あら、やだね。一年いない間にまたいい男になちゃって、」

彰人
「あはは、それはどうも。それで大和の部屋って分かりますか」

麗子
「大和ちゃんかい、大和ちゃんならこの一階の１０２号室だよ」

彰人
「あ、どうも。」

そして、俺は大和の部屋に入った、いや入ったはずだった。なぜか、それはそこには

クッキー
「だからね、大和。このゲームは・・・・・・」

なぞのロボットが居た、てか確かあれって九鬼財閥の、と俺が一度ドアを開けて閉めたのをそのロボにばれて、

クッキー
「なにやつ、曲者」

そう言うと、ドア越しから変な機械音が聞こえて

クッキー2
「さあ、私のサーベルの錆になりたいのは誰だ？」

うわ～、なんか違うロボが出てきたよ、とその時、さらにドアが開いて、

キャップ
「あ、クッキー。そいつは客だぞ。彰人すまねぇな」

クッキー2
「なんだ、そうなのかマイスター。先に言ってくれないか」

クッキー
「危うく、切り刻む所だったよ」

大和
「すまんな、急に呼んで、実はなこいつの紹介をしときたくて呼んだ。」

そして、部屋から大和の声がした。
まあ結局大和の部屋に入れてもらったんだが、

クッキー
「この紅茶は絶妙だよ、大和」

なんなんだ、このロボ？

キャップ
「よし、まずは、このロボットの説明な、クッキー自分をアピールしろ」

クッキー
「まったく、マイスターは急に言うんだから、さっきの襲いかかろうとしてごめんね。僕はクッキーて言うんだ、まあ一番の仕事は、マイスターの身の周りのお世話だね。あ、だけどあの秘密基地の警備も担当してるよ、その時は」

クッキーがそういうとさっきの機械音がなり、

クッキー2
「この姿になるのだ。まあこの姿のときの私は怒っていると思って構わない。」

彰人
「あはは、よろしく。俺は御剣彰人。」

俺が紹介すると、元の姿に戻り。

クッキー
「うん、ファミリーからよく聞いているよ、なんでもあのモモさんの彼氏さんとか。それにこれでも僕は九鬼財閥のハイテクメカだからね。」

彰人
「すまん、質問だが、なんで九鬼のロボをキャップが持っているん

だ？」

キャップ
「ああ、それは・・・・・・いうのだりぃから大和に任せる」

クッキー
「なんだとそれ！それじゃまるで僕が面倒くさいみたいな、もう」

クッキー２
「オシヨキが必要のようだな」

キャップ
「な、だから。簡単に変形するな」

と、そこの主従はほっといて、大和が説明してくれた。

大和
「まず、彰人。これは衝撃かもしれんが、あの九鬼英雄はワン子に惚れている。」

彰人
「大和、いきなり変な冗談は・・・・・・・真剣（マジ）！？」

大和
「ああ、そうだ。」

彰人
「それで、このクッキーがどう関係するんだ？」

大和

「まあ、簡単にいうと、九鬼がワン子にプレゼントしたんだが」

彰人
「まああいつのことだし、お世話ロボットは要らんわな」

大和
「ああ、さすが彰人、よく判っている、そして俺の誕生日の時、クッキーがプレゼントだった、」

ああ、なんか読めてきたぞ。

彰人
「それで、そのままキャップが気に入って、クッキーもそれで了承した、と言うわけか」

大和
「大体は、そうだ。てかそれが全部だ」

キャップ
「ううん、さすがに電撃系は痛いぞ。」

クッキー
「まだ、朝よりかはマシな電圧にしたから、それじゃ彰人。僕はこのマイスターを部屋に戻すから、今度から気安く呼んでくれ」

クッキー2
「ファミリーなのだからな」

なんで、こいつは変形すると同時に声まで変わるんだ。

彰人
「ああ、それじゃあな。キャップ、クッキー。」

そしてクッキー達は戻って行った。

彰人
「俺がいない間に、随分と面白いことになったな兄弟」

大和
「ホントだよ、まったく。これからは抑え役として頼むぞ」

彰人
「あはは、百代ぐらいはどうにかするよ」

大和
「それで、大体５０％は助かる」

彰人
「ホント、うちの嫁が苦労をかけた。」

大和
「ああ、ホント大変だった。」

彰人
「んじゃ、そろそろ。俺は帰らせてもらうよ。ココが破壊されかねんかもな」

大和
「冗談に聞こえないんだが」

彰人
「あはは、それじゃあな」

大和
「ああ、明日学校で」

そして大和の部屋を出て、玄関に向かったら、丁度忠勝がバイトから帰って来たらしく

忠勝
「お、なんだ彰人じゃねぇか。」

彰人
「うーい、バイトか？ご苦労さん」

忠勝
「なに、好きでやってることだ。あ、そうだ、てめぇケーキは好きか？」

彰人
「なにを突然。まあ好きだが」

忠勝
「ならこの1ホール持っていけ」

そういうと、コーヅーコーナーのケーキのホールを丸々もらった。

彰人
「おいおい、いいのか？」

忠勝
「勘違いすんじゃねえ、バイト先で貰い過ぎたんだ。まだもう1ホールあるから、腐らせるのもなんだ、だけどお前の川神院ならモモ先輩や一子もいるだろう、だからだ。」

彰人
「そうだな、なら遠慮なく貰っていくとするよ」

忠勝
「遠慮だ？お前には一生似合わねえよ」

彰人
「うっせ、じゃあな」

忠勝
「ああ」

そして俺はケーキを持ちながら、川神院を目指した。
そして、帰ってみると、門の前で百代が待っててくれた。

百代
「遅いぞ。まったく」

彰人
「すまんすまん。詫びでもないが、これがお土産だ。」

俺は持っていたケーキを見せるが

百代
「ああ、それはケーキか、ってそうじゃなくて、お前がいないとお

風呂に入れんだろうが」

なんてことを平然というかなこの彼女は。

彰人
「すまん、すまん。それでご飯は？」

百代
「ああ、大体の修行僧は食べていたな。食べていないのは、私達とワン子、そして未だに帰ってこないジジイとルー師範代だ。」

彰人
「あれれ、鉄爺たちは学校だろうけど、なんで一子も？」

百代
「ああ、今日は岳人と一緒に川瀬でトレーニングだそうだ」

彰人
「なるほど。ということは？」

百代
「二人っきりとも言えるな、おい」

そういうと、抱きつく百代。うむ、役得役得。

彰人
「そうか、そうかならば、三人が帰って来る前に、風呂はいろうか」

百代
「うむ、なんか私がどんどん幼くなっているような・・・・・」

彰人
「今頃ですか。まあ別に別々でも」

百代
「それは却下だ」

まったく、このお姫様は。

彰人
「それじゃ、早く院に入って、風呂入るか？」

百代
「ああ、さあ、いくぞ」

そして、俺らは川神院に戻った。

さらにそれから、時が過ぎ、他の三人も帰ってきて、このメンバーでの夕食となった。

彰人
「そう思えば、なんで鉄爺達、遅くまで学校に居たの？」

鉄心
「うむ、それはのう。・・・・・・ルー説明してやれ」

ルー
「そうだネ。これは彰人には関係あるかもしれないネ。」

彰人

「はい？俺に関係ある？」

鉄心
「うむ、時に彰人。中将殿と言えばわかるだうか？」

ああ、あの親バカの、そう思えば明日になったらクリスさんと、やらが来るんだな。てか、ホント写真でしか見たことがないからよく知らんが。

鉄心
「ホ、ホ、ホ。その顔を見るだけで良くわかるは。そうか知り合いだったのじゃな」

彰人
「まあね。鉄爺、あの人には色々と助けてもらってたから」

ルー
「いや、そうでも無かったね。なんでもアキト君の居るクラスが良いのだがって相談が今日あってネ。しかもその後学長が・・・・・・」

鉄爺
「ホ、ホ、ホ。・・・・・・」

おいおい、顔を背けながら笑うなよ。

一子
「一年間でなにをホントしてたの彰人・・・・・・」

そんなに呆れるかよ、

百代
「まあ、彰人の事だからいつの間にか何だろうだな」

なんですか、百代さんまで。

百代
「あ、そうだ。彰人、お前の今日のお土産はみんなで食べるんだろう？」

彰人
「ああ、さすがに俺は二人では・・・・・無理だよ」

一子
「え、なになに？」

おいおい、お前はホント犬だな、おい。・・・・・あれなんか百代っぽくなってないか俺の思考。

彰人
「それがな、島津寮に行った際、帰りに忠勝から貰ったケーキがあるんだ。しかも1ホール」

ルー
「おお、それは私たちモ貰っていいのかイ？」

あれ、案外ルー師範代ってスイート好き？

彰人
「はい、大丈夫ですよ。あと、鉄爺、勝手に箱を開けないように」

そう、俺が皆さんにこのケーキの出所を説明してる間になぜか鉄爺の手が箱に伸びていた。

鉄心
「ぬ。何時の間に気がついていたのじゃ」

彰人
「鉄爺が話しに入らないときは大体、碌でも無いことに集中している時だからね」

百代
「ジジイの癖に相変わらず、そこら辺はガキだな」

彰人
「まあ、それじゃ。ケーキを分けるぞ」

そして、1ホールのケーキはたった三十秒もしないうちに消えて無くなった。理由は

鉄心
「うむ、久しぶりの甘いものはいいのう」

一子
「ふひ～なんか眠くなってきちゃったわ」

ルー
「おいしかったネ」

なんかよく分からないけど、あの三人が良く食べちゃってまったく、

それで俺らは結局、午後の餡蜜もあったため、普通の量だが、それでも貴方達三人で食べすぎです。

##第十四話## （後書き）

アンケート実施中。

##第十五話## （前書き）

アンケート実施中。

さらになのはが書けないｏｒｚ

##第十五話##

Ｓｉｄｅ　大和

ピッピ、ピッピ、ピッピ。

今日も目覚ましの音で起き

京

「早く目覚めないと、愛しの妻からのキスがあります。」

大和

「う、うわぁぁぁぁ。起きるから起きるから」

なんて朝から目覚めが悪い。てか、

大和

「なんで、今日こんなに早いんだ京？」

京

「それはね、今日もただ大和の笑顔を見ていたいだけだったのに、なぜか早めの目覚ましをセットしている大和が悪い」

大和

「ああ、そうか。それじゃお休み」

俺は二度寝のためにセットしたためであるが、しかし

京

「起きようよ、ここまできたら」

まあ、京の言うことも一理あるがそこで俺は、

大和
「違うところならもう起きているがな」

なんて、口走ってしまったため、

京
「え、何処・・・・・・見せて！」

ああ、これは

大和
「すまん。起きる」

俺の負けのようで、俺は観念して起きた、そう今日は金曜日である。

Ｓｉｄｅ　ｏｕｔ

百代
「♪～♪」

いつもの如く、百代は俺の腕にべったり、ちなみに左腕に。右は利き腕なので俺が拒否したため、左腕に抱きついている。

一子
「あはは、お姉さま。今日も彰人にべったりね」

百代
「ああ、一子。お前も好きな奴が出来れば分かるさ」

一子
「あはは、そんな日来るのかしら?」

彰人
「いつかは、来るだろうよ。てか百代。腕にしがみつくのはいいが、頭を肩に乗せるのは辞めてくれ。」

百代
「ええ～。いいじゃないか。帰ってきたらなぜか、弟と同じくらいだった彰人の背が、私よりもでかくなったと、実感しているだけだぞ」

いやいや、それ自体なにも悪くないが、通学途中の生徒の視線が、と俺が周りから視線の串刺しにあっている所に前で、談笑している大和達を見つけた。

彰人
「お～い。」

俺が後ろから声をかけると、奴らも気付いたらしく

キャップ
「ういー、おはようさん。」

モロ
「相変わらず、すごいね」

いやいや、何だモロその言い方だと俺も共犯のようじゃないか。

岳人
「おい、ワン子。今日はタイヤ引いてないんだな」

岳人が指摘するが、そんなことは勿論無く

一子
「やめないでよね」

そういうと、着けていたリストバンドを外してモロに持たせてみた

モロ
「う、うわっ。お、重いねこれ」

まあ、モロの体系から見ればそんな感じか。

京
「熱々のお二人さん」

百代・彰人
「「なんだ？」」

大和
「姉さん達、少しは反論しようね」

彰人
「反論する要素がねえよ、それで京どうした？」

京
「あれ」

そういうと、全員で、橋の下をみると

ゾロゾロ

なんか一杯の不良さんが居ました。

一子
「あ、あれ、この前彰人が倒した奴らだわ」

岳人
「それに、もう片方はモモ先輩が倒した方じゃないか。」

おうおう、これはこれは見た目でも五十人はくだらないな。

彰人
「はぁ～、だりぃ」

百代
「まったくだ。最近は彰人がいるから、まったくストレスが溜まらなかったのに。こんなのを見たら」

彰人
「殲滅だな。一対一じゃない奴らには」

百代
「手加減はいらいな」

俺らはそう言うと、橋から飛びおりて、そいつらの集団の目の前に下りた。

不良A
「ああん、って、てめらぁぁは！！」

不良B
「この前の借りを返すぜ、このやろう」

不良C
「今回はな、いろんな所から集めたから、ざっと百人ぐらいはいるぜ」

不良A
「ひゃひゃひゃ、てめぇらこれで終わりだな。ああん？」

彰人
「足りねえな」

不良B
「ああん？」

彰人
「足りねんだよ、お前ら、俺らを止めるなら軍隊でも持ってこい。行くぞ百代」

百代
「ああ」

Ｓｉｄｅ大和

彰人達が橋から落ちて、俺らも直ぐにそこに向かった。既にギャラリーは一杯だった。まあ最近じゃ彰人も有名だからな。
そして、喧嘩と言う、殺戮が始まった。最初は彰人が、周りに居た十人を吹き飛ばす、そしてそれに答えるような歓声。そして、次は姉さんの攻撃、姉さんは力の塊の如く、相手を吹き飛ばしていく。
一方の彰人はまるで、神が人間を見るような、動きをしていた。まるで俺に向かうことは愚かと、言っているかのように。そして終わりに近づいた時、俺は少し下がった。その時人にぶつかってしまい。

大和
「あ、すいません。後ろも見ないで」

俺がそう言うと

軍服の人
「なに、私も不注意だった、しかし俺はなんとも美しい戦いだったな。さすが日本だ。先の君の謝り方、そして、そこに見えるのは富士やま。やはり日本に来て正解だったようだ」

その人はそう言うと、何処かに消えた。一体なんだったんだろう？

Ｓｉｄｅ　ｏｕｔ

残り、数人の所で、

百代
「いい加減にしろぉぉぉぉ」

その百代の一言プラス拳で、すべての不良を一応命に別状無く倒した。百代は気絶、俺は間接という間接全部を外し、そして終わって見ると、歓声が凄かった。しかし

百代
「う～～～。彰人との朝のひと時が・・・・・・」

一人、終わって唸っている人も居たようだ。そして、俺らはいつものように学校に向かっていた。その時大和が

大和
「なんか、さっきへんな人にぶつかってな」

彰人
「変な人？」

モロ
「なになに、それだと、よくあるゲームだと転校生だったりするけど」

大和
「いやいや、ただのおとなだったから」

岳人
「なんだ、大和とそのおっさんのフラグがたったのか」

京
「そのおっさん何処・・・・・・コロスコロスコロス・・・・・」

モロ

「だ、だれか。救急車かパトカーを、人殺しが起きちゃいそうだから」

彰人
「お～い、そろそろ行こうぜ。」

岳人
「ご、ご苦労様でした。兄貴、姉貴」

なんか岳人が怖がっているが

大和
「あれ、姉さん。いつもならこんな集団の喧嘩の後は大体女の子をつかまえ「さ、ガッコ行こうか」

ワザとらしく百代が誤魔化したので

彰人
「な、兄弟。なんだって？」

俺は再度確認で聞いた。

百代
「や、大和、お前、もし言ったら「百代？」・・・・・・うん」

よし、これで百代は黙ったと。

キャップ
「なあ、あのモモ先輩が黙ったぞ」

岳人
「さすがに彰人のあの笑顔には勝てないだろう」

モロ
「あれ、ホント怖いもんね」

京
「く、く、く。こうしてモモ先輩は調教されました」

一子
「あれは鬼よ」

なんだ、お前らも俺はただ、笑顔でいるだけなのに

大和
「え、え～とだな。お前が帰ってくる前の一年は大体、終わると女の子を捕まえて、ハグしたり、お姫様抱っこをしたりと、色々と・・・・・」

百代
「な、や～ま～と。「うるさいよ」・・・・・・うー」

彰人
「さて、百代、反論は?」

百代
「な・・・・・・い」

彰人
「確かに、一年置き去りにしたのは、しょうがない。ただでさえ女

癖が多少あったから見逃そう。」

百代
「え、ホン「ただし」ト・・・・・・」

彰人
「一週間、抱きつき禁止で」

俺はそう言うと、先に学校に向かった。

Ｓｉｄｅ　大和

え～と、我が兄弟が去った後、すぐに姉さんは崩れた

百代
「嘘、嘘、嘘、嘘、・・・・・・嘘、嘘。」

なんか、復唱しているし。

モロ
「抱きつきを禁止されただけで、これって」

キャップ
「久々の彰人デススマイルを見たけど相変わらずモモ先輩には効果抜群だな」

一子
「あはは、お姉さま。彰人が帰ってきてから、ずっと手を繋いでいるか、腕に抱きついているかだったしね～」

岳人
「なんだ、そのバカップルは！！」

岳人が半分羨ましく、半分嫉妬のような言い方をしている。

京
「けど、愛し合うものならそれは当然だと思う、ね大和？」

大和
「なぜ、そこで俺に振る」

モロ
「だけど、さすがに彰人も怒ったかな？」

大和
「まあ、そりゃな、一応彰人も独占欲があるんだろうな」

京
「そこも愛されてる証拠」

そして、その言葉に姉さん復活

百代
「そうか、そうか。彰人はそういうことだったのか、ならば、私はここに宣言する、もう女の子とは遊ばない。私は彰人一筋だからな」

おお、ガッツポーズしながら復帰したが

大和
「それを、どう伝えるかだよ、姉さん。」

百代
「安心しろ、今日はラジオがある。そこで私は宣言するぞ」

岳人
「おお、これで俺もモテる」

他のファミリー全員
「「「「「「無い無い」」」」」」

岳人
「ふ、言ってやがれ。俺も彰人のようになってやる」

そう言うと、走って行ってしまった。

一子
「あ、競争。なら私も」

キャップ
「風の如く、俺も行くぜぇ！」

なんか後二人ほど、走っていったよ。まったく

京
「そう思えば、お二人さんの新婚具合はどうです？」

すこし、ザマス言葉で話す京

百代
「そうだな、一緒に寝て起きて、鍛錬して、食事して、お風呂入っ

ての繰り返しだな」

京
「おおこれを聞く限り、すでに私も大和も新婚っぽくなってきてい
「いないからな」

なんて事を、言いやがる。

百代
「こんな、弟だが頼んだぞ京」

京
「はい、義姉さん」

あ～あ、なんかそっちはそっちで、芝居してるし

モロ
「そろそろ、行かないと遅刻だよ」

モロの言葉に俺らはダッシュをした。

##第十五話## （後書き）

ああ、スランプだ。

##第十六話##（前書き）

十六話です、はい

##第十六話##

さてはて、百代を置いて教室に入った。そして、一番前の席に座る。
最初に

真与
「あ、御剣君、おはようです」

委員長が挨拶をくれた。

彰人
「ああ、おはようさん」

千花
「あれ、今日はナオっち達とは別なの、まあ風間君たちもそうだけど」

彰人
「ああ、先に着ただけだ、たぶんもう直ぐ」

大和
「先に行くのは酷いぞ、兄弟」

彰人
「ほらな、すまない。それで百代は？」

大和
「ああ、かなり効いていたぞ」

そんな風に大和はこちらに直ぐに話の輪に入るが京はそのまま読書に、今は竜馬が行くか。俺も今度借りようかな。モロはゲーム仲間の所にか。しかし、なんでだ。なぜか今日は皆少し浮かれているような・・・・・？まあいいか

彰人
「それなら、良し、今日の集会で遊ぼうと」

大和
「ホント、貴方は鬼ですか」

その時予鈴が鳴った。

真与
「み、みなさ～ん。早く席に着いてくださ～い」

そう言うと、みんなは姿勢正しく座り

千花
「ちょっと、そこのヲタク、早く起こしなさいよ」

岳人
「おい、スグル」

スグル
「あ、ああ、すまんな昨日のG線が効いた」

このように普段では考えられない連携を見せるクラスであった。そしていつものようにドアが開き

小島
「委員長、挨拶」

真与
「起立、気をつけ、礼」

そして、朝のＨＲが始まった。

小島
「皆、今日は新しい学友が出来る日だ、そのことはわかっているな」

ああ、そう思えば今日はあの中将の娘さんが来る日か、っと思いながらも小島先生はドアの方を開けて入ってきたのは

中将
「グーテンモルゲン」

中将でした、そして皆が騒ぎ始める。

大和
「あ、貴方は」

中将
「やあ、君か、さっき振りだね」

モロ
「ホントに転校してきちゃったよ。」

岳人
「てか、完全におっさんだろうが」

真与
「こ、こら～。身体的なことで何か言うのはいけないことですよ～」

千花
「いやいや、それよりもすべてが突っ込める対象のような」

そんな感じで騒いでいると

小島
「ええい静まらんか！！」

鞭の音に全員が静まる。そんなにあの鞭が怖いのか？

小島
「この方は、保護者だ。それでご息女は？」

中将
「ご安心を娘は時間には厳密です」

大丈夫かな、この人の娘ってことは・・・・・・

中将
「グラウンドを見てみるがいい！！」

大和
「な、なんだありゃ」

その時窓側の大和が変な声を上げた、さすがに他の窓側の生徒も口があんぐり状態だったため

小島
「うむ、なにかあるようだな。席を立ってよいぞ」

その言葉に全員がグラウンドを見ると

岳人
「確かに、乗り込んできたな」

モロ
「うん。確かに乗り込んできたね・・・・・・馬で」

そう、モロが説明したとおり、馬で入ってきたきた、しかしそれよりも大声で

男子の大部分
「「「「「「「「「「大当たりなんですけど!!」」」」」」」」」」」」」」」」」」」」

そう、容姿が綺麗な為、これには男子達にはうれしいようだが

キャップ
「あはは、あはは、馬か、馬かよ。おもしろいなぁ～あいつ」

一人壺にはまっているキャップが居た。しかし、馬かよ馬。

千花
「あのう、道路とか見ました？」

中将

「ああ、車が走っていたな。しかしテレビでは馬だったのでな」

千花
「それはたぶん、時代劇かと」

彰人
「中将殿・・・・・（↑ドイツ語）」

中将
「ああ、彰人君。久しぶりだね（↑ドイツ語）」

俺にも気さくに挨拶をしてくれたが・・・・・これはたぶんてか、間違いなく日本を勘違いしている外国人のいい例ではないかな？

「私の名は、クリスティアーネ・フリードリヒ、これより皆と同じ寺小屋で今より世話になる！！」

モロ
「寺小屋って・・・・・」

クリス
「しかし、馬登校は私だけなのか？」

そして、そこに勘違いだと解る前に逆に悪化させる存在が来た。

英雄
「ふはははははははははははは」

千花
「うわ、よりにもよって、こんな時に」

そう、そこには

クリス
「おお、あれはジンリキシャ！」

英雄
「あずみ、飛ばせ！！我は多忙であるがそれを理由に遅刻など王として不覚だぞ」

あずみ
「はい、英雄様☆～」

英雄
「ん？なんだあれはあずみ」

あずみ
「はい、英雄様☆。なんでも今日はＦクラスに留学生がくるらしく」

英雄
「は、は、は。初登校にして、馬による登校とわな」

クリス
「私はクリスティアーネ・フリードリヒ。馬上にて御免」

英雄
「我こそは九鬼英雄、いつかこの世界を統ずるものが故、その目に焼き付けるがいい。」

そう言うと、あずみと共に消えていった英雄であった。

中将
「さすが、日本。まさか登校に人力車でくる生徒がいるとはさすがサムライの国」

クリス
「あ、父様」

そして、その留学生は中将に気付くと、馬に乗りながら手を振っていた。

中将
「ああ、我が娘、まるで凱旋門のように凛々しい」

そして、いいかげん、痺れがきれたんだろう。

小島
「馬からは下りてきなさい」

うちの担任のたぶん呆れた顔が目に浮かんだ、てかそうだった。
そして、馬から下りた、ちなみにその馬の名前がまたもやユニークだった。そして、教卓の前に立ち、黒板にドイツ語と、カタカナで

クリス
「はじめまして、ドイツのリューベックから来ました。クリスティアーナ・フリードリヒです」

小島
「ああ、すばらしい日本語だな」

ああ、中々な日本語だなおい。

クリス
「はい、リューベックの日本友達と話していたら自然と覚えました」

小島
「うむ、よいコミュニケーションの取り方だ」

そして、先生が教卓の上に立ち

小島
「お前らも、色々聞きたいことがあるだろう。今回は特別に挙手による質問を許可する。慎ましくな」

そう言うと、先生は端に言った。たぶん疲れたんだろうな。

岳人
「はい、はいっ！！」

盛大に手を挙げたのは岳人でした。

岳人
「え、え～と。クリスてぃアーネ？」

クリス
「出来れば、クリスでお願いする」

岳人
「それではクリス・・・・・・彼氏とかは居るのかな」

中将

「そんなものいるわけが無いだろうが！！」

中将殿が、切れてそれに反論。一同騒然。

彰人
「って、中将殿！！（↑ドイツ語）」

中将
「あ、すなまい。」

俺の言葉にさすがに拳銃を出そうとする中将を止めた。てか、俺がドイツ語で話してなんでドイツ語で返さん、この人は

クリス
「ああ、父様の言うとおり、そのような関係はいない」

岳人
「あはは、そ、そうなのか」

あ～あ。さっきの中将殿の言葉と言動で、内の半分の男子が瀕死状態。

中将
「それに、そのような輩居た場合、私は軍による殲滅作戦を開始するだろう」

クリス
「父様は、私事では軍を使わない、すばらしい軍人だ」

ヨンパチ

「さっき、めっちゃ使っていそうだったぞ」

真与
「はいです。その将来の夢とかはなんですか？」

クリス
「私は父様のようなすばらしい軍人になるつもりだ」

と、その時にチャイムが鳴った。これで朝は終わりだろう。

小島
「それでは、一時間目は私の授業だからそのまま質問でいいだろう。それではすいませんが保護者の方は。」

中将
「ああ、それではクリス、もしなにか会ったらジェット機を飛ばして駆けつけよう。」

ああ、やはりこの人は親ばかだ、と思った時

中将
「まあ後はそこに居る彼、御剣彰人君を頼りなさい。彼は私が認める男だからな（↑ドイツ語）」

って、なんてことを言うか

クリス
「はい、父様。それでは」

小島

「馬も回収してもらいますよ」

そして、あの親ばか兼中将殿は消えて行った。そして休み時間さすがの留学生に生徒は集まった。まあ当然だろうな、俺は先にファミリーに囲まれたから微妙だったが、しかしその輪からその留学生は出てきて、俺の方に来た。

大和
「どうかしたのか？」

彰人
「さあな。」

と、知らばけるが

クリス
「貴方が御剣殿？（↑ドイツ語）」

おお、いきなりドイツ語かよ、日本語が出来るんだから。そっちで話してほしいものだがしょうがない。

彰人
「ああ、俺が御剣だ。てかさっきの日本語でいいぞ。俺も日本語が母国語だから、そっちの方が話しやすい（↑ドイツ語）」

俺らの会話に、一同は驚愕。

大和
「おいおい、兄弟、何時の間にドイツ語をマスターした」

キャップ
「やっぱ、冒険はいいな。俺も早くいきてぇ～」

クリス
「そ、そうか。そのなんだ、ホントドイツ語がうまいのだな。マルさんから聞いてはいたが」

彰人
「マル？・・・・・ああマルギッテのことか」

クリス
「ああ、そのなんだ一応挨拶はしとこうと思ったのだ。父様とマルさんがお世話になったとのことだったからな」

彰人
「ああ、別に気にするな、って言っといてくれ」

俺はそう言うと、廊下に出た。

Ｓｉｄｅ　大和

クリス
「はあ、あれが御剣殿か、なんか想像と違ったな」

そんな言葉が出てきた、そして、その言葉に反論したのは、ワン子だった。

一子
「なによ、彰人になんか文句でもあるの、クリ」

クリス
「な、クリとは、なんだ」

なんか喧嘩じみてきたな。

一子
「む～」

クリス
「なぜ、怒っているのか解らないが。さっきの言葉は父様が彼は一人で私の部隊を壊滅に追い込んだ悪魔だと、最初に聞いていただけだ。」

そして、一同

「「「「「「「「「「あ～」」」」」」」」」」

全員納得。

大和
「ほら、ワン子。いきなり絡むのは良くないぞ」

一子
「う～だって～」

京
「はいはい。良し良し」

そして、京が慰め係りに入った。と、その時

クリス
「ワン子？」

真与
「はい、ワン子ちゃんはワンちゃんそっくりなんです。だから「ワン子なんだよ」はい、そうですよね」

クリス
「えっと、」

大和
「ああ、俺は直江大和。」

そして、俺が最初の自己紹介がトリガーの如く、次々と自己紹介が始まった。

##第十六話##（後書き）

アンケートまだまだ、実施中、ちなみに現在だと、ワン子ルートの注文が来ました。

みなさんの意見待っています

##第十七話## （前書き）

わーい、十七話。

##第十七話##

俺がトイレから、戻ると、会話の輪にはクリスが中心になっていた。
てか、簡単な自己紹介になっていた。まあ、これで少しは楽しくなるのかな？

千花
「それで、ここに来る前にはどこか日本のところに行ったの？」

クリス
「ああ、京都に行った。そしてらテレビと同じところが在って感激した。」

岳人
「それ、ぜってぇ映画村だ」

クリス
「それに、この日本のプロレスラーは負けると切腹するとは、さすが武士の国だな」

千花
「いや、いや、そんなことはしないから」

真与
「実際はしませんよ」

なんか、ホントリューベックの日本のお友達に色々遊ばれていたらしい。

クリス
「それに、日本のＲＩＫＩＳＩのＫＩは気を出すとか」

モロ
「いやいや、それはネットでのコラージュだから」

彰人
「え、気ぐらい」

大和
「はいはい、兄弟は少し黙ろうか」

俺はそのまま大和に引っ張っていかれた。
そして、チャイムが鳴り、先生が入ってきた。

小島
「それではこれより、自己紹介を始める」

あれれ、さっきもしたような・・・・・・

真与
「あのう、小島先生、さっきの休み時間に少し紹介はしてしまいましたよ」

小島
「ならば、もう一度だ、それでは、始め」

そして、もう一度自己紹介が始まった。

真与

「え。えーと甘粕真与です、ここで委員長をしています。」

最初は委員長、まあ名前の順だとこうだろうな。そして、普通に紹介が終わっていき、普通でない奴の番が来た。

岳人
「俺様は、島津岳人。見よこの筋肉を！！」

と、その時俺と先生が同時に

二人
「「このバカが」」

先生は鞭、俺は気弾を岳人に当てた。

岳人
「ぐ、hグバ！！！」

そして、岳人意気消沈。ほかの生徒は爆笑。

そして、何気なく終わりそうになった時、一子がクリスに質問した

一子
「ちょっと、あんた。なんか武道はやってないの？」

クリス
「私か、私はフェンシングを少々やっている。父様から騎士道を教えてもらっている」

と、クリスの発言に一子はなんか喜んだ様子で

一子
「先生、これからこのクリの歓迎会をしたいと思います」
ああ、なるほど“歓迎会”ね。ここはどこの組だよ、まったく
小島
「まったく、血の気の多い奴め。」
先生はわかったらしく、そしてクリスも
クリス
「歓迎会・・・・なるほど、歓迎会か、」
笑い出した。ああ、こいつの掴めたらしいな
一子
「それなら、勝負よ」
そして、一子のワッペンが床に置かれ。
クリス
「こ、これは」
大和
「これは決闘システムだ、ようは果し合いだ」
クリス
「なるほどな。挑まれた以上勝負は受ける」

なんで、果し合いで意味が通るんだろうなまったく。そして、クリスもワッペンを置いた、その時

鉄心
「その決闘は、グラウンドを使いがよいぞ」

なんで、いるんです貴方。

一子
「あ、じいちゃん」

小島
「が、学長！？」

鉄心
「うむ、勝負とはときにして言葉よりも多く語るもじゃ」

そして、学長許可のもと決闘が始まった。観客は２－Ｆ全員だ。

鉄心
「それでは両者ともに始めい！！」

二人とも刃の潰した武器を持っている、一子は薙刀、クリスは騎士らしいレイピアだ。てかこの学校の教室になんで、あんなもんが飾ってあるんだよ。

一子
「はぁぁぁぁぁぁぁ」

一子の先制か、さすがは一子。スピードも中々だ、しかし

クリス
「せいっ、せいっ、せい！！」

それを凌ぐあいつも相当だ。

一子
「中々やるじゃない、クリ」

クリス
「ああ、お前もな犬」

そして、二人が交錯する中、

一子
「ならば」

そう言うと一子は薙刀を回し始めた。これは本気のようだ、クリスも少し戸惑っているが、

一子
「行くわよ、川神流奥義山崩し！！」

足払いの技だか、相手の武器を考えれば正解かな、

クリス
「あまい！！」

しかし、それを見越したの如くクリスは飛んだが、さらに

一子
「今よ、川神流奥義大車輪！！」

なるほど、空中にいるからガードが出来ないと考えての大技かだがそれでは

クリス
「それを待っていた。せいっ！！」

そうだろうな、確かに、さっきの足払いで相手が後ろに下がれば一子の勝ちだったが、さっきのはただ飛んだだけ、だから相手との間合いは変わらない、だから普通にレイピアが届く距離だ。

一子
「え、ちょ、ちょ」

クリス
「はっ！！」

そして、勝敗は・・・・・・

鉄心
「この勝負、クリスティーアネ・フリードリヒの勝ちとする」

一子
「え、ちょ爺ちゃん。今のは本気じゃないからもう一度」

彰人
「こら、一子。いつでも真剣勝負だろうが、今回はお前の負けだ。」

一子
「う～」

と、一子が唸っている時、

クリス
「その彰人殿、申し訳ないが・・・・・・」

なぜか神妙な面持ちでこちらを向き、

クリス
「私と勝負してくれ」

と、頭を下げられた。

彰人
「え、だ、だけど」

鉄心
「良いではないか彰人よ、のう小島先生？」

小島
「ああ、彰人。挑戦者いるのに逃げるのは男らしくないぞ、男なら勝負を受けるべきだ」

ああ、なんか面倒なことに

一子
「え、なんでクリが彰人と勝負するのよ、普通私でしょ」

クリス
「犬は負けたのだから私が優先だ」

なんとも子供染みてるな。

彰人
「まあまあ、一子。お前は今度特訓に付き合ってやるからな。」

一子
「ホント？・・・・・・わーい！」

彰人
「しかし、なんで、俺なのかな？」

クリス
「はい、父様にもそして、マルさんからも一度は戦ってみなさいと、言われていたので」

てか、待てよ。なんでこの子俺には敬語なんだ？

千花
「なになに、今度は御剣君と勝負？」

岳人
「おいおい、うちのワン子に勝てたぐらいでそれはどうよ？」

大和
「だけどワン子に勝つ力はあるんだな。」

京

「あとで、励ましにいこう」

そう言う京の手には“愛犬の育て方基本編”があった。

モロ

「なになに、失敗したら、慰めて気合を入れなおす、なるほどね。」

ヨンパチ

「けどよ、彰人は武器とか使うのか」

ヨンパチの質問にファミリー

ファミリー

「「「「「「いらん、いらん。」」」」」」

彰人

「おい、お前ら、勝手に武器を使わない設定にしているんじゃない。」

大和

「なんだ、兄弟。武器を使うのか」

彰人

「ああ、そうだ。今鉄爺が取ってきてくれている。」

京

「一応、ワン子の仇よろしく」

京はファミリーの事になるとホント普通だな、いつもはしゃべらんのに。と、その時鉄爺が来た。

鉄心
「うむ、彰人。この模擬刀ならば、どうにかなるじゃろう。」

そして、今度は梅先生の合図で始まった。

小島
「それでは二人とも、準備はよいか？」

彰人
「俺はいいが、大丈夫か連戦で？」

クリス
「ああ、大丈夫だ」

そして、試合が始まった。最初はクリスのレイピアの突きである。
ふむ中々だ、しかし遅いな。

Ｓｉｄｅ　大和

そして、試合が始まった。ワン子は少し腹にダメージがあるらしいがこれは見ときたいとのことで座って見ている。

一子
「う～。今度こそ勝ってやるあのクリに」

京
「良し良し、それじゃあ彰人の試合でも見て様ね」

キャップ
「だけどよ、さっきからずっと彰人避けてるだけじゃん」

モロ
「まさか、反撃できないとか？」

岳人
「おいおい、あのモモ先輩レベルがそうなるかよ。」

モロ
「てか、まだ鞘から刀すら抜いてないじゃんあれ」

羽黒
「なに、あれ。超スピードなんですけど」

真与
「ホントですね、クリスさんのレイピアも相当早いんでしょうけど、それを避ける御剣君も相当ですね。」

そして、さっきまで真ん中で審判をしていた学長がこっちにきた。

鉄心
「ほ、ほ、ほ。彰人、まったくのう」

唯、唯、笑っていた。

岳人
「だけどよ、なんで彰人はあのクリスのお父様と知り合いだったんだ？」

キャップ
「安心しろ、それは今日の集会で問い詰めることになっているから」

モロ
「あはは、大変だな彰人も」

大和
「お、なんか動きがあったぞ」

俺はその時彰人の顔が妙に冷たく見えた。

Ｓｉｄｅ　ｏｕｔ

クリスの猛攻をかわし、さすがにクリスも疲れているようだ。

クリス
「はぁ、はぁ、はぁ。」

彰人
「なるほど。さすがは中将殿の娘だ。さすがの俺も冷や冷やしたぞ」

クリス
「しかし、貴方は私の攻撃を簡単に避けている。どういうことだ?」

彰人
「俺も質問だが、なんで俺に対して敬語なんだ?」

クリス
「ああ、それは父様が認める者だからだ。父様に認めている方を私

は尊敬する。それは私の尊敬する人は父様だかな、はぁ」

彰人
「なるほどな。まあいいや。それじゃ終わりにするね」

クリス
「え！？」

そして、俺は間髪入れずに

彰人
「奥義、陽炎」

そして、クリスのレイピアは上空に飛んだ。そして、俺は“刀を鞘に戻し”梅先生に終わり言った。

彰人
「先生、相手から武器を取りましたから」

小島
「あ、ああ。この勝負、御剣の勝ちとする」

そして、一時間目のチャイムが鳴った。

##第十七話## （後書き）

アンケートはまだやってますよ、

##第十八話## ##（前書き）

気付きましたか、もう一つの作品のオリジナル技をここでも使ったのを

##第十八話##

勝負が終わり、俺らは教室に戻った。そして女子はクリスの元へ、男子は俺のもとにきた。

ヨンパチ
「さっきの技、すげぇなお前」

などなど、賞賛の声と

モロ
「相変わらずのチートだね」

岳人
「なんで、俺様の方が筋肉ありそうなのに、なんなんだお前はよ」

お前は何者だって感じの声だった。

大和
「まあ、彰人だしな」

彰人
「おいおい、結局それに辿り着くのかよ。てか一子」

一子
「ん？なに彰人？」

彰人
「お前、大車輪、完成したんだな」

一子
「もちろんよ、一年を甘く見ないでよ」

そして、またもやクリスが俺のところに来て

クリス
「マルさんが言っていたことが分かった気がする。私はまだまだのようだ、その事に関して今回の勝負はありがとうと、言わせて貰おう」

彰人
「気にするな、俺的には、もう少し骨が着いてから勝負してほしかったな」

そんな感じで、俺らは授業に入った。
そして、時間は過ぎてお昼の時間になった。今日は百代がラジオのため、先にパンを買っておいた。

大和
「しかし、彰人がこの昼が一人ってのは珍しく思うのは俺だけか」

一子
「そうね。大体お姉さまが隣にいたからね。」

モロ
「それに、中学の時も、こんな感じに食べていたし」

今日はモロもこっちで食事であった。さらに

岳人
「ったく、一体なんで内の購買はってなんで彰人がパン持っているんだよ。」

岳人もこっちのようだった。キャップは屋上で寝ているらしい、なんともキャップらしい。京は一応こっちにいるがあまりしゃべらない。

彰人
「ああ、今日か。今日は百代がラジオだから、先にクマちゃんにパン頼んどいた。てか頼んでもらった」

岳人
「なるほどな。」

大和
「それでは俺らも食べるか。」

そして、食べ始めると、放送がかかった。

『さて、今日も始まりました、ＬＯＶＥかわかみ、パーソナリティは、子供は宝、大人は唯の肉の塊。井上準と』

『人生、喧嘩上等、諸行無常、彰人一筋、川神百代だ』

彰人
「ｇ、ブホっ！！」

さすがに吹きそうになった。

大和
「あ～あ、姉さん必死だな。これは」

京
「愛で切れば痛くないかな～」

彰人
「なんだ、それは。どこのオープニングだ」

モロ
「あはは、だけど、最近じゃ、彰人のアンチも無くなってきてるよ。それよりも逆にファンクラブが・・・・・・」

そして、耳をまた放送にかたむけた。

『いや～、ホント、そのニュースは衝撃的でしたね。ホントに』

『うるさいぞ、このハゲ！』

『な、なんか今日も機嫌が悪いご様子で、それではお便りに行きます。え～と、モモ先輩おめでとうございます、なんですかこれ？』

『ああ、私と彰人を祝ってくれる人もいたのか、聞いてるか彰人～』

なんですか、この鬼畜放送は。

『さらにさらに、私ども、モモ先輩女子ファンクラブ一同はこの度の御剣彰人殿にモモ先輩を預けることをここに宣言します、モモ先輩夢をありがとう・・・・・なんなんだ、このラジオは！！』

ああ、俺もそう思うよ。そして

モロ
「く、く、く、く。」

一子
「♪（↑例に※省略）」

大和
「あはははははは」

彰人
「大声で笑うな。」

岳人
「しっかし、ホントにモモ先輩のファンは性別が関係無かったようだな。しかしこれからは俺様の」

大和・彰人・モロ
「「「無い無い」」」

岳人
「いつも思うが、お前ら容赦がねぇ！！」

『まさか、こんなお便りがくるとはな。ならば私もここに宣言しよう、私は今後一切女の子と遊ぶことを辞める。そして彰人にすべて捧ぐ！！』

声高らかに、校内全域に広がった、バカップルの誕生である。

『はぁ～、もうなんかこのラジオがよく分からなく『それでだ』って俺のコメントすらカット』

ああ、ホントにすまない。今度なんか送ってやるからな、井上準。

『聞いているか、彰人、頼むから朝に言った、抱きつき禁止を解除してくれ～～～～～～～～』

はぁ～しょうがないな～。

彰人
「なあ、兄弟」

大和
「な、なんだ、校内一のカップルさん」

彰人
「うるさいぞ。お前は俺の舎弟だろうが、それで百代の携帯に連絡してくれ」

大和
「あ、わかった。あれでも姉さん」

彰人・大和
「「女の子だかな」」

そして、大和の携帯で、連絡をした。

『ん？なんだ私の携帯か、ハゲ適当に進行して置け』

『そこで、俺に振るんですか、まあいいやそれでは次のお便り・・・・』

そして、百代がメールの中身を確認すると、そこには

“解除する”

と、たったこの一言があった。そして

『すまん、今日も私はこれで出てく』

『え、ちょ、モモ先輩。まだ半分も』

『うるさい』

そして、その言葉の直後

『“ボガ”』

なんともバイオレンスなラジオだった。

『それでは音楽を流すぞ』

と、その言葉が出た瞬間、教室のドアが開き

百代

「彰人～～～～～～～」

百代が抱きついてきた。ああ、バカップル決定だな、だけど

百代「♪～♪～♪」

なんかそれも悪くないかな。

モロ
「あの、お二人さん」

岳人
「おいおい、二人とも。」

彰人
「はぁ～。ほら百代」

百代
「まったく、彰人が朝、あんなこというからいけないんだ。私から彰人の抱きつきを無くしたら、魚に水を無くすようなもんだぞ」

京
「しょうもない」

一子
「あれ、なんでお姉さまは彰人に抱きついてるの？」

大和
「まあ、一件落着かな・・・・・・しかし」

千花
「だから、言ったでしょあの二人」

羽黒

「ホントだ、チカリンすごくねえ」

真与
「ホント、仲がよろしいんですね」

スグル
「はぁ～、確かに愛は良いだろうが、なぜだ、なぜここは一次元多いんだ」

ヨンパチ
「あの二人はあの後、やっべ、トイレ行ってこよう」

なんかもう、混沌だな、うん混沌。この後、更なるギャラリーが増えたのは言うまでもない、ちなみにクリスの感想

クリス
「すばらしい、カップルでないか」

と、応援された。
そして、時は既に放課後。あの後、祝福、祝福、嫉妬と、こんな感じの目で俺は見られ、百代は満足して、教室をでて、ファミリーにはすでに、

大和
「それじゃ、秘密基地でな旦那」

こうである。まあどうせ、このまま俺も百代の所に行くんだがな。
その時、廊下で、鉄爺とすれ違い、そして

鉄心

「ひ孫はいつじゃ？」

彰人
「鉄爺ぃぃぃぃぃぃぃぃぃ！！」

鉄心
「ほ、ほ。ほ。それでは彰人。」

まったくあの爺さんは。

鉄心
「お、そうじゃった。彰人」

彰人
「うん、どうしたの鉄爺？」

鉄心
「今日は確か、お主らの集まりの日じゃったの。」

彰人
「あ、うん。そうだけど」

鉄心
「すまんが、それよりも先に内の門下生を見てやってほしいのじゃ」

彰人
「はい？これまたなんで？」

鉄心
「ほ、ほ、ほ。それはのう。お主の武にでも惹かれたのだろう。そ

れで、あのルーの試合以降お願いが殺到してのう。それに」

彰人
「それに？」

鉄心
「師範代からも、来ておるのでのう。」

なんか、面倒だな、てか、

彰人
「けど、鉄爺。俺、川神流じゃないんだけど」

鉄心
「気にするな、どうせ彰人ではどの輩でも目で追うことはできぬだろうしの」

彰人
「それなら、俺が見る理由の」

鉄心
「そういう事での、帰ったら早々頼んだぞ」

彰人
「え、ちょっ！鉄爺」

俺が、そういう時にはすでに遅かった。

百代
「あれ、彰人じゃないか？」

そして、俺が迎えに行くはずだった、人は既に降りてきていた。

百代
「どうかしたのか？」

彰人
「いや、なんでもない。さ、帰ろう」

百代
「ああ♪」

そう言うと、学校の廊下というのに、既に腕に抱きついている。この覇者

彰人
「そう思えば、秘密基地はクッキーが守っているんだっけ？」

百代
「なんだ、彰人。すでにクッキーを知っていたのか」

彰人
「まあな、大和から聞いた」

百代
「む、あの舎弟め。今日の集会で」

彰人
「百代・・・・・・」

百代
「う、わかった。わかったから、その笑顔はやめてくれ」

彰人
「分かれば良いさ」

そして、一階に着いたため、下駄箱が別のため、少し離れ、昇降口で集合して、またさっきと同じである。

彰人
「はぁ～。早く帰って、鍛錬しないとな」

百代
「うん？なんだ、今日はそのまま基地でじゃないのか？」

彰人
「ああ、鉄爺に頼まれてな」

百代
「あのジジイ。よくも私の祝福の時間を」

彰人
「まあまあ、それにややだ単に見るだけだから・・・・・・まあもしかしたら・・・・・・」

百代
「まあいい。彰人が居るなら私もいるからな」

そして、俺らは川神院に戻った。

##第十八話##（後書き）

はあ、書けないのは、俺の稀少技能（レアスキル）

ガンダム見たんですが、あれは中々でした。

##第十九話##（前書き）

W（ダブル）更新！！

##第十九話##

彰人
「あ～。疲れた、」

俺は今日の門下生の修行を見ていて、なんか飽きたせいか、俺と戦いたい奴って聞いたら、全員挙げやかった。それで、百人組み手らしきことをやらされた。

百代
「まったく、途中からあのジジイまで入って来たしな」

そう、今、俺と百代は秘密基地に行く途中である。

彰人
「ホントだよな。最終的に師範代と鉄爺ＶＳ俺と百代だったしな」

百代
「しかし、彰人は相変わらず、強いな～。間違えて見とれて相手に本気で殴ってしまった。」

ああ、だからあの時、壁が壊れていたのか。

彰人
「お、そろそろだな」

そして、俺らは廃墟っぽいビルの裏に回った。実はそこに一つだけ開いているドアがある。そして、上に上がると、そこには

大和
「お、等々。戻ってきたな、彰人」

京
「これでホントのお帰りだね」

岳人
「てか、一年いないだけだたがな」

もう、この三人は先に来ていたようだ。そしてなぜか、少し京は不機嫌だった。

彰人
「どうかしたのか？」

俺が大和に聞いたら

大和
「ああ、それがな、今日」

そして、大和がクリを案内したとかなんとかで、最終的に卑怯者まがいな事を言われて寮についたらしい。

岳人
「へ、大和が卑怯な事ばっかしているからだろ」

京
「失礼な奴だね、案内してやって、なんて奴（↑怒）」

百代

「お、この強い気と、普通の気は。」

彰人
「モロと一子だろ。今、大体二階かな」

俺らは気で、二メートルぐらいまで気を配ってテリトリーにしていた。

京
「相変わらずの便利なセキュリティ」

そして、ドアが開き

一子
「みんな～、ジュースよ～」

一子は買出しをしていて、そして

モロ
「あ、今日から、彰人も・・・ってなんですかその座り方は！！」

あ～あ、とうとう突っ込んでしまったモロ。

京
「あ～あ。モロが突っ込んじゃった。」

大和
「まあ、恋人同士だし」

岳人

「てか、昔もこんな感じだろ」

なんとまあ皆ヒドイ。現在の座り方、タンスの上に二人で座っているが、狭いため抱きあっている状況。

クッキー
「はいはい、ジュースは回収しとくよ」

そこにお世話ロボが登場。

彰人
「それで、内のリーダーは？」

百代
「ああ、今日はバイトだから、来るのが一番遅いんだ。」

岳人
「だけど、なんで今日、モロ遅かったんだ？」

モロ
「あ、それがね。実はヨンパチの写真用のＰＣが不調で見たんだけど、類似のソフトが多すぎて、それで・・・」

京
「始まっちゃったね、モロの機械語り」

彰人
「相変わらずなんだな。」

俺の安堵感。しかし百代は

百代
「おい、どうにかして、止めろ。火種の岳人」

岳人
「まったく、ここにはただでさえヤダカリヲタクがいるのに」

大和
「なんだ、ヤドカリの良さがわからないなら・・・・・」

あ～あ、二人に増えてしまった。

百代
「おい、二人に増えたぞ」

彰人
「どうするんだよ。まったく」

京
「大和は私が止める。例え貞操を失っても」

岳人
「大和の貞操が心配だ」

百代
「既に、貞操無かったりして」

岳人
「そしてら殺す」

京
「盛大に殺す」

彰人
「はいはい。クッキー、ココア有るかい？」

クッキー
「うん、あるよ。ここの人達は個性が強いから、いろんな物が揃っているからあるよ」

彰人
「そうか、ならば執事（バトラー）、ココアを。砂糖とミルク、アリアリでは」

クッキー
「うん、執事（バトラー）じゃないけど、そういうノリは大好きだよ。」

そして、クッキーは何処かに消えてしまった。

百代
「ああ、この暖かさ最高だな。」

そういいながら頬擦りをしている百代。

彰人
「なんか、百代、猫みたいだな」

一子
「あ、彰人ずるい、ずるい。私も」

そういうと、俺ごと抱きついてきた。

彰人
「まったく」

百代
「良いんじゃないか、家族愛が溢れているぞ。彰人」

京
「あ、そう思えばモモ先輩、お金そろそろ」

百代
「ああ、安心しろ。それは今日解決だ」

なんだ、まだ借金していたのか、この彼女は。まったく

そして、スクーターの音がした。そして

百代
「そろそろ、もう一人が来るんだから一人でしゃべるのを辞めろ弟」

そう言うと、百代は近くに在った雑誌を大和に投げて

大和
「だからこそのあの貝がい、っつ、痛っ！。うん、このスクーターの音はキャップか？」

百代
「ああ、この楽天的な気は間違いないだろう」

そして、キャップが盛大に入ってきた。

キャップ
「ウィィス。お、今日からは彰人も復活か。」

一子
「あ、やっと来た。」

そしてキャップに方に一子が行き

キャップ
「お、なんだなんだ俺に懐いているのか」

一子
「待っていたわよ。晩御飯！！」

キャップ
「あ、そういう事ね。まあいいそれならばこれを持ってけ」

そう言うと、キャップの持ってきた荷物の中身が

一子
「わお。今日はお寿司ね」

そう、寿司である。

キャップ
「ああ、今日は多くの余りもんが出たからな、大量大量だ」

一子
「あら、ざるパックまでである」

岳人
「これぐらいあれば、十分じゃねえか」

百代
「岳人、私達がいるんだぞ」

一子
「そうよ。私たち、がっつしいくから」

そして、いい加減モロもこっちに戻した。

彰人
「おい、モロ。お前は箸使うだろ？」

モロ
「それで、ビデオアクセラレーターをつけて十八万で、ってキャップ来てたんだ。」

よしこれで、

一子
「それじゃ、いただきます」

キャップ
「よく、食うやっちゃな」

一子
「当たり前よ、よく食べて、よく寝て、よく修行よ」

うんうん。よい心がけだ・・・・・・ホントにな。

京
「はい、ショーユ」

大和
「おう、サンキュウ」

京
「はい、タバスコ」

大和
「いや、タバスコはいらんだろ」

京
「いるでしょ」

大和
「あ～あ、醤油が赤い」

なんとも説明がたい、色だな。おい

百代
「ほい、彰人。あ～ん」

彰人
「あ、あ～ん」

モロ
「だけど、なんか目の前の現状を見ると、ホント彰人が帰ってきた

んだなって思うのは僕だけかな」

岳人
「いや、俺様もだ。そしてすばらしく殺意が沸いてくる」

そして、食事がほどよく終わった。ちなみに俺は全部百代に食べさせてもらい、大和に、「アホですか内の姉さん達は」と、言われてしまった。いいじゃないか、川神院では出来ないんだから。

京
「それじゃ、そろそろ予告通り、回収に」

そう言うと、京は百代前、もとい俺の前に来て

百代
「ああ、今日は給料が来たからな。ほら持っていけ、金の亡者共」

京
「はいはい、それでは回収」

キャップ
「おう、今月ピンチだったからな」

モロ
「まあ、返してくれるからいいけど」

岳人
「まずは借りないようしないとな、モモ先輩」

一子

「それじゃ、三千円ね。だれか、両替して」

京
「うん、こっち。今日のために、細かくしといた」

大和
「それじゃ、これで今回は終了」

そして、百代は全員に借りていたので、残り

百代
「な、なんだ、これは百四十円しか残っていないじゃないか。これでは、購買の焼きそばパンすら、かえないじゃないか。」

なんとも落胆している、百代

彰人
「ま、しょうがないだろ」

百代
「うわ～、彰人～」

そして、俺に抱きつく。

大和
「そう、なりたくなければ、バイトすればいいのに」

百代
「また、荷物持ちか」

モロ
「なんか、モモ先輩異常にとび職の衣装似合うもんね」

岳人
「そういう、大和はバイトどうなんだ？」

大和
「う～ん、保留かな。接待業は疲れるからパスだけど」

キャップ
「俺も、この寿司屋バイトは今週一杯だな。」

モロ
「それでなんか収穫は」

キャップ
「元々寿司屋は、一定の動きだからな、それよりもそこの店長さんが釣り好きで今度、泡美大島に連れてってくれるってさ、それと配達先が大体お年寄りで、それでよく福引券を貰うぐらいだな」

モロ
「なんだかんだで、キャップはお年寄りに可愛がられているのね」

キャップ
「よし、そろそろ。今日も本題に入るぞ」

京
「彰人の土産話？」

キャップ

「それもあるが違う」

そして、キャップはこう言った。

キャップ

「クリスをうちのメンバーに入れたい」

##第十九話##（後書き）

「さて、なんと今回はやるよ、ＬＯＶＥかわかみ。司会はこの井上準と」

「なぜか、この俺、御剣彰人です」

「なんで、彰人さんなんですか？」

「うちの嫁は今日は疲れたそうで、俺がその代わりに」

「その、これ、あまり物のジュースですが」

「ホントに、うちの嫁がお世話になってます」

「君も直江のように苦労してるんだね」

「だけど、好きなんです」

「ああ、俺もそんな恋がしたいな～、もちろん幼女限定で」

「それで、今日のお便りは」

「あ、はいはい。それでこのお便りです。」

「えーと、なになに。学長って一体何歳なんですか」

「「俺も知りたいよ！！」」

「見事にハモリましたね、彰人さん」

「ほんんとですね、準さん。それでは今日はここまで・・・・・・ってここまで！」

「なんとも、。うちの作者のネタ切れだそうだ」

「なさけねぇ、てか楽屋の裏事情をここでするな」

「「それではバイバ～ィ」」

##第二十話## ##（前書き）

更新です。

##第二十話##

キャップ
「クリスを仲間に入れたい」

これがキャップの今日の議題だった。

モロ
「今、聞いたよ。そんなの」

大和
「それで、一体なにがあったんだ？」

キャップ
「いや～、あれは逸材だと思うぞ俺、気に入ったもん。それにここの女子連中と同じぐらい気が強いしよ」

モロ
「それってもしかして恋、ラヴなんだ」

キャップ
「いや、それは無い（キッパリ）。それで俺は賛成なんだけど」

モロ
「う～ん、確かにクラスメイトとしてはちゃんと仲良くするけど、ここに入れるのはレベルが」

キャップ
「んなもん、解っている、それでみんなはどうだ。」

岳人
「俺様は賛成だ。」

すぐに、賛成の意を示す岳人・・・・・絶対外見目当てだ。

一子
「う～ん。クリは要らん子だけど、勝負できる奴ができるのはいいわね」

キャップ
「ワン子は保留か、それじゃ、そこの二人は」

そして、俺らにその話が向けられた。

百代
「別にいいんじゃないか、キャップの勘は良く当たるしな」

キャップ
「それじゃ、「ちょっと待て、俺はないのか」あ、彰人はどうせモモ先輩と一緒だろ」

との一言で、俺の意見は終了。ちなみに百代は上機嫌だったので許した。そしてキャップは一番の関所に当たった。

キャップ
「それじゃ、そこで嫌なそうな顔をしている京」

京
「反対」

キャップ
「やっぱり？」

京
「ファミリーはこれでいい、他人はいらない」

キャップ
「だけどな、京。俺は確信しているんよ。絶対ぇ面白くなると思うぞ。それじゃモロは？」

モロ
「う～ん、僕も反対かな」

京
「よしよし、モロ。こちらのキノコワールドに来て、胞子を出して皆を洗脳しよう」

なんとも京らしい、じめじめ感ＭＡＸだな。そしてそこに

岳人
「よし、ワン子、京を説得して来い」

そして、一子はそれに応じ京の傍にいくが

一子
「へ～イ、ミスター京」

京
「ミスターは男だろうが（ギロ）」

一子
「そんな、に、睨まないでよう」

なんとも、説得の前で撃沈とは。そして、ラストは我らの軍師

キャップ
「それじゃ、内の軍師に最後を聞いてみよう」

大和
「いいんじゃないか別に」

京
「大和はクリスのこと嫌っているんじゃないの？」

大和
「確かに、いざこざはあるが、さすがに外国で一人は寂しいだろう」

なんともうちの兄弟は良く出来ているよ。

京
「大和は誰にもやさしいね、それじゃ私は大和に捧げるまで」

なんか京は方向性が違うような。

モロ
「僕だけ、我が侭言うのは出来ないから」

そして、モロも落ち、これで全員が賛成となった、まあ保留も居るが、しかしキャップは

キャップ
「なに、空気が悪くなったら、そしたら切る。それでいいな京」

京
「うん、それでお願い」

なんとも、さすがと言うのか凄いというのか、まあこれがキャップか、そしてこの会議は終了した。しかし問題はここからだった。

キャップ
「それじゃ、この話はここまで。それでは今度は彰人、お前の旅のお話をしろ、これは俺命令だ」

百代
「そうだな、色々聞きたいぞ。この美少女を一年間も待たして、なにをしていたのか」

なぜか、俺の問い詰めに変わっていた。

大和
「それじゃ、質問形式にするぞ。彰人もこれじゃ困るだろうから。」

そして、最初はキャップからだった。

キャップ
「よし、それじゃ、どこに行ったんだ、彰人?」

彰人
「えーと、最初はアフガン、次にドイツ、それで中国行って、後は

イギリスかな。」

大和
「十分に行っているな。」

一子
「それで、彰人は一体何しにいったの？」

彰人
「そうだな、最初は墓参りだ。」

モロ
「それがアフガン？」

彰人
「ああ、それでよ、現地の人に聞いたら丁度、そこで紛争していたから、俺が殲滅させた」

岳人
「なんちゅうバカだ」

お前だけには言われたくなかったな。

大和
「それで、どうしてあのクリスのお父様と知り合いだったんだ？」

京
「そうだね、なんかドイツ語も完璧だったし」

彰人

「ああ、その紛争を止める任務についていたのがあの中将殿だったんだ。そこで大体のドイツ語を教えてもらったり、紛争地域行って、一軍隊無力化してたりして、金稼いでいた」

百代
「いいな、いいな。私も軍隊とか相手したいぞ」

なんとも破天荒な彼女であった。

モロ
「だけど、なんで中国なんて行ったの？」

彰人
「ああ、それがな。俺の引越しの時に刀見ただろ」

百代
「ああ、あの気がめちゃくちゃ出ているやつだろ」

大和
「なんか、凄く触りたくないオーラが出ていたよね」

彰人
「ああ、あの刀な実は名刀なんだ。」

キャップ
「なんだ、実は勇者の剣とかと同じか」

モロ
「いや、キャップさすがにそれな無いと思うよ」

彰人
「当たりだぞ、キャップ。あれはある意味そうだ」

モロ
「ホントに当たっちゃったよ、」

大和
「だけど、なんでそんなもん、彰人が？」

彰人
「ああ、なんて言うのかな、呼ばれた」

一同
「呼ばれた？」

皆さん、完全に首が横に曲がっていました。

彰人
「なんか、感じたんだ、そして行って見れば」

キャップ
「そこに刀があったてか、なんだよ、それ。すんげぇ面白そうじゃんかよ」

大和
「う～ん。その刀はなんて言う名なんだ？」

彰人
「ああ、御霊フツノだ」

一子
「なにそれ、フツノ？変な名前ね」

まあそうだろう、しかしこれの昔の呼ばれを聞けば皆驚きそうだな。

キャップ
「それじゃ、最後にしとくか、そろそろ遅くなってきたし。それじゃラストはワン子だな」

一子
「え、ここはお姉さまじゃないの？」

百代
「いいぞ、ワン子。私はどうせ夜になったら、“一緒の布団の中”で色々きくからな」

なんでそこで“一緒の布団”を強調するんだこの彼女は。

一子
「エロチカだわ。だけど、そうね、なら彰人、なんで九鬼君と仲いいの？」

岳人
「ああ、そうだな。なんであんな奴と仲いいんだ。」

彰人
「ああ、それが最後のイギリスだよ、正確に言うとロンドン。」

百代
「それで、その時どうしたんだ、あなた」

なんともいつも思う。この不意打ちはやめてほしい、ほら見てみろ、なんだか凄い目で見られているじゃないか。

彰人
「ああ、実はな、中国の帰りに九鬼帝、ようは揚羽さんのお父さんに会ってな、そのとき護衛の依頼があったんだ」

百代
「揚羽さんのか？」

彰人
「いや、それが英雄だったんだ。だけどあそこにはあのメイドがいるだろ」

大和
「ああ、確かにな。」

彰人
「だけど、実はその会議がなんでもテロされるという、ものだったんだよ。それで俺は隠れてそれを伺っていたんだが」

モロ
「だが？」

彰人
「物の見事に爆発が起きた、それでそのとき、隔離されてしまったのが俺、英雄、そしてその会議に出ていた、キリヤカンパニーの社長と、鉄さんだった」

百代
「なんと、乙女さんか」

彰人
「ああ、それで、その時、まあ色々あって、結局そのテロ犯を殲滅したんだ。」

大和
「相変わらず、殲滅好きだな」

彰人
「それで、なぜか、『王で我を仕事とは言え、守ったお前。さらにお前の力に我は感服したぞ』、とかなんとかで、あいつと友達になった」

なぜか、みんな俺の話を聞いた後、なんでだろう白い目で見られている。そして、一子のこの一言

一子
「彰人、まるで戦争みたいね」

なんてひどい。しかし他の百代以外は頷いていた。泣いてやる、泣いてやる、百代の胸で泣いてやる。

岳人
「しっかしよく、刀なんて持ってこれたな」

彰人
「ああ、それは国からＯＫ貰っているから、」

大和
「あの総理から」

彰人
「ああ、ビックリしたぞ。衆議院議員でいいポジションだったなと、思っていたら総理になっていたな、あの人」

そう、今の総理は俺がよく、投げ飛ばしていた川神院の元門下生だった。

彰人
「それで、俺がいない間の変化は？」

次は俺の質問だったが。

キャップ
「う～ん、ないな」

クッキー
「僕が来ただろ、なんだよその反応は」

クッキー2
「オシヨキがひつようか？」

なんで変形するんだよ、このロボ。

大和
「そうだな、内の両親が外国に行った位か」

他は

岳人
「彼女とわかれ「嘘はいいから」」
なんとも岳人らしい嘘だ。

京
「とうとう、大和との子供が「できてないから！！」う～ん。程遠い」

彰人
「そうか幸せに「なにを勘違いしているんだ、兄弟！！」ふ、冗談だ」

一子
「う～ん、ないかな」
やはり、皆そんな変わっていなかった。そして最後に

百代
「う～ん、そうだな～」

彰人
「百代は後で、じっくり聞いてあげるから、今は我慢ね」

百代
「う～う～」
ああ、やっぱ変わってないや。そして今日の集会は終わった。そして帰った後の川神院での一室では

百代
「彰人～。今日も一緒に寝るぞ～」

彰人
「はいはい、おいで。」

そう言うとホント猫の如く丸まり、俺の胸の中に来る。

彰人
「しかし、百代。随分髪を伸ばしたな」

百代
「ああ、どうだ、お前だけだぞ触らせるのは」

彰人
「うん、すばらしい。それじゃその特別ついでにいただきますか」

百代
「な、今日もか、相変わらず「それでは」お、おい彰人。ちょ、ちょっと。もうしょうがない奴だ♪」

バカップルでした。

##第二十話##（後書き）

あはは、書くことが無くなった、俺、どうしようｏｒｚ

あ、そうだ、俺のほかのサイトで、新しくＦａｔｅの士凛の甘い物語を書いてますので、そちらもよろしくお願いします、たぶんこの作品よりも甘く作っておりますので、ソノサイトは私の外部のサイトのところですのでよろしくお願いします。

##第二十一話##（前書き）

さて、更新。

##第二十一話##

Ｓｉｄｅ　大和

さて、今日は確か、朝十時に河川敷って

大和
「なんで、お前が俺のところで、寝ているんだ！！」

そう、なぜか、京が俺の布団の中にいた。

京
「既成事実、ぽっ」

大和
「何が既成事実だ！！」

京
「く、く、く。それはどうでしょう」

ならば、

大和
「そうだったとしたら、お前はこんな朝は元気じゃない」

京
「え！？」

大和

「散々の誘惑が溜まりに溜まり、お前はこんな元気じゃないだろう」

その言葉に、京の顔は真っ赤になり、

京
「具体的には」

そう来ましたか、

大和
「いいから、出ろ」

そして、俺の部屋から出した。

京
「朝から、生殺し～」

朝から大変だな、俺。

Ｓｉｄｅ　ｏｕｔ

ふわ～、今日も良い朝だな。しかし

百代
「ふにゃ～、彰人～」

なんとも朝から刺激が強いことで、いかんだろ、無意識にして俺に抱きついているのは。しかしそろそろ起きないと不味いな、それでは

彰人

「お～い、起きろ百代」

百代
「う～ん、いいじゃないか～」

彰人
「そうか、朝のキスはなｓ「おはよう、彰人」うんうん、素直でよろしい」

なんとも出来た彼女、え、誰が調教教官だって、俺はただ百代を俺の物にシタダケダヨ。

百代
「う～、彰人。起きたぞ、だから」

彰人
「おっとそうだった、百代おはよう」

そして、やさしいキスをする。

彰人
「それじゃ、着替えるか」

百代
「なんだったら「さ、どこだったけ？」う～無視するな～」

そして、頬を抓られる俺。そこに一子登場。

一子
「やっぱりお姉さま、彰人の所に居た。お姉さま、彰人、そろそろ

朝食ですよ、だから早くきてね」

なんともよく出来た妹だな、まあ知力は皆無だが

彰人
「ああ、すまない。今すぐ行くよ。ほら百代」

百代
「うん、ああ」

そして、なぜか俺のクローゼットにある百代の服。ホントなぜ?まあ俺の服はあまり無いからいいが。
そして、俺らは朝食となった。

Ｓｉｄｅ　まゆっち

まゆっち
「拝啓、父上・・・・・・・かしこ」

松風
「まあ、なんでこんなことしてるんだろう」

まゆっち
「お友達がまだいないからです～」

松風
「ファイトだぜ、今日こそ、あの風間グループに入れてもらうんだろう?」

まゆっち
「そ、そうですが」

松風
「入れてＹＯ、ＹＯＵ言っちゃいなよ」

今日も、友達１００人計画を頑張っている、剣聖の娘でした。

Ｓｉｄｅ　ｏｕｔ

さて、朝から程よく、時間が経ち、現在野球をしている、俺ら。キャップはクリスを勧誘に行った。

ちなみに打者は

岳人
「よーし、一発決めてやる（↑打者）」

京
「内野ゴロはアウトだから（↑投手）」

岳人
「ゴロなんて、論外。狙うなら場外だ！」

百代
「しかし、京は中々の球投げるぞ（↑捕手）」

京
「それでは外野の皆さん、よろしく」

一子
「まっかせなさい（↑レフト）」

大和
「ああ。（↑ライト）」

彰人
「まあ、どうにかする（↑センター）」

そして、第一球。なんともゆるいボール、あれではホントに

京
「イケメンには打てないボール」

なんてことを言うと

岳人
「マジで！（スル）」

そして、百代のもとに

京
「ワンストライク」

なんとも

岳人
「ち、真面目にやれよ京」

まあ、確かにそうなんだが、なぜだろう岳人がバカなだけのように思う。

京
「やだよ、そんなの」

と、その時

大和
「京、ちゃんとやってやれ」

京
「承りました」

なんともさすが大和ＬＯＶＥだな。

岳人
「ああもうねぇ、絶てぇ打つ」

そして、第二球

“カキーン”

京
「あれ？打たれた」

岳人
「よっしゃぁー、この高さなら場外だろ」

なんともしかし、確かにあの高さならホームランだろうが、あれ取

りに行くの面倒だな、なら。

百代
「甘いな、岳人。センターには私の夫がいるんだぞ。」

岳人
「へ？」

そして、俺は飛んだ。そして

大和
「ナイスキャッチだ、彰人（↑一歩も動いていない）」

一子
「さすがね、彰人（↑俺と同じく空中にいる）」

京
「はい、ワンアウト」

岳人
「卑怯だぞ、なんなんだよ、あれは！」

百代
「さすが、私の夫」

大和
「だが、ワンアウトだぞ。」

岳人
「あ、今の言葉、カチンと来た、大和、ちょっと変われ、お前打者

な。」

そして、その頃キャップ達は

キャップ
「どうだ、クリス？」

クリス
「ああ、楽しいそうだ。いつもああなのか？」

キャップ
「まあ、今回は野球だな、だけど季節やその時々でかわるな」

クリス
「そうなのか、実に楽しそうだ」

キャップ
「なら、一緒に遊ぶか？」

クリス
「いいのか？」

キャップ
「ああ、昨日にそういう事は話しているから」

そして、今回の勧誘は成功のようだ。

京
「クリス、入るって」

一子
「あら、随分あっさりね」

そして、クリスが俺らのもとに来た。そしてうちの犬がこう言った。

一子
「クリ、このグループだと私が先輩だぞー」

バカが・・・しかし

クリス
「む、犬か」

この反応、さすが中将殿の娘、そして百代からの提案

百代
「ならば、今日は島津寮でプチ宴だな、川神院から肉持っていくからな、その後私と彰人のノロケを「百代」う～、いいじゃないか」

なんとも、隙あらばノロケって、ほら見てみろ岳人とか俺を羨ましそうに見ているじゃないか。

クリス
「こんなに早く友達が出来るとは、うれしいな」

モロ
「それじゃ、野球の続きでもやる、僕ファーストね。さすがに運動もしないと」

そして、野球再開。

彰人
「それじゃ、俺打者で」

俺がそう言うと、誰も投手がいなくなり

大和
「ま、彰人は打者は無しで」

この一言が俺の心にクリーンヒット。

クリス
「それでは私が打者だ」

一子
「それなら、私が投手よ」

そして、なぜかまたセンターの俺、なんでだよ・・・・・・・・
そして、第一球。

一子
「いっけぇー、川神流、パ・リーグ一号!!」

クリス
「なんのっ!」

そして、大きくボールは中に浮き。

百代
「アウトだな」

なんと捕手の百代がキャッチ、ようはただ単に上がっただけのようだ。

一子
「クリも大したこと無いのね」

クリス
「なんだと、犬。それならば今度は交換だ」

なんとも両者、同じ性格なのか、なんとも負けず嫌いなのか。

大和
「なんだ、かんだで、どうにかなりそうだな」

大和がこんなことをいうが。

京
「油断大敵だよ、ちなみに私は夜が油断だらけ」

大和
「誰も聞いてないから」

さすが、兄弟。キラーパスもスルーとは、

彰人
「しかし岳人、お前また筋力だけ上がったか？」

岳人
「なんだ、彰人。筋力だけって、これでも俺様、もてるように」

京
「なっていればよかったね」

岳人
「なんでだ、なんで、俺様のかっこよさが分からない」

と、言って泣き崩れる、セカンド。その時

クリス
「あ、しまった」

なんか打たれたらしいな、しかし、あの距離なら。

京
「残念でした。」

まあこうだろうな。最近京は接近戦もできるようになったとか百代に聞いたな、大和襲われないようにな。

##第二十一話##（後書き）

「さて、今回はできるＬＯＶＥかわかみ、司会はとうとうあの人も休み、御剣彰人と、」

「なぜ、俺なんだろう。直江大和です」

「あのハゲの人は風邪だって」

「それに姉さんは」

「とんずらです」

「「はぁ～」」

「ああ、いい。それでは大和よ、次回予告」

「次回・・・・・って元々、次回予告なんてしてないでしょうが」

「大和、今日はずいぶんと元気だね、なんか良い事でもあったかい？」

「なぜだろう、無性にアロハシャツのおっさんが俺の頭の中に出てきた。」

「それでは今回はここまで」

「今回は、俺直江大和と」

「御剣彰人でした。それではなんかいいことあったらいいね」

「なんだろう、無性につっこみたい。」

「「バイバ～ィ」」

##第二十二話##（前書き）

二十二話更新！！！！！！！！！！！！！

##第二十二話##

野球が終わり、皆はひとまず家に戻っていった、ここには俺と一子のみ、百代は百人組み手をしに院に戻った、俺はまあ一子のトレーニングを見ている。と、いっても一緒に走りこみだが。

一子
「よし、これで五十本」

彰人
「よし、もう一セットいくか？」

一子
「うん、ってあれ、あれたっちゃん？」

一子が向いているのは道路のほう、そして一子がたっちゃんと呼ぶのは、

忠勝
「お、今日もトレーニングか、一子。それにバカップルの片方、今日はあの騒がしい奴らは？」

一子
「さっきまで、野球してたわ、けど、みんな一度帰ったよ。」

忠勝
「モモ先輩はどうした、ここにこいつがいるのに」

一子

「百人組み手だって、私も早くやりたいわ」

彰人
「ふ、面倒だぞ。なんなの。」

忠勝
「お、そうだ。お前ら見ていて思い出した。リクオ覚えているか一子」

一子
「おお、リク。随分懐かしいわね、今なにやっているの？」

たぶんリクオとはこいつらの孤児院の頃の友達だろう、実際忠勝と俺が仲のいい理由はある意味、親の関係があるからだろうな、すでにいない親と、どこにいるかわからない親。

忠勝
「なんでも板前になる修行らしくて、この前手紙が来ていた。」

一子
「あはは、みんな色んな夢持つようになったわね」

忠勝
「まあ、それでも全員親が見つかってねえがな」

一子
「しょうがないよ、ポストに置いてくぐらいだもん。」

そして、忠勝は不意に、缶コーヒーとスポーツドリンクをだし、

忠勝
「ほらよ、どうせまだトレーニングするんだろ。俺はここで寝るから、差し入れだ」

やはり思うんだが、忠勝は根はやさしい、しかしこう言う所を見せる奴がとことん少ないんだろうな、学校じゃ不良扱いだし、こんなに家事うまい奴が不良かよ。

彰人
「お、サンキュ。しかし夜も仕事か？」

忠勝
「ああ、俺的には学校なんて辞めてはやく仕事一筋にしたいぜ」

一子
「だめだよ、高校生活なんて一生に一度だけなんだから」

忠勝
「親父と、同じこと言うなお前」

彰人
「ま、仕事だけも案外楽じゃないけどな」

一子
「それじゃ、私は先に走ってるはね」

そして、一子は先にまたダッシュを始めた。

彰人
「なあ忠勝、俺はちゃんと一子の兄になれた？」

忠勝
「ああ、十分にな。あんな酷い所よりすごくいい所だよ、てめぇらの家族はよ。まあ俺が思うに女ってのは強いんだと思うぜ、なんせあの泣き虫が今じゃああ、だからな」

そして、今もダッシュを続ける一子。

彰人
「まあさすがの一子の兄だな。それに確かに女は強いな」

忠勝
「んじゃ、俺はそろそろ寝る。お前も一子の手伝いでもしてろ」

彰人
「ああ、そうするよ。」

そして俺が河川敷に降りる際、こう言われた。

忠勝
「結婚式はお前が卒業してからにでもしろ」

なんて、こと言うんだ忠勝。もう少しで間違えて、橋を気弾当てて壊す所だったぞ。そして、俺は一子がダッシュしている所に行き、

彰人
「おい、一子。今からシャドーやるぞ、てか俺に挑んできてもいいぞ。俺は避けてるから、一撃でも俺に決めてみな」

そしたら、まるで犬のように、俺に近づき

一子
「やった～、久々の彰人とのトレーニングだ。それじゃ行くわよ」
そして、さっきまでの走りこみでの疲労など感じさせない、目を俺に向け、俺に拳を打ってきた。

Ｓｉｄｅ　大和

さて、時間にして、七時前後、今回の宴は島津寮にようこそ、歓迎会も混ぜるらしく、二階にいるあの、目つきがたまに悪くなり、学校初日に刀を持っていた子の同伴らしい、しかし、腹へったな。そして、俺の部屋にキャップが来た。

Ｓｉｄｅ　ｏｕｔ

彰人
「な、なんだ。これは？」
そう、俺の目の前にあるのは、人！人！人！！

一子
「あはは、これじゃ、まるで人間ピラミッド」
そう、なぜか川神院に帰ってみると、なぜか人の山が出来ていた。
そのとき

百代
「はぁーーーーーーー！！」

なぜか、百代が突っ込んできた、てかまだ、百人組み手の相手だと思っているのか、

彰人
「一子、逃げろ！！」

一子
「え、え、え？」

彰人
「えーい、このアホが」

そして、俺は一子を吹き飛ばし、

一子
「う、うわわわ。」

まあ吹き飛ばしても、普通に受身を取っている、さすがだ。

彰人
「まったく、この猪突猛進、彼女が」

そして、俺は百代に構えをし

彰人
「スネークバイト！！」

そして、俺の左腕を大いに使い、百代を抑えた。

百代
「あ、あれ、決まらなかった？」

やっと、戻ったか。この彼女は、とその時鉄爺が来た。

鉄心
「なにをしておる、百代。自分の力も制御できなくてどうする！」

百代
「うるせいよ、じじい。私は相手が彰人だとわかったから、本気で行ったんだ。」

あれれ、なんかそれだと俺が悪いみたいじゃないか。

鉄心
「まったく、百人組み手が直ぐに終わってしまってつまらないのは分からなくもないが、しかし百代よ、いきなり殺気を飛ばしながら飛んでいくのは辞めなさい。それに彰人よすまんのう、またもや止めに入ってもらってのう」

彰人
「いいさ、別に。それに俺もある意味、運動しないと大変なことになりそうだし」

百代
「ほら、みろジジイ。「だけど」？」

彰人

「今日はこの後宴だろうが百代。少しは時を読めよ。あ、それから、鉄爺それで肉貰うけどいい？」

鉄爺

「ほ、ほ、ほ。持って行くがいい。どこかの孫なら許可を取らずに持って行きそうじゃが、彰人はちゃんと許可をとるからのう。」

なるほど、さすがは百代の爺さん、百代の動きの予測済みか。

百代

「う～。なんでだよー、なんで彰人は私の攻撃を簡単に止めるんだよ」

彰人

「あのな、百代。よく見てみろ、この“蛇”を」

そして俺の腕を百代は見て、一瞬、強張った、ああ、そう思えば百代って魑魅魍魎、例えばお化けとか苦手だったな。

百代

「な、あ、彰人。それを早くしまってくえないか？」

完全にびびっている百代、これは珍しい。戦闘中はなんともないのにな。

彰人

「ま、しょうがないか、“ご苦労さん”」

そして、俺の蛇は消えた、そして百代は抱きついてきた。

百代
「♪～♪」

なんとも、猫みたいだな百代。

鉄心
「ほ、ほ、ほ。それでは彰人よ、うちの孫達を頼んだぞ。」

そういうと、鉄爺は院に戻って行った。

一子
「お姉さま、彰人と先にお風呂にでも入ったら？」

百代
「うん？そうだな、それじゃワン子、すまんが先に入ってくるな」

彰人
「え、ちょ、この場合普通、一子と百代が一緒で俺が後では」

しかし、百代の力はさっきよりも強く、

百代
「いいんだ、まあワン子」

そして、一子の頭を撫でる百代

一子
「♪！」

完全に飼われていた。そして俺は百代にするすべなく、そのままお

風呂に入った。

そして肉を持ちながら島津寮に向かう、俺達。

彰人
「しかし、なんであの院にはこんな肉があるんだ?」

一子
「う~ん、たぶんだけど。うちってなんだかんだ言ってお肉が基本だから、その備蓄じゃないかしら」

なるほどな、さすがはうちの食卓事情の管理者。まあ食べる専門だが。

彰人
「あ、食事で思い出したが、来週の学校の昼は?」

百代
「もちろん、私の手作りだ。それ以外は認めないぞ。」

なんともいい響きだが、しかし

彰人
「ラジオの日はどうするんだ?」

百代
「それは安心しろ、ラジオの前にお前に届けるから」

彰人
「なら、いいか。それにしても百代が料理が出来るとは・・・・・・

・」

一子
「それは私も驚いたわ、朝起きたら、お姉さまの姿がしかも厨房でみるなんて、って」

百代
「なんだ、なんだ、二人して、これでも私の夢は彰人のお嫁さんなんだぞ」

一子
「あはは。彰人限定なのね・・・・・・やっぱおにい「辞めてくれ、それは」あはは」

さすがに、同年代から義兄さんなんて呼ばれたくない、しかも普通のお兄さんではない、“義”兄さんなんだぞ、まあ結局いつかはそうなるだろうが。

百代
「そう思えば、彰人は高校卒業したら、どうするんだ?」

彰人
「まあ、百代が旅に出るんだったら、一年待ってもらって俺もそれに同伴かな」

百代
「そうかそうか。」

なんだろう、この満足な顔。

一子
「じゃあ、もしお姉さまが旅に出なかったら?」

彰人
「そりゃ、進学。俺は“川神流”じゃないからな。あのまま川神院にお世話になるのはさすがに気が引ける。まあ進学してもなんだかんだで、なぶん武の道にではありそうだよ」

百代
「ちょっとまて、彰人重要なことを忘れているぞ、私の彼氏としては重要なことが」

彰人
「なんだ?」

まさかな、そうだよな。そうに決まっている、あいつと同じ

百代
「結婚式だ、彰人が卒業したら直ぐにしような」

ああ、やはりそうでしたか。まあだけど

彰人
「ああ、そうしよう。ま、その前にちゃんと俺からでもプロポーズするさ」

悪くないな、いや最高だと思う。

百代
「ああ、待っているぞ」

そして、二人は見つめあい。

一子
「あのう、二人とも、もう島津寮の門の前なんですけど・・・・・・」

彰人・百代
「「／／／／／／／／／／」」

まあお約束が起きるわけですよ。そして俺らは顔を赤くしながら、島津寮に入った。

##第二十二話##（後書き）

ネタが無い。

バイバ～ィ

##第二十三話##（前書き）

はは、体育の日の次に体育祭ってどうよ。

##第二十三話##

島津寮に入ると、居たのは京だけだった。

百代
「ほら、肉を持ってきたぞ」

京
「うん、承る」

そして、俺らが持ってきた肉を冷蔵庫に入れ、キャップが来た。

キャップ
「やっと来たかよ、俺を腹ペコで殺す気か」

なんともキャップらしい回答だ、それじゃ

彰人
「それじゃ、大和を呼んで来るから、炭火の用意よろしくな」

百代
「お、それならば、私も行くぞ。それじゃ京はクリスを」

と、その時クリスは降りてきた。

クリス
「下から声がしたので来たのだが」

うむ、なんともグットタイミング。

彰人
「それじゃ、百代行くよ」

百代
「ああ」

そして俺は大和の部屋の前に来たら百代がいきなり

百代
「ふはははは、いきなりのお姉さんの登場だ、大和。エロ本とか読んでないだろうな」

なんとも、この彼女、プライバシーの欠片も無いようだ。そして俺の続けて入り

大和
「姉さん、普通ノックぐらいしなさい。これは常識だぞ」

なんとも弟に怒られている百代が居た、しかしこの前に来た時から不思議だが、なんであの“愛”と書いてある兜があるんだろう。あ、そうか直江だからか、まったく大和め。

百代
「なんだよ、読んでないのかよ。しかし大和、あのティッシュとか
「こら、百代」ん、彰人？」

大和
「兄弟、助けるのが遅いぞ」

彰人
「はぁ～、百代ダメだろ、ノックぐらいはしなさい、そしてそれを言っているそばからタンスを」

百代
「ご開帳♪・・・・・・あれ、エロ本がないぞ、大和」

大和・彰人
「人の話を聞こうか百代（姉さん）」

百代
「え、あ、すまん」

彰人
「すまんな、大和。これの契約のせいだと思ってくれ」

そして、大和が

大和
「俺はなんであの時、うんと、頷いてしまったんだ」

過去を嘆いていました。まあしょうがないか。

彰人
「それじゃ、俺らが来たから」

大和
「ああ、飯なんだろ。俺も死にそうだった」

百代

「そうか、そうか。それならレッツゴウ♪」

そして、この室内でも俺の腕に抱きつく、百代。そしてそれを後ろからヤレヤレ顔で見る大和。そして食堂に行ってみると。

一子
「まだ、まだ？」

なんとも犬の如く、尻尾があれば間違いなく、振っていそうな一子。
そして

キャップ
「お前らが焼くとてきとうだから、俺が焼く。見よ、このバイトで学んだテクを」

そして、鍋奉行もとい、焼き奉行のキャップが仕切るなか、歓迎会が始まった。その時

キャップ
「そうだ、二階に居る、あの一年生も呼んであげようぜ。クリス、すまんが」

クリス
「ああ、行って来よう」

そして、クリスが一年を迎えに行ったが、なんだろう。男子異様に少ない。

彰人
「あれ、モロと岳人は？」

俺の質問に大和は微妙な顔をして

大和
「ああ、モロはおじいさんのお世話、岳人は・・・・・・・・・魍魎の匣？だったかな」

百代
「なんだ、そのネーミングセンスの無さは」

大和
「いや、俺に言われてもわからない。」

なんとも岳人も変な道だけは行かないでくれよ。そして、クリスが戻って来た。刀を持った女の子を連れてきて。

黛
「え、あ、あの、しょ、招待いた、いただきあ、ありがとうございます。」

キャップ
「（お、なんかこいつも中々おもしろうだな。っと肉肉。）」

なんとも、緊張している子がって、目、怖っ！・・・・・・・しかし一年にしてはいいプロポーション。しかし百代の方が、

百代
「あ～き～と～」

あ、あれ？

彰人
「いひゃい、いひゃい。ふひまへん、すひません」
だって、これは男なのだからしょうがないだろう。

一子
「ねぇ～もういい？」

キャップ
「おう、いいぞ。ほら、食うがいい」

一子
「うまうま」

クリス
「まさしく、犬だな。まったく。」

京
「やっぱ、このチリソースはいい飲み物だ」

そして、京は京でごくごく激辛ソースを飲んでいた。大和はちゃんと安全に肉を食べていた。

彰人
「しかし、ここで焼肉とは新鮮だな」

百代
「そうだな、しかしクリスの箸の使い方は見事だな」

クリス
「はい、ここに来るまでに一生懸命頑張りましたから。それにここのお肉おいしいです」

キャップ
「そうだろう、さすが俺、一年もうまいだろ」

黛
「はい、これまいうーですね」

大和
「な、この肉って」

黛
「あ、あれ～。まいうーがスルーされました。」

松風
「がんばれ～まゆっち」

なんだろう、あの一年生、なんかブツブツ言っているが

一子
「お肉～、お肉～」

キャップ
「さわしぃ、やっちゃな～。京、なんか代わりのもん頼む」

京
「うん、それらなこのキャベツを」

一子
「それ、塩かけ過ぎ、塩分の取り過ぎは体に良くないんだから」

京
「もう、しょうがないな～」

そして、ちゃんと塩を落とすところはやさしい。しかし

京
「なら、おねだりしてみなさい」

なんてこと言うんですか、しかしさらに

一子
「私の口にキャベツを捻じ込んでください」

なんかすでに調教が完了しているんだが、

大和
「おい、お宅らの妹さん調教されているが」

百代
「なら、彰人は私を調教してくれ」

彰人
「すまん、兄弟。こっちにも火の粉が出てきた」

大和
「ここのメンバーは普通な奴がいないのか・・・・・・」

そしてご飯が炊けたようで

京
「あ、ご飯出来たみたいね」

一子
「すいませ～ん、ご飯持ってきちゃってください」

京
「ホントにお客さんみたいだね」

そして、一子に大盛りのご飯を渡した。

クリス
「自分もくれるだろうか」

やはり、日本が大好きなためかここでご飯を求めるとは、しかし

京
「それなら、白いのをいっぱいくださいと言ってみなさい」

なんで、この人はクリスまでこのフリを渡すんだ

クリス
「白いのをいっぱいください？」

てか、この子、

京
「ホント、ワン子といいクリスといいピィアだね」

ホント俺もそう思うよ。

大和
「お前が、黒々とし過ぎなんだよ」

京
「うん、大和のせいでね」

彰人
「きょ兄弟？」

百代
「意外だな～、弟」

大和
「そこで、俺を生暖かい目で見るな、そこの夫婦」

彰人
「ま、そういうことにしておこう、京俺にもご飯くれ」

そう言うと、なぜかすでに百代がご飯を用意していてくれた。

百代
「ふ、ふ、ふ。これこそ、彰人の嫁である私の務めだ！！！」

いやいや、なぜに！マークが三つも、まあしかし悪くないな。

京
「いいな～、チラ、チラ。」

大和
「そこで、露骨に俺を見るな、京」

一子
「ね～、そろそろ、変わろうか？」

キャップ
「いい、いい。俺が焼いてるから」

クリス
「ホント、犬だな。」

キャップ
「ほら、肉焼けたぞ」

一子
「先鋒なら、お任せあれー」

クリス
「む、抜け駆けは軍法違反だぞ！」

いやいや、くりすさん、軍法ってここには・・・・・・まあ、戦場か。

百代
「ほい、彰人。あ～ん」

彰人
「あ～ん、それで大和、お前さんの親父殿は元気か？」

大和
「ああ、なんでも今、丁度いい調子らしい」

京
「いい加減突っ込みすらいれなくなったね、大和」

彰人
「あ、そうそう、百代の方は？」

百代
「ああ、未だに、旅してるよ、まったくいつになるやら、どの道川神院を継ぐのは私だしな。それに既にお前がいるから、跡継ぎの心配は無いな、と手紙が来た。頑張らないとな、彰人」

あははは、すでに出来ていてもおかしくないがな。

大和
「すでに、未来まで大変とは、同情はしておくよ」

一子
「やっぱ。川神市の工業地帯と焼肉は合うわ。」

クリス
「お前は何を言っているだ？」

そんなこんなで、歓迎パーティーは終わった。そして、他の女子連中は風呂に行ってしまった。そして俺と大和、キャップは夜からバイトのようで早々に消えてしまった、そして今やっているのは

クッキー
「これで、どうだ！」

大和
「ふ、ふ、ふ。そこはジョーカーだ」

クッキー
「な、なんだって」

そう、大富豪をしながら、暇を潰していた。

彰人
「それじゃ、スペ3で」

大和
「う、きょ兄弟。それは」

彰人
「それじゃ、俺は六の革命で、お終いだ」

クッキー
「うわ、また彰人の勝ちか、大和のと同じくらいの頭が回るんだね。それなら」

クッキー2
「この私と、チェスでもどうかな？」

なんで、変形するんだよ、とその時

“ドガァァァァァァァァァァァン”

いきなりの爆音に、ビックリした、そしていきなりドアが開いて

一子

「大和、彰人、大変、大変。女子風呂が爆発したわ！！」

なんとも、管理人さん呼んだ方がいいかな、それよりも百代は・・・・・まあ無事かな。しかし心配なので俺と大和は、そのまま女子風呂に向かった。

##第二十三話##（後書き）

はい、そういうわけで、なぜか体育祭です。しかも予行とかあるので二回も競技場にいかなければならない、なんてダルい。あ、すいませんここでぐっちてもしょうがないですね。それでは次回をお楽しみに

バイバ～ィ

##第二十四話##（前書き）

二十四話掲載です。

##第二十四話##

轟音とともに、二階に行って見ると、そこには一応、全員服は着ていたのだが、

彰人
「一体、なにがあったんだ、百代？」

そう、なぜか女子の風呂場が無くなっていた。そしてそこに管理人である、麗子さんが来た。

麗子
「まったく、人が記憶を思い出すところで泣いているのに、ってこれはどうしたんだい？」

一子
「記憶を戻す？」

大和
「韓流ドラマだろ」

いや、いや、冷静にそこを指摘するな。まあ、いきなりこうなればな、ってまさか

彰人
「おい、百代。もしかして壊「して無いからな、私はどちらかというと」」

クリス

「私を助けてくださいました」

クリスがそう言うが。

麗子
「それで、一体なにがあったんだい？」

百代
「えーと、だな簡潔にしか述べられないから、簡潔に言う」

なんて、説明の仕方だよ。

百代
「お風呂に入った、そしてら変な音がした、そして爆発した。」

なんだそりゃ、ん、ちょっと待てよ。

彰人
「すまん、入るぞ」

そして、奥に入り、ようやくそのわけが分かった。

彰人
「おいおい、麗子さんこれ、錆びて腐ってるよ、それで、この官が爆発したんだろ、ただでさえここは温泉ひいているんだから」

そして、そこにさらに大和も来て

大和
「てか、これでよく無事だったな。この配線とか剥きでてるし、そ

れにこれは、なんだ？」

彰人
「ああ、たぶんだが、これは浴槽？」

そう、なぜかそこには、百代のたぶん体の後のようなモノがついた、岩があった。

麗子
「そうなのかい、そりゃ、今回はごめんねぇ」

百代
「いいさ、私は無傷だし、それにクリスも無事、さらに言うならばけが人はゼロ、丁度ワン子は出ていたしな」

麗子
「ホントに、申し訳ないねぇ、これはやっぱ伸ばしに伸ばしたリホームが原因かねぇ」

そして、そのままこちらにお辞儀をして

麗子
「今回は、どうもね、もしかしたらけが人を出しちゃうところだったのに」

クリス
「いや、私は大丈夫だ、それに今回はモモ先輩に感謝しないといけない、ありがとう」

百代

「気にするな、きにするな。それに麗子さんも、別に今回は無傷だったし、それにお礼なら「百代」う、わかった、彰人」

麗子
「ホント、すまないね、一応そっちには連絡しとくから。それじゃ、今回の事で女子の方のお風呂はピッカピカにするから、工事が終わるまでは男子のお風呂になるね」

そして、なぜか落胆する、大和。あ、そうか、京か。

一子
「それじゃ、私は京に言ってくるわね」

彰人
「ああ、それが終わったら帰るぞ。」

一子
「は～い」

クリス
「それでは私は、上の一年生に言ってくる」

そう言うと、直ぐに一子が戻ってきた。

彰人
「お、早かったな。それで京の反応は」

一子
「え、え～と。混浴？」

大和
「入るのは、別だぁぁぁぁぁぁ～」

なんとも、ドンマイだ我が兄弟。

百代
「それじゃ、帰るぞ。ワン子、彰人」

彰人
「ああ、それじゃあな」

大和
「ああ、じゃあな。」

麗子
「ほんとにありがとねぇ」

そして、俺らは帰りだした。

一子
「ホント、いきなりビックリしたわ」

彰人
「それは俺のセリフだよ、人が大富豪しているときに、いきなりのあの爆発音だぞ。まったく一瞬だが、百代を心配してしまった。」

百代
「一瞬じゃなく、普通に心配しろよ」

そして、俺の頬を抓る

彰人
「いひゃい、いひゃい」

一子
「あはは、たしかに私は出た後だったから被害は無かったけど」

百代
「私は普通に、重傷でもおかしくなかったんだぞ」

彰人
「だろうな、クリスを庇い、さらには浴槽をもろに受けただろ、まったく無茶ばかりしやがって、お前に瞬間回復がなきゃ、普通に怒鳴って抱きしめていたよ」

百代
「う～、こういう時だけ、この私の必殺技を恨むぞ」

なんとも、百代は唸っている、そこに一子が

一子
「それじゃ、私は少し走ってくるから、二人は戻っていて」

そして、走り出す、一子。まったく元気だな、普通風呂入ったら眠くなるだろうに。

彰人
「はぁ～、ホントどうするんだ、百代」

百代

「う、今の妹を見ていても、やはり」

彰人
「見込みなしか。俺でもわかるがな、確かに努力ならばあいつは既に神だ、しかし、それでも」

百代
「才能の差か、川神院の師範代、これはそういうものだからな、これはどうしてもやれない」

彰人
「しょうがないさ、それにそろそろだろ、決めさせるか、諦めさせるか。」

百代
「ああ、それはジジイと話して、一学期が丁度終わった時に、私が決めることにした」

その時の百代の顔は、悲しそうであるが既に、川神院の跡取りの顔だった。

彰人
「そうか」

俺は短く言うと、百代の肩を抱いた。こんなことしか出来ないからな、俺は川神流じゃない、俺はその“資格”はないから。

百代
「よし、辛気臭いのはこれでお終いだ。」

そして、まあ空元気だろうが百代はそう言う。

彰人
「あ、そうだ。百代、お前今日、クリスを守るといういい事をしたから、俺からなんかしてやろうか？」

百代
「ほ、ホントか！」

なんともホントに元気になる百代。まったくこの彼女は、彼氏をなんだと思っている。

百代
「それじゃ、戻ったら、お風呂に入ろうな、しかも今回はすべてお前が私を洗うんだ。」

はい、なんて言いましたこの子。

彰人
「待て、百代。お風呂は既に入っただろうが」

百代
「関係なしだ、それになんかしてくれるのだろう」

彰人
「はぁ～、分かった、俺の負けだ。だけどなんで俺が洗うんだ、洗いっこならよくするだろうが？」

そう言うと、百代は指を立てて、ち、ち、ち。と指を動かし。

百代
「違うぞ、私はただ、彰人を見ているだけだぞ。そして彰人はただ私を洗うだけだぞ、もちろん体の隅々に髪もな」

女の髪は命ではないのか？しかしそれが要望ならばしょうがない。

彰人
「そんなもんかね」

百代
「そんな、もんだ。それに寝るのも一緒だからな」

彰人
「なにを当たり前のことを、それにこんなことがなくても、寝るだろうが」

百代
「♪～♪」

その質問に答えるように、腕にしがみ付いている、百代。そして、帰り、今日も終了。

Ｓｉｄｅ　まゆっち

まゆっち
「今日は、楽しかったですね。」

松風
「だけど、未だに仲間に入れない、これもまた結果だ」

まゆっち
「うわ～～～～～～～～ん」

今日も、一人で完結する、黛の娘でした。

Ｓｉｄｅ　ｏｕｔ

さて、今日も始まってしまった、この日曜日。てか久々の日本の日曜日だ、しかしやることが・・・・・あ、今日から普通に川神院で鍛錬でもするか。しかし

百代
「ふー、ふー、うー、彰人～～」

なんですか、この人は、なんでこんなにも無防備なんですか、完全に狙っているんですか。

百代
「チラっ」

て、おいおい。

彰人
「百代、起きてるだろうが」

百代
「う～、なんだよう。普通、こんな美人が無防備で寝ていたら、襲えよ～」

彰人
「なにを、朝からいいますか」

百代
「なら、夜なら？」

彰人
「も～も～よ～」

そして、俺らは起きた、しかし時刻は、まだ六時前であった、これなら少しは鍛錬できるかな。

百代
「あれ、ホントに起きてしまうのか、まだ早いぞ？」

彰人
「ああ、ちょっと鍛錬してくる。ま、寝ていたいなら寝とけ。」

百代
「う～、寝ろよ～」

そして、抱きしめてくる、百代。しょうがないな

彰人
「はいはい、それじゃ、これで、チュッ。んじゃ寝てろ。」

百代
「あ、う、うん。そうしとく／／／／／／／」

うんうん、素直に赤い顔を見て、役得役得。さてそれではいっちょやりますか。そして俺は川神院の中心で、本気になった。

彰人
「はぁーーーーーーーーっ！」

最初に、右、次に左、さらに上に上がり。

「この一撃だ！！」

そして、“右腕”を振り落とした。そしてそこにはなにもなくなった。そう、物もそして酸素すら、そしてその場は無となった。それは俺の腕なのかそれとも既に俺の腕じゃないのかわからない、しかしこの腕は一事で言えば、危険すぎるな、やはり、それにこれを人に向けたらどうなるか・・・・・考えたくないな、

「それじゃ、次はこの左腕か。それじゃ蛇、出て来い」

そして、俺の左腕は、いや体全体に巻きつく蛇、お前も大変だよな、そんなに鎖に巻かれてさ、しかし

彰人
「さすがに、見るなら普通に見てくれ、鉄爺」

そして、そこから鉄爺が現れた。

鉄心
「ほ、ほ、ほ。相変わらず、凄いのう、それにその右腕」

彰人

「うん、これが俺の奥義だよ」

鉄心
「そうか、しかし彰人よ、あの刀はなんなのじゃ？百代は触れたのじゃが、ルーや一子は触れるものじゃないのじゃろう。」

彰人
「ああ、そうだよ。あの刀は・・・・・・フツノ」

この言葉を言ってから、鉄爺はいつも開けない目を開けて。

鉄心
「それが彼の神殺しの刀。」

彰人
「ああ、その通りだよ。鉄爺、これは俺しか持てないよ、だって俺が“持つわけじゃないんだから”」

鉄心
「そうか、そうか。それでは彰人、一勝負はどうじゃ？」

この老人は、まったく

彰人
「いいよ、久々に本気でいくから、これも暴れさせるよ」

そして、俺は左腕を挙げて、そしてその腕で相手を指差し、

「行くよ、鉄爺」

そして、開幕を告げた、震度5ぐらいの勝負を。

##第二十五話##（前書き）

中間中。

##第二十五話##

Ｓｉｄｅ　百代

彰人が消えた後はその匂いを嗅ぐ、なんだろうな、これは安心するな。ホントあいつは私の中にいるよな、この数日。色々としたな、まったくあいつはなんであそこまで私の我が侭に、いやそうじゃないのか。あいつはあいつで楽しんでいるんだろうな、まあそれも惚れた弱みだな。私も乙女ということか。
そしてそれから一時間。私がまだギリギリの彰人の匂いを嗅いでいたら。そこでいきなり周囲が凍った。いや違う、その一番強いところに行ったら。私が勝つことの想像が出来ない、二人の戦いが始まっていた。

Ｓｉｄｅ　ｏｕｔ

さすが、鉄爺。俺の本気でも未だに動くか。

鉄心
「ほ、ほ、は～。よくやるのう、彰人よ、こちはすでに現役ではないぞい」

彰人
「そうかな、一応、さっきの一撃は俺でも決まったと思ったんだけどな、スネークバイドをいや、“鎖を解いた”スネークバイドを普通に止めているだけど。」

鉄心
「そうかのう、こっちとしては、すでにいき上がったりなんじゃがな」

彰人
「そう？それじゃ次で行くよ。それじゃ眠れ、蛇」

鉄心
「ぬ？なんじゃそれは」

そしてその瞬間、鉄心と言う名の人は、吹き飛んだ。

Ｓｉｄｅ　ルー

さっきからこんなに殺気を飛ばし続けているのは門下生に悪いので辞めてくださいヨと言おうと思いましたが、このルー・イー。不覚にも見ほれてしまったヨ。まあそれはそこに居るモモヨもそうなのだろうけどネ。しかしあの一撃はなんだネ。一瞬で鉄心先生が吹き飛んだネ。そして、それを見る彰人は・・・・怖かったヨ。

Ｓｉｄｅ　ｏｕｔ

彰人
「終了だぞ。鉄爺」

俺は右腕の力を一瞬使い、鉄爺を吹き飛ばした。

鉄心
「なんじゃい、なんじゃい。これではお主に勝てるわけないじゃろ

うが！」

なんだろう、この爺さん。駄々をごね始めたししかもいつの間にかルーさんに百代まで見ていたのかな。

彰人
「はいはい、百代もルーさんもそこで固まってないで。この爺さんをどうにかって」

そして、なぜか抱きついてきた百代がいた。どうかしたのか？

百代
「怖い、怖いし、なんか一瞬だぞ、一瞬彰人が消えるような気がしてな。」

そう思えば、百代はお化けや、ようは殴れないもの、“存在しないもの”を苦手とする。てかそれぐらいが弱点、しかしなんで俺がそれに属するんだ？

彰人
「なあ、百代。俺はここ居るから、そろそろ」

百代
「ヤダ」

なんとも、放してくれない。

彰人
「そろそろ、朝飯」

百代
「ヤダ」

たく、てかこの調子だと

彰人
「川」

百代
「ヤダ」

彰人
「山」

百代
「ヤダ」

ルー
「う～ん、どうしたもんかネ」

彰人
「いやいや、ルー師範代は、そこの爺さんを頼みます。俺は・・・・・どうにかします」

そして、ルーさんはそのまま鉄爺を引っ張って行った。そして百代をどうにか落ち着きさせて

彰人
「大丈夫そうだな」

百代
「ああ、すまんな彰人」

そしていつもと変わらず俺の腕にしがみ付いてきた、そしてその時

一子
「ここから強い気がってあれ？彰人にお姉さまじゃない。」

さっきまで走っていた、一子が帰ってきた、たぶん新聞配達のアルバイトだろう。しかしそこまで殺気を飛ばしていたかな？

一子
「それで、なんでお姉さまと彰人が抱き合っているの・・・・・・もしかしてエロ「ちかでは無いからな一子」ああ、そうなの」

そして、汗びっしょりの一子だった。

彰人
「これは、あんまり気にするな、そしてちゃんとシャワーを浴びて来い」

さすがに汗びっしょりのためにそのなんだ下着が

百代
「あ～き～と～」

あははは、なんだろう。さっきまで可愛かった、百代が。鬼に

彰人
「いひゃい、いひゃい。」

そしていつものどおり俺の頬を引っ張っている。ホントに痛い。

彰人
「それで、大丈夫か？」

百代
「あ、う、うん。そのなんだ、すまない」

いいよ、百代。俺を見て直ぐに“逃げなかった”だけ俺は救われたよ。

百代
「それじゃ、私達も朝飯にするか？」

彰人
「そうだな、それじゃ行くか」

そしていつものとおり腕を組んで、いや今回はさらに強く組んできた。俺は思った、あの腕はそんなに使わないようにしないとな。

Ｓｉｄｅ　大和

さて、今日も始まったな、しかし確か、昨日の夜のメールでカラオケだっけな？

大和
「しかし、眠いな」

クッキー

「さすがに、そろそろ起きようよ大和。京が朝ごはんを作っちゃうよ？」

大和
「はいはい、起きます、起きます！！」

俺はなんだが、よく分からないが俺の脳から危険信号を出した。

クッキー
「あ～あ、こんなに布団をぐちゃぐちゃにして。まったく、畳む身になってくれよ」

なんだろう、どこのお母さんだよ、このロボットしかし。

大和
「キャップは？」

クッキー
「携帯をご覧ください。」

そして俺は見ていたら

キャップ
「俺は今、富士のふもとに居る白い集団を見つけた、追うぜ！！」

と言う、メールが来ていた、出たよ、キャップ必殺の勝手に旅、もとい冒険。

大和
「それじゃ、今何時だよ、クッキー？」

クッキー
「そうだね、大体、十時ぐらいかな。あ、それに他のメンバーは大体居ないね。」

大和
「そうかい、そうかい」

そして俺は午後のカラオケと言う名の親交のために頑張ろう。

Ｓｉｄｅ　ｏｕｔ

そして午前中にやった鍛錬が終わった。

彰人
「なんだろう。さすがに百代もこれはどうかと思うが・・・・・・」

そう、現在、今日の今朝の死合いのせいか、そうなのか分からないけど、なぜここまで俺に抱きついている、彰人
「あーん。しかしこれはこれでいいな。まあその前にこれからどうするんだ？」

百代
「うーん、たぶんさっきと同じで、鍛錬かな？」

彰人
「そうなのか、俺は少し出るが」

百代

「そうか、ならば私も一緒に行こう。もちろん拒否権は無いぞ」

彰人
「はは、了解だ。それじゃ、昼飯がてらどっか行くか」

そして一息ついて

彰人
「さ、行くぞ、百代」

百代
「ああ、それじゃ、行くか。で、どこに行く彰人」

彰人
「七浜とかどうだ？」

百代
「お、隣町か。いいぞいいぞ。だけど、どう行くんだ？」

彰人
「もちろん、電車に決まっているでしょうが」

百代
「お金は？」

彰人
「自腹だよもちろん」

百代
「なんだとうーーーーーー、ここは彼氏が奢れよーーーーーーー」

彰人
「あのね、お金の管理ぐらいできなくて、どうするの」

百代
「なら、なんで彰人はあるんだよ。この前は無かったじゃないか。」

彰人
「ああ、俺はその時、三千円しか無かっただけで、鉄爺に帰国祝いで、案外お金は貰っているし、それにそろそろバイトもするんだから」

百代
「ぐ、さすがは私の彼氏。非の打ちようが無い。し、しかし、七浜なら走っても・・・・・・」

おいおい、さすがに走るはどうかと、まあ確かに走るのも一理か。まあ俺らなら掛かって十分ぐらいかな。

百代
「あ～き～と～」

しょうがないか

彰人
「はいはい、それじゃ、行こうか百代。それじゃ鉄爺、たぶん三時ぐらいには帰るから、それから鍛錬で」

鉄心
「うむ、行ってくるといい。こんな良い日に鍛錬ばかりは体に毒じ

ゃろう、特に彰人はのう。それから百代よもう少しは彰人を見習い、お金の方にも「無理に決まっているだろうが、ジジイ。私は直感で生きているんだぞ」はぁ～、その彰人、世話をかけるぞい」

彰人
「いいよ、これはもう手遅れだよ、たぶん中二ぐらいの時から」

一子
「いってらっしゃい、お姉さまに彰人。お土産はなんか食べ物が「誰が買うか」う～ケチ」

そして俺は、さっきから胴着だったので、着替えることにした、しかし

彰人
「そう思えば、俺って服ねえな。」

そう、いつも制服又は、胴着、よくてジャージのため、この前の歓迎会はジャージでした。まあしょうがないか、俺ってセンスが有るのだが無いんだがわからないため、ある奴にした、それはTシャツにジーパン。なんともシンプルだが、なんだろう百代の怒られそうだな。そして部屋を出ると、なんだろう、俺と変わらない服装の百代が居た。

百代
「遅いぞ、彰人。もう少しで入るところだった」

彰人
「おいおい、それは辞めてくれ。そして百代の随分とラフだな、格好」

百代
「そりゃ、彰人が、どんな服がすきか、まあ中学生のころの記憶は知ってるが、今は知らないからな。こんな感じの安全を攻めて見たと言うわけだ。しかし彰人は前から変わらず」

彰人
「ああ、これぐらいしか、ない」

百代
「まあ、何着てもかっこいいからいいとする。それじゃ七浜行こかー」

そして俺は川神駅を目指し、院を後にした。そして仲見世どおりに出た際

百代
「今度は、私の部屋で、ファッションショーだな。」

彰人
「なぜに?」

百代
「一応だ、一応。（本音で、ただ単に見てほしいなんては言えないな。私としては）」

彰人
「そう、ま、いいや了解」

百代

「それと、今度彰人の服選びだな、これはファミリー総出で。」

なぜそこでファミリーを使う。そしてそんな会話をしながら、川神駅に着いた。

##第二十五話##（後書き）

中間なんですけどね

##第二十六話##（前書き）

台風がくうううるる

##第二十六話##

さて、川神駅だが、次の時間は、あと三分後か

彰人
「百代、すぐに来るからな、てか・・・・・」

百代
「♪~♪」

彰人
「切符が買えないので、手を放して「ヤダ♪」・・・・・・さいですか」

まったく、この人は、ま、朝にあんな事があればしょうがないか。

彰人
「まあ、いいか。それじゃ、七浜は、これか」

そして、二枚の切符を買い、百代に渡した、口に。

百代
「ふへみふぉひお?（彰人、何故に?）」

彰人
「まったく、両手で俺の腕を掴んだまんまで、いるからだ」

百代
「恥ずかしいのか?」

彰人
「う・る・さ・い」

そして、電車が来て、そのまま乗っていった。なんだろう、視線が気になる。

彰人
「なぜだろう、視線が気になる」

百代
「私達が、似合いすぎるのだろう」

こいつはこいつだし、まあいいか。

彰人
「しかし、七浜か、懐かしいな」

百代
「そうだな、七浜は確か、揚羽さんの友達の・・・・・・確か久遠寺さんだったけな?」

彰人
「ああ、あの豪邸の」

そう、あの豪邸は一体なんなんだってぐらいの豪邸だった。確かに川神院も広いのだが、あれは一家族の土地じゃないだろう。

百代
「と、言うわけで、どこに行くんだ?」

彰人
「う～ん、どうしよう、まああの中華街は行きたいかな。」

百代
「ああ、あの中華街はたしか、熊のオススメがあったな」

彰人
「ああ、それは既に調査済みだ。おっと、そろそろ着くぞ」

百代
「あ、ホントだ、既にホームだ」

そして、俺らは七浜に到着。

彰人
「なんて言うか、そんなに変化は無いな。」

久々の七浜だが、なんにも変化は無かった。

百代
「彰人、秘密基地の時も言ったが、一年なんだぞ、まあそれでも私は「それも聞いたよ」分かっているなら、いい。」

まったく、分かっているからそういう顔をしないでくれよ。

彰人
「しかし、ここの公園は、懐かしいな」

百代

「お、ここはあれだ、私と彰人、そして揚羽さんと、その執事の・・・・「小十郎な」あ、そうそうそいつでよく取っ組み合いしてたな。」

彰人
「ああ、そうだな。あのときは結局、俺ＶＳ多数だったよな。百代」

百代
「あはははは」

なんだ、その顔は、確実にあの時はお前が最初だったぞ、確かあの時は

～幼少期～

百代
「う～、揚羽さんはお強いな」

揚羽
「うむ、我も常に頑張っているからな、しかし小十郎！！」

小十郎
「はい、揚羽様！」

揚羽
「なぜ、お前は彰人から一本も取れぬ、見よ、彰人を。すでに悠々としてお前の相手もしているぞ、我の執事にして情けないぞ」

百代

「いや、揚羽さん、あいつの相手は私と揚羽さん、さらにはそこに居る小十郎を混ぜても勝てるかどうかだぞ。だ・か・ら」

そしてさっきからこっちを見て、襲い掛かって来た。

～回想終了～

彰人
「うん、やっぱ。俺は大体襲われていたな。まあ大体、小十郎は物の三分で寝ていたな」

百代
「私が言うのは、いけないのだろうが、彰人は、人格外だと思うぞ」

彰人
「たしかに、お前と、鉄爺には言われたくなかったな」

百代
「あ、彰人。着いたぞ、ここだろ、ここ」

そして、百代が言うとおり、中華街にでた、そしてそこで非常に良い匂いの肉まんがあったため。

百代
「うまうま」

彰人
「うまうま」

二人で、頬張る事が決定した、しかしおいしいな、と俺達が和んでいたら

小さい女の子
「きゃっ！！引ったくり！！」

そして、そこに通る引ったくり、すばらしく

彰人・百代
「「空気を読めよ、このコソ泥が！！」」

そして、二人と肉まんを持ったまま、俺がまず相手の足を引っ掛け、そしてそれにより顔からこけようとしている、引ったくりに、顔面の蹴りをして、そして

彰人
「これは、おまけだ！！」

百代の蹴りにより、完全に仰向けになったところに俺がその腹を踏んだ、ようは浮いていた体を、おもいっきり踏んだ。

百代
「まったく、せっかくのデートだと言うのに」

そして、周囲から、大いなる拍手が聞こえた。

彰人
「さすがに、目立ったな」

そして、その時、俺が踏んでいる泥棒に一人の女の子がこっちに来

た。

小さい女の子
「あ、ありがとう。」

なんだろう、この子、なぜか少し大人びている？

百代
「なに、気にするな、私たちはただ単にデートの日にこんなのをしているアホを殴りたかっただけだ」

そして、数分後に警察につれて行かれた、顔や服が残念な泥棒、そしてそれを見届けて、俺らは帰ろうとしたんだが、

小さい女の子
「少々、お待ちください。そのお礼がしたいのですが」

彰人
「いいよ、別に、な、百代」

百代
「え、彰人。なにかして「な、百代」・・・・・・う、うん」

まったく、この彼女は遠慮をしてよ、まったく、そしてさらにその時、

執事服の大男
「未有様、大丈夫ですか」

そして、そこに俺の知り合い居た。

百代
「なんだ、あの男、中々倒しがいがありそうだな。」

いやいや、そういう事ではないのだが、

未有
「ええ、大丈夫よ。大佐、そこの二人組みの夫婦の人に助けてもらったから」

いや、いや、俺ら、まだ夫婦じゃないんですが。

百代
「彰人、私達が夫婦だと、夫婦だぞ、夫婦。」

いや、そのハイテンションは一体なんなんだ。

大佐
「お二人が、未有様を、それはこちらとしてもお礼を・・・・・・・
彰人殿ではありませんか」

そして、俺にきづきその大佐もこちらを向き直った。

未有
「あら、大佐の知り合いかしら?」

百代
「なんだ、彰人の知り合いか、しかしどこで知り合ったのだ?」

大佐

「そうか、あなたが未有様を」

彰人
「気にするな、大佐。これでも俺はただデートにここに来ただけだから。」

百代
「ああ、そうだぞ。私が、彰人の彼女の川神百代だ」

いやいや、そんなに威張らなくても。

大佐
「は、は、は。そうですか、あの武神すらも彰人殿にすれば女と言うわけですな」

やはり、百代は案外有名人だな。

未有
「大佐の知り合いなら、尚更、こちらもお礼がしたいは、たしか今日は」

大佐
「はい、今日は、あの小僧と、森羅様以外は家に居ますが」

未有
「また、あの二人は。結婚式、挙げてからベタベタしすぎよ！」

なんか、あちらも俺らみたいなのがいるらしいな、しかし森羅？

彰人

「すまないが、森羅って、もしかして大佐」

大佐
「なに、立ち話もなんですから、どうぞ、一度、私が仕えている、屋敷。それでよろしいですね、未有様。」

未有
「ええ、それでお願い。ごめんなさいね。だけどこれもちゃんとしたけじめだと思ってほしいは、そうで無いと私も気がすまないからと、言うことで私の家でお食事でも。あ、そう思えば名前を言ってなかったわね。私の名前は久遠寺未有。それで彼方達は学生？」

彰人
「ええ、俺らは隣町の川神学園の学生です、それで現在も俺の腕にしがみ付いているのは、川神百代って言います。」

百代
「ああ、よろしくな」

なんとも、この人は

彰人
「それで、俺は、御剣彰人って言います。大佐とは、まあ色々な仲ですよ」

未有
「あら、そうなの。それなら私の方が年上のようね。だけど、貴方達、傍から見るとすでにカップルと言うよりも、夫婦よ、しかもオシドリの。」

百代
「そうだとよ、彰人～。しかし、年上？」

未有
「ええ、彼方達よりもずっと上ね、まあいいわ。ちょうど大佐も車の準備が出来たみたいだし。」

そして、俺らは車にて、久遠寺家に向かうことになった。

##第二十六話##（後書き）

すごいことが起こりました。なんと君主のキャラが出せました万～
歳。ちなみに森羅様ルート後のお話ですので、これからもよろしく
お願いします。

それではバイバ～ィ

##第二十七話##（前書き）

二十七話です、はい。

##第二十七話##

さて、俺らは大佐の車に乗り込んだ、そして百代がこんなことを言い始めた。

百代
「その、彰人とは、どういう関係なんだ?」

初見で大佐にため口とはさすがだよ、百代。

未有
「ええ、そうね、私も知りたいわね。それにこの私でも川神の苗字の事はよく知っているけど、そちらではなく、こっちの子が大佐の知り合いとは驚きね」

大佐
「そうですな、彰人殿「彰人でいいと何回言ったら分かるんだよ、大佐」それはできませぬな、この田尻耕、あのような物を見せられてしましましては」

彰人
「はぁ〜、まったく」

未有
「なにかしら、あなた。大佐が敬語って、私や、お姉さま、それに妹ぐらいなのに。」

彰人
「まあ、ガチの殴り合いをした仲だよな、大佐」

大佐
「はい、未有様。そして私の完敗でした」

未有
「なんですって！大佐の完敗ってあなた」

百代
「なんだ、彰人が勝つのは当たり前だろうが？それにあなたも中々だが、私よりも弱いようだな、まあ勝負してみたけどな」

未有
「さすがわ、川神の武神、いえ世界の武神」

百代
「いや～、それ程でもあるか？」

未有
「なんでしょう、なぜか姉さんと話している感じがするわ」

そして、車は目的地に到着。

大佐
「それでは未有お嬢様達はお先に降りてください。」

そして、俺らはリムジンから降りた、てかなんなんだ、ここは。

百代
「やはり、久しぶりに来ても、ここはひろいな～」

なんとも、さすがは豪邸、しかも凄くデカイ。

未有
「あら、久しぶりとは？」

彰人
「ああ、その、俺ら一度だけ、ここに来たことがあるんですよ、確か、揚羽さんの友達のたしか、夢さんだったかな」

未有
「へぇ～、あの九鬼の、ああ、なるほどね。まあそんなのはいいわ、どうぞ中へ」

そして、中に入ると、そこには

メイド
「あら、未有ちゃんおかえりなさい。」

主をちゃん付けで呼ぶメイドが居た。ていうか、この人、隙がねえ。

未有
「こら、美鳩。お客様の前よ、そして私の事は様付けで呼びなさいと何度も言っているでしょう」

美鳩
「あらあら、お客様でしたか、これは失礼を、私、未有お嬢様の専属の上杉美鳩と申します」

そして、一礼する、メイド。

百代
「ああ、よろしく。私は川神百代だ」

美鳩
「あらあら、川神の武神さんですか？」

やはり、百代は有名のようだ、そして奥から眼帯のつけた執事が来た。

執事
「あ、未有様おかえりなさい。さっき大佐の車を見たから、ってお客様？」

そしてこちらに気付いたようだが、なんだこの家は、昔はここまで人は居なかったような気がするが？

未有
「ええ、それでベニスはいるの？」

執事
「うん、居るよ。ちょっと待ってて」

未有
「それでは、申し訳ありませんが、美鳩、案内を」

そして、その未有って子はどこかにいってしまった。そして俺らはその美鳩さんについて行く事にした。

美鳩
「今日は、なぜこちらに？」

百代
「あ、それが、あの未有さんって人を助けたっであっているよな、彰人」

彰人
「まあ、大体はそうだな。それでお礼がしたいって事で、食事でもと」

美鳩
「なるほどです～」

そして、案内されて、来たのは大きなテーブルがある、所だった。
昔は、庭で遊んだ事ぐらいしか覚えていないが、やはりデカイな。

百代
「ほんとにここは家なのか？」

美鳩
「私たちも始めて来たときはそう思いました。」

彰人
「やはり、昔から居る、メイドさんではないんですね」

美鳩
「あら、ここには何度か？」

彰人
「いえ、一度だけ、それも随分と昔ですね、九鬼の揚羽さんのお友達が、ここの娘さんとかで」

美鳩
「ああ、夢お嬢様ですね、今は大学で講義を受けていますね」

百代
「それにしても、久遠寺って言えば、かの有名な、あの指揮者の家だよな」

誰だ、それ?俺はクラシックに興味が無いし、基本テレビを見ない人なので、知らない。

未有
「あら、姉さんの事ね。まあ今は夫とともに、お出かけのようだけど」

なんで、この人、疲れた顔をしている人。

大佐
「彰人殿、それではこちらへ」

未有
「ええ、そうね。うちのシェフが、もといメイドが腕を振るうは」

そして、そこにはメイドが料理を運んできた。

ポニーのメイド
「お客様のお口に合えばよいのですが」

そして、運んできたのはイタリアンの料理だった。

百代
「おお、これはうまそうだ！」

なんだろう、この彼女は、遠慮が無い。

大佐
「それにしても、彰人殿はいつ日本に帰ってきたのですか？」

彰人
「ああ、最近だ。こいつを待たせていたからな」

丁寧にイタリアンのパスタを食べながら、居たが

ポニーのメイド
「あ、けど大佐。その彼とはどういう関係で？」

まあ確かに、こんな大男が俺なんかの奴に敬語だからな。

彰人
「ああ、そうだね。大佐、話して「帰ったぞ～」」

と、その時、玄関からだろうが、女性の声がした。

ポニーのメイド
「お帰りなさいませ～。森羅様～♪」

そして、さっき、この料理を作ってくれた、メイドが、大慌てで、駆けて行った。

大佐

「まったく、あのばか者が、お客様がいるというのに」

未有
「はぁ～、姉さん」

なんか、凄く疲れた顔をなさっていますね。

森羅
「なんだ、なんだ、客人か？ベニス」

ベニス
「はい、なんでも未有様を助けてくださったらしく」

森羅
「なに、うちのみうみうを助けたのか、それならば私からも礼を言いにいかないとな」

そして、さっきから、廊下から声が丸聞こえなのだが、そしてその森羅と言う人がきた。

森羅
「私は、久遠寺森羅と言う。そこの未有の姉だ。今回は助けていただき、ありがとうございます」

さっきの廊下から聞こえてきた、人とは思えない程の威厳のある人が居た。

未有
「姉さん、さっきの会話、丸聞こえだったわよ」

大佐
「森羅様お帰りなさい」

森羅
「ああ、大佐ただいま。」

そしてその、森羅さんの後ろに執事服の男の人を見つけた

執事
「おい、大佐。これはどこに置けばって、なんだお客か？」

大佐
「こら、小僧が。このお方を誰だと思っている！」

執事
「え、もしかして、ＢＩＰ？」

彰人
「ああ、違うから、そのなんだ、大佐も抑えて抑えて」

そして、大佐が今のも殴りそうな、拳を、俺はとめながら、食事を再開させた

百代
「彰人、食事中に立ち上がるのは行儀が悪いぞ。」

彰人
「ああ、すまん」

そして、食事を再開するのだが、なぜか、俺をガン見している、皆

様が居た。

彰人
「あ、あれ？」

執事
「あのう、森羅様。お、俺、夢でも見ているんでしょうか？」

森羅
「いや、錬。私もみたぞ、あの大佐が、この少年に従った。」

未有
「私も、最初見たときに、驚いたわ」

彰人
「うむ、うまかったな」

百代
「ああ、まさか。ここまで良い物が来るとは、思わなかったな。ありがとうございました」

そして、俺らは食事を済ませた。

未有
「いいのよ、私を助けてもらったのだから、当然よ。だけど、申し訳ないんだけど」

なぜか、その時、眼帯の執事が

眼帯の執事

「ごめんね、その時間があれば、大佐の関係を」

その時、俺は初めてこの人が、女性だとわかった、理由は声なんだが。

森羅
「すまないな、少年。私も気になるのだ。これでも大佐は、中々の者だからな。」

百代
「いいんじゃ、ないか。午後の鍛錬は三時からだろ、ならばここでその話でも良いだろう。ちなみに私に教えていないのは、今日の夜に精算な♪」

森羅
「なんだ、君たちもカップルなのか？」

百代
「ああ、最近、夫婦に間違われるぐらいのだがな」

おいおい、それは今日言われたことだろうが。

未有
「す、凄いわ。姉さんとタイマンを張っている」

錬
「はい、森羅様と、タイマンってお前の彼女、大物だな。」

彰人
「そうか、そう思えば、お前って執事？」

錬
「ああ、森羅様の専属の、上杉錬だ。さっき鳩ねえ、ああ、上杉美鳩の弟」

眼帯の執事（女性）
「それで、森羅様の夫、だよね。ちなみに僕は、ナトセ。夢の専属だよ。で、さっきの料理をだしたのが」

ベニス
「初めまして、私、ここのシェフと森羅様の専属を兼任しています。ベニスです」

彰人
「ああ、すまない。こちらもちゃんと挨拶をしていなかったな。俺は御剣彰人だ、そしてこっちが」

百代
「川神百代だ。」

百代がそう言うと、みんなの目が一瞬驚愕の目をした。

ナトセ
「あの、武神といわれている、川神百代さんですか？」

やはり、隣町とあってここでも百代は有名だった。まあ、さすがだが。

大佐
「それでは、私が、お話させていただきます。彰人様と出会ったの

は、彰人様が幼少のときですな」

##第二十七話##（後書き）

君あるがいっぱいだ～～～～～～～～～。

・・・・・・以上です、ごめんなさい、ネタがありません。バイバ～ィ

##第二十八話##（前書き）

・・・・・・二十八話で・・・す

##第二十八話##

彰人
「あれは、俺が当時十二才の時か？」

大佐
「そうですな、あのころは私も若かったですからな」

百代
「十二才と言うと、私が十三才だから・・・・・山修行の時か？」

彰人
「ああその時だ。その時、あの時は揚羽さんも居たからな。」

～少年時代～

今日は鉄爺に連れられて、山に来た、最近の僕の鍛錬が甘いだって

彰人
「ねえ、鉄爺。どこまで行くの？」

鉄心
「うむ、もう少しのじゃが。あ、いたぞ」

そして、その場所にいたのは、大きな男の人と、揚羽お姉ちゃんだった。

揚羽

「うむ、あれは鉄心殿と・・・・・・彰人か？」

そして、俺らは到着した。

大佐
「うむ、鉄心様、お久しぶりです。それしてもその子は？」

鉄心
「ほ、ほ、ほ。田尻殿、ほれ、彰人挨拶を」

そして、鉄爺が僕を押した。目の前にいる大きな人に礼しながら

彰人
「初めまして、御剣彰人です。」

大佐
「うむ、中々礼儀正しい子ですな。私は田尻耕ですぞ、少年、私を呼ぶ場合は大佐と呼んでほしい。しかし鉄心殿なぜこの子を、確か予定では百代ちゃんでは？」

鉄心
「うむ、百代は来年じゃ、田尻殿、彰人はすでに百代を超えている者ですよ。」

大佐
「なんと、そうですか、それでは、鉄心様」

鉄心
「うむ、頼んだぞい。彰人よ、修行に精を出すが良い。それと、“あれ”を許可しとくぞい、ここでは本気でよい、最近お主が寂しそ

うな顔をするのがわかったのでな。それではの彰人」

彰人
「うん、それじゃあね。鉄爺」

そして、鉄爺は、どこと無く消えていった。そして残ったのは、僕と揚羽お姉ちゃんと、この大きな人だけだった。

大佐
「うむ、私も今回は古くからの友人である、帝様、そして私の師匠の鉄心様の頼みにより、これより私のエレガントな武術を教える、用意は良いか？」

彰人・揚羽
「「はい！！」」

大佐
「うむ、いい返事だ。しかし少年、まだ少年の実力をしらん。揚羽様には申し訳ないが」

揚羽
「ああ、田尻殿、大丈夫だ。しかし、田尻殿、彰人を甘く見ないでやってくれ、一瞬で消えてしまうぞ。」

大佐
「はい、それはすでに鉄心様の目を見れば分かりますがゆえに、それでは少年」

彰人
「うん、お願いします」

そして、僕を、鉄爺が言ってくれた通り本気の殺気を大佐に当てた。

大佐
「（な、なんじゃ！この気は。既に私すら凌駕しているというか、うむ、このような少年に私が）」

彰人
「来ないの、なら行くよ」

そして、僕は大佐に本気の速さ、本気の力で相手をした、いつもは釈迦堂さんぐらいしかしないけど。あの人なぜかいつも本気で来いって言うんだもん。

そして、僕の速さに大佐もついて来るようだけど、ギリギリかな？

彰人
「これなら、百代の方が数倍強いよ、大佐」

そして、右フックを相手に入れたがガードされたため一度引いた。

大佐
「そのようですな、“彰人殿”。それでは行きますぞぉぉぉぉぉ。」

そして、さっきよりも数倍の気が出てきた。なるほど、僕と一緒で、抑えていたんだ。

大佐
「私もこれでも、元は兵士の端くれ、行きますぞ、流派！！この田尻耕が、最終奥義！！！」

揚羽
「ま、まさか、田尻殿それは、田尻殿の必殺技の」
そして、変なポーズを取り始めている、大佐。だけど一瞬たりとも隙が無い。ならば
彰人
「さらば――――我は求め訴えたり、喰らえ――――」
揚羽
「え、彰人なのか？なんなんだ、あの顔、あの殺気は」
大佐
「岩破天驚けぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇん！！」
彰人
「その毒蛇の牙を以て！」
そして、俺は大佐の出した、その気の攻撃ごと。
揚羽
「そんな、馬鹿な。田尻殿の必殺技を、力で押し返し、さらに」
そう、僕は、人殺しはいけないから
彰人
「一応、首の寸止めだけど、大丈夫ですか」
大佐

「私の負けのようですな。（しかし、私の技を力で勝っておきながら、寸止めできる余裕があるとは、しかし鉄心殿、なぜ彰人殿をこちらに向かわせたのか分かりましたよ。彼はあの時、あの目は間違いなく戦士の目、しかも洗礼も無く、ただ相手を殲滅するだけのまるで機械兵士（マシン・アーミー）。なるほど、だから私にですか、この田尻、頑張ってこの心を変えてみせますぞい。）」

揚羽
「フハハハハハハハハハ。だから言ってであろう田尻殿。彰人は異常なのだよ。それで私らの修行は？」

大佐
「そうですな、それではまずこれを。」

そして、出して来たのは卵。

彰人
「卵？」

僕は不思議に思った、なぜ卵。

大佐
「それではお二人には、これを積んでもらいます」

そして、大佐は目の前で、卵を二つ卵の前で積んで見せてくれた。

彰人
「す、凄い・・・・・・」

そして、卵積み開始。しかし

揚羽
「中々できぬな」

彰人
「う～ん、ただでさえ最初の卵を立たせるのにも苦労するのに。」

揚羽
「なに、彰人は、既に一段目は出来ているのか。」

大佐
「は、は、は。揚羽様も頑張りください。しかし、彰人殿なぜに右なのだ、私はてっきり左利きだと思ったのだが」

彰人
「あ、うん、大佐。これはそういうもんなんだよ。」

そして、あまり見せたくないけど、蛇を見せた、僕の左腕に巻かれてる蛇を。

揚羽
「なんだ、それは！」

揚羽お姉ちゃんは、完全に怖がっていた。

大佐
「これは、失礼を。」

そして、俺は蛇をしまった。そして、俺らの修行が始まった。

俺はそこまでを話した。

森羅
「大佐、卵で修行とは、また斬新だな。」

大佐
「恐縮で有ります。」

錬
「だけどよ大佐。俺にはそんなことしなかったな」

大佐
「当たり前だ小僧。お前と彰人殿を一緒にできるか、基本の差も然ることながら、武に対する接し方も違うのだぞ」

ナトセ
「へぇ～、大佐がそこまでいうなんて意外だね。」

美鳩
「ホントですね、錬ちゃんはただ叩き潰すだけですのに」

彰人
「へぇ～大佐が相手しているんだ。」

森羅
「ああ、私の執事として、ある程度は強くないとな。」

未有
「だけど、偶に見にいくと、いつも姉さん心配そうな目をしている

わよ」

森羅
「な、みうみう～／／／／／／」

百代
「しかし、彰人が山篭りでそんなことをしていたとはな。」

彰人
「まあな、それにしても、大佐がここの執事とは」

大佐
「そうでしたな、彰人殿にな言っていませんでしたね。たしか揚羽様とここに遊びに来た時は私が遠出をしていたときですからな」

と、その時不意に時計の音が鳴った。

森羅
「そろそろ、時間のようだぞ、大佐。それに少年」

彰人
「え、しょ、少年って」

錬
「ああ、気にするな。森羅様のそれは初対面の年下の男にはそういうから、大体」

森羅
「なんだ、錬。お前もそう呼ばれたいか」

錬
「二度と嫌です」

森羅
「うんうん。よく言った。今日も可愛がってやろう。」

そして、執事を抱きしめている森羅さん。

未有
「言ったでしょ、一番最初に。貴方達と似ているのがうちにも居るって」

ベニス
「ホント、羨ましいわね、あのガキ。やっぱ夜中に」

美鳩
「あら、なんででしょう。無性に人を殺したく「やっぱ辞めたわ」・・・・・そうですか」

なんだ、一瞬、あの美鳩さんから驚異的な殺意が。気のせいか？

大佐
「それでは、私が車でお送りさせていただきましょう。」

彰人
「え、大佐。それは悪いよ、こんなにご馳走になって」

未有
「あら、その分貴方達の昔話もしてもらったもの。それでは大佐」

大佐
「はい、未有様。」

そして、大佐は外に出た。

百代
「それにしては、まさかあの有名な指揮者に会えるとはな。私も運がいいようだ。」

森羅
「ああ、私もまさか、武神に会うとは思わなかったな。しかももう片方は大佐を倒した者だしな。改めて、私は久遠寺森羅だ。森羅とは、森羅万象のすべても事を指す。」

百代
「ふ、私は川神百代だ。次期川神院、長(おさ)にして彰人の嫁になる女だ。」

森羅
「お、その最後の嫁になるの所はいいな、今度から私も言ってみよう」

そして、二人はがっしり握り合っていた。

彰人
「なんか、絶対に混ぜてはいけないものを会わせてしまったような。」

錬
「俺も、そう思うぞ、まあお互いがんばろうや」

彰人
「ああ、そうだな。お前も執事頑張れよ。」

錬
「ああ、お前は俺が行けなかった学業を頑張れよ」

彰人
「あ、そうなのか。ま、お前らも頑張れって、言っても結婚しているんだっけ」

錬
「ああ、既に式は挙げてるよ。あ、そうだ、ここで人生の先輩からアドバイス一つ。」

彰人
「ん？」

錬
「彼女の好きな飲み物は知って置けよ」

彰人
「既に、知っているよ」

錬
「はは。そうか、それならいいさ。それじゃあな、少年（笑）」

彰人
「ああ、それじゃあな。」

そして俺らも握手して玄関を出た。

##第二十八話##（後書き）

アハハハハハハハ、とうとうこっちの小説がスランプで～す。

##第二十九話##（前書き）

はぁ～、帝劇ってなんだぁぁぁぁぁ

##第二十九話##

さて、結局、デートっぽくない、デートを終えて、現在、午後の修行に励んでいる。まあただ単に、百代は俺に攻撃をして、俺が命懸けで、避けているだけだが。

百代
「やはり、お前との組み手が一番いい。私がこうして本気で攻撃しているのに、お前は顔を変えずに避け続けている。そらそらそらそらそらそら」

彰人
「ちょ、それは。まあいいか、せやせやせやせやせやせや」

俺は彼女の攻撃を凌ぐ、２００９の春。

Ｓｉｄｅ　大和

さて、今日は今日で、映画を見たわけなんだが、あまり面白くなかったな。まあ話題のストックにはなったかな。すでに時間も夕暮れ時でもある、そして俺の部屋に戻ると。

大和
「ただいま～」

京
「あなた、お布団の用意が出来ていますよ」

なぜか、京がいました。

大和
「離婚しよう、もう終わりだ俺たち。」

京
「お、おままごと中に、容赦ないリアリズミが・・・・・・」

そして、落ち込む京、そこに現れたのは、キャップ

キャップ
「あ、丁度良かった。今、電話しようとしていたんだ。」

そして、俺を部屋から出して。

キャップ
「バイト疲れで爆睡から覚めたら・・・・・・あんな光景が」

そして、キャップが台所の方に指を指した。

大和
「？なによ」

黛
「あ、直江先輩、お、おかえりなさい。今日は私が、皆さんのご飯、作りますから」

俺は訳がわからず、近くに居た、クリスに聞いた。

大和
「どうなっているんだ、クリス？」

クリス
「・・・・・本人に聞けばいいだろう」
やはり。まだ怒っているようだ。
京
「焼肉のお礼だって、料理得意らしいよ。」
大和
「おお。それはわざわざ有難う！！」
黛
「あ、いいんです、いいんです。お礼にぜひ食べてほしいんです！！」
一年生の瞳には、決意の炎が宿っていた。
キャップ
「なにやら、気合入ってるだろう、こりゃあ楽しみだ」
確かに、気合は入ってそうだ。
キャップ
「それに食材も見る限り、豪華じゃね」
京
「これから、モモ先輩たちを、ケータイで呼ぶところ。」
キャップ

「じゃあ、俺はモロ行くから、大和は岳人な」

大和
「あいよ。だけどあの二人なら一緒に居そうだが」

・・・・・・・・・・大串スグルの部屋――。

スグル
「げっ、早くもこの作画崩れ始めているぞ、この新番アニメ」

モロ
「三話までの作監さん、あきらかに違うねこれ」

スグル
「うー。今期ははずれが多いな～、時間も被るし。その点オータムは違うな。流石、滋賀アニだな」

モロ
「あれ、キャップから電話だ。なんだろう」

スグル
「お、それはオータムのＯＰか、フフやるなモロ」

・・・・・・・・・・・・・・・・・・

キャップ
「モロ晩飯来れるってさ、スグルとアニメ見ていた」

大和
「アニメじゃ、岳人とは別行動が。電話電話」

そして、電話をかけると

岳人
「おいおい、今女とやっているんだから、電話かけるなよ」

そして、俺は電話を切り。

大和
「（プツッ）岳人電話にでないや」

直ぐに岳人から電話が掛かってきた。

岳人
「冗談だよ、直ぐに切るとか結構Sだな。お前」

大和
「女子高生の飯が食えるぞ、夕飯食いに来い」

岳人
「マジで!?イェェェェイ。これで女の手料理食べたことのない奴より俺の方がモテているぜ。って、それまさか、京の激辛殺人料理じゃないだろうな」

大和
「寮の一年生の女の子が焼肉のお礼だってさ」

岳人
「・・・・・・なんだ後輩かよ」

あ、そう思えば岳人は年上派だったな。

大和
「で、来る？来ない？」

岳人
「日課の一人Hして、イッてから行くぜ」

馬鹿な奴なので即行に切った。

大和
「（プツッ）岳人来るってさ」

京
「声大きいから聞こえていたよ、セクハラだよ、あの男」

そして、次に続いた。

京
「それで、大和は日課なのかな・・・きゃっ恥ずかしい」

大和
「お前も、セクハラだよ。同じように聞かれたらどうするんだよ」

京
「お望みなら、詳細に言うよ。えっとまず枕を大和に見立てて・・・・」

なんてことをこの子は白昼堂々というのかね。

大和
「ごほん、それで川神シスターズ、またはうちのオシドリ夫婦は来れそう？」

さすがに、さっきの話題は俺も精神がもちそうにないため話をに変えた。

京
「モモ先輩は、彰人に抱きついてくるって」

大和
「ああ、なんでだろう、容易に彰人が道行く人に睨まれるのが浮かんでくるな。」

京
「あ、ワン子はウサギ飛びしながら来るって」

大和
「普通に、ここに来れないのか、あの川神院に住んでいる者たちは」

京
「あ、それと、彰人からの伝言、大和、なぜ、うちの嫁と妹は普通に歩かないんだ、お前の教育か！！、だって」

俺は、兄弟に臥床しながら、来るのをまった。されど、先から視線が気になる。

クリス
「・・・・・・ジロジロ」

未だに視線を感じる、２００９春。

京
「大和、さっきからクリスに睨まれているね」

大和
「実は、今日の朝うっかり、着替えシーンに出くわしてだな」

京
「・・・・・！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！」

そして、それを聞いた京は完全なＯｒｚの形になり

京
「・・・・・・寝取られ・・・た」

なんと、大げさな

大和
「一瞬下着を見ただけであってだな」

クリス
「んっ！！」

京
「視姦寝取られされた、これは地雷ゲームの予感」

それは、どういう日本語だよ。

大和

「だから、俺は偶然クリスの下着姿を見てしまったわけで」

クリス
「見た見た、うるさいぞ！！」

そして、盛大に蹴りを喰らった。

大和
「ぐ、ぐはっ。す、すまん」

クリス
「まったく、直江大和、お前という男は。何故に彰人殿と兄弟とも言われているのに・・・・・・」

いや、兄弟を天秤にかけられても、と、そこに京が間に入った。

京
「一撃は、乙女の怒りでわかるけど・・・・・・もう一発入れるなら、私が相手する」

クリス
「べ、別に京と、揉めるつもりはまったくない。」

あ、あれ、なぜにこうなる？

大和
「いいって京・・・・・ギクシャクしてるなー、良くないぞ」

キャップ
「今の流れはお前のせいじゃね？ってか、クリスは昼なに食ったん

だ」

クリス
「ＩＮＡＲＩ寿司だ！！！！！！！！」

声高らかに、テンションを上げて言ってきた。

クリス
「朝食べたら、おいしくて、昼も、おいしくいただいたんだ」

どうやら、日本の文化に色々と触れているらしい。

大和
「しかし、手馴れているな、あの包丁さばき」

キャップ
「なんか楽しみで、ついなんかしたくなるよな～」

なにもするなよ、と思いながら、他の連中を待ち始めた。

Ｓｉｄｅ　ｏｕｔ

さて、さっき電話があったため、俺は午後の練習を終えて、現在、百代と一子を連れて、島津寮に向かっている。しかし、一子よウサギ飛びどうかと、さすがに人の目が、あれ、なんだろう。またか、みたいな感じの目を向けているここの人たちが居た。まあそれはいいのだが、それよりもその後、なぜか俺を見て、睨んだりするのをやめてほしい。まあしょうがないか。

百代
「はぁ、今日も彰人に一撃も入れられなかったな。まあ本気で戦いたいが残しておきたいというジレンマにおそわれるな、まったく。」

一子
「あれ、だけどお姉さま、確か爺ちゃんに、」

百代
「ああ、なんでも橘天衣を、破ったものが北にいるらしくてな」

彰人
「え、橘？あの四天王の一人の？」

百代
「ああ、なんでもそうらしい。詳細は不明だがな。」

彰人
「それじゃあ、お前にも負けて、その誰かに負けたと言うことは橘は？」

百代
「ああ、ジジイが言っていたよ、剥奪だそうだ、まあそいつが倒しがいがあればいいがな」

一子
「ホントそうね、まあ、また一瞬だったりして・・・・・・」

百代
「そしたら、彰人に甘えて発散する。なあ彰人？」

彰人
「はぁ～、それにしても四天王に勝つ奴か、百代ぐらい強い奴じゃなくていいから、俺も戦いたいな。まあ朝の鉄爺の戦いで、まあまあスッキリはしたんだがな」

一子
「えええええ、見たかったな～。彰人と爺ちゃんの試合。」

しかし百代は強～い力で、俺の腕を締めてきた、しかも上目で・・・・・これは可愛すぎる。

一子
「??どうして、お姉さまと彰人、睨めっこしてるの?」

一子の言葉に俺は

彰人・百代
「「いや、なんでもないよ」」

見事に被ってしまった。

一子
「?～?」

百代
「まあ、それよりも焼肉のお礼とは、粋なことをするな、その後輩は」

彰人
「ああ、そうだな」

確か、そのブツブツ独り言を言っていた子だよな、まあ隙がまったく無かったのだがな。

そして、俺らは島津寮の前に来た。

##第二十九話##（後書き）

井上
「さて、今日はなぜかセットがあるＬＯＶＥかわかみ、もちろん司会はこの俺、キョｎ・・・・・井上準と」

百代
「久々の登場だ、どうだ、うれしいだろう。川神百代だ」

井上
「いや～ホントにひさしぶりですね～このメンバー。」

百代
「ああ、確かこの前のラジオ、すでに私たちではなかったしな。まあ彰人のラジオもしてみたいな～ってことでお前休め」

井上
「なぜか、俺の降格が決まりそうだ、まあいい今日はスペシャルだ、なんと俺の携帯に悩める子羊の電話が来ちゃうってことらしいぞ」

百代
「いつの間にそんなのが、まあいい早くやって、私は早く彰人とデートがしたい」

『お兄ちゃん電話だよ、お兄ちゃん、』

井上
「はいは～い」

百代
「気味の悪い着ボイスだな、おい」
続く・・・・・・・

##第三十話##（前書き）

わーい三十話

##第三十話##

そして、俺らファミリーは全員島津寮に集合した。そしてそこに並べられている料理は。

モロ
「なんか、料亭みたいだね、これ」

モロの言うとおりそこには、料亭ばりの料理が並んでいた。

百代
「なんとも、焼肉のお返しとは意気のいい事をしてくれるじゃないか、一年」

そして、現在も俺の腕を離さない百代。

クリス
「お、これは彰人殿、こんばんは」

彰人
「ああ、こんばんはだな、クリス。そして一子、少しは落ち着け、まだ完成してないんだからな。」

一子
「う～、だってすんごくおいしいそうなんだもん」

いやいや、そんな子犬のように俺に目をむけるな、それならばあの現在台所で料理をしている一年の子に言えよ。

京
「だけど、なんでモロと岳人も呼んじゃったんだろう、モロはいいけど」

岳人
「ああ、京てめぇ」

大和
「なんでだろう？」

キャップ
「さあ？」

クリス
「知らんな。」

全員して岳人の来た理由が不明。悲しいな岳人よ。

黛
「み、みなさん、すいません待たせてしまって、それでは料理が出来ましたので」

そして全員でその料理を見ると

キャップ
「うおお、こりゃ、すげぇな。」

モロ
「凄いってか豪華だよこれ、食材もいいのだろうし」

黛
「あ、それはうちの家が送ってくれてきたもので、うち、住んでいるのが北陸なんで」

なるほど、だからか・・・・ん?待てよ北陸だと、確か橘を倒したのも北の者・・・・・まさかな。

一子
「おいしいし、それにバランスもいいよ、バッチぐ～だよ」

おお、うちの一子にバランスを褒められるとは中々出来る子だなこの子。

黛
「ほ、ホントですか・・・・・良かった」

京
「あと、辛さがあれば、満点、おしいね後十点」

そして、いつものあの十点ポイントの棒を出した。

大和
「出ました、京先生の十点」

彰人
「まあ、京が満点を出した時は、大体の奴らの舌を殺すから、ある意味満点だな」

そう、前に京が満点を出した時はテレビで有名になった、激辛ラーメン、確か名前がゴジララーメンだったかな。それを俺らファミリ

ーで食べに行き、俺と百代は何とか食べきって、他は大体ダウンのところ、この京は二杯のお替りの跡に、最後に「まだまだだね」と、言って店を後にした、ちなみにそのラーメン屋は京特製ラーメンを開発したらしいが、どんなラーメンになるんだか、考えたくないな。

大和
「安心しろよ、一年生みんなおいしいってさ」

そしたら、その一年生は

黛
「ああ、よ、よかった・・・・・・・」

なんとも、泣きそうな声で喜んでいた。

大和
「オーバーだな。」

そして、飯も終わった。
その子は今現在、洗物をしている。うんうんこれが日本の大和撫子だよな。

一子
「う～ん、ふにゃ～・・・・・・ふにゃ～」

一子は既に寝むそうである。

百代
「よく食って、よく動いて、すぐに寝る。」

モロ
「まさしく、ワン子だね。しかもすでにモモ先輩に抱きついているし」

百代
「あはは、私の妹はかわいいからな！」

大和
「な、姉さん。俺と言う舎弟がいながら！」

そんな芝居に俺もちょっと意地悪なことをしてみた。

彰人
「そうか、百代は一子で十分なのか・・・・・・」

こんな感じで、俺ががっかりしてみると。

百代
「うわ～、すまない、彰人、本当にすまん」

そして、すぐに土下座に入った、うんうん、役得役得。まあそのぶん、それによっかかって居たので、

クリス
「なあ、直江大和。いつもお前らは仲がいいな。」

大和
「まあな、これが日常だからな。まあ仲はいいしそれに友達だしな」

岳人

「あ、大和すまねえ、この前借りた携帯ゲームのデータけしっちった。」

大和
「ああ、俺の労力分の賠償をしてくれればいいよ」

クリス
「おい、全然友達っぽくないぞ。」

なんともあちらはあちらで、仲良くやっているな。そしてその時、洗物が終わったらしく、一年生が来た、そしてその時不意にキャップが話しかけた。

キャップ
「それで、なんか話したい事があるんだろ?」

黛
「え、な、なんで・・・」

キャップ
「なんかそんな目でしていたからな」

すごいなキャップさすが俺らのリーダー。まあその前にうちの妹をどうにか・・・・・その時大和が一子の目の上にリップクリームを

一子
「う、うひゃ!!なにこれ目が、目がぁぁぁぁぁぁぁぁぁ」

叫びながら、じたばたしていた。

大和
「人の話は聞きなさい」

うんうん、よい教育だ。そしてその一年がこういった。

黛
「やっぱいいなこう言うの」

キャップ
「うん？」

そして、なんか独り言のようにブツブツ言っているが・・・・・・

黛
「その、お願いします」

いきなり頭を下げた。

百代
「いきなり頭を下げたぞ！！」

いやいや、解説しなくてもわかるよ百代。

黛
「その、私、前の北陸で、友達が出来なくて、こっちに来ても、その出来なくて・・・・・それで、いつもいつもその楽しそうにしていて、その、その・・・・・・」

そして意を決したように、

黛
「私も仲間に入れてください！」

そしてお辞儀をした。そして俺らはニュー○イプのように意思の疎通は出来ないので、集まり、ヒソヒソ話をした。

キャップ
「（どう思うよ？）」

一子
「（いいんじゃない、こんなにお願いしてるんだし）」

京
「（嫌だ）」

モロ
「（そうだよ、これじゃ上限が無くなるよ。）」

キャップ
「（ここは俺にまかせてくれねえか？）」

百代
「（いいだろう、顔を立たせてやろう、な、彰人）」

彰人
「（・・・・・・）」

そして、無視。

百代

「（あ～き～と～）」

そして、泣きじゃくりながら俺に抱きついていた。うんうん役得役得。そして俺らの話も終わり、キャップが黛に近づき。

キャップ
「え～と、黛由紀江さんだっけ」

黛
「は、はいっ！！」

キャップ
「今のままじゃ、俺らの仲間にはなれねぇな」

黛
「え・・・・」

キャップ
「そんな土下座まがいな事しなくても楽しそうだから入れてで十分じゃないか」

おお、すげぇ。キャップが本当にリーダーっぽいぞ。と俺が関心したが・・・・・・

黛
「それでは、楽しいので入れてください」

キャップ
「嫌だ」

彰人・モロ
「おおおおおおおおおおおおおおいいいいいいいいいいいいいいい！！！！！！！！！」

俺と、モロは一斉に突っ込みを入れた。

黛
「は、はぅ〜〜〜〜〜」

そして、倒れてしまった。

モロ
「あんたは鬼か！！」

キャップ
「あはは、冗談だ。よろしくな、ま、これでなんか変だったらその時だ、それでいいな京」

京
「うん。」

てか、倒れてしるんだけど

黛
「う、う〜ん？？」

あ、起きた。

クリス
「うむ、言葉だけで気絶するほどやわじゃないらしいな。」

キャップ
「と、言うわけで改めてよろしくな、まゆっち」

まゆっち
「ま、まゆっち！！」

キャップ
「あだ名？だめか？」

そして、まゆっちと称する一年は

まゆっち
「いえいえいえいえいえいえいえいえいえいえ、ぜ、是非！！」

大和
「だから、怖いって」

まゆっち
「やはり、そうですか。私、緊張すると顔が強張ってしまって。」

大和
「いや、それよりももっと原因らしきものが・・・・・・」

そして俺ら全員の目が現在も抱えている刀を見た。

まゆっち
「え、えーと・・・・・・」

モロ

「さすがに僕でも刀を持っている子はどうかと」

岳人
「あははは、確かに気が引けるよな」

まゆっち
「え～と、このお父様からもらった刀ですか？」

クリス
「なに、帯刀など、日本では当たり前ではないか？」

百代
「新人二人はボケボケだな～」

彰人
「はぁ～。ま、おもしろくなりそうなのは確かかな」

そして俺はトイレのため席を立った。

Ｓｉｄｅ　大和

百代
「それに、まゆまゆ。強いだろ？」

まゆっち
「え、いえいえいえいえ」

そして姉さんはいきなり

百代

「軽くパンチ行くからな、避けろよ。そらそらそらそらそら」

まゆっち
「え、え、ぇ（ひょい、ひょい、ひょい）」

そして普通に・・・・・・避けた。

一子
「ふーん、中々じゃない」

京
「確かに全部は見えたけど・・・・・・避けられるかどうか」

クリス
「すごいな、これが見切りというやつか」

百代
「まゆまゆはクリスよりか若干弱いかな（まあ今の状態でだがな）」

まゆっち
「いえいえ、私はそんな」

百代
「なにを言っている、黛十一段の娘が」

まゆっち
「父をご存知で？」

百代
「国からの帯刀許可、まあうちの彼氏も持っているが・・・・・・

あれは例外として。剣聖にしか出来ぬだろう？」

大和

「幻の十一段の娘。またもや、大型新人が入ってきたな」

##第三十話##（後書き）

井上
「それではこの前の続きです、はいもしも～し」

？？？
「もしもし」

百代
「なんか聞いたことがあるぞ、この声」

井上
「それではお悩み、聞きましょう、答えましょう」

モＯ
「実は最近、俺の知っている、友達と、その彼女が・・・・・・非常に熱いんです。どうにかなりませんか？」

井上
「ああ、これは確かに、お悩みかもしれませんね。独り身としては辛い、だけど他人の恋路ですかね～。モモ先輩どう思います？」

百代
「あ、別にどうもしなくていいんじゃないか」

準・モＯ
「「いや、あんたらに言っているから」」

百代

「おいおい、電話越しですら、私に突っ込みかよ。」

準
「それでは、対処方を説明します、一、その彼女が抑えるか」

百代
「あ～（怒り）」

準
「それは彼女さんに殺されるかもしれませんので、却下。二、・・・・・もうほっとけ以上」

モO
「え、ちょちょ『ピッ・・・・・ツーツーツー』」

百代
「それじゃ、今日のラジオは仕舞いだ。バイバ～ィ」

準
「御剣、カムバァァァァァァァァァク」

##第三十一話##（前書き）

さて、やっと全員が揃った。

##第三十一話##

Ｓｉｄｅ　大和

百代
「それではまゆまゆこれからは学校であったら気にせず話しかけてくれよ。それで～うちの彼氏は～どこに？」

姉さんは彰人がどこに行ったか知らなかった。

大和
「姉さん、彰人はトイレに」

まゆっち
「よかった」

松風
「よかったなぁぁぁぁ、まゆっち」

そしてまたもや、独り言を

クリス
「それで、それは一体？」

あ、クリスが聞いた。そしていきなり出てきたのは、ストラップだった。

まゆっち
「松風、ご挨拶を。丁寧にしなやかにそし優雅に。」

そして、そのストラップが

松風
「オラ、松風。まゆっちの友達だ、みんなよろしくな」

え。えーと声はまゆっちだよな・・・・・・・

まゆっち
「はい、よく出来ましたね松風。」

一子
「えっとそれは?」

まゆっち
「松風は、父上が作ってくれた、ストラップです。いつか友達が出来るようにと。」

京
「で、今まで友達が居なかったから、携帯は・・・・・・」

まゆっち
「はい、必要ないので、未だに買ってません。うぅ」

一子
「なんだか、かわいそうね、アンタ」

大和
「ワンコに同情されるなんて悲しすぎるな」

一子
「それどういう意味よ！」

キャップ
「それで、なんでそのストラップと話しているんだ？」

まゆっち
「はい、私。一人部屋に居るのがさびしくて話し友達が欲しくて、で松風に話しかけていたんです、そしてらある日」

松風
「ある日、オラに九十九神が宿ったんだぜ」

京
「と、いう設定なのね」

まゆっち
「せ、設定・・・・・・そんな身も蓋もないことを」

京
「腹話術みたいなものでしょ？」

まゆっち
「あの、それを認めてしまったら松風が松風でなくなってしまいます」

松風
「まゆっち、どこまでやさしい人間なんだ～」

一子

「ねえ今のって自分で自分を褒めたことになるのよね？」

キャップ

「そう考えると、いい根性してるじゃねえか、それにおもしろいし」

百代

「よし、それではまゆまゆに私たちが自己紹介だ」

百代

「川神百代三年、武器は拳一つ。好きな言葉は誠と彰人だ」

いやいや、最後のは人名だから。

一子

「川神一子二年、武器は薙刀。勇気の勇の字が好き」

クリス

「二年クリスだ、武器はレイピア。義を重んじる」

京

「椎名京二年弓道を少々。好きな言葉は仁・・・・・女は愛」

まゆっち

「一年黛由紀江です。刀を使います。礼を尊びます」

そして女子の紹介が終わり。

百代

「それであのバンダナが、キャップ。リーダーだ」

指で指しながら紹介。

百代
「いかにも馬鹿そうなのが岳人。面倒見はいい」

百代
「いかにも根暗そうなのがモロロ。優しくはある」

百代
「そして最後は私と彰人の弟分、大和。頭が回る」

モロ
「うわ・・・・・おざなり、根暗とか」

岳人
「俺のタフガイさが全然つたわらねえ」

キャップ
「女の子が強い次代になったな～」

やばい、これでは女子の影響力が増すばかりだ。

大和
「おい、またれや、男よ！」

キャップ
「軍師大和」

大和
「忘れたか、我々は力で勝てないのなら知力で勝てばいいじゃない

か」

大和
「勇気を忘れてはいかんぞ」

百代
「ふはははは、良くぞ言った」

そして俺は姉さんに連れられた。

大和
「え！？」

そして女子陣に引き込まれた。

百代
「彼が私たち女子は調子にのさせないだそうだ」

クリス
「な、なに！？」

大和
「異議あり、その表現は膨張だ」

百代
「却下」

そして腹部を殴られた。

大和

「ぐはっ、なんて理不尽な法廷だ」

百代
「法廷ではない、ここは獄中だ、そして私が牢主だ」

大和
「む、無法地帯だ」

京
「これはいじらなければいけないね」

わ～、俺の貞操が危機の危機だ。

大和
「俺はピンチだが、こう言うときは少年誌なら友人が」

キャップ
「じゃあな大和」

岳人
「俺様も男のプライドは捨てたくないね」

モロ
「さようなら」

百代
「ここは少年誌ではなく、ヤンクアニマルのようだったな」

京
「クク、性と暴力の都というわけね」

一子
「いい友達持ったわね、全員逃亡」

クリス
「情けない」

キャップ
「ふ、言ってくれるぜ」

一子
「それなら大和争奪戦でも「ああ、いいだろう」・・・・・・・え」

???
「ふむ、情けないか」

百代・一子・京・クリス
「「「「！！」」」」

そう俺がピンチの時に、俺の目に入ったのは、彰人と、その後ろに居る、皆だった。

Ｓｉｄｅ　ｏｕｔ

俺がトイレから出ると、なぜか男子と女子に別れていたので、俺は気配を完全に消して、見ていた。
そして大和が連れて行かれた・・・・・臥床。と、思ったのだが、しかしなんか癪だな。そう、なんで俺の紹介が無いんだ百代！これはオシヨキが必要だな。く、く、く。

一子
「いい友達持ったわね、全員逃亡」

ほう、言うなこの犬が・・・・・おっと危ない危ない、つい戦闘本能の赴くまま動きそうだった。

クリス
「情けない」

まあ確かに現在の状態は男子なさけなさすぎだな。と、その時キャップが俺の姿に気付き、

キャップ
「ふ、言ってくれるぜ」

そういうことか、しょうがない教えてやるとしょうかな、男の本気を。

一子
「それなら大和争奪戦でも「ああ、いいだろう」・・・・・・・え」

彰人
「ふむ、情けないか」

百代・一子・京・クリス
「「「「!!」」」」

彰人
「言ってくれるじゃないかクリス」

大和
「あ、兄弟ぃぃぃぃ」

百代
「そんな馬鹿な、私がちゃんと気配を・・・・・消していたのか」

彰人
「さあな、しかしそうだなぁ確かに、現在進行形で男子が情けないよね～」

そして百代と一子の顔が引きつり始めた。

百代
「あ、い、いやそ、それは」

彰人
「まあ、それぐらいなら俺も介入しなかったのだが・・・・・」

一子・百代
「「だが？」」

彰人
「俺の紹介が無いことに苛立ちが覚えたんだよ、この野郎ぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉ！！」

大和
「あ、そう思えば姉さん、紹介しなかったね。なんで？」

百代
「あ、いや、そ、それはだな」

彰人
「・・・・・・・」

そして大和を放して俺の足にしがみ付き。

百代
「だって、彰人の紹介なんてしたら、三時間は余裕で」

一同
「あ～」

納得のご様子、まあ今日は百代に色々したから、今日の夜はやさしくしてやろう。

彰人
「ふむ、そうかそうか百代、明日の学校は一人でこようか？」

百代
「え、え、え、え。い、いやぁぁぁぁぁぁぁぁ」

そして百代はムンクの叫びの如く床から膝をついた。

彰人
「おい、一子。お前は」

一子
「ぎょ、ぎょええ。ごめんなさい。だから、ご飯を少なくするのだけは」

彰人
「クリスは・・・・・・マルギッテに頼んで、人形を止めて」

クリス
「すまない」

そしてすばやく、土下座。

京
「く、ここまで強いとはさすがは彰人。だけど私だけでも大和をって、大和は」

大和は百代が放した瞬間にこっちに逃げてきていた。

京
「が、ガクシ」

キャップ
「さすがわ、うちの最終兵器。よくやってくれた」

モロ
「てか、これじゃ僕達の存在が危なすぎるよ」

大和
「まあ、何はともあれ、無事だ。そしてお前ら」

男子三人
「あ・・・・・・」

まあ大和の恨みは買いたくないものだからな。

彰人
「つうわけで、まゆっちと松風だっけ？」

まゆっち
「は、はい！？」

彰人
「御剣彰人だ二年、好きな人、てか俺の彼女は百代なのだが。まあ後は言葉で言うなら戦慄が好きだな、武器は刀・・・・・・いや俺自身だ。よろしくな」

まゆっち
「はい、よろしくお願いします。その～聞いて良いですか、もしかしてあなたは・・・・・・」

彰人
「さあ？」

そして、俺ら風間ファミリーは新しい仲間を今日さらに増やした。

時既に夜である、結局あの後、色々と新しいファミリーとドンチャン騒ぎをして、麗子さんに怒られて終了した、現在百代と歩きながら帰っている、一子は・・・・・・言わなくてもわかるだらう。

百代
「う～、彰人～彰人～。そんなに怒るなよ、な。」

彰人
「知らんな、知らんな。俺はまず怒ってなどいない・・・・・・」

百代
「う～。じゃなんで腕に抱きつかせてくれない、さっきから抱きつこうとすると避けるし」

彰人
「はて、俺はそんな事をしていたかな？」

少してか、完全に百代をいじめています。だってかわいいんだもん。なんだか今にも抱きついてきそうなその目がいい。

彰人
「ふ、冗談だ百代。それでは初心に帰るとしよう」

百代
「え、は、え？」

そして百代の手を握った。最近こっちの方が少なかったからでもあるが。

百代
「ああ、そういうことかそれならそうと・・・・・・いやなんでもないぞ彰人」

そして俺らは二人で帰路に着いた。

##第三十一話##（後書き）

今回はなんもありません、ごめんなさい・・・・・・ネタが、ネタが尽きました。

##第三十二話##（前書き）

三十二話は～じま～るよ～♪

##第三十二話##

さて、朝になってしまった。昨日はなぜか結局百代が駄々をこねてしまったために、一緒に寝たんだが・・・・・起きろよ、いい加減。

彰人
「おい、百代起きろよ。お～い、百代、百代さ～ん」

百代
「い～や～。後三分。」

彰人
「いや、結構意外と不味いぐらいの時間だ。そろそろ一子が起こしに来るてか、絶対来るぞ。」

百代
「それじゃ、後三十分」

彰人
「増えてるし、おい起きろこら、百代。まったく、こうなったら・・・・・モモちゃん」

百代
「う、それだけは辞めてくれ彰人。」

そして普通に起きた。

彰人

「おはよう、百代。」

百代
「う、おはよう。彰人その名前は使わないでくれないか。頼むから。」

ふむ、百代がそこまで言うのならオシヨキ以外では言わないことにしよう。そして襖があいた。

一子
「二人とも～おきて～、って起きてたし。おはよう」

百代・彰人
「「おはよう」」

彰人
「すまないな、一子。てかなんで既に体育着なんだ？」

一子
「あ、今日はこのまんま走ってこようと思って。それにさっきまで新聞配達だったし。それに今から走り込みよ」

彰人
「そうか、ま、頑張れよ。それじゃ俺らは着替えるから」

一子
「う～ん、了解」

そして走って消えていった。なんと言うか忙しい奴だな、てかバイトか・・・・・いいな。

百代
「それでは着替えるとするか」

彰人
「そして、普通に俺の部屋から何故お前の制服が出てくるんだ。」

百代
「勿論、それはここが私の部屋だからだ。まあ夜のアイテムでもあるな、彰人♪」

彰人
「あのな、俺の部屋な・ん・だ・ぞ。あと、なにが夜のア・イ・テ・ムだよ、んなもんいるか！！」

百代
「あ、ああ、そうか／／／／そのなんだ、飯にしようか」

彰人
「自分で言って自分で照れるな、そしてそうしような。」

そして、俺らは廊下に出て朝食を取りにいった。

彰人
「おはようございます。ルー師範代、鉄爺。それに修行僧の皆さん」

やはり、俺らが最後のようだった。

鉄心
「うむ、おはようじゃ彰人、モモも挨拶せい」

百代
「あ、ああ、おはよう、ルー師範代も、そして他も」

ルー
「おはようネ、オフタリサン。そう思えば一子は先に出てしまったヨ～」

彰人
「ええ、それは俺らも会いましたから、間違いありませんし。てか、百代？」

そして現在、鮭を食べている百代に俺は疑問が浮かんだ。

百代
「うん、どうかしたか彰人？もしかして口の周りにご飯でもついているか、ついているなら取ってくれ」

ああ、そうだったら俺が取ってやるってそうじゃなくて、

彰人
「なあ、今日の俺らの昼飯は？」

百代
「あ、そう思えば今日から学校だったな。あはは忘れていた」

しょうがいな、久しぶりに

彰人
「俺が作るとしよう、時間的には後十五分か。残り物で作るか。そ

んじゃご馳走さん」

そして俺は席を立った。そして後ろから聞こえてきたのが、

鉄心
「はぁ～ホントに彰人はいい子だのう。それよりもモモ、少しは彰人を見習ったらどうじゃ。それに今後のこの川神院にとっても彰人は重要だぞ」

百代
「それはわかってるっての。てかそこまで言うんならジジイ、川神院に入れればいいじゃないか彰人なら一瞬だろ私よりも強いんだから」

ルー
「ふ～む」

鉄心
「そう言ってものう、彰人は・・・・・・」

あはは、困っているよ。まあしょうがないか、俺は川神院には“絶対入れない”からな。

彰人
「いいんだよ、百代。俺はお前の隣に居れれば。それと百代、明太子と鮭どっちがいい？」

百代
「あ・・・・・ああ、明太子で頼む。ああ／／／／／／」

そして真っ赤になった顔を見た、うんうんかわいいな。

ルー
「それにしても彰人はエプロンが似合うネ。しかしそろそろ時間だよ。私たちも行きませんト鉄心殿」

鉄心
「ホ、ホ、ホ．そうじゃだったな。それではのう、モモ、彰人よ学校でのう」

そして、鉄爺たちは消えていった。そうなんだよな、俺は、いや“俺たち”は川神流は出来ない。ま、それはしょうがないんだけどな。

彰人
「よし、完成だな。百代、お～い鞄」

百代
「あ、ああ。今行くからな。しかし、その、さっきの言葉、すごくうれしかったぞ」

彰人
「そうか、うんじゃ合流しに行くか」

百代
「ああ♪」

そして二人して仲見世どおりから、腕と、腕に絡み合っていた。

Ｓｉｄｅ　大和

さて、朝から凄い攻撃を受けてからの学校は一言言ってつかれる、てか京は完全に焦っていたな。

大和
「しかし、なんであいつはいつも遅いんだよ」

そう、俺らは現在岳人待ち。まゆっちは早くに出てしまっているためいないがクリス、京、そしてキャップはすでに島津寮の門のところだ。

岳人
「わりぃぃぃぃ、寝坊した」

キャップ
「よし、それじゃ行くか～」

そしていつもの通りの通学路。そして途中で、

モロ
「やぁ、今日はクリスも一緒なんだね」

モロとも合流。

クリス
「ああ、今日からは一緒に登校させてもらう。しかしお前達はいつもこうなのか。」

モロ
「まあ、大体が小学生から一緒だからね。一番離れていたのは彰人だし。まあその彰人も今じゃ、あれだしね」

モロが苦笑していた、まあ現在のあの二人を見ていてそう思うのは必然か。

クリス
「そう思えば彰人殿の昔はどうだったのだ。私が会った時はなんかこう寂しい顔が印象的だったのだが」

大和
「そうだな、兄弟の昔・・・・・・どんなんだっけ？」

岳人
「とにかく強かったな。モモ先輩を呼び捨てに出来る唯一の男だと思っていたしな」

キャップ
「そう思えば、あの二人を入れたとき、大和は舎弟になったんだったな。」

クリス
「そうだったのか、だから兄弟に姉さんなのか」

大和
「ああ、まあ兄弟って言っているのはまあ愛称みたいなものだしな。俺よりも頭が切れるしな。それになんてったて姉さんの恋人だし」

京
「そうこう言っていると、前から凄いラブ臭が」

なんだよ、そのラブ臭って。

クリス
「しかし、あの二人は確かにお似合いだろう。双方とも愛し合っているしな」

なんだろう、クリスって絶対、いい子だよな。てか純情だよな。絶対、まあそんなこんなで目の前に居るラブ臭プンプンの姉さん達にあいさつした。

Ｓｉｄｅ　ｐｕｔ

キャップ
「おはようさん。」

後ろから声が掛かった。まああいつらだろうがな。

百代
「お、今日はクリスも一緒か。」

彰人
「おはようさん、お前ら」

大和
「それで、兄弟。もう既に吹っ切れているみたいだが？」

彰人
「ああ、兄弟。すでに家族計画を立てているぐらいだ」

京
「それで奥様、そちらの旦那さんはどうなんです？」

なぜかザマス口調の京、それに答える百代

百代
「それがですね、うちの亭主、案外ベットヤクザでして」

おい、こら百代。そう言うのは言わないのが花だろうが。

キャップ・クリス
「「ベットヤクザ??」」

わからない二人組み、そして

大和
「やはり、姉さんですら兄弟の前じゃ・・・・・・」

岳人
「間違いないだろう、昨日のあの駄々こねる所とかすでに調教できているだろう」

モロ
「案外、部屋だといつものモモ先輩の立場が彰人の前だと逆転するとか。」

彰人
「お前ら、かってな妄想を抱くな。そして抱くなら溺死しろ」

そして、そんな感じで学校に到着。

百代

「それじゃ、彰人。昼休みな～」

百代がそう言いながら廊下に消えていった。

そして時間が過ぎて、ＳＨＲの時間となった。

梅子

「それでは伝達事項だ、今週に第一回進路希望調査・・・・・・熊飼、ＨＲ中に物を食べるな！！」

熊飼

「う、ご、ごめんなさい。だけどお腹が空いちゃって」

梅子

「今は我慢しなさい」

そして、唸り始めるクマちゃん。大変だな～

梅子

「各自、連休明けに希望進路を提出してもらう。５月はそれを元に個別に進路指導だ。どんな夢でも自由に書くがいい」

そして最後に

梅子

「それとＣ塔の二階窓ガラスが何者かの手によって割られていた。本校では珍しい事態だ。何か知っていたら報告してくれ。それでは伝達事項は以上だ。それでは皆今週も切磋琢磨だ」

そして先生は出て行った。そして話は進路についてだった。

モロ
「うーん悩むな。進路・・・・・・」

キャップ
「俺は冒険家だね、出世に生きるなんてくたびれるってね」

なんともキャップらしいな。

大和
「兄弟はどうなんだ、やっぱ武道家か？」

彰人
「いや、どうだろうな。まあたぶん百代と一緒に旅には出るだろうけど。それが終われば主夫にでもなるさ」

岳人
「俺、梅先生の旦那って書くぜ。」

そして大串が高らかに

スグル
「ここに勇者がいるぞぉぉぉぉぉぉ」

ヨンパチ
「殺されるぜ、物理的にも、社会的にも、精神的も」

岳人
「俺様、年上スキー。どこかの誰かさんは、いい思いをしているみたいだがな」

そしてクラスの全員が俺に注目、岳人後で殺す。

ヨンパチ
「でもよ、うまくいけばあの美人をいいようにできるのか」

スグル
「先生、夜の運動会しませんかとか？」

そしてエロトークに話を盛り上げ始める、馬鹿三人。あ、そうだ。あいつ元気にしているかな。そして俺は隣の２－Ｓに向かった。

彰人
「お、やはりお前居たな。久しぶりだなユッキー」

小雪
「おお、準、準。僕のヒーロー」

こいつは、榊原小雪、通称ユッキー。え、どこで知り合った？それは俺がファミリーに入った後だったな、たしか大和がこいつを入れるのを断って、その後俺が、「俺だけでもいいなら友達になるよ」って言葉で、友達に、その後の虐待を気付いたりしていつの間にか俺はヒーローになっていた。ちなみに百代もユッキーとは親しい、最近てか、小六の時にあの葵病院の医院長さんの家族に引き取られてから、あまり会わなくなってしまった。まあ偶に町で会ったら声をかけるぐらいだが。

井上
「ほほう、お前があのモモ先輩の彼氏か。俺は」

彰人
「ああ、ラジオの・・・・・・ホントにすまん」

井上
「いやいや、わかってくれるだけで感謝だ、俺のことは準でいいぞ。ユキからは色々と聞いているからな、まあモモ先輩も入学してきた時に、俺らに挨拶にはきたからな。」

小雪
「準～僕はそこまで子供じゃありませ～ん」

彰人
「相変わらずだな、ユッキーは。それにしても葵くんは、一応挨拶しときたかったのだが」

そしたら二人して、げんなり顔で

小雪
「トーマ、トーマは・・・・・・」

準
「いつもの女の子遊びに。まあいつかこっちから挨拶しに行くからな、あの時の“行動”は俺らも見ていたしな。」

彰人
「おっと、それはいいだろう。な、ユッキー？」

小雪
「うんうん、今の僕は幸せだよ～。準にトーマ、時々彰人とモモさん、これで十分」

##第三十二話##（後書き）

あれれ、リュウゼツランルート・・・・・・・壊しちゃった、あははは。

ご安心をそれ以上の事件が・・・・・・・

それではバイバ～ィ

##第三十三話##（前書き）

三十三話でっせ、あにきｗｗ

##第三十三話##

さて、俺らがSクラスで話していると

英雄
「フハハハハハハ、我、参上」

そして、いきおいよく英雄が登場。

英雄
「我に、挨拶を許可されている、庶民共よ、挨拶することを許可するぞ」

相変わらずのテンションで登場。そして後ろに控えていた、メイド、まああずみも出てきた。

あずみ
「みなさ～ん、挨拶ですよ☆」

準
「はいはい、おはようーさん」

小雪
「オッハー」

彰人
「おはよう、英雄。朝から元気だな。」

英雄

「おお、そこに居るのは彰人ではないか、おはようだ！」

俺にはちゃんと挨拶してくれんだな。そして直ぐに英雄は廊下に出てしまった。

あずみ
「英雄様、どちらへ？」

英雄
「あずみ、さっせ。我は一子殿に会いに行くのだ」

そしてすかさずあずみは膝をつき、

あずみ
「申し訳ありません、この無礼は“ゴギッ”私の腕でご容赦を」

英雄
「あずみよ、お前こそが真の家臣だ。それではな彰人、そして庶民共」

そして英雄は、隣の２－Ｆに行った。そして準がげんなり顔になった、どうかしたのか。

準
「不味い、英雄だけが行ったから・・・・・」

そしてそろ～り、そろ～りと移動していく準、そしてさっき間接を外していたメイドが

あずみ

「あ”～、メイドも一つミスするだけで、骨一本てのは辛いね～。
あ、そうだ、彰人。どうしたんだ今日は?」

そして昔のあずみが登場した。

彰人
「ああ、今日はこいつに会いに来たなんだ」

そしてユッキーを指差す。

あずみ
「なんだ、彰人。あの川神がいるのに、逢引かよ。」

彰人
「はぁ～。んなわけがあるかっての。」

そしてあずみはなんかを探し始めて。

あずみ
「おい、そこのハゲ!なに逃げようとしているんだ?」

そしてハゲと言うともちろん準のことで。

準
「アハハ、逃げようとなんてしてないです。それでなにか」

ああ、なるほど。ようはあずみのパシリな訳ね・・・・・・臥床。

あずみ
「あたいは腹減ってんだよ、焼き蕎麦ぱん買って来い」

準
「はぁ～、ホントに人格ってすげぇ。それで代金は」

あずみ
「つけとけ」

準
「いつになったら返してくれるのかな、溜まっているんだけど。」

あずみ
「ああ、そんなの何時かだ、何時か。早くいかねぇと耳にコーラ流し込むぞ」

準
「はいはい、行きます・・・・・ああ、世知辛い」

そして準はダッシュで教室を出た。

あずみ
「ユキは肩揉んでくれ」

小雪
「おお、僕メッサ頑張る。」

あずみ
「ああ、ユキはいい子だな～。」

彰人
「あ、あずみ見て思い出したよ」

あずみ
「あ、あたいを、見てだ?」

彰人
「ああ、この前の休日な、百代とデートしていたわけだ。「おい、ノロケかよ」話を聞け、そしたらよなんと、あの大佐に会った。」

そして、あずみの顔も変わり

あずみ
「あの、ジジイ。あはは久しぶりに聞いたな。たしか今は久遠寺家に仕えてる身だったな。そうかそうか、あの大佐がな」

なんとも懐かしそうに遠くを見ていた。そしたら教室のドアが開き

準
「おい、買ってきたぞ。焼き蕎麦パンと牛乳。」

あずみ
「お、ミルクなんて気が利くじゃねえかハゲ」

準
「それじゃ、もういいかな?「あん?」どうかしましたか?」

あずみ
「紅しょうがが少ねえ、買いなおして来い。」

なんとまあ、あの時のままだった。しかしそれは直ぐに消え去った、それは

英雄
「フハハハハハ、我の帰還だ！！」

そう、英雄が、戻ってきたため、あずみはメイドに戻った。

あずみ
「（パチパチパチ）お帰りなさいませ、英雄様☆」

英雄
「一子殿は、トレーニングの最中だった邪魔はできん。それに彰人、そろそろではないか。」

英雄がそういうに、ああもうすぐ授業が始まりそうだった。

彰人
「そうみたいだな、それじゃあな。英雄、準、あずみ、ユッキー。」

そして俺は戻った。

――――――彰人が消えた後の２－Ｓ

？？？

「まったくなんなのじゃ、あの者は。ズケズケとこの２－Ｓに入ってきて、あの者は２－Ｆの者ならば、それに似合った、者達とおればよいのじゃ。ここは、高貴の者が居れば良い。そうその高貴な者といえば此方、不死川心じゃ。」

英雄
「おい、あずみ。」

あずみ
「はい、英雄様。私も今、カチンときちゃいました☆」

不死川
「な、なんじゃ。」

英雄
「我の友人を愚考するとは・・・・・・・あずみ、お前に任せる」

あずみ
「はい、英雄様。それじゃあ・・・・・・・この世は家柄じゃなく、力だって事を教えてやる」

不死川
「やぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ」

時は過ぎて、すでに放課後。俺はまったりとしていたら、そこにヨンパチが駆け込んできた。

ヨンパチ
「うわぁぁぁぁぁぁぁぁ」

明らかになんかに負けたか、それかショックを受けたらしい。

岳人
「どうかしたのか、ヨンパチ」

ヨンパチ

「さっき、悔しかったことが二つあった。一つはさっき可愛い子のスカートがめくれた時、中身がスパッツだった。」

岳人
「お前は泣いていい。」

立花
「なんだ、馬鹿が、また馬鹿やっただけか」

ヨンパチ
「それから、さっき賭博場行った時、２－Ｓの奴と勝負して、負けた。その時散々馬鹿にされた」

立花
「てか、あんたが馬鹿にされることなんてしょっちゅうじゃない」

ヨンパチ
「その時、俺たち２－Ｆは馬鹿だらけの、動物園だって」

立花
「うざいわね、２－Ｓ」

ヨンパチ
「大和～助けてくれ。勝ってあの女を。」

大和
「まあ、勝つ時もあれば負けるときもあるさ。だけど・・・・・・行ってみるか」

そして、大和が適当にだれかを見つけようとしていた。京は部活ら

しい、キャップと岳人はバイト、モロは、爺さんのお世話らしくすぐに帰ったしまった。そうなると

大和
「なあ、兄弟。頼めるか？」

彰人
「ま、そうなるだろうな。いいだろう、えっとすまんが誰か、百代が来たら、下駄箱に居てくれって行っといてくれ」

立花
「了解よ、頑張ってきてね」

そして俺らは教室を後にして、その賭博場に来た。

不死川
「おう、おう。鴨がネギと鍋も背負ってきたわい」

そしてそこには、麻雀卓にいる、着物姿の一人がいた。まあこれだろうな。

ヨンパチ
「あいつだ、あいつだよ。頼むぜ、大和、彰人」

不死川
「それで、なにしにきたのじゃ？」

彰人
「なに、一勝負どうです？」

俺が挑発的言ってみた。

不死川
「此方が誰か知ってかの？まあしらんだろうのう。まあ良い、戯れてやろう」

そして持ち場には俺、大和、三年生が一人のその着物女が一人。

大和
「それじゃあ、やりますか」

そして俺らは手際よく、牌を並べていった。

不死川
「さっきのサルとは違い、中々の手際のよさじゃのう」

そして勝負が始まった。まあ大体が大和と、俺はちょくちょく点数を稼いでいった。もちろんその着物女は中々強いしかし、“弱いな”俺はそう思った、その時大和が例の魔法を使おうとしたので目で

大和
「（ん、どうかしたか兄弟？）」

彰人
「（いいよ、そんなことしなくて。こいつは俺が潰すから）」

そして俺は最大の笑顔で次の手を使った。

不死川
「これでどうじゃ。貧の者達よ」

彰人
「ロン」

不死川
「今度はどんな、小さいことを?」

彰人
「大三元!!」

一瞬の静寂、そして

不死川
「なん・・・・・じゃと、親のヤクマンに直撃・・・・・・」

彰人
「俺たちの勝ちだぞ、この着物。そんじゃ金、今日はこれで百代とデートするから」

不死川
「おのれ〜覚えておれ〜〜〜〜〜」

そして、さっきの三年もありがとうと言ってくれた。

彰人
「それでは、お疲れ様でした。今度はポーカーとかがいいですね」

そう言って俺らは賭博場を後にした。

ヨンパチ

「すげえな。お前ら、特に彰人、俺はじめて見たぞ、その役」

彰人
「まあな、俺なんでか分からないけど、運は結構いいから。」

そしてクラスに戻ると、そこには阿修羅がいました。

Ｓｉｄｅ　２－Ｓ

不死川
「うわぁぁぁぁぁぁ、葵君はおるか。あいつらに、あいつらに」

小雪
「なんか、あの子。怒っているの？」

準
「はいはい、ユキは見ちゃダメだよ。それに若なら今日は来てないだろうが」

不死川
「うううう、あの馬鹿共に」

準
「なんだ、負けたのか？それで相手は？」

不死川
「片方は今日の朝、お前ら話していたものじゃ、もう片方はあの直江じゃ」

準

「ああ、そりゃ勝てないな、なんてたって直江と言えばあのモモ先輩の唯一の舎弟で、切れ者うちの若も言っていたぐらいだし」

小雪
「それに彰人と勝負・・・・・ケタケタケタケタ、雲泥の差だよそれ」

以上、２－Ｓでした。

所戻り、２－Ｆ現在、殺気がＭＡＸです、理由は

百代
「なんで、私が行ったら居ないんだ、彰人？」

彰人
「だ、だから、それはクラスのまあ敵討ちのようなもので、ちょい」

百代
「うーーーー」

彰人
「わかった、わかった。これからデートしよう。それでいいな」

百代
「なら、いい。さあ、いこう。さっさと行こう」

そして俺は連れて行かれた。そして皆から拍手と嫉妬の目と、ちょっとした殺気を喰らいながら帰ることになった。

百代

「まったく、人がせっかく来てみれば、居ないだと」

彰人
「だ、だからそれは」

百代
「ふふ、わかっている。それじゃデートいきますか、あ、そうだはじまりは・・・・・チュッ」

そして俺の目の前に来てキスをする。なんでこの人は人の目を気にしない。

百代
「始まりはキスからだぞ、彰人。それに」

彰人
「俺はこんな可愛い彼女を独り占めできる。」

百代
「ああ、素敵だろう。」

彰人
「ああ、素敵過ぎるよ百代。だけど学校内では辞めてくれ。」

百代
「人がいなければいいだろう？」

と、またまたバカップルな二人だった。

##第三十三話##（後書き）

はい、結局バカップルのお話でした、今回も・・・・・・ラジオのネタがありません。よよよよ。

##第三十四話##（前書き）

期末が明日から、ル～ルル♪

##第三十四話##

さて、俺らは現在、橋を渡っていた。

彰人
「さて、どこ行く、百代。今日は賭けで勝ったからどこか行こうぜ？」

百代
「そうだな、彰人が賭けをしていたことは驚きだが、そうだ、商店街でぶらぶらなんてどうだ。今なら私が腕にずっと抱き着いているぞ」

彰人
「ああ、それはすばらしいな。それじゃ行きますか。てか商店街って・・・・・・あ、買うモノが俺あるし丁度いいか」

百代
「うん？彰人が買うもの、なんだそれは？」

彰人
「なに、勉強道具の・・・・・・なんで百代は耳を塞いでいるんだ。はは、相変わらずの勉強嫌いだな」

現在も、耳を塞いで、アーアーと、言っている百代。なんともかわいいな。

百代
「まったく、それよりもデートだ、で・え・と」

そして腕を引っ張る百代に俺は笑顔で居た。
さて、ここは商店街なのだが、なんとも、まずは俺の文房具を。

百代
「お、彰人。あれはモロが言っていたゲームだな。」

まあ、最初ッからこうなるのはわかっていましたよ、不満があるか？否、断じて否！！

彰人
「てか、百代って昔から、ゲームは格ゲーだけだろ。俺も今度モロからモンキーハンター借りるけどさ。」

百代
「ふ、ふ、ふ。彰人、甘いぞ、最近の私は可憐にレーシングもするんだ。」

と、百代が行ったとき、俺は不意に思った。

彰人
「なあ、そう思えば俺、バイト探さないとな。それと免許・・・・・・」

百代
「はぁ？免許？バイトは私と一緒のでいいと思うが・・・・・・免許って免許か？」

彰人
「ああ、免許。まあバイクだがな。それと百代、バイトは一緒でっ

て何するんだ？」

百代
「あ、そう思えば言っていなかったな。実わなこの前のようにお金を借りて、そして返せなくなると決まって、土木あたりに日当たりでバイトするんだ。」

なるほど、この前のあのお金はそういう事か。

彰人
「ああ、それじゃあ今度でも紹介してくれ。」

百代
「ああ、分かった。それと携帯だな、彰人。」

彰人
「え・・・・・さすがにそれは鉄爺に悪いような。まあ買わないといけないのはわかっているのだが」

百代
「う〜〜〜〜〜早くお前と、恋人同士の会話を携帯でしたいぞ。」

彰人
「いやいや、普通に俺の部屋にいるじゃん、最近。てか既に住んでいるじゃないですか、あなたは」

そんな感じで俺の目的地に到着。そして買い物が終わり、店を出るとそこには

小雪

「おお、モモさんに彰人だ、お～い」

そこには元気一杯の、ユッキーと、そして

準

「ユキ、あれはデート中なんだぞ、これでは俺らは馬に蹴られてしまいそうだ。」

坊さん、いや準がそこには居た。

百代

「おお、あそこに居るのは、小雪に、ハゲじゃないか。どうかしたのか?ちなみに私達はデートだ」

彰人

「よ、二人とも。お前らも買い物か?」

小雪

「おお、さすが彰人、察しがいい。うん今日はトーマが居ないから、ジュンで我慢」

準

「ああ、いいな。幼児の後姿。」

なぜか、幼稚園児の列を見て和んでいた、準であった。

百代

「はぁ～、このハゲはほっといて、小雪どうだ、一緒にどうだ買い物?」

小雪
「ふふ、いいよモモさん。僕はジュンと一緒にお買い物するから、それに二人の邪魔はしないよ、それじゃあね、ケタケタケタケタケタ」

そして二人は消えていった。

百代
「あいつも随分元気なったものだな、あれではうちの妹と大差ないな。」

彰人
「ああ、そうだな。さて、それでは俺らも帰りますかね。」

百代
「ああ、それじゃ、レッツゴー♪」

そして俺の腕に抱きつき百代であった。

さて、今日も、朝が来た、すでに一子は出ていた、俺らは朝食を取り、通学路を歩いていた、そして前方にいつもの面子が目に付いた。
今日はまゆっちも一緒のようだ。

クリス
「今日も、朝の残りのお稲荷さんが・・・・・・」

クリスがはしゃいでいた、まあこれは良いのだが

大和

「おお、まさしく海外に行った時の日本人の如く、無防備だな」

クリス
「直江大和、お前は一体何を言っているんだ?」

そして、キャップがすかさず

キャップ
「お、うまそう、お貰い（パクッ）・・・・・お、うまい」

クリス
「あ、私の、お稲荷さんを!」

そして次に岳人も手を伸ばし、

岳人
「お、うまそうだな、俺様も食べてやる。（ほい）」

クリス
「く、何をする!!」

そして、後ろに立った岳人を、蹴った。お飛んでる、飛んでる、
そして京に行き。

京
「ナイスな、ジャーマンキック・・・・・ここは空中コンボを決めておく」

そして飛んでいる岳人にさらに追撃、てかよくお稲荷さんを持ったままで居られるな岳人。そして俺の彼女も

百代
「おお、ここにおいしそうな、お稲荷さんが「こらっ」あ・・・・・・」

流石にそれは俺が阻止をした。

クリス
「！！いつの間に後ろに、私が気付かないとは」

大和
「お、姉さんに彰人、おはよう。」

彰人
「ああ、おはようさん。しかしクリス、朝から災難だな。」

クリス
「お、これは彰人殿にモモ先輩、おはようございます」

百代
「う～、おはようさん。もういい、京で我慢する」

そして、京に完全にセクハラになるだろう事を普通に、往来でしていた。

京
「ああ、大和～この人、エロい事してくる」

百代
「ああ、エロいぞ。彰人に調教されて、既に私は彰人無しでは生き

ていけない体にされてしまった」

まゆっち
「チョウキョウ？？」

あ～あ、まゆっちはよく分かっていないらしいが、他は、てか特に岳人と大和に

大和
「まあ、流石は兄弟って所か。ああ、まあ気にしないがな」

そしてどんどん俺から離れていく、そして岳人は俺の肩を掴み。

岳人
「やっぱ、年上だよな、彰人！！やはり、縄なのか、それともろうそくっ！グベェ！！」

うるさいので一発決めといた、まったく、俺はただ可愛がっているだけだ。

クリス
「うぅ～それよりも私のおいなりさん・・・・・・」

京
「おいなりさんとか、エロス発言自重してよ」

大和
「お前が自重しろ。」

百代

「このファミリー大丈夫か?」

キャップ
「モモ先輩たちが来てから、こうなったけどな」

そして、モロとも合流した。

モロ
「あ、皆おはよう。」

大和
「お、おはようさん」

彰人
「お、やっとここで良識のある奴が来た。」

そしてモロとい
れたおかげで、
うちのファミリーで、唯一一般人のモロが来てく
さっきの話題は終了した。

モロ
「あれ、クリスどうかしたのか?」

クリス
「ああ、それが・・・・・・(説明中)」

モロ
「あはは、それは災難だったね。だけど僕なんか、この前の時なんて、おでん買ってきて・・・・・・残っていたのは皿だけだったよ。まだ二つ残ったのはいいほうだよ」

クリス
「やはり、飢えた若者も前に無闇に出さない方がいいようだな。勉強になったありがとう」

モロ
「あはは、お役に立てたなら良かったよ」

大和
「なんだ、まだ食べ物事でグダグダ言っているのかクリス？」

クリス
「誰が、食べ物でグダグダと「ちょっと待った。」うん？」

大和
「お前には丁度いい、奴がいる。」

そして、犬笛を出した、て、おいおい

彰人
「おい、大和。呼ぶ気か？」

大和
「ああ、クリスには一番ふさわしい人物だろうからな」

そして犬笛を吹く。

クリス
「なに、大和は同心（昔の警察）だったのか？」

いやいや、そんなのはこのご時世に既にいませんが、と、急に足音

が聞こえ始めた。てかすげぇな、あいつ

大和
「違うぞ、これは犬笛だ」

そして一子、到着。

一子
「みんな～おはよう、そんで誰が呼んだの？」

クリス
「正しく、犬というわけだな。」

モロ
「うわっ、普通に認めちゃったよ、この怪奇現象」

彰人
「まぁ、ここには色々、普通じゃないやつ多いしな。それにクリスは見て認めるタイプだろうからな」

大和
「おい、ワン子、クリスが勝負したいって」

クリス
「お、おい、貴様。私はそんなことは」

一子
「なんだ、クリも体力がありあまっているみたいじゃない」

クリス

「違うぞ、私と犬を一緒にするな」

一子
「ふ～ん、言い訳するのはお国技？」

いやいや、そんな簡単な挑発に

クリス
「ふん、何で勝負するんだ？」

彰人
「なんとも、見たもの同士だな、まあ、仲は良くなりそうだな」

まゆっち
「あ、あのう。そのう」

百代
「うん、どうかしたか、まゆまゆ？」

まゆっち
「あ、そ、その、あ、あの」

百代
「なんだ、彰人がかっこいいからって告白は私が受け付けないぞ」

彰人
「いやいや、違うだろう。それでどうかしたか、まゆっち？」

まゆっち
「はい、あのこれは聞いていいのかは分からないのですが・・・・・

・その」

彰人
「フツノの事か？」

まゆっち
「！！」

彰人
「なに、安心しろ。あれはお前の親父さんにも見せる約束だから。」

まゆっち
「そ、そうでしたか。す、すいません」

百代
「うん？フツノ・・・・・・ってあの刀か。」

彰人
「ああ、流石は剣聖の娘だな。」

岳人
「今日も、俺様のために晴れていやがる。」

京
「しかし、午後から雨」

そんな感じで俺らは、色々談笑していると、商店街のおっさんが通った。

おやじ

「お、なんでい、なんでい今日も一緒で・・・・・って!!増えてるじゃねえか馬鹿野郎。いつまで仲良くしているなと、思っていたらまさか増えるとわな」

そしておやじはチャリをこぎながら消えていった。そして橋を歩いていると変な二人組みがいた。

##第三十四話##（後書き）

期末、期末、怖くなんか無いよ・・・・・・・

##第三十五話##（前書き）

最近、ツンデレにはまっています。

##第三十五話##

弟
「兄者！あれが川神百代じゃけんのぉ！」

兄
「ウム、噂に違わず美人だな、うん、満点で合格だな」

大和
「なんか、今日はごついのが二人いるぞ、挑戦者か？」

弟
「川神百代とお見受けするけんのぉ！」

なんだ、このハイテンションの馬鹿。

百代
「そうだが」

百代も百代で既に興味が無いらしい、俺の腕に抱きついているのにげんなり顔だ。これは相当興味が無いらしい。

兄
「我らは地元では名の知らぬものはいない、仁王兄弟。道場の世継ぎを作るために強い嫁を探している」

弟
「川神百代。俺たちと来い、妻になるけんのぉ」

京
「なんか岳人が二人いるみたい、筋肉バカっぽいね」
ああ、俺もそれに同意だな。
岳人
「なに言ってやがる俺様の方が知的でナイスガイだろうが！」
そう言う問題かよ、岳人。そして痺れの切らした百代がこう言った。
百代
「純粋な勝負か、嫁探しなのか、どっちなんだ？」
弟
「勝負なぞしなくても俺たちの圧勝だけんのぉ」
はは、笑いの種だな、パリーンてな。と、俺が思っていると。
兄
「嫁探しだ、俺と弟の相手のな。フハハ」
なんだろう、こいつらウザイな。これは俺の物なのに。
クリス
「なんだ、この無礼な者達は挑戦者とも言えない。それに見えないのかモモ先輩の横にいる男を。正しくこの人こそが男だろうに」
兄
「ふん、そうような男、一瞬で終わりしてやろうが」

弟
「流石は兄者っす「くくく」ああん?」

兄
「何を貴様笑っている。」

彰人
「ああ、これが可笑しくて何が笑いか、そうかそうか百代を嫁にね～。くくく、くくく、あははははははあははははははハハハハハハハハハハハハハハ・・・・・・殺スゾ!!」

そして俺は周囲に、殺意を振りまいた。瞬間、一子、京、クリス、そして百代、さらにはまゆっちまで刀を構えた。しかし、それも分からないバカ達がそこには居た。

岳人
「やはり、ここは俺様の出番だろうな。」

弟
「はっ、学生なんて俺で十分だけん。」

モロ
「って!岳人」

彰人
「あはは、いいじゃねえか、それ。それじゃあ俺はこいつか。」

そして俺は、兄と言われる者と対峙している。

岳人の勝負が裂きに始まった。まあこれは前哨戦のようなものだろ

う。
最初は岳人の腹に一発入った。

岳人
「・・・・・痛ぇ・・・・・だけどそれだけだな」

弟
「なん、じゃけん??」

岳人
「お返しだ、ゴラァァァァァ」

そして今度は岳人の攻撃。

弟
「g、グホォ!」

岳人の強烈なボディブローが命中した。

弟
「て、てめぇ!」

岳人
「足に来てるぜぇ?ここは俺の見せ場見せ場」

なんだろう、こいつを応援するのがアホらしいな。そこに居たファミリー全員の心の中だった。

京
「さすが、しょっちゅう私達の攻撃を受けているだけあるね。」

モロ
「耐久力、半端なくなって来ているもんね」

岳人
「そこ、余計な横槍入れんじゃねぇーよ」

そして突っ込みを入れて、岳人は相手を見て。

岳人
「喰らえ、この俺様が朝から見せてらえよ、くらえ浮沈艦ラリアット！！」

弟
「ぎゃあ・・・・・・がくし」

そして相手は倒れた、そしてみんなからの一言。

一子
「遅いのよ」

それだけだった。あ～あ、岳人が凹んでいるよ。

兄
「お、弟を、貴様らよくも」

彰人
「ああ、そう思えばお前が居たのか、さっきの俺の目を見て足に来ていた仁王兄弟のお兄さんよ～」

兄
「なんだと、貴様！！」

彰人
「五月蝿ぇな、百代は俺の物なんだよ、何が嫁にしてやるだ。お前ら、消えていいよ。行くよ“蛇”」

そして俺の左腕は異常な気を纏い。

「今回は普通に殴る、いくぜぇ。スネークフィンガー！！」

そして俺は兄弟ごと吹き飛ばした。

兄
「なんていう化け物だぁぁぁぁぁ・・・・・・キラーン」

そして兄弟共々星屑となっていった。

百代
「流石は私の彼氏～」

そして腕に抱きついて来た。そしてクリスとまゆっちがこちらに向かい

クリス
「素手で、その力感服です」

まゆっち
「お見事です。素手でこの強力さ、敬服しました。」

京
「相変わらず、凄いね、今回は山の向こうまでいったみたいだし」

モロ
「てか、彰人はただ単にモモ先輩のことで腹立てていただけでしょう」

彰人
「あ？それ以外何があるんだよ、まったくこんな可愛いものは俺の物だぞ」

そして俺は百代の肩を抱いた。

大和
「あのう、勝手に二人の世界に飛ばないでください。さっきから岳人が空気ですから」

岳人
「なんで、ぬあー、これでは俺が目立たん。」

一子
「いつものことよね、それ」

キャップ
「まあ元気出せ。ほら、炭酸の抜けたコーラやるよ。」

岳人
「鞄の中に入れっぱなしにしていた物なんているか！」

・・・・・・・・・・・・・・。そして時間が過ぎて三時間目終了。

俺は動くのがかったるく、教室の周りを見ていた。

羽黒
「あー超最悪。ささくれ剥いたら超腫れた。」

立花
「いや、指で剥くとかアウトでしょ。普通カットよ。それにしてもクリスは肌が綺麗よね」

クリス
「そうなのだろうか？」

真与
「はい、お肌、ツルツルですし、色も綺麗ですから」

立花
「クリームとか何使ったら、そうなるわけ」

クリス
「いや、それほど意識したことはないな、そこらへんは」

立花
「素でそれって。はぁ・・・・・なんか自信無くすな～」

クリスはクラスにも馴染んできたらしい、まあまだうちの兄弟にはトゲドゲしいみたいだが。

大和
「やはり、着替えをみたのが不味かったのかね。」
そして俺の後ろの大和といつの間にか京が居た。
京
「まあ、普通そうでしょうけど、それよりも」
彰人
「思想がまるで違うからな、兄弟とは」
大和
「思想の問題ねぇ～」
一子
「1、2，3，4，5，6」
一子は隣でダンベルあげてトレーニング中だった。
・・・・・・・・・・・・・・そしてさらに時間が過ぎ、昼休みになった瞬間。
百代
「失礼する、彰人。私の愛妻弁当だ。それではちゃんとラジオ聞いていてくれよ」
そして颯爽と、銀河美少女は駆けて行った。

大和
「相変わらず、御暑いご様子で。」
そして俺はラジオに耳を傾けた。
準
「ハァイ。エブルリバディ、ケータイの待ち受けを自分の写真にしているナルシストは居ないかな。今日もラジオ番組ＬＯＶＥかわかみ始めるよ。司会は二年のスキンヘッド、井上準と」
百代
「人生、彰人と仲間が居ればそれでいい、三年川神百代だ」
準
「いやー最近暖かくなってきましたね。」
百代
「そうでもないな。」
準
「話を広げてくださいよぉ。まあいいやそれではお便り読んで見たいと思います。」
百代
「今日は機嫌がいいから私が読んでやろう。何々、“小さい子の好きな準さん病院行って下さい。ははは、お前リスナーからも突っ込まれているぞ」
準
「病院か、小児科なら喜んで」

そして一瞬、殴った音が聞こえ

百代
「次、不当な発言したら骨二本ほど外すぞ。次のメール」

準
「“無人島に一つだけ持っていけるとしたら何？”」

百代
「これ、私に聞くのはアホだろう。今なら何処の教室言っても私の答えは同じ答えが返って来るだろうな」

準
「それでもお願いしますよ。」

百代
「勿論彰人だ。それ以外は仲間だな。まあ私と彰人でアダムとイヴもいいがな」

準
「少女かな。胸がほんの少し膨らみかけの」

そして急に骨のはずれる音がして

準
「っ！ウ、ウギャァァァァァァ」

そしてラジオは幕を閉じた。

大和
「なんか、日に日に姉さんが彰人命になってきてないか。」

彰人
「そうかもな、しかしお前にもいるだろう、大和命の子が」

京
「はいはいっ！！ここにいます」

大和
「はぁ～」

そして俺らがまったりしていると、急に教室のドアが開き。

ヨンパチ
「おい、大和に彰人、昨日のＳ組みの女子が呼んでいるぞ。」

大和
「は？昨日の女って、賭博場の？」

彰人
「なんとも、執念深いというか、それで今度は何で勝負するんだ？」

ヨンパチ
「いや、今度は賭場じゃねえ、なんでも屋上に来いってさ」

さて、今度はどんな勝負だか、まあいいか。

大和
「ま、行かなくて「チキン呼ばわりされたくは」「「ねえ、からな」

」

俺らは心をひとつにした。

一子
「わぁ～久しぶりに見るわ、彰人と大和の合わせ」

大和
「それじゃあ、ワン子と京、着いて来てくれるか、まあ彰人もいるけど念には念でね」

京
「はい、ご主人様。あなたの安全バッチリガード」

一子
「バトルになるなら、私にお任せ。それに彰人が出る幕でもないし」

岳人
「なんだよ、二人とも。普通俺様のような、ナイスガイを呼べよ」

一子
「朝、暴れたでしょうが。私に譲りなさいよ」

そして俺らは屋上に行った。

##第三十五話##（後書き）

準
「さて、今日はやるよ、ＬＯＶＥかわかみ、俺は二年のスキン、井上準だ。もちろんもう一人のパーソナルティは」

彰人
「俺なんだね・・・・・・どうも、御剣彰人です」

準
「あれれ、モモ先輩は？」

彰人
「今日はバイトだそうです、それで俺が変わりに」

準
「それでは行きますか、まずはお便りです、ペンネーム・・・・・・これなんて読むんだ？おおくまねこ？」

彰人
「それ大熊猫（パンダ）だから、何々、“宇佐美先生が何回アプローチしてもなびかない梅先生ってやっぱ年下好きなのですか、討論よろしく”・・・・・・どうするよこれ？」

準
「う～ん、あのヒゲは、まあかっこいい所もあるんだが、何分それを見せるタイミングが酷い、これは担任だから分かる」

彰人

「梅先生は・・・・・・無知な奴らを鞭で打っているな」

準
「シュール」

彰人
「うん、結果よく分からん。それでは曲を流します。」

準
「題名は『茜空～それが僕らの世界～』。」

彰人
「それでは」

彰人・準
「「バイバ～ィ」」

##第三十六話##（前書き）

三十六話、は～じま～るよ～

##第三十六話##

さて、屋上に来てみたら、と言うかなんか居る、しかもあれはユッキーだな。

不死川
「よく来たのじゃ、逃げなかったのだけは褒めてやろうぞ」

また出てきたな、このバカ女。

大和
「何のよう?まさか告白?」

完全に大和は遊んでいるし。

不死川
「な、なななななななな!!なんでそうなるのじゃ!」

いやいや、普通違うのならそんなにビビらないから、てか本当になんの用だよ。

大和
「ははは、照れちゃって。」

そしてそこに完全にブルーな顔の京が

京
「笑えないよ」

おお、怖ぇぇぇぇ、なんださっきの顔

不死川
「今回は本格的に“決闘”を申し込むのじゃ！」

彰人
「あんまり乗る気は無いな。まあいいけど」

不死川
「戦うのは此方ではない・・・・・・葵君頼むのじゃ、こやつらをぶったおすのじゃ」

うん?葵君だと、もしかして。

大和
「葵・・・・・・葵冬馬か!常に成績トップの」

へぇ～、そうなのか。ユッキーの引き取った所の息子さん、さすがは医者の息子とでもいうのか。しかし大和が驚いているということはかなりの切れ者のようだな。

冬馬
「可愛い貴方の頼みなら仕方ありませんね。代わりに戦う報酬はハグ。前払いで」

不死川
「あ、葵君!?」

ああ、なんだろう。この前会いに行ったときユッキーがげんなり顔だった理由がなんとなくわかってきた、て、今もげんなり顔だな。

冬馬
「貴方のために勝ちますよ、見ていてください。」

京
「なに、あの生物。腹が立つ」

京はあういうのは嫌いらしい、下手すれば大和がそうなっていたかも知れないのにな。

冬馬
「やあ、直江君。こうやって話すのは初めてですね。そしてお久しぶりです、がいいのでしょうか?彰人君?」

大和・彰人
「そうですね（だな）」

冬馬
「改めて2－Sの葵冬馬です、よろしく」

大和
「何度か賭博場であっているよ、直江大和ですヨロシク」

彰人
「ちゃんと会うのは、五年ぶりだね、葵君、こちらもよろしく」

そしてなぜか、女子が色めき始めた、人気はあるようだ。

冬馬
「私は女性が大好きですから」

大和
「いや、聞いてないから」

冬馬
「もちろん男性も好きですよフフフ」

大和・彰人
「「もっと聞いてないから！」」

そして俺がユッキーの方をみると、「ま、これがトーマだから」と、俺に言っていた。

冬馬
「まあ、直江君にも彰人君にも恨みはありませんがここは運命、どちらか、昨日彼女が負けた分の倍で勝負しましょう。」

大和
「決闘ってわけだな」

冬馬
「はい、クラスメイトの敵討ちというわけです」

大和
「それじゃ今回は俺が戦うよ。それで勝負の内容は？肉体系なら代役がいるが」

一子
「大和の剣！川神一子！大和の敵を打ち払う！」

京
「大和の鞘！椎名京！大和の剣を受け入れる」
そして大和は速攻で京の頭を叩いた。
冬馬
「私自身体を動かすより、頭ですから」
大和
「そこらへんは話が合いそうだな」
冬馬
「話が合うと言われると少しときまきます」
京
「大和、目の前の男から変態な匂いがする」
大和
「同種の匂いでも嗅ぎ付けたか・・・・・・」
そしてチャイムが鳴ってしまった。
大和
「ヌ、チャイムか・・・昼休みが終了してしまったか、それじゃ、ちゃんと決着をつけよう、放課後、ここでどうだ？」
冬馬
「はい、喜んで。闘って頂きありがとうございます・・・・・・時刻と場所を決める、デートにも似ていて素敵です。」

そしてすでに大和の精神攻撃は始まっていた。

冬馬
「愛を込めて大和さんと呼んでもいいですか」

大和
「勘弁してくれ、出来れば直江さんで」

そして、俺らは屋上を後にした。

さらに時間は過ぎて、五時間目の終わり、兄弟はなんでも情報収集にでていったようだ。そして俺が机でグーたらしていると、そこに忠勝が来た。

彰人
「ほう、珍しいな。お前から俺の方にくるなんて」

忠勝
「うっせぇよ、今、直江はいないようだな。」

彰人
「ああ、そうだが、どうかしたか？」

こいつがそういうことを気にする際は大体、社会の裏の話だ、しかも今回の顔は、普通じゃないみたいだな。

忠勝
「ああ、実はな、仕事の話で耳にしちまったものがあってな、この前、お前に忠告した薬（モノ）について覚えているか？」

彰人
「ああ、それはすでにファミリーに言っている、まあオブラートに包んで、だがな。そのおかげで一子は親不孝通りは行かなくなったし、他も必要最低限しておいた」

忠勝
「そうか、それならいいんだが」

彰人
「なんかあったのか？」

忠勝
「ああ、実はな。なんでもそのモノがブラックからホワイトの方に出てきているらしいって話だ。しかも噂じゃ、どっかの病院とヤクザが組んでいるらしい。」

彰人
「いいのか、そんな話俺にしても？」

忠勝
「てめぇに言っておけば、大体は大丈夫だろう？違うか？」

彰人
「買いかぶるなよ、しかし・・・・・分かったこっちは調べもせず、ただ、それが来たら撃退だな。」

忠勝
「ああ、そうしてくれると助かる。それに噂だしな・・・・・」

そして忠勝はいつもの不機嫌顔になり、自分の席に着いた。しかし、病院とヤクザって・・・・・・世も末だな。さて、俺もそろそろ“行きますかね”後三十秒、ふ、俺に不可能は無いね、そして俺は廊下に出た

そしてさらに時間が進み、放課後である、なんでこんなに野次馬が、しかも大体が２－Ｓと２－Ｆだし、あれ百代も居るし、まあ舎弟の決闘は見に来るんだね一応。

大和
「こりゃ・・・・・・そっちは女子が多いな」

すでに葵の後ろは女子が固めていた、これではどこぞのアイドルだ

冬馬
「そちらは男子から人気のようで」

大和
「たぶん、お前の負けがみたいんだろう。」

そして二人がワッペンを置き決闘がスタートした。

岳人
「勝手キャーキャー言っている女子どもを黙れせてやれ、軍師大和」

ヨンパチ
「そうだぜ、かっこ悪いところみせてやんな」

大和

「俺のところの声援は嫉妬の心剥き出しだな」

彰人
「ま、落ち着いてやれよ兄弟。」

百代
「そうだぞ～私達の舎弟が負けるところなんてみたくなぞ～」

なんかすでに、ベンチを占領しているし。そして葵ファンの声援・・・・・おいおいF組みキモイの多すぎてのは無いだろう。

百代
「お、彰人だ、彰人、こっちに来～い。今日はユッキーと、さらに要らないがハゲいるぞ」

準
「モモ先輩、酷いです」

彰人
「はいはい、今行きますよ」

そして勝負の話になった

冬馬
「頭で勝負すると言うことで、何で勝負しますかね?」

大和
「観席が多いから、みんなで楽しめるものがいいと思うが」

冬馬

「エンターテイナーですね～私もそう思いましたよ」

そして大和は屋上を見回した

冬馬
「一応、新品のトランプとサイコロは用意して来ましたが。好きなんですよねこういうの」

大和
「ギャラリーには分かりにくな」

大和はそう言って渋ったが、どういう細工があるか分からないから
ない配慮だぞ兄弟、さすがこの道の俺の弟子。

大和
「アウトドアなんだから他のモノにしようぜ」

そして大和がグラウンドを見た

大和
「お、あれは陸上部か？」

冬馬
「はい、いつも練習ご苦労様です。」

大和
「それじゃあ、あの四人のタイムで誰が一番早い奴を当てる、みたいな賭けはどうだ？」

冬馬

「なるほど簡易的な競馬ですね、面白そうです」

そしてなんどか、二人が話による駆け引きをしていた。

準
「う～ん、これはうちの若が勝ちかな」

百代
「ほほう、それはなんでだ、このハゲ」

小雪
「そ・れ・は・トーマがすんなり相手の条件に承諾したからだよ、そっちの子も色々しているみたいだけど、こっちのトーマの方が強いもん。」

百代
「それで、彰人は、って彰人？」

彰人
「絶対勝つよ、“大和”が」

そして二人が誰にかけるか決まった、葵はイガグリ頭を、大和は、そうロンゲの男を。

岳人
「おいおい、あのイガグリが早いぞ。おい」

一子
「え、大和まずいんじゃ」

大和
「これは負けたかな（おいおい、出来レースをおれは頼んでおいたのに）」

冬馬
「ふむ、これで」

ヨンパチ
「おい、急にロン毛がはやくなって、しかもあのイガグリが遅くなったぞ」

モロ
「あ！ロン毛の人一番だ。」

大和
「俺の・・・・・勝ちの様だな（なんだよ、そういうことかよ）」

冬馬
「あれあれ、私が負けてしまいました。」

彰人
「流石だなうちの軍師」

そして俺は葵の方にも近づき。

彰人
「惜しかったな、あ、それと、忘れているようだから言っとくけど、決闘はさっき始まったんだよ、葵君。彼達は悪くないから。」

冬馬

「！！」

彰人
「それでは失礼しますか、おい、兄弟、賭けて儲かった金を今日でつかうぞ」

大和
「う、嘘だろぉぉぉおぉぉ」

冬馬
「（まさか、私が、いや私と直江君がこうなる事を予測していて、しかも！！。今、彼はグラウンドの端の、直江君はテニス、そして彰人君は、女子テニス・・・・・私はトランプの細工のせいで時間がありませんでしたから、しょうがないと思っていましたが、ある意味私は勘違いしていたのかもしれません、ユキの言っていた通り彼はヒーローなのかも知れませんね。それなら私達の、問題も・・・・・）」

小雪
「ねえ、トーマ～。大丈夫？」

冬馬
「ええ、すいませんねユキ、それならばどうでしょう、今度は賭け無しの勝負でも、これでも負けず嫌いな者でして。」

準
「おっとそれなら、俺が行こう若が二度も出る必要なねぇ」

立花
「なんか、負けていてもこの友情・・・・・・・・キャー痺れる～」

結局、そうなるのかよ。しかしそうだな。それなら

彰人
「ならば、俺が行こう。元々、俺も挑戦者の中にいたしな。」

キャップ
「ちょっと待ったぁ！、こういう時はリーダーが出るもんだろ」

彰人
「それで本音は？」

キャップ
「俺がリーダーだ」

ああ、そういうことですか、大和だけじゃなく自分も目立ちたいと。

##第三十六話##（後書き）

ああ、最近さらに冷え込んできて、凍りそう・・・・・・

それではバイバ～ィ

##第三十七話##（前書き）

マジコイのイベント・・・・・・行きたい！！

##第三十七話##

さて、まさかのキャップの決闘だ。

立花
「え！？決闘二連戦？」

不死川
「良いぞ、天狗になっている２－Ｆに一括いれるのじゃ、高貴な此方も大満足それでじゃ」

なんでお前が仕切っているんだよ、と俺は思う。

準
「確か風間、足が速いんだってな、噂で聞いているぜ」

キャップ
「ああ、逃げ足になるとさらに早いぜ。」

ああ、たぶん百代のせいだろうな、それは。

準
「俺も自信があるんよ、勝負しようぜコラァ！」

キャップ
「乗った、もちろんお前らの友情に、俺も同意だから報酬はまあ、後でいい」

不死川

「またも、決闘成立じゃ！！！」

両陣営ともウォォォォォォオと言わんばかりのテンションだ。

キャップ
「それじゃ下に降りようか、グラウンド借りてな」

準
「待てよ、ここから校門見えるよな？」

キャップ
「ああ、くっきりとはっきりとな」

準
「こっからスタートして、校門ゴールなんてどうだ？」

準
「俺、階段駆け下りるの超速いんだぜ、昔、小学生の頃、保健室に運ばれて、保健委員に五段飛ばしの準っていう称号貰っているぐらいだぜ。」

モロ
「保健室に運ばれるようじゃ、ダメじゃん」

モロの鋭いツッコミ、確かにそうだな。

キャップ
「いいよ、それで。やろうぜ」

軽いな～いつものノリだなキャップは。

不死川
「それでは職員室に概ね伝えてくるのじゃ」

彰人
「しかし、なにも相手の得意種目でやらずとも」

大和
「ああ、俺もそう思うが」

キャップ
「自信満々ほど、負かしたときスカッとするじゃん」

アナウンス
「今より、B棟の屋上にて決闘が行われます。種目はB棟から校門までのレースです。進路に居る生徒は至急道を開けてください」

てか、ここの学校の対応早すぎだろう。しかも決闘の方が生徒より優先なのか。

キャップ
「さーて。やろうぜ!!」

準
「悪いが、俺らが勝たせてもらう。あのう2ーFの委員長。」

甘粕
「はい、なんでしょうか?」

準

「俺の活躍是非、見ていてください」

おいおい、準。お前はそういうのが趣味なのかよ。ってそう思えばラジオでもそうだったな。

小雪
「ロリータコンプレックスだよね、ジュンも相変わらずだね。」

冬馬
「準も相変わらずの趣味ですね、ハハハハ」

アナウンス
「それでは位置について」

大和
「ご丁寧に、合図をくれるらしい」

そして二人は、位置に着き。

アナウンス
「よ～い・・・・・ドン！！」

そして、最初に出たのは

準
「オリャァァァァァァァ、ロケットスタァァァァァァァト！！」

ハゲ頭は凄まじいスピードで、屋上の入り口に駆けて行き。

準
「階段五段飛ばしを連続で見せてやるぜ！」
叫びながら校舎を駆けて行った。しかしうちのキャップというと。
キャップ
「おーおー、確かに速いじゃん、あのハゲ」
開始場所から一歩も動いていなかった、てか普通に相手の背中見ているし。
モロ
「何しているのさ、キャップ！早くしないと」
冬馬
「あきらめたのですか？」
しかし、そこで準の背中にこう言った。
キャップ
「だがそれは階段を降りると言う単純思考。自由な俺様には、それじゃ勝てないぜ！」
そして、なぜか入り口とは逆の方に向かって行った・・・・・・ま、まさか！！
大和
「まさか・・・・・」
たぶん大和も同じ事を思ったのだろう。そう

キャップ
「俺は飛ぶぜ！！」

キャップは躊躇わず、普通に堕ちていった。

不死川
「無茶苦茶だ、事実上五階じゃぞ！！」

まあ、普通の奴らはそうかも知れないが、しかし

百代
「相変わらず、あのバカはおもしろいな～」

キャップは木の幹に捕まり、普通に下りていった。

冬馬
「一番高い木に、飛び移ったのですか！？」

まあ、常識ではそんな自殺まがいな事は誰もやらんだろうな。

不死川
「しかも躊躇いがまったく無かったのじゃ！」

彰人
「あはは、そりゃそうだ。だってうちのリーダーだもん」

そして下は下で

準

「え、なんであいつが既にあんな所に！？」

校庭の庭から出てきた準。しかし既に時遅し。

キャップ

「強風暴風台風突風旋風烈風疾風怒涛！！風を捕まえられるものはいないぜ！！」

準

「ぐ、追いつけねぇ！」

そして、キャップは凄まじい速さで、一直線にゴールをした。しかし、そのまま走り去っていった、てか消えていった・・・・・・はい？

大和

「ちょっ、せっかく勝ったのに何処に行くんだ？」

しばらくして、大和の携帯がなった。

大和

「え～と、何々。“このままバイト行く、それじゃあな”・・・・・・はあ～。本当嵐のような奴だ」

そして俺は凱旋の如く、帰還して行った。

立花

「今回は完全にS組みに勝ったわね。それに二連勝」

そんな感じで、盛り上がっていた。そして俺らはいつものメンバー

で帰る事にした。

岳人
「しかし、これからどうするよ？」

百代
「う～ん？カラオケか、それともゲーセンか？」

モロ
「てか、既に僕達のお金なんだねこれ。」

大和
「ま、半分はキャップに残しておいて、後は使っていいだろうけど・・・・・・ワン子は今日はバイトは？」

一子
「今日は、無いわね。だからどっか遊びに行きましょうよ」

京
「えっと、今居るメンバーは、大和と私、モモ先輩にその旦那、モロと岳人、それとワン子とクリス。クリスは今日は大丈夫？」

クリス
「ああ、それにこのお金は勝って勝ち抜いたものだからな、直江大和にしてはいいお金だ」

いやいや、いいお金とか無いから、普通。

彰人
「それじゃ、カラオケでどうだ。メンバーも結構居るし、これ位あ

れば、二時間は入れるだろうし。あ、百代、携帯貸して」

そして俺は川神院に電話。そして帰りが遅くなることを言っといた。

一子
「だけど、カラオケなんて久々ね。ね、お姉さま？」

百代
「ああ、そうだな～。今日は歌うぞ、弟の金で」

大和
「もう、文句言うのは辞めたよ・・・・・・はぁ～」

モロ
「ど、ドンマイ、大和。」

岳人
「あ、イケねぇ、俺様今日、ジムだった。」

突然岳人が言うが。

大和
「あ、そうなんだ。それじゃあな」

モロ
「バイバイ」

京
「それじゃ明日」

そう、誰一人して、止める奴はいなかった。まあ俺もたぶん止めないだろうが。

岳人
「だ、誰も引き留めねぇ。く、くそぉおおおおおおお。じゃぁぁぁぁなぁぁぁぁぁ」

なんか、泣きながら帰って行ったなあいつ。

彰人
「うんじゃ、行くか？」

そしていつもの通り、百代は俺の隣にベッタリ。

モロ
「なんで、最近この二人は加減が無いんだろうな」

大和
「すでに、兄弟も染まってしまった。もう終わりだ。」

京
「だけど、こういうのもなんだけど、お似合いだよね、この二人。客観的に見ても」

大和
「確かに、そうだが。一人身にしてはこれは辛い」

彰人
「なら、頑張って彼女作れよ、兄弟。しかし、百代くっ付きすぎだ」

百代
「いいじゃないか～。それにしても、うちのファミリーは女子たちはかわいいが、男は・・・・・・はぁ～」

大和とモロを見てため息。

クリス
「しかし、お二人は、何年のお付き合いなのだ？」

クリスが、後ろで俺らに聞いてきた。そう思えば俺らって。

彰人
「まだ、一ヶ月も経ってないよな、百代。」

クリス
「は！？」

大和
「まあ、普通そういう反応だろうな。この二人の動きや、話を聞いているだけなら、普通に夫婦だしな。」

百代
「しかし、愛に時間は関係ないのだ、クリス。それにこれでも抑えているんだぞ」

京
「うんうん、モモ先輩、よく分かるその気持ち。」

と、納得している者も居れば

モロ・大和
「「それで抑えているんかい！！」」

と、ツッコミを入れるものもいる。

百代
「なんだ、モロロに大和。家ではもっと凄いぞ、なあ彰人？」

一子
「まあ、一緒の部屋で寝ているもんね。そりゃ仲いいわ」

彰人
「こらっ！！一子、変なこと言うんじゃねえ。」

と、後ろを見ると、やはりジト目の三人がいた。もちろんそれは大和、モロ、京だが。

クリス
「お、ここではないか？」

そして目的の、カラオケに到着。そして、時間を指定して、俺らは部屋に入った。

クリス
「おお、これがカラオケか。日本生まれの娯楽！」

一子
「はぁ～、クリスなに言っているのよ。カラオケは、カタカナなんだから外国でしょ、これだから外国人は」

大和
「いやいや、お前が間違っているからな、ワン子。」

モロ
「あはは、それはそれとして、誰から歌う？二時間だし、ここは一番最初の人さえ決めちゃえば楽でしょ？」

彰人
「う～ん、モロはアニソンしか歌えないし。兄弟は洋楽。ここは一子だろ、よし一子、先鋒だ、行って来い」

そして俺らのカラオケパーティは幕を開けた。

##第三十七話##（後書き）

彰人
「彰人と」

大和
「大和の」

彰人・大和
「ダベリバです！！」

大和
「なんで、あとがきのラジオがあの二人ではなく、俺らなんだよ。ほら、見てみろ放送部も最近じゃ俺らが司会みたいな空気出しているぞ」

彰人
「まあまあ百代にはいつもこの後きついお仕置きしてるから勘弁してやってくれ」

大和
「なんでお前は、そんなに笑顔なんだよ・・・・・・まあいいそれではお便りを読んでくれ」

彰人
「うーい、それではペンネーム、俺様最強さん、からです。」

大和
「なあ、これたぶん名前負けのやつだよな」

彰人
「たぶんじゃなく絶対だろうまあいい読もう。俺様の周りには俺様も凄いこと然ることながらそれより凄いやつが多すぎる、これに対して目立つことは出来ないのか？・・・・・さて燃やそう」
大和
「ああ、賛成してやる、そしてこのバカは後で集会だな。」
彰人
「賛成だ、それでは皆さん、急用が出来てしまったため」
彰人・大和
「「ＢＡＩＢＡ～Ｉ」」
そして数分後
岳人
「ギャアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアア！！」

##第三十八話##

今はすでに夜。俺らはカラオケが終了した後、全員そこで解散だった、大和達は秘密基地に行ってしまい、百代はさっき携帯に連絡が入り、なんでも挑戦者らしい。そして俺と一子は現在川辺でトレーニング。

岳人
「お、彰人たちじゃねぇか。」

そしてジム帰りの岳人が現れた。

彰人
「あ?ああ、岳人か、お前はジム帰りか?」

岳人
「ああ、俺様のこの美しい筋肉の源だぜ!それに俺様もいつもここでトレーニングしているんだぞ。な、ワン子?」

一子
「うん、いつも私のダッシュの測定してくれる。」

彰人
「それじゃ、そのダッシュと行くか、一子。」

一子
「了解。さっきまでの基礎トレーニングも飽きてきちゃったし」

そして岳人は、ストップウォッチを受け取り、測定に入った。

彰人
「いいか、自分の限界とそれに見合う筋力の鍛錬だからな、まあ無理せずに行けよ一子」

そして一子は川辺のある位置に、そしてそこに線を引き、軽いストレッチをしていた。

岳人
「それじゃ、行くぞ。」

一子
「オッケー、準備完了！」

岳人
「スタァァァァト！！」

そして走り出した、俺はそれを見ながら、イメージトレーニングをすることにした。

――――――同時刻、秘密基地にて

Ｓｉｄｅ　大和

クッキー
「それじゃ、設定は２００８年の春。」

俺らは現在、ゲーム会社ゲームをしている、内容は、ゲーム会社の社長になり、経営をする人生ゲームのような物だ。

モロ
「だけど、モモ先輩のあの駄々はすごかったね・・・・・・」

ああ、カラオケが終わって、急に姉さんの携帯が鳴って、その後の駄々、道路の真ん中で兄弟に抱きつく騒ぎ。

京
「あれはあれで、愛情表現でしょ。クッキー、そろそろファンディスクの時期」

クッキー
「うん、前作が人気商品のため、支持も上々。」

クッキーは今のゲームの審判。

大和
「京ソフト、中々。だけどさ、姉さんは完全にああだけど、なんて言うか、あれでいい様な気がするんだよ、俺的に。兄弟が帰ってきてくれたおかげで、少しはてか完全に姉さんのコントロールは出来るようになっているし」

そして俺は、サイコロを振りながらキャップに回した。

キャップ
「それによ、モモ先輩、彰人が居なくなったからの一週間なんて、荒れに荒れて。それに一ヶ月も経つと、いつの間にかギラギラしてたら、それの清算じゃねえの。って！ああ、俺の会社は火の車だ！！」

クッキー

「大丈夫、血が流れている間は、勝機はあるよ。それにしても噂だと大和よりも頭が切れるみたいだそうだね。」

大和
「ああ、ホント。ある意味既に兄弟は兄だよ。」

モロ
「あれ、大和がそう言うなんて、なんかあったの？」

京
「この前の賭けレースだって、大和一人の勝ちでしょ？」

大和
「いや、それがな・・・・・・違うんだ」

モロ・京
「「はい！？」」

大和
「実はな、あの後俺は陸上部の奴らに礼を言ったら、そしたら、モモ先輩の彼氏が、葵よりもいい条件だったから、やっただけだから、報酬はいいだってさ」

モロ
「うわっ、じゃあ彰人は二人の動きすら読んでいたって事？」

キャップ
「しかし、大和もそれをしていたのかね、どう思うよ京」

京

「セコかっこいい！！」

もちろん、これはスルーする。

大和
「やっぱ、兄弟は凄いよ。だけどいつかは勝ちたいな、てか勝つ。それに葵にも負けていることになるしな。」

その時大和は、盛大に燃えていた。

Ｓｉｄｅ　ｏｕｔ

一子
「ごーーーーーーる！！」

そして一子がダッシュのセットを終了した、まあまだトレーニングは残っているが。

岳人
「おい、ワン子。タイム落ちてきたぞ。」

一子
「やっぱし、スタミナが無いのよね、私」

彰人
「お前のスタイルはスピードだろ。そこまで欲張るな。」

しかし、普通、五十本ダッジュで、ラストだけが、一秒下がり。それ以外は誤差はカンマの間、結構凄いと思うのだが。

岳人
「それじゃ、少し休憩入れるか。」

と、岳人が言った瞬間に、上の道路の方から物凄い足音が聞こえて、そしてこう聞こえた。

英雄
「フハハハハハハ。休憩中とは、好都合。あずみここで止めよ」

そして、たぶんだがこの町で唯一のメイド保有の男とそのメイドが車から降りてこっちに来た。

一子
「ゲっ、九鬼君・・・・・」

おお、一子が苦笑いとは、勉強以外でははじめて見たぞ。

岳人
「しつこいようだったら俺が追い払ってやるよ」

そして英雄が来た。

英雄
「我が愛しの一子殿!!元気そうでなによりだ!!」

すげぇ、大和の言っていたことが本当だと俺は思った。しかし英雄がねぇ

一子
「あはは、まあね」

英雄
「ちなみに我も元気だ！見よこの栄光の印を。」
そしていつもの通りのポーズをする英雄。

一子
「それは・・・・・・よかったね。」
ホントに一子が引いてる。

英雄
「夢に向かう姿はいつも輝いている。流れる汗はダイヤモンドよりも美しい！」
なんか口説いてないかこれ？

一子
「え、えーと？」

英雄
「我と交際してくれ。交換日記から申し込む！」
どストレートだ、この人。

一子
「・・・それはごめん」
まあ、いきなりならばそうであろう。

英雄
「そうか、ならば日を改めよう。何か鍛錬に必要な物資があれば我が九鬼財閥の力を結集させて、何でも調達してごらんにいれようが」

一子
「あはは、お気持ちだけ貰っておくわ」

しょうがない

彰人
「一子、トレーニング、再開だ。スタミナ付けにさっきと同じダッシュだ」

一子
「うん、それじゃ九鬼君悪いけど、あたし」

英雄
「ああ。我に気にせず続けてくれ。もう口は挟まぬ。」

そして一子はまた、さっきの位置に戻り

一子
「――よし！ダッシュ再開」

そして鍛錬を開始した。

彰人
「しかし、英雄が一子をねぇ」

英雄

「ああ、これは彰人。すまない挨拶が遅れた。我は一子殿が居ると周りが見えなくてな」

岳人
「しかし分からなぇ」

その時岳人が、疑問を口にした。

英雄
「なんだ、庶民。質問することを許すぞ」

岳人
「お前なんて、金あり、頭よしだろ。姉ちゃんなんて腐るほど食えるだろうに、なんでワン子なんだ?」

英雄
「ふん、その程度も分からないのか、庶民は」

彰人
「手に入る物よりも、手に入りにくいものの方がずっと価値があるんだよな、英雄?」

英雄
「フハハハハハ、さすが我も友。その通りだ。最初は応援しているだけで良かったのだがな、目に焼きついてしまった。」

岳人
「それで、そう。一つ聞きたんだが」

その時岳人が、どこぞのゴマすりをし始めて。

英雄
「なんだ、庶民申してみよ」

英雄も英雄で一子を見れて機嫌が良く

岳人
「あの～あずみって言うメイド、いい女だよな」

英雄
「ああ、あずみは我の家臣でもあるからな、当然だ」

岳人
「やっぱ、九鬼財閥にはいいメイドがいるのか、紹介してくれよ」

うん、こいつバカだ、しかし英雄は

英雄
「なに、庶民の願いを聞くもの悪くないだろう、おいあずみ」

そしてあずみが直ぐにこちらに来て、俺に軽く会釈して英雄の話を聞いた。

英雄
「実は、かくかくしかじかでな。」

そしてそれに納得したように、あずみがこちらを向き。

あずみ
「分かりました～それでタイプとかは？」

岳人
「年上の、巨乳！！グハァッ！！」

すかさず俺は岳人に一発腹に入れた。

あずみ
「了解しました☆それでは失礼、一枚写真を。」

そして写真を一枚撮り始めた。しかし普通の顔で

岳人
「おいおい、待て待てそれじゃ俺の筋肉が目だたんだろうが。」

そしてもう一度、今度はポーズを取り

岳人
「良し、ドンと来い！」

しかしあずみは既にメールを送っていた。

あずみ
「写真は一枚で十分ですよ☆」

英雄
「九鬼財閥のメイドはあずみによって教育されている。直ぐ返事が来るだろう」

その時、あずみが英雄の傍に行き。

あずみ
「英雄様、またも怪我のため小十郎が失敗を」

英雄
「うん、あ奴の熱意は買うがしかし、こうも失敗続きだと・・・・・
・しかし姉上はずっと傍においておる・・・・・わからぬ」

彰人
「小十郎か、懐かしい名前だなそれ」

英雄
「そう思えば、彰人も知り合いだったな。」

彰人
「ああ、昔はよく一緒に鍛錬とかしてたよ。」

と、言った時あずみが手招き

あずみ
「おいおい、だったらなんであいつは今でもあんなに弱いんだよ、
お前みたいは強い奴が一緒に鍛錬していたんだろ（コソコソ）」

彰人
「いや、鍛錬たって、百代も揚羽さんもいたんだぞ、だから数分で
伸びてたって。（コソコソ）」

そしてその時あずみの携帯が鳴った。

岳人
「おおおおおおお、来た来た来た！！」

バカがバカっぽくハイテンションになった、ホント耐久力バカ。

##第三十八話##（後書き）

最近、ネタが切れてきしました・・・・・・とほほ、バイバ～ィ

##第三十九話##（前書き）

三十九話更新です。

##第三十九話##

Ｓｉｄｅ　鉄心

ふむ、やはり百代の挑戦者にしては弱すぎたかのう、なんせのう

挑戦者
「あ、あ、ああ、あ・・・・・・強すぎる・・・ガクシ」

物の三秒でこれではのう。しかし

百代
「彰人はまだか～。妹の相手もいいが私も相手しろう～」

駄々はこねるのじゃが

鉄心
「半月前とは随分違うの、百代」

百代
「ああ、ジジイ。なんだこの挑戦者は、まったく強くないぞ」

鉄心
「しかし、そこまで不満そうではないのう。」

百代
「あ、そりゃ、彰人が居るからに決まっているだろうが、このジジイ！！」

鉄心
「ホ、ホ、ホ。しかし気付いておるのじゃろう、百代よ、彰人とのこの前の死合い。まったく彰人は“本気じゃなかったこと”も」

ワシは、それを聞いてみた。そして帰ってきた答えは

百代
「ああ、わかってる。彰人は私とジジイが組んで戦っても勝てない、それは絶対だ。それにあの刀。私も最初に見たときは疑ったぞ、なんだあの気はそれに私はギリギリ“触れた”が、あれある意味モロロとかなら持てるだろうが京やクリスにワン子は持てないだろう。あんな」

鉄心
「邪の気じゃな。昔のお主じゃな、それか釈迦堂の、のう。」

百代
「うっせいよジジイ。それにあれは彰人の刀だろう?あれを聞いた時は呼ばれたとか言っていたしな。それにあれが無くても、たぶん私は彰人の右腕だけで・・・・・負ける。まだ左腕ならどうにか成るだろうが、まだ右腕が未知数だ、それに」

百代が伏せながらそう言うた。これは間違いないのじゃろうな、しかし

鉄心
「知っておるかのう、彰人の奥義を」

その時、百代はこちらを向き

百代
「は?彰人の奥義だと。そんなあるのか?私はずっとあの右腕の自分の存在を消すことだと思っていたが」

鉄心
「違うのじゃ、確かにあれはある意味、いや彰人にとっては奥義じゃろうが、あれは違うのじゃ。」

百代
「おい、ジジイ。意味が分からなくなってきたぞ」

鉄心
「彰人がここに来て、四年が経った頃初めて稽古を体験させた時を覚えておるかのう?」

百代
「ああ、ジジイが連れてきて私に紹介したときだろう?」

鉄心
「うむ、そしてさらに時が過ぎていった時に、ふとモモと彰人の成長に驚いた。」

百代
「まあ、私もそうだったが彰人も凄まじい力のつけ方だったな」

鉄心
「そしてある時、聞いてみたのじゃ、彰人はどうやって強くなろうとする、とな?」

百代

「そしたらどうしたんだ、私なら鍛錬と相手により実践的組み手だろ」

鉄心
「違うのじゃ、彰人はこういったのじゃ“最強の自分と勝負して勝つ、唯それだけ。”ワシはそれを聞いた瞬間、背筋が凍ったのじゃ、理由はわかるのう、モモ。」

百代
「最強の自分を倒す、それは自分がいつも最強になり、そしてまた最強の自分を作り出す、それは永遠に続く螺旋・・・・・・はは、それじゃ私達は彰人に勝てないじゃないか。」

鉄心
「うむ、しかしモモ、なんじゃその顔は。なんとも生き生きしてないかのう？」

百代
「ああ、だってな。私の憧れ、そして好きな奴が、最強だなんて最高じゃないか。」

そして、院に戻っていった。

鉄心
「ふむ。強いのう、百代はいい嫁になるかもしれんのう。彰人よ良かったのう。ホ、ホ、ホ。」

ｓｉｄｅ　ｏｕｔ

さて、あずみの携帯が鳴って、そしてその反応だが

あずみ
「それでは、まず。彼氏が居るので無理」

岳人
「まあ、そりゃしょうがいな、次」

あずみ
「バカそう。てかバカでしょ。私は中性の子がいい。」

岳人
「く、男は力だ、力。つ、次」

なんか岳人がどんどん悲しく見えてきたな。

あずみ
「逆に筋肉が付き過ぎて、怖いてか壊されそう。」

岳人
「俺の筋肉が、逆に・・・・・・」

あずみ
「てか男のタンクトップとか生理的にアウト」

岳人
「ぐ、グハァッ！！」

彰人
「あ、岳人が撃沈した。」

あずみ
「あ、一件だけ、その胸に抱かれたいだそうです。」

岳人
「俺様復活!!それで誰、そしてバストは?」

あずみ
「海兵隊のリチャードさんです」

岳人
「おいいいいい!!たしかに胸筋凄いだろうけど、それは男だろうが!」

あずみ
「それではもうありません」

英雄
「ふん、救えぬ庶民だな。」

あずみ
「やはり、その直ぐにでも襲い掛かりそうなオーラが問題かと・・・・・それよりもそろそろ英雄様総会の時間ですので」

英雄
「く、そうか。それで失礼しよう。それではな庶民、それから彰人、そして一子殿!!」

そして英雄は去っていった。相変わらず、ハイテンションな。

彰人

「おい、一子。そろそろ俺らも帰るぞ。飯の時間だ」

そして飯の言葉に反応して。

一子

「？？もうそんな時間？わかったそれじゃ帰りましょうって、どうかしたの岳人？」

彰人

「気にするな、いつもの事だ」

そして俺らは岳人を置いて帰っていった。そして俺らはダッシュしたため瞬間的に着いた。

彰人

「ただいま、かえり「あ～き～と～♪」・・・・・へ！？」

そして急激な衝撃と、軟らかい物が当たった・・・・・これは

百代

「ふふ、さっそく彰人の匂いはいいなぁ～」

彰人

「ただいま百代、しかし帰って早々どうかしたか？」

そして見てみると、たぶん物の三秒でやられた挑戦者が居た。

彰人

「なるほど、欲求不満なわけね？」

百代
「そうだ、そうだ。私は不満なのだ、だから、彰人と一緒にお風呂に入る」

彰人
「意味が分からないから。それよりも、一子、そこでボーっとしてないでどうにか」

百代
「ワン子、先に風呂に入っていていいぞ」

一子
「は～いそれじゃあね、お姉さま、彰人。」

そして一子は消えていった。

彰人
「あのう百代さん、一子と一緒に入るという選択肢は？」

百代
「嫌だ♪それでは彰人の部屋に、レッツゴー♪」

彰人
「いや、だから・・・・・はぁ～しょうがないか。しかし百代最近ホント積極的だな。これでは俺の理性ももたん」

百代
「いいでじゃないか、彰人は嫌か？」

彰人

「はいはい、そういう顔をしない。まったくお前は」

ルー
「う～んこれは先生として怒るべきかネ？」

彰人
「それは無粋というものじゃないですかルー師範代？」

そして俺らの背後にいるルー師範代に声を掛けた。

ルー
「あれれ、気付かれてしまっていたネ。これでも気は消していたんだけド」

百代
「甘いな～師範代。これでも私達は、これでもちゃんと気配を配っているんぞ」

ルー
「これは失礼したネ。それにしても二人とも・・・・・・ベタベタね。」

彰人
「あはは、一応ここ俺らの家なんで、一応学校では抑えているんで、勘弁を」

そしてルー師範代は苦笑して、奥の部屋に消えていった。

百代
「あれは絶対、羨ましいんだろうな。なんでも堅物らしいし。」

そして俺らは俺の部屋（愛の巣・・・・・・誰がそんな名前を！！）に入っていった。
そして数十分後、一子が俺らを呼んできたてか二日ぐらい前は顔真っ赤で呼んでいたのが今ではなんでそんなに当たり前のように俺らを呼ぶんだ一子よ。そして俺らは風呂に入った。

百代
「はぁ～今日の挑戦者も一瞬だったな」

彰人
「相変わらずの強さだな。まあ鉄爺の捜している北の者を待っていろよ。」

百代
「まあ、そうなんだが・・・・・・やっぱこれは彼氏に甘えて発散だ。あ～き～と～♪」

彰人
「しょうがない、奴だな。今日はキスだけだぞ。この後飯なんだか」

その瞬間、キスと言うよりも普通に襲われた。

百代
「やはり、お前とのキスは堪らないな。私はこんなにも気持ちがいい」

彰人
「どういう意味で？」

百代
「その質問はエロいぞ／／／／／・・・彰人、わかっているんだろ」

彰人
「しょうがいな奴だな。こっちにおいで」

――――現在飯も食べて、すでに就寝の時間。

彰人
「それで・・・・・・なんでお前はいつも俺の布団の中に既にいるんだ！！」

百代
「すでに布団の中は暖かいぞ、彰人♪ちなみに私が布団でもある」

俺の言葉はスルーですか、まあ布団の中には俺も入るが。

百代
「やはり、枕も彰人の匂い♪いいなここは私の二番目にお気に入りの場所だ。」

彰人
「二番目って一番は」

そして俺に抱きつき

百代
「もちろん、ここだ。やはり直の匂いはたまらないな、彰人」

彰人
「普通、そういうことは俺みたいな男が言うんだがな・・・・・・」

百代
「いやいや、お風呂では激しかったな彰人」

彰人
「しかし、満足だろ、それよりも足りないのか？」

そして真っ赤にしながら百代のこの一言。

百代
「ああ、全然足りない。もっと、もっと彰人色にしてくれ／／／／／／」

まだ、夜は始まったばかりであった。

##第三十九話##（後書き）

彰「さて、始まりました、タベリバです。」

大「結局この二人でお送りします」

彰「ま、しょうがないだろう。それでは、ここで告知」

大「えっと、何々。作者より、私こと、ブラックサレナは12月25日から1月3日の間、『誤字雑字大掃除』を開始します、つきましては、自分でも治していきますが。もし直っていなかったりした場合、どうかお知らせをください、お願いします。だってさ」

彰「まあこの文章でも多いからな、ま、年末の仕上げということか、それでは次回に会いましょう」

彰・大「「バイバ～ィ」」

##第四十話##（前書き）

四十話です、はい。

##第四十話##

――――――――――四月二十九日

今日からゴールデンウィークらしい、カレンダーを見て確認した。
そして

彰人
「いい加減、俺の腕を離しなさい百代」

百代
「いいでじゃないか。今日も朝から元気は彰人の息子を、すこし見ているだけだ！！」

彰人
「自信満々に何言いやがる。さっさと起きて、飯食って鍛錬するぞ。久しぶりに俺もちゃんと鍛錬しないと体鈍る。そして百代を抱けなくなる」

そして直ぐに起きて、瞬速で下着姿だった百代は胴着を着ていた。

百代
「さ、飯を食いにいくぞ彰人」

彰人
「そんなに抱きしめられなくなるのが嫌なのか？」

百代
「当たり前だ！！私の今のすべての幸せなんだぞ。それよりも彰人、

キスキス」

そして俺らはモーニングキスをする。

一子
「お、お姉さま。さすがに朝から大人だわ・・・・／／／／／／／」

そして、俺らを起こしに来た一子に見られた。

彰人
「そ、それじゃ行くか／／／／／／／」

そして俺らは修行僧達に挨拶して、いつもの席に着いた。

ルー
「お、今日は二人とも早いネ、おはよう」

彰人
「おはようございます、ルー師範代」

鉄心
「ホ、ホ、ホ。今日は彰人の鍛錬の手伝いじゃったな。それに比べ、モモよ、挨拶はどうした」

百代
「ちっ「百代」く、分かったよ彰人。おはようルー師範代、それにジジイ」

鉄心

「まったく、なぜ彰人にはそんに素直に従うのじゃ」

百代
「好きだからだ、愛しているからだ。」

いやいや、そんな言を大声で言わなくても・・・・・・

Ｓｉｄｅ　大和

さて、今日でゴールデンウィーク突入か。ちょっと早いかな。そして俺は起きて、寮を徘徊していたら、庭でトレーニングしているクリスが居た。

大和
「いつもご苦労だな、クリス」

クリス
「ん？直江大和か、おはよう」

大和
「ああ、おはよう」

クリス
「覇気が無いな、それに鍛錬はしなければ、彰人殿やモモ先輩のように強い力も心も着かないだろう。それに朝の運動は頭をクリアにしてくれる。」

大和
「あはは、姉さんに、兄弟は・・・・・・そこまで真面目では無いと思うぞ・・・・・・ワン子じゃないしなあの二人。」

クリス
「な、そんなはずが無いだろう。あの強さに、そしてあの姿。あれこそ正に戦士の姿だ！！」

大和
「そう思えば、気になっていたんだが、彰人のお前の第一印象ってなんなんだ、すごく俺らと違いそうなんだが」

そうなのだ、確かに兄弟にしろ姉さんにしろ、人間的には凄く出来ている、まあ姉さんは兄弟がいてどうにかなっている状態だが。しかしここまで、なにしろ兄弟の事を殿って呼ぶ位だしな。

クリス
「ふむ、直江大和に言うのも変だが、確かに兄弟と言われるだけあってよく一緒に居たのだろう・・・・そうだな、一番最初は父様、尊敬するほどの人と、漠然だったが。その後、色々と聞いたり写真で教えてもらったりして、さすらいの武士のようだった。」

あいつは一体、ドイツの軍からどういう事をしてきたんだ、たしか紛争を止めたんだっけ、殲滅して。こうも話しているがしかし未だにクリスとの距離がギクシャクしている俺であった。

Ｓｉｄｅ　ｏｕｔ

俺は、鍛錬のため色々しているが。今日はなぜかまた、と、言うよりも百代との試合の決着をつける為の試合。

彰人
「ふむ、百代。それじゃ俺の動きは見えないよ」

そして現在、百代と試合をしている。俺は左腕を解放しているが、
それでも今日も百代は強い。先ほど顔に蹴りが入りそうだったし。
まあ俺はそれを叩いて凌いでいたが。

百代
「川神流、無双正拳突き！！」

そして俺に向かってくる技、勿論俺の蛇が防ぎ俺に隙を与える、ま
あもちろん蹴りを入れて、終了だが。

百代
「え、ちょっ、う、わぁぁぁぁぁ。や、やるなさすがは彰人、私の
攻撃も反撃の布石か」

彰人
「ま、俺の場合はこいつも相手だから大変なんだよ」

そして俺の左腕の蛇は相手を見ていた。そして

彰人
「行くぞ、スネェェェェェク・・・・・・」

俺は自分の気を左腕に集中させ、蛇は臨戦状態にして。そして

彰人
「バイト！！」

そして蛇が百代襲う、しかし

百代
「はぁぁぁぁぁ！！」

彰人
「真剣（マジ）かよ、俺の牙が防がれた。」

百代
「甘く見るなよ、彰人。私も日々進化していくんだぞ」

彰人
「そっかそれなら」

俺も本気で行こう！、しかしこれは・・・怖いな。

百代
「彰人、本気で来てくれ。私はお前を知りたんだ。もっともっと、だから」

そして俺は決心した、あいつの前でこれを使う事を。鉄爺の試合の時に見せたあの技を。

彰人
「我、神に成りし者、安らぎと平穏の世界を造りそしてウバウモノ・・・・・・行くぞ、百代？」

そして、百代は俺が背後に居ることに、今になって気付いた。

百代
「は！？彰人、いつの間に！？」

そして俺は“元”に戻り。

彰人
「甘いな～百代。俺の戦闘スタイルはスピードだぞ。」

百代
「むぅ～また、負けた～～～～～、いいんだ、いいんだ。それではお前が私の汗を流してくれ」

彰人
「まったく、話が合わないんだけど？なんで風呂に一緒に入らないといけないんだ？」

そして俺に百代が近づき、そして急に抱きつき。

百代
「お、お前がまた消えそうな、感じがしたからだ・・・・・・・」

そして少し肩を震わしながら、百代は言った・・・・・・・そうか

彰人
「ごめんな、百代。今後、百代の前じゃ、これ使わないからさ、な、百代、怖かったろ？」

俺は右腕を挙げながら、そう言った。しかし

百代
「なにを言う、彰人の嫁になるはずの私が、夫の事を知らないなんて嫌じゃないか。そうだろう彰人。彰人だって私の知らないとこがあったら嫌だろ、だから彰人、ありがとう本気で来てくれた事。」

そして俺の右腕を大事そうに包んでくれた。

彰人
「礼を言うのは俺だよ百代。あの姿でも俺を認めてくれて、恐れないで居てくれて」

そして強く抱きしめた。

百代
「なにを言う。私は彰人の嫁だぞ。だ・か・ら♪」

そしてちょっと半泣き状態だった百代が笑い出して。

百代
「お風呂で、さらに私を知ってもらおう。だから行くぞ、彰人」

彰人
「そうだな、そろそろ俺の理性が限界のようだ、今から、俺らはバカップルになるか」

百代
「それは既に遅いかもしれんが・・・・・もっと甘えていいんだよな？」

彰人
「勿論」

そして、またもや、てかこの川神一のバカップルが、ここに誕生した、しかし周りの反応は、全員が一斉に『今さらかよ！！』だった

のはこの場では無粋というものだろう。

Ｓｉｄｅ　鉄心

うむ、さすがはワシの孫じゃ。ワシでさえあれは怖いと言うのに、やはり若いと言うのはいいんじゃな。しかし、彰人の気はまだ増えていっとるの。いつもはその気で自分の気を抑えていたせいで分からなかったが・・・・・モモの言うとおりワシとモモが一緒でもかないそうもないのう。それにしても試合の後のあれは・・・・・・いいものが見れたのう。これならば川神院は安泰じゃな、まあワシもまだくたばる気は無いがのう。

Ｓｉｄｅ　ｏｕｔ

そして俺らは午前の鍛錬を終わりにして、ちょっと商店街に出た。ここは金柳街、川神の商店街である、昨日もこのカラオケに行ってたのだが、あ、あれは

彰人

「キャップだな」

そしてちょいと覗いて見ると。

キャップ

「店長、この本はこの棚で、いいですか?」

店長

「許可だ、バカヤロー。だけど、バンダナよくやるな。おめぇみたいのはカラオケとかの方が似合うだろうによ。」

キャップ

「まあ、俺はここが好きなんですよ。それにここ、色んな童話がよめるし」

店長
「バッキャヤロー、売れなきゃ意味がないだろうがよ。最近大きな店が出来ちまって。売れ行き落ちに落ちてるってのによ。」

キャップ
「だけど、店長も対策ぐらいあるんでしょ」

店長
「おうよ、まあ後はお前のも期待してるからよ、ほら前金だ」

キャップ
「お、スンゲー福引権の束。俺頑張っちゃうんぜ」

店長
「おお、頑張りな。そして・・・・・・黙々と立ち読んでいるバカヤローが居やがる」

キャップ
「お客さん、それ買うの買わないの？」

京
「あ、キャップ。今日は本屋なんだね」

キャップ
「ああ、これでも探検家になるって話を逸らさせるなよ、京。一応仕事中だから、頼むぞ」

京
「うん、それじゃあこの章が終ったら買うかどうか決める」

キャップ
「それで、その章は何処までなんだ?」

京
「巻末まで続く、壮大な章」

キャップ
「ふざけんな、バッキャロウメ」

京
「キャップ、口癖まで移っているよ。」

なんだろうな・・・・・。キャップも京も普通だな。まあ俺らが普通じゃないのかな。

彰人
「はぁ~。そう思えば百代。俺ら何処にいくんだよ?」

百代
「う~ん、まず、飯にしよう。鍛錬の後のせいか、酷い空腹だ。」

彰人
「了解したよ、百代」

そして俺らがファミレスに到着ゴスト、そしてそこに岳人とモロを見つけたため。

百代
「なあ、彰人。」

彰人
「相変わらず、悪いな～百代」

俺らはお互いに笑いあい、そして俺らは岳人たちにバレない様に後ろの席に着いた、まあ、俺らの後ろ姿だけなら大丈夫だろう、それではちょいと聞いてみるか。

岳人
「俺様閃いたわけよ、街のナンパは古いって」

モロ
「ふーんそれで、どうするわけ」

岳人
「ここのファミレスのねーちゃんを口説く。」

アホがいる、ここにアホが居るよ。

モロ
「え、マジで。飛ばしすぎだよ」

岳人
「俺様が知的にコーヒーを頼んだのもこのための布石だぜ」

アホがいるよ、ホントに。

ウエイトレス

「ご注文のコーヒーと、ピーチジュースです」

彰人
「おお、どうも。」

そしてまた、俺らは岳人達のバカトークに集中した。

岳人
「ガキなお前はクリームソーダか、くくく。」

モロ
「うるさいなぁ。クリームソーダ美味しいんだよ」

岳人
「客居なくて、ウエイトレス退屈そうだろう。見てろ。すいませーん」

ウエイトレス
「はーい」

岳人
「コーヒーおかわりで」

岳人
「見てろよぉ。獅子座の恋愛運は今日完璧なんだ」

ウエイトレス
「お待たせしました。（コーヒー注ぎ中）」

岳人

「今日人少ないっすね～」

ウエイトレス
「そうですね、祝日だからもっと居てもいいのに」

岳人
「見た目学生だけど、もしかして川神？」

ウエイトレス
「え！？」

岳人
「バイトいつまで？終ったら俺達と遊びに・・・・・・」

ウエイトレス
「やだ、何ですか、いきなり急に、やめてくださいそういうの、気持ち悪い」

岳人
「・・・あれ、可笑しいな、このナイスガイな俺様が」

モロ
「ドン引きされてるじゃん、おもいっきし、ダメダメじゃん」

岳人
「まあ、よく考えればいつもことだな。」

モロ
「それもそうだね。あはははは」

岳人
「おかしくねぇぇよ！！」

モロ
「出た出た時間差ギレ、だけど負けなれているのは事実だろ。ナンパに急ぎすぎだよ」

岳人
「いや、モロがお子様クリームソーダを飲んでいるせいだ」

そんな感じなバカバカしい話を聞いているとき、妙な事が聞こえてきた。

##第四十話## （後書き）

あま～くなります、これからもっともっと・・・

##第四十一話##（前書き）

明日は決戦。

##第四十一話##

ゆとり１
「じゃあ、ユウの奴の野郎、薬マジでやってたのか」

ゆとり２
「最近、親不幸どおりでよく薬売ってるって話だよ」

ゆとり１
「なんかキめてる奴増えているよな」

ゆとり２
「どかっと売ってる人がいるらしいよ」

ゆとり１
「よく知らないけど、そういうのは、取り仕切る怖い大人がいるんじゃね？」

ゆとり２
「うん。だからいつか売ってる人、シメられると、思うよ」

ゆとり１
「怖ぇーけどキョーミあるな、薬試してぇ」

ゆとり２
「今の話聞いていて・・・・・・ケージ君勇気あるよ、ハンパねぇ」

ゆとり１
「ま、今は窓割りゲームがあるから、退屈しねぇけどな」

そして、その少年達はレジへと消えていった、さらに岳人達も結局、駅前でナンパをすることにしたらしい。

百代
「いや、しかし、岳人の、あれはアウトだろう。私なら一瞬だがな」

彰人
「・・・・・・」

それにしてもあんな中学生が、たぶん例の忠勝の件についてだろうが・・・・・・それにしても最後の窓割りゲームって、まさか「・・・と」、いや模索は仲間の危機にしか「彰人!!」

彰人
「え!?ああ、すまん百代、どうかしたか?」

百代
「まったく、私が声をかけているのに、無視はないだろう。それに難しい顔してるぞ。私とのデートなんだから、笑顔でいろ、それか私にだけイヤラシイ目で見ていろ」

彰人
「ああ、すまないな。それにしてもこれはデートなのか?まあ、いいか。それにしてもモロも大変だな、岳人のナンパなんて、１００%無理だろう、良くて、宗教の勧誘だろうに」

百代
「あはは、言えてるなそれ。・・・・・しかし」

そして百代は俺を見ながらジト目をした。

彰人
「ああ、だうかしたか？服の事ならしょうがないだろう、これしか外着が無いんだから。」

百代
「いや、それは別にいい、今度ファミリーでお前の服選びをするから。」

彰人
「それじゃあ、どうかしたか？」

百代
「ああ、さっき岳人がナンパして、失敗していたウエイトレスの姉ちゃんが、ずっと彰人のことを見ているのが気に食わないだけだ」

いやいやそんなに、ってホントに俺のこと見てるよ。

彰人
「いやいや、もしかしたら百代かもしれんぞ、お前は有名人だし。」
「ジトーーーーー」う、そろそろまた、ぶらりと行くか？」

百代
「ああ、そうしよう」

そして俺らも、すぐにレジで会計をすませて出てきた。もちろん俺もちだ。そして店をでて俺らが恋人つなぎをしながら、商店街に戻り、と、そのとき、物凄い足音が聞こえた、その正体は

一子
「いたぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！！」

一子だった、しかもブルマで、そして滅茶苦茶早く。

百代
「どうかしたか？かわいい妹よ」

彰人
「一応、昼飯は外で食べると言ってあるが？」

一子
「そ、それが、挑戦者なのよ、挑戦者。私が相手したいのに、爺ちゃん、彰人か、モモを連れてきてくれって言うから、急いで来たわ」

百代
「あの、ジジイ。私の祝福の時間を」

彰人
「はぁ～、わかった。行くぞ百代」

百代
「ええ～！！行くのか彰人。確かに勝負も良いが、今は彰人との」

彰人
「ああ、俺も今はお前の方が良いが、しかしこれを使って、鉄爺に金貰う。せっかくのデートの賠償金でな・・・ク、ク、ク。」

一子
「おお、彰人が・・・・怒ってる・・・・・ガタガタガタ」

そして俺らは、ダッシュをして、わずか二分で到着。

一子
「じ、じいちゃん、つ、連れてきたよ。」

鉄心
「うむ、ご苦労であったって!!なんじゃこの気は・・・・・彰人？」

そして俺は、ちょいと本気の状態で、鉄爺を睨んで

彰人
「俺らのデートを邪魔した、挑戦者は何処にいるのかな鉄爺？」

そして鉄爺は無言で、指でそのモノ達を指した、しかしなんでそんなに震えているんだろう？

忍者1
「俺たちは落ち葉隠れの忍者だ。ここに武神として名を馳せている川神鉄心に挑戦をしようとした所、川神百代か、御剣彰人を倒してから申し込むように言われた。だから・・・え!?」

そして片方の忍者が俺が接近していくごとに黙り始めた。

忍者2
「おい、ナノレト・・・な、なんだ、この殺気は!!」

彰人
「お前ら、俺がその御剣彰人だ。それでは勝負をハジメルトシヨウ

カ？」

忍者１
「く、くそ。いくぞサズケ。忍法、影分身」

そして俺の周りにその忍者が数人出てきたが。

彰人
「ウザイ」

そして俺は気ですべて吹き飛ばした。

忍者２
「なんだと、ナノレトの影分身が、一瞬で。こ、こいつ、ば、化け物か！」

百代
「私の彼氏を化け物とは・・・・私ですら殺意が芽生えてくるな。」

一子
「ガクガクガク、ブルブルブル」

彰人
「お前ら、小便はすませたか？神のお祈りは？部屋の隅でガタガタ振るえて命乞いする準備はＯＫ？」

忍者１・２
「「ひ、ヒッ！」」

彰人
「なんで、よりにもよって祝日に来るんだよ、このＫＹ忍者共。貴様らにはこれがいいだろう。行くぞ！！」

と、構えた瞬間に相手を見たら既に鉄爺が間に入り相手を見ていた。

鉄心
「うむ、すでに失神しておる。この勝負彰人の勝ちじゃ。まあそんなきつい殺気など浴びていればこうなるだろうぞ。ワシも震えておるしのう・・・・・そのなんだ、すまんのうデート中に」

そして、あえて構えなおし

彰人
「そう思えば、鉄爺にも言ってなかったね。」

鉄心
「へ？」

彰人
「勝手にこんなシステムなんか作ちゃって。お仕置きでもしようか？」

そして蛇の出したらが直ぐに引っ込めて

彰人
「それじゃ、鉄爺。後はヨロシク。俺たちはデートの続きしてるから、もし挑戦者が来たら・・・・・命が無いと思ってって挑戦者に言ってね♪」

俺は最大の笑顔でそう言い、百代の手を掴んで仲見世どおりにでた。
彰人達が消えた後の事。

鉄心
「さすがにデート中は不味かったかのう。」

一子
「あんな、彰人見たこと無い」

ルー
「あれはあれで、凄いネ。こっちも怖かったシ」

鉄心
「うむ、最近彰人怖いのう」

一子
「爺ちゃん、それ絶対に彰人は悪くないと思うよ。彰人だってお姉さまのデートは楽しみだろうし。」

ルー
「そうだろうネ。それでは鉄心様も」

鉄心
「うむ、気をつける事にしよう。それに修行僧に悪影響だしのう。いつもは隠しておるからのう。あの気」

ルー
「はい、いつもは気を自分自身で潰していますから、彰人は。」

以上、川神院からでした。

百代
「ふう、彰人の怒りっぷりにも私は惚れ直したぞ。それにしてもあれだけの殺気で失神って最近の挑戦者は弱いな～私なら丁度いいぐらいだ」

彰人
「しょうがないだろう、大体強い奴らは、忙しいだろうし、それに未だに見つかってないしね四天王。」

百代
「まったくだ、しかしここからどうするんだ、彰人。時間的にはまだ二時だし。」

彰人
「そうだな、どうするからな～」

と、俺らが思っていたときに、なぜか不審な気を感じた。

彰人
「ん!?」

百代
「どうかしたか、彰人?」

百代は感じていない、気のせいか。そして俺らはデート、楽しんだ。

Ｓｉｄｅ　???

???

「流石だな、楽しみだ。あはははははは」

その男はどこに消えて行った。

Ｓｉｄｅ　ｏｕｔ

――四月三十日。

さて、今日も大和達と合流した。

大和
「お、兄弟に姉さんだ、おはよう」

彰人
「うーい、おはようさん」

京
「いいな、モモ先輩彼氏の腕に抱きついて登校。」

百代
「そうだろう、いいだろう。」

モロ
「最近、凄くなってきたね、二人とも」

一子
「朝なんて、キスしてたわ。しかもずっと・・・・・・」

岳人

「お前、見たのか?邪魔したのか?」

一子
「うんうん、ただ彰人の部屋の前に、現在キス中っていう張り紙があったから」

彰人
「なんて事をするんだ百代!!」

百代
「なんだ、知らなかったのか。昨日一緒に寝る際に付けといた。これで邪魔する者はいないぞ」

いやいや、そんなに胸張って言うことじゃありませんよ。

キャップ
「そう思えば、今日はモモ先輩のファンいないなぁ～。やっぱあの昼の放送が聞いているだろうな。」

彰人
「あはは、もし居ても、こうして」

と、俺は百代のけしからん胸を持ち。

百代
「あ・・・／／／／」

彰人
「見せ付けてやる!!」

大和
「おいおい、朝から凄いな兄弟」

クリス
「破廉恥なのはいけないぞ／／／／」

百代
「あ、彰人～」

あれれ、甘くなってきてるぞ、声が。

岳人
「おいおい、あのモモ先輩が、とろとろだぞ。どんな調教しているんだよ彰人」

大和
「あれ、この風景どっかで・・・・・・あ、うちの両親だ」

彰人
「はいはい、後でね、百代。チュッ」

百代
「チュ。わかった、彰人」

モロ
「おかしい、なんか彰人に歯止めが無くなってる・・・」

大和
「ああ、これぞ真のバカップルだ。」

そして俺らはファミリー全員で登校した。

##第四十一話##（後書き）

ビバ！！バカップル。以上です・・・ごめんなさい

##第四十二話##（前書き）

あけまして・・・・あっ！おめでとうございます。

##第四十二話##

俺らが学校に到着したら、廊下でなんか騒ぎがあった。てか、なんだこのガムテープ？

大和
「なんかあったのクマちゃん？」

犬飼
「あ、彰人君に大和君おはよう、なんでも今度はこの硝子が割れたみたいだよ」

大和
「なにまたか、いい度胸しているな」

彰人
「ああ、まったくだな。鉄爺も許さないだろうな。」

犬飼
「うん。さすがに学長、怒っているんじゃないかな。モグ、んーケーキおいしい」

大和
「朝からガトーショコラかよ、すげぇなクマちゃん。」

彰人
「まず、朝からケーキってことに突っ込みを入れろよ、大和」

犬飼

「クーベルチュールがたっぷりと使われていて最高なんだ。」

大和
「ちょっと味見を・・・をこれはかなりいけるな」

彰人
「それでは俺も・・・おお、これ蜂蜜だな。」

犬飼
「おお、凄いね彰人君、一口で隠し味が分かるなんて。これは登戸の住宅街にあるから見つけるの大変だったよ」

大和
「割と距離あるのに、さすがだぜ」

犬飼
「はい、お裾分け。それにしても彰人君の舌は凄いね。」

大和
「サンキュウー」

彰人
「まあこれでも料理はする方だから。それにしてサンキュー。」

そして教室に入ると。俺らの物を見て目を輝いている犬が居た。

一子
「お、なんかおいしそうね」

大和

「クマちゃんからのお裾分けだ、少し食べるか？」

一子
「え、いいの。やったー」

大和
「クリスもどうだ？」

クリス
「まったく、朝から教室でケーキなど、非常識に思え」

一子
「これ、おいしいわね。まぐまぐ」

クリス
「・・・・まぁしかし違反ではないか・・・・だったら自分も食べさせて」

大和
「なんか、ブツブツ言っているうちに、うちの犬が全部食べてしまったぞ」

クリス
「なんだと・・・クッ」

いやいや、そんない悔しがらなくても。そして俺は優雅に一人で食べ始めたら。

一子・クリス
「「ジー」」

彰人
「わかった、わかった、クリスお前にはやろう、しかし一子。お前はさっき貰っただろうが、少しは自重しろ。」

クリス
「う、す、すまない彰人殿。それでは一口、あーん」

え、こ、これは。

大和
「あはは、頑張れ兄弟。ちなみに姉さんには言わないであげるから」

彰人
「クリス、普通にフォークがあるからそれで食べてくれ」

クリス
「あ／／／／／／す、すまない、彰人殿」

彰人
「まあ流石はマルに溺愛されているだけあるから、そうだろうけどさ。さすがに今のは無いぞ」

クリス
「く、恥ずかしい／／／／／／」

赤面していた、ま、しょうがないだろう。ちなみにこの後の話をちょっと話そう、少し時間が経ち。

百代

「あ～き～と～」

彰人
「わっ、百代どうしたんだ、っとその前にその気を溜めている右手はなんだ」

百代
「自分の胸に聞けぇぇぇ！！！」

彰人
「嘘だぁぁぁぁぁぁ」

これが一時間目の休み時間でした。

京
「・・・しょうもない・・・」

――昼休み

昼は初めての食堂を使った、理由は昨日お互いに頑張り・・・・・・なんでもない、忘れなさい。色々あり、飯が作られていないため百代とともに食堂に行った。

彰人
「いや、だからその話は、ちゃんと俺は考慮してだな」

百代
「しかし、話だと、その・・・アーンまで行ったって・・・」

彰人

「誰が？」

百代
「岳人が・・・」

彰人
「百代、急用が出来た、すまないがここで「嫌だ」・・・うっ」

百代
「そのなんだ、やはりここは私にアーンをしてからだろ、な？」

そして川神学園のあたらしい伝説が出来た・・・『アーンで完食させれば天下無双』

彰人
「なんか、グッと疲れたぞ百代」

百代
「♪～♪」

いや、あのそんな笑顔だと何も言えないんですけど。そして俺らは教室が違うので別れた、その際も大変だっただけ言っておこう。しかし教室に戻ると、そこには大和の周りを囲んでいるクラスメート達だった。

彰人
「あれ、どうかしたのか、クマちゃん？」

犬飼
「ああ、貴一君かい、実はね」

そして大和が葵君に勝ってきたことを聞いた、ほう、一人でも勝てるとわな流石は兄弟。兄弟としてうれしいな。

彰人
「勝ったらしいな、兄弟」

大和
「ああ、今回は勝てたよ兄弟。だけど今度はもっと大きいもので勝ちたいな。」

彰人
「ま、頑張りな。俺はちょいと吹き飛ばす相手が居るからな。」

そして俺が岳人を睨むと、全員が岳人に注目した。

モロ
「う、うわっ！何みんなしてって彰人？」

彰人
「安心しろモロ、お前には用はない、しかしそこのバカには用がある。」

京
「岳人何したんだろう？」

大和
「どうせろくなことじゃないだろうさ」

岳人

「あ、あれ～俺様なにかしましたか、彰人？」

知らばくれるか、この筋肉バカ。

キャップ

「相変わらず彰人の怒りは怖いな～」

彰人

「ほう、それではお前は百代になにも言っていないのか？」

岳人

「は、は、お、俺様がケーキの事なんて言うかよ」

大和

「墓穴ほったな、岳人。南無阿見陀仏」

岳人

「は！しまった！！」

彰人

「そうかやはりお前だったか・・・覚悟はいいか岳人」

岳人

「ここは逃げるがよし、俺様は逃げる！！」

そして廊下に逃げようとするが、俺は地面を触り、蛇を使った。

彰人

「蛇、行け！！蛇鱗縄」

そして岳人が蛇に巻かれてしまった。足から腕まで完全封じ。これは百代とか鉄爺ぐらいなら気だけで消せるが、他の奴はこれを消すのに一苦労するらしい・・・マルにそう言われたからな。

岳人
「なんだ、こりゃ、自由がきかねえ!!だ、誰か助けてくれ」

その時、誰も人は目を合わせない、これは自分が可愛いからだ・・・・そう思いたい、なんだかみんな引いているし・・・

彰人
「安心しろ岳人、窓から落とすだけだ」

そして岳人を引きずりながら、窓を開けて。

岳人
「う、嘘だろ。おい、彰人!!」

彰人
「安心しろ、本気だ!!」

そして落とした、そして全員驚愕した。

京
「ホントに落としちゃった。」

一子
「ギョえ～大丈夫なの」

キャップ

「み、見ろよあれ」

そしてキャップの言葉に全員が反応、そのわけはなんと岳人はギリギリのところで窓掴んでこっちに戻ってきた。もちろん俺が落とす瞬間に蛇を戻したから自由が利いて結果、ギリギリの所で手摺に捕まれた様だ。

岳人
「俺様は、原作とは違うのだよ原作とは！！」

しかし、俺はそんなことをもろともせずに

彰人
「バカが、俺は原作にいない！！」

岳人
「しまったぁぁぁぁ！！」

そしておもいっきし廊下側に蹴って、その後岳人をリンチしていた。

――――そして放課後

Ｓｉｄｅ　キャップ

さて、今日はなんか依頼があるみたいだから開き教室にきたけど、案外いるな～

キャップ
「よぉ、ハゲ。葵の奴、悔しがっていたか？」

準
「それどころか惚れこんでいたよ、ライバルってな」

キャップ
「なんかあいつ予想のつかないリアクションしるよな」

準
「風間程ではないと思うぞ」

そしてルー先生と、あの歴史の先生が来た。

ルー
「うむ、今日は六人かネ？」

歴史教師
「案件は一つだ、の」

ルー
「それでは競りを始めるヨ」

歴史教師
「それではマロが案件を読み上げるでおじゃる」

ルー
「お願いします、綾小路先生」

歴史教師
「ガラス割れ　己の道も　また割れる」

ルー

「頼み料は上食券２００枚だ」

キャップ
「なかなかの大きな依頼みたいだじゃねぇか」

準
「ユキの暇つぶしのためだ。１９０枚！」

骨法部主将
「ＹＥＨＡ、１８０マ～イ」

弓道部主将
「１７０枚にて候」

準
「１６５枚」

弓道部主将
「１４０枚にて候！」

骨法部主将
「１２０枚、ＷＯＷ！」

歴史教師
「１２０枚・・・・・他はいないでおじゃるか？」

骨法部主将
「アイムウィナー！ジャストトゥイット！」

キャップ

「９０枚」

骨法部主将
「パードン」

キャップ
「９０枚だ。」

ルー
「９０枚、他に居なければ風間が落札ネ」

歴史教師
「詳しい話をするでおじゃる、他の者はたし去りゃ！」

準
「やれやれ。相場を無視しないで欲しいものだね」

ｓｉｄｅ　ｏｕｔ

Ｓｉｄｅ　忠勝

たくっ、親父の奴俺にこんな事までやらせやがって余計に時間くっちまったじゃねえか。ん！？あれは

忠勝
「島津じゃねぇか？」

おいおい、彰人が言ってあるはずだろうが。まあいいかここは素通りすれば

岳人
「お、ゲンじゃねぇか？」

忠勝
「島津、なんでお前がこんな所うろいついてやがる」

岳人
「なんか耳にしていねぇか、この街の異変とか」

やはり、彰人のおかげかあの薬の事までは知らないらしいな。

忠勝
「質問の意味が分からなねぇな、帰―れお前は」

岳人
「ちっ、そうかよ。彰人にも言われているし、ただ昨日そんな事を耳にしただけだよ。そろそろ帰るとするぜ。・・・しっかし見た感じ普通だな」

ちっ、ちゃんと彰人の警告はあったのかよ、このバカ。

忠勝
「そう思っているうちに、とっとと立ち去りな。喧嘩になっても手は貸さねーからな」

岳人
「口の悪い奴だな。」

うっせいよ、しかしなんであいつがここの治安なんて？まあいいか俺の次の仕事しないとな。

Side out

##第四十二話##（後書き）

そろそろ、新生風間ファミリーの活躍が始まります。それでは次回に。バイバ～ィ

##第四十三話##（前書き）

マジコイのイベント行きたかったな・・・

##第四十三話##

さて、百代と一緒に帰ろうとしたら、メールで呼び出されたが、どうかしたのかな。そして俺らは教室に来た。しかしそこにはキャップと大和、そしてモロ、岳人しか居なかった。

彰人
「よ、どうかしたか？」

百代
「まったく帰りデートの途中だぞ、まったく」

すこし、百代は機嫌が悪くなっていたので、頭を撫でて、なんとか俺が抑えていた。

百代
「♪～♪、彰人、このまま続けてくれ♪」

大和
「ありがとう兄弟。姉さん達ももう少し待ってよ」

大和の言葉と同時に教室のドアが開き、

一子
「まゆっち連れてきたよ、剣道部覗いていた。」

そして一子とまゆっちが一緒に来た、しかしまゆっちは状況がわかっていないらしい。そしてさらにドアが開き

京
「クリス連れてきた。茶道部でお茶のんでいた」
そしてこれで風間ファミリー全員が揃った。
キャップ
「よっし、これで１０人全員揃ったな！喜んでくれ！久しぶりに“依頼”が来た。」
百代
「依頼か。それはいいな。お金が増える。」
そして俺を見る百代、しかし依頼ってなんだ？
まゆっち
「あ、あのう、依頼ってなんですか？」
俺の疑問をまゆっちが言ってくれた。
大和
「俺達、部活の練習試合の助っ人なんか雇われる時なんかがあるんだが、それを依頼って呼んでいるんだ。」
モロ
「大抵のお目当てはモモ先輩とかの運動神経なんだけどね。」
岳人
「彼氏のフリとかする依頼とかあってな、男も頑張る、ものもあるんだよ。フフン」

岳人が得意そうな顔をする、

モロ
「まあ依頼をこなしたのはキャップだけどね・・・」

彰人
「だろうな。」

岳人
「なんだとう！」

クリス
「ようは、万屋、何でも屋というわけだな。」

大和
「ああ、そんなニュアンスでいいかな。ま、学校内の問題だけしか引き受けないけどな」

キャップ
「今回の報酬は食券で受け取る、今回は一人上食券９枚だ」

一子
「おお！リッチ。結構規模の大きそうな依頼ね」

キャップ
「討伐クエストだな。題して“窓割り犯を叩き伏せろ”」

京
「それ、依頼に回ってきたんだ」

岳人
「しかし、よく?ぎ取ってきたな、それ」

彰人
「?ぎ取る?」

岳人
「他にも何でも屋やっているのが、多いからな。だから依頼は最初、競りにかけられる」

大和
「それで、競り落としたグループが責任をもってそれを実行する。」

キャップ
「今週になって、校内の窓ガラスが割られているだろ」

百代
「ああ、なんでも川神学園初らしいぞ。ガラス割りなんて。」

すこし百代はうれしそうだ、なんでだ?

キャップ
「犯人達を懲らしめて捕縛しろだとさ」

大和
「セキュリティ会社は何をやっているんだ?」

キャップ
「なんでも、逃げる犯人を取り押さえたら別の仲間に襲われたらしい。ただの雑魚じゃないぞ。情報をまとめると、敵は四人から五人、

逃走には車が使用されている、これは警備員が音を聞いているらしい。それと一人体格のいい奴が居るらしい、警備員を簡単に吹き飛ばした、だそうだ。」

大和
「それで十分だ。今夜早速、警備しろって事か？」

キャップ
「ああ、ちなみに依頼主はヒゲだぞ」

クリス
「ヒゲ？」

彰人
「ああ、隣のＳクラスの担任、ヒゲが生えているからだろう？」

大和
「さすが、兄弟」

キャップ
「あ、教室のレプリカは使っていいってよ。あ、だけど彰人は使うなだとさ」

一子
「やっほー、存分に暴れられるじゃない」

彰人
「はいはい、どうせ、そうでしょうよ。まったく、俺をなんだと思っているんだ、鉄爺。」

キャップ
「学長が出張るには、小さな事件だから」

彰人
「上から言われたけど、ヒゲも面倒で俺らを頼った、そんな所かキャップ？」

キャップ
「相変わらず、話を読むんが凄いねお前。」

百代
「これはうれしい誤算だな。もちろん参加だ♪」

そして上機嫌で食券を取る、百代。

彰人
「あれれ、食券って、俺達の弁当は？」

百代
「安心してくれ彰人。ちゃんと私の弁当は続けるぞ、しかしこれはあとで換金できるからな。」

彰人
「なるほど、なら俺も貰うか。百代も居ることだし。最近金も無いし」

そして俺も食券を貰う。続いて岳人

岳人
「ちょっと危険な依頼だぞ、ここは俺様に任せろ」

一子
「冗談言わないでよ岳人。アタシもやるわよ」

京
「むしろ岳人の方が危ないんじゃないの」

そして続々ととっていく。

モロ
「僕は元々戦闘に参加しない方向で」

大和
「大丈夫だ岳人、今回は兄弟が居る、１３０％大丈夫だ。」

キャップ
「新・風間ファミリーのお披露目だ、しかもバージョンアップでな」

そして俺達男子は全員参加。

岳人
「やれやれ、俺様の父親の心がわからんか」

まゆっち
「みなさんがやっているので、わたしもやります！！」

そして最後はクリス

キャップ
「どうする、クリス。受けるも受けないも自由だ」

クリス
「受けるさ、窓ガラスを割るなど、許せぬ所業。しかし報酬はいらん。そのような悪は正義が懲らしめるべきだ」

大和
「なにやら、燃えているな」

百代
「それも個人の自由さ」

一子
「それじゃあ、クリの分も皆で分けましょう。」

そして一人ずつさらに一枚食券が配られた。

大和
「だけど、一枚だけでも貰っとけと、クリス。今度一緒に飯食いにいこうぜ」

クリス
「私はこう言う行動に、見返りを求めない。」

京
「・・・そういう事言うんだ・・・」

彰人
「はいはい、それじゃあ、キャップと大和作戦会議頼む」

キャップ

「A棟、B棟と来てるから今度はC棟だろうな。おそらく相手はバット系の凶器を所持しているため基本、二人一組（ツーマンセル）でおこなう。こんなもんだろう。軍師大和意見は？」

大和
「ツーマンセルの組み合わせだが・・・そこの怖い姉さんに悪いけど、キャップにワン子、俺とクリス、岳人とまゆっち、それに姉さんとモロかな」

京
「や、大和・・・」

なんか世界が終ったような顔をしているな、京。あれ、そう思えば俺もねえぞ、っとその前に

百代
「大和！！なんで私と彰人じゃ「百代」・・・う、わかった」

彰人
「それで、俺と京の作戦は？」

大和
「兄弟には説明不要のようだし、それじゃ京、作戦なんだが」

京
「うん、わかった。」

大和
「後は、モロが連絡役だ」

モロ
「うん、わかってる。」

百代
「安心しろ、モロロ私が守ってやるぞ。」

モロ
「この絶対の安心感が男として情けない。」

彰人
「あ、そうだ。百代携帯貸してくれ。」

そしておれは携帯を貸してもらった。

百代
「しかし、なんでだ？」

彰人
「これだと、俺だけ連絡が取れないからだよ。それと大和、保険はかけとけよ」

大和
「了解だ、兄弟」

キャップ
「行くぞ、俺達の学園を壊す輩はなんざゆるせねぇ！」

大和
「ああ、遊び場所を間違えた事を教えてやる。」

彰人
「なに、結末は最初から決まっているがな、さて、始めますか」

そして京、ワン子、クリスはレプリカを装備した。

キャップ
「しかし、女子が全員武道やっているのは凄いよな。武士戦隊サムライレンジャーと名付けよう。」

百代
「私はブラックだろうな。」

彰人
「確かに下着もク「あ～き～と～」・・・はい、黙ります」

しかし似合っていたが、なんで黙らせるんだ?

一子
「レッド。私レッドがいい、クリはイエローでいいんじゃない?」

クリス
「よく分からんがイエローは正義なのか?」

キャップ
「五人ともジャスティス!」

クリス
「ならば色など、こだわらん、イエローで結構」

京

「私は静かなる色、ブルーを希望」

まゆっち

「あのう、これは一体なんの話だったんですか？」

百代

「そんなまゆっち癒し系だからグリーンだろうな。」

しかし、おれは思った、全員女子なのにピンクの似合うのがゼロだ。百代は、下着の色がピンクならば似合うのだが、イメージカラーではないな。俺も口にせずそう思っていたが、バカがこう発した。

岳人

「だははは、これはおかしいな」

百代

「何がおかしいんだ？」

岳人

「全員、女子なのに、ピンク似合う奴がゼロとか、これは笑うしかないだろう。」

そして岳人が笑えなくなるまで3秒も掛からなかった。しかし

彰人

「俺は何色だ？」

そう、この俺も一応武道をやっている、者なんだが。

モロ

「彰人は、そうだな～シルバー？」

大和
「お、兄弟にぴったしじゃないか。」

彰人
「銀色ってそんなに合うかね、まあいいか。それじゃ、男子も頑張るぞ」

と、俺が手を挙げたが。

キャップ
「おーーーーー！！」

しかし、声はキャップだけだった。

彰人
「おいおい、頼むよ、お前ら」

キャップ
「そうだぞ、一緒にやらないと俺泣いちゃうぞ・・・・・おーーーー！！」

モロ・大和
「「・・・おー・・・」」

岳人
「・・・（現在も伸びています）」

なんとも情けなかった。はぁ～大丈夫かよ、ホントに。

##第四十三話##（後書き）

ドラマＣＤ買いました。やっぱおもしろい！！

##第四十四話##（前書き）

始まり、始まり。

##第四十四話##

そして夜になった、俺は現在屋上に居る、京も一緒だ。

彰人
「なるほど、数は四、いや、五か」

京
「よく分かるね、裸眼で。私でも車のタイヤぐらいしか見えないよ・・・」

彰人
「普通、それが見れれば、十分だろ」

そして俺の携帯が鳴った、まあ百代のだが。

大和
「姉さんが気で確認してくれた、数は五。全員拡散して窓を割りにいったらしい、ひとりは現在「ああ、確認している、車の横だな」・・・さすがは兄弟」

彰人
「それじゃあ、俺は勝手にやるとしよう、じゃあな」

大和
「ああ、お互いにな。」

そして電話が切れる。

京
「そう思えば、彰人の任務って何？大和にも聞かずにおわってたみたいだけど・・・」

彰人
「あ、俺の任務か、俺は遊撃なんだ。好き勝手にやってろ。そう言う事さ」

京
「・・・ふ～ん・・・」

――四階

ボブ
「フンフンフーン♪、今から窓をブレイク♪」

百代
「ブレイクするのはお前なんだがな」

ボブ
「ん！？ミ～タ～ナ～、パンチを食らえ」

百代
「拳と言うのはこう言うことだ」

ボブ
「ぐ、グバッ！！」

百代
「・・・余りにも弱すぎる。だけどこれで彰人に甘えさせてもらえ

る♪」

モロ

「いないのに、なんでこんなに甘い雰囲気があるんだ・・・」

――――三階

報告、岳人が倒すが、まゆっちの力が一瞬垣間見れた。

――――二階

キャップのライダーキックで相手の戦意損失、結果一子は納得せず。

――――一階

クリスが大和の策を無視し、逃走。

――――屋上

俺は学校中に蛇を使い、様子を見ていた。あ、そろそろ出てくるな、逃走兵士。

彰人

「それじゃ、京。後はよろしく」

京

「うん、大和の命令、実行開始」

そして俺は飛び降りて、校庭をダッシュ。そして校門の前に居た、一人の黒人が俺を見て。

マーフィー
「グへへへ。オ前、何者?食ベテイイ?」

彰人
「その前に、車から離れていいのか?」

そして直ぐにパンクする音が聴こえた、さすが京。こんなに暗いのに正確だな。

マーフィー
「ア、車ガ!!」

そして、俺に突っ込んできた、普通にこいつラグビー選手か?

彰人
「まったく、逃走しないのはいい心がけだが・・・甘いな、それでは俺の指一本で封じれる。」

そして俺は相手の頭を人差し指で押さえ、そして。

彰人
「安心しろ。気絶するだけだ」

そして首に一撃加え、この変な黒人を黙らせた、そしてさっきの逃走犯が来た。

ゆとり１
「て、てめぇ。どけ、どかないと、切り刻むぞ！！」

そしてナイフを出したが。

彰人
「ほう、お前は何で切り刻むんだ？」

ゆとり１
「だ、だから、このナイフでって！！俺のナイフが細切れだ！！」

彰人
「さて、どうするのかな、少年？」

ゆとり１
「こういう時は、逃げるが勝ちだ！」

そしてさっき来た方向に帰っていったが、そこには丁度一子が来たため。

彰人
「一子、そいつ犯人だから、吹き飛ばして良いぞ」

一子
「ホント、ワァーイ。それじゃあ、エイ」

ゆとり１
「ぐ、グワァァァァァァァアッァァァ！！」

そして吹き飛んで、気絶したようだ。そして岳人が降りてきたらゾロゾロと降りてきた。しかし大和とクリスは言い合いをしていた。

キャップ
「あんまり、刺激の無い、あっけない依頼だったな。」

彰人
「ま、これで犯人逮捕なんだからいいじゃんよ」

ゆとり2
「許してください、僕達可愛そうな子なんです」

キャップ
「嫌だね、そんなに情けないと、眉毛全部剃っちまうぞ。」

そして連絡を聞いた、ルー師範代が来た。

百代
「ルー師範代、これで全員のようです」

ちなみに俺の腕に抱きついている状態で報告しています、はい。

ルー
「ウン、確かに受け取ったネ。それじゃあ武器はちゃんと返しといてネ。」

そして、車もろとも犯人は捕まって行った。さて

キャップ
「それじゃあ、帰りますかね、俺達」

一子
「そうね、案外もういい時間だし。」

そして俺は百代の携帯を開けて確認しる

彰人
「ホントだ、すでに十時過ぎか・・・あ、そうだ百代携帯サンキュー」

百代
「ああ、それにしても彰人は一体どこに居たんだ。私が確認した時は何故か屋上に居ただろう、なのにどうやって下に？」

そして俺はキャップを指した。

キャップ
「は、俺！？」

大和
「なるほどね、普通に飛び降りる人が他にも居たってだけか・・・」

一同
「あ～」

百代
「それしても相手、今回も弱かったな～」

モロ
「モモ先輩が強すぎるだけだと思うけど」

岳人
「俺様もそう思うぜ、な、まゆっち？」

まゆっち
「は、はい！！岳人さんだけで瞬殺でした」

彰人
「ま、バットを真っ二つにしちゃうのが無意識なのは、怖かったがな」

まゆっち
「は、はいーーーーーーー！？」

彰人
「あははは、それよりも大和、どうだった？」

大和
「保険をかけといて正解だったよ・・・」

クリス
「なんだ、その言い方は。確かに逃がしはしたが、それでも」

そしてまたもや言い合いだ。

百代
「これはこれで面白いな、彰人♪」

彰人
「そうだな、百代。」

京
「・・・しょうもない・・・」

――――――五月一日。

キャップ
「行くぞ、野郎ども。学び舎に出動だ」

京
「案外ギリギリだけどね・・・」

そう、俺らは普通にギリギリだった、まあ歩いても間に合うのだが。

モロ
「だけど彰人達が居たのは驚きだよね、いつもの時間ならもう学校に居ると思うよ。この時間」

百代
「いや～昨日激し「少し黙りなさい」・・・はい・・・」

彰人
「なんでも無い。ただ寝坊しただけだ」

岳人・大和・京・モロ
「「「「ジトー」」」」

俺をそんな風に見るな。

キャップ
「そう思えば今日は金曜集会だな。」

クリス
「？」

大和
「そうか、クリスとまゆっちは初めてだから、ワン子、放課後案内頼むぞ。」

一子
「了解」

キャップ
「新・風間ファミリーでの初めての集会だな。ま、その前にバイトだけど」

彰人
「丁度いいか、まゆっち」

まゆっち
「は、はい！？なんでしょうか彰人さん！！」

彰人
「そんなに驚かなくても・・・刀、持ってくからな。」

まゆっち
「は、はい・・・」

百代
「なんだ、あれを取り出すのか彰人。しかし、あれはクリス達には」

彰人
「安心してよ、そこら辺は、俺の蛇でどうにかするから」

そして俺は蛇を左腕に出現させた。てか巻きついている、しかも百代が引いてる。

百代
「あ、彰人〜」

彰人
「はいはい、消しますから。そう泣きそうな顔をしない」

そして消した、そして抱きついてきた。
そして俺らは学校に向かった。

そして時間が経ち、今日も昼は百代と食べた、しかしその時変な事をまたもや聞いた。

彰人
「どうかしたのか?」

忠勝
「ああ、てめぇには耳入れとけよ。最近この川神で板垣三姉妹ってのが強いらしいぜ、そんで荒らしているらしい」

彰人
「しかし、ただのチンピラだろう?」

忠勝
「だから勘違いするんじゃねぇよ。耳に入れとけばいいんだよ」

やはり、ツンデレだな。

彰人
「了解だ。」

さて、既に放課後なのだか、まだ時間があった、百代はまた挑戦者のため早々に帰ってしまい、現在帰っているのは俺と大和だけだった。

大和
「今日も一日、おわったな」

彰人
「そうだな、しかしあの歴史教師は絶対来るところ間違えただろ」

大和
「確かに言えているな、しかしこんなに気持ちがいいとお昼寝しそうだな」

彰人
「え!?」

大和
「いや、既にそこで寝っ転がっているし・・・」

彰人

「そういうわけだ、お休み。」

大和
「そんなに寝てないのか、授業中とか案外寝ていただろ？」

彰人
「疲れは取れないよ、そんなんじゃ。それに精力もつかん、フワァ～。どうせ、まだ秘密基地に行くには時間があるし。」

大和
「・・・俺は戻るよ、それじゃ秘密基地で」

彰人
「ああ、それから百代がいたら、刀を取る際、俺は本気を出すから、って言っといてくれ」

大和
「了解した。」

そして、俺はお昼寝を始めた・・・

・・・そして次に目覚めた時には、見知らぬ天井ではなく、見知らぬ人が隣で寝ていました。

彰人
「え、え～と」

この人一体、誰？

？？？

「やぁ、君が気持ちよさそうに寝てから私も一緒に寝ちゃった」

彰人
「え、えっとどなた？」

？？？
「あ、そうかごめんね、私、板垣辰子。君は」

彰人
「あ、ああ。御剣彰人だ。それにしても寝てたって」

辰子
「うん、私、家族の次に寝るのが好きでね」

そういうこの人、しかし俺は見抜いていた・・・この人百代より少しだけ弱いだけだ。しかし板垣、板垣はどっかで聞いたな・・・って時間は！！

彰人
「すいません、今時間って分かりますか？」

辰子
「ウン・・・グゥー。あ、ごめんごめんえっとね、もう直ぐ六時かな」

彰人
「げっ、案外寝てたな、それじゃあ失礼します、板垣さん」

辰子
「あ、いいよ辰子って呼び捨てで、同い年だと思うから、それじゃ

あね、彰人君」

そしてまた、この人は寝始めてしまった、俺も直ぐに院に戻ることにした。

##第四十四話##（後書き）

さて、次回とうとう起こる、川神ファミリーの金曜集会。それではバイバ～ィ。

ネタが無いのですよ・・・

##第四十五話##（前書き）

と、言うことで四十五話です。

##第四十五話##

さて、一回川神院に戻りそして現在、秘密基地に向けて歩いている。
その時後ろからスクーターの音が聴こえた。

彰人
「お、キャップじゃないか、バイト帰りか？」

キャップ
「フー♪フーン♪。おお、彰人か。後姿がまゆっちみたいだったぞ」

彰人
「まあ、刀があるからな。しかしご機嫌だなどうかしたのか？」

キャップ
「良くぞ聞いてくれた、俺様の豪運が今日もピカイチだったぜ！！」

そして俺にティッシュの束を見せてきた。

彰人
「いやいや、ティッシュだけなら外れだろうが。」

キャップ
「ち、ち、ち。確かにある一つを抜かして全部ティッシュでしょんぼりだが、これがあればいいやって思えるものを当てたぞ！！」

彰人
「そうかそうか、それで何が当たったんだ？」

キャップ
「それは基地についてからのお楽しみだ。それにしても今日の寿司も当たりだな～なんせ大体客のキャンセルが入って、普通の寿司だもんな今回」

彰人
「すげぇ～なそれ。まあみんなも既に居るだろうしな。」

そして俺らは基地に急いだ、しかしなんだか、荒々しい空気が一瞬あったが、気のせいか？

キャップ
「それじゃあ、いくぜぇ！！」

そしてそれを気にせず、ドアを開けてキャップが入り。

彰人
「おいおい、そんな風に入ったら驚くだろうが・・・・・・あれ？」

なんだこの気まずい空気は。

キャップ
「なんだ、大和。俺の居ない間に青春っぽい空気出しやがって。」

大和
「わかった、わかった。兄弟も聞いてくれ・・・・実は」

そして今まであった事を聞いた、あはは流石はクリスって今回は感心できないが。

キャップ
「だけどよ～聞いてる限りだとすでに話が終わっているじゃないか。なら今回は多めに見たらいいだろう。ま、こういうこともあるさ、それにクリスもまゆっちも反省しているようだし。」

彰人
「キャップにしては寛大な処置じゃないか。」

キャップ
「京も機嫌直せよ」

京
「・・・ツーン」

キャップ
「あ～あ、いじけちゃって。ケアは大和に頼む」

大和
「了解した」

キャップ
「それでは今回の俺様の豪運を豪華な寿司を食べながら聞いてくれ」

一子
「え、お寿司！！」

岳人
「うわっ、いきなり発言しやがったなお前」

一子

「いや～ホントは私もクリに言いたかったんだけど直江さんちの大和ちゃんにアイコンタクトで自重って、言われて」

彰人
「ナイスだ兄弟。それでは寿司でもつまみながらキャップの話を聞きますか。」

そして俺らは寿司を食べながら、キャップに注目した。

キャップ
「みんな、今の気まずい関係を修復するのに打って付けのモノがここにある。ジャジャーン、なんと福引で当てた箱根旅行団体さま用！！」

彰人
「確かに凄いものだな・・・」

モロ
「凄いじゃんキャップ。それで何位？」

キャップ
「二位、だけど他は全部ティッシュでしょんぼり・・・」

大和
「いや、二位でも十分凄いよ」

一子
「絶対なんかの守護霊ついているわよね」

そして百代は俺の腕に抱きついた来た、理由は

百代
「幽霊の話はそこまでだ・・・」

こういうことだ。

キャップ
「お前ら、連休は連絡したとおり空けているだろう?三日と四日と五日。」

大和
「ああ、バイトも入れてないし。」

キャップ
「クリスもまゆっちも大丈夫か?」

クリス
「ああ、箱根。楽しみだな～」

まゆっち
「も、勿論です!!」

松風
「よっしゃ～旅行だぁぁぁぁ!!」

彰人
「しかし今日も寿司はうまいな、百代、ホタテとって」

百代
「よし、あーん」

彰人
「あーん」

京
「うじうじ」

大和
「しょうがない、あーん」

京
「！！・・・・あーん」

大和
「これで機嫌直ったか京？」

京
「これで続けてくれれば・・・・・」

大和
「・・・もう大丈夫のようだな」

京
「うーん。いけず～」

モロ
「僕らも最近彰人たちの様子に慣れてきちゃったのかな？」

岳人
「くそぉぉぉぉぉぉ！！俺様も絶対いい姉ちゃん捕まえてやる。」

一子
「まず、岳人によってくる女なんているのかしら？」

百代
「それは言えたな。あ、彰人、マグロをくれ。もちろん「赤身ね」・・・さすがは私の夫」

彰人
「ほい、あーん」

百代
「あーん」

そして俺らは寿司を食べ終えて、グータラし始めたとき。

彰人
「まゆっち、おいで」

百代が俺の膝の上に居るが、普通にこっちにきた。

まゆっち
「は、はい。なんでしょうか？」

彰人
「百代、どいて」

百代
「は～い」

そして俺は刀を出した、その時女子メンバーがこっちに一気に注目した。

クリス
「なんだ、この異質な気は?」

京
「・・・強い・・・」

一子
「ガタガタガタ」

彰人
「一応、俺の気で抑えてはいるけど刀身を見るとなると少しきついかもしれないけど大丈夫?ちなみに百代でも結構きついよね?」

百代
「ああ、私でも見るだけでもきつい。それを触るのは中々の気力が必要だな」

まゆっち
「は、はい。大丈夫です。それでは魅してください」

松風
「ビュンビュン来るぜぇ~こりゃ凄い気だ」

そして俺は刀身を抜いた、その瞬間俺は蛇を自分の体で包み、そしてまゆっちに見せた。

彰人

「一応、これがフツノだよ」

しかし、まゆっちは少し反応が遅れて

まゆっち

「は・・・はい、ありが・・・とうございます・・・仕舞ってください」

そして俺は、刀をしまった、そして周りを見ると・・・百代は俺の腕に抱きついており、京とクリスは強張っており、一子は震えており、まゆっちはフツノを見ていた。

彰人

「どうだった?俺の刀は?」

まゆっち

「はい、まだ私も未熟のようです。」

彰人

「ま、あれは特殊な気がするよ。それにしてもうちの男性陣は強いな～」

そう、男性陣と言うと。

キャップ

「クッキー、コーラ～」

モロ

「だから、岳人じゃ無理だって」

岳人
「いいかモロ、無理と言っている限り無理なんだよ。この俺様がビシッと証明してやる」

大和
「う～ん、箱根となるとやはりここは抑えた方がいいか・・・」

俺の蛇もこの刀もまったく気付かない、ホントにある意味強いなうちの男性陣。

彰人
「さて、まずはこれでお終いだな。ま、旅行には持って行かないけど。」

百代
「そうか・・・そうだ。みんな聞いてくれ！！」

そして百代が立ち上がった。

一子
「どうかしたの、お姉さま」

百代
「明日なのだが、暇な奴は私について来てくれないか？」

岳人
「なんだモモ先輩彰人じゃなくていいのかよ？」

百代
「バカか、彰人は当然に居るに決まっているだろう」

モロ
「当然なのね・・・」

大和
「それで、どうかしたの姉さん？」

百代
「まず、今の彰人の服装を見てくれ」

そして全員俺に注目。しかしなにも変なところは無いはず・・・

岳人
「別にいつもと変わらないじゃねえか。制服だし」

モロ
「うんうん、別に普通だよね。僕達は私服が多いけど彰人の場合はそうでしょういつも」

そして百代はそこで大声をあげて

百代
「そうだ、そこなんだ！彰人には服がないんだ」

大和
「確かに兄弟の場合はいつも制服かジャージ、それか稀の胴着だったからな・・・」

百代
「そこでだ明日私は彰人の服を買いに行こうと思うのだが・・・私

には男の服のセンスが無い。だから誰か協力を依頼したいのだが」

キャップ
「おお、なんかそれおもしろそうじゃん。ならファミリー総出の彰人の服選びだな！！」

彰人
「いやいや、流石にそれは悪いだろ。それにそんな金は俺は無い。」

百代
「く、く、く。安心しろ彰人。それならば私がちゃんと用意してあるからな！」

モロ
「モモ先輩が・・・」

岳人
「お金に・・・」

大和
「困っていないだなんて・・・」

彰人
「なるほど、換金したのか百代。」

百代
「そういうことだ。それで、明日が暇の奴～」

大和
「それなら、明日は箱根旅行の準備として皆で買い物なんてどうだ」

キャップ
「おもしろそうだな!!賛成だ」

一子
「いいわね～新しいトレーニング用品があればいいわね」

京
「ワン子、それいつもと変わらないよ・・・大和が行くなら行きます」

大和
「く・・・行くよ、俺も。それでお二人は?」

まゆっち
「はい、よろこんで。」

松風
「よっしゃぁぁぁぁぁぁぁ!!旅行っぽいぞ」

クリス
「そう思えば私は、旅行用の物が何も無かったな、ちょうどいい。明日だな了解だ」

モロ
「うん、僕も暇だよ」

岳人
「いやぁ実は「それじゃあ岳人は来ない方向で」行きますから、行きます。俺様もそれに参加だから」

百代
「それじゃあ。明日のまず待ち合わせだな」
そして旅行前の準備の待ち合わせの話で俺らは盛り上がっていった。

##第四十五話##（後書き）

ＩＳ～インフィニットストラトス～『ゼロと謳われた男』もよろしくお願いします。

バイバ～ィ

##第四十六話## （前書き）

寒いです。

##第四十六話##

結局、集合は島津寮の前で時間は十時となった。そして現在俺らは向かっているのだが。

彰人
「百代、これはどういうことだ？」

一子
「私も起きてビックリしたは・・・」

そおう、現在百代は、普通にラフの服装、いつもと変わらない服装だが。

彰人
「どうしてポニーテールなんだ？昨日の夜は普通だっただろうが？」

百代
「イメチャンだ。どうだ似合うか彰人？」

彰人
「ああ、似合っているぞ。しかしそれは普通夏になったらするもんだろう」

百代
「あ、そうだな。」

そしていつものように髪を降ろした。しかし・・・似合っていたな。
そして島津寮に到着。

大和
「あ、彰人たちか。おはよう」

彰人
「ああ、おはようさん。そっちは全員いるのか？」

モロ
「あはは、それが・・・・」

京
「・・・まだ岳人が来てない」

彰人
「・・・置いてくか、目の前だぞ家。」

大和
「賛成したいが一応時間的には後三分ある、それまでは待ってやろう」

キャップ
「まったく、一番遠いモロでさえもう居るのに。目の前だろうが集合場所」

一子
「絶対寝てるわよ」

まゆっち
「あれ、確か朝私見ましたよ」

松風
「おう、オラも見たぞ。なんか走っていたぞ」

彰人
「だったら何処に?てかまゆっち」

まゆっち
「は、はい?何か?」

彰人
「帯刀はちゃんと許可書が見えるようにしなさい。警察に職質なんていやだからな」

まゆっち
「あ、そうですね。すいません」

クリス
「流石は彰人殿。刀の使い方をよく分かっている・・・」

大和
「そろそろ時間だぞ・・・」

そしてその時、こんな声が寮の隣の家から聞こえた。

麗子
「岳人!!今日はなんかあるんじゃないの?寮の前にみんないるわよ!!」

岳人
「う、うわぁぁぁぁ。そうだ俺様としたことが!!」

大和
「なるほど」

彰人
「あのバカ」

大和・彰人
「「二度寝してやがったな・・・」」

京
「置いていこうか」

一子
「賛成」

岳人
「ちょっとまてぇぇぇぇぇぇぇぇぇ！！」

キャップ
「おうおう、やっと来たぜ」

大和
「遅いぞ、岳人」

岳人
「いや～俺様としたことか、二度寝をしてしまった。悪い悪い」

一子
「憂さ晴らしよ、妹キック」

そして岳人の腹に一発。

岳人
「ぐ、グハッ」

百代
「さらに姉パンチ」

そして今度は顔面に一発。そして最後は

彰人
「夫アッパー！！」

岳人
「が、ガクシ・・・」

そして岳人は倒れた、まあ普通だよなだがこれからが普通じゃない。

まゆっち
「あわわわわわわわ、岳人さんこれじゃあどうするんですか？」

モロ
「ああ、別に気にしなくても大丈夫だよ。」

大和
「それでは・・・おい岳人、綺麗なお姉さんがいるぞ！！」

岳人
「俺様復活！！大和何処にいる？」

モロ
「ほらね」

松風
「すげぇ、俺の存在ぐらいすげぇ！！」

京
「一応、それぐらいの常識はあったんだ」

キャップ
「さて、それでは新生風間ファミリー出動だ！」

こうして俺らは、最初に商店街へと向かった。
そして最初に来た場所は・・・

キャップ
「よし、まずここからだろう。ウニクロ」

大和
「一応説明すると川神のメジャーでお手頃価格の服が揃っている店だな」

百代
「よし、それでは各自、彰人に似合いそうな服を探し出せ！！私も動くし、彰人も自分の好みのものがあれば見とけよ」

彰人
「あ、ああ。それじゃすまんがよろしく頼む」

そして俺らは各自散開した。俺は最初、半そでのシャツ。しかし俺は微妙だな・・・を、このパーカーいいかも、まだ春だしな。そして俺は一着を取り見ているとクラスメイトにあった。

真与
「あ、御剣君です。どうも」

彰人
「あ、委員長。こんにちは」

真与
「はい、こんにちはです。あのうモモ先輩はいないんですか？」

彰人
「俺の近くに百代が居るみたいな言い方ですね・・・まあ、ほらそこ」

そして俺は百代と京がなんか言いあっている所を指差した。

真与
「あ、なるほどです。だけど意外でした」

彰人
「意外、何が？」

真与
「なんていうか御剣君って服一杯あるようなイメージでしたから、こんなところで会うのも意外で」

彰人
「そうか、俺的には服に興味がないせいで百代のデートに困るぐらいだぞ」

真与
「あはは、それじゃ妹達が待っているので」

彰人
「おお、じゃあな」

そして委員長と別れ、俺はまた服選びに没頭した。

～十五分後～

そして俺らは集まり俺のファッションショーになった。

一子
「それじゃあ、まず私からね」

受け取り着替えて出てきた、しかしこれは

彰人
「俺はまだ社会人じゃないぞ、一子」

そうスーツだ、しかも普通すぎるほどのオーソドックスの・・・

一子
「あれ、可笑しいわね。私は確かに私服を・・・」

大和

「はいはい、それでは次は」

まゆっち
「は、はいっ！！」

クリス
「私とまゆっちで考えたコーディネートだ」

そして俺は更衣室に入り全員を前にした。その格好とは。

京
「・・・普通・・・」

大和
「うん、確かに普通だな。ジーパンにイラスト入りのシャツ。しかし彰人だからか普通に似合う。これはキャップも同じだよね」

キャップ
「あ、んなもん知らん。俺はやっぱヒーローみたいな服装だろう」

百代
「うん、これは普通として保留。次」

京
「・・・一応選んだ、そして大和のも選んでみた。」

彰人
「あはは、それじゃあ兄弟も着替えたら？」

大和

「く、そ、そうする」

そして俺は着替えた・・・てかこれ

彰人
「なあ京。なぜにこれなんだ、制服に近いだろ。それにパーカーの上にパーカー・・・」

大和
「てか、この服。俺の制服の下に着る服だろうが京！！」

京
「あは♪お似合いだよ、大和。それから好き」

大和
「似合うのは、一応これでも選んだからな、それからお友達で」

百代
「・・・だ、ダブルパーカー・・・・・・次」

モロ
「うん、僕も選んだけど。地味かな？」

そして俺は着替えて兄弟は普通の私服に戻った。

百代
「これは・・・」

大和
「すげぇ、一番おしゃれだ、今までの中で」

現在の服装。ジーパンだがダメージ、さらに半そでの黒いシャツ、それに上着のような物で赤いジャケット。しかも薄いため腕まくりも可能。

彰人
「これはいいのか？百代、どうだ？」

百代
「ああ、モロロしては上出来だ。保留！！次」

岳人
「よし、彰人。俺様のセンスを見てみろ」

そして堂々と渡してきたがすぐに百代から。

百代
「次！！」

岳人
「あ、あれぇ？なんで？」

百代
「お前みたいにタンクトップだなんて、私が認めん。」

大和
「それじゃあ、俺か。まあキャップがどんなんか楽しみだが。俺は、これだ」

そして俺は着替え始めた、しかしこれなんかてか、完全に。

彰人
「よく見つけたな、兄弟」

大和
「いや～年月がたっても変わらないね、その姿」

その姿とは、俺が昔、そう小学生のころしていた服装に似ていた。
そうだな簡単な説明だと。

一子
「あ、お姉さまの制服の姿にそっくり。ズボンはジーパンだけど、上着の羽織り方とか下のシャツが黒、それに上着の色が白。」

クリス
「なるほど、モモ先輩の制服の姿は彰人殿を真似たのですね？」

百代
「く、弟のくせに恥ずかしい事を／／／／／／」

彰人
「まあまあ。まあこの服装も懐かしいしな。」

キャップ
「よし、次は俺だな。俺からはこれだ！！」

そして俺は着替えたが・・・これは

モロ
「これは」

一子
「・・・ちょっと」

松風
「まんまお前じゃねえかよ!!」

まゆっち
「こら松風!」

そう俺は今現在そこで腕組をしている奴と同じくバンダナまで一緒の格好。

キャップ
「ええ、似合うだろう、これ」

彰人
「これはキャップの服装だから」

百代
「却下だ。後は私のか。まあこれだ」

そして百代が差し出したのは。

大和
「すげぇ、これ姉さんが考えたの?」

百代
「いや、京の力も借りてここまで出来た。」

一子
「彰人、かっこいいわよ」

そう俺の服装は全体的に黒。しかし所々に金が入っている、しかもジーパンも黒。いままで青の物ばっかだったが。それに赤のネクタイって

彰人
「どうだ？」

京
「１０点」

京はいつもの１０点札を出していて、モロは拍手、クリスとまゆっちはじっと見ていた。岳人は現在も自分を見ていた・・・バカが。

大和
「それで兄弟どれにすることにしたんだ・・・まあ結果は見え見えだが」

彰人
「そうだな、やはり百代のだろう」

京
「でしょうね・・・」

全員一致で決定、しかし

彰人
「あ、それと大和のもだ」

百代
「え！？」

大和
「了解だ、兄弟」

そして俺は百代と一緒にレジに並びに行った。

まだ買い物は始まったばかり。

##第四十六話##（後書き）

新作のＩＳもよろしくお願いします。

##第四十七話##（前書き）

ああ、生放送だった。

##第四十七話##

ウニクロに買い物が終了して、今度は今回の次の目的である旅行の準備。てか、こんなの出来ていたんだ。

キャップ
「うっし、今日はここで面白いもん集めだ。それじゃあはじめ」

そして俺らはこのＲＯＦＴでもパーティグッズを探す。

一子
「何よこれ？変な首輪？」

待て待て待て、それはあのＳＭ用のボール

彰人
「一子、それは戻して。こっちの花火とかを選べ」

一子
「え？わ～い花火だぁぁぁぁ！！」

大和
「ナイス、フォローだ。兄弟」

彰人
「あいつもあいつで物を知らないな、まったく。しかしなんでこんな所に・・・・・」

大和

「まあ確かにパーティーグッズかも知れないが・・・・・・」

そして俺はそれを棚に戻そうとしたら。

百代
「あ、彰人・・・さすがに、そ、そのそうゆうプレイには私は・・・
しかし、彰人が言うのなら付けない事も無いが」

完全に勘違いしている彼女が若干一名居た。

彰人
「違うから」

百代
「え・・・・・・そうだよな、彰人はそんな趣味じゃないよな・・
・・けど確かにSだよな・・・」

大和
「はぁ～姉さんも兄弟も他の物探そうな」

彰人
「そうだな、了解だ。しかし花火と後何が必要だ?」

大和
「そうだな～まあ、岳人達がどうせ変なものを用意しているからそ
こら辺はあいつらにまかせるとして。俺らはまあレジャー物とかだ
ろ。クリスはそっちにいるし。」

彰人
「そう思えば岳人たちは?一子はそこの花火コーナー、百代は俺の

隣、大和もここ、まゆっちは？」

大和
「京と一緒にどっかいった」

百代
「・・・珍しいな、それでクリスがレジャー・・・・あのバカ共は？」

そしてこのちょいと変体が集まりそうなブースの奥の方に岳人の顔が見えた。

彰人
「バカだな。まあいいや、後はキャップか。しかし・・・・」

大和
「ああ、我らのリーダーだから、たぶん普通じゃないだろうな」

百代
「まあ私はこのトランプをみつけたからな。」

そして百代が出したトランプは“赤裸々トークトランプ2”と書いてあった、まあこれは旅行のお楽しみにしておこう。

彰人
「しかし、暇だな。」

百代
「なら、私と一緒にいろ」

大和
「・・・・・・（↑どんどん離れていく）」

彰人
「すまなかった、すまなかったから。普通に引かないで」

大和
「いや～邪魔かな～と思いまして」

百代
「ああ邪魔だ」

彰人
「だからそのまま引かないで～」

大和
「やっぱそれは『ピンポンパンポーン、迷子のお知らせを申し上げます、川神市川神学園所属の風間翔一さんの関係者は至急、迷子センターまでお越しください』・・・・・は？」

待て、さっきの放送。

一子
「ねぇさっきの放送、もしかして・・・・」

まゆっち
「すいません、さっきの放送って」

京
「・・・まさか」

クリス
「すまないが、さっきの放送」

モロ
「ねぇまさか！！」

岳人
「おいおい、まさか・・・」

百代
「あいつだろうな」

彰人
「バカが・・・・・」

そして全員集合してしまった。理由は放送であるが・・・

大和
「誰か行かないといけないだろう・・・」

岳人
「こういうのはモロの仕事だろ」

モロ
「なんで僕なのさ。普通こういうのは大和か彰人でしょ。」

京
「それじゃあ、その二人でヨロシク。ちなみに大和だったら私はついていくから」

まゆっち
「あのうそれよりも」

松風
「なんでお前ら、迷子センターに呼び出しがかかっているのになんとも慌てていないんだよ」

まゆっち
「これ松風、そうはっきりと」

クリス
「いや、それはたぶん間違っていないだろう・・・・」

大和
「えっと、それは・・・・」

彰人
「これが初めてじゃなく、二度目だからだ。」

大和
「すまん兄弟・・・じつは三度目だ」

彰人
「あのバカ!!」

百代
「そう思えばこの前のレイクタウンでもそうだったな。私とワン子は直ぐ帰ってしまったが」

彰人
「はぁ～、それじゃあほっといて先に全員の買い物を済ませる。買いたい物はみんなあったか？」

まゆっち
「はい、大丈夫です。ね、京さん」

京
「うん、ばっちし。私の大和への愛ぐらいばっちし」

一子
「私は、なかったからＯＫ」

クリス
「ああ、既に見つけて後は買うだけだ」

岳人
「まあ俺様もなかったしな」

モロ
「嘘でしょ！！いきなり変なところに行ったでしょ。」

彰人
「それじゃあ、百代もＯＫだし先に清算してここに再集合。そしてうちのリーダーを保護しに行くぞ」

そして買い物をすませる奴らは済ましに行った。そして残った者たちはそこら辺で話していた。

大和

「しかしホント兄弟が戻ってきてくれて助かる。今の指示とかはホント助かる」

モロ
「そうだね、キャップもキャップだし大和はモモ先輩に抑えられたり色々と大変だったから」

大和
「しかし兄弟が居ればまず姉さんは抑えてもらえるし」

百代
「と、言うよりも彰人の相手で私は十分なのだ」

モロ
「ま、それはそれでなんだけどね・・・・・」

岳人
「くそぉ俺様もこの旅行でいい姉ちゃん捕まえてやる」

一子
「無理でしょ」

モロ
「ま、捕まらないぐらいで抑えるよう頑張ってみるよ」

大和
「お、京たちは帰ってきたみたいだぞ」

百代
「いや、クリスも既にこちらに向かってるよな彰人？」

彰人
「ああ、もう直ぐで見えてくるぞ」

そして俺が言ってから二秒ぐらいで俺らの視界にクリスは入ってきた。

大和
「相変わらず人間離れしているな」

まゆっち
「お待たせしました」

京
「ミッションコンプリート」

クリス
「こちらも買い物は終了だ」

さて、行きますかね俺らも。

そして俺れはキャップを連れ戻すために迷子センターに来た。

彰人
「すいませんが、風間翔一の関係者ですが」

俺がそう言って入るとなぜかそこには。

キャップ
「こら、それは俺のおもちゃだぞ！！」

ガキと真剣におもちゃの取り合いをしていたキャップが居た。

係員
「あ、そうですか。その実はさっきまでずっと迷子の子達をあやしてくれていたのです・・・いつの間にか一番遊んでいましてそれでお引取りを」

彰人
「ホントうちの連れが迷惑をかけました」

係員
「いえいえ、こっちも助かったぐらいですから。」

キャップ
「く、じゃんけんで負けるなんて・・・あれ、よおお前ら。なんだ買い物終ったのか」

彰人
「ああそれでお前はなんで今ここに居る?」

キャップ
「それがよう、探している途中でさぁ迷子見つけたからここまで連れてきたら離してくれなくてそれで遊んでいた」

俺はすぐさまにキャップの腕を持ち

彰人
「ホントすいませんでした」

そして出て行った。それから全員に事情を説明して俺らは昼と言うことで現在この前行ったゴストに来ている。この前とは違い今回は大勢だ、この前のウエイトレスも居た、岳人達を見ると苦笑いしていた。

ウエイトレス
「いらっしゃみませ。何名様ですか？」

キャップ
「えっと何名だ」

大和
「十人だから。」

ウエイトレス
「十名様ですね、今丁度空きましてのでどうぞ」

そして案内される通りの席についたちなみに席順は、向かい側に大和、京、一子、モロ、岳人。そして俺から隣に百代、次にクリス、まゆっち、キャップだ。

まゆっち
「とうとう私もファミレスデビューです」

モロ
「あれ、まゆっちそう思えば友達の方は？」

松風
「それを聞くのは野暮じゃねぇか」

モロ
「まだ、いないのね」

まゆっち
「はう！」

彰人
「まあまだ新学期始まったばかだしな。しかしそう思えば俺らもう少しで進路相談があったな、お前らなんかあるのか」

京
「私は大和の夫・・・・きゃ、言っちゃった。」

そして大和はスルーして

大和
「俺はまあ市議会の議員とか」

モロ
「凄く現実的だね。僕は・・・ゲームクリエイターかな」

岳人
「俺様・・・なんだろうな」

キャップ
「冒険家だ」

一子
「私はお姉さまと同じ川神院の師範代」

ああ、健気だな。しかし、俺は直ぐに百代の顔を見た。なんとも変えるか話を

彰人
「相変わらずあんまりみんなの夢に変化はないな～。」

大和
「そう言う兄弟の夢は、ちなみに姉さんの夫以外ね」

彰人
「これは先手を打たれたな。しかし、まあ決めてないさ。まゆっちはやっぱ継ぐのか家？」

まゆっち
「はい、たぶんそうなるかと」

彰人
「クリスはどうせ軍人だし、百代は俺の嫁。」

百代・クリス
「「勿論だ」」

彰人
「ってそれよりも早く料理決めないとは。」

一子
「私、このピラフ。それとドリンクバー」

彰人
「はいはい、皆ドリンクバーはつけるから。俺はこのハンバーグに

して。他は？」

百代
「私は彰人と一緒でいい。」

京
「私は大和と一緒で一味があればいい」

大和
「俺はこのドリアね・・・・それから一味は辞めなさい」

モロ
「うん、僕はこのパスタ」

岳人
「俺様は肉だ、このステーキを頼むぜ」

キャップ
「お、それうまそうだな。俺もそれ」

クリス
「私はこの和風セットを」

まゆっち
「私はこの蕎麦を」

彰人
「よし、これで全員決まったな。」

そして机にあったボタンを押して俺らはウエイトレスを待った。

##第四十七話##（後書き）

それでは次回お楽しみに。バイバ～ィ

##第四十八話##（前書き）

ふーもっふ！

##第四十八話##

さて、俺らも飯が食い終りティーブレイク中である。

キャップ
「ふぅくったくった。それにしても今日はやけにすいてるな」

大和
「まあ、今日は連休の初日でもあるわけだしね。」

クリス
「しかし温泉か、楽しみだな♪」

百代
「そうだ!!一番大事な事を聞くのを忘れていた、おい大和」

大和
「なんだい姉さん。一応旅館のパンフも貰っているから大体なら答えられるけど」

百代
「そこに混浴の温泉はあるか？」

そしてなぜか全員俺を見る、いやいや俺のせいじゃないから。え、まあ確かに一緒によく入るけどってそうじゃない!?

大和
「え～と、あ・・・無いね。温泉の効能とかはあるけどそんなのは無いみたいだよ。まあ家族風呂があるかなって思ってみたけど無

いし」

百代
「そ、そんな・・・温泉で、彰人とアハハウフフが出来ないなんて・・・」

そして百代は俺に倒れこんできた。そして皆からの視線も流れ込んできた。

一子
「あれ？なんでお姉さま彰人に倒れこんでいるの？」

彰人
「気にするな。それで面白い飲み物はあったか？」

一子
「ここって意外と無いのね。まあ私はウーロン茶しか飲まないけど」

彰人
「俺は炭酸しか飲まないけどな」

岳人
「お前、それじゃあ骨が溶けちまうぞ」

ここにそんな伝説を信じているバカが

クリス
「なに！！そうなのか！！」

そう言って今飲んでいたコーラを直ぐに手から離した・・・純粋だ

な～

まゆっち
「あれ、それって確かそんなに影響が無いんじゃないんですか」

京
「純粋と天然は混ぜちゃいけないね・・・」

モロ
「そう言う事よりも今現在も飲んでいるタバスコに僕は突っ込みを入れたいよ!!」

京
「タバスコは飲み物だよ、後カレーとマーボー。これは神父さんとシスターさんが言っているよ」

モロ
「そんなバカな」

彰人
「俺もそう思うよ。そう思えば明日って新幹線?」

キャップ
「その通りだ!!」

元気一杯に言うのでウエイトレスがこっちを見てしまった、俺は一礼したらなぜか赤くなっていたが一体?

百代
「ジトー」

え、なんで百代がそんなつり目なんだ?って痛いです、俺の腕を抓らないで…

彰人
「あ、あのう百代さん、凄く痛いです。辞めてください」

百代
「そうか、それは悪かったな…だがやだ」

大和
「はぁ〜。なんかこのままだと兄弟が訳も分からずつねられ続けることになりそうだからな」

そして俺らはゴストを後にした、そして帰り道。

岳人
「ああ、非常だ。非情だ」

キャップ
「どうかしたのかよ、岳人?」

岳人
「俺様さこの前あの店でナンパしたわけよ。」

モロ
「もちろん失敗したよ。完全に完璧に」

岳人
「ちっ、うるせいな。まあいい、それでよ今日も居たんだよ、それ

で彰人が一礼したりするたんびみ照れていやがった…こいつは彼女持ちだっての！！」

ああ、なるほどそれで百代の拗ねていたのね。

彰人
「そんなの知らんし彼女はここに居るし。それにお前らが五月蝿すぎて俺はウエイトレスに一礼していたんだ」

そして百代の腕を強く握る。そして百代は何故か拗ねている。

百代
「もてるのは分からなくも無いが…これは私の物だぞ・・・（ぶつぶつ）」

岳人
「くっそ、しゃあねえ、おいモロこれからゲーセン行くぞ！！」

モロ
「え！僕は強制ですか」

そして岳人はモロを引っ張ってゲーセンに行こうとした。

キャップ
「お、おもしろそうだな。俺様もそれにお供するぜ！」

キャップもゲーセンに行くだそうだ。

一子
「私はこのまま川神院に戻るわ。鍛錬しないと」

クリス
「ああ、私も明日の準備に入らないと」

まゆっち
「はい、私もそうですね。準備に回ります」

大和
「俺は、ちょいと買い物があるから」

京
「お供します!!と、いうよりもついていきます!!」

大和
「・・・それで兄弟と姉さんは?」

彰人
「百代が拗ねているから、川神院に戻ってイチャイチャしている」

百代
「ホントか?……やったぁぁぁぁぁぁぁぁ!!」

彰人
「・・・」

大和
「・・・ま、そう言うことで明日は川神駅に集合ね。」

そして俺らは各自の帰路に向かった。

さて帰ってみるのはいいのだが、なんで

彰人
「なんでルー師範代が戦闘態勢で俺のことを見ているんですか？」

鉄心
「すまんの。稽古をつけてほしいとな。それで丁度良く彰人が帰ってきたというわけじゃ」

百代はすでに自分のトレーニングに入り、一子は言わなくてもわかるだろう。

彰人
「それで俺の何をすればいいの？」

鉄心
「うむ、それではお願いするぞ。お主には腕を封印してもらう・・・」

彰人
「了解した」

鉄心
「よいのか？」

彰人
「構わない。それに腕が無くとも勝負は出来る、それでは行きますよルー師範代」

ルー

「ヨロシクね。それではお願いします」

鉄心
「それでは両者、始めぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇい！！」

その言葉と同時にルー師範代は動いた、俺の後ろに回り蹴りを入れてきたが

彰人
「そのスピードならば足払いってな」

俺は瞬時にルー師範代の足を蹴り上げてさらにそこから相手の左足を蹴り、見事にこけさせた。まあルー師範代だから腕で回避をしているが

ルー
「まさかネ。普通後ろに回った場合回避だけなのにネ。それを反撃に使うなんて・・・」

彰人
「腕が使えませんから今回の場合、ある意味俺の本気ですからね」

そして会話をしながら直ぐにルー師範代は俺に裏拳を決めてくる、それを俺は飛んで足で受け流し、さらに俺は、例えるなら牛若丸のようにルー師範代の腕に俺は乗った。そして俺はすぐにバク転をして、体勢を立て直した。

ルー
「く、今ので決まっていたはずネ」

彰人
「そうでしょうか?俺は攻撃が出来ませんでしたよ。それにまだ本気ではありませんよね。ルー師範代?」

ルー
「く、行くネ。川神流」

彰人
「だけど、させないんだな~これは」

俺は瞬間でルー師範代の懐に入り。

ルー
「エ…」

彰人
「瞬きの時と知れ!!!」

そして俺は相手が川神流の気を溜めている間に終わる。その世界は0と1の間だ。

ルー
「そ・・・んな」

俺は倒れるルー師範代を抱え、鉄爺に終わりを告げた。

彰人
「終了だよ、鉄爺」

鉄爺

「了解じゃ、それにしても可笑しいほどの強さじゃのう」

彰人
「戦場では一秒での判断で決まる。俺は旅に出ている間に学んだんだ。それにさすがに腕無しで川神流を防げる自信がなかったよ。」

鉄心
「それで瞬時に相手の懐に入り一撃で気絶。普通では足がいかれてしまうはずじゃがのう」

彰人
「そこは俺補正って所で。それに百代もそろそろ終えるだろうし。
「彰人～」ほらね」

そして胴着の百代が俺のところにダッシュしてきた。

鉄心
「うむ、それで二人とも今日の分は終了じゃ。百代も彰人が来てからはよくやるようになったしのう。まったくあの一年はなんだったんじゃがな？」

百代
「ふん、ジジイこれが私の本気なんだよ。それよりも彰人～帰り道で言った通りにしてもらうぞ」

彰人
「了解、了解。それじゃあ鉄爺、ありがとうさん」

鉄心
「うむ、こっちも助かったわい。それにルーにもいい刺激だろう」

そして俺は院に戻り、シャワーを浴びるために百代と共に風呂場に向かった、そしたら川神院の料理長のおばさんがそこには居た。

百代
「すまない、こんな事までしてもらって・・・」

料理長
「なに、百代ちゃんの頼みなら仕方ないよ。それに風呂場の貸切、それにしても帰ってきてから思うけどホント彰人ちゃん大きくなったね」

彰人
「あはは、それはどうも。それでなんで料理長が？」

百代
「私がな、今日も分をやる前に頼んどいたんだ、風呂場を一時間だけでも貸切に出来ないかってな。」

料理長
「なに、あんたらの夫婦の営みぐらいには協力しないとね。それじゃあ、あたしゃ掃除の時間が早く終わったけどこの札はこのままにしておくからね。」

その札は、現在掃除中である。

百代
「感謝する／／／／／／」

あのですね百代さん。そういう顔だからわかってしまうんですよ、

まあ否定は…出来ないのだがな。

そして俺らは脱衣所に来たのだが、今回は更なる難関があった。

百代
「さあ、甘えていいのだろう。そういうことで脱がせてくれ」

彰人
「甘えていいとどういう関係だよそれ！！」

百代
「いいだろう、それにいつも夜は脱がせてくれるだろう。それがただ明るいだけだ。」

俺はしょうがなくもないがここはそう言っておこう、しょうがなく、脱がせて先に百代を風呂に入れさせた。そして俺も脱いで風呂に入った。そして

彰人
「百代、ちゃんと最初に体を洗ってから入りなさい」

百代
「う、汗かいていて最初にダイブしたかったのに。まあいいやそれじゃあ彰人」

そして俺によって来る百代、例えるなら猫？

彰人
「はいはい、それじゃあ先に髪洗おうな」

百代
「は～い」

そして百代は後ろ向いて俺に自分の背後を委ねる。しかしこうも後ろからだと

百代
「イタズラするならちゃんと前でな。私も彰人の顔とか息子が見たいからな」

なぜかこの通り俺の心はお見通しのようだ、こいつはニュータイプか？

彰人
「はいはい、それじゃあこの黒髪でも洗いますか。それにしても百代……伸ばしたな髪」

百代
「あ、ああ。なんだ彰人はショート派なのか？」

彰人
「そう言ったら切るのか？」

百代
「う～んどうだろうな、だけど少しは悩むな。好きな人にはいつまでも好きでいて欲しいしな」

彰人
「そうか、だけど俺はロング派だから「知ってる」は？」

百代
「お前がロング派なのは知っていたから中学生の頃から伸ばし始めていたんだぞ。」

俺は無性に抱きつきたくなって俺は普通に抱きしめていた。

百代
「！！い、いきなりはビックリするだろうが、彰人」

彰人
「ああ、もう可愛いな。もういい百代！！」

百代
「やぁ、彰人の襲われるぅ～♪」

その後は想像に任せるとする、俺は百代を可愛がらないといけないからな。

##第四十八話##（後書き）

ぐば、甘い！！！

次回会いましょう、バイバ～ィ

##第四十九話## （前書き）

今日から旅行の巻き。

##第四十九話##

――――――五月三日。

Ｓｉｄｅ　大和

さて、俺の昨日中に準備は出来たがなにぶんまだ眠い。しかし昼から箱根だからな。そして俺は廊下に出たらそこにクリスが居た。

クリス
「なんだ、直江大和か。そのたるんだ顔は。」

大和
「まあ今日は昼から箱根だからな…」

クリス
「そんな顔で、少しは運動でもしたらどうだ」

そして俺はすぐに部屋に戻り、そして一言

大和
「あの説教女、うるさいぞ！！」

そして俺は自分の癒しのヤドカリを見てそれを沈めることにした。

Ｓｉｄｅ　ｏｕｔ

俺は現在、師範代の全員に囲まれている。しかも俺は寝起き…何故？

ルー
「すまないね、それでは用意はじめ！！」

そして俺に襲ってきたが、俺は眠いせいかなんでか分からないけど…まあいいか。

彰人
「蛇…俺のくぁわりにヨロシク」

そして二秒で全員気絶していた、と言うより俺は欠伸をしていたら倒れていた。

彰人
「あれ？もう終わりですか？」

鉄心
「彰人よ…力を抑えよ。それでは鍛錬にもならんぞ。それよりも今伸びている者達を拾いあげろルーよ」

ルー
「…はいネ。しかし早朝からこれは惨劇ネ」

彰人
「ふわぁぁぁ。あのさ鉄爺、こんな朝からいきなり鍛錬はどうかと…それにもう今日の昼から箱根なんだけど」

鉄心
「すまんのう。実はのう、そのせいで師範代がのう。暴挙に出てしまったのじゃ」

彰人
「ああ、ルー師範代の戦いで刺激を受けたのか？」

鉄心
「そうみたいじゃのう。それにもう一人居るみたいじゃぞ」

そして鉄爺が指で指す方向には…一子か

一子
「彰人～朝から、勝負ってどういうことよ。私が新聞配達している間に。それにお姉さまは？」

百代
「いや～おもしろいもんだったな。てか彰人の寝起きに勝負とか…私でもしないぞ。そんな恐ろしいこと。」

一子
「あ、お姉さま…嘘！こんな朝早いのに。起きてるなんて…」

百代
「私的には寝ていたいのだが。彰人が起きてしまってな。それで残りの匂いでは最近我慢できなくてな、それで私も胴着を着て見ていたというわけだ、妹よ。」

そして腕組みしながらふんぞり返っている百代。

一子
「理由が甘酸っぱいわ…それよりも彰人、私とも勝負して」

彰人

「あ、いいけど。一瞬で終わるぞ、今の俺では？」

一子
「な、なめないでよ。それぐらいどうにかするもん。じいちゃんお願い。」

そしていつのまに持っていたのか分からないが薙刀を持っていた。

鉄心
「うむ、これを使うといいぞ一子よ。彰人よわかっておるのう」

彰人
「ああ、了解した。それに確かめたいしね」

俺はそう言うとさっきと同じ所に立った。されど、少しは頭が覚醒してきたらしくなんとか抑えられそうだ。

彰人
「それじゃあいいよ、一子。お前の好きな時に来てくれて」

俺は一応構える、そして一子も戦闘体勢に入ったようだ。

一子
「行くわよ、それじゃあ。せぇい！！」

一子がおもいっきし俺に飛び込む形での攻撃、しかし俺はそれを避けて攻撃に出ようとするが、出来なかった。

一子
「甘い！！」

そこに薙刀の刃の逆の方向で回しながら、それを軸に回転し、後退をした。うんこれならばいい感じだな。これはあいつなりの対策かな？

彰人
「おっとこれは危ない危ない。さてそれでは「来ないならこっちから！！」ふー」

俺は一子の追撃をかわしにかわしていた。それに連れて一子は疲れてきた。それも当然、すべてを全力でするのだからそれなりの力と速さの分の浪費もある。

彰人
「どうした、息が上がってきているぞ？」

俺がちょっとした挑発をしたら

一子
「川神流！！」

薙刀をぐるぐる、回し始めて。

彰人
「腕を使うか。行くぞ蛇」

一子
「山崩し！！」

一子の薙刀が俺に来たが俺は一歩も動くことなく、その薙刀を場外

に吹き飛ばした。

一子
「え、う、嘘。私ちゃんともって・・・」

彰人
「甘いぞ、蛇というのは一瞬でモノを決める天才なんだから、それに俺はお前の背後に行ったのだからな」

そして俺は笑いながら百代の方に行くと。

百代
「彰人、お前」

百代が真剣な顔で俺を見ていた。

彰人
「やはりこう言うのは川神流の者が決めることだろう?」

俺はわざと武器を吹き飛ばした。相手の実力を俺と言う天秤ではとうに測ることなど出来ないから、俺は本気であいつの腕を吹き飛ばしにかかった。

百代
「最後は私が決めろ、そういうことか彰人、ホントうちの彼氏は手厳しいな」

そう言いながら俺の腕にしがみ付いてきた。

彰人

「さて、後もう少しで朝だ、早く風呂に入りたい」

百代
「ふむ、それなら今日は私が背中を流してやろう。さ、行くぞ」

彰人
「うーい」

それからさらに時間が過ぎる事五時間。

現在集合場所の川神駅に居る。

一子
「あ、皆来た！」

一子が跳ねながら指を指している、そこには島津寮の皆と岳人、モロが揃って歩いてきていた。

キャップ
「お、もう居たのか。」

彰人
「ああ、と言っても三分ぐらい前だがな。それで何に乗っていくんだ？」

俺らはそして前もって用意されていた切符を手に新幹線に乗った、しかしその時のモロの感想。

モロ
「普通、こうゆう新幹線って四人、二列がデフォルトだから十人だ

と余るはずだけど…」

彰人
「百代、じっと見すぎだ。」

百代
「いいじゃないか、私が選んだ服だぞ。しかし、似合うはぁ～。あはははははは」

現在の席順だが、俺と百代は窓側の二人席。他は四人座りの列で、一列目が大和、キャップ、モロ、岳人。二列目に京、クリス、一子、まゆっち、となっている。

大和
「確かに、これなら二人席がないと逆に岳人とかが切れそうだもんな」

岳人
「ああ？俺様がそんな短気かよ」

京
「本音は？」

岳人
「超羨ましいけど、それを言うと何されるかわからねぇから我慢しているんだよ俺」

彰人
「五月蝿いぞ、岳人。それにしてもうちのリーダーは？」

キャップ
「グゥ～」

俺は隣を見ると…寝ていました、しかも爆睡。

一子
「あんだけはしゃいどいて普通寝る？子供…」

大和
「事実子供だろう。大方興奮して寝られなかったんだろうな」

まゆっち
「ホントに子供みたいですね、あんな風に肩に・・・」

モロ
「いや、男にされてもね・・・」

京
「そして岳人が嫉妬する、俺のモロを…とにかく許せねぇ！！」

クリス
「う／／／／／」

大和
「なんでお前が赤くなるんだ？」

京
「同じボーイズラブ臭がちょっとした・・・」

大和

「ほう」

彰人
「はぁ～それにしてもいつ着くんだ？」

百代
「私とイチャイチャしていればつくぞ」

そして俺は百代で遊び始める。と、いうか百代が猫化しているだけであるが。簡単に言うと現在俺の腕を完全に占拠してじゃれている。

岳人
「まゆっちそろそろ、飯にしようぜ弁当作ってきてくれたんだろう？」

まゆっち
「は、はい！！、岳人さん」

彰人
「だから顔怖くなっているぞ、まゆっち」

百代
「む～彰人は私の相手をしろ。」

彰人
「あ、すまん、すまん。」

そう言いながら、俺もおにぎりを貰う、しかしその時待ったがかかった。

モロ
「まってよ、二人とも。今、トンネルなんだから。そういうのは景色を見ながら」

岳人
「別に変わらないだろうが。」

モロ
「これはスーパービュー踊り娘なんだよ!」

まゆっち
「あのう、何が違うんですか?」

京
「あ〜あ、聞いちゃった・・・」

そしてモロの鉄道知識はまゆっちに頼んで俺らはのどかな新幹線の時間を楽しんでいた。そして昼も食べ終わった。

一子
「う〜。ねぇこの中走りまわっちゃダメ?」

京
「うん、もし実行したら今度からのあだなはスパッツマン」

一子
「いやぁそんな変体みたいなあだ名」

岳人
「なあ、そう思えば箱根着いたらどうするんだっけ?」

大和
「ああ、一日目適当。二日目、釣り、三日目、観光めぐり。」

彰人
「だけど、この集団がそんな風にうまくいくかね？」

京
「団体行動を乱す人おおいもんね」

大和
「お前が言うな」

そして湯元駅に到着。普通旅館まではバス、理由は山の上にあるからだが。

一子
「私はこのまま駆けていくわ」

百代
「おいおい、もう既に私達のノルマは午前中に終わらせただろうが。」

モロ
「それに車で三十分、結構あるよ」

一子
「いいえ、私は駆けて駆けてかけまくるわ～。クリ勝負よ、どっちが早く旅館に着くか」

クリス
「いいだろう、私も今日のノルマは終わっているが鍛錬に精を出すのもいいだろう」

百代
「それじゃあ、荷物は任せろ。彰人～隣♪」

彰人
「了解だ。それではバス組み」

京
「ウェーイ」

モロ
「貴方達、とことんクールですね」

キャップ
「…株が一円……買い占めろ」

大和
「キャップはいつまで寝ている気だ。」

そして残りはまゆっちだが

まゆっち
「え、えーと？」

迷っているようなので

彰人

「迷うぐらいなら、バスにしとけ。」

そして俺らはバスに乗り込み、旅館を目指す。

##第四十九話## （後書き）

前書きに題名みたいなのをつけてみました。

##第五十話##（前書き）

記念すべき五十話です。

##第五十話##

そして俺たちは旅館に到着

彰人
「十人一部屋って相当広いなここ。それにしても綺麗だな」

俺はパンフをちゃんと見てみたらなんと九鬼の系列であった。さすがだな英雄。

百代
「ああ、代理で私が指示を出す、温泉は２４時間入り放題で夕食の時間までにここにいろ。それじゃあ彰人はこっちに全員解散」

百代が現在も爆睡しているキャップの代わりに指示をくれた。そして俺らは暇に暇が重なった状態を過ごしていた。されど暇の限界もきて、俺らはこのホテルについているゲームを見つけた。

百代
「旅館内にゲームってなんかラブホ「百代」う、わかった黙る。」

彰人
「それにしてもなんだこのゲーム、モロこれなにか分かるか?」

モロ
「えっと、なんだろう。会社名もこのタイトルも聞いたこと無いや。ちょっと調べてみるよ」

そしてノーパソを片手に調べ始め、そして百代は

百代
「お、なんだこれ？横スクリーンの格ゲーか？」

そしてやり始めている。大和は一子達を見にいったようである。俺は俺で百代が上に座っているため、百代のゲームを見るしかなかった。

時既に、夕食も食べ終わり、入浴タイム。わかるだろう、旅館といえば覗きだ、そう今まさに覗きが始まるのであった…女湯で

京
「それでは覗きに行きたいと思います」

一子
「って、京やめなよ。それに大和以外が見えたらどうするの、京的に」

京
「それは考えていなかった。それにしてもモモ先輩は落ち着いているね」

まゆっち
「そうですね、さっきから一言も話していないですし」

一子
「ああ、それはたぶん」

百代
「ああ！！彰人がいな～い！！こんなのお風呂じゃない～」

一子
「こういう事だから」

クリス
「…愛だな」

京
「それならモモ先輩、一緒に男湯を盗み聞きしませんか、それなら少しぐらい、落ち着くと思うよ」

百代
「あ、ナイスアイデアだ、京」

京
「それでは…京イヤーは地獄耳」

一子
「これって、普通男がすることよね…なんかシュールだわ」

そして所変わって、男湯。

彰人
「お、誰も居ないな」

大和
「俺らだけか。ラッキー」

モロ
「ふぅーそれにしてもここの温泉気持ち良いね」

大和
「そうだな。しかし岳人達は」

岳人
「おい、貴様ら見よ俺様の筋肉美を」

モロ
「岳人のは、グロいんだから隠してよ。」

キャップ
「別に男同士で隠す必要もないだろう。」

モロ
「キャップと岳人が堂々としすぎなんだよ」

岳人
「俺様の息子は銃で例えるならバズーカだな。」

大和
「されど未だに対象に撃たれたことも無く、訓練のみ」

岳人
「ほんとなぁ。しかし砲身は磨いているぞ。それでお前の愚息はどうなんだ？」

大和
「俺のは、マグナムだな。重いのをズドンと。キャップのはマシンガンっぽいな。なんか連発性に良さそうだ。そして」

岳人
「唯一対象に向けて絶対撃っている奴…の息子は」

彰人
「…８８ｍｍ砲かな？なんか百代も大変だったらしいし…」

岳人
「…あ…ああ。そうか。ドンだけだよ！！」

大和
「兄弟…それは俺らは想像できないのだが」

彰人
「五月蝿い、別にいいだろうが。それに百代も最近じゃあ逆に求めてくる、グバッ」

岳人
「なんかたらいが投げ込まれてきたな…」

モロ
「てか、下品、げ、ひ、ん。」

岳人
「モロは水鉄砲は皮のホルスターに入っているからな」

モロ
「僕も願ってそうなったわけじゃ…」

キャップ
「それってもしかして」

大和
「いいか、オブラートに包めよ」

キャップ
「剥けてないのか…」

モロ
「う、うわぁぁぁぁぁ！！」

彰人
「モロにダイレクトアタックしてどうする」

キャップ
「なに言ってる、俺はちゃんとオブラートに包んで言ってやったじゃないか」

岳人
「完全に言葉に殺し入っているから」

キャップ
「よし、それじゃあみしてみい。もしかしたらうまくいくかもしれん」

モロ
「嫌だよ、そんなイベント。」

キャップ
「お前、あだ名モロなんだからな？」

モロ
「そんな理由じゃないよ！！」

そして又もや、女湯に戻る。

京
「…これは…」

百代
「凄い会話だったな…」

京
「モモ先輩、マグナムってどんな銃？」

百代
「大口径ならグリズリーも倒せる、立派な銃だ」

京
「それでアハト・アハトってなに？」

百代
「ん／／／／／／ドイツ製の戦車の砲台だ」

京
「モモ先輩、よく入ったね…そんなの普通鞘が無いでしょう」

百代
「無理やりだったんだ…だが、その／／／／／」

京

「はいはい、ノロケは後で聞きますから。」

そしてさらに所変わって男湯。

キャップ
「あっちの女達は出たみたいだな。それにしても彰人大丈夫か、さっきの？」

彰人
「まさか、たらいが来るとは思わなかった。ま、大丈夫だが。それにしてもホントここ気持ちいいな。」

岳人
「大和、俺様明日、覗きがしたいぞ…」

大和
「はっ、辞めろよそんな子供染みた事…と、いうのは素人だ、覗きたいのなら覗きに行け」

岳人
「俺様、お前のそういう柔軟な考え好きだぜ。」

キャップ
「てか、隣を覗く気か？」

岳人
「いや、モモ先輩が居てそれは無理だし、そしてそこの彼氏に失礼だろうが。なあ彰人？」

彰人

「もし決行していたら貴様の命は無いと思え」

岳人
「……それで俺様この下の所にさらなる露天風呂見つけたわけよ」

モロ
「なんでも下のその旅館、明日は女子ラクロス部の合宿らしく」

岳人
「はぁ～女子ラクロス部…来るぜ、俺の時代の波が！」

彰人
「モロ、調べてあげたんだ…やさしいな」

モロ
「あはは、急に電話が来て、俺様の健康状態に関わることだっていわれたから」

大和
「それは…そうかもな。」

キャップ
「俺、先に出てるな。」

そしてキャップは先に出てしまった。残るは俺と大和、モロに岳人だ。しかしモロと岳人の出てしまい残りは俺と大和だけとなった。

大和
「まさか、兄弟がここまで背が伸びるとは思わなかったぞ」

そう切り出したのは俺の隣でタオルを頭の上に置いている大和だった。

彰人
「そうか、俺はあんま変化が分からなかったが。まあ百代より背が高くなれてホント良かったよ」

大和
「それはあれだろう、考えすぎだろう。それに兄弟が来てからは姉さんは落ち着きし、それにキャップの居ない時のリーダー。ほんと助かってばかりだよ。それにこの前の冬馬との勝負も」

彰人
「あらら、バレていましたか。」

大和
「流石にね。だけど今度はしないでくれよ…今度から俺はお前と共に頑張りたいからな」

彰人
「舎弟のくせに生意気な奴だな。まあお前なら大丈夫さ、俺はそう思うぞ。」

大和
「それは本音？」

彰人
「半分ぐらいな。おっとそろそろ出ないと百代が怒りそうだ」

大和

「姉さんは…子供じゃないんだから」

百代
「あ～き～と～まだか～！」

彰人
「ほらな?言ったろ。あいつはそう言う女だ。まあああいうのが可愛いんだが」

大和
「ノロケはいいから。しかしなんだろう俺は悪寒が走ってしょうがない」

そして俺らは出て男湯の前で百代そして京が待っていた。

彰人
「すまん、待たせたな」

百代
「いいさ、それでは抱きつかせろ。そして腕をホールドさせろ」

京
「私は、貴方を拘束（ホールド）したい」

大和
「勘弁してくれ」

彰人
「いいぞ。どんとこい」

こうも正反対の二人。
そして俺らは部屋に戻ると。そこではなぜかトランプというなの暴露大会を開催されていた。これは確か百代が買っていたトランプ。

キャップ
「お、遅いぞ。お前ら、さ、参加してくれ」

そしてルールは一枚ずつ引くのだが、問題はそれが一周していた時点で一番低いカードの者がその全員引いたカードの中から一枚選び、その話をするいい例は「あなたの初恋はいつ?」とか、なんとも女の子が喜びそうな物だ。そして俺らは全員引いた。俺はキング。まず無いものだ。そして今回は

百代
「な、私だと…」

そして全員がカードを見せる、色々あるが俺のが一番嫌だろうな、それは「彼氏にしている隠し事」…あるのなら百代を拷問して聞き出す♪

百代
「しょうがない、私はこれだ」

そして選んだものはこれ「初恋はいつか?」…いつだろう?

クリス
「お、これはわたし的にも非常に気になるな。」

まゆっち
「そうですね。やはり彰人さんなんでしょうか?」

そして女子は盛り上がるが、男子は…

岳人
「お前じゃなかったらどうするよ彰人？」

彰人
「別に構わんさ。まあ、く、く、く。」

大和
「うわ、兄弟が悪い笑いをしている。これは怖いぞ」

そして百代はこう言い出した。

百代
「私は、そうだな。十歳の時だな初恋は。まあ今横にいる奴なんだかな。」

そして一子と京、モロと岳人、大和は「やっぱし」って顔をしていた。悪いか！！

クリス
「しかしなぜ十歳なのです？」

百代
「そ、それは私が初めて負けたからだ…」

そしてその後一同で、こう言った

一同

「嘘だ！！」

その時、ひぐらしが鳴いたような気がした。

##第五十話## （後書き）

さて、最終アンケートを実施します。これは大和が誰とくっ付くかの最終アンケートで期限は一週間です。現在、一子となっておりますが、これを上回る結果になりましたら変更いたしますので、どうか感想とうで、教えてください。期限は一週間ですのでよろしくお願いします。

##第五十一話##（前書き）

アンケート、まだまだ募集中。

##第五十一話##

さて、百代が言い終わり、まだこのゲームは続いた。

キャップ
「よし、今度は誰だ！」

そして引いたカードの一番小さい奴は

京
「あれ、私だ。それじゃあこれ」

今度は京のようで、今度は書いてあることは「もし、子供が生まれたらどんな名前にする？」だった、てかこれは完全に兄弟に対するアピールだろうな。

京
「ミヤト、理由は勿論、大和のと、私のみや、以上！」

そしてそんな感じでゲームが終わった、そして消灯の時間になったのだがここで一番の問題が起きた

百代
「あ～き～と～」

現在、絶賛俺の足にしがみついている百代。理由は

彰人
「しょうがないだろう。男子は男子で女子は女子で寝る場所を決め

たんだから！離しなさい！」

百代
「なぜに、夫婦の部屋が無いんだ！！こんなに広い部屋の癖に個室が無いってなんだ！！もういい、彰人の布団に入れば」

そして俺の布団を部屋の外に出そうとする。

彰人
「く、布団を返せ。そしてお前ら見てないでどうにか」

一子
「Z～Z～z～z～」

一子はすでに寝ていて。そして

まゆっち
「こうゆう場合どうしたら」

松風
「まゆっち、こう言うときは見守っているのが一番だぜ」

松風により現在観察中。さらに

クリス
「マルさ～ん、もう少しにん…ぎょ…う」

こっちもこっちで寝ているし。

京

「大和、一緒に寝よう」

大和
「兄弟、お前のせいだぞ」

なぜかさらに広がりを見せており。

キャップ
「Z～z～z～」

キャップはやはり寝ており。

モロ
「これって言わば混沌(カオス)だよね。どうする岳人？」

岳人
「俺様は明日のために寝るぜ。まあもし、その行為に至った場合は俺も入れさせて「誰が入れさせるか！！」ハガゥガッ！！」

俺の一撃が岳人の顔面に入り、そのまま気絶してしまった。そしてそれを見たモロが

モロ
「あはは。それじゃあ明日ね」

そして男子の部屋をそのまま閉めてしまった。そして現在、この広いところに残ったのは、俺、百代、大和、京だ。

大和
「京、お前明日は一日中、無視するぞ」

その一言で京は一瞬にして

京
「大和、お休みなさい。」

女子の大部屋に戻って行き。そして兄弟は

大和
「一応、布団はこのままにして置きますから。それではねぇ、姉さんに兄弟」

仕返しと言わんばかりのあの笑顔、そうか俺も

彰人
「も、百代、放さないと、うっ！」

俺はそこで言葉が失った、それは上目遣いで百代が俺を見ている、しかもちょいと涙目。

百代
「そ、そんなに嫌か？一緒に寝るの？別にそれぐらい、私にだって寂しい気持ちが…こうさせたのはお前なんだぞ！！」

俺は両手を挙げるしかなかった

彰人
「わかった、はぁ～その布団を使って寝てくれ百代。一緒の部屋で寝てやるからな。さすがに皆もいるんだからそれぐらいで我慢な」

百代
「う～、しかししょうがないか。わかったそうする、だけど彰人は？」

彰人
「あ、俺か、俺はこのソファーでも使う。」

しかし、それは朝起きて一変していた。

――――――五月四日。

俺は早朝に起きた、折角の森があるのだから修行をしないといけないと思い、しかし体が動かない、それもそうだ。俺は現在ソファーで寝ていると思っていたが現在、なぜか百代と同じ布団で寝ている、てか手を握っていただけが右半分をホールドされている。しょうがない

彰人
「百代、おきてくれ。そして俺は鍛錬に行きたい」

俺がそういうと、百代はすぐに起きた、理由は

百代
「おはようのキスが先だ」

俺も最近ではこれが朝一番の行動…不味いかな?そして俺はすぐに着替えた、百代はまだ眠いと言うことで女子部屋でもう少し寝るといって寝てしまい、それと行き違いで一子が来た。

一子
「あれ?彰人、今日は一段とはやいわね。一緒に走り行く?」

彰人
「そうだな、久しくやっていない、あれでもやるか?」

俺はそう言うと、一子は、犬の如く喜び

一子
「やった、久しぶりの追いかけっこだ。それでルールは?」

彰人
「俺が追うから、一撃も攻撃を受けずに、そうだな、五時半までだな。終了後朝風呂に行く、それじゃあさっさと行くぞ」

そして俺らは旅館を出た。

――それから約一時間後。

現在、全員で女子の仕度が終わるまでロビーでパズル。

彰人
「よし、終了」

大和
「くっそ、もう少しで勝ったのに。」

俺と大和は直ぐに終わった。そしてまだパズルをしていたので俺らは先に釣竿の手配をしていた、そして続いてキャップも終了。

キャップ
「よし、大和達ほどじゃないけど終わりだ」

彰人
「これで終わっていないのは岳人とモロだけか。頑張れ」

岳人
「ちっ、俺様は力なんだよ」

モロ
「うーん、どうもね、パズルって苦手なんだよ。」

そして一子が来た。

一子
「男衆、お待たせ」

大和
「ああ、もう先に釣竿の手配はしといたぞ」

京
「立派な竿だね、触っていい？」

大和
「今、この俺が手に持っている竿ならだうぞ」

京
「ちっ」

クリス
「日本は免許無しに釣りが出来るのか。やはりすばらしいな」

まゆっち
「ジャーマンだと免許が必要なんですか…大変ですね」

百代
「一応、聞いとくけど、これで釣るのって魚、それとも彰人の性欲？」

彰人
「一応、突っ込んどくけど、魚ね。俺は大丈夫だから、だからその目を辞めなさい。あとで頭を撫でてやるから」

百代
「うん、わかったぞ♪」

そして俺らは山道を降りて川下まで降りていった。そしてキャップは直ぐに釣竿を持ち

クリス
「お、おいエサが無いぞ」

キャップ
「そう言うのは現地到達でいいんだよ、こう言う岩の所に居るから、それをこう付けって、投げる、そしてヒットー！！いきなりヤマメだぜ」

モロ
「うわぁ。おもいっきし楽しんでいるよ、野生児だな」

そして俺たちもつりをすることにした。俺の隣、勿論百代だがなにか？

百代
「よし、そろそろ稽古してくる。」

そして立ち上がると一子も来た

一子
「今日は朝のいい運動からだから気分が良いわ」

百代
「おし、京。今日は近距離格闘鍛えてやる」

京
「謝々」

そして京たちは河川敷で修行を始める、それから十分ぐらい俺はのんびり釣りを楽しんでいる。

大和
「京はどんどん、強くなっていくな……」

彰人
「ま、寝込みを襲われないよう頑張るんだな、兄弟。」

そして百代だけが戻ってきた。

大和

「あれ、一子と萌え萌え京たんは？」

岳人
「居ない、こういう時だけいじるとか、やっぱお前ってSだよな」

百代
「ああ、組み手に入ったから、そのまま放置してきた。それにしても大和、大変だな」

大和
「何言っているんだよ、姉さんだっていつ彰人に飽きられるか、ビクビクしているくせに」

そう言うと大和はダッシュで逃げていった。

百代
「う～ん、それぐらいの負けん気は買うのだが。三十秒待ってやるからな」

彰人
「それじゃあ、俺はちょいと見てくるよ」

俺はそう言うと、一子達の方に向かった、この森は既に俺の蛇で覆ってある、だから誰かが侵入したら一瞬で分かる、俺は知っている殺気を感じ、そっちに向かった。

Ｓｉｄｅ　大和

姉さんあら逃げている時に気付いた、俺はそう思い直ぐに止まった。

百代
「お、もう追いかけっこは終わりか」

そしていつもなら、ここでお仕置きが入るが、しかし

百代
「山の方に誰かいるな、数は十。一般人ではないようだな。さすがは弟」

大和
「木から影が見えたからね、行くのはやめたよ」

百代
「賢明な判断だ、弟よ。それじゃあちょっと行って来るから、どうせそれで彰人も動いたのだろうからな」

そして姉さんは山の中に入って行った。

Ｓｉｄｅ　ｏｕｔ

俺が、その場に来た時には既に戦闘中だった。現在京達が押されていた、まあそりゃそうかなんていたって

彰人
「なにやっていやがる、お前ら。てかマルギッテ」

俺の言葉に全員がビックリして、動きが止まる。

一子
「うわわ、ビックリした。急に出てこないでよ彰人」

京
「てか、気配が感じないってどんな修行？」

そしてもう一人、完全に驚いているのは

マルギッテ
「こ、これは…お久しぶりです、彰人殿！！」

一子
「え、知り合い！？彰人！」

マルギッテ
「な、貴様のような野うさぎＬＶが彰人殿を呼び捨てだと」

彰人
「こら、マルギッテ。俺の仲間に何か、あるのか？」

マルギッテ
「いえ、なにもありません。」

京
「見事に上官だね、彰人。一体なにをしたのこの人に？」

そしてさらにそこに百代達が来た。

百代
「お、なんかおもしろそうな事になっているな。勝負か、それとも奇襲か。後者なら譲れ、いい闘志が感じるからな」

モロ
「うわっまた軍人だ」

そして風間ファミリーが全員来た、そして一人が異常に反応した。

クリス
「あ、マルさん！！」

マルギッテ
「これはお嬢様」

クリス
「なんでマルさんが？」

マルギッテ
「あ、それはですね…」

中将
「ふむ、なにかややこしい事になっているようだな」

そして出てきたのはもっとこの場をややこしくしそうな、親ばかだった。

##第五十一話##（後書き）

さぁあ、今度の話の後書きの際に大和のルートが決定します。まだまだアンケートは募集していますのでどんどんください。それではバイバ～ィ

##第五十二話## （前書き）

発表！！

##第五十二話##

さて、この親バカが来た理由は一つだろうな。

クリス
「お、お父様！！」

そしてこの娘も普通に喜んでいるし。

中将
「クリス、今日も美しい。紹介しよう、彼女は私の部下のマルギッテ少尉だ」

マルギッテ
「マルギッテ・エーデルバッハです、覚えなさい。」

そしてこの軍人も軍人だった。相変わらずだな

中将
「部下が失礼をしたようだな」

京
「失礼とかのレベルじゃないんだけど、普通に彰人が来なかったらたぶん続いていたし」

中将
「ふむ、これはアキト君、久しぶりだ。今回も申し訳ないな、いつも恩ばっかりで」

彰人
「別にいいですよ中将殿。どうせ、この猟犬は近接のこういう手馴れた者を見ると制御出来なくなるんだからな」

中将
「しかし、その若さゆえの無鉄砲さは嫌いではないのだよ」

京
「それで襲われた方は堪んないけど…もういいやめんどくさい」

一子
「私はよくないわよ、やいマル！」

マルギッテ
「な、野うさぎがこの私を呼び捨てで」

一子
「今度はお互い武器有りで勝負よ！」

マルギッテ
「指で私を指すのを辞めなさい、そしてマルも辞めなさい」

中将
「すまないな、サムライガール。クリスと話をさせて欲しい」

クリス
「父様。なぜこのような場所に？」

中将
「理由は一つに決まっておろう」

クリス
「と言いますと？」

中将
「お前からの連絡が来たからだ。なんと友達同士、学生だけで泊まりがけの旅行に行くというではないか。そんな電話を聞いては父としていてもたってもいられなくてな」

クリス
「それで…わざわざ私は幸せ者です」

岳人
「おい、おっさん。それは俺達が信用がねえってことか？」

その時岳人が首を突っ込んできた、まあ確かにそう思うだろうけど

中将
「信用とかそういう問題では無い。ただ旅行に行くのだけで心配なのだ。それに信用と言うならアキト君がすべてだ。私はアキト君が頼むのなら軍隊を派遣するぐらいだぞ。」

彰人
「…そうですか」

中将
「まあ、私もそんな子煩悩な軍人ではない。せいぜい部下を三十人を率いれて様子を見に来たぐらいだ」

普通こういうのは非公式でしてほしいものだ。俺はそう思っていた、

たぶんここに誰もがそう思ったであろう。

モロ
「十分すぎるような。」

キャップ
「……――――」

モロ
「あれ、キャップなにも言わないね、どうしたの？」

キャップ
「ああ、どうやったら軍用の銃、みしてくれるんだろうなって考えていた」

モロ
「…たぶん無理だと思うよ」

中将
「クリス、楽しそうでなによりだ」

クリス
「はい」

百代
「やれやれだな」

大和
「娘好きの父親か、彼氏とか出来たら大変だろうな。ハ、ハ、ハ、ハ。」

そして俺は直ぐに動いた。

中将
「娘に彼氏だと!?ふざけるな」

そして銃を構える中将殿。

中将
「不穏当なことを言わないでくれたまえ。私が温和でなければ発砲してるぞ」

大和
「…温和でよかったです。今後彼氏とか不穏当なことはいいません」

中将
「うん、もし彼氏など出来たら、その男のために第三次世界大戦が起こるだろう」

マルギッテ
「ちゅ、中将殿。その銃ですが」

中将
「うん、ん!」

そして中将殿の持っていた銃は粉状になり風に流されていった。

彰人
「中将殿、俺の兄弟に銃を向けないで欲しいな。今度はそうなりますよ?」

中将
「…気をつけよう。」

一子
「それで話おわった、それじゃあ尋常に勝負よマル」

マルギッテ
「…任務の時間に迫っている」

中将
「すまないな、サムライガール。マルギッテは優秀な部下なため多忙なのだ」

百代
「なら、連れて来るなよ」

中将
「だが、サムライガール。君の願いも直に叶うのだろう。マルギッテも同じ学び舎に編入することにした」

岳人
「まじか！・・・ありだな」

京
「どれだけ親ばかなんだろう」

中将
「ふ、私とてそこまで過保護では無い。せいぜい隣のクラスのSクラスに入れる。丁度マルギッテにいい特進クラスだしな」

百代
「どんがけ、過保護なんだよ、突っ込み疲れたぞ。それよりお前の部下を軽く撫でてやったから回収するならしとけよ」

中将
「な、私の精鋭部隊がだと。マルギッテ確認しろ」

マルギッテ
「……連絡不能、制圧された模様」

百代
「なに、軽く挑発したら乗ってきてな。は、は、は。どうだ彰人」
だから、今上機嫌なんだな。十人もいい相手ができて満足しておるのだろうな。

マルギッテ
「貴様、いい気になるのを辞めなさい」

百代
「お、お前も部下の敵討ちにでもするか？」

彰人
「二人とも辞めておけ、それからマルギッテ、一応、これ俺の彼女だから粗相でもしたら、分かっているね？」

マルギッテ
「御意。辞めておきます、それでは撤収時間です」

中将
「うむ、こちらもマルギッテが襲い掛かったようだし、遺恨はなしで」

百代
「うん、ああ私たちもバカンス中だしな」

中将
「部下は我々が責任をもって回収しよう。それではなクリス」

クリス
「はい」

中将
「娘を頼むぞ」

やさしく言い

中将
「……頼んだぞ」

今度は怖く言われた、ようは威嚇された。

そして中将殿達は帰っていった。

一子
「覚えたわよ……マルチーズ」

モロ
「覚えていないから、マルしか合ってないからね」

そして俺らは森を降りて、再び釣りを再開。そしてキャップは又もやヒット、しかも今度は結構でかい。

キャップ
「お、これは二十センチはあるな、これ川下の奴に売れるかも。俺って商売上手」

そして止める暇もなく、キャップは消えていった。まあ俺は釣りを楽しむことにした。しかし

彰人
「完全に釣りをするきは無いみたいだな、百代」

俺の目の前で水遊びをしている百代

百代
「いや～気持ちいいな。それにしてもあの軍人とはどういう関係なんだ、彰人？」

彰人
「あ、ああ。マルギッテだろ簡単にいうと部下と上官だ。なんだやきもちでも妬いたか」

百代
「ああ、妬いたぞ。だからお前もこっちで遊ぶんだ」

そして俺を川に入れようとした。

彰人

「あ、ちょっと待て。靴と靴下ぐらい脱がせろ。」

そして俺も川の中に入れられた。

百代
「どうだ、気持ちいいだろ彰人。」

彰人
「ああ、そうだな。それにしてもお前…機嫌がいいな、そんなに欲求不満だったのか」

百代
「私の彰人パワーはいつも必要なのだぞ。なのに昨日なんて手を繋いだだけだ。だから私が彰人が寝ている間に頑張って抱き枕にしたんだぞ。それでも足りん！」

彰人
「なるほど、それで今日のあの十人は手ごろで良かったと」

百代
「まあそういうことだが…今日はそのなんと言うか、一緒に寝たいぞ」

彰人
「はぁ～、わかったあの大広間のところで二人で寝よう。これでいいな？」

百代
「さすがは私の彼氏！」

そして抱きついてきたのはいいが、なにぶん川。俺に水がかかった。

彰人
「百代…」

百代
「あはは、逃げるが「遅い」う、嘘」

彰人
「さあ、お仕置きの時間だ」

百代
「そういうときだけのお前の顔はホント笑顔だよな。だけど彰人のお仕置きならいいかもしれんな」

Ｓｉｄｅ　他

モロ
「いいの、なんか大和たちあんな風に成ってきてるし」

京
「もし、あれで止めに入ったら大和に空気が読めていないって怒られるし」

モロ
「唯一のストッパーが今、彼女と遊んでいるし」

京
「モロ、あれこそ邪魔したら馬に蹴られるよ。だから私はこの釣られたお魚とお話している。ああ、水……水をくれって」

モロ
「やめようね、それ暗いから」

ｓｉｄｅ　ｏｕｔ

そして俺がちょいと百代と遊んでいたら、あれ、なんか空気ぴりぴりしていなか、と、その時にキャップも戻ってきた。

キャップ
「いやぁぁ売れはしなかったが、バーベキュー用の食材と交換してもらったぞ。」

百代
「それよりも面白いことになっているぞ」

キャップ
「なに、それはどう言うことだよ！」

そして俺は大和から、聞いた、そして結果

キャップ
「なるほど、勝負…決闘か。わかったぜ、超分かったぜ。その勝負俺が預かった。」

百代
「ああ、これは川神の名にかけて私達が公平に勝負を考えるぞ。」

クリス
「だ、大丈夫だろうか？」

大和
「姉さんが川神って出した時は真剣（マジ）だから大丈夫…タブン」

そして俺らは午後になり、俺らはキャップが手に入れたバーベキューを昼飯に、そしてその時ですら敵意むき出しの二人を抑えながら旅館に戻った。そして女性陣が風呂に行っている時に、キャップもモロもなんかお土産を見にいっていたため俺と大和しか部屋には居なかった、あれ岳人は？

岳人
「俺様参上！右良し、左良し！」

そう思っているときに不意に現れた。

大和
「彰人しか居ないぞ」

彰人
「あと、お前もな。それでどうかしたのか岳人？」

そしてこう言った。

岳人
「なあ、お前ら覗きをしに行かないか？」

##第五十二話##（後書き）

ブ「さあ、今日は重大発表だぜ」

彰「キャップみたいに言うなこのアホが！」

ブ「うるさい、貴様はライダーの声の人といちゃいちゃしていろ」

彰「ホントにしていていいのか？」

ブ「ごめんなさい、ココにいてください」

彰「それで貴様が呼んだ理由は、何だ？」

ブ「きまっているだろうに、これからの未来の話だよ。それに今回は君の相棒も居ないのだよ」

彰「なるほど、楽屋話というわけだな、それでどうかしたのか？」

ブ「そうだ、いい加減この世界の本当の主人公がどのルートに行くのかきめるべきであるとおもってだな。アンケートとったのだよ」

彰「ああ、あの一回目はたったの三人しかこなかった、あの伝説の…」

ブ「ホント一瞬だけ、この小説をやめそうだった。ってそんば暗い話はいいのだ。今回はいっぱいきたのだからな」

彰「それで誰になったんだ？」

ブ「ミ」

彰「み？」

ブ「ヤ」

彰「や？ちょっとまてこれは」

ブ「コ」

彰「……」

ブ「と、言うわけでルートは、椎名　京に決定しました。アンケートに皆さん答えていただきありがとうございました」

彰「……」

ブ「ええ、主人公は石化してしまったのでここら辺で閉めます、それではバイバ～ィ」

##第五十三話##（前書き）

覗きの会、の巻き

##第五十三話##

そして岳人がそう言ってきたが

彰人
「俺はパスだからな」

岳人
「いいじゃねぇか、こういうのはお前らぐらいしかいなんだからよ、キャップは女体に興味の無いお子様だし、モロはチキンボーイだし。そこでお前らが居るわけだ、大和は正常にエロいし」

大和
「そこまでエロくないから」

岳人
「そして唯一、この中で女の味を知っている最強のボディガード、それがお前だ彰人！お前ばっかいい思いしやがって、俺様たちにも協力しろ」

なんとも自己中心的だな、おい。

大和
「まあお前がへましない様に俺は行くよ。」

岳人
「よし、これで頭脳はカバーできた、あとは武力１０００が必要だ、来い彰人」

そして手を伸ばされたが。

百代
「く、く、く。キイタゾ、キイタゾ」

百代が部屋に戻ってきた、どうかしたのか?

岳人
「大和大変だ、ラスボスがいきなり出てきたぞ～」

大和
「く、ここは勇者彰人の出番だ」

彰人
「どうしたの、百代」

岳人
「だめだ、勇者がまったく意味がない、これはどうしたら」

大和
「あ、あのう姉さん。ここは、まあ穏便に」

百代
「彰人、これを見ろ、ここにあるのはなにか分かるか?」

そして大きく見せてきたのは、ゴールデンウィーク限定家族風呂だった。まさか

百代
「いやぁ～昨日は知らなかったが、私がな、お風呂に入ろうとした

際にだな、なんか掲示板を見たら張ってあってな。く、く、く、彰人すでに予約はしてある、後五分だ、さあ行こう」

岳人・大和
「「ほっ」」

彰人
「なに、ホッとしてやがる！」

百代
「あ、そうだ、お前ら」

岳人・大和
「「はい！？」」

百代
「捕まらないようにな。それではさあ行こう、彰人。安心しろ、家のようにあそこまではしないぞ、注意書きに書いてあったしな。だか洗いっこは別だぞ。さあ行こう」

そして俺は連れて行かれた。

Ｓｉｄｅ　大和

なんか凄いものを見てしまったような気がしたが…

岳人
「おし、やはり勇者はラスボスを担当してくれたぞ。俺らは行くぞ、天国（エデン）へ」

そして俺らは山を降り始めた、そして山道を通り

岳人
「よし、もう少しでゴールだ」

そう、湯煙も見えてきて、もうすぐ

『シンニュウシャ、シンニュウシャ』

そして警備の音がなった、瞬時に周りを確認、カメラは無いようだ。
しかし

岳人
「な、こんなの昼間は無かったぞ。ど、どうするよ大和」

そして俺が考えている時、岳人が滑ってしまい、そして俺も下にある、川に落ちた。

大和
「嘘だァァァァ」

ｓｉｄｅ　ｏｕｔ

俺はあのあと、百代の体を隅々まで洗い、俺も洗われたのだが…ちょいと長湯だったせいが、もう少し入りたくなったから男湯に向かった。

彰人
「あれ、お前らどうかしたのか？」

そして俺が脱衣所に来た時、大和と岳人はびしょ濡れで脱ぐのに悪戦していた。

大和
「あ、ああ、あとで話す！、ああ、寒い」

岳人
「俺様でもこれはきつい」

俺はそんな尻目に、浴場に入っていった。

キャップ
「お、彰人じゃねぇか。よっ」

キャップが先に入っていたのだが。

モロ
「……」

モロはどうかしたのか？そして岳人達も入ってきた、そしてなんでびしょ濡れだったが聞いた。

キャップ
「わっかんねぇな覗きなんて」

岳人
「うるせぇ、これが男の性なんだよ！」

大和
「だけど、どうしたんだモロ？」

そして現在も大浴場の端で体育座りをしているモロ

モロ
「…ほっといて」

ホント、何があったのだろう？てかどうしたんだろう？

キャップ
「安心しろ、モロ。おもいっきりやれば剥ける、頑張れ」

彰人
「ああ、そういうこと」

モロ
「一番最初に触られた他人が男なんて」

岳人
「この場にいなくて良かったかもな」

俺もそう思うが、その時

大和
「へっくしゅん！」

大和がくしゃみをしたが大丈夫なのか？そして俺らは風呂から出て部屋に戻った。
しかしそこには安息の地ではなかった。

百代

「彰人～どこいたぁ～って風呂？」

大和
「そう思えば、なんで普通にこっちに来たんだ兄弟、姉さんと一緒に家族風呂に入ったわけでは」

俺は目で察せ、察せとアイコンタクトをした、その結果

大和
「あ、そういうこと。まあいいや。」

そして俺らは時間が過ぎて消灯となった。されど俺は大広間で寝ている、理由は

百代
「むにゃ！……ぬ～」

昨日と同じなわけだ、まだ俺は眠れそうも無いのでこう百代を見ていると…部屋の扉が開いた音がした。現在、男子が女子の部屋に入った場合粛清と言う名の拷問がある、しかしこれは男が女の部屋に入った場合だけである、なら逆はどうなるだろうか。ようは

彰人
「京、夜這いはどうかと思うぞ」

京
「…ビックリした、彰人か。寝てると思っていたよ、これは夜這いじゃないよ既成事実だよ」

もっと悪質だった。そして京は部屋に入っていったが、直ぐに出て

きた。そしい普通に自分の部屋に戻ってきた…なにかあったのだろうか？

――――五月五日。

今日は決闘の日であるのだが。

大和
「へーくしゅんっ」

まあいうならば、バカは成らないものだ。

キャップ
「大丈夫かよ」

そして今さっき入れた温度計が示した数字は

モロ
「八度一部。完全に熱だね。どうする決闘今日だよ」

大和
「やるさ、絶対に」

彰人
「無理はするなと言うたいが…ま、薬を貰ったし、それからちょいと川神流のやつをパクッテ指圧でもするさ」

そういうと大和はうつ伏せになった。現在百代たちは先に飯に行くように言っといた。

キャップ
「ま、普通のお前なら熱が出てるからやらない、だろうが根が負けず嫌いだからな」

大和
「ああ、あのクリスに一矢報いるんだ」

岳人
「男だな、大和」

モロ
「だけど、これじゃあバレルよ。たしかにクリスやまゆっちはわからないかも知れないけど僕らは付き合い長いし。それにこれもそれも岳人のせいなんだから延期してもらえばいいじゃないか」

彰人
「たとえばどんな理由よ」

モロ
「岳人が急に俺様をガイアに捧げるとか言って裸で外に出てそれを止めるために風を引いたってどう」

岳人
「俺様がどんだけ変態なんだっての」

大和
「確かにそれなら女子は信じるだろうが…嫌だ」

彰人

「まったく兄弟誰の影響でこんな無茶ばっかするようになったんだが。まあ嫌いではない」

そして俺は指圧に入る。そして俺の蛇が反応した、そして

キャップ
「うんなにか気配がする」

キャップも案外凄かった、そして

???
「にゃ～」

キャップ
「何だ猫か。」

おいおい、そこはそれで納得しちゃうのかよ。この気だとまゆっちだな。蛇が松風に反応しているし。

大和
「まて、可笑しいぞ。箱根の猫はラップちょうに鳴くって聴いていたのだが」

猫?
「にゃ、ニャニャー。にゃにゃにゃにゃにゃにゃっにゃ♪」

大和
「まゆっちそろそろ出てこようか」

まあんだけ声を上げれば誰だか一発だよな、しかし

岳人
「お前ってやっぱSだよな」

そして部屋のドアが開き、まゆっちが出てきた。まあそうだろうな。

まゆっち
「あのう、私は皆さんを呼びに…来たのですが」

大和
「まゆっち」

大和はやさしく、そして笑顔で、脅迫のように

まゆっち
「は、はいっ！」

大和
「今のことは黙っといて」

まゆっち
「え、え、だけど」

大和
「お願い」

まるで何処かのウサギの如くまゆっちに笑顔で言った。

まゆっち
「は、はい……」

そして一瞬で意気消沈である。まゆっちそういう時は頑張らないとな、俺はそう思いながら大和に裏技をした…しかし

彰人
「いいか、これで少しは良くなるだろうからな。しかし薬の効果とも合わせてももって今から三時間だ。これ以上は症状が出ると思え、俺は偽物しか出来ないからな」

大和
「十分だ、モロどうだ、俺を横から見た感じ」

モロ
「大丈夫だと思うけど、バレルと思うけどな…」

そして俺は飯を食いにいった、そして大和と同じぐらいの試練が俺には待っていた。それは

百代
「遅いぞ、彰人。さ、さ、ご飯だ、ちなみに遅刻したからあ〜んだけだ」

彰人
「…嘘だろ…」

俺は瞬時に助けを求めたが

キャップ
「さぁ〜て、何から食おうかな」

キャップは既に無理。てか直ぐに行ってしまいこの事すら眼に入っていない。

大和
「さて、今日は軽めにしとくか」

俺を横目に、今日はすまんが無理と、そんな顔をしていた。

モロ
「…無理です」

既に声に出ていた、てか俺には援軍が

岳人
「俺様のここ、空いていますよ」

俺は瞬時に脇にボディブローを決めて、終了。うんうんストレス発散。

百代
「よし、まずはこの飯を」

く、こうなれば焼けだ

彰人
「あ、あ～ん」

そしてこんな赤裸々があるとは思わなかった…これは誤算だ。

##第五十三話##（後書き）

うし、これで後もう少しでルートに入れる、これからもがんばりまっせ！！

##第五十四話##（前書き）

私はアメリカから帰ってきたぁぁぁぁぁぁぁぁ！！

##第五十四話##

そして朝食も終わり俺らは大和とクリスの勝負様の考えをしていた。
他はみんな先に行ってもらっている、この部屋にいるのはキャップ
と俺と百代。

キャップ
「うんじゃ、どうするか？」

彰人
「ここは無難にあれでいくか？それが一番ベストだろ。」

そういうとキャップはなんだか分からず、俺の肩を揺らす。

キャップ
「あれってなんだよ、俺にも分かりやすく教えろ～」

俺はしょうがなく、耳打ちで話、そして

キャップ
「了解だ！それじゃあさっそくネタ決めしないとな、それと紙と箱」

そうしてキャップは紙を探し始め、そして俺は現在百代に頬を引っ
張られています

彰人
「にゃんで？」

百代

「私にも、耳打ちしろよ！」

彰人
「本音は？」

百代
「キスがしたい」

うん、ストレートだった。しかしここは

彰人
「お預け、もし破ったら…分かっているね？」

そして百代は俺にしがみつき

百代
「う～」

ああ、かわいいな癒される。そしてキャップが紙を持ってきた。そして俺らは色んな試練を用意し始めた。

時間も過ぎてすでに九時。俺らは全員を河川敷に呼んだ、大和のほうはまだ大丈夫のようだが、大丈夫かね…

キャップ
「これより大和とクリスのタイマンを行うぜ」

百代
「司会進行はキャップ、そしてジャッジは私と彰人で行うので夜露死苦」

彰人
「つうわけだ、ヨロシク頼むぜ」

クリス
「やや風邪気味と聞いていたが」

大和
「なに、心配ないさ。さあやろうぜ」

京
「だから夜、調子悪かったんだ」

たぶんお前のせいでもありそうだ京。

まゆっち
「…ぅう」

その時まゆっち唸っていた、これは…見てみようかな

一子
「お腹でも痛いの？」

まゆっち
「あ、いえ。そのただ心配で」

一子
「別に本気の殴り合いでもないんだし」

まゆっち

「（大和さん、一応いつもと変わらないぐらいの顔ですが、心配です）」

百代
「私と夫と、キャップで三分ほど考えた、公平な決闘法を」

キャップ
「んで、結局、川神戦役の縮小版をやろうと言うことになった」

まゆっち
「川神戦役？なにかとても戦いの予感が」

京
「これは中国でいうところの“童貫遊戯”のことだよ」

まゆっち
「知っているのですか、京さん」

京
「南宋の時代、童貫という元帥がいて彼は敵国の遼との間にやってのけたことなんだけど。兵力を使わず、戦の優劣を決めると言うすばらしいシステムを……」

キャップ
「京、ずるいぞ。解説は俺がやるんだ」

京
「……しょうもない」

キャップ

「これはな、主にクラスとクラスがやりあう時に使われる決闘法で、まずこれを用意する、その名もクジ箱」

そしてキャップは持っていたクジ箱を前に出した。

クリス
「クジ箱……その中に争う種目が入っているのか」

キャップ
「その通りだぜ。勝負は五戦勝ったほうが勝ちだ」

クリス
「中にはどんな種目が？」

キャップ
「体力重視、知力重視、感性重視、まあ色々だな。クリスに有利な物もあれば不利な物もある。ようは色んなモンがこの戦いには必要ってことだ」

クリス
「五回連続、私に不利なものがでたら？」

百代
「クジは平等に入れた、そこまで偏ることは無い」

彰人
「それに運も実力のうちだ、わかったか？」

キャップ
「ああ、お前ら勝手に解説をするな。まあ彰人の言うとおりだけど

な。俺なんてカリカリ君五回連続当たった事もあるし」

モロ
「それ、最後はお腹が痛くてバスの中が大変だったまで言おうね」

キャップ
「俺はあの時なんども隣のワン子にダメと言ったか」

クリス
「それは犬も災難だったな」

一子
「うん、私がなんど励ましたことか」

キャップ
「あの時ワン子涙目だったもんな。」

一子
「あのね、隣でお腹痛い奴が“もうゴールしてもいいよね”って言われれば誰だって必死になるわよ！」

キャップ
「話が逸れたが運も実力」

クリス
「ああ、勝負がなんどかあることでクジでも構わない」

大和
「俺も異論はなしだ。まあ姉さんとキャップってところが不安だが、まあ兄弟が居れば安心だろうからな」

百代
「それじゃ最初にジャンケンをしてくれるか？」

クリス
「ジャンケン、何故？」

百代
「クジによっては二つのうち一つを選ぶ物もある、それに先にクジが引けたほうがいいのがあるかもしれないしな」

そして二人は向かい合った。

大和
「クリス、俺はグーを出すからな」

大和の心理戦にクリスはもちろん乗ってしまいもちろん大和の勝ち。

大和
「はぁ～、やり易いよ。ホントに」

クリス
「腹立つ！大和腹立つ！！」

クリスはその場で地団駄を踏んでいた、なんとも読みやすい子。

モロ
「ま、前哨戦は大和の勝ちだね」

京

「こういう風に思考が読みやすい相手だから、勝負を挑んでも勝てると思ったんだね大和」

モロ
「（風邪さえ引いていなければね）」

まゆっち
「（やっぱり……止めるべきです。だけど私のようなものがでじゃばっては…）」

百代
「さぁ、一回目のクジを引け、弟」

そして大和がクジ箱に手を入れた、そして

京
「あんッ！そこ！」

京が変な声を挙げ始めていた。てか動きが怖い。

大和
「今日の運気を調べてやる（ゴソゴソ）」

京
「な、中をかき回すなんてぇ」

大和
「誰か、そいつのイマジネーションプレイを止めてくれ」

そして百代が一言

百代
「京、私も今日からおあずけだから、お前もおあずけ！」

京
「は～い。大変だよねお互いにさ」

百代
「ホントだな～」

彰人
「どういう、解釈だお前ら！」

大和
「まあまあ、それじゃあ俺はこの赤い紙を選ぶぜ」

そして高らかに上げた紙を百代に渡した。

百代
「どれどれ、おー、弟よ。お前凄いくじ運だな」

大和
「どんなもんよ、クイズ勝負、それとも頭脳系か？」

百代
「じゃーん、チェーン・デス・マッチ。」

ああ、凄いくじ運だなホントに。俺が入れた唯一の純体力系。

大和

「ははは、殺せよ！！」

大和は笑うしかなかった。それもそうかもしれない、なんていたって

モロ

「……よりにもよって肉弾系を選ぶなんて。」

クリス

「ふふふ、これは面白いなぁ大和？ははは」

百代

「ギブアップか、この線外に出れば負けだからな」

そういうと、俺はマルを描いてく、そして完成、その名も軍師には不利の不利リング。

大和

「なんか、特殊のルールはあるんですか？それとも普通のチェーンデスマッチ？」

百代

「寝技ありだ、良かったな。試合にかこつけて襲えるぞ。」

クリス

「な、ふ、不埒だぞ大和！！」

大和

「俺は何も言っていないだろうが……う…」

大和の顔が一瞬しかめた、不味いな、そろそろ薬の効き目が切れて

きたな、ただでさえこんな冗談に付き合っているんだからな。

大和
「種目、まさかこんなものばっかじゃないよね？」

彰人
「お前が一番不利なものを自分で引いたんだ、責任は自分で処理しろ」

クリス
「姑息な手ばっか使うから、運にも見放されるんだ。」

クリスは得意そうに言うが。

大和
「ぬっ……」

不味いな、流石に安静だったらの効き目の俺流あれじゃあもたんか。

キャップ
「ほら、大和手首出せ。俺が鎖でつないでやるから」

そして二人は鎖でつながれた。

クリス
「それではお前の気骨見せてもらうぞ」

クリスは既に戦闘体勢、しかし大和はやる気ゼロ。

百代

「それでは第一回戦。いざ尋常に、勝負！！」

大和
「ふ、クリスよ。俺はたとえ勝負でもな」

クリス
「なに？」

大和
「女子を素手で殴ることは出来ない」

クリス
「ふん、それは私を一人の戦士と見ていないのか、それは愚弄だぞ。これは誇りをかけた勝負だ、遠慮せずに来い」

しかし、そんな事をすれば間違いなく負けるだろうし、それに倒れるだろうから。

大和
「勝手な自己満足を覚悟でいいんだ。もう一度言う。俺は女子を殴ることは出来ない、だから次の勝負で頑張ることにするよ……ギブ…アップ」

キャップ
「死闘の幕開け第一回戦は勝者クリスだ！！」

クリス
「な、釈然としないぞ！！」

大和

「他にでもいくらでも勝負は出来る、他は負けない。それにこれ以上文句があるなら次の戦いの俺を見ていろ」

クリス
「……」

そう言うと俺はすぐに鎖を破壊した、なぜか二人とも驚いていたけど、どうかしたのだろうか？

モロ
「それでは解説の京さん、今回の戦いをどう見ますか？」

京
「肉弾系は大和じゃ勝てない、だからここは無駄な力を入れずに次に回す。だけど相手は納得しないだろうから理由をこじづけた」

モロ
「なるほどねぇ、大和。アンタってヒトは」

クリス
「つ、次だ次！！」

京
「クリスも勝ちを拾ったようなものでいい気分じゃないよね」

そして次はクリスがクジを引いた。

##第五十四話##（後書き）

今回は前哨戦、てかこれで私のすっとくはきれてしまった…

誰かぁぁぁ助けてぇぇぇぇえ！！

##第五十五話##（前書き）

決闘、中盤。の巻き

##第五十五話##

そしてクリスがクジを引いた、そして出てきたのは

百代
「これか、これは両方互角だろうな。絵を描くだ」

そしてキャップはあらかじめ用意していた絵の具を出してた。

キャップ
「一応、絵の具や色鉛筆、クレヨンは一通り用意してあるからな。好きなものを使ってくれ」

そして俺は絵のお題を言う。

彰人
「お題は、まゆっちだ」

そして急に言われたからかビックリした様子だった。

まゆっち
「え、え、わ、私ですか！！」

百代
「ああ、他のメンバーだと大和のほうが長い付き合いのためどうしてもうまくなるからな。だからまゆまゆだ」

キャップ
「おもしろそうだから俺もやってみよ」

そして、大和もクリスもまゆっちを見始めていた。

まゆっち
「えっと、どのようなポーズを。私的には刀を構えた姿など」

クリス
「いや、普通にしていてくれ」

その言葉にまゆっち撃沈。しかし大和は

大和
「……」

黙々と書いていた。集中しているようだ、しかし大丈夫だろうか、一応見てはいるがなんせ

百代
「彰人～、今日のキスがまだだ！」

左腕に引っ付いて離れようとしない猫の相手もしていうるわけであるから、こっちもこっちで大変である。それから三十分。

大和
「よし、完成だ。（ちょいと思考が鈍ってきたか？）」

クリス
「わたしも出来たぞ」

両者が出来たようだ、そして最初はクリスからのものだった。

クリス
「一応、絵は下手ではないからな。」

そして見せるものは

岳人
「お、これは中々じゃねぇか」

モロ
「確かにうまいかもね」

確かにうまい。普通に書いたにしてはうまい。

まゆっち
「こんな美人に書いていただいてありがとうございます」

クリス
「そ、そんな美人なんて」

そして次は大和のものだ、それは

まゆっち
「この絵のわたし、みんなに囲まれてうれしそう。クリスさん、すみませんが」

クリス
「ああ、審査員がそう言うのなら」

百代

「第二回戦、勝者大和！！」

そう思えばキャップがいないな、と思っていると。

キャップ
「俺も暇で書いてみた、どうよ」

クリス
「な、なんだと！！」

大和
「写真、いや違う。絵！？」

そこには写真と言っても分からないであろうぐらいに再現されていたまゆっちの絵だった。てかキャップお前って凄すぎだろう。俺は感心しながらその絵を見ていた。

そして次に移った、次は大和が引く番だ。

大和
「今度こそ、頭脳系を」

百代
「しかし弟は少し芸人っぽいところがあるからな」

そして引いた、そのクジに俺は一瞬落胆した、それは

百代
「お、これか！流石だぞ、弟」

なぜか百代が喜んでいた、俺はそれを見ると

彰人
「な！？」

俺は驚くしかなかった、それは

百代
「さて、ここにありますわ何処かのお菓子、ポッケー。そしてそれを彰人、くわえてくれ」

俺はそしてポッケーのチョコレートのほうをくわえて、待っていると

百代
「そしてこれを徐々に食べていく。そして食べて行き、その時間を計る、それではそれを実践してみる、ちなみにキスまでいってしまった場合はそれを秒数に入れる。キャップ、数えてくれ」

キャップ
「しょうがねぇな。用意」

おい、ちょっと待て、それって。

キャップ
「ドン！！」

そして百代が徐々にこちらに来て、てか迅速に俺に近づき俺がポッケーを折れずに

百代

「れろ、ちゅぱ」

この音が何か分かるか、猛禽類にエサをやらないとこうなるのだ、諸君覚えていてくれ。そして

百代
「うん、満足だ」

キャップ
「えっとタイムは二分三十秒だ。それじゃあ、ってあれ、どうかしたのかお前ら」

えっと現在の状況を確認する、京は一子の目を隠す係りをしながらも俺達をガン見、モロと岳人は口アングリ。ちなみにまゆっちとクリスは顔を赤らめて顔を伏せていた、ちなみにキャップはストップウォッチを見たいたため知らず、そして兄弟から。

大和
「兄弟、ちゃんとしといてくれよ。」

彰人
「すまん、まさか百代がこんな事を考えているとは。だがお前もこんなクジを引くなよ。※印でこう書いてあるぞ、ちなみに相手を選ぶのは俺たちだとよ。それから百代」

百代
「ふにゃに?……私はすでに満足だ、彰人、さっさと終わらせて、続きがしたい」

彰人

「…えっとそれじゃあ、そこで私にしないと殺すぞと視線を送っている京に決定」

大和
「きょ、兄弟！！」

京
「うん、これは正当な結果だよ。」

大和
「う、裏切り者！！」

百代
「さあ、大和くわえろ。それではキャップ」

キャップ
「ＯＫだぜ」

京
「これでさっきみたいな、感じになったら責任物だもんね。」

クネクネしているがなんか大和はすでに負けたような感じになっている。

百代
「それでは用意、はじめ」

キャップ
「一」

そして驚愕的な速さで京は食べていき、すぐに大和は折った。タイムは

キャップ
「一秒だな」

百代
「ほい、弟のタイムは一秒だな。」

大和
「てか、なんだあの速さ。尋常じゃなかったぞ！」

クリス
「く、く、く。これも貰ったぞ大和、たった一秒か、楽勝だな」

百代
「それはどうかな、お前の相手は」

岳人
「この俺様だ！！さぁクリス」

そして何故か

モロ
「なんで脱ぐのさ！！ホントにただの変態だから！」

クリス
「う、う……うむ、い、いくぞ」

そして岳人がくわえているポッケーにクリスが

クリス
「やはり、無理だぁぁぁぁぁ！！」

そして岳人は吹き飛んで、川に落ちた。

岳人
「なぜだぁぁぁぁぁ」

そして見事に落ちがついたが。

百代
「しかし、クリスお前はゼロだからな。ポッケーもくわえていないもんな」

クリス
「くぅぅ」

凄く悔しそうにしていた、さて俺も反撃と行きますか。

彰人
「それじゃあちょっと休憩を挟むぞ。時間的には十五分くらいだ、丁度いい時間だからなだからな、いいな」

クリス
「了解です」

大和
「了解（助かるぜ、兄弟）」

そして俺は百代の首根っこを掴み。

百代
「あ、あれれ、どうかしたのか彰人？」

彰人
「いや～ちょいとさっきのキスはちょいと調子に乗りすぎじゃないか、百代？」

百代
「あ、い、いや。その、だって彰人が今日の分のキスをしてくれないから。それにだってだって途中で舌を入れてきても別に拒なかったじゃないか…」

彰人
「ふーん、それで。さて、百代丁度いいところに鎖があるじゃないか、どうだ俺らもチェーンデスマッチでもしようか？」

俺は蛇を百代に絡めて百代の頭を撫でていた。

百代
「……うぅ、えっとそれは何処で？」

彰人
「そうだな、ちょうどいい所に森がある。」

俺はそして百代の首に鎖をつける、ようはリード。

モロ・大和
「「あ……」」

京
「こ、これがご主人様プレイ！」

一子
「え、なにそれなにそれ！？けどああ言うのよく彰人の部屋に入ると、落ちているし、見るよ…」

一子の一言に岳人が復活し

岳人
「俺様復活「即時退却！！」ごふぁぁぁぁぁぁぁ！！」

そして俺は百代の鎖を引きながら森に入っていった。

百代
「あ、彰人、あ、い、いえ、ご、ご主人様。や、やめて…彰人ぉぉぉぉぉ」

彰人
「ふ、ふ、ふ。」

そして俺は森に入って行った。

Ｓｉｄｅ　大和

さて兄弟が姉さんを調教しに行ってしまったが、たぶん俺のためだろうな。現在はまだ大丈夫だがもう少しで倒れそうだった。

モロ

「大和、大丈夫？」

大和
「ああ、大丈夫だ。それにしても兄弟遅いな」

京
「あれは時間がかかると思うよ。だって調教でしょ」

モロ・大和
「「……」」

一子
「ちょうきょう？それってなに、特訓？」

京
「少し、あっちに行こうね」

一子
「？？」

そして京はワン子を連れて行きキャップは、なんか暇なのか岳人で釣りをしていた。そして兄弟が…笑顔で帰ってきた。そして姉さんは

百代
「あうぅぅ、こ、ごめんさないご主人様、あ、彰人様、じゃなくて彰人」

彰人
「まあ、あとでな。もう少し、お楽しみはまっていろ」

百代
「は～い♪」

すでに主従関係だった、一体なにがあったのかは俺が知りたいと思っていたがそれはやめよう。世間には知らなくていいことがある。

Ｓｉｄｅ　ｏｕｔ

さて百代とのお楽しみを終えて今日も元気に後半戦にいこうとしている。

彰人
「お、お前らそろそろいいか、こっちは大丈夫だが」

クリス
「ああ」

大和
「大丈夫だ」

彰人
「百代、クジ箱」

百代
「はい、ご主人様♪、じゃなかった、彰人。これだな、ほれ今度はクリスだな。」

クリス
「あ、ああ」

そしてクリスが取って渡したのクジの中身は

百代
「これか、それでは今度のお題は、百人一首だ」

三回戦にして大和の得意な百人一首。たしか俺の記憶では大和の奴は全ての詩を知っているはずだし、しかしクリスの顔を見るとあっちもあっちで日本好きらしいからもしかしたらもしかするかもしれん。

キャップ
「それじゃあ、これを並べるぞ」

そして河川に百人一首を並べた、さてこれより兄弟とクリスの第三戦の開始だ。

##第五十五話##（後書き）

次回、決着がつく。の巻き

現在学期末試験中。たぶん定期更新にもどるのは来週の月曜です。

それではバイバーイ

##第五十六話##（前書き）

最終戦の巻き

##第五十六話##

さて、第三戦が始まったが。これは

大和
「く……」

クリス
「ふん」

勝ち誇っているクリスと、悔しがっている大和の姿だった。簡単に説明すると百人一首の歌を覚えていればいるほど、この勝負は有利なのだがそれが両方ともとなるとこれは後は俊敏さだけだ。いつもならば大丈夫な大和、しかし今は違う。現在たぶん熱が出ていて大変だと思うが。

キャップ
「それでは四回戦はクリスの勝ちだ。まさか百人一首で大和が負けるなんてな」

クリス
「私も日本は大好きだからな。どうした直江大和、顔が赤いぞ、怒ったか？」

大和
「……（さすがに、そろそろきついな。頭がふらふらだ、もう言い返す力も無いとは。この顔だけで辛すぎる）」

俺はさすがにそろそろ種明かしの準備に入ったさすがに、そろそろ

大和の体力が、持たないだろう、だから俺は

彰人
「大和「も、もうだめです。松風行きますよ」え?

松風
「そうだ言ったれまゆっち!今のお前は坂道のぼりで自転車に登っているもんだ、止まったらこけちまうぞ、だからペダルをこげ」

一子
「え、まゆっちいきなりどうしたの!?」

まゆっち
「大和さんは熱が上がってきたんじゃなくて、もとから高熱で」

大和
「おい、まゆっち!」

まゆっち
「熱を薬で抑えていて戦っていたんです!」

大和
「まゆっち黙って、え、兄弟」

彰人
「今回はお前の負けだな」

まゆっち
「だってだってもう見てられませんよ。熱を無理して戦うのが友達なんですか?ち、違うと思います!友達ってもっとこう……とにか

くなんか違います！そのもっと、その大和さんとクリスさんが仲良くなれる…うう」

大和
「…おぉぉ」

クリス
「まゆっち」

まゆっち
「あ、わ、す、すいません。私のような新参者が」

百代
「いや、よく言ったぞまゆまゆ」

まゆっち
「え、え！？」

キャップ
「そうだぜ、言いたいことがあったらはっきり言わないとな。」

百代
「弟、薬で誤魔化していたな、そして夫、手伝ったな？」

彰人
「なに、弟に力を貸すのは兄として当然だ、まあ止めようとしたのは一緒だが、今回はまゆっちのほうが早かったがな」

一子
「もう、ったくさ、どうでもいいときはぎゃーぎゃー言うくせにこ

う言うときだけだんまりなんだもん」

大和
「だけど言ったら不戦敗だろ。それだけは嫌だったんだ。まゆっちは仲良くって言ったけどこれはクリスに俺を認めさせるための必要な戦いなんだ、だからこれは男の意地として引き下がれない」

岳人
「わかるぜ、男の意地だもんな」

百代
「ふ、ガキンチョだな。夫に似たかな？」

彰人
「男らしいじゃないか。大和だってそれぐらいの意地はあるさ。俺はそれに便乗しただけだ結局は途中から気力だけだったみたいだしな」

大和
「だけどまゆっちにここまで心配されてはな、確かに見ていていやだろうし……クリス提案だ」

クリス
「聞こう」

大和
「五回先取から、三回先取にしたい。丁度二対二だから…どうだ」

クリス
「いいだろう。それではお前の番だぞ」

そして俺はクジ箱を大和に渡した。そして引いたのは

大和
「山あり谷あり、それがどうしたステータスレース？なんだこれ」

彰人
「あ、それ当てたんだ兄弟。それは俺が作ったまともなレースだ。それではルール説明をする。まずのあの山のあそこからスタート、そしてこっちの河川敷に帰ってきたものの勝ち」

京
「大和、不利」

彰人
「安心しろ、そこら辺は俺が考えた、確かに降りてくれば勝ちなのだが問題はあの山々の間ようはああいうポイントにチェックポイントを設けたそこには雑学、文学、生物、物理、数学などのクイズがある、そしてそれに正解しサインボールを受け取りそれを持ってゴールしなければゴールにはならない。そして今回は特別にサポートとして一人助っ人を選べる」

そういうと俺は一枚のコインを出した。

百代
「まず、モロロ、まゆっちはポイントについてもらってキャップと彰人はここで待機、そして岳人と私はこのレースの審判、となるとそこで選べる助っ人は」

一子

「イェーイ」

京
「イェーイ」

彰人
「この二人になる、ちなみにゴールは助っ人がしてもＯＫだ。それではこのコインの表が一子、裏は京。それで投げるのは大和。」

京
「裏裏裏裏裏裏裏裏裏裏裏裏裏裏裏裏裏裏裏裏裏裏裏裏裏」

大和
「のろいをかけないでください。裏出すから……」

彰人
「兄弟、変な動きはするなよ、したら俺の蛇の餌食だからな」

大和
「なっ！？それならもう天まかせだ！」

そして大きく上がったコインは……表だった。

京
「サイテー」

大和
「しょうがないだろう、こういうのは運なんだから」

京

「ウワー言い訳とかカッコ悪」

大和
「あ～あ、すねちゃった」

一子
「よくわからないけど頑張ろうね」

そしてちょっとした休憩を挟むことにした、理由は大和の回復だ。
どこぞのモンスターのようにセンターに行けば瞬時に回復できればバンバンザイなんだがそうもいかず、今回は百代の川神流の回復のツボでどうにかするらしい、しかし

百代
「無理そうだったら無理やりでも止めるからな。これは決定事項だ」

大和
「わかっているよ、それじゃあワン子ちょっと来て」

そして作戦会議の時間に入ったらしい、ちなみに対戦側は

クリス
「京、もしや大和のために手抜きなどしないだろうな」

京
「クリスいい線いってる」

クリス
「だめではないか」

京
「けど大丈夫、今回は純粋な勝負だから手加減はしない。（それに大和が負けたら私がそのまま介抱するし）」

京の顔を見る限り違う方向に燃えてるのがわかった、さて俺らはというと

キャップ
「しかしこれで決まるわけか。ワクワクしてくるぜ」

モロ
「ワクワクの前に大和の心配しようね」

岳人
「大和。お前はやっぱし男だぜ」

モロ・彰人
「「あんた（お前）のせいだろうが！！」」

百代
「しかし、あんな状態でよく薬だけでもったものだ……まさか彰人」

彰人
「あん、なんか呼んだか百代？」

百代
「いや、なんでもない（そんなはずがない、これは川神流の業、そんなことを簡単に真似するなぞ出来ないはず）」

キャップ

「それじゃあ、両者いいか？」

大和
「ＯＫだ」

クリス
「問題ない」

キャップ
「それじゃあ用意……どん！！」

キャップの言葉に一斉にスタート、どは行かなかった、まあ簡単に言えば大和は走らず普通に歩いていった。たぶんさっきの作戦会議中に一子に聞いたのだろう、一子は今日の朝も山を走っているし、近道を利用したのだろう。そして俺は蛇を使って色んなとこを見ていた、その一つ、まずは最初のこれ

モロ
「あ、ワン子が最初だね。それじゃあどれにする」

一子
「うーんよくわからないけど物理！」

モロ
「光の収束は「日本語で話してぇ～」じゃあなんで物理なんて選んだよ！！」

うん、一子もう少し勉強しような。しかしさすがに一子のほうが早いか、しかしこれでなは、そうこうのうちにクリスも到着、そして

モロ
「えっとそれじゃあなににする？」

クリス
「もちろん日本史だ！」

モロ
「それでは江戸幕府第八代将軍徳川吉宗は何将軍といわれた？」

クリス
「そんなの決まっている、暴れん坊将軍」

モロ
「はい、間違いね」

クリス
「な、なに！？」

うん、アホが居た。そして京もこちらに来たようだ、しかし大和は、その時おもむろに一子の携帯がなった。

大和
「それで、問題は？」

一子
「光のしゅう「なんで物理を選んだ、アホ！！」ううん、ごめんなさい……」

大和
「もう少しでそっちに着くから、それでクリスたちは？」

一子
「居るみたいだけど、一問間違えた。」

そして大和も合流、そして次の問題。

モロ
「それじゃあ次は「雑学」、うん了解。えっと包丁の切れ味が悪くなったときはどうするのがいい？」

大和
「火に通し鉄の酸化部分を無くす」

モロ
「うん、さすが大和。それじゃあこのサインボール」

そして、ああそう言うことか、しかしこれは賭けだな大和。そして京も時間になって正解、しかしその時

一子
「あれ、クリは？」

京
「こういう事」

そして京はおもいっきし国道に投げた、そしてそれを下でキャッチしたのは居たであろうクリス。

一子
「げっ！！これは急がなきゃ！」

そして一子はダッシュをかける、そして大和も作戦を始める、さて天はどちらに味方するかね。そしてそれから、一子がこけてしまい、それをクリスが確認し、少しスピードが緩んだ、お、これはそして場所が戻りチェックポイント

京
「あ、あれ、大和？」

モロ
「あはは、京にしては気付くのが遅かったね」

やっと大和が居ないことに気付く、そして大和はすでに川にダイブしてすでにした、さて後は両者の根性が。そして今おれらが居る河川敷。そして山を降りてきたのは

キャップ
「クリス、ここだ！」

そしてさらに後ろの川から

彰人
「兄弟、こっちだぞ！」

俺の言葉にその場に居た二人そしてクリスが驚いていた、それもそうだろう誰が川に飛び込む馬鹿がいるか。そしてそれに気付いた栗栖がダッシュをかけるしかしそれは遅く、大和はそのままキャップに抱きついた。

キャップ

「げっ、お前びしょびしょじゃねぇか！！」

百代
「しかし、そのまま持っとけよ。それでは彰人、勝敗は」

彰人
「それでは最終ゲームは大和、お前の勝ちだ。」

そしてクリスと大和の決闘は幕を閉じた。

##第五十六話##（後書き）

余震が続き、しかも停電の噂。更新が遅くなりましたすいません

##第五十七話## （前書き）

マジコイSのキャラの声が聞きたい！！

##第五十七話##

さて決着がついたのだがしかし、全員が来る前に俺は大和に

彰人
「はいはい、兄弟。寝てようね」

大和
「は、ぐいぢは！」

俺はやさしく大和を気絶させると、そこに全員が集合した、てかまゆっちのチェックポイント意味がなかったな…まあドンマイだが。

京
「や、大和！？」

河川敷で完全に伸びている大和に京はそのままそばにより

彰人
「安心しろ、京。こいつの体力は結構限界だったからそのまま寝かせてやったんだ。まあやり方は強引だったが」

クリス
「く、私が負けるなんて…しかしサインボールは犬が…」

彰人
「まあ種明かしは俺からするとしよう、その前に一ついいかクリス？」

クリス
「はい、なんでしょうか…」

彰人
「うちの兄弟は強いだろ?」

クリス
「……はい、認めざる終えません」

彰人
「そうか、それじゃあ種明かしといこう。ちなみにモロはわかっているだろう?」

モロ
「うん、一応見てたしね」

彰人
「それじゃあ種明かしといくか、その前にみんなご苦労さん。それじゃあまず、チェックポイントに全員がついて、そしてクリスがさきに山を降り始めたな」

クリス
「ああ、そして京が問題をとき私が下のところでサインボールを受け取る、そしてそれに気付いた大和たちが慌ててそしてあの犬が、走ってそして」

百代
「こけた…はいはい、妹よ。染みるぞ~」

百代は現在盛大にこけた一子の面倒をみているのだが。

一子
「い、痛い、痛い！！けど、が、がまん……」

岳人
「なんか、これ聞いているとエロいよな」

百代・彰人
「「アホ！！」」

ＮＡＳＡの報告により星が一つ増えました。

彰人
「ごほん、ごほん。それではまずはそこで一つ問題があるぞクリス、まず慌ててきたのは一子だ。しかしサインボールを持っていたのは大和だった」

クリス
「そうか、しかし。どうやって来るんだ？大和は山から降りてきていない……まさか！」

彰人
「まあ、こんなダウン状態でも頭は動いたらしいぞ。なんて言ったってこんな状態になった原因のはずの川にもう一度おちるんだからな。そしてクリス後はお前の心だな」

クリス
「私の心…」

彰人

「そうだ、お前一子がこけたから少し気を緩ましただろ。それが今回の敗因だ、そのまま本気で行っていれば勝っていたものを」

モロ
「そろそろ、旅館に戻ろうよ。さすがにこのままの大和じゃ不味いでしょ」

モロがそう言うとその場はそれで終了、俺はさきに大和を運ぶために大和をおんぶして山をかけて行った。

Ｓｉｄｅ　大和

大和
「あ、あうぅぅ」

俺は目が覚めるとそこには京がいた、周りを確認するとそこは旅館の部屋でしかもみんな談笑していた。

京
「あ、起きたんだね。大丈夫？」

大和
「あ、ああまだ頭がボーっとしているみたいだ。」

京
「うん、薬貰ってきてるから」

そして目の前で薬が京の口の中に入った。

大和

「それでどうやって俺が薬を飲めと」

京
「口移し」

大和
「嘘付け、本物はその手に握ってあるやつだろう」

京
「ちっ見抜かれたか」

そして薬を飲む、そして俺のことに兄弟が気付いた。

彰人
「お、気付いたか兄弟、ほらクリス言うことがあるだろう？」

クリス
「う、あ、ああ」

そして緊張の面持ちでこっちに来た、俺は起き上がろうとしたが

クリス
「ム、無理はするな。そのままでいい」

クリスがそういうので俺はその言葉に甘えてそのまま膝枕の体勢でいることにした。

クリス
「お前の男の意地を魅してもらった、確かにお前は男だった。そしてその私は負けた、だから認めるというのも変だが認める！」

彰人
「つう事だ。あ、ちなみにお前の作戦は俺が全部言っといたから」

大和
「あはは、兄弟には丸見えかよ…」

彰人
「よく言うだろう、おか目八目ってな」

百代
「う～彰人は私の相手をしてろ～」

そしていつもと同じくこのバカップルは眼に毒だ、しかしみんな携帯を出しているのはまあアドレス交換のためだろう。

クリス
「よし、今から赤外線でおくるぞ」

百代
「よしこっちはきたぞ」

一子
「こっちも着たわね」

モロ
「僕にも大丈夫だよ」

岳人
「あれ、俺様こねぇぞ。」

クリス
「なに？ならもう一度」

キャップ
「お、俺のところにも来たな」

岳人
「こねぇ」

クリス
「ならば、送らなくてもよいか。」

岳人
「おい、俺様だけハブかよ。これだから女は怖いぜ、いっそのこと男にでも」

モロ
「うわぁぁぁ。クリス、岳人が変な方向に暴走する前にお願いだから送って」

クリス
「送信！」

岳人
「お、キタキタキタキタキター！！やっぱり女が一番だね」

まゆっち
「松風、赤外線とはなんでしょう？」

松風
「おい、まゆっちそれマジで言ってるのかよ、よくそれで女子高生なんてＪＯＹできているな」

まゆっち
「しょぼんです～」

彰人
「そう思えば、まゆっちって携帯ないんだよな。」

まゆっち
「う、あ、はい」

彰人
「俺もないんだよな、だから今度一緒に行かないか、携帯ショップ」

まゆっち
「へ？」

彰人
「まあ、大体俺も携帯ショップがどこにあるか分からないから、こいつら連れて行くんだけどな」

一子
「うんうん、まゆっちも一緒に買いに行きましょうよ。結構安いところ知っているし」

モロ
「うん、電話料さえ気にしていれば大丈夫だから」

キャップ
「それにいつでも連絡できないと色々と困るしよ」

まゆっち
「あ、あ、み、皆さん。う、うれしいです。ありがとうございます」

モロ
「これで、やっと松風もストラップとして役に立つね」

彰人
「モロ、今話しかけても無駄だって」

モロ
「え、なんで？」

そして兄弟が指を指す方向にはすでにお花畑の空間にいるまゆっちだった。

まゆっち
「あはは、私にも青い春がきました～」

百代
「確かに本体がこれじゃあ無理だな」

そして全員で笑う、なんだかホントみんな仲良くなってきている、これで本格的に仲間入りだな。

キャップ
「よーし、あとは二人に川神魂を授けるだけか」

クリス
「川神魂？」

百代
「こういう詩がある。」

百代
「光灯る街に背を向け、我が歩むは果て無き荒野。奇跡もなく標もなく、ただ夜が広がるのみ。揺るぎ無い意思を糧にして、闇の旅を進んでいく」

百代
「これが川神魂だ。」

岳人
「あえて荒野を選ぶ男の詩だぜ」

一子
「女の子の私でもわかるわよ……長いけど」

キャップ
「一言で言えば勇往邁進だ」

クリス
「勇往…邁進」

彰人
「どんな困難でも向かっていく、正に不屈の心だ」

クリス

「いい言葉だな。」

百代
「辛い時はこれを思え出せ。どんなに辛くても同じたびをする仲間が居る事を思い出せばいい。」

彰人
「まあ大体これぐらいだよね、あ、もう一つ俺は思い出したがな」

キャップ
「はぁ～!?もう一つだと、俺はしらねぇぞ」

彰人
「まあ俺ら兄弟の詩があってな。懐かしい、なあ兄弟」

大和
「く、変な事を…」

彰人
「そうか、俺は凄く好きなんだがな、あの詩」

まゆっち
「なんですかそれは?」

クリス
「ああ、きになるな、どういうのだ」

百代
「そうだそうだ、私も気になるぞ～」

彰人
「こういう詩がある」

彰人
「我ら、諸葛孔明の扇なり。一枚ならば羽ばたくことは出来なくとも、二枚あればそれは空をも行ける翼となる。もう一度言う我ら、諸葛孔明の奥義なり」

彰人
「こんなのがあるんだよ。」

まゆっち
「あのう、諸葛孔明って確か中国の三国志時代の劉備率いる蜀軍の軍師ですよね」

彰人
「おお、まゆっちいいところに気付いたな。ならば分かるだろうが諸葛亮の扇てのは羽なんだ、羽、鳥とかについているあの羽な。だけど扇ってのは基本一つだろう、だけどそれが二枚あれば羽としてちゃんと効果発揮する。だから」

クリス
「空をも行ける、なるほど。これもその川神魂のような詩人が作ったのですか？」

彰人
「いや、これを作ったのは中一前の小学校六年生だ」

まゆっち
「うわぁ、それって凄いですね」

モロ
「あれ、その時期って確か…」

そしてモロが俺を見た、みるな、俺を見るな。

百代
「ああ。そう思えばそんなこと言っていたニヒルが居たな。そうだそうだ」

そして姉さんも俺を見始める、そしてその視線に全員が気付きそしてクリスこう言った

クリス
「まさか、この詩は大和が?」

彰人
「大正解」

その時の兄弟の顔は悪魔よりも凶悪な天使の顔だった。

彰人
「それはおいおいと教えることにして、兄弟も起きたし京もきたし乾杯しようぜ」

モロ
「いいね、それじゃあみんな飲み物ね」

百代
「彰人、はい、コーラ♪」

彰人
「いい子だな、百代はピーチだしな」

バカップルはこんなんだし、そして全員に飲み物がいきわたり、そしてキャップが

キャップ
「えっとそれでは、若葉変わり始め」

一子
「なによそれ、堅苦しい！！」

岳人
「てめぇ、は小学校の校長か！」

キャップ
「ああ、もう。わかったわかった、それじゃあ楽しもうぜ！」

全員
『カンパーイ！！』

そして新生風間ファミリーの誕生である。

##第五十七話##（後書き）

やっと箱根が終わる……何話構成だったんだろう、当初…

##第五十八話##（前書き）

観光の巻き

##第五十八話##

そして大和も回復しだしたので午後はちゃんと箱根の観光スポットに行く事になった。最初は遊覧船での船の旅。俺は百代ともに外にいた。

百代
「う～ん、気持ちいいな。さすがは私の彼氏の腕」

彰人
「普通、こういう場合は風が気持いいとかさ、景色が綺麗だとか」

百代
「彰人がかっこいい」

彰人
「はぁ。際ですか、しかしいいな、こう言う旅行もさ。」

百代
「う～んやはりいちゃいちゃが少ないのはいけないとお姉さんは思うぞ。まあ今までの移動は全て腕を絡んでいるからあんましストレスはないがな」

彰人
「そうか、それで衝動のほうはどうなんだ？」

百代
「う～ん、最近は彰人と勝負しているから全然無いな。それに本気で行っていて勝てる気がしないという状態だしな、うんうんうちの

彼氏は最強だ。まあ私もいつかは追いついてやるがな」

彰人
「楽しみに待つとすると、それじゃあそろそろ下に降りるぞ。どうせキャップたちが居るだろうし」

百代
「そうだな、ん？なんか船止まってないか？」

そしてこんな声が聞こえてきた

観光客（男）
「なんで止まったんだ？」

観光客（女）
「なんでもバンダナつけていた子が落ちたみたいよ」

……っておい

彰人
「あの馬鹿」

百代
「なあ彰人、もう少しいちゃいちゃしていないか」

彰人
「賛成だ、向こうの岸に着くまでそうしていることに今俺が決定した。と言うわけだ百代」

百代

「あ～、私は彼氏に駄目にされてしまうタイプのようだ。彰人～」

彰人
「なに、駄目になったら叩きなおしてやるさ」

百代
「そうだな、そうしてくれ。しかし次の行く場所ってのはどこなんだ？」

彰人
「関所だな、クリスを大和が行きたいと言っていたところだな。そして次が東照宮らしいぞ」

百代
「東照宮ってあの、徳川の墓か」

彰人
「ああ、あそこは徳川の墓で確か家康の霊を…百代？」

百代
「うう、いやだ、霊、嫌だ」

あ、しまったそう思えば百代って幽霊が弱点の女の子の典型例だった、しかも力が強くから尚更悪い、まあ大体は岳人が吹き飛んで終わりだが

彰人
「はいはい、大丈夫だからその時は俺がちゃんと百代の肩を抱えてやっから。な？」

百代
「うう、絶対だぞ。その霊とか出てきたら、私はお前に抱きついていいうれば安心とそんな感じじゃないと怒るからな」

彰人
「ああ、もし俺の攻撃が当たればな」

百代
「あ、彰人～」

彰人
「ぷっ、大丈夫だよ。大体昼に行くんだぞ夜じゃあるまいし」

百代
「あ、彰人！！」

彰人
「ちょ、あ、抱きついてジタバタするな！」

そんな感じで俺らは向こうの岸に着いた。そして全員で船を下りるとそこに見知った顔の人間がいた。

乙女
「だからなレオ。」

レオ
「わかってるよ乙女さん。うん乙女さんどうかしたの、船なんか見て？」

百代

「お、乙女さんか？」

そうそこには四天王の一人である鉄乙女が男のヒトと話しながらいた。そしてその後ろにはその男との人の友達であろうヒトが三人居た。

乙女
「おお、川神の。久しいな、そして御剣か。これは二人してどうかしたのか？」

彰人
「いやぁ、乙女さんが居るとは以外ですね。俺らは旅行ですよ」

乙女
「なんだそうなのか、あ、レオ。紹介しよう、彼女は川神百代だ、私と同じ四天王の一人だ」

レオ
「げ！この人もかよ、それでこの人は？」

百代
「私の夫だ」

彰人
「彼氏だ、まったく。初めまして、御剣彰人って言います」

レオ
「あ、ああすまん、こっちも名乗らずに。えっと対馬レオです、その俺も乙女さんの「夫だ」いや、その言ってくれるのはうれしいんだが」

乙女
「ふん、レオ言っておくがこの男は私でも勝てない奴だからな。」

レオ
「はい！？」

目の前に男…対馬さんは驚いている、たぶんこの人乙女さんの本気を知っているヒトだ。

大和
「お～い、兄弟、そろそろ行くぞ。キャップも救出したし」

後ろからずぶ濡れのキャップと他のファミリーが居た。

彰人
「それじゃあ、乙女さん、対馬さん。」

レオ
「ああ、今度は男同士で話がしたいね。」

そして徐に対馬さんは俺にちょいちょいとやり、そして耳打ちで

レオ
「どうも、彼女の扱い方が難しくてな。君は高校生だろう、俺は大学生なのだが…今度、ホント教えてくれ。あ、それと俺のことはレオで良いから、それじゃあな」

彰人
「ええ、それじゃあまた次回レオさん。それじゃあこれが番号です

から、たぶん俺もそこまでですが」

レオ
「同じ、四天王の彼女もちと言うことで」

カニ
「おい、シスコン！早くしないと船出ちまうぞ」

そして後ろからセの低い子がいっていたたぶんレオさんの連れなのだろう。

乙女
「ふん、私のレオのほうがかっこいいに決まっているだろう」

百代
「それこそ、どうだかな。私の彰人のほうが数倍かっこいい！」

レオ
「いつのまにか」

彰人
「混沌（カオス）になっていなたな。それではこれでレオさん。行くよ百代」

百代
「だから、うん、あ、ああ。それではな乙女さん」

乙女
「ふん、今度はこっちのことでも決着をつけないといけないようだな。それではな川神、御剣」

そして俺らは大和達と合流。

大和
「なんだったんだ、知り合いか？」

彰人
「まあな、たぶんお前も名前ぐらいは知っているさ」

キャップ
「それにしてもさっきの人たち、五人組で大学生ぐらいか、仲いい奴ってのは他にもいるんだな」

そんな感じで俺らは最初の関所を目指した。そして到着したのだが、なんと言うか

京
「ね、大和。これってどういうところ」

クリス
「よいかまゆっち、ここは……」

岳人
「おい、モロ。あの姉ちゃんいけそうじゃねぇか」

モロ
「だから岳人！」

キャップ
「あはは、ここ、すげぇな。こんなデカイモンどうするんだよ」

こんな状態、たぶんまともに観光をしているのはクリスとまゆっち、さらに大和と京。それと……

百代
「彰人～」

彰人
「わかったから、さっきのは謝るからそうやって外でも甘えるのを辞めろー！！」

そして続いては日光東照宮。

一子
「ここって修行にうってつけだわ。クリ勝負よ、どっちが早く登れるか勝負よ」

クリス
「いいだろう、しかしその怪我で大丈夫か」

一子
「なめないでよね、それじゃあ行くわよ。用意ドン！」

クリス
「な、卑怯だぞ犬。待てぇぇ」

彰人
「人にぶつかるなよ」

大和
「兄弟、注意する前に止めてくれ。普通に恥ずかしいから。」

岳人
「あれでよくパンツが見えないものだ」

モロ
「普通に上を向いてみようとしないの！」

京
「そういうモロも意外と見ている？」

モロ
「うっ／／／／」

まゆっち
「これが東照宮ですか～、凄く大きいですね」

松風
「まゆっち、ここの歴史はおら嫌いだ」

まゆっち
「こ、こら松風。自分のご主人様が負けてそれでこの人が天下を取ったからってそういうことは言ってはいけません」

彰人
「広、てかこれが墓かよ、な、百代。普通に神社……」

百代
「ゆ、幽霊は居ないようだな、な。だ、だい、大丈夫だ、、だだ。」

彰人

「はいはい、行きましょうね。」

俺は百代の震えている肩を抱いて階段を上がることにした。

それから、数時間が経ちそしてもう帰る時間。ちなみに今はバス待ちのために待っているのだが、ちなみにバスは後十分後らしい。

モロ
「普通に歩けばピッタシだったよね、普通にだけど」

京
「途中でなんで走ったの私達」

大和
「するかよ、てかこの状態恥ずかしい」

ちなみに大和は病み上がりのため、京が抱っこしている。ちなみにその時は

大和
「な、なぜお前は俺の腕を自分の胸につけようとする！」

京
「や、だ、だめだよ大和こんなところで」

大和
「がぁぁぁぁぁ！！」

以上。そして俺らは待っているとそこに、占いやであろう店があった。

占い師
「もし、その輝きのお方」

岳人
「あ、俺か」

占い師
「いえ、あなたです」

キャップ
「あ、俺か」

占い師
「おお、素晴らしい相のお持ちの方だ。それに似合う豪運の持ち主だ」

キャップ
「お、いい事いうじゃねぇか。だけどそれで金でもとろうってか？」

占い師
「ほほ、占いで食べ居ますからね。当然です」

彰人
「おもしろそうじゃん。それじゃあ全員分頼むよ」

そして俺は樋口一葉を渡した。

占い師
「それでは」

そして次々に結果が言われいく、モロの場合

占い師
「あなた、信念を貫ければ輝かしい未来がありますぞい」

モロ
「信念ですか」

岳人は

占い師
「うむ、あなたは普通ですね」

岳人
「なんだよ、それぇ。まあいいか俺様はその普通が異常なんだろうからな」

そしてさっき豪運と呼ばれたキャップは

占い師
「あなたは風のようなお人だそんな人に私の占いは無意味でしょう」

キャップ
「おお、よく分かっているじゃないか。」

そして次はクリス

占い師
「うむ、正義のカードが出ている。しかし次のカードは……そうじ

ゃのう、お主は自分の信念を貫く故に人を傷つけるかもしれん、注意ですな」

クリス
「う、うむ」

うん。この人確かに腕があるぞ、そして次はまゆっち、まあ無難な結果だった。

松風
「おいおい、おらっちが」

そして次は「お～い」一子

占い師
「お主は……夢を諦めずにいくのじゃぞ、どんな辛いことがあろうとも」

一子
「はい！」

そして次は京

占い師
「お主は……違う世界での苦労はないが別の苦労とは、しかし頑張りなさい」

京
「？」

よくわからない事をいい、そして次は大和

占い師
「なるほど、お主はこの世界の中心……うむお主も輝かしい未来ですぞ」

そして次は俺の嫁

百代
「すまん、私は未来よりも今の彼氏との未来が知りたい」

占い師
「ほ、ほ、ほ。それでは普通に未来を占うのと同じですぞ、今出てきたカードは帝に女帝。これはあなたたちのその未来、力のあるものとさらに力のあるものが支えあう。そしてもう一枚のこのカードは…お主は愛するものをそのまま信じていけばよいぞ」

百代
「なにを当たり前のことを。私は彰人を信じないときはそれは彰人が死んだときのみだ、それこそ信じない！」

そして最後は俺、そして俺は一枚目のカードは

占い師
「ほほう、天使の腕ですか、これはあなたの本質の性格ですね、それでは今度はあなたが思っていることを」

そして俺は一枚カード引くと

占い師

「ほう、な！！じゃ、邪眼の王…なぜこのカードが……あ、あなた」

彰人

「邪眼の王か、まあ当たっているだろうさ。それは本質から欠落した、まさにあなたの結果の通りさ。それで俺の未来は」

占い師

「……このお金は帰させて頂きます。」

そう言ってその占い師は俺が渡した五千円を返した

##第五十八話##（後書き）

次回、どうしよう……

##第五十九話##（前書き）

後半のほうで……

##第五十九話##

そして俺の前にお金を返した占いの老人。

彰人
「いいんですか？」

占い師
「さっきも言ったように私は占いで食べておりますがあなたの未来が見えないのです……まるで神がそれを拒んでいるように」

彰人
「あらら、そうなのか」

占い師
「この組み合わせも私がこの四十年で始めてみたものですし。今回のお金は要りません、それにちょうどバスが来たようですから」

彰人
「あ、そうですか。それでは失礼します」

モロ
「彰人、いかないと」

彰人
「あ、ああ」

そして俺はその占い師と別れてバスに乗った。

Ｓｉｄｅ　占い師

占い師
「行ってしまったか。」

私はさっきあの青年が引いたカードをもう一度見る。

占い師
「あなたがこのカード引くのは当然ですな、なんせ蛇を纏っておる人などそうそういないものですからな。そしてこのカード」

本当のことを言えば私は彼の未来が見えていた、しかしこれは正に神のみぞ知る世界、そのカードは

「神」

初めて、人の未来を占ってみて私のタロットで初めて出たカード。
そして私はまた席に着く、そしてバスが行ってから数分後ある青年がそこを通った。

？？？

「あ～あ、バス行っちまったか」

占い師
「もし、お暇なら占いでもどうですか」

私はいつものように声をかける、そして

？？？

「そうだな、暇つぶしにいいかもしれん。それじゃあ俺の本質でも

占ってくれないか、爺さん」

占い師
「はい、それではこのタロットをお引きください。」

そして私がシャッフルし、タロットカードの山を近づけたら、その時

“ビリッ”

静電気が走った。

占い師
「これは失礼を」

???
「気にしないさ」

そして彼が引いたカード、それは

占い師
「これは運命かも知れませんな」

そのカードは、雷帝。

???
「そうだな、これも運命かもしれないな。おっとバスが来たようだ、それじゃあな爺さん」

そして彼はバスに乗っていった、しかしそれはバス停に存在しない時間帯のバスだったのを誰も知らない。

Ｓｉｄｅ　ｏｕｔ

俺らはそのあと、新幹線に乗り現在川神駅に到着。ちなみに一子は俺の背中の上にいる理由は

一子
「Ｚｚｚ」

ようは寝ている、行きにキャップが子供と言っていたが対外こいつも子供である。しかし他のみんなは起きていた。

キャップ
「やっぱし旅はいいな～」

大和
「ああ、色々あったがいいもんだったな。」

百代
「いやぁ～もうなんでもいい」

え～百代がこうなった理由は俺にあるのだが、帰ったら今までの足りない分の彰人成分（百代には必要不可欠）を補給してやる、ようは甘えていいぞ許可を出したらこうなった。まあ悪くはないのでいいのだが。

岳人
「そう思えばよ、まゆっちの携帯も買わないとな」

まゆっち

「あ、覚えてくださったんですね」

モロ
「あ、そうだよ。あと一日あるんだし、明日はそうしようよ。それと……そこの夫婦さんの彰人もさ」

彰人
「ああ、そうだな。そろそろ振り込んであるだろうし、ああそれじゃあまた明日の予定も決定だな。ま、この寝ている犬は朝にでも言っとくさ」

そう言いながら俺はおんぶの位置を直す。

キャップ
「お、いいじゃなぇかそれ。それじゃあ、明日の午後場所はいつもの寮前で一番遅いやつはその時の罰ゲームだ。時間はそうだな、軍師大和、どうする？」

大和
「そうだな。旅行の疲れを取る事も考えて、午後二時だろう一応携帯だけだしな。」

そんなこんなで、寮前である。その前にモロは別れてそして後は俺らの川神院の集団だけである。

百代
「♪～♪。今回は楽しかったな、門下生にも土産も買ったことだしな。うん、あそこにいるのは？」

そう、川神院の門の前にいる人影、それは

彰人
「なにやっているんだ、小十郎、それと揚羽さん？」

そこには、久しぶりに見る、この二人だった。昔はよく遊んだのだが、すでに揚羽さんはあの九鬼の代表、そしてその執事の小十郎。

揚羽
「久しぶりだな、川神の。まあ今日はお前でない、我が来た理由は一つだ」

そしてアタッシュケースを小十郎が持っていたものを揚羽さんが持ち、そしてそれを俺に差し出した。

彰人
「あれ、揚羽さん、これなに？」

揚羽
「うむ？小十郎、説明しろ」

小十郎
「はい、揚羽様。彰人殿、この前の依頼の謝礼がまだでございましたので、今日お持ちに来ました次第であります」

彰人
「けど、帝さんからはすでに振り込みはあったぞ。さっき箱根から帰ってくる前に銀行で確認したらちゃんと入っていたし」

揚羽
「フハハハハハハ、御剣の。それは依頼金である。謝礼金はこれだ

ぞ」

はい？依頼金であの額でしかもさらに謝礼金だと……どういうことだ普通に億だったぞ、おいおい

彰人
「あ、揚羽さん、さすがにこれは貰いすぎですよ。」

揚羽
「なにを申す。お主を依頼するぐらいだそれぐらいは当然だ。それに今回は事件で我が弟も大変世話になったと聞く。ならだこれは姉からの弟を守ってくれた礼だと思ってくれ」

彰人
「いや、ですが」

百代
「貰っておけ、彰人。揚羽さんがこういう人だと言うのはお前だって知っているだろう。しかしこれは例のあれか、お前がボディガードした際の」

彰人
「ああ、一応な。そのとき初めて帝さん、ようは揚羽さんと英雄のお父さんと話したけど。それで俺の口座に振込みで頼んどいたんだけど」

揚羽
「なに、我が父上は多忙なのでな。それを含めわれが届けにきたと言うわけだ。一応この中に依頼金の三倍が今回の謝礼だ。」

彰人
「さ、三倍!?」

揚羽
「なんだ、足りなかったか?」

彰人
「あ、いえ。十分ですから、おい、百代。」

百代
「なんだ?」

彰人
「旅行は二人で外国に決定だ。」

揚羽
「そう思えばお主らは恋仲だったな。しかし現在見る限り兄弟だぞ」

まあ確かに状況的に俺は未だに一子を担いでいるからな

小十郎
「いえ、どうみもカップルにしか」

揚羽
「ええい、黙らんか!この小十郎が」

小十郎
「揚羽様ぁぁぁぁぁぁぁぁぁっ!!」

岳人のように吹き飛んでいく小十郎、相変わらず弱いらしい。

揚羽
「うむ、それでは我も帰るとしよう。もしまた御剣を頼るかもしれん、その時は頼むぞ」

彰人
「その時は無料でしますよ。あ、それからその時はこいつも居ると思ってください」

俺はそして百代を指す

揚羽
「フハハハハハハ。それでは世界征服が出来てしまうな、それではな川神の、それと御剣」

そう言うと揚羽さんは小十郎を背負って帰ってった。

百代
「海外旅行か……しかしなぜ急に、彰人？」

彰人
「あの一家の金銭感覚は可笑しすぎる。今回の依頼金だけで億だぞ、それにその金額の三倍って赤い角有りもビックリだ」

百代
「億……あ、彰人そんな危険だったのか？」

彰人
「いや、全然。」

百代
「そうか、それよりもそれなら旅行の計画を立てないとな」

彰人
「え、今日から?行くのはたぶん夏休みだぞ」

百代
「なにをいうそういうのは今からがいいんだ。ほら行くぞ」

彰人
「はあ～わかったよ。よいしょっと待てよ百代」

そして俺らは川神院に戻った。

Ｓｉｄｅ　冬馬

やはりこのデータも消去されている、こっちもさらにこっちも

準
「若、こっちも駄目だった。危うくリンチだったぜ」

冬馬
「そうですか、ユキは?」

準
「ああ、ユキならさっき俺と一緒に居た時にちょいと怪我をしちまってな、今自分で絆創膏張っている。すまないな若、ユキ一人すら守れない。」

冬馬

「準、それを言ってしまったら僕の立場がありません。それにそろそろ頃合でしょうから、動きがありそうです」

準
「な、馬鹿な。若、そろそろ本気で親父達を止めないと不味いだろ。」

冬馬
「ええ、本当に不味いです。しかもこの川神の治安を不安定に逆させている、これを見てください準」

そしてパソコンのディスプレイに出ているその顔は

準
「これは、板垣？」

冬馬
「そうです、なんでもこの師と言うのが問題らしいです、政府の“役人”だとか。そしてこの板垣姉妹がいいように治安を悪くしているのが現状のようですね」

準
「ここまで分かっていながら、なにもできないなんて」

冬馬
「元を一掃しなければ……」

準
「ちっ、まだ動けないのかよ。俺たちは」

冬馬
「まだ、動きがないのですから。逆にこちら危険にはしたくありません。」

準
「だけどよ、今裏で回ってる薬（モノ）は不味いだろう。若が教えてくれた資料だと普通の純度が六倍」

冬馬
「ええ、ですから確実にしないといけないのです。たとえ自分の肉親であろうとも」

準
「若」

小雪
「うぅ、痛かったよトーマ」

そして部屋に入ってきたのはユキだった。

冬馬
「苦労様です、ユキ。すいませんねこんな危険な目に」

小雪
「うんうん、大丈夫だよ。」

そして私はまた、証拠集めのための資料を見始めた。

##第五十九話##（後書き）

さぁ、これからが私のオリジナル展開……になったらどれだけいいか。はぁ～

##第六十話## （前書き）

甘いお話は好きですか？

##第六十話##

旅行から帰ってきて次の朝である、今日は確か鉄爺との組み手が入っている。そのため今日は早く起きたいしかしこの人はそれを許すだろうか。

彰人
「百代、おきてくれ。そして服を着てくれ、朝から刺激が強い。」

百代
「う～ん、もう三十分、抱かせろ～」

彰人
「普通寝かせろ、なんだがな。すまんがほら、起きろ～。今日は午後から携帯を買いに行かないといけなんだから。それに今日俺は鉄爺を組み手だから、な。ほら起きろ」

百代
「う～ん、起きるとキスがあるが、この眠気もつらい、しかし彰人のいない布団に意味はないから、起きる？」

そして徐々に百代の頭をおきてきたらしく

百代
「ふわぁ～おはよう彰人、それからキスをくれ」

彰人
「はいはい」

そして朝のキスをする、ちなみに旅行中はしなかったが、京あたりからこんな鋭い突っ込みがあったな「お目覚めのキスの時間、ほしい？」これを聞いて百代が喜んでいたがさすがにそれは俺が恥ずかしいので却下した。

百代
「よし！今日も頑張るか、それじゃあ彰人、着替えて」

彰人
「まずは朝食をとるよ。それからだな今日のメニューは」

百代
「は～い」

そして飯を食べ終わり、鉄爺との組み手だ

鉄心
「どうじゃ、最近は？」

彰人
「う～ん、百代のほうの衝動は沈静化されてきていたよ、それに俺に勝ちたいという純粋に近い闘志だしな。それになんか百代が丸くなったって結構修行僧から聞くんだけど」

鉄心
「そうじゃな、よい方向にはむかっておるぞい、そりゃぁぁぁっ！」

彰人
「いきなり、技を決めてくるんじゃねぇよ、スネークバイト！！」

そして俺の腕と鉄爺の拳が交差し、そして

鉄心
「今日はここまでじゃな」

彰人
「そうだね、ありがとう鉄爺」

鉄心
「彰人よ、もう一度川神院に「鉄爺」、う、うむ」

彰人
「それは過ぎた話だよ、それにもう俺は無理だよこれだけは絶対に」

鉄心
「……そうか、すまないな」

彰人
「気にしないさ。それにこれも俺が生んだ問題だから、それに「彰人～」俺はあいつさえ守れればそれでいいって思えいるからさ」

鉄心
「うむ、青春じゃのう。しかし避妊はしといておくれよ」

俺は無言で鉄爺の顔に拳を入れた。

彰人
「それぐらいしてるっての！！」

百代

「おお、どうかしたのか？」

彰人
「あはは、別になんでもないよ。それで百代、どうかしたの？」

百代
「ああ、すでに終わってしまってな。それで彰人にお願いしようかと思ってな」

彰人
「いいよ、ちょうどこっちも終わったし、ね？鉄爺」

鉄心
「うむ、ちと負けた感があるが今日はここまででいいじゃろう。それにしても百代はまた強くなり始めたのう。よいことではあるが、また暴走などしないであろうな」

百代
「ああ、それに暴走なんてしてみろ、この彼氏に何されるかわからん。」

彰人
「それじゃあ、いっちょいくか」

そして俺は構える、そして百代も殺気をフルに解放した。てかまてこれは普通に

彰人
「――――…死合いか？」

百代
「ジジイに本気で私だけ本気じゃないなんていわないよな彰人！」

彰人
「しょうがない彼女だ。行くぞ、蛇」

そして今日、川神院で大きな爆発音とともに、クレーターが出来たのは言うまでもなかった。

Ｓｉｄｅ　大和

時間的に現在１２時５５分、俺らの寮チームはその時間に出た。そしていつものメンバーがいたのだが、やはり

大和
「いつものこととはいえ、あの馬鹿はどうして一番遅いんだ？」

京
「まあ、岳人のことだからピッタシにいけばいいと思っているんでしょう。それより今日の午前中に川神院で爆発音がしたけど、なにかあったの？」

一子
「あはは。お姉さまと彰人が本気で勝負してね、それで彰人の勝ちだったんだけどそれが決まるまでになんどかお姉さまの必殺技がね……」

俺を含めて若干この二人から距離を取った、しかしそれも気にせず

百代

「今日は彰人の携帯持つ日か。まあどういう携帯でもいいが一番最初のメールは私にしろよ」

彰人
「あはは、了解。だけど午前中の怪我は……完全回復してるね、さすが百代」

百代
「あの蛇、私の体に纏わりつたり、彰人の腕にいたり面倒だな。まあそれでも今回はスネークバイトに完全に勝ったぞ」

腕を組んで、いや正確に言えばもう姉さんは兄弟の半身に抱きついている状態でそんな会話をしている。

まゆっち
「わ、私もとうとう携帯デビューの日ですね松風」

松風
「おう、オラもとうとうストラップとして役に立つ日がくるなんて、オラなきそうだ」

まゆっち
「松風……」

松風
「ひひーん！」

まゆっち
「そっちの鳴くですか！！」

モロ
「あれ、キャップ静かだけどどうかしたの？」

キャップ
「ああ、そう思えば昨日確か、この集合に一番遅かったやつにはなんか罰ゲームをつけるっていったから、その罰ゲームを考えていたんだがよ。いいのが浮かばねぇ」

キャップはキャップでそんな事を考えているし、そして俺らが島津の家の前で待っているとそこに

大和
「あ、源さん」

バイト帰りの源さんが来たので俺が挨拶すると

忠勝
「このアホどもが、普通にしてろよ、まったくよ……ちっ」

いつもの通りだが。

彰人
「忠勝か、仕事帰りかご苦労さん」

忠勝
「ふん、お前はお前でなんか午前中に爆発を起こしたらしいな。相変わらずお前もアホだな。それじゃあな」

なぜか兄弟だけは普通に話す、これも俺的には不思議な点である。
てかあんな源さんは兄弟の前とワン子の前ぐらいだろう。と、いう

ことは昔のメンバー……俺らがそんな事を考えていると

キャップ

「お、いい案が浮かんだぞ」

キャップがなにかいい罰ゲームが浮かんだらしく、そして

岳人

「さて、それで遅いやつは――――…！げっ！まさか俺様が最下位だと……」

岳人も登場しそして俺らは携帯ショップに向かった。

Ｓｉｄｅ　ｏｕｔ

そして俺らは携帯ショップに行くと、意外と今の携帯は色んな種類があることに驚いた、そのなかでも俺はこれが気に入った、それは

「なになに、ＡＩフォンか……百代、これってどういうのだ？」

「お、彰人は決まったのか？なになに、それはＡＩフォンか。う～んモロ、説明してやれ」

百代もあんまり詳しくはないようだが、俺の横から離れる気はないらしく、俺からはなれない。

モロ

「どれどれ、あ、彰人。それはＡＩフォンだね。えっと簡単に説明すると携帯とパソコンを合体させたようなものだよ」

これ以上聞くと間違いなく長くなりそうなので俺はすぐに百代に話を振った。

彰人
「百代、どうよこれ？」

百代
「いいんじゃないか、それに彰人の携帯だ。まあ私的には同じ携帯でも」

大和
「そこの夫婦、決まったならまゆっちの手伝いしてやってくれ」

そして周りをみると

ワン子
「うわ、私のやつの新しいのがでているわ……けどなにが違うのかしら？」

京
「あ、大和の携帯。これはほしい……」

岳人
「俺様に似合うのはまだねぇな、それにかーちゃんがうるせいんだよな。」

キャップ
「お、これ面白形してんな。なになに天元突破バージョンだと、引かれるぞこれ！！」

百代
「お、これをみろ彰人！テレビ会話だと、私たちには不要だがなんかこういうのをしているとカップルっぽいぞ」

彰人
「すまん、この猛禽類を抑えるので精一杯だ」

大和
「そんな笑顔でんなこと言ってんじゃないよ！」

そしてまゆっちも決定したようだ、そして俺らは今回おろしたばっかのお金を使い購入。そしてこれで終わりと思いきや。

キャップ
「よし、それじゃあこれから今日来るのが一番遅かった奴に対する罰ゲームを開始する！」

岳人
「はっ、誰だよ今日一番遅かったやつ」

全員
「お前だよ（です）（だぜ～）」

岳人
「げっ、そうだった。それでキャップどんな罰ゲームだよ？」

キャップ
「ああ、それがなこの前の本屋のバイトでな面白い本があってな、なんとかの憂鬱って題名でその中で一番遅いやつは集合した全員に喫茶店でおごるってルールがあった、だから」

岳人
「だ、だから」

キャップ
「採用だぜ、と、言うことでここゴストに来た」

岳人
「しまった!!今日に限って金があるぅう!!」

キャップ
「それじゃあ一応、俺も前に言っていたからな」

そして店に入った。確かにキャップは予告していたからこれは正当だな。ま、運がなかったのだろう。

一子
「わ〜い、ごち」

京
「ごちに〜」

モロ
「どんまい」

クリス
「え、えっとゴチ?」

まゆっち
「あ、あのう、やはりここは私も「はいはい、まゆっち行くぞう」、

あ、モモ先輩～」

松風
「これも勝負だぜまゆっち、これは人生の勝負だ。オラらが入る隙はない」

そしてまゆっちは百代に連れられて入っていった、そして大和は

大和
「お前はなんでいつも遅いんだろうな…じゃあな」

笑顔で入っていき、そして

岳人
「そろ～り、そろ～り。「どこに行く気だ、岳人」ギクッ！彰人、お前まだ入っていなかったのか……」

彰人
「おう、どこかのアホが罰ゲームを受けずにトンズラしないか、見張っていたんだ。蛇、縛れ」

岳人
「な、この俺様の筋肉がうごかねぇ！？」

彰人
「よし、それじゃあいくか。ゴチになります」

岳人
「ぎゃぁぁぁぁぁぁぁぁ！！」

##第六十話## ##（後書き）

激甘なお話は大好きですか？

##第六十一話##（前書き）

ドラマＣＤのネタを使いそうなダメ作者である

##第六十一話##

さて、ゴールデンウィークも終わり今日から完全な学校の始まりだ。
そのため俺は早めに起きたのだが、隣にいるはずの人がいない、よ
うは百代がいない。

彰人
「あれ?百代がいない?」

俺はたぶんトイレだと思い、そのまま部屋にいて制服を着ているの
だが来ない。そして俺は院内を探してみることにした、そしたら発
見はしたのだが。

料理長
「そうそう、百代ちゃんさすがに覚えるのがはやいねぇ」

百代
「ああ、ありがとう。しかしこうも難しいとは。彰人め、なんであ
んなに簡単にできるんだ」

料理長
「彰人ちゃんだって昔は下手だったのよ。それに彰人ちゃんの場合
はずっとしていたじゃない、それは百代ちゃんも見ているでしょう
?」

百代
「ええ、それはもう。中学の頃からたまに彰人が厨房にいるのを見
ていましたから」

どうも、料理をしているらしく俺はそのまま戻ることにした。そんな時、廊下で

ルー
「お、彰人。おはようネ」

彰人
「あ、おはようございますルー師範代。今日も朝のジョギングですか？」

ルー
「うん、今日もいい感じだったヨ。それにしても今日は早い起床だネ。うん関心関心」

彰人
「あはは、そういうわけでもないんですけどね。一子どこにいますか？」

ルー
「うん、確か今日は庭のほうで鍛錬しているはずだよ」

彰人
「そうですか、それじゃあ俺もちょいと行ってきます」

ルー
「うん、行って来るネ。あ、けど朝食には遅れないでね」

彰人
「勿論」

俺はそう言うと部屋に戻り胴着に着替えた。そして一子がいるであろう庭に行くと

一子
「せいやぁぁぁぁっ！！」

薙刀でのトレーニング中だった。

彰人
「まだ、重心が甘い。それにもうすこし腰を使わないと足に来るぞ、それとその力の入れ具合だと手を傷めるぞ、一子」

俺の言葉に気付いたのか、犬のように首を振り

一子
「あ、彰人！あれ、今日ははやいのね？どうかしたの、まだ五時よ？」

彰人
「ああ、なんか起きちまったし百代が隣に居ないからこっちに来た。それでさっきの言葉を復唱してみろ」

一子
「え！？えっとまず、腰、それに力具合、あと……」

彰人
「重心だ」

一子
「そ、そう。いまそういおうと思ったの……ご、ごめんなさい…」

彰人
「いいさ、それでは久しくやっていないトレーニングいくか？」

一子
「え、なにそれ？」

彰人
「あれだ、昔にやった俺の動きを真似してそれを覚えてそして俺が採点する、それで悪ければ」

一子
「おしおきだよね……けどやるわ！」

そして俺は薙刀を準備して構えた。

Ｓｉｄｅ　一子

今日は久しぶりの彰人の稽古。凄くよく見ていないといけない、それは昔から変わらない。昔の私はずっとお姉様を目指して頑張っていただけどその前にいたのは彰人だった。同い年にしてお姉様よりも強い存在。

それは昔、私がここに来た頃の話

彰人
「はぁ……せぇい！」

私はその頃はずっとお姉さまのように強くなろうとした、それは今を思えばお姉さまの憧れだと今も思うだけど、だけどその頃は

一子
「ジィーーー」

百代
「ん、なにをしているんだ一子？」

一子
「あ、お姉さま。ねぇ彰人はなにをしているの？」

百代
「ああ、彰人は今さっき戦ったあのジジイの動きを真似しているんだ」

一子
「まね？真似なんかしてどうするの？」

百代
「自分の物にするんだ、学ぶとは真似ぶだからな。それじゃあ一子もそろそろ私と一緒にやってみるか？」

一子
「うん、お姉さま」

今、思う。彰人はたぶん私の未来を先にやっていただけなんだと思った。今私はこうやって彰人の技をみてそれを真似ようとしている。

彰人
「この一撃、手向けと受け取れ！」

一子
「う、うわっ！なに今の？下に行ったはずの矛先が上向いてるし」

彰人
「う～ん、やはり薙刀だとやりにくいな、この技はやっぱ槍じゃないとな、それじゃあ一子、俺はさっきやった連舞から行くぞ」

そういう彰人の姿はまるでなにも感じていないみたいに心を閉ざし、そして相手がいるかのような動きをいている。私は早くこれぐらいの兵になって、そしてこの川神院の師範代になって、そしていつか、お姉さまや彰人のサポートになりたいと思う。

Ｓｉｄｅ　ｏｕｔ

俺らは一通りの鍛錬をしたのでそれぐらいの時間は経った。

彰人
「それじゃあそろそろ飯だな。それと一子はちゃんとシャワーを浴びてこいよ、汗びしょびしょだぞ」

一子
「あはは、久しぶりのこの鍛錬で少し気合いれすぎたわ、だけど彰人は相変わらず汗かかなのね、そんなに簡単かな～」

彰人
「汗をかく、かかないの問題じゃないさ。それにこれでも力加減をしているから俺的にはアップですらないし」

一子
「絶対、いつか追いついてみせるから。それじゃあ朝食で」

彰人
「おう、じゃあな。」

そして一子は走りながら院に戻っていった。俺はそんな後ろを見ながら

彰人
「いつか、追いついてみせるか。か、そのいつかはそろそろだと思うぞ一子。なあそうだろう鉄爺」

そして草むらから白いいつものが格好の一部分が見えている鉄爺が出てきた。

鉄心
「ギクッ！お、おう。彰人おはようじゃ、どうしたのじゃワシは今きたのじゃぞ」

彰人
「はいはい、そういうことにしときますよ。それでいい加減どうする気なんだ、一子も高二だ、そろそろ未来を考えないといけないだろう。だから決断は早いほうがいい、百代もちょいと渋っているしな」

そしていつもの態度とは一変してちゃんとした態度にかわった鉄爺が

鉄心
「単刀直入に聞くぞ彰人、一子には師範代になることは可能かのう？」

彰人
「……ゼロじゃない。ただそれだけだ」

鉄心
「……そうか、百代もそう言っておる」

彰人
「もし、決めるときがくれば……自分が決めて自分で判断するだろうだ」

鉄心
「うむ、わかったぞい。こちももう少し考えるとしようぞ」

彰人
「そう、なら俺はそれを見守るとするよ。さて、朝飯だね鉄爺お先に」

そして俺は院に入りいつもの場所にいく、そして修行僧達に挨拶をしてそしていつもの席につく。そして今日はなんと一子が運んできていた、朝食を

百代
「ふ、ふ、ふ。驚いたか彰人？」

百代が運んできた、しかも二人の分だけ別のメニュー

彰人
「えっと百代、確認だがなんで俺とお前のだけ違う朝食なんだ？」

百代

「決まっているだろう、愛妻朝食だからだ！」

愛妻朝食……それは古来愛妻弁当よりもグレードの高い飯である（高校生限定の基準）

彰人
「なるほど、だから朝はやかったんだ」

百代
「あれ？もしかして起きてたのか彰人？」

彰人
「ああ、どうも隣が寂しくてな、それで厨房を覗いたら」

百代
「覗いたら？」

彰人
「邪魔をする気は起きずそのまま朝の鍛錬をしていたよ。それじゃあ早速」

百代・彰人
「「いただきます」」

百代
「ああ、召し上がれ」

一子
「みんな、おっはよう！あれ、お姉さま？」

そして今日も元気な妹の再登場、しかも今度は体育着だし、普通の制服という手段はないのか、こいつに。

百代
「お、ワン子おはよう。それにしてもなんだ、そのあれってのは」

一子
「え、いや～今日、久しぶりに彰人に見てもらっていたんだけどお姉さまは寝ていると思っていたから。普通にこの時間にいるってのが不思議で」

百代
「く、く、く。妹よ、今日はちょっと試しに朝食というのを作ってみたのだよ、この私が」

なんとも誇らしげに朝食を見せている姉、そしてそれをみた妹は

一子
「お、お姉さまがとうとう、朝食まで！」

驚愕していた、しかも盛大に。しかしそれもすぐに終わり、すぐに飯を取り始める一子、えっとなんか運動した後にすぐに食べて運動して筋肉をつけるだそうだ。正しいのかわからんが

彰人
「そう思えば俺の昼飯は、どうなっているんだ。まさか漫画のようにこっちを作るのが大変で作っていないとかじゃないよな」

百代
「……（ダラダラダラダラダラダラ）」

まさか

百代
「まさか、なはずがないだろう！ちゃんとあるぞ、しかしその問題が…」

そしてそこに来るのは料理長のおばさん。

料理長
「百代ちゃん、これはここに置いておくからね～学校に行くときに持っていきな」

百代
「ああ、すまない」

そこにあったのは軽い重箱だった、まさか

彰人
「まさか」

百代
「いやぁ、私としたことが気合を入れすぎたら重箱になってしまった。だが安心してくれ彰人。今日はラジオがないからお前のところで一緒に食べられるからな」

彰人
「お前が昼飯を作ってくれてから、俺は一度もお前と一緒に食べていない記憶はないのだが。まあそれじゃあ俺が持っていくか、あれ」

百代
「いや、私が持っていく」

なぜかそれは拒否されてしまった、そしてさらに入ってくるのは修行僧や、師範代が全員挨拶をするこの人、それは

鉄心
「うむ、みなのものおはよう」

そして鉄爺は俺と百代をみるとこう言った。

鉄心
「うむ、関心じゃのう百代も。よいぞ、そういうことはどんどんしなさい。しかし勉強もほうもそれぐらいだとよいのじゃがな。彰人、頼んだぞい」

そういうとそのままいつもの席に行ってしまったが、なるほど、鉄爺としても百代の嫁始業は感心するほどらしい、しかし問題は現在俺らが高校生ということだ。

彰人
「百代」

百代
「…はい…」

彰人
「勉強は俺が教えるから、頑張りなさい。いいね？」

百代

「う～～」

彰人
「はいはい、項垂れない。あ～ん」

百代
「うぅ、っ！あ～ん♪」

彰人
「はぁ、まったく」

そんな川神院での朝の風景でした。

##第六十一話##（後書き）

ドラマＣＤは五巻まで買ったがこれははまる

##第六十二話##（前書き）

青春の一ページ

##第六十二話##

キャップ
「今日もいくぜぇ！」

キャップの声で今日も始まる、とうよりも俺らが学校にいくと大体会うのがこのファミリーの力、昔のそう中学の頃からこんな感じだ。

彰人
「う～ん、どうしたものかね～」

百代
「うん、どうかしたのか彰人？」

彰人
「お前の成績だよ。兄弟これは俺のいない間にどうにかならなかったのか？」

大和
「兄弟、さすがにそれは無理だよ。まあたしかに学長には言われていたけどさ。それに俺らはワン子で精一杯だった」

そういう兄弟の顔はげんなりだ、ようはそれだけ大変だったんだろう。しかもさらに問題は

岳人
「ホントだよな～まったく」

モロ

「あんたもその一人だからね！テスト前に僕に土下座しながら頼ってくるでしょ！！」

京
「岳人の場合はモロだよりでしょ、それにしても彰人はなんでそんなに悩んでいるの？」

彰人
「ああ、それがな。なにが分からないのか分からないんだ、ちょいと朝にな時間が五分ほどあったから少し見てみたのだが、どこが分からないんだか」

モロ
「てか、普通に三年生の教科書をみてわかる彰人も彰人だよね」

大和
「ああ、そうだよな。噂だと編入試験を満点でパスしてきたとか……」

クリス
「おお、そうだった、そうだった。彰人殿は満点であったぞ、私の転校試験の際の答えとして使われたからな」

まゆっち
「え、えっと、試験でマンテン？」

松風
「おい、まゆっちおいらたちでは次元が違うんだ。まゆっちの頭がオーバーフローする前におらを見るんだ！」

百代
「いやぁ～ホント、彰人が勉強をみてくれているのは私的には助かるのだが……今日は一段といじめられた」

彰人
「あのね、普通に足し算とか引き算で間違うところがあるからそれを叩いているだけ、大体公式があるんだから、わからないはずがないでしょ」

大和
「なんだろう、どっちが年上だかわからなくなってきた」

一子
「ねぇ、ホント同い年かしら？」

モロ
「あははホントって！ワン子いつの間に来たのさ！？」

そしてモロの声で俺の後ろ見るとなんとそこには今日はタイヤが二個で普通に歩いている一子だった

一子
「え？さっき」

京
「今日も鍛錬ご苦労様。だけど今日はいつもより張り切っている？」

一子
「ええ、今日は久しぶりの彰人との鍛錬だった。それでやっぱし彰人は凄いってことを再認識したのよ、だから私も負けられないの！」

クリス
「そう、思えば犬はいつもこうなのか？」

大和
「そうだな～大体はこうだけど、たまに普通にいるよ。お、そろそろ橋だね。兄弟と姉さんの挑戦者はいるのかね」

彰人
「居なくていい。まったく大体にして普通に学校にいけないのか俺らは」

百代
「私はお前が隣にいればいい、それに今日もちゃんと飯もおまえと食える、正しく私にも青い春が来ただな」

京
「けど、やっぱし今日もいるみたいだよ。ほら」

京が指す方向には、二人の武道家っぽい二人がいた、しかも河川敷で堂々と。すでに川神学園の生徒は集まりだしていたので俺はすぐに橋から飛び降りてしたの河川敷につく。そしてその二人の目の前に立つ

武道家Ａ
「貴様は御剣彰人と見受けみる」

彰人
「ああ、そうだ。正真正銘の御剣彰人だ。それで用件はなんだ？」

武道家Ａ
「うん、川神鉄心どのに勝負を挑もうとしたさい、御剣彰人または川神百代に勝ってからと言われたのでな」

彰人
「はァ～鉄爺も勝負してあげれないいのに。それでそこの人は？」

武道家Ａ
「私の息子だ。そして今回の勝負では不参加、見学がしたいだそうだ大丈夫だろうか？」

彰人
「ああ、構わない。場所はここ、武器は？」

武道家Ａ
「拳だ」

彰人
「了解。俺も拳だ、服装はこのままでいい。それじゃああんたから開始の合図をくれ」

武道家Ａ
「なめているのか？」

彰人
「違うな、これは挑戦者（チャレンジャー）の特権だ」

そして武道家は構えた、そして感じるのは殺気。なるほどこの人は中々のようだ、そして俺も構える

武道家Ａ
「それでは参る！」

そしてかけた瞬間に草が揺れそして……

彰人
「もしもし、そうお願いできる。ちなみに息子も来てるから、あ、それとその挑戦者は現在硬直して動けないから、うん、そう。それじゃあ」

俺は買ったばっかのスマートフォンを使い院のほうに電話。そして俺が立ち去ろうとすると子供が

武道家の子供
「あ、あのう。と、とうちゃんの代わりですが……ありがとうございました！！」

そう言って一礼し武道家の傍にいった、うんうん礼儀のいい子だな。そして俺はその子に手を振りみんなが待つ上に向かった。

大和
「一瞬だね～」

百代
「さすがは私の彼氏、ってどうかしたのか彰人？」

彰人
「なあ百代」

俺は百代を正面から向き肩を持ち言った。

百代
「なんだ？」

彰人
「俺たちの子供もいい信念をもった子供にしような」

百代
「は、はい！？」

そして俺は学園に向かった。

～そのあとの話～

クリス
「あれはすでにプロポーズの域を超えてはいないか？」

京
「これは凄いよ。すでに彰人の中には結婚よりも先に子供の教育方針が決まっている」

まゆっち
「と、都会の人は進んでいます！」

松風
「いや、まゆっちおらも今は都会にすんでるから！」

岳人
「けっ！」

モロ
「岳人、見ていると悲しくなるから辞めな」

大和
「あはは。よかったね、姉さん？」

百代
「彰人との子供、子供、子供、やはり最初は男の子？それとも女の子？それとも双子、三つ子？」

大和
「まずい、姉さんが壊れているし兄弟もさき行っているしキャップも一緒に先に行っているし、しょうがない携帯で呼ぶか」

大和はそうして携帯で彰人を呼ぶのであった、しかしこんなファミリーでただ黙ってさっきの戦いの場所を見ているやつが一人いた、それは

一子
「……」

一子だった。

そして時間が過ぎること、数時間。すでに昼である

真与
「今日も、モモ先輩はくるんでしょうか？」

彰人
「ああ、来るぞ。間違いなく」

最近では俺らが机を囲う際は必ず俺の隣は空いている。机を囲うといってもファミリーでのだが、すでに一子は食べてるし。京はクリスに辛いものを勧めているし、そして教室のドアが開き

百代
「彰人～ちゃんといるな～いないといじけるぞ！」

そんな風に俺の彼女登場。しかしいつも思うがそんな大声で言わなくてもいいだろう。

彰人
「ちゃんといるから、さっさとこっちに来なさい」

百代
「は～い♪」

そしてもっているのは重箱、そしてクラスの全員がそれをみてビックリしている、てか兄弟たちもビックリしている、まあ学校の弁当に重箱ってのはまあ見たことはあるけどな。

百代
「なんだお前ら？やらんぞ、これは私と彰人のだ」

そして重箱を開けると、ちゃんとから揚げやらウィンナーやら、色々だ。しかしどれもこれも手が込んでいた、ウィンナーに限ってはたこさんなのだがちゃんと足が八本だ。そしてから揚げも揚げたものだし

彰人

「なあ百代、これ作る時間どれぐらいだ。結構手の込んでいるようにみえるが」

百代
「なに、朝起きてちょいと料理長のおばちゃんに教わっただけだ。それに料理のできないお母さんはまずいだろう？」

その言葉にクラスからは笑われたり、嫉妬の眼があったり、ちなみに一番の嫉妬の目を俺に向けているのは

岳人
「何でてめぇばっか！」

ええ、後ろからの凄いオーラです。

大和
「それで、今日は重箱ってのはなにかあるの姉さん？」

百代
「いや、ちょっとしたお試しだ。それとちゃんとおにぎりも作ってあるからな彰人」

そして重箱の二段目はおにぎりがちゃんと整列していた。しかしこれは

百代
「いやぁ実はな普通に作るのもなんだったのでこの前乙女さんにあって思い出したんだあの人は凄いおにぎり好きだったなとそれで前に聞いたおにぎりを作ってみたのだ」

それは中身に麺が入っている代物、題して言うなら「焼きソバにぎり」だろう。そして俺はそれを食べてみたら案外にも

彰人
「お、案外にもこれはいけるな」

百代
「そうだろうそうだろう。さ、どんどん食べろ、そして私には食べさせろ」

そういう百代は口をあけていた、てか箸が一膳にかないのは

京
「うん、よくやるパターンだよ彰人。私も一回大和にやってみたけど回避された」

大和
「割り箸を持っといて正解だった……」

彰人
「あ～ん」

百代
「あ～ん♪」

大和
「聞いてませんよね、あんたら！」

京
「大和、あ～ん」

大和
「やらないから！！」

真与
「仲良くていいですよね～」

モロ
「普通にその反応なんだろうね。てかこのクラスも適正能力も高いね、それで岳人も岳人で」

岳人
「あぁぁぁぁぁ、飯がうまいなぁぁぁぁ！！」

モロ
「悲しいね、僕達」

キャップ
「Ｚｚｚ……冒険はこれからだ！……ｚｚｚ」

こんな昼だった。

##第六十二話##（後書き）

どうしよう、彰人視点と、大和視点で分けて書くとこのままだと凄いことになりそう、京ルートウィズ一子強化ルート……源さん助けてぇぇぇぇ！

##第六十三話## #（前書き）

将来への不安、の巻き

##第六十三話##

さて、今日も放課後となるわけだが俺はすぐに三年の階へと足を踏む入れた

百代
「それで、弓。どうなんだこれは……」

弓道部の主将
「そうで候。これなんかどうだろうか？」

百代
「う～ん、これか。彰人はこういうのはいいのだろうか、う～ん…」

なんか教室で唸っている彼女とあれは確か……弓道部の主将だったかな？なにを悩んでいるんだ？

弓道部の主将
「しかし、最近よくきくで候。あなたの彼氏はよく出来ていると、それに気にする彼女とはいい絵であるのな……私もそういうの憧れるなぁ、で候」

百代
「う～ん、そうか、私はいい彼女か……しかしこれは話は別だ。それでこれはどうだろうか、こういうのはどうだ弓？」

弓
「え、こんな大きいの？「ああ、こいつバストは９０あるからな。しかし俺的にはいつもの下着でも十分かわいいと思うのだが」だそ

うで……候？」

百代
「そうかそうか、このままでいいのか。ありがとう…彰人？」

彰人
「うーい、まったくすでに放課後だって言うのに弓道部の主将さん捕まえてなにをしているかと思えば、まったく何々男を誘惑する「言うな！」ふっ」

百代
「う、う、うぅうぅぅ」

彰人
「はいはい、怒らない怒らない。その気持ちだけで今日もかわいがってあげるから帰るよ。いいね？」

そして百代の頭を撫でながら髪の毛を弄っていると

百代
「あ／／／／／／は、はい」

弓
「それではご夫婦仲良くさようならで候」

彰人
「あ、それでは失礼します。ほら百代」

百代
「ああ、すまんなぁ～」

そして主将は部活に行ってしまったので俺は百代を半分引っ張りながら帰る事にした。てかそう思えば今日も一子の動きを見ていたがどうもまだ足りんなぁ。

百代
「なぁ、彰人。たまに思うことがあるんだ。お前が今日の朝、一子の鍛錬に付き合っていたりするのはやはり」

彰人
「ああ、そうだ。俺は一子を師範代にさせるためにちょいと行動を起こそうと思っている、たぶん夏休みを使ってだな。すまんな旅行は今度だな」

百代
「そ、その、もしそれで一子が諦めてしまったら……」

彰人
「それもあいつの人生だ。だけどな、俺は思うぞ血とか才能なんかで人を決めたくないんだって思う。ははこれは俺の自己満足かもしれないけどな」

百代
「もしかして……お前は私の代わりに？」

俺の腕にからんでいる百代の力が少し強まって。まだ五月であるが八月なんてすぐ傍だ。それでもしかしたら妹だったやつが離れるかもしれないとなるとな。

彰人

「なぁ、今日の夜さ。ちょいと鉄爺を呼んで面白い話をしないか？」

俺はある提案をした、それに百代は少し戸惑いをみせたがそこを納得したように顔を上げて

百代
「わかった、ジジイと一緒に話を聞こう」

彰人
「ああ、ありがとうな」

そして俺らは院に帰り、そして時間としてはもう夜の十一時。俺の部屋にいるのは俺と百代と鉄爺だけだ。そして俺はこう繰り出した。

彰人
「鉄爺、一子のことなんだが……」

鉄心
「うむ、おぬしからの話ということで思っておったが。やはりそれかのう」

彰人
「ああ、その前になんだか。鉄爺、話していいよね百代にも」

鉄心
「だ、大丈夫なのかお主！？」

彰人
「ああ、確かに不安だってあったさ。だけど百代ならいいと思うし、それに隠す必要もないよ。だって俺の未来の嫁だもん」

百代
「な、なんの話だ?」

百代は俺と鉄爺の話がわからずに驚いていた。

鉄心
「うむ、そうじゃのう。百代よ、彰人の旧姓を知っておるかのう?」

百代
「は!?旧姓だと、ジジイいい加減なこと言うな、彰人の昔から御剣で…まさか違うのか?」

彰人
「ああ、違う。俺もこれを聞いたのは中三のときだったけどな…」

百代
「お前が旅に出たとき。それじゃあジジイは昔から知っていたのか?」

鉄心
「うむ、彰人はワシの友人の息子の子供なのじゃ。そして」

彰人
「俺の両親は俺が生まれた年に死んだんだ。そしてここに来たのが俺の今までだ。そうだろう鉄爺」

鉄心
「うむ、その通りじゃ」

彰人
「それでな俺の旧姓は……神代……俺の血はその神代の者だ」

百代
「カミヨ？なんだそれは」

鉄心
「古来、人は上に立つものと下で従う者に分けるのがこれまでの歴史じゃ。そして今御三家というのがこの世にあるのは知っておるな」

百代
「ああ、それぐらい。政府や、他にも商業など色んなところに息がかかるほどの力があるそんな家だろ」

鉄心
「うむ、しかしその上も存在したのじゃよ」

百代
「は、御三家が今の上だろ、名家と言うのなら」

彰人
「その上が、神の代わりの一族、神代の一族なんだよ」

百代
「な、なに！？それじゃあお前も名家なのか？」

彰人
「元な。それにもう滅んだ一族だ。それで話を戻すぞ」

鉄心

「うむ?それでどう一子の話になるのじゃ?」

百代
「ああ、確かに彰人が実は名家だったというのは衝撃的ではあったが、しかし彰人は彰人だ。あの蛇も彰人の一部だと思っているから何もそんなに驚かないぞ?」

彰人
「ああ、そうだろう。だとすれば俺の血は無意味だ、と言うことは一子の血だって別に武道家の血がなくても、いや、あいつならそれすら無意味に出来そうだと思ってな。それでここで提案なんだ、一子には夏休み俺の特訓を受けてもらう。それとルー師範代を貸して欲しいのだが。さすがに俺は川神流じゃない、理由はさっきも通り俺は違う流派だからな」

百代
「待ってくれ、違う流派?確かに彰人の戦いやそしてあの蛇は川神流ではない。しかし流派違うってどういう。まさかあの蛇そのものが!」

彰人
「そうだ、あれは神代の流派にしか物にできない業だ。そしてそれが川神流の師範代になるかもしれないやつの面倒を見るなら確実に師範代が必要だろう」

鉄心
「うむ、それでルーは夏休みはお主に任せるぞ。それであとはなにをすればいいのじゃ?」

彰人

「百代、お前は夏休みの終わり、そうだな八月の二十九に一子と勝負してくれ。そしてお前が決めろ」

百代
「う、うん」

鉄心
「まつのじゃ、百代には「うるさいぞジジイ！」、百代…」

百代
「ようは一子も頑張らせるんだ、私だって頑張るさ。なって言ったって私は川神院次期院長にして彰人の嫁だぞ！」

彰人
「よし、それじゃあ決定だな。と、言うわけだから百代、すまんが夏休みは…」

百代
「わかっているお前とそしてワン子の近くにいないほうがいいのか、まてよ、それではまた私は彰人のそばにいないのか！！…いやだ！と、言いたいが我慢しよう、妹を頼むぞ」

彰人
「まだ早いけどね。それじゃあそこら辺は鉄爺お願いできる？」

鉄心
「うむ、頑張るぞい。それでは今日の話はこれで終わりにしようぞ。まったく重い話をこんな老人にしよって」

彰人

「だけどこういうのは早く行っとくべきだと思ってな。それに百代がたまに寂しそうな顔するのは見てられなくてな」

百代
「彰人……すまんな心配をかけてしまって」

彰人
「別にいいさ、それじゃあこの話は夏休みまで封印だからね。百代、もしまた一子の鍛錬見てあんな顔したら」

百代
「したら？」

彰人
「その日から夏休み終わるまで甘えるの禁止だから」

百代
「りょ、了解であります」

鉄心
「ほ、ほ、ほ。まったく仲の良いことじゃ、それにしても百代もいい人間になったのう。まさか彰人のことを聞いてそれでも彰人は彰人といえるとはのう」

百代
「おいジジイ、ここはもうあとは二人っきりでイチャイチャするんだから退散しろ！」

鉄心
「ホ、ホ、ホ．わかっておる、しかし明日も学校じゃ遅刻だけはす

るんじゃないぞ」

そう言うと鉄爺は俺の部屋から退散した、そして百代はさっきの感じがもう完全になくなり

百代
「彰人、今日は…そのお前も色々と私たち川神院の事を考えていたんだな。そのありがとう」

彰人
「別にいいさ。それにもしかしたら俺の苗字になるかもしれない家なんだからさ」

百代
「彰人……今日は一段を優しくてお姉さんはもう我慢ができそうもないぞ～どうするんだ彰人～」

彰人
「それは困ったな、それではしょうがないのでおいで可愛がってあげよう」

百代
「わ～い」

その時の百代はまるでユッキーのようだった。

さて今日も始まりの朝を迎えた。そして俺は今日は普通に起きた、理由は簡単だ百代もここで寝ているからである。てか普通に寝坊だ

一子

「お姉さま、彰人ぉ起きてる？まだもしかして寝てる？そろそろ朝食とらないと遅刻だよ～私は先に走ってるから、それじゃあいってきま～す」

そんな声が廊下から聞こえた、そして時刻を確認するとなんと

彰人
「八時だと……不味いな。百代、ほら百代起きて起～き～て～」

そして横で猫のように寝ている百代が起きたのだが

百代
「なんだ、彰人か。夢ですらかっこいいなお前はそれで私はどうかわいがられるのだ」

彰人
「寝ぼけてないで起きて！」

そしてそれから経つこと二十分、現在ダッシュ中

百代
「く、まさかここまで遅れるとは」

彰人
「まったく、誰かがあーんでしか食べないとか言うから以上に時間はかかるし、今日は昼飯ないし」

百代
「う、それを言われると辛いな。しかし大丈夫だこんな事もあろうかと今日はラジオだ、だからどの道重箱は無理だった」

彰人
「そういう問題じゃないから。それに重箱がデフォルトなのか？」

百代
「まったく、彰人が昨日も激しいのがいけないのだ！」

彰人
「そういうお前も求めていただろうが、しかもどちらかというと誘惑気味で」

百代
「ん／／／／／／そ、それはこれだ。あ、彰人前方に人だ、ここはダッシュで超えるぞ」

彰人
「了解だ」

そして目の前にいた人間は俺は知っていた。

ヨンパチ
「お、モモ先輩に彰人じゃないかって……シャッターチャンス！」

そして俺らがこいつを飛び越える瞬間にあいつはカメラを持ったので

彰人
「俺の嫁の下着は俺だけのものだ！」

百代
「これは彰人専用だ！」

二人してヨンパチの顔面とカメラを持っていた片方の手を踏んでそしてヨンパチは倒れた、もちろんシャッターは押させていない。

ヨンパチ
「ふぎゃうｓｄｊふあ！」

そして倒れるヨンパチ俺らは気にせずに学校に入り

彰人
「うんじゃ、今日は放課後だな」

百代
「ああ、寂しくなったらそっちにいく。お前もそれは一緒だぞ」

彰人
「おう、もちろんだ。それじゃあな百代、ラジオをしっかりしろよ」

そして俺らはさらにダッシュ、そして教室に入り

彰人
「セーフ」

真与
「あ、御剣君です。おはようございます、それにしても今日はギリギリ“キーンコーンカーンコーン”……ギリギリでしたね」

彰人
「おう、なんとか間に合ったか」

大和
「兄弟、お疲れさん。しかし珍しいなギリギリなんて、ワン子が心配してたぞ、やっぱしまだ寝てたんだわ、みたなこと言っていたけど」

彰人
「ああ、死ぬかと「皆おはよう！」あとでな」

大和
「了解」

そして俺らの担任の梅先生が来た、ちなみにヨンパチは遅刻。そして物の見事に梅先生がいるこの時に。そして遅刻の理由が俺の妨害と言ったが、その分俺も「人との物に手を出した報復です。簡単に言うとうちの百代の」そこで梅先生は俺の言葉を理解したらしく、ヨンパチは鞭に打たれていた、てか俺の物という時点で俺のクラスは全員百代と言うことがわかったらしい。よく人の心のよめる奴らだ。

##第六十三話##（後書き）

ふふふ、ほのぼの書いていると心が落ち着く作者であった、それでは次回までバイバ～ィ

##第六十四話##（前書き）

あはは、スランプです

##第六十四話##

そして昼になった、ちなみに今日は俺はパンだ。そしてそれを理解し

大和
「なるほど、今日はラジオの日か。しかしあのラジオって確かゴールデンウィーク後の特別編だよな、今日？」

彰人
「ああ、なんでも今日もあのハゲ……じゃなかった、準の携帯からの相談室だっけそれをやるんだろ」

そして放送が始まった。

準
「さ～て、今日も始まりましたＬＯＶＥかわかみ、パーソナルティを勤めています、井上準こと ロリコン、ってこの台本逆やないかいっ！」

百代
「あはは、放送部の台本ですら遊ばれているなはげ。ああ、私は彰人の嫁こと川神百代だ。」

準
「って！！モモ先輩のはいつもと変わりないじゃないですか！？』

百代
「理解ある放送部だな、おい。って今日はノロケばっかしているわけではないぞ。ラジオだ、そうだラジオなんだ……それじゃあ今回

はスペシャルだぞ、それじゃあ今回もハゲの携帯で“おにいちゃん電話だよ、お兄ちゃん”相変わらず酷い！」

準
「はいはい、それでは行きますよもしも～し」

一年生女子
『もしもし、じ、実は最近気になる人が入るんですが』

準
「お、これは純情だ、それでどういうしたのだい？」

一年生女子
『ですが、その人には彼女さんがいて、しかもバカップルなんです……その二人が』

準
「これは辛いですね、ってまてよバカップル？まさか」

一年生女子
『その人、二年なんですけどですが。三年の先輩の人から勝ったあのときから一目ぼれで。これどうしたらいいでしょうか？』

準
「おっとおかしいぞ、これは俺も一人浮かんで、ってモモ先輩。あのうラジオ中なんで携帯っひ！ご、ごめんなさい」

そんな放送聞こえていると俺の携帯がなった、そしてディスプレイに書いてあるのは

彰人
「あれ、百代からだ……どうかしたのだろうか？」

と、ワザとらしくぼけていると兄弟からは臥床されてしまいてか俺のクラスの全員が臥床していた。そして俺が出ると

百代
『彰人、どういうことか説明してほいいのだが』

なんだか中将みたいな話し方になっているぞ、おい

彰人
「い、いや、そ、そのだな。お、俺に言われてもこれは」

百代
『ほう、関係無いと、おいちょっとハゲ、そして放送部』

そして携帯とラジオの放送からも同じ声が聞こえてくる。

ハゲ
『は、はいなんでしょうか？』

百代
『私はすこし出てくる、いいよな？な？』

ハゲ
『どうぞ、ごゆるりと』

彰人
「お、おい準！薄情「あ～き～と～」く、ここはまずい一時撤退だ」

大和
「じゃーなー」

そして俺は廊下に出たが

百代
「彰人！！そこにいろよ～私はお話がしたいだけだなんだ」

彰人
「そんな殺気だっていいながらだと説得力の欠片もない」

百代
「ならば、ベルレフォーって違った。川神流……」

彰人
「ここで使う気かよ！？」

百代
「お前がいけないんだぁぁぁぁ」

彰人
「俺がなにをしたぁぁぁぁ」

そして俺らは追いかけっこが始まった。

Ｓｉｄｅ　大和

兄弟が消えてからの放送だ。

準
「う〜ん、そうかだけど相手が悪いな、さっきの放送聞いたろ？」

一年生
『はい』

準
「確かしに好きになってしまったのはしょうがないと思う。だがその二人を邪魔しちゃいけないぞ、正に馬に蹴られてしまうのだから」

一年生
『そうですね……はい！ありがとうございました。失礼します、そうですよね……やっぱしあの後ろによく居るあのショートの人には勝てないかな』

準
「え、いまなんて“ブツッ”あ、切れちゃった。しかしモモ先輩がいないと好調に『待て！彰人！！』え？」

放送からさらい聴こえてくるのは姉さんの声そして

彰人
『まて、ここでそれを使うな！そして、あ、ごめんなさい、それは辞めろぉぉぉぉ！！』

百代
『まてぇぇぇぇ』

まさか、と思い俺はすぐに廊下を見た。そしたら姉さんは未だにインカムをつけたまま出てきているようだ。そして俺は廊下を駆け抜

けていく兄弟に姉さんを指差しながら顔とアピールすると

彰人
『百代、お前インカムインカム！』

百代
『そんなの今は関係ない。兎に角つかまれぇ！そんなに年下の方がいいのか、私は駄目なのか？答えろ彰人』

彰人
『いやいやいや、俺はお前一筋だから』

百代
『なら、なんだあの電話は、あてつけか？川神流奥義、か～わ～か～み～波！！』

彰人
「ホントに打つのかァァァァあぁぁぎゃぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁアアアアアアアアアアっ！」

放送からではなく、普通に屋上のほうから聞こえた。そしてチャイムがなった。これで昼は終了のようでそしてそれと同時にキャップが帰ってきた

キャップ
「なあ大和、なんで彰人はモモ先輩に正座させられていたんだ？」

大和
「昼寝してたんだな。まあ気にするな痴話喧嘩ってやつだろうから」

そして宇佐美先生が来た、しかもげんなり顔で

宇佐美
「はぁ、なんだあの放送は。まあいいえっと御剣はいないなやはり。それじゃあ授業を始めるぞ」

そして何も無かったように授業が始まり、そして彰人は帰りのＨＲで帰ってきた、ちなみに制服がボロボロだったのは言うまでも無く、そして放課後である。

Ｓｉｄｅ　ｏｕｔ

俺はすぐに準の下ようは２－Ｓに行くことにした、ちなみに制服はすぐに鉄爺が用意していてくれた

彰人
「準いるか、準～」

準
「うおっ、大丈夫かお前？」

冬馬
「お疲れさまです、御剣君。よく生きていましたね、ユキが心配していましたよ」

小雪
「おお、生きてる生きてるわ～い。彰人、はいマシュマロ」

そしてユッキーから俺はマシュマロを貰った。

彰人
「ああ、ありがとうってそうじゃなくて。準すまないが確認なんだ、ホントにあの電話の子は俺らの事を言っていたのか？」

準
「いや、それがな……なんでも俺の聞いた限りだとショート子がその相手らしいんだ。たぶんな、それで俺も聞きなおそうと思ったんだが切れちまってな……それでどうかしたのか？」

彰人
「百代が怒って、口を聞いてくれなくなってしまってな。どうにかして潔白を証明しないといけないと思ってな。俺にとっては死活問題なんだ……はあ～」

冬馬
「ですから放課後なのにあなたは一人なんですね。いつもお二人居ますし」

小雪
「けらけらっと今回は笑えないよ僕でも～」

準
「あのユキですら笑わない状況！そうだな、御剣確かめてみるかと、いいたいいだが」

彰人
「分かってる、そっちからのかけ直しはご法度なんだろ。それぐらいラジオを聴けばわかる。そうなったらシラミつぶしか……気が散ってなにもできそうに無いがな……はぁ～行って来るか」

準
「なんだか、すまないな。もし情報が入ったらって携帯あるか？」

彰人
「ああ、あるぞ。買ったばっかだ」

小雪
「おう、ＩＴ革命！ユキのもの交換する交換する！！」

彰人
「押すな、今送っているからな。葵君も」

冬馬
「もちろん貰いますよ。それで今度は今度お茶でもどうです、御剣君？」

彰人
「あははすまん。すぐに確認しないといけないんでな」

そして俺は廊下に出た。

Ｓｉｄｅ　準

御剣はそのまま廊下に出てしまったがあの慌てようはマジのようだ。
これは本当に申し訳な事をしたなと現在も思う

小雪
「あれ、モモ先輩だ。お～い」

百代

「はぁ、はぁ、お、ユキか。すまんがここに彰人は来てないか？」

なんともバットタイミングでのモモ先輩の登場

小雪

「どうかしたの？そんなに慌てて？」

百代

「そ、それが昼のことなんだが、勘違いではぁ～だったんだ」

そして俺らはモモ先輩の話を聞くことにした、それは帰りのことらしい。あのあとモモ先輩は機嫌など最低に悪い状態で一人で帰っていると、仲見世通りの和菓子前に川神学園の生徒がいた。そしてこんな会話を聞いたらしい。

一年生

「はぁ～やっぱし駄目かな～」

友達

「しょうがいって、だってあんたが好きな人ってあの直江っていうあの先輩でしょ。あんたが賭博場で三年の人を倒しているところをみたのって」

一年生

「うん、だけどその人凄くかおも広くてね、すぐに部活の先輩からもあの人ねって言われてさ。それでちょっと見てみたんだけどあのショートの人と凄くなかよくてなんか先輩は恥ずかしがっていたけど満更でも無さそうだったし」

友達

「けど、あんたは良くやったと思うよ。放送部のあの相談室に連絡するぐらいの勇気があったんだから」

おい、待てよ

百代
「ま、まってくれ、そ、それは！？」

一年生
「わ、モモ先輩だ」

友達
「お、お姉さま！？」

そして話を戻す、そして聞いたらどうもその一年生があのラジオでの電話の子だったらしい。そして話を戻すと

準
「なるほど、バカップルってのは直江と椎名のことで」

冬馬
「三年生に勝ったのは、賭場場での勝負での勝ち。あの剣道部の決闘ではないと言うこと、それでは簡単に言えば」

小雪
「モモ先輩の勘違いだ！」

準
「こらユキ、ホントの事を「うぅぅ」え、せ、先輩？」

百代
「そ、そうだよな……勝手の勘違いで、私は私は！」

冬馬
「差し支えなければなんて言ってしまったんです？」

百代
「お前のことなんか知るか、嫌いだ、馬鹿、だ……」

準
「なるほど、それは聞くだろうな、うんどうしたんだユキ、校庭なんか見て？」

小雪
「ねぇ、あれって彰人だよね。なにしてるんだろう？」

そしてそこには部活動中の男子、そして女子に話しかけている御剣の姿だった、そして礼をして次の部活、そして次の部活と、聞いている…これは

準
「若、あれっていったいなんだと思う？」

冬馬
「そうですねぇ、確実に聞き込みでしょう。しかも一人一人に」

百代
「なんで、そんな事を。家に帰ればわ、私は」

小雪

「モモ先輩、彰人はねさっきここに来たんだよ。しかも汗びっしょりで今の百代さんぐらいに。それでね色々聞いてきたんだよ……」

準
「まあモモ先輩の言葉が「準」うん、若？」

冬馬
「もうモモ先輩は行きましたよ。それにしても純情ですね彼らは」

準
「若……」

冬馬
「さて、我々も行きましょうか？」

小雪
「レッツゴー！」

そして俺らは帰るのであった。

##第六十四話##（後書き）

第三次スランプで～ス、誰か助けてぇぇ！！

##第六十五話##（前書き）

スランプのため、ちょいと休日を頂きたいと思います※これはたぶん、すぐにこの前書きの部分は消えると思います……たぶん

##第六十五話##

聞き込みを回っているのだが、どうも見つからん、まさか帰宅部か…それでと分からないな、本当に

陸上部員
「お、久しぶりだな。なんだこんなところでどうかしたのか？」

そしてそこには前の兄弟と葵君との勝負で俺が頼んだ彼だった。

彰人
「久しぶりだな。すまんお前さ、今日の放送聞いていたか？」

陸上部員
「おお、聞いていたぞそう思えば凄そうだったな。廊下を激走していたお前らを見てたしな、まったく俺らよりもはねぇじゃねぇかよ」

彰人
「ああ、それなら分かるだろうけどあのよ、あの電話してた女子って分かるか？」

陸上部員
「ああ、そんなの知るかよ。うちの部員も聞いてやろうか？」

彰人
「頼めるか」

陸上部員
「お前のそんな真剣さなら今の顔見ればわかるからな、ちょっと待

ってろ。おいお前ら実はな」

そしてその三年の先輩は後輩であろう、部員全員に聞いてくれたが結果は

陸上部員
「すまんが、分からないらしい。さすがに声だけだとな」

彰人
「ああ、そうか。いやありがとう。それじゃあな」

そして俺はダッシュして今度は、てかあとは学校内の施設や文芸部か……そして俺が最初に来たところは

京
「あれ、彰人だ」

そう、ここは弓道場。

彰人
「よ、今日は部活だったのか……」

京
「大丈夫、凄い汗だよ……はい、水」

彰人
「ああ、すまん。それでそのお願いがあるんだが」

小島
「どうかしたのか椎名、と御剣じゃないか。なんだ部活見学か？」

彰人
「いや、そうじゃなくて……その今日の放送のことで」

小島
「うむ、話してみろ」

そして話してみると

小島
「はぁぁぁぁ」

京
「彰人、もしかしてこれいいながら回ってる？」

彰人
「いや詳細を言ったのは今回が初めてだが。それで小島先生わかりませんかね？」

小島
「そうだな、聞いてみるとしよう。主将！」

そしてでてきたのはあの百代とも仲のいい確か、弓とかいった人

弓
「あ、先生、どうかしま…せ、生徒！…どうかしましので候」

小島
「ああ、実はなかくかくしがじかでな」

弓
「ふむ、百代を怒らせたと。そう思えば午後の授業はご立腹だったで候……しかし分かりました、聞いてみるとするで候」

そして全員が聞いてみるがやはり反応は

弓
「一人、渋るのが居るのですが……」

そしていたのは一年のようだ

武蔵
「私は知らずの人に教えるほど、お人よしではありません、主将！」

彰人
「そこをなんとかと言っているんだが」

武蔵
「あ、あなたは確かプッレーミア～ムな私の情報が確かならあなたは御剣先輩！？」

彰人
「あはは、案外有名だったな俺も」

京
「あんな学校生活だとそれもそうだと思うよ」

武蔵
「そうですねぇ、なら私と弓で勝負して勝ったらその情報教えてあげてもいいですよ先輩」

彰人
「まさかのここで決闘か…いいだろう、受けて立とう」

武蔵
「（ここでこの先輩を倒せば確実に私は有名人、なんせこの先輩はあの川神先輩の彼氏、それに勝った私はいっきに一年の長になる、これこそプッレーミア～ムは私の考え）」

京
「しょうもない、それに彰人のほうが私よりもうまいのに……」

弓
「へ、椎名さん今なんて？」

俺はそして制服のままだが弓を借りた、そして

武蔵
「大丈夫ですか、先輩。弓の使い方は分かりますか？」

彰人
「ああ、大丈夫だ。それでどっちから撃てばいいのかな？」

武蔵
「そうですね、私から撃ちましょう。さすがに私も弓道部ですから（これでうまく撃って相手の焦りを利用して、それで私の勝利ですわ）」

そして彼女が撃つ、矢は全て的射ている確かにこの一年はうまいらしい。

小島
「うむ、さすがだ。それでは御剣、できるな？」

武蔵
「どうぞ、先輩」

彰人
「ああ、それとアドバイスだが、力の入れすぎ、肩の張る筋肉が若干弱いと思うよ」

武蔵
「え！？」

そして俺は構えるそして撃つ！

小島
「こ、これは」

弓
「う、うそ。京さんと同じでう、うまい。しかも」

京
「私よりも正確、それにど真ん中。そして驚くのはこれから」

そして次も撃つ！

武蔵
「あれ、矢がありませんわ。どっかに」

小島
「違う……最初に撃ったところと同じとことに撃っているんだ……」

そして三本目、そしてラストの五本も撃ち終わり

彰人
「それじゃあ教えてくれるかな？」

武蔵
「う、嘘……全弾真ん中なんて…こ、このわ、私が、が、が、が、が…」

そして、気絶してしまった、おい

彰人
「お、おい！？」

京
「彰人、手加減しないと。けどまた上がっているね弓術、しかも精度も威力も……得意科目としてショック」

小島
「な、なあ御剣、弓道部に入らないか？」

彰人
「ああ、すいません。俺これからまだ行かないといけないところありますから、それじゃあ」

そして俺は駆け出した…

Ｓｉｄｅ　小島

まさか、あの御剣は弓もあそこまでの腕だとは思わなかった、さすがはあの川神百代の彼氏でもある、しかし今回のことは完全に彼は被害者だろうに

弓

「あのう、先生。彼どうにか無理でしょうか？今のす、凄すぎですよ……あの集中力は椎名さんを然ることながら、あの強さ」

小島

「まあ、確かにいい才能があるだろうが……御剣は今、忙しいしな。それに御剣はあれだけではない、大体のものをああいう風に行えるからな」

弓

「そ、そうですか……」

京

「……」

そして椎名は黙々と撃ち出した、たぶんあの御剣に刺激されたのだろう。うむいいことだと、思っているとそこに問題の人その二が来た

百代

「す、すまない。ここに彰人は来なかっただろうか」

京

「あ、モモ先輩。どうかしたの、彰人から帰ったって聞いていたけど？」

百代
「そ、それがな。ああ、もう、そ、それで京、来たか？」

京
「うん、さっきまでここにいたけど「そうか、それじゃあな」あ、先輩…いっちゃった」

そんな騒がしい連中だった。

Ｓｉｄｅ　ｏｕｔ

結局あのあと部活動の連中全員あたって聞いたが、わからない終わりだった。たぶんあの一年が知っていたのだろう、しかもあの正確にしてＳ組だ。そうなれば帰宅部も多い、それに知っていても俺はＦ組だから軽くあしなわれたのかもしれん

彰人
「はぁ～もう夜か……帰ったら一人寝か…つらいな。どうにかして証明したかったがこれは難しいな」

現在俺は屋上で寝転がっている、ここの屋上ってパンダやらなんやらで色んなモンがあるな。

彰人
「くそっ……はぁ～今日は帰るとするか…」

宇佐美
「お、御剣だな、なにやってるんだこんな所で、あの川神の機嫌直しをしてると思っていたぞ」

彰人
「あはは、ちょいと喧嘩でね。それにしても宇佐美先生はなんでここに？忠勝から代業の仕事をしてるって聞きましたけど？」

宇佐美
「そうだ、お前は忠勝と仲がよかったな…それがよ今日日替わりの警備の日でな。こうやって見回っているだよ、お前みたいな生徒がいないかどうか見るためにな」

彰人
「それは失礼しました、バックも教室か鍵ってどこにありますか」

宇佐美
「まったく、ほらよこれだ。バカップルだとおもっていたが青春しているな、少年」

彰人
「そうかもね、それじゃあ拝借」

そして俺はクラスに戻りすぐにバックを持ってまた屋上に来てそのまま宇佐美先生に鍵を渡した

宇佐美
「それじゃあや、あ、それと宇佐美代業もよろしく」

そういうと手をあげながら消えていった、やはり隙がない。俺はそのまま屋上からグラウンドに降りて校門に向かった、しかしそこになんと

彰人
「百代?ど、どうして」

俺が言う前に抱きしめられた

百代
「すまん、彰人!」

そんな言葉が最初だった、そして聞いてみるとどうもそのバカップルというのは京と兄弟のあの関係であって、俺らではなかった。というよりも普通に祝福されたらしいって待てよと、言うことは

彰人
「俺の苦労は一体……はぁ〜」

百代
「ホントにすまない彰人。あ、あのその、怒らないでな、な?その わ、私もその言いすぎたと思ってな、それで最初は帰ってくると思ったんだが、その遅くてな」

彰人
「あはは、あはははは」

百代
「あ、彰人、お、怒るな…悪かったと…彰人?」

彰人
「よかったぁぁ。いやぁ百代に嫌いなんて言われて、ホント気が気でなくてね…あはは、そうか勘違いか。あはは、よかったよかった…あはは、疲れた」

そして俺は座り込んでしまった……てか普通に疲れた

彰人
「あはは、鍛錬しているのに…な」

百代
「汗びっしょりだぞ、彰人。師範代との勝負では汗もかかないお前が」

彰人
「しょうがないだろう、あ、それと今言うのも変だが汗びっしょりなんだから百代、いやじゃないのか？」

百代
「今の私ならお前の汗だけでシャワーが浴びれるぞ」

彰人
「あっそ、それで俺のことは知らないか」

百代
「いや、知りすぎてもっと知りたい」

彰人
「俺のことは馬鹿か？」

百代
「う、覚えていたな…いや、お前は私よりも頭がいい」

彰人

「俺のことは嫌いか？」

百代
「いや、誠の言葉で言えば、愛してるぞ彰人……ちゅっ」

そして頬にキスされた、なんか懐かしいなこういうの

彰人
「それじゃあ帰るか……まったくお前が勘違いするから」

百代
「しょ、しょうがないだろう…気が気でなかったんだ、まさか彰人が年上でなく年下好きなのかと思ったら」

彰人
「あの電話でどうやってそこまでトリップできるんだ？」

百代
「う、もう／／／／恋は盲目なんだ……そうだ、そうに決まっている」

彰人
「そうですか…それじゃあ帰るか俺らも」

百代
「ああ、帰ろう我が家に」

そして俺らは帰るのであった、そしてこの事件は幕を閉じた

##第六十五話##（後書き）

すいません!!これより、休みを頂きたいと思います。簡単にいうとストック切れです、申し訳ない。たぶん来週の水曜あたりには復活すると思います。それとなのはのアンケートも引き続き募集しています、よろしくお願いします。それではバイバ～ィ

##第六十六話## （前書き）

そろそろ、ルートに流れないと……

##第六十六話##

そしてあの出来事から数日がたった、金曜日。朝は普通に起きて現在風間ファミリーでの登校。

大和
「それでな、兄弟…」

彰人
「だから……」

全員色んな雑談をしていると

京
「そう思えば結局、彰人とモモ先輩のあの喧嘩のような痴話喧嘩はどうなったの？」

大和
「あ、そう思えば。あのあとの次の日には普通にバカップルしていたから気付かなかったけどどうなったんだ？」

モロ
「まあ現状からいえば」

クリス
「仲は直っているな…しかもより深く」

百代
「いやぁ、あのあと彰人に襲われてな、ご、ごめんなさい、私が悪

かったって言うまで許してもらえなくてな」

彰人
「勝手に偽造するな。しかしまあなんて言うか結局、勘違いだったからな…」

全員
「勘違い？」

全員して首を傾げていたので、俺はあのあとの百代の話をそのままにした、そしたら

クリス
「なんというか……」

京
「お騒がせしてすいません……けどうれしい」

大和
「おい、姉さん。その一年生とやらに俺らはそんな関係ではないと言っといてくれ！」

百代
「まあ、もとより京は私たち以外話をしないからな。それに大和ＬＯＶＥは体から出ていると確かにそう見えても可笑しくないな、私たちというか学園的には慣れているからな一年ではそう思ってもしょうがないだろう」

モロ
「と、言うよりも普通に大和の女認識がおおいからね京の場合」

岳人
「へっ、どいつもこいつも色づきやがって」

彰人
「おい、岳人。睨むな、睨み返すぞ？」

岳人
「がくっ、この世に神はいない……」

そして俺らは橋に通りかかった

まゆっち
「そう思えば今日もモモ先輩は重箱なんですか？」

百代
「もちろんだ！」

松風
「うわぁ、こ、この自信は、おらよりも上だというのか」

まゆっち
「その大変ではないのですか、こう連日重箱だと」

彰人
「確かに俺もそう思って言っているだがな、やめないのが現状だし…今日なんて一子の分も含んでいるなこれ……」

一子
「あはは、ごめんね。まさかこうなるとは」

ちなみに一子の弁当箱は現在破損してしまったため俺らと同じこの重箱と言うわけだ。破損理由は簡単だこけた、以上

百代
「まあこれも花嫁修業の一環だと思えば安いものだ、な彰人？」

彰人
「そうだな、ガキができたらそうしないといけないしな。そして普通に引かないでくださいお前ら」

キャップ
「ああ？うわっ、ホントだお前らどうかしたのか？」

ちなみにキャップと一子以外は全員三歩ぐらい後ろにいる、しかも全員でジト目だし

モロ
「最近じゃ、学園でも夫婦って呼ばれているよね二人とも」

そんな時前に俺らのクラスの女子達がいた。

立花
「あ、風間君に、ワン子、それになおっちと椎名ッち、クリスおはよう」

キャップ
「うい、おはようさん」

真与

「それに夫婦さんもいますおはようです」

百代
「ああ、かわいいな委員長」

彰人
「うい、おはようさん」

そして学園に向かっていった……てか

京
「まゆっちは一年生だからしょうがないけど……」

岳人
「なんで俺様には挨拶がないんだ……」

大和
「たぶん昨日のあれが原因だれろうな、間違いなく」

彰人
「ああ、あのモロのエロ本だな」

百代
「お前ら中学生でもそんなことしないぞ今」

モロ
「ちょ、ちょっと彰人!?僕が持ってきたわけじゃないよ!」

岳人
「な、てめぇだって見たがってたくせに」

一子
「ギャァ、モロのエッチ」

そして学園に到着。そしていつもの教室に乗り込む俺らであった。

それから時間が過ぎて放課後も過ぎて現在午後六時である、俺は今日は一子の鍛錬に付き添っていたので百代とは別行動だったが、メールに先に集会に行っていてくれと書いてあったので俺は一子を連れていつものビルに来た。

彰人
「ウイースってまだクッキーだけか？」

クッキー
「ううん、マイスターはバイトだし、それに京と大和は屋上にいるよ、それから「失礼します」やぁ、みんな」

そしてまゆっちを筆頭全員が到着、そしてそれに合わせて大和達も降りてきた

京
「屋上からみんな見えたから」

そして今日のメニューはなんと

キャップ
「俺とモモ先輩で立案した鍋パーティだぞ今日は！」

と言うことで鍋となった。そして百代は食材やらを色々もってきて

おりそしてキャップはコンロとか色んなもんをもっていた、そして今日の夕飯の始まりだ

一子
「うーんこのキノコおいしい」

クリス
「そうなのか、どれ…ほ、ホントだこれはうまい」

そして俺はどっかで見たことのあるキノコだったがみんな食べているのでそのまま頂いていた、そして完食。

クリス
「それにしてもあのキノコおいしかったな…あれはなんなのだモモ先輩？」

まゆっち
「そうですね、あのキノコ見たことありませんでしたし」

百代
「ああ、あれは川神院の奥にある山で見つけたんだ、すごく珍しいんだぞ」

そういいながら俺は考えた、川神院の山で取れるキノコ、そしてこの百代の顔完全になにか考えている顔、そうなると答えは一つだ

彰人
「百代、川神きのこだろこれ……」

モロ

「え!?川神キノコ?」

一子
「あ、あの捕獲レベル77の超レアなきのこ!」

京
「川神にすんでいたのに知らなかった…」

岳人
「そりゃうまいはずだな」

大和
「まてよ、川神キノコって確か……きょ、兄弟」

彰人
「ああ、間違いないぞ、兄弟……えっと毒が入っております……しかもそれを知って食わせたな百代」

百代
「いやぁ、こんなにうまいものだとは思わなくてな。それに私には毒は効かないしな」

まゆっち
「モモ先輩を基準してはどれも食べ物になってしまいますよ」

一子
「な、なんだか体が熱くなってきたわ」

モロ
「ああ、摂取量が多かった一子から異変が」

彰人
「てか、百代。俺も効かないからって普通に飯に入れるか？」

百代
「いやぁホントはその毒の「百代」……はい」

彰人
「今夜はおしおきだ」

百代
「喜んで！」

そんな事を話していると

一子
「あーかったるい…もう鍛錬てどうでもいいわ」

ああ、これは分かりやすい毒だ、一子が鍛錬一筋からこの怠け者になってしまったと言うことは

キャップ
「ああ、家に居てぇ。普通暮らせればいいや、まじで」

それに似ている破天荒キャップはただのニート予備軍に変化した。
てかここまで壊れるのかそして

クリス
「ふん勝負なぞ勝てばいいのだ」

大和
「それは間違いだぞクリス。勝負は正々堂々をやってこそ意義があるんだ」

百代
「なんかあそこは立場が逆転しているな……と、いうことは京は大和大嫌いなのか？」

京
「え、大和？そんなやつ嫌い？でも好き？」

彰人
「これはすごいな毒よりも愛情が勝っているせいかなんかツンデレみたいになっているぞ、それでさっきから爆笑しているのがモロ、それと」

岳人
「こら、だめでしょモロ君」

百代
「性別まで変わってしまっているな。それにまゆっちは松風を完全に投げてあっちに飛ばしているしさらに胡坐で…彰人見るな！」

彰人
「なんで……だ、み、緑」

そして俺の顔面に拳が飛んだ

百代
「だから見るなといったろうが。私ので我慢しろ」

彰人
「うぐ、今日はピンクなんだな……てかその状態で見せなくていいから結構シュールだかね」

ちなみに現在俺の膝の上にのりこっちに向き直りまわりに見えないようにスカートを上げている百代がいるのだが…この体位はこの前教えたばっかの体位なので意外と回りに皆がいると恥ずかしいのが現状だ

彰人
「それじゃあ元に戻すとするか、こいつらを」

百代
「彰人、そんなことができるのか？」

彰人
「百代考えてみろ、食べて逆転した正確をさらに逆転させればもとに戻るだろう……理論上」

百代
「なるほどな、それじゃあまずは誰からにする？」

そして俺はすぐにキャップを選択してキャップに飲ませる、そして次にキモイヲカマになった岳人、モロと、続いていく。ちなみに全員の反応は

キャップ
「うぉぉぉぉ冒険してぇぇぇぇぇ！！」

岳人
「やっぱりこのナンパポイントならいけるだろう、今度いくぞモロ」

モロ
「もうそれで何回失敗しているのは岳人……」

良好だ、そして一子、まゆっちと飲ませていき

一子
「やっぱり修行って素敵」

まゆっち
「松風、松風はどこでしょう」

あとはクリスと大和、そして京。しかしここで問題が発生した

大和
「クリスはホント馬鹿だな」

クリス
「な、馬鹿といったほうが馬鹿なんだぞ大和、だからお前が馬鹿だ、ばーか」

大和
「なら、今そう言ったクリスも馬鹿ってことだろう？」

クリス
「あ、あれ？ち、違うぞ、とにかく違うぞ！！」

百代

「しまった…な彰人」

彰人
「ああ、まさかキノコが足りなくなるなんてな、どうしようか」

百代
「しかしあの様子見る限り」

大和
「おい、京」

京
「ぷい」

大和
「あ、あれ？京さん……？」

京
「ふん」

ようは嫌われているようなんで無視されているようだ、そしてそれに慌てる兄弟

大和
「なんだろう、京に無視されると不安だ、み、京」

京
「つーん！」

彰人

「あれはあれでたぶんおいしいんだろうな」

百代
「じゃああのままにするか？」

彰人
「そうだな、それじゃあ俺はお前のお仕置きでも考えてるよ」

百代
「楽しみにしているぞ」

大和
「京ぉ！？」

そして金曜集会は終わった

##第六十六話##（後書き）

ドラマＣＤネタですいません

##第六十七話##（前書き）

ゴールデン休みをもらい、すいませんでした！！

##第六十七話##

ある日の学校の体育の時間である、今回は俺らF組とS組の合同授業であるのだが、なぜこの二つのクラスは争うのが好きなのだろう、と、いうよりも

女子達
『きゃぁぁぁぁぁ葵く～ん！！』

冬馬
「ふふ、女性からの声援には答えなければ」

ヨンパチ
「岳人、いっちょそこのモテる男を倒せ！！」

大串
「モロ、お前のオータム魂をあのスイーツどもにわからせてやれ！」

京
「大和～頑張ってぇぇ～」

一子
「たっちゃん、ファイト！」

彰人
「いいね、みんな応援されてて…まあキャップはこっちにながらあっちの声援に混じってるしな、てかこの面子で勝つのか」

ちなみにバスケのメンバーは、俺、兄弟、岳人、モロ、キャップ、

忠勝だ。六人の理由は相手が六人に絞ってきたからであって、俺らはキャップの独断だ

準
「俺は、お前らのほうがいいがな」

準の場合はうちの委員長狙いだろうから、それもそうだろう。しかし相手を見ると、準に葵君、さらに部活動連中か、ここは少し作戦が必要かね

大和
「よし、全員やるぞ」

岳人
「ふ、ここは俺様の筋肉の力を見せてやるぜ！」

キャップ
「俺はシュートしたいぞ！！」

もうごっちゃ、だった。俺はすでに場所はどこでもいいので適当に着く、そして

ルー
「それじゃあ試合を開始するね、ジャンプボールだから一人こっちにきてネ」

審判のルー師範代がバスケのボールを持って真ん中に立っている、そしてうちらはもちろん

大和

「岳人行ってきてくれ、この中だとお前が一番高いしな」

大和の指示で岳人がボール取りに行くこととなり、相手は準だった。
そして試合開始、それと同時にボールは

岳人
「ほい、モロ」

モロ
「え、えええぼ、僕！？」

岳人が見事取ったがパスの渡りはモロに、そしてすぐにキャップに回る、俺と大和は動く事をせずに忠勝はサポートにつく、そしてまずは一点。そして次は準たちのパス回し、てかさすがはS組、中々の強さ、しかし

大和
「頼むぞ兄弟」

彰人
「まったく、ここでこれを使うとは」

俺はそしてボールの持っている相手に突進をかけたように見せた、そしてそのモーションに気付いた相手はすかさずにパスをして、しかし

冬馬
「これは一本取られましたかね…」

俺の手の中にあるボール、相手は二人とも俺が片方に突進したと錯

覚したのだ、まあ気の応用なんだが、ここまでうまくできるとはね。
そして俺がボールを持っているのでそのまま特攻

彰人
「忠勝」

忠勝
「しゃーねぇな」

俺は忠勝にパスをだして俺はまたダッシュだ、パス&ゴーに習った
行動だが

準
「おっと、お前さんを行かせるわけにはいかないな、て、無視!?」
俺は準のマークに追われるがしかし、これは囮だ。本命は

忠勝
「ほらよ!」

岳人
「ふ、ふ、ふ。これがダンクだ!」

岳人のダンクが決まった、しかし反応はやはりS組に持っていかれ
るのがオチだった、そして時間がすぎて勝敗は

ルー
「試合終了、20対4でF組の勝ちネ」

準

「若、すまねぇ。まさか彰人のやろうがあそこまで強いとは」

冬馬
「いえ、僕も少し侮りすぎました。やはり彼の対処はモモ先輩と同じかそれ以上でなければならないようです。それにあの二人の知では私は到底追いつけませんしね（やはり大和君とならばいい勝負だったのでしょうが彼がいるとすべてが無効ですね、想定外では済まされませんね今回の勝負は……）」

小雪
「おい、ハゲ！なに負けてるんだよ～」

準
「ユキ、人には言っていけないことが……」

小雪
「彰人、さすがだね、さすが僕のヒーロー！はい、ご褒美のマシュマロ」

そしてS組から来たユッキーだが、普通に体育の時間までそれを持っているのかよ……まあ俺もおいしく頂くがな

ヨンパチ
「ちっ、なんか無性にむかついてくるぜ！」

岳人
「だよな、あいつモモ先輩という彼女がいながら、あんなにも女子と親しく……」

準

「こら、ユキ。戻るぞ、それと俺と彰人の対応が違いすぎないか、おい」

小雪
「これが勝てば官軍負ければハゲだよ…」

準
「ハゲは元からだ！ああそれじゃあな彰人」

彰人
「ああ、じゃあな。それじゃあ今日のラジオも期待するぞ」

そしてその言葉に準は肩を落として去っていってしまった。

そして昼の時間となった

百代
「失礼するぞ！彰人～ご飯だ！！」

最近では、百代も自分で料理を覚えてきていてラジオの時は重箱ではなく普通の弁当箱を持ってきてくれるようになった、しかし普通に朝渡してくれればいいのだが、そう言うと「何をいう、学校で渡すからいいんだ」と、一言で跳ね返されてしまった

彰人
「お、百代。ご苦労様、それじゃあ今日もおいしく採点してやるからな、それとラジオ頑張って来い」

百代
「あ～もう少し撫でてくれ～」

猫のようになっている百代だが

彰人
「ほい、いって来い！」

俺が肩を持ち、百代を廊下の方にむかえさせて、そしてそのまま押す

百代
「は～い」

そして俺は弁当箱をもっていつもの席に着く、ちなみに最近では俺と大和、一子、京の準で座るようになった、いつもならそれに百代だが。キャップはいつも屋上で寝ているらしい、岳人は食堂で戦争中らしい、モロもたまに一緒だ

大和
「しかし、今日の試合はあっけなくいったな。やはり兄弟は凄いな」

彰人
「そういう軍師がいないと猛将はうごけないさ」

京
「く、く、く。その通りなのですよ」

一子
「京、どうしたの急に？」

京
「……分からないけど急に言いたくなちゃった、そして大和好き」

大和
「さらりと告白するな……考えておこう」

京
「おおおおおおおおお！！」

なんとあの兄弟がいつもなら「お友達で」の兄弟がとうとう、折れたか

彰人
「ほう、兄弟もそろそろ考えだしたか、いいねぇ青春だねｗ」

大和
「青春を通り越して、新婚をしている兄弟に言われたくない！」

そんな感じでそしてラジオが始まった、

準
『それでは今日も始まりましたＬＯＶＥかわかみ、どうもパーソナリティの二年Ｓ組の井上準です、そして』

百代
『川神百代、もとい、御剣百代……まてよこの場合は川神の婿養子だから私は変わらないのか、すまないパーソナリティの川神百代だ』

準
『お願いですから、そういう砂糖がはけるような事を言わないでください、キャラが崩壊していますから』

百代
『黙れ、ハゲ。それで今日はなんか新しい事をするとか言っていたな、それはなんだ？』

準
『まったくもって話を聞きませんねあなたは。そうなんですよこの前のお悩み相談が公表でそして次に好評だったものがあるんですよ、それを今度のラジオからやろうと言うことになりまして……その目はなんですか…』

百代
『いやぁ、今、彰人は私の弁当をおいしく食べてるかなぁとだな』

準
『……ゴホン、それでは発表します……』

そして少しの沈黙、ちなみにさっきの百代のコメントで俺は視線ならば殺されているぐらい刺されている

準
『なんと、このラジオにゲストを招待しようと言う考えです』

百代
『彰人、来い！』

準
『やはりそうくると思いましたよ、ですけどこれは来週までの放送部前のポストに着たい人はその名前を書いてそして引くのは、あなたですよ…モモ先輩がひき、そしてそのままここに来てもらうと言うことで、それと※でこう書いてあります。注意、二年Ｆ組の御剣

彰人君は書いていけません、これは学長の決定事項です……だそうですよ、モモ先ぱ、ひっ！！』

百代
『あのジジイ！！』

大和
「……なんか姉さん、ガチで切れてないか？」

彰人
「ああ、そうだろうな。う～んこの煮物おいしいな、百代特製か、あとで聞いてみよう」

準
『ぎゃぁぁぁ、だめですよモモ先輩、それを壊しては！』

百代
『どけハゲ、あのジジイに教えてやるんだ！』

大和
「……なあ兄弟、止めた方がいいと思うぞ。たぶん井上が死ぬ」

準
『あ、彰人！聴こえているなら、モモ先輩はぎゃぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！！』

放送からなんか助けの声が聞こえたので、俺は携帯を出すと徐に電話をした

百代

『あのジジイ！！“ブゥブゥ”あ、彰人からだ、もしも～し』

彰人
「百代暴れるを辞めなさい、後で俺がちゃんと鉄爺と話すから、それと別に俺はラジオにも出たくないからな。大体にしてお前と一緒にいるのが長いんだから、な、そんなに怒らない。いいね？破ったらお仕置きだから」

百代
『はい♪……ゴホン取り乱してしまいすまなかった、それではそう言うことだ、おいどうしたハゲ？』

準
『彰人、もう少し早くにそうしてくれ…ガクシ』

百代
『ハゲが倒れたので今日のラジオはここまで、じゃあなぁ』

ちなみにその放課後学長室にて

彰人
「どういうことだ、鉄爺！」

鉄心
「ま、待つのじゃ彰人。あ、あれはさすがにラジオでお主らの会話など、まさしく砂糖が吐けるほどの」

彰人
「問答無用、スネークバイト！！」

鉄心
「る、ルーよ。一緒に止めるぞい！」

ルー
「はい、いくよ彰人！」

彰人
「二人ぐらいで俺が素直に引くと思うなよ！思う心の大きさを教えてやる！蛇！！」

そしてその言葉共に、川神学園学長室がこの世界から無くなったのは言うまでもなく、そしてその次の日、学長とルー先生が休んだのも言うまでない。

##第六十七話##（後書き）

やはり日常編は難しい！

##第六十八話## （前書き）

マジ恋S早くでろぉおおおぉおおおおおおおお！！

##第六十八話##

Ｓｉｄｅ　大和

下北沢君
「どうよ、大和ちゃん。彼女出来たか？」

大和
「彼女、まだまだ」

この人は下北沢君、一言言えば兄弟のように同年代とは思えないほど大人びていてこういう人と話すといい刺激なる、出会いはとあるネットなのだが

下北沢
「まずいよ大和ちゃん、もうすぐ夏だよ、サマータイムが始まっちゃうよ」

大和
「そういう下北沢君は？」

下北沢
「あ？ああ、俺、今三人ほどメスいっけどおもしろいよ、彼女っていうだけでいいんだからさ」

そうこの下北沢君は兎に角手が早い

下北沢
「それじゃあ大和ちゃんは、まずは彼女を作るってことで、それじ

ゃあ起きそうだから、じゃ」

そして切った、そして俺が頭に浮かんだのは、やはり

大和
「京……か」

俺は確かにあいつのいじめから救ったが…しかしあいつにはもっと視野を持って欲しいと強く思う俺、直江大和であった

ｓｉｄｅ　ｏｕｔ

そしてあの旅行から一ヶ月が経った、今日は六月の八日。それは夏服に変わるらしく俺も真新しい夏の制服に袖を通した。ちなみに百代は、夏服なのだ、と言って隣の自分の部屋に入った、そして俺が廊下に出て百代の部屋にノックをした

彰人
「百代～大丈夫か？」

百代
「ああ、いいぞ彰人入ってきていいぞ」

そして開けてはいると夏服の百代がいた、しかし違いあったそれは

彰人
「ポニーだな……」

そう、百代の髪の毛がポニーなのだ。まあ百代のあの長さなので普通に髪を纏まればなるのだが

彰人
「イメチェン？」

百代
「夏服だからな、どうだ欲情したか彰人？」

彰人
「そうだな、今日の夜を楽しみにしていないさいと、予告しよう」

そして俺らは学校に向かうことにした、そしていつもの通り合流した俺らだった。

大和
「ね、姉さん。その髪型はどうしたの？」

百代
「あ、ああイメチェンだ。ちなみに彰人もこれはいいと言っているしな。まあ妹と同じになったと思えばいいのだ」

そういいながら束ねた髪で遊んでいる百代、てかくすぐったいなこの髪。

彰人
「百代、髪が当たってくすぐったいのだが……」

百代
「当てているのよ～なんてな」

彰人

「それをするなら普通は胸……そう思えばすでに当てているなお前は」

百代
「違うぞ、私はお前に抱きつきたいだけでそのせいでただ胸があるだけだ、気にするな」

モロ
「相変わらずのラブラブだね、そう思えば彰人はちゃんと夏服持っていたんだね」

彰人
「ああ、なんでも鉄爺は忘れていたらしいがルー師範代がちゃんと用意しといてくれた。まったく学長なんだからもう少しちゃんとしてほしいぜ」

そして俺らは学校に到着

一子
「みんな、おはよう！！」

俺らが下駄箱に到着するとそこには汗だくだくの一子が来た

岳人
「お、おいおい大丈夫かワン子。お前そんな汗で？」

一子
「え、あ、うん、なんとも無いわよ、けど本当にこれは凄い汗ね。下着が透けそうだわ」

実際結構透けていて問題なのだがしかし不審者が来ないように

彰人
「ご苦労だった蛇」

俺の蛇を一子の周りに配属していたのでそういうのが居たら一瞬で固まらせろと言う命令をだしていたが何もなくてよかったよかった。ちなみにこの一ヶ月で一子のメニューは俺が全部監修で内容を変えた、しかし一子はなにも言わずにそれを実行している、いつものランニングにもちょいと違うトレーニングを混ぜたのがよかったのだろう。

彰人
「はやく一子は着替えてきなさい、そして百代は違うでしょうがいく先が」

未だに俺の腕から離れない百代、これは一言言えば未だに続いていた。新入生であろう一年生からも夫婦先輩という名がついたぐらいだ。一ヶ月とは意外と人とは馴染むものと再確認した

百代
「しょがないじゃないか、今日はラジオだから会える時間も少ないんだぞ～……そうだ、ここで私にキスをしてくれたら正直にっむ、あむ、れろ、ちゅっ」

彰人
「それじゃあしっかりラジオも授業もしないさい、いいね?それじゃあ弁当は貰っていくからな」

百代

「うぅぅぅ、卑怯だぞ彰人／／／／／」

大和
「相変わらず、兄弟の方が一枚は上手なんだな」

京
「と、いうよりも普通にここでキスできるなんて凄いね、ね、大和？」

大和
「まるで俺がここでしたことあるみたいにいうんじゃない」

京
「未来系かもしれない」

大和
「はぁ～」

モロ
「てか、普通に一年生とか見ていたけどね。一応ここ下駄箱だし」

クリス
「と、言っても彰人殿には関係ないのかもしれないしな。すでに階段を上っていってしまったぞ」

まゆっち
「と、いうよりも」

松風
「ただ単に恥ずかしかったんじゃないのか？」

全員
「あ～」

そして時間が経ち昼の時刻、今日もラジオが始まった

準
『エブリバディ、今日も始まりました、ＬＯＶＥ川神。パーソナリティの井上準、そして』

百代
『今日は彰人成分が多いので気分がいいぞ、川神百代だ。それじゃあまずはこれ先にやるか』

準
『彰人、お前に感謝するぞ。それではすでに恒例になりつつあるゲストを呼んじゃうぞ、それじゃあ今日は俺の番だな、それじゃあ』

百代
『彰人、彰人、彰人、彰人……』

準
『だから彰人は来れないって、それじゃあこれだ、ってこいつかよ！？』

百代
『えっと、誰だ。ああ、ユキか、それでは榊原小雪さ～ん来てください』

小雪

『バビューっと登場だよ、それからはげ、なんで僕がきちゃ駄目なんだ！』

準
『そうやってすぐに俺の頭を叩くからだ！』

こんな感じで最近のラジオの人気は拍車がかかっているようだ。うん今日も弁当がおいしい

そして放課後となった、今日は百代が補習に引っかかったために俺は放課後待機となった、ちなみに教室にいるのは、俺、大和、京、そして委員長に立花、そして羽黒だった。そして委員長がおもむろに京に近づき

真与
「椎名さん、今日一緒にカラオケなんてどうですか？」

京
「…パス」

真与
「そ、そうですか…」

立花
「だから、真与。椎名っちを呼ぶに最低でも風間ファミリーの一人はいないと、それじゃあね、椎名っち」

京
「ん」

相変わらずのコミュニケーションだった、これは俺がいなかった一年でさらに進んだようだ、そして次に来たのはあれは弓道部の主将さんだ

弓
「椎名はいるで候？」

京
「主将……」

弓
「今日は部活には」

京
「今日は行きません」

弓
「そうで候。皆にもお前の腕を見て欲しかったのだが。それでは明日は？」

京
「……考えときます」

弓
「待っているで候」

そして主将は行った、そしてそれと同時に担任の梅先生が入ってきた、そう思えば梅先生って弓道部の顧問だったな

梅子

「椎名、今日も部活は来ないか」

京
「先生、私は部活に入る条件として」

梅子
「ああ、わかっている。好きなときだったな、それでも顔出しはしてくれよ」

京
「考えておきます」

そう言うと梅先生はヤレヤレという顔で出て行った、そして今まで寝ていた大和が起きてそして

大和
「京、今日は秘密基地に行くか？」

京
「うん！！」

そしてそれに元気に答える京、さっきまでのを見ていると思うのだが本当に京はある意味危険なのかもしれないと思う、俺だった

大和
「それじゃ兄弟、お先に」

京
「ばいば～い」

彰人
「おう、じゃあな」

そして二人は帰っていった、てか百代遅いぞ

それから三十分

百代
「す、すまん彰人！」

彰人
「おっそ～いぞ。まったく」

百代
「うう、思う以上に数学が難問だったのでだな」

彰人
「言い訳は聞かないぞ、それでは帰るか」

そして俺は百代の手を引くと、そのまま百代は俺の腕に抱きつき、そのまま川神院に帰る事になった、そして今日のことを話した

百代
「……そうか京が。だが京のあれはある意味元からだろう？」

そうなのである、京は昔から俺らのファミリーを大事に思っているのにはある意味一番なのかもしれない。そう昔から

彰人
「まあそうなんだがな。なんかあいつって学校、楽しいのかなって

心配になってな」

百代
「まったく、私の彼氏は他の女にも気を使うんだな…まあそこが彰人らしい優しさだよな。だけど京がね……」

彰人
「京で、思い出したが今日のユッキーとのラジオも凄かったな」

百代
「ああ、途中から彰人の褒め合戦になってしまってな、それはもう大変だったぞ」

彰人
「違うでしょ、それを止める準の話だよ。まったく俺は恥ずかしいやらうれしいやら大変だったて言うのに。それにしてもある意味ユッキーも京みたいになったのかもしれないな」

百代
「……そうかもな、あの頃のお前って兎に角人の事情に簡単に入り込んでそして解決していたモンな。たぶんそれが舎弟にとっては憧れだったんだろうな」

そう昔、それは俺がユッキーを救った、あの日だ。そしてそれに協力してくれた葵君、そしてその頃から葵君の傍にいた準、それとこいつ百代、そう思えば俺ってこういうことなら一子もそうなのかもしれないな、あの時は忠勝だったけど。そう思っていると前から来たのは

忠勝

「ちっバカップルどもかよ」

百代
「なんだ、源か」

彰人
「お、忠勝か。仕事ご苦労さん」

忠勝
「あ、ああ今日はなんか面倒な仕事だったんだがすぐに片がついてな。それでもう終わりなんだよ。そう思えば一子が河川敷でなんかしてたけどなんだあれは？」

彰人
「俺特製メニュー」

忠勝
「ああ、そうだったのかちょいと気になってな、それじゃあなバカップル」

そして忠勝は歩いていった、いつも思うのだが忠勝ってどうも一子には甘いようだ、まさか、忠勝……まさかな

百代
「こら～彼氏～ちゃんと私を見ていろ！」

彰人
「遅れてきてその傲慢さは嫌いじゃないぞ百代」

そして俺らは川神院についた

##第六十八話##（後書き）

本格的な京ルートになってきましたキラッ☆！

それではバイバ～ィ

##第六十九話##（前書き）

D．C２のお気に入りキャラは？

それでは今回は「一子の力！？」をお届けしま～ス

##第六十九話##

Ｓｉｄｅ　先生ズ

とある日曜日の学校でそれは行われていた。

鉄心
「うむ、それでは今日の議題だが。交換留学生の話ぞい」

ルー
「こちらには、クリスが来ているからね」

梅子
「はい、風間のグループと仲良く、そして他もものたちとも仲良くしています」

綾小路
「それに、日本文化に興味があるのも評価できるの」

鉄心
「うむ、しかしちと問題があってのう」

宇佐美
「と、言うと？」

鉄心
「うむ、最近外国でも弓道がはやっておるのを知っているかの～」

宇佐美

「はぁ～しかし、外国だとアーチェリーのほうが有名ですよね。しかし最近になって弓がはやりだしたと、いやこの場合は受け入れられてきたということだな」

鉄心
「うむ、まさにその通りじゃ。そして問題はその留学生に条件を出してきたことじゃ」

ルー
「条件ですか。それとさっきの弓道の話がどう関係するデスか？」

鉄心
「うむ、それがの姉妹都市のリューベックでも弓道が最近になってはやってきての、これに便乗して、さらなるい発展をしたいのがあちらの要望でのう。それで」

梅子
「それで、我々の留学生は弓の立つもの、というわけですか。しかしどうして」

鉄心
「うむ、それがのう、クリスの父はそういうのが日本にはごろごろいると思っているらしくのう。すまんが、梅先生お願いできん可能？」

梅子
「そうですね、弓のたつもの。そう考えると全部当てはまっているのは、椎名ですかな」

鉄心

「おお、そうじゃたのう。あの者はたしか椎名の一人娘じゃったのう。それに弓の椎名と戦国時代の頃から言われておったからのう」

梅子
「しかし、問題が」

鉄心
「うむ、それはワシもわかるぞい、あの椎名は共存性がないからのう」

梅子
「はい、そうすると。もう一人……」

宇佐美
「梅先生、他にもいたんですか？」

梅子
「はい、先日に私も一回だけですが見たのですが凄い腕でしたね。あの椎名ですら感心しておりましたから」

鉄心
「それで、名は？」

梅子
「御剣「「却下ですね（ぞい）」」どうしてです、学長にルー先生？」

鉄心
「簡単なことぞい、この地球を壊さないために決まっておろう」

ルー
「簡単に言うとネ。百代がそれを許すはずが無いの。それに二人はここを卒業してから旅に出るみたいだからね。それにもしこんなことを彰人に話せば……また学長室が無くなくヨ」

梅子
「失言でしたね。しかしそう考えるとやはり椎名でしょう。一応声はかけときます」

綾小路
「無理だろうがのう（それにあの娘の母親は…おおお、汚らわしいのぉ。それに御剣というものもよく分からんでおじゃった、麻呂の家でわからないとは、御剣は要注意なのかもしれん…の）」

鉄心
「それではこれで話は終わりぞい」

ｓｉｄｅ　ｏｕｔ

Ｓｉｄｅ　大和

これは俺が無茶した時の小学生頃の記憶だ

「おい、お前ら。なにやっているだ？」

この声を聞くと昔のことだと思う。いまでも憧れていていつか肩を並べたい相手、その名は御剣彰人、姉さんの彼氏にして俺の師匠だ。師匠と言ってもこれは俺が勝手にそう思っているだけだ。昔から兄弟は俺の上にいた、そうあの時も

それは昔、俺らがまだ風間ファミリーになる前のそんな話。俺らが小学生の時にそれはあった、そうそれはいじめだ。それも京が対象の。まだその時は兄弟も姉さんも違うクラスだった、まあ姉さんの場合はそうなのだが、その時の小学生のクラスは普通に四クラスで俺と岳人、そして京が一緒。しかしモロ、一子、キャップ、兄弟は違うクラス。まあたまに兄弟と姉さんが一緒にいるのはよく見かけていたけど、そう思えばあのときも

「おい、舎弟。私と彰人の間には誰も入れるなよ」

「すまんな、大和……」

そう思えばあのときにすでに姉さんは兄弟にゾッコンだったんだろう。と俺が感傷に浸っていると、普通に

「お邪魔してる」

「お邪魔するな」

俺の寮の部屋に入って読書し出すのがこの子、京である。

Ｓｉｄｅ　ｏｕｔ

今日と言う日になにかあるとしたら、それはたぶん今回の挑戦者の相手だろう

チョモランマ

「オッス！今日はここにいる、川神百代と勝負するために来たっす、オッス！！」

なんとも暑苦しい、男が来たが今日は、ルー師範代に鉄爺はいない、ということは実質ここのトップは百代になる。まあそれはいいがこいつぐらいなら

彰人
「百代、こいつの相手なんだが、一子にやらしたいのだが？」

百代
「な、なにを言っているのだ、彰人？」

彰人
「いいから、いいから。大丈夫さ、たぶんいまの一子なら負けないよ、絶対に」

俺はそういいながら百代の答えを待ったが、すぐに俺のこの笑みの意味を知ったのか顔を縦にふった、と言うことで

彰人
「すまんが、ここでは最初にその資格があるか計らせてもらいたい。もちろんその者に勝てば連戦でも、休息してからでもちゃんとこの川神百代とは勝負ができる、どうかね？」

チョモランマ
「うっす、それでいいっす！」

そして俺は一子を呼んだ

彰人
「一子、お前の相手だ」

一子
「ホント!?わーい、えっと初めまして?」

チョモランマ
「ま、まさか、この少女が相手ですか!?」

しかし一子はすぐに薙刀をとりに行った

彰人
「安心してくれ、この川神院に弱い奴はそうそういないから。それにからお前さんは武器はいいのか?」

そしてその挑戦者は後ろに背負っていた、物を取り出した。それは鎌だった……おいおいどこぞのメテオオペレーションだよ……

チョモランマ
「これで、切って切ってきりまくるＺＥ!!」

彰人
「もう、いいか?一子、いけるな」

一子
「うん、いけるよ!!」

そして勝負が始まった

百代
「それでは私が審判をする、それではじめぇぇぇぇぇい!!」

そして始まったが、最初は挑戦者からの攻撃、鎌とは大体が大振り

が多いが、しかし問題はそこではない、たぶん百代は気付いただろう。そうこの勝負で一子は負けない、それは絶対だ

チョモランマ
「ヒャーハー！！」

振る鎌の攻撃に一子は薙刀を使わず、そしてそれは無我の境地だ、これこそが。俺はあいつには天賦の才能が無いことぐらいは元からだ。しかし問題はそれじゃない、それは体力面やまたは筋肉のメンだ。ならばそれ以外ならば、いやそれ以外でカバー出来ればそれは師範代にもなれる可能がある

一子
「はぁぁぁっぁ！」

鎌を振り、そして何度か攻撃をかわした、一子はすぐに動く、最初に下からの払い、そいてそれによる相手は距離を取る。そしてそれから一気に攻める、しかしそれは相手もわかるから鎌からの突きで応戦するが、今までの一子ならそれが急すぎて一子はギリギリで避けていただろうが、もうそれはない。一子は薙刀を両手から片手で持ちかえてそして片腕を犠牲にしても、それでも進み、そして

チョモランマ
「な、な……馬鹿な」

まあ簡単に言うと片腕を普通に鎌を挟んだのだ。そして鉈の長さでそのまま挑戦者の首に刃が当たっていた

百代
「……」

百代はなにが起きていたのか分からないようなんで俺が間に入り

彰人
「この勝負、一子の勝ちだ。ご苦労さんだな一子」

一子
「うん、ありがとうね。それじゃあ私、まだ鍛錬が終わってないから、いくね」

そういうと一子は駆け足でいってしまった、ちなみにその挑戦者はそのまま帰っていってしまい、残ったのは俺と百代だけだ

百代
「一子が、まさか本当に無我の心で相手を当たるとはな。うちの修行僧でもこうはいかないだろう」

彰人
「一子は一途だからな。俺の指示通り動くし、それに無理でもそうしようとする。まさに努力の塊だ。ならばそれをいかさないとな、しかし心はいいだろうが、まだ足りないな」

百代
「ああ、まだだ」

そういう百代の顔は笑っていた。そしてそこに丁度よく鉄爺たちが帰ってきた

鉄心
「うむ、ワシが留守中になにかあったか、彰人よ?」

彰人
「うん。挑戦者がきたけど、撃退したよ」

ルー
「うん、いつものことだネ。それでどっちが「一子さ」うん!?」

鉄心
「それは本当かのう?彰人」

百代
「ああ、私も見たぞ。徐々にだが、一子は血に勝ってきたと言うべきか」

鉄心
「ほ、ほ、ほ、ほ、ほ、ほ」

鉄爺は笑っていた、そしてルー師範代は俺の肩を持って

ルー
「頑張るネ」

彰人
「俺じゃなく、一子に」

そういうと二人は戻っていった、そしてまた、俺らだけとなった

彰人
「さて、暇になったな」

百代
「お昼にでもどこか、行くか？」

彰人
「そうだな、どっか行った帰りにでも秘密基地でも寄って、なんかするか」

百代
「そうと決まれば、早速風呂に行くぞ、彰人」

彰人
「だから、俺の腕を引っ張って「一緒に入るに決まっているだろう」……了解だ」

そして俺らは風呂に向かうのだった。

##第六十九話##（後書き）

杉並です！！

関係なくてすいません

##第七十話## （前書き）

ＬＯＶＥ川神のまき！

##第七十話##

Ｓｉｄｅ　大和

すでに時は昼の時間、岳人は開幕と同時にダッシュをして、そしてモロも一緒に消えて言った。しかしそこには異変があった

一子
「あれ、彰人は？」

最近、授業も起きている一子なのだが相も変わらずご飯をほお張っていると、いつもの二人、もとい今日はラジオがあるから一人がいない。いつもならラジオを聴きながら彼女のご飯を評価しているはずの兄弟。しかし居ない理由はすぐにわかった。

百代
『お～い、今日も始めるぞ、ＬＯＶＥかわかみ。』

いつもと違いあの井上が最初ではないが、たぶん放送部からのそういう指示だと俺はさいしょ思っていたが

百代
『みんなも不思議に思ったと思うが、なぜ私が今回のタイトルコールをしたかというとだな、なんと今日ハゲは休みなのだ』

なるほど、今日は姉さん一人でラジオということだろう、しかし俺の考えはそれを一瞬で打ち消した、それは

百代

『と、いうわけでだ。急遽、今回のもう一人のパーソナリティを連れて来た、自己紹介を頼むぞ』

彰人
『どうも、始めまして。今回の井上準の変わりに来ました御剣彰人です。最初に一言、鉄爺俺はゲストじゃないぞ、ちゃんと放送部と百代に頼まれて来たんだからな』

大和
「はぐっ！」

俺は吹き出しそうになった

京
「大和大丈夫、はい、麻婆豆腐」

大和
「マーボーは飲み物ではありません。ワン子すまんがお茶くれ」

一子
「あ、はい。それにしても今日のラジオのゲストは彰人とはお姉さま大喜びね」

クリス
「と、いうよりもこれはたぶん」

大和
「兄弟の策略だろうな…確実に。確かに学長はゲストでは呼ぶなと言っていたが、まさかのパーソナリティとは考えたな兄弟、そして姉さん」

百代
『と、いうわけで今日は私と彰人とでお送りするＬＯＶＥかわかみ、始るぞぉ』

そしてラジオがスタートしたようだ。今日はなんか波乱ような感じがする、今日のゲストはかわいそうだ

彰人
『それでは早速、今日のゲストを「ちょっとまて、彰人」ん、なんだ百代？』

百代
『二人っきりのこの密室なのに、すぐに第三者を呼ぶのか！？』

彰人
『いやいやいやいや、普通に放送部もいるからね。それに俺は俺以外にお前のあんな姿を見せる気はない。だから我慢、ＯＫ？』

百代
『は～い、それでは今日はお前が引いてみてはどうだ、彰人』

彰人
『それはいいな、それじゃあ俺が引いてみようかな』

そして放送から紙のガサゴソと音がなる。そして引いたようで

彰人
『えっとそれでは……兄弟、あ、もとい、二年Ｆ組直江大和君、直江大和君、君のを俺が引いたので放送室に来てください。ちなみに

京は連れてくるなよ』

あの野郎……

大和
「あとで覚えてやがれぇぇぇ！」

そして俺は廊下をかけていった。

Ｓｉｄｅ　ｏｕｔ

そして俺らは大和が来るまで俺らは普通にご飯を食べていた、てか普通に食べさせてもらっていた

彰人
「これちゃんと、スイッチ切っているだろうな？」

百代
「もちろんだ、こっちのスイッチはこっちで切れるんだ。あっちにそれはないのだ、それよりもあ～ん」

彰人
「あ～ん。それにしても兄弟、遅い「来たぞぉぉぉぉぉぉ」……お、来たか」

百代
「もう少し、遅くてもよかったぞ弟」

大和
「普通に変な事をいうな、兄弟！」

彰人
「いやぁ、最近のお二人さんは…まあそれぐらいにしてやろう。それではスイッチをオンにしてくれ。始めるぞ」

大和
「あとで覚えてやがれ……」

そういう兄弟はそのままヘッドホンをつけた

彰人
「それでは、ゲストさんの到着だ。直江大和君です」

大和
「どうも直江大和です。ちなみにこの二人は現在、一つの箸で弁当を食べています」

百代
「おい、弟。私のセリフを取るな」

彰人
「まて、百代。普通に言おうとしているのかお前は……まあいい。それで百代、これからどうすればいいんだ？」

百代
「まずは、お便りだろう…それではいくぞ、ペンネームを、ラジオっぽいぞ。「百代」う、わかったわかった、ペンネーム、お姉さんから」

彰人

「すまないが、一人こころ辺りがある」

大和
「兄弟、俺もだ」

ちなみにその頃の二年Ｆ組の教室では

真与
「ちーちゃん、わ、私のお便りが呼ばれてしまいしました」

千花
「ま、真与なんだ。あれ」

以上。

大和
「まあ、いいや。それで姉さんなんて書いてあるの？」

百代
「よし、読むぞ。私はとあるクラスの委員長をしているのですが、そのこの前のお話なんですが、私と同じクラスの生徒の男子がエッチィ本を読んでいて、やはり私のような大人の誘惑がこの教育の現場にはよくないのでしょうか？だ、そうだ……あの馬鹿どもホント、しょうがないな」

彰人
「まぁ、と言っても男子がエロ本を持つな言うことが無理だろうな。これはある意味一種の人生の通過点だしな」

大和

「兄弟も通過したのか？」

彰人
「ここでは兄弟ではなく、彰人とかでお願いしたいね、大和。あ、もちろん持っていたが」

大和
「持っていたが？」

彰人
「俺の隣に居る人に一瞬で燃やされた」

百代
「ああ、懐かしいなお前が中学二年生のときか。しかしあの時は私もまだ幼稚だったな」

彰人・大和
「「あの時は？」」

百代
「うるさいぞ。それにしても最近では見ないな、彰人の部屋。どこに隠しているのやら」

彰人
「いると、思う？」

大和
「いらないだろうな、確実に。っとそれよりもお二人さん、このお便りの解決法はどうするよ？」

彰人
「まあ簡単に言うと、それも一種の人生の通過点だ。まあ高校生で通るものではないな、てか普通に学校に来るときに買いに行くとかアホだろ。と、言うことで心配は要らないとおもう、このお姉さんもそういうことだ気にするな、以上」

百代
「それでは次にいくぞ、というよりもなんか今日はラジオっぽいな～」

大和
「そりゃ、ここに姉さんのコントローラーがいればこうなるよ。それで次はなに」

百代が引いた手紙を俺がそのまま受け取り読み始める

彰人
「どれどれ、ペンネームおじさんからです。ここの人たちは隠す気がないらしいな、それでは…最近、タチが悪く……スネークバイト!!」

大和
「ヒゲも深刻なんだな。それじゃあ次」

そして俺はラジオを終えた。

そして今日も放課後となる。俺らは一直線で帰る事にした、いやそうするしかなかった。理由は

百代

「彰人～今日は修行が朝だけでもう終わりだろう～どっか寄っていかないか？」

彰人
「あのね百代。今日は俺が食事当番なの、まあ自主ではあるが。まあお前も料理練習しているんだから協力するの」

百代
「うぅぅ、待てよ…もしかして彰人、このままスーパーに行くのか？」

彰人
「そりゃ、そうだ。それ以外に食材を買えるか？まあここ川神なら色々あるけどさ、今回はシチューにする予定なんだよ」

百代
「おお、彰人特製シチューか。それはいい、しかし…ふふふ、彰人。放課後に一緒にスーパーでお買い物だなんて、まるで同棲しているカップルだな」

彰人
「まあ、同じ家には住んでいるからな。それにしてもこんな姿を見られれば」

百代
「見られれば？」

彰人
「新婚だろう？どっちかと言うと」

百代

「うっ／／／／卑怯だぞ、彰人」

彰人
「はいはい、かわいいな百代は。それじゃあ入るぞ」

そして俺らはスーパーに入る、そして意外と川神も狭いとおもった、
それは目の前に岳人のお母さんが居るからだ

麗子
「あら、彰人ちゃんに百代ちゃんかい。相変わらず仲いいわね、結婚式は呼んで頂戴ね」

彰人・百代
「「はい、必ず」」

麗子
「あはは、岳人ももう少し彰人ちゃんみたいにいい男だったらよかったのにね、それじゃあね」

そしてあの豪快なお母さんはスーパーの外に出ていった。そして俺は必要なものを見ていると、そこに百代がいつものお気に入りの飲み物を持って登場

百代
「おい、彰人これは買ってもいいか？」

彰人
「ピーチジュースね。二本までだからな、それじゃああとはあれを買って「あれ、御剣君ですか？」うん？あ、ああ委員長さんか。こんちわ」

百代
「お、委員長か。学校ぶりだな」

真与
「はい、お二人ともこんにちわです」

彰人
「ああ、買い物か、委員長？」

真与
「はい、それにしてもお二人ともどうかしたのですか？」

百代
「ああ、今日は二人で夕食の献立を買いにきたのだ」

彰人
「いやいやいや、作るのは俺だから」

真与
「本当に御剣君とモモ先輩は仲がいいですね。さすがは夫婦さんです、それでは私はこっちなので失礼します」

そしてカートを引く委員長は意外とお姉さんオーラが出ていた

彰人
「はぁ～俺らもいくぞ、百代」

百代
「は～い、ア・ナ・タ」

そして俺らは買い物を済ませるのであった

##第七十話## （後書き）

まずい、やはりドンドン文字が減っている……まずい！

##第七十一話##（前書き）

一週間ほどお休みします！

##第七十一話##

Ｓｉｄｅ　大和

夏服になり、ちょうどいいぐらいの気温のあのラジオから次の日の
今日この頃だが、目の前に居るのは

百代
「彰人～今日は昼は屋上で食べるぞ、決定事項だからな」

彰人
「天気がいいからだろ、一子もそれでいいな」

一子
「うん♪お姉さまの料理ドンドンおいしくなっていくものね」

百代
「もちろんだ、彰人のためだぞ妹よ。それを怠る私ではないのだ、
それよりも今日はいい感じ暑いな～彰人、ギュっとしてくれ」

彰人
「暑いんだったら普通離れるでしょうが、まあ離す気はないけどな」

熱い、おもいっきし熱い

京
「そう思えばＳ組にあのマルギッテが来たって本当？」

彰人

「ああ、それは本当だぞ。俺のところにも挨拶に来たからな、なんでもクリスの目付け役だそうだ。まったく親馬鹿が」

クリス
「そうなのか、マルさんも確か、彰人殿に挨拶に行くとは言っていたからな」

百代
「そうなのか、なあ彰人「だめ」まだ、なにも言っていないじゃないか」

彰人
「どうせマルギッテと戦わせろだろう、ダメだ。あいつからの申し出なら乗っていいが、そう言わせようと挑発もだめだぞ、一応あいつも任務なんだから。もし破れば…わかるね百代」

百代
「うぅぅぅ……は～い」

姉さんは最近兄弟に飼われているような感じがしたり、バカップルだったりと前の戦闘衝動はどこへやらのようだ、たぶん兄弟がたまに戦っているのだろう。

大和
「そう思えば、またおじさんから地震の話をされた」

彰人
「相変わらずだな、というよりもここの全員は大和のあのキットを貰っているんだよな、クリス、まゆっち、あれ渡されて普通に引かなかった？」

クリス
「まあ驚きはしたが、その前に色々とあったからな」

京
「それにくらべて私が居れば大和は安全だよ」

百代
「そうだな、私も彰人が居れば安心だな」

大和・彰人
「「お前、いつも俺の部屋にいるじゃないか」」

俺と兄弟が同じことをいう、そしてそれに

まゆっち
「彰人さん達の場合はわかりますが、京さんも大和さんの部屋に？」

松風
「もう夫婦になっちまえよ」

京
「お、松風がいい事を言う」

松風
「調子乗って聞くけど、部屋で何しているんだい？」

京
「く、く、く。色々だよ」

大和
「含みのあるようにいうな！」

そして俺らは学校に到着

彰人
「百代、離れろ～」

百代
「もう少し一緒にいろ！」

いつものコントが続いており、俺らはそれが終わると教室に向かう。
そして朝のＨＲが始まる

梅子
「ふぅ、今日は暑いな。こうも暑いと仕事帰りの一杯が効きそうだ」

一子
「わぉ、先生、アダルト」

梅子
「ふん、お前らも大人になればわかるだろう。それから今回の体育祭は水上となったのでな。よろしく頼むぞ」

そういうと俺ら男子は盛り上がった

ヨンパチ・岳人
「「よっしゃぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！！」」

真与

「水上ですか、楽しみです」

立花
「ま。男子の目が気になるけどね」

羽黒
「チカリン、私それに同感。野獣みたいだからな、あいつら」

男子は男子で女子は女子で盛り上がっているようだ

彰人
「なあ兄弟、なんだそれは？」

兄弟は知らないので、俺が説明する。この学園には体育祭といっても種類があるのだ、まずは普通の体育祭、それと水上体育祭、そして球技大会だ。そして今回はこの暑さということで水上なのだろう。

彰人
「はぁ～ん、なるほどな。と、言うことは百代のスク水も見れると言うことか。う～んすばらしいな」

兄弟も最近バカップルが酷くなったようだ。

そして昼となった今日。今日は普通にラジオがないので普通に姉さんもこっちに来てそして

百代
「彰人、ワン子、屋上に行くぞ」

一子

「は～い、お姉さま」

彰人
「わかった、わかったから。そんなにせかすな」

そして上に行ってしまった、川神院のメンバー。そしてそれと入れ違いでなんとS組の井上が登場、ちなみに井上はたぶんS組で唯一このF組の男子と交流のある男だろう

大和
「あれ、井上じゃないか、どうかしたのか？」

準
「お、直江かち丁度いい。彰人はどこにいる？」

大和
「ああ、さっき頃に姉さんが連れていったぞ、屋上に。だけど邪魔をしたら殺されるぞ……たぶん姉さんと兄弟に」

準
「く、そうか。少し遅かったか」

大和
「どうかしたのか？」

準
「ああ、なんでも昨日のラジオを代わりにしてくれたらしいからな、それの礼を言おうと思ってな「いらないと思うぞ」うん？なんでだ？」

大和
「俺、その時のゲストだったんだけどな、ただのバカップルのラジオだったからたぶんあの二人は満足していると思うぞ」

準
「……そ、そうだな。それじゃあすまないが直江、お前から礼を言っといてくれるか？」

大和
「了解だ、それぐらい簡単だ」

そして井上は出て行った、てか兄弟もちゃくちゃくと人脈を広げているような気がするのは俺だけだおろうか？

Ｓｉｄｅ　ｏｕｔ

さて、時間としては放課後もいいところだ。俺は放課後の学校の部活に参加していた、もちろん百代も連れて、その部活は

京
「うん、丁度大丈夫みたい。彰人、これはい」

京に渡されたのは弓と矢だ。ちなみにこれは何かというと京からのお願いで、椎名流弓術ならびに自分の腕が上がったどうか見て欲しいのだ、一応武家の血と言うのだろう。それと百代がいる理由は簡単だ

百代
「彰人がいるところに私はいるものだ、しかし京、どうしたんだいきなり彰人を貸して欲しいなんて」

京
「このまえ、先輩達の痴話喧嘩のときに彰人が見せてくれた技が忘れられなくて。それで今日は呼んだ。それに今はみんなランニングで三十分は帰ってこない」

百代
「京、部活動に参加してるのかそれは？」

京
「部活動はすきじゃないから」

百代
「はぁ。そうか」

そして俺は弓胴着はないのでそのまま制服で弓を引く。一点を集中して、そして当てる

百代
「／／／／／／／／／／」

京
「モモ先輩、顔赤いよ」

百代
「改めて惚れ直しただけだ、気にするな」

京
「しょうもない。けど彰人って弓も出来たんだね、あの時も言ったけどショックだよ」

彰人
「別に出来ているとは思っていないよ、それにこれも簡単な原理だ。引くそして撃つが連結しているだけでそれだけの話だ。だから俺は見て、そして撃つだけだ」

京
「それが出来れば、弓道はないよ」

そして京も撃つ構えに変わる、このときの京の集中力は異常だ。俺や百代ですら一目置くぐらいの集中力だ、俺の場合はさっきも言ったとおり目がけばいいが京はちゃんと姿勢をただしそして打ち込む、静かだが力強いそれが椎名流弓術だ。

彰人
「見ろと言うが、まったく注意するところがないな。姿勢もよし、放つタイミングもよし。これでなにを言うべきか」

百代
「まあそれでも自分の腕を上げようとするのは良いことだろう？」

彰人
「そうだが、っと。京、今のは早過ぎだ、的に０，１のずれがあるだろう」

京
「……」

百代
「彰人、京はサイボークではないぞ……それとホントかも知れない

がそこまで弓道はもとめんだろう」

彰人
「弓道ならな、だが京の場合は根本から違う、あいつのは弓術だ」

京
「うん、モモ先輩もありがとう。だけど彰人の言うとおりだから、それに今回のはちょっとした我が侭だから」

そういうと、京はまた撃ち始める。そして俺はある気を感じた。それは

彰人
「梅先生、覗き見はどうかと思いますよ」

梅子
「御剣にはばれていた。それにしてもあの集中力はすばらしいな、やはり椎名には無理でも言っておくか、それにしてもなぜお前らがここにいるのだ」

彰人
「なにちょっとした野暮用ですよ。それじゃあ失礼します、じゃあな京」

京
「ありがとうね、彰人、モモ先輩」

そして俺らは帰る事にした、そして河川をみるとそこにはいつもの通りの一子の姿だ。

彰人
「ご苦労だな、一子」

一子
「あ、お姉さまに彰人。もしかして今お帰り？」

彰人
「ああ、ちょっとした用でな。それよりもどうだ、タイムは」

一子
「まだね、まだまだだわ。それにしてもこの休憩のメニューって重要なのかしら？確かに休憩はとるけどこの卵とかは「重要だ」うぅぅぅ「重要だ」……は～い」

そしてまた走り出す。今までとはちょっと違うトレーニング、俺と百代はそれを見てそして秘密基地によることにした。

百代
「まったく、最近のワン子は違うな。なんかだがな、気は変わっていないはずなのにだ。これも彰人の力か？」

彰人
「俺にそんな力があれば……たぶん自分でこの力をなくしているよ百代。それよりも秘密基地には誰もいないようだな」

百代
「まあこのモーター音で間違いなくあのロボはいるだろうがな」

そして俺らはいつものところに入るとそこに、掃除しているロボがいた

クッキー
「やぁ、彰人にモモ先輩今日は初めての金曜以外の訪問だね、ちょっと待っててお茶いれるから」

彰人
「すまんが頼む。今日は久しぶりのオフ日でな、まあ朝一で終わらせたのが。それで秘密基地によってみたというわけだ」

そして周りを見るとやはり最近の漫画など色々あった、俺はそれをみながら百代を撫でていた、てか最近の俺の趣味、百代を撫でるだろうな

百代
「わふぅ～」

百代も何処かの犬のように、俺に体重を預けるのでそのままだ、てか寝ているやはり毎晩に近いぐらいが効いているのだろう、俺も結構眠いこともあるがどうにか大丈夫のようだ、やはり一緒に寝るのが増えると寝れないものだな。ちなみに今いるのはいつものタンスの上ではなく、普通のソファー。みんながいないのでこういうことだ、まあロボットはいるけど

クッキー
「はい、紅茶だよ。今日はアールグレイだから、それじゃあ僕は上の階にいるからなにかあったらってこの二人にそれはないか、それじゃあね」

彰人
「ああ、助かったぞクッキー」

そういうとロボは消えていった、そしてそれと同時に来訪者が来た。
それは

大和
「お、姉さんに兄弟か……帰ります」

彰人
「いいよ、どうせ百代はこうだから」

百代
「Z～Ｚｚｚ、彰人～」

大和
「ああ、夜のが効いているようにしかみえないのだが、兄弟」

彰人
「否定はしないよ、実際そうだからな」

大和
「兄弟はやはり絶倫か」

彰人
「百代限定な、まあ百代の前でこんなことは言えないけどさ。それにしてもここは変わらないな、相変わらずの風景」

そういいながら俺と兄弟は川神の夕暮れを見ていた

百代
「……あっ、あきｔ、ご主人様、そ、そんな激しくしてはっ、あ、

あ、いえ嫌では……Ｚｚｚ……」

大和
「えっ……兄弟？」

彰人
「黙秘する」

##第七十一話##（後書き）

来週に試験があるので、申し訳ありませんがおやせていただきます。
それでは次回の更新はたぶん五月の２９ぐらいになると思います

##第七十二話## （前書き）

今回は依頼の巻きです。

##第七十二話##

Ｓｉｄｅ　キャップ

今日は六月の、俺は今日も行われる依頼のためにいつもの教室に向かっていった、新生の風間ファミリー、しかも箱根で進化した俺らを見せてやりたいがために今回の依頼を受ける勢いで来た、そしていつものハゲもいるようだ

ルー

「今日も集まっているようネ、それじゃあ今日の依頼はストーカーだよ。今回は依頼主自らの説明ネ」

そして来たのは一年生だろう、緊張しているのか顔が強張っていた。

一年生

「こんにちは、一年Ｃ組の大和田伊予です。実は私の元にこんな手紙が」

麻呂

「それでは麻呂が読み上げるでおじゃる」

そして歴史教師がそういいその手紙を持ってそしてこう言った。

麻呂

「伊予、お前が好きで好きでたまらない。毎日君のグッズを拝借して雄汁をつけて楽しんでいる。僕の愛が届きますように僕の陰毛を送ります」

準
「うわぁ、これはそれなりかなりキモいな」

ルー
「グッズとは私物の事ね。この件に関してはグッズで統一するネ」

一年生
「ストーカーを捕まえて辞めさせてください……」

キャップ
「なんか心当たりとかあるのか？」

伊予
「いえまったく……」

弓
「ついてきている気配は？」

伊予
「それも全く。私自転車が好きで、それで通学も自転車で来ているので、つけられている感じはありません」

キャップ
「確かに、それだと走っての追跡なら目立つしなぁ」

伊予
「気味が悪いのがグッズを楽しむって所なんです。別になにも盗られていないんです、縦笛も体操服も。それに靴も教室に避難させてありますから」

準
「おいおい、無事って言っても使われてそのまま返されているわけじゃないだろうな？」

伊予
「教室に監視カメラを設置しましたがなにも移っていませんでした」

準
「家にあるグッズかもしれないぞ」

伊予
「家にはお母さんもお父さんもいますから、それに結構セキュリティも硬いですし」

キャップ
「教室の監視カメラを知っている奴じゃないか？知っているが故に写らないとか」

伊予
「いえ、監視カメラの事を知っているのは女子だけですから」

準
「雄汁っていうぐらいだからレズじゃないだろうな」

キャップ
「その手紙はどこに入っていたんだ？」

伊予
「私の空の靴箱に」

準
「靴は持って帰っている？」

伊予
「もちろん」

キャップ
「お前よく思いつくな、もしや！」

準
「誤解を受けるような言い方するな！……てことは、もしかしたらグッズのほうはフェイクなのかもしれないな。君が怯えるのを楽しんでいるんだろう」

伊予
「そうかもしれませんが…怖くて。どうかお願いします！この人を捕まえてください」

ルー
「頼み料は上食券５０枚ね、今回は学校も困るからねこういうことは」

キャップ
「そういうことなら一肌脱ぐぜ、５０枚」

弓
「４９枚」

準
「４８枚」

そして競りはドンドン加速していき

準
「３８枚」

弓
「３７枚」

キャップ
「３０枚！！」

ルー
「３０枚！他はいないカ？ならば風間落札ね」

準
「またお前らの所か。まあモモ先輩に彰人じゃ、それでも大丈夫か」

キャップ
「へっ、そのとおりだ」

麻呂
「風間よ、しっかりの」

伊予
「よろしくお願いします」

キャップ
「おう、任せておけ。俺らが完全解決してやるぜ、なんて言ったってなおれたちは風間ファミリーだからな」

side out

――金曜集会

今日は普通に金曜集会の日だったのだが、なんでもキャップがまた依頼をもってきたらしい。

キャップ
「――って感じが今回の依頼だ」

なんともストーカーとは

京
「ストーカーとかホント迷惑な行為だね！」

大和
「ホントだよな！」

兄弟が京を睨んでいた。

京
「どうして見つめるのかな？頭が沸騰しちゃいそうだよぉ～」

大和
「ある意味フットーしているのかもな」

キャップ
「頼み料はあのままいくとズルズル行きそうだったんでな、区切りよく３０枚だから一人三枚だな。どうだやるか？」

まゆっち
「やらせていただきます！！」

一番最初に参戦したの意外にもまゆっちだった、てか

彰人
「すごい気合の入れかただな」

まゆっち
「はい、実はその大和田さんって言うのが、もしかしたらお友達になれそうなかたなんです」

彰人
「おお、それは本当か」

まゆっち
「はい、それで最近元気がないな、と思っていたのですがまさかこんなこととは。私、頑張りたいと思います」

彰人
「よし、まゆっちのお友達候補のためで、俺も一枚かむぞ」

百代
「彰人が参戦なら私もそれについていくまでだ」

クリス
「正義の名がストーカーを許すなと言っている」

そしてなし崩しに全員が参戦ということになった

モロ
「それでどうやってやるの？やっぱし大和田さんを見張ってみる？」

大和
「いや、その必要なないと思うぞ。京、どう思う。お前ならたぶん来ているはずだ俺と一緒で」

京
「うん、ピクンピクン来ているよ」

どうも兄弟には作戦があるらしい。

大和
「まあ月曜の朝にたぶん全ての決着がつくと思うぞ」

そういうと兄弟は不敵な笑みをうかべ今日の集会は解散となった。
そして俺らの帰り道、一子はそのままダッシュで家に帰っていったのでいつもの通り俺と百代の二人である

百代
「しかし今回の事件の犯人は酷いな」

彰人
「まったくだな、普通ストーカーする前に告白しろよ……」

百代
「まだ、告白していないとは言っていなかったぞ？」

彰人

「その依頼人が思うところが無いと、いうことはそうだろう、普通に告白されていればそれを言うだろうし、まず俺だったらそいつを疑うしな」

百代
「彰人は相変わらず頭が回るな～それにしても弟のあの感じはなんだったんだろうな？」

彰人
「……俺の予想だと京だろうな、間違いなく」

百代
「…可能性大だな」

そして六月の二十三日、兄弟の言う月曜日となった。俺らは朝のＨＲが終わると下駄箱で合流することになっていたので、すぐに合流した。

キャップ
「それで、軍師大和、これからどうするんだ？」

岳人
「そうだぜ、大和。なにもそのグッズは盗まれていないんだろう？上履きとかさ？」

モロ
「そうなると、捨てた生理用品とか、ちり紙ってこと？」

百代
「モロロ、私は今おもいっきし引いたぞ、それはさすがに私でも引

いたぞ。彰人の腕に居なければお前をおもいっきし殴っていたぞ」

モロ
「か、可能性を言ったまでだよ。それにしても彰人が居てよかった」

京
「う～んモロはいい線をついているけど、それだと他の人のもあるからそれは無いと思うよ？」

モロ
「ストーカー道も奥が深いんだね」

大和
「下駄箱、それに教室、そして家の私物じゃないとすると、あれぐらいだろうな」

兄弟はそう言いながら、下駄箱の靴を取り出した

大和
「ついてこいよ、下手すれば丁度、相手がそのグッズで楽しんでいるところに会えるだろうからさ」

そして俺らは靴をはくと大和についていった、そしてついた場所は、それは

一子
「駐輪場？」

そうそこは川神学園の駐輪場だ、そして兄弟の勘は的中した。

ストーカー
「ぐふふ、ぐふふ、これが伊予ちゃん自転車」

完全にストーカーですといって言うようなやつが登場。

ストーカー
「ここにあの御尻が」

完全に気持ち悪いやつだった。そして大和がなぜここだとわかったか教えてくれた

大和
「俺もやつの気持ち、ゴホン。ある意味被害者だったからな」

京
「あれは茶目っ気でやっただけだよ」

大和
「俺のゴウラム（↑チャリ）のサドルを取ったのを忘れるか、お前は」

なるほど、大和も同じ被害者だったと言うことか。確かにこれはあれだな、体験者が居ればそうりゃあはやいだろうな。

まゆっち
「辞めさせないと！」

そして動いたのはまゆっちだ、たぶんこの姿をみせれば友達も増えるだろうに。まあ本人の自覚がないのじゃしょうがないがな。そしてまゆっちがストーカーと接触

まゆっち
「辞めなさい！！」

ストーカー
「やばっ、ミツカちゃッタヨ。逃げなきゃ！」

まゆっち
「させません！」

ストーカーは逃げようとした、しかし回り込まれた。

ストーカー
「は、はやい！」

松風
「いまだ、やっちまえまゆっち。切り捨て御免だ」

そしてまゆっちは相手の服だけを切り、見事パンツ一枚にさせた

彰人
「ほう、六撃とは中々の速さ。やはり抜刀の状態が本気か」

俺らはまゆっちの剣裁きに感心しながら、相手の犯人に近づいた。

百代
「こらこら、まゆまゆ。ちゃんと痛い目に」

ストーカー
「ひいいいいい」

百代
「彰人！」

百代は気持ち悪いものを見たみたいな感じで俺の腕に抱きついてきた、確かに俺もさわりたくはないのでここは

彰人
「岳人、お前の制裁を見せてやれ」

岳人
「おうよ！、このバーニングアタックを！（※ただのパンチです）」

ストーカー
「ひぎゃぁっ！！」

そして身元の確認のために俺の切られた制服から生徒手帳を取り出す

彰人
「なになに、一年C組ね。なるほど同じクラスか、ってまゆっちも一緒だよね」

まゆっち
「あ、あれれ？」

松風
「ど、度忘れなだけだぞぉ」

おいおい、松風が弁護してどうする。そしてこのストーカーのいいわけが始まった

ストーカー
「最初は見ているだけでよかったのですが、段々それが止まらなくなって。だから私もアイの被害者なのす」

しかしそんな事を

大和
「そうか……だけどな」

許すはずもなく

大和
「罪は、罪だから。さ、職員室にいくぞ」

ストーカー
「ちょっ、き、貴様ら覚えて」

相手がそう言う前に俺はそいつを上に挙げた、久しぶりに屑を見たので、俺は今回はちょいと痛いことをした。

ストーカー
「ぎゃ、ぎゃっふ！」

彰人
「三階から逃げるも、無様に木に当たったって感じだな、おい」

そこには切り傷が山ほどついていた

ストーカー

「ごめんなさい、さっきのことは取り消しますので、どうか命だけは命だけは、ガクシ」

モロ
「あ、気絶しちゃった」

キャップ
「なんかあっけなかったな」

大和
「前フリが大きかっただけだろう」

彰人
「……それじゃあ帰るか？」

そして俺たちは教室に戻った。

Ｓｉｄｅ　一子

あいつがさっきあの男を上げた時、私にはまるで蛇があの男を咥えてあげたように見え、そして上げてそのまま蛇が痛めつけたように見えたのは……そしてその時のあの彰人の顔はまるで

一子
「蛇」

私は、彰人の底知れない何かを見たような気がした。そしてそれはお姉さまも一緒のようだったが、お姉さま普通に笑っていた、たぶん彰人のあの技をはじめてみて興奮しているのだろう。だけど私は怖いと思った。

彰人
「おい、一子いくぞぉ」

私はいつもの彰人の声に安心して

一子
「あ、ちょっとみんなまってよぉ」

教室に戻るのであった。

##第七十二話##（後書き）

大かわかみ祭りは行きたかったです……

##第七十三話##（前書き）

最近モンハン2Gにはまっている時代の流れについていっていない作者です

##第七十三話##

今日は絶好の夏日となった、この水上体育祭。てかこれはすごい、なにが凄いって

百代
「彰人～♪、フフフフ」

布があるにもかかわらずこの自己主張の強い胸が俺の理性を削る、これは新手の精神鍛錬だった。ちなみになぜ百代がここにいるかと言うと

一子
「まさか、お姉さまのクラスと私たちのクラスが隣同士なんてね」

一子がそういうがその通りなのだ、これはなんも上からの指示とかではない、タブン……

大和
「まあたぶん学長が姉さんの面倒を任せただけじゃないか？」

そういう兄弟だが、これはこれで

ヨンパチ
「リア充って爆ぜればいいと思うな僕」

岳人
「そうだな、ムカムカムカムカ！」

えっとこれはこれで、戦力がわかれそうだな

百代
「あ～き～と～ほら、お前の女が甘えているんだぞ～もっとくっ付け」

彰人
「あとでしてあげるから、まだ始まっていないからね。開幕式」

俺らは全員水着でこの海辺に待機しているのだが、まだ開幕式が始まっていない、理由はなぞだ。

Ｓｉｄｅ　先生ズ

教師全員は現在、生徒の出席状況の確認そして

鉄心
「うむ、これはよい光景じゃのう。目の保養じゃ」

宇佐美
「そうですね、これはこれで美ですよね」

鉄心
「しかし、全員がスク水ではなのが唯一の心のこりじゃがなぁ～」

宇佐美
「なにをいいますか、水着を着てくれるだけ御の字ですよ、それにあれとかどうです結構いい体型だと思いますよ」

鉄心

「ど、どこじゃ、千里眼でみてやるぞ！」

そして川神流の奥義を使い生徒を見る学長。

ルー
「なにをしているのです」

そして普通にそのストッパーのルー先生が二人を注意するが

宇佐美
「硬いこというんじゃねぇよ、ルー」

鉄心
「そうじゃ、そうじゃ」

ルー
「奥義を乱用しなければいいだけのことです……」

結局呆れてしまい、そのまま放置ということとなった。ちなみに梅先生は

男子生徒
『水着！水着！水着！水着！』

男子の水着コールに答えていた。

Ｓｉｄｅ　ｏｕｔ

俺らは座りながら、梅先生の水着コールを見ていた。

彰人
「あれは、なんだ？」

京
「一年前から、ああだったよ」

彰人
「はぁ～」

そして、俺らのクラスのメンバーが主体となってコールしている、まあうちの担任でもあるわけだしな。しかし意外な人たちもコールしているな。例えばクマちゃんとか、完全に趣旨がわかっていないようだったし、モロは……まあむっつりだから仕方がなく、

忠勝
「水着～水着～」

彰人
「お前もかよ、忠勝」

忠勝
「ああ？ああ、宇佐美（オヤジ）がうるさくてな、こうしろって」

彰人
「ああ、なんとなく分かったよ。それよりも兄弟はいいのか、コールしなくて」

大和
「あれはあれで、一応参加したほうがいいのかもしれないけど、たぶん梅先生のことだろうから、観察しているぞ」

そして大和の言うとおり、梅先生は観察をしていた

梅子
「（直江は、やはりここは静かにしているな、それに比べ師岡が意外と言っているな、そして御剣は、川神と一緒か。やはり学長の言うとおりあの川神には御剣がいいようだ、ああも黙っていてくれれば我々教師陣も動きやすいからな）」

梅子
「それでは、今日は私も……水着で指導してやる！」

そして梅先生がいつものスーツを脱ぐとそこにはすでに水着を着用していた、てか

彰人
「あの人、やる気まんまんじゃないかよ……しかし際どい「アキト」うっ！な、なんだ百代」

百代
「ああいうのが、いいのか彰人？ああいうのが好きなのか、彰人！！」

彰人
「あ、あえ、えっとだな…結構好みかも……」

百代
「そうか、なら今度はお前が私の水着を選ばないとな。持っているのでは誘惑にかけそうだ。だが、私が隣にいるのに、失礼だろう？」

そしてさらに俺の腕に力を入れる百代。

彰人
「あはは、すまんすまん。お前を見ているからそれで「それではこれより開幕式じゃ！」……いくか？」

百代
「うぅ～さすがに開幕式はこれではいけないな。それじゃあな、彰人」

そして俺らはクラスのほうに並ぶこととなる、ちなみになぜか大串と準がすでにボコボコだったんはなぜだろう？

そして開幕式が終わり、俺らはクラスＨＲみたいな作戦会議が始まりそうだった。

大和
「梅先生、今回の優勝商品ってなんですか？」

どうも今回のこの体育祭では一位、二位、三位ぐらいまでは優勝商品があるらしい。

梅
「うむ、今回は水に関係するものらしいぞ。まずは温泉旅行のペア宿泊券、シーフードピザのタダ券、はたまたペットショップの割引券など多彩だな」

彰人
「温泉か……、おい兄弟」

大和
「あ、ああどうかしたかというか、やる気あるな……」

彰人
「今度の夏休みは温泉だな、百代と」

大和
「俺もヤドカリにご馳走のために」

そして俺と兄弟はがっちり握手をして、今回の体育祭は優勝することを決めた。そして最初はよくある、あれだ、不安定な足場でのレース。

彰人
「最初はキャップだ、いけるな？」

キャップ
「もちろんだぜ」

千花
「なになに、今日は御剣君が軍師？」

彰人
「いや、そう言うわけでもないぞ。まあここでは副長って感じかな」

大和
「まあ、それじゃあキャップは一位が確認できているから、次は「お前だろう？」やはり兄弟だとやり易いな、それじゃあ次は俺か」

そしてレースを見てみてわかったことが

彰人
「なあ、忠勝。これって記録に残らないんだよな」

忠勝
「……ああ、だからあのS組があんな優雅なんだよ、商品にはまったく興味がないようだし、それにこれは一種の正月の特番のようなものだ、記録に残らないものには意味がないのならあいつらは動かない」

大和
「そうなると、完全に三グループに分かれるな?」

真与
「三グループですか?」

彰人
「そうだ、まずは俺らのようにやる気のあるところ、そしてやる気のないところ、そしてお祭り騒ぎがしたいところ。そうなると、次は、俺だな」

ヨンパチ
「こいつら、す、凄ぇ……なにも話していないのに、こいつらの中には同じ作戦が入っているのかよ」

クマ
「うん、ここまで息が合っているなんてね、モグモグ」

真与
「本当です、これが阿吽の呼吸なんですね」

冬馬
「そうですね、ここまで凄いと、なんか妬けそうです」

彰人
「普通に、ここにいるのはどうかと思うよ、葵君。一応ここでのスパイ活動はどうかと思うぞ」

冬馬
「これは失礼、一応F組の女性のみなさんには、挨拶したのですが」

そして後ろをみると、完全に骨抜きにされてるメンバーが数人、てか京達以外が軒並み棒全じゃないか

大和
「それで敵察ってところか？」

冬馬
「まあある意味そうかもしれません。しかしご安心ください、我々のS組はまったく優勝する気がないので」

彰人
「まあもしかしたら“偶々”優勝しちまうかもしれません、ってか？」

冬馬
「やはり御剣君とも一回ぐらい脳でのほうで勝負がしてみたいですね」

彰人

「そんなことがあればな。それじゃあ俺はいってきます」

そして今度の競技はただの水泳ではなく、障害物ありの水泳。しかもこの体育祭の注意書きに、俺は一種目、そして百代はなんと種目にでるな、となっているのが今回の体育祭。理由は鉄爺から一言「お主は加減ができるが、負ける気がないからのう。と、いうことでお主は一つじゃ」ということらしい。まったく酷いたらありゃしない。そして俺が準備に入ると

百代
「彰人～頑張れぇぇ」

百代の応援が聴こえた、てかあなたは自分のクラスを応援しろよと思うものも、うれしいので

彰人
「了解」

と、手を振り返してしまった言うまでもなく、そして

宇佐美
「バカップルだな、御剣。これで一位以外だったら笑いものだな」

スタートに立っていた、宇佐美先生にいやみをいわれてしまった。
そして俺は、構えてスタートした。

Ｓｉｄｅ　大和

兄弟がスタートしてわかったこと、それは

モロ
「さすが、彰人だよね。クラスによると競泳部とかも参加しているのに、完全にブッチギリで一位だもんね」

京
「まあ、モモ先輩にあんな応援されちゃあ、負けるに負けられないでしょう？」

岳人
「けど、いいのかよ。そろそろ一周遅れが出てくるぞ」

そういう岳人の言う通りで、兄弟は三人もの一周遅れをだしてダントツでゴール。その時は生徒の全員が拍手したのは言うまでもなかった。そしてそのあと姉さんに抱きつかれて、キスしていたのも言うまでもなく、全員で言った

全員
『この夫婦が！！』

たぶん、これほど川神学園の生徒がこころ合わせてなにか言うことはもうないだろう

ｓｉｄｅ　ｏｕｔ

俺は百代を抱きかかえながらそのままクラスに戻ったら

岳人
「目がめがぁぁぁぁぁぁぁ」

なぜか、岳人が走り去ってしまった。そしてやはりキスは注目を浴

びまくってやはり恥ずかしいものだったが

百代
「ご褒美だから、きにするな」

と、いうことで俺はきにしないことにした。

京
「いいなぁ～私も活躍したらご褒美欲しいな～ジィィィィイ」

大和
「兄弟、頼むから控えてくれ！」

百代・彰人
「「無理！！」」

モロ
「……そこは二人ともなのね」

そして、放送がなった

鉄心
『それではこれより、お昼休憩を挟むぞい。午後の開始はまた放送する。それでは午前中でのトップから三位までのクラスをしょうかいするぞい。まずは三位は二年S組じゃ』

やはり、もとからのS組のパラメーターが高いのでやる気がなくても競技に出ればそれなりの結果がついてしまう。

鉄心

『それでは第二位は、三年Ｂ組じゃ』

ここは俺らと同じやるきのある組だ。あとで混乱でもさせておこう

鉄心

『それでは第一位は二年Ｆ組じゃ、それでは午後の後半戦も頑張るんだぞい、いくらでも逆転は可能じゃからのう』

そして俺らの水上体育祭の前半戦は終わった。

##第七十三話##（後書き）

体育祭が甘くなる、これは仕様でしょうか、いいえ作者の妄想です。

##第七十四話##（前書き）

後半戦の開始です！

##第七十四話##

そして昼の時間となった、ちなみに昼はクラス自由のため全員がいろんなところに行っている。俺は普通にクラスのところで百代と飯とすることにした、ちなみに他はいつもの風間ファミリーのメンバーだ。

百代
「はい、彰人。あ～ん」

彰人
「うむ、うまい。それにしても今回のこれは、ちょっと味変えたか？この前とのポテトサラダとちょっと違うような」

百代
「さすがは私の彼氏。そうなのだちょっと新しいのに変えてみたのだが、口にあったか？」

彰人
「俺、今すぐに帰ってお前にご褒美があげたいぐらいだ」

百代
「♪～♪」

岳人
「……毒だ、こんな砂浜に毒があるぞ。しかも一人身にしか効かない毒が。どうにかしろ軍師大和！」

大和

「…さすがにこれを止めろというのは無理だろう。たぶん止めようとした瞬間に肉の塊が一つできるぞ「お～い、大和～つれてきたぞ」お、クリスか。まああれはあれでいつものことだし気にしなければいいんじゃないか」

そしてまゆっちもこっちに合流した。

百代

「お、まゆまゆではないか。ほう考えればファミリーが揃った感じだな。しかし、エロいなぁ～まゆまゆは、まあ私も負けてはいないがな。もちろん彰人の目のためだけだけどな」

まゆっち

「これって金曜集会だけじゃなかったんですね」

京

「あれ、一年のまゆっちの方にも二人のことは広まっていないの？もうこの二年と三年じゃあ有名なのに、このバカップルは人目もはばかるって」

まゆっち

「あ、噂は一杯あるんですが、さすがに朝だけでもお腹一杯なので。まさかずっとこうとは」

一子

「おいしいおいしいお弁当♪」

一子は今日も百代の弁当をほお張りながらご機嫌のようだ。そして俺らが食べているとS組の連中が来た、これもまた意外なことだ

岳人
「なんだよ、お前ら？」

彰人
「はぁ～はいはい、岳人もそんなに喧々しない。それでどうかしたのか？」

冬馬
「いえ、ご一緒にどうかと」

クリス
「お、マルさんまで！」

そこにはこの暑い中に軍服を着ているマルギッテが後ろにい、そしてメンバーを確認するとそれは葵君に、準、そしてユッキーだ。

キャップ
「いいんじゃないか、別に。どう思う軍師大和」

大和
「俺もキャップの意見に賛成だな。今は昼だしさすがにここで勝負はないだろう？そうだろう葵君」

冬馬
「ええ、それに私たちに優勝の考えはありませんので。それにここにはモモ先輩、そして彰人君がいますからね。騒ぎを立ててもこちらに勝ちはありませんから。ほらユキ、行ってきていいですよ」

そしてユッキーがこっちに来た

百代
「おお、くぁわいいな～ユキ。しかし彰人はやらんぞ！」

いやいや、それで抱きつかないでくれ。本当に百代の汗とか髪の匂いとかで俺の理性が削れる、てか

百代
「この匂い、彰人の匂い！！もうっ……堪らないな～」

先にこっちがだめだった、そしてそれを見て苦笑するユッキー

小雪
「もうモモ先輩も、私はそんなことしないよぉだ。それよりも一緒にごはんにしようよ、二人だけじゃあつまらないでしょう～ま、お二人でラブラブもいいけど今日ぐらい、みんなで食べようよ」

岳人
「モロ、ここに天使がいるぞ」

モロ
「う、うわっ！岳人、そんなに号泣しなくても」

そんなにあいつには目の毒だったのか？

百代
「そうだな、そろそろ二人っきりもな、彰人？」

彰人
「百代がいいなら。それじゃあ輪に入れさせてもらうよ」

そして全員での食事に変わった。まあキャップとかは先に食べ終わるとすぐに海に遊びにいった、それは一子も一緒だが。

小雪
「私と同じ？」

京
「うん、たぶん同じ」

小雪・京
「「イェーイ」」

ユッキーと京はなぜかハイタッチをしていた。てか普通にユッキーの弁当がマシュマロって

彰人
「おい、準。ユッキーの弁当はこれはどういうことだ？」

準
「あ、ああちゃんと飯も食べるのだが。てか食べ終わって普通にマシュマロを持っているだけだから健康面は安心しろ。一応ここには医者の息子が二人も居るんだぞ」

彰人
「はい、あ～ん」

百代
「あ～ん」

準

「話をきけぇ～このバッカプル「準」、う若」

冬馬
「カップルの二人を邪魔するもではありませんよ、ねぇユキ？」

小雪
「そうだ、そうだ。僕のヒーローとヒロインの邪魔をするなハゲ～」

マルギッテ
「しかし、彰人殿もこのような顔をするとはやはり恋とはすごいものですね、お嬢様」

クリス
「そうだな、マルさん。まあ毎日というのはさすがにきついがな…」

マルギッテ
「お察しします」

彰人
「なあ、なんでマルは軍服なんだ？普通に考えたら即戦力だろうに？」

マルギッテ
「う、そ、そのですね／／／」

マルギッテの顔が赤い、あ、そういうことか

彰人
「あ、すまない。デリカシーがなかった。」

マルギッテ
「いえ、気遣いありがとうございます。どこぞのハゲ頭はわかりませんでしたから」

そういうと全員が一斉に準のほうを向いた。てかキャップはわかっていないようだがな、ガキなのでしょうがないと。

冬馬
「どうです、大和君。今度は一緒に組んでみませんか？そして御剣君と勝負でも」

大和
「……勝算がないな」

冬馬
「やはり僕と同じことを考えていますか」

彰人
「おい、そこの軍師二人。なんだ、なんだ、俺をバグキャラみたいに言いやがってさすがに二人を相手となると俺も骨が俺そうだぞ……」

冬馬
「それはどうでしょうね、私たちは確かに頭なら同等かもしれませんが武となればそれこそモモ先輩の力を借りなければ無理でしょう？」

大和
「そういうことだ、俺らが合わせて兄弟の脳なら、兄弟の武は誰が

補うかによって全然変わる。それに姉さんが最近ストレスがない理由は、兄弟がおもいっきし戦っているからだろうから」

百代
「なんだ弟、私がまるで欲求不満だったようないかただなぁ～」

京
「自覚なかったんだね。モモ先輩、高二も高一も彰人が消えてから結構荒れていたよ？まあ高一はもう最後のほうだったけど……」

小雪
「うんうん、僕が高校一年生のときに挨拶しに行ったらそれはそれは大変な感じだったよ。もう二人とも離れちゃだめだよ」

彰人
「う、そういわれると未だに言い返せないんだよな、これが。まあそれに離れていたけど」

百代
「まあ寂しかったが、会ってみれば、まったく変わっていなかったからな。だからまあもしはなれることがあっても何も変わらないだろう。と、いうかそれが普通なのかもしれないな。まあそんなことはないだろうがな」

冬馬
「なにも変わらないものですか……いいですね、そういうの」

準
「若……そうだな、いいもんだな」

鉄心
『ピンポンパンポーン、業務連絡じゃ、彰人と百代よ。ちと本部に来てくれ、学長命令じゃ、ピンポンパンポーン』

そしてなぜか放送で呼び出された俺と百代、俺らはすでに飯が食い終わっていたので、すぐに起き上がった、訂正する。俺だけが起き上がって百代は俺の腕にくっ付いていた

彰人
「なんだろう、鉄爺？」

大和
「なにか、したのか？」

岳人
「間違いなく、節操がないとかじゃないのか？」

彰人
「岳人、丁度お前にピッタリの墓場があるぞ。どうだ海の藻屑になるか？」

岳人
「もうしわけありませんでした！！」

そして瞬速で土下座をする岳人、そしてそれを見て全員爆笑。

モロ
「それよりも早くいった方がいいよ、二人とも」

彰人

「そうだな、それじゃあいくぞ、百代」

そして俺らは本部に向かって足を運んだ

そして到着ちなみに先生達のメニューは冷やし中華とこの温度にピッタシの料理だった。

百代
「それでジジイ、人が折角彰人とラブラブしていたのに邪魔するとはどういう了見だ？」

彰人
「百代も、そんなにカリカリしない。それで鉄爺どうかしたの？もしかしてなんか力仕事？」

ルー
「ああ、それがネ。クレームがきたんだよ二人の」

彰人・百代
「「クレーム？」」

宇佐美
「ま、簡単にいうとこの暑い中、熱すぎるようだぜお二人さん。まあ生徒達も学校じゃあ見慣れていたけどこんな暑い中では見慣れていなかったのだろうな。おじさんとしても羨ましくて蹴り入れたいぐらいだよ」

百代
「そんなのは私達の勝ってで「分かりました」え、彰人？」

彰人
「ええ、それじゃあこちらは抑えますので、まあ実際の条件が欲しいのなら、こちらとしては手を繋ぐぐらいで抑えますよ」

百代
「そ、そんな彰人～私に死ねと言っているのか…ただし、あ、あれ彰人、こ、怖いぞ……」

彰人
「こちらが譲渡するんですから、分かっていますよね、鉄爺？」

鉄心
「く、こういうときの彰人の顔は怖いのう。宇佐美先生、どうにか」

宇佐美
「パスします。それよりもその条件を飲んだほうがいいかと……ね、小島先生」

梅子
「う～ん、確かに我々は今確実に馬に蹴られそうな事を言っていますし、御剣のその譲渡の案を聞いてもいいとおもいますよ」

彰人
「と、言うことでＯＫかな鉄爺」

鉄心
「うむ、それではお主らは手を繋ぐまでとする、それと会話については自由じゃ。それぐらいしないと後が怖いからのう……それで彰人よ条件とは？」

彰人
「簡単だよ、鉄爺。俺に一回だけ鉄爺と同じ、ようは学長と同じ権力をくれればいいよ♪」

ルー
「な!?まさか、権力の一回の使用……間違いなく」

百代
「乱用だろうな、彰人のことだし。だが私はそれでもいいと思うぞ、なんていたって私は彰人の嫁だからな!」

彰人
「どうします?学長?」

鉄心
「う、うむ。乗ろう」

そして俺らはそれを聞くと

彰人
「と、言うわけだ。百代、離れなさい。もし破れば今日は一緒に寝てあげないから、しかも破ってもお仕置きもなし、そして無視、というメニューだからね♪」

百代
「……気をつける……それじゃあ、手を繋がせてくれ。すでに不安だ」

彰人
「はいはい」

そして俺らは戻っていった。

Ｓｉｄｅ先生ズ

梅子
「まさか、御剣が直江と同じ軍師の素質があるとは……これは完全に彼に一本取られましたな」

宇佐美
「あいつ、どんな修羅場渡っているんだよ……」

鉄心
「やはり、そのままのほうがよかったかのう？」

ルー
「と、言ってもさっきから生徒の方で、『あの二人を止めてください』が、百件に上っていますからどうにもできませんよ」

そして先生達の間で御剣彰人との交渉は極力避けるようと伝達が回ったのはこのすぐ後だった。

##第七十四話##（後書き）

次回、もしかしたらあの人が出るかもしれません

##第七十五話##（前書き）

と、言うわけでペースを落としたどうも作者です！

##第七十五話##

さて、後半戦のスタートなのだが、なんだこれは？さっき発表されたのは間違いなくトーナメント表。しかも今回は

大和
「ビーチバレー？」

彰人
「……間違いなく鉄爺の趣味だろうな。これに関しては」

真与
「それでは直江君、御剣君、選抜選手を決めちゃってください」

大和
「委員長いいのか、俺らで」

真与
「はい♪」

彰人
「それじゃあ、クリスと」

大和
「京だな。この場合は、二人ともやってくれるか？」

クリス
「承知だ」

京
「大和のご指名ならもう百万力だよ！いくよクリス」

クリス
「あ、ああ！！」

そして二人はビーチバレーの登録に向かったちなみに他のクラスを見ると中々だったりするのがS組だろうな、あの不死川とあずみ。さらに一年のあの弓道部、さらに三年F組でも弓道部の部長など意外とここは力を入れているようだ。

そして結果は俺らが

京
「く、く、く。私は大和に勝利をささげる女戦士」

彰人
「と、言う感じで一位か。さすがは兄弟」

大和
「なにがさすがなのかは後で話してくれるか兄弟、まあそれにしても二人ともご苦労だった。しかしまさか一位とは。俺らでもここまでいい成果がでるとは思わなかったぞ」

そして次の競技は

彰人
「なんだ、この益荒男ってのは。普通の意味でとるなと雄々しい強い男と言う意味になるが、たぶん違うだろうな」

俺はそう思っていると放送からこの競技についての説明が入った。

鉄心
「これは、今回が初めてとなる競技じゃ。これは名の通り益荒男を決める戦いじゃ、ルールは簡単じゃ、各クラスの男子の代表を決める、そしてそれを他クラスの女子がある意味で攻めるのじゃ。理性を削ると言うなのは」

ようは、たぶん男として反応したら負けなのだろう。

鉄心
「そして反応が起きるとその代表は最初につけたセンサーによりその分だけの電撃を喰らうのじゃ。ちなみに“一応”死にはせんぞ。それでは各クラスで代表者を決めよ、そしてクラスの組み合わせは後で発表するぞい」

そして俺らの作戦会議となった。

モロ
「うわぁあ、僕はパスだよ、こんなのやったら死んじゃう」

立花
「猿とか論外だからね、瞬殺でしょうし」

ヨンパチ
「うぉぉお、その意見に反対できない俺がいる！」

岳人
「そうなると、キャップが適任かもな。性にまだ目覚めていないこの希少種だしな。どうだキャップ」

キャップ
「パスだ！他のクラスの女子に囲まれても気持ち悪いだけだ」

忠勝
「右に同じく、絶対やだ」

彰人
「そうか、そうなる兄弟ぐらいか、適任は……」

真与
「御剣君はどうなんでしょうか、モモ先輩以外なら大丈夫ではないのですか？」

彰人
「痛いところをつくね、けど俺も百代と一戦した後と言うわけでもないしな、こういうときはいつも京のあの色気ありありの攻撃を耐えている兄弟の方が適任だろう、どうだ兄弟？」

大和
「ああ、自信はあるぞ。それに俺が拘束されてもそっちの指示は兄弟に任せられるから安心だろう。それじゃあ俺が代表ってわけで」

ヨンパチ
「もしこれで一瞬だったらその瞬間、十字架につるしたまま燃やしてやるからな」

大和
「大丈夫だよ、兄弟の見立てに間違いはそんなに無いから」

そして兄弟は相手さきに行った。その相手先とは……２－Ｓだ。

――――その頃の２－Ｓは

小雪
「う～ん、益荒男ねぇ～まずはトーマは除外っと。」

冬馬
「はいそうですね、一瞬でしょうから。それではどうしましょうか、どうですか英雄？」

英雄
「ふむ、しかし友の頼みでもこれは辞退させてもらおう。磔にされるなど、我のプライドが許されん」

不死川
「もっともらしいのう～」

準
「なら、俺が行こう」

不死川
「お主はロリでは一瞬であろうが！」

準
「確かに普通の女に反応しなくてもロリには効果があるが、しかし俺には秘策がある。それを使えばいい。シンプルだが効果は覿面だ」

不死川
「軍師として葵君、どう思う？」

冬馬
「準が秘策があるのなら、私はそれを信じますよ」

そして勝負が始まった、ちなみに俺らの対戦相手は準だ。

彰人
「あ～あ、よりにもよってうちのクラスにくるのか準」

準
「ふん、彰人だろうが。今の俺は止められないぜ」

ヨンパチ
「へっお前がロリなのはもう常識だからな、よし委員長を」

立花
「真与、井上君の前でこのキャンディーなめてきてくれる」

真与
「え、なめればいいんですか？」

そしてなめ始めるが

立花
「な、なんで反応しないの！？」

モロ
「う、うわぁっ！目を閉じてるよ。これじゃあむりだぁ」

準

「俺はいま、闇の中にいる。これならば俺の煩悩も消えるであろう」

岳人
「ただの目くらましだろうが！　しかしどうするんだよ、軍師彰人。ここはお前が頼りだ」

彰人
「はぁ〜、それじゃあ準には悪いけど電撃を受けてもらおうっと。京、これを言ってくれるか？」

そして俺はあるものを京に渡した、そして京は合点がいったようで。

妹ボイス
「にいさま〜、にいさま〜」

準
「！　！　な、なんだこの甘い妹ボイスは、こんな声で一緒にお風呂など言われてしまったら、ジャブジャブ、そしてにいさまのこれはなんですかといわれて、しまうぅぅぅ〜」

妹ボイス
「にいさまの……大きいのですね」

準
「もっと上の展開だ！！！！！！！！！！！！！！！」

そしてたぶん雷ぐらいの電撃が、この場をつつんで、準はあっけなく担架に運ばれていった、そして俺らの益荒男は終了したそんな時にあるものがこの地に来たようだったので。

彰人
「すまん、委員長。俺トイレで少し離れる」

真与
「あ、はい。ご苦労様です」

そして俺はすぐにトイレに行くフリをして、どっかの海岸に行った、
そしてそこに居たのは

釈迦堂
「あ、ああ。そうだ、今から来てくれ」

そうあの釈迦堂師範代だった。俺はすぐにその場にかけた、もちろん気を殺して

釈迦堂
「へっ、相変わらずいい面だな、彰人」

彰人
「お久しぶりですね、釈迦堂師範代」

釈迦堂
「元な、元。今じゃあただのぷー野郎だがな。それでっと、そう言うことか、彰人」

彰人
「アナタには聞きたい事もありますからね、おとなしく捕まって欲しいものですよ。さすがに今回は師範代を二人も伸ばしていますからね、逃がしませんよ」

釈迦堂
「おっと、こりゃあまずいっと。彰人が本気になれば俺なんて二秒も持たないからな、しょうがない「おい、師匠来てやったぞ」お、ちょうどいい、これ着てくれ、すぐにな」

彰人
「させるか！」

俺は蛇を出して、その後ろから接近してくる二人を拘束しようとするが

釈迦堂
「おっと！そういかないぜぇ、彰人。こいつらは俺の今の教え子なんでな、そう簡単にやられては困るんだよ」

彰人
「あなた、まさか！？」

釈迦堂
「そのまさかだったらどうする？え、神代の後継者さんよ」

彰人
「蛇、解放。そういうことならば今回は本当に逃がせませんよ、釈迦堂さん」

ツイン
「お、おい師匠。なんどよこの気は？あたいらなんて簡単にこえているじゃねぇか？」

お姉さん

「まさか、あたしらにこれと戦えって言うんじゃないだろうね」

そして二人はそばにあった着ぐるみを着てもうすでにスタンバイだった。

釈迦堂
「あほか、こいつに勝てる奴なんて世界にはいねぇよ、お前らはあっちの学生を相手して来い。俺はこいつとちょいと遊んでいるからな」

彰人
「遊ぶ暇があると思って？」

釈迦堂
「それじゃあ、いきな。俺は久しぶりの本気いくぜぇぇぇ！！」

そして二人は消えて、俺は目の前の殺気を全力であてる釈迦堂さんの顔を見る。すでに蛇を解放している、ならば。

彰人
「イケ、蛇。貴様の本気をみせてやれ」

釈迦堂
「へっ、まだ俺ぐらいじゃあ、本体とも当たれないってかよ！だけどな、いい相手だぜ、この蛇」

蛇の尻尾に釈迦堂さんは足で答えていた。しかも普通にやはりこの人と、この黒は相性が良すぎる、そのせいで蛇のダメージもあまりないようだ。俺はすぐに蛇をこちらに戻して

彰人
「スネーク」

釈迦堂
「おっと、その技はまずいってな」

彰人
「バイト！！」

俺の攻撃に釈迦堂さんは必死に逃げた、俺が当てたのは岩のようだった。

釈迦堂
「おいおい、岩をも溶かすってかよお前の技は、まあよくもこうも膨れ上がったなお前のその黒さも。へへ、どうだい完全なる黒は？」

彰人
「完全な黒はあなただ、俺はそこまでおちていない」

釈迦堂
「ははははは、そりゃあ傑作だぜぇ、お前さん、あの紛争地域でなにをしてそしてなにを行ったのか？忘れたとは言わせないぜ？」

彰人
「な、なぜそのことを？」

釈迦堂
「へへ、お前さんが兵隊を全滅、しかも殺さずに完全なる鎮圧をしたのを俺がしらないわけねぇだろうが、その力を見せてくれよ、純粋な悪って奴をな！」

彰人
「く、ならば「まつのじゃ！」…ん！鉄爺」

釈迦堂
「ちっ、思わぬじゃまか、まあいい、どうせそろそろ撤退の時間だからな」

そして釈迦堂さんは消えていった

彰人
「く、待て！「もうよいのだ、彰人よ」け、けど鉄爺」

鉄心
「それはルーにまかせるのじゃ。さすがに使いすぎじゃぞい、この気配は百代たちも感じておる、さすがにあまり良くないものじゃ。だから早く」

彰人
「あ、ごめん。すぐに、蛇、ありがとう」

鉄心
「まさか、釈迦堂の奴がここに戻ってきているとは、彰人よ、後で報告を」

彰人
「あ、了解、けどいいの？」

鉄心
「今は、体育祭じゃぞ。はよいかんか」

そして俺は疑問が残りながらもクラスの場所に戻っていった。

##第七十五話##（後書き）

釈迦堂さんがやっとだせた、それではまだまだ行きますこの体育祭！！！

##第七十六話##（前書き）

八十話が見えてきた！

##第七十六話##

Ｓｉｄｅ　釈迦堂

ちっ、まさかあのジジイの干渉がはいるとは、ん、待てよまさか彰人のやろうそれを見越して。

釈迦堂
「ま。どうでもいいか」

ツイン
「お、どうかしたのか師匠？」

釈迦堂
「いんや、それよりもどうだった、あっちの生徒さんは？」

ツイン
「まあまあじゃね」

お姉さん
「普通ね、それよりも最初にあった坊やの方が気になるわ。なにあの気は、私たち、そうねあの辰でもあんな気はでないわ」

釈迦堂
「そうだな、俺があのジジイ以外で対戦をしたくない、唯一無二の存在だ。俺たちなんて物の全員でも十秒かからないで、終わるだろうな。ある意味あの辰子ぐらいがあいつと、いや、辰子に百代が合わされば試合らしい勝負になるだろうな。なんて言ったってあいつは……俺の憧れだからな」

そういう俺の顔はたぶん、笑っているんだろうな。

Ｓｉｄｅ　ｏｕｔ

俺は戻ってみると、すでに勝負は終わっているようだ、ちなみに俺はすでに競技に出ていたのでいても逆に手をだしたら反則なのでどの道いなくて大丈夫だったのだが

百代
「あ～き～と～」

と、俺に向かって走ってくるのは俺のハニーこと、百代。てか普通に抱きついてきていいのか、っと俺が考えている隙にそのまま俺にダイブしてくる百代。そして

百代
「いきなり、お前の殺気を感知してな。行こうとしたら爺に止められるし、まあその分抱きついていいと言われたんでこのままでいるのだがな。っとそうじゃない！どうかしたのか彰人？さっきのあの様子からだと蛇だって本気だったように思えるぞ、しかも」

俺はそういう百代の唇に指を当てて黙らせた

彰人
「大丈夫だから百代。それにこの事はあとで、院に戻ったら言うよ。どうせ鉄爺からもそう言われているし。大丈夫だから、それに心配かけてごめんな」

そして俺は力強く百代を抱きしめる、そしてそれに

百代
「うん、後でちゃんと言うんだぞ。今はお前を確認できればそれでいい、ふふふふ♪」

彰人
「ああ、百代。そろそろ離れてくれ、さすがに視線の目が痛い」

そうなのだ、現在俺と百代が抱きついているのを二年、三年のFクラス両方から見られている。しかも大体が睨んでいる、ファミリーは大体呆れていた、てか事情を知らないからただのバカップルにしか見えていないのだろう。

百代
「う～、いやだ。」

彰人
「もうすぐで終わるから。そしたら鉄爺の拘束もなくなるから、ね？そうしないと交渉した意味がないでしょ？それとも百代は俺の交渉を無駄にする気？」

百代
「……わかった……だが、終わったらおもいっきし抱きしめろよ、さっきと同じぐらいに！」

そう言うとかけて言ってしまった百代。ああかわいい、と思い俺も自分のクラスに戻ると、そこでは完全に敵視されていた。

ヨンパチ
「あ、男の敵がきた」

岳人
「ちっ、俺らがあの変な奴に当たっている間にお前はどうせ、そこでモモ先輩と仲良くしていたのかよ、ちっ！」

まあこうだと思ったよ、と、そのとき一子が近づいてきたので

彰人
「分かっているさ、一子。それにクリスに京もわかっているだろうが、あれは川神院のものではないからな。それは了承していただきたい」

クリス
「はい、それはわかっています」

京
「あんな禍々しい気は初めてだったからすぐにわかったよ」

一子
「だけど、彰人。あの人の動き川神流だったわよ、これって……どういうこと？」

さすがは俺が鍛えなおしている一子。さすがに気付いたか、しかしここで言うのもまずいので、適当にごまかすか

彰人
「さぁ～な、さすがにそこまで俺も分からない。それにしても怪我がなくてよかったよ」

そして今回の体育祭の全競技は終了した。そして閉会式と結果発表

である。そして壇上に立つのはルー師範代。

ルー
「それでは、今回の水上体育祭の結果発表ネ。まずは第三位から、第三位は一年S組だね」

そしてそれにあわせて起こる歓声と落胆の声、ちなみにその一年のS組は反応がない、やはり成績に載らないからだろう。そして次は

ルー
「続いて二位の発表ね、これは同立で二組イルネ、まずは三年F組、そして二年S組ネ。」

ようは、百代のクラスとユッキーのクラスが二位らしい。そうなると一位は

ルー
「それじゃあ、一位の発表ネ、第一位……」

そして少し間を空けるルー先生、そしてこう告げた

ルー
「第一位、二年F組。それでは代表者は前にでてきてネ」

そういうと、俺らは全員を見渡して、そして一人の代表を選出した。

彰人
「それじゃあここは」

岳人

「俺様が「黙れ、この馬鹿が！」はぐっ！なにをする…彰人……ガクシ」

大和
「……ナイスだ兄弟。委員長、いってきな。俺らのクラスの代表は委員長なんだがら」

そういうと、委員長は右往左往しながらも、全員が全員委員長を見ているで

真与
「そ、それでは、みんなのお姉さんがいってきます」

そういうと、壇上に上がっていった、ちなみにそのとき準がなんか悶えていたがあえてスルーすることにした。

ルー
「それでは学長お願いします」

そしてルー先生と交代で鉄爺が壇上に立ち、そして

鉄心
「それでは、今年の水上体育祭の優秀クラスは二年F組じゃ。これは賞状と今年からのこのトロフィーじゃ。大事にするんだぞい」

そういうと、委員長が隠れるほどの大きなトロフィーと、そして賞状を貰い、委員長は降りてきた、そして俺と大和でそれを回収、そして

大和

「それでは、胴上げをしたいと思います！委員長、失礼」

そして兄弟の掛け声とともに、全員が動き出す、それに委員長は完全にたじろき、そして胴上げ、最初は戸惑っていたが普通に笑っていたので、大丈夫ろう。ちなみに俺はトロフィーもち、そしてもう二人ほど参加していないのだがいた、それは

彰人
「こういうときぐらいは参加したらどうだ、京？」

京
「うん、ちゃんと参加しているよ。見てる、大和を」

彰人
「サイですか、それと忠勝はそこでお前も見ている組かよ」

忠勝
「うるせいよ、俺とかはそんな感じじゃないだろう。もっとこうなんだ、ハードボイルって奴？そういう感じで「たっちゃんも一緒に、やろうよ」な、一子。お、おい引っ張るな！」

そして一子に連れられて輪に入る忠勝、やはり一子には甘いらしい。う～んこれは兄としてなのか、それと、男としてなのか、まあどっちでもいいか。そして俺らの体育祭は終わった。

そして打ち上げを盛大にカラオケだったり、したのだが結局ファミリーはこっちに来た、そこは

モロ
「やっぱし、秘密基地はのんびりできるね。それにキャップからこ

んなメールが来たらね。来るしかないでしょう」

彰人
「そうだな、まさか打ち上げに出ないでなにか準備していたとは、さすがはキャップ」

ちなみにさっきのカラオケなのだが、百代もついてきた。みんなには文句は言わせずに連れ込んだのが正確なのだろうが、まあそこらへんは全員に笑ってどうにかしてもらった。そしてその打ち上げの後だ、急に全員の携帯がなり、送り主はキャップ、そして「すぐに秘密基地に集合、俺らの打ち上げを開始する！！」と、書いてあり、俺らがいくとすでにクッキーとまゆっちは居た。とそんな感じで現在俺らが着いて五分が経ったがこないのがキャップだ。

岳人
「俺らを呼んでおいてこないのかよ、あいつは」

そんな岳人の愚痴はほっとき、俺らは今日のことを話していた。

クリス
「しかし、今日のこの優勝は大和と彰人殿のおかげだろうな、確実に適材適所のところに人材を送って完全に勝っていた」

京
「そうだね、だけどそんなに欲しいものでもあったの、今回の景品で？」

大和
「俺はただヤドカリたちにいい餌を与えるためだな、兄弟は？」

彰人
「決まっているだろう。もちろん旅行券だ」

モロ
「けど、旅行券なんてなにに使うの？まあモモ先輩と行くって言うのが一番しっくりくるけど」

一子
「それよりもそれ以外に使い方があるのかしら、彰人それでどうなの？」

彰人
「モロの正解だな。これで休みは二人で温泉行って来るから、ってキャップに言わないといけないんだけどな」

ちなみに百代は俺の前で俺の上に座っており、現在普通に俺の手で遊んでいる。てか結構くすぐったい。そしてそんなときにキャップの登場！

キャップ
「よぉ！お前ら、遅れてすまん！！」

そういうと、扉が開きそして、キャップが大量のピザのあのケースを持ってきた

モロ
「う、うわぁ！なにこのピザの量？今日は金曜日でもないのに」

キャップ
「いやぁ、バイト先にもし俺らのクラスが一位になったらおごって

くれるって店長に言われていてな、それでこのピザだ。お前らお腹すいているよな？」

彰人
「そうだと思って、俺が追伸で送っといたよ。お腹をすかせるようにって。」

まゆっち
「あ。あのう私たちも食べていいのでしょうか？」

大和
「もちろんだぞ、まゆっち。それにこんな量はさすがに全員じゃないと食べられないだろう？」

彰人
「それじゃあ、おいキャップ乾杯しようぜ」

キャップ
「それじゃあ、いくぜぇ！乾杯！！」

全員
『かんぱ～い！！』

そして俺らの打ち上げは終わり、俺らは川神院にもどっていった、そして今回の事件についての話が行われた。

ルー
「そて、ここにいるのは全員かナ。それではこれより今回の件について鉄心様よりお話があるネ」

鉄心
「うむ、今回はまさかのあの釈迦堂の乱入とは我々も思っていなった事態が起きてしまったわい、幸いにもけが人はいなく、よかったことぞい。じゃが」

一子
「私達が戦った人、どう考えても川神流の動きが入っていたわ。けどなんか違う感じもするし変な感じだったわ」

百代
「そうなると、あの釈迦堂さんが門外不出の川神流を勝手に誰かに教えたってことになるのか？これはさすがに不味いだろ」

鉄心
「その通りじゃ、川神流は門外不出」

ルー
「だから強さの純度もたもてていたネ」

修行僧
「しかし、なぜこんな事を。確実に我々に知られるようなやり方を？」

彰人
「……簡単なことさ」

修行僧
「彰人殿？」

彰人

「自分の“黒”が俺のとどれぐらい対等になったか知りたかっただけなんだろうさ。そう思うだろう鉄爺？」

鉄心
「うむ、やはりそれが狙いかのう……わかった、それではこの件は上が預かることになったので皆のものは休んで結構じゃ……それでは解散」

そして修行僧は帰っていき、残るのは俺らだけとなった。

一子
「私も今日は疲れたから寝るわね、お休みお姉さま、彰人、ルー師範代、じいちゃん」

そういう一子も帰ってしまった。そして俺らの話が始まった。

鉄心
「それで彰人よ、釈迦堂はやはり」

彰人
「間違いなく、俺のと似ていました。感覚ってぐらいですけど、けどやはり狙いは俺の蛇のようでしたね。さすがに右を使うことはしませんでしたし、それに蛇との戦いがあの人にとってもよかったようです」

百代
「しかしさすがに今回の件を考えると釈迦堂さんは」

ルー
「確実に捕まえるか、もしくは戦って引きずりだすか、だネ」

百代
「そのヤクは私にやらせてくれないか？」

ルー
「百代、君が一番お世話になった師範代だろうに。まあそれをいうなら彰人もだけどネ」

百代
「だからこそ、私が倒したいのだ「駄目だ」え、彰人？」

彰人
「だめだ、釈迦堂さんのあれは俺のように制御は出来ないものだ、この意味わかるか？」

鉄心
「そういうものなのかのう？」

百代
「どういう意味だ？」

彰人
「本能は制御ができるけど、理性は制御できないってことさ。あれは純粋に黒いだけだもん、俺のは蛇という形でどうにかしているんだよ百代。普通に使えるものじゃない、だから」

百代
「ま、まて彰人。それではなんで釈迦堂さんはそんな代物を使っている」

ルー
「憧れたからだヨ百代」

百代
「憧れた？」

鉄心
「そうじゃ、このワシらでも到達できないそんな領域」

百代
「そ、それって彰人の」

鉄心
「そうじゃ、神の領域じゃ」

##第七十六話## （後書き）

次回、彰人の第二の技が……出るかも！？

##第七十七話##（前書き）

予告どおりの結果になりました！！

##第七十七話##

Ｓｉｄｅ　大和

さて、今日も学校が終わり自室ののんびりを始まったのだが、しかしなんなんだこれは？

京
「それは昔のことでした～」

大和
「分かっているから」

京
「それから母は病気で逝きました、半年ぐらい前のことですが」

大和
「それも知っているよ」

京
「その時、お父さん泣いてた。あんなにも色んな事されていたのに、うん私のこの一途さはお父さん譲りだよ…けど体はあの母親譲りですはい」

大和
「そこで露骨にアピールするな」

京
「エロスです、はい」

大和
「変な風に言うな、まったく。襲うぞ？」

京
「襲えばいい、責任取るよ」

大和
「普通逆だろうが……」

そんな今日の始まりだった。

Ｓｉｄｅ　ｏｕｔ

今日は朝からのルー師範代との試合など濃厚だったのだが、やはり一番のところはやはり百代との戦い。

最初は百代の一方的な攻撃、俺はそれを耐えに耐えて行動を起こす、それは

彰人
「いくよ、百代。スネークバイト！！」

俺は左腕で百代を攻撃するが、しかしそれはうまく決まらなかった、そう…防がれたのだ

百代
「私がいつまでもその技で納まると思うなよ彰人！！」

俺はそれに感心するように、そして俺は蛇を見る。蛇はまるで久し

ぶりの獲物のように舌をだす、俺はそしてもう一つの技を解禁した。
それは

彰人
「百代？これならどうかな？」

百代
「な、なんだと……彰人の気がさらに膨れ上がるだと！まさか、あのスネークバイトが……本気じゃないのか？」

俺は気を百代にだけに当てて、そして構えを変える。蛇はまるで俺の全身に、そう俺がまるで蛇のように。そして

彰人
「わが、罪の断罪となるがいい……蛇翼（ジャヨク）……崩天刃（ホウテンジン）！！」

そしてそれが決まった瞬間、百代は気絶した。すぐに瞬間回復が働き傷はつかない、しかし使った瞬間に百代は気を失った。それは近くで見ていたルー師範代もだ。そしてそれから数分、百代が起きた。

百代
「また、負けたか……はぁ～相変わらず彰人は強いな、この私ですら勝てないとは。結構無茶な事もして鍛錬したんだけどな」

彰人
「今回は結構ギリギリだったよ。さまか左腕の完全解放まで行かれるとはね。てかルー師範代もまた蹴りの速さ上がっているじゃないですか」

さっき起きたルー師範代

ルー
「当たり前ネ。彰人だって日々精進しているんだし、私だって負けてはいられないネ。それに一子の事もあるしね」

そう言ってルー師範代は一子のほうをみる、今は修行僧と組み手を行っているがまず一子には最初に絶対に攻撃を当たるなといってあり、修行僧には一子に一撃でも入れろと俺が指示をしていた、てかなぜか川神の修行僧は俺の指示も聞いてくれるのだろうか?そして一子は現在一撃もくらっていない。

修行僧
「（今までの一子殿と全然違う、まったく相手の動きが）「そこまで！」く、彰人殿」

彰人
「う～んやはり、一子は無我の境地に着てきたかな?ごめんねありがとう」

修行僧
「いえ、私もまだまだのようです。それでは」

そして修行僧は自分の鍛錬にもどっていった、やはり一子は一つに集中することはできるがしかし、問題として考えることができない、だからこれを逆手に取ったのはいいが……

彰人
「いつまで、ボーっとしているつもりだ、一子」

俺が一発いれようとするが避けられた、やはりこれを発動どうする

と考えず無意識で攻撃を避けてしまう感じになってしまったな、今度は少しバランスを考えるか。

彰人
「はぁ～蛇。起こしてやれ」

俺ではなく背後の蛇が叩き一子はいつもの通り意識を戻す、いやこの場合は意識を戻すというよりもいつもの日常の一子に戻すといった感じか

一子
「あ、あれ？わ、私、たしかずっと避けていたはずだけど？」

彰人
「まあ避けていたが、お前考えずに避けられるようになったのはいいが、今度はなにも考えていないじゃないか……まったくそれじゃあ今度は攻撃ができないぞ。まあさっきの修行僧に一撃も入れられずにいたのは成果といえば成果か」

一子
「けど、あの状態の時だと不思議と攻撃がみえちゃうのよね……彰人、あの状態で私って勝負できないのかしら？」

彰人
「欲張るな、一子。まずはあの状態をどんなときでも発動できるようにしろ、そうしないと次の段階にはいけないぞ。メニューはまた改良するが、基本一緒だ。いいかお前はやっと俺らの攻撃を視るようになったんだ、今度はこれに対処、そして反撃だ、いいな」

一子

「オッス！！」

そして一子は普通のメニューに入っていった。

百代
「あれが一子の力か？」

彰人
「ああ、血じゃなく、遺伝でもなく、ただその人それぞれの本懐の力。一子の犬っぽいところを見て思っていたんだが」

百代
「野生の勘か」

ルー
「どちらかと言うと危機管理能力ネ。どんな動物でもそれがあるのが一番ネ」

百代
「しかしあのときのワン子の目はまるで上の空だな。あれでは私でもどこに攻撃するか迷うな、普通は相手の目を見て判断するが」

彰人
「……百代の場合は相手の覇気を見て攻撃するでしょ先に。それで鉄爺どうかしたの？そんなにじっと一子を見て」

鉄心
「なに、自分の孫の成長を見ているだけぞい」

彰人

「そう」

そして俺らは鍛錬に戻った。

時間が経ち俺は久しぶりに一人で商店街を歩いていた。百代はというと、もう少しで始まる期末考査のための俺が考えたテストに見事に撃沈して、現在俺の蛇監修の元（↑百代が幽霊が苦手なので、若干薄くしてある蛇に完全にびびっていて、ドアに近づけずそして外に出れず俺の復習問題をこなしていた、一子もしかり。てか、百代はなんであの蛇を戦闘中は大丈夫なのに俺からはなれた単体だと駄目なんだろう？

彰人

「しかし、ここの本屋のチョイスは渋すぎるだろう」

と、言って手に取るのはＳＡＯだ。これって確かにうれているけど、なんでもとの原案のほうなんだ、こっちにはムーンプリンセスだし。そしてこのおっさん

おっさん

「なんだ、おめぇ彰人か。なんか買っていくのか？」

彰人

「来てそうそう、それですかおやっさん、少しは客にいい面をしてください」

おっさん

「おめぇさんが客だったらそうしてやったよ、それよりもおめぇの女はどうしたんだい？」

彰人
「勉強中。そして俺はその暇つぶしだ」

おっさん
「そうかい、そうかい。それじゃあこれでどうでぇ」

そしてもってきた本は特撮の台本。ホントに渋いてかなんだこの００だ。そして俺が読んでいると

モロ
「すいませ～ん、この前頼んどいた特撮の台本って、彰人。あれモモ先輩は？」

おっさん
「お、おめぇ、渋いチョイスするじゃねぇか。届いているぜぇ～」

そして渡されるのは俺のと同じジャンルのWと書いてある奴だった。

彰人
「ああ、今日は完全にお勉強だ、あいつはな」

モロ
「ああ、なんだかワン子も一緒に机にむかってそう。あっ彰人もそれ読んでいるの！？」

彰人
「なんかないかって聞いたら。このおっさんはこれを渡してきた。そう思えば百代がたまに見ていたのを思い出してな、だから俺もちょっと読んでみているんだ」

モロ
「モモ先輩が特撮？」

彰人
「いや、たしかマスクライダーだけのはずだったかな？」

おっさん
「しかし、おめぇらはずっと仲がいいな」

モロ
「まあ、ずっと一緒ですしね」

彰人
「俺も一年いなかったけど。まあ彼女ができちまったしな」

おっさん
「どこまで、続くか俺の生きているうちは見ものだな」

モロ
「間違いなく惰性で大人まで続くでしょう……」

おっさん
「バッキャ野郎どもめ」

おっさんの呆れた笑い方をしながら、俺らを見ていたらお客さんの登場、それは

冬馬
「あれ、御剣君に師岡君ですね。こんなお店で会うのは珍しいですね」

そうあの葵君だ。そして後ろに続くのはユッキーに準だ

ユッキー
「まだ、トーマ…って、彰人だぁぁぁ」

準
「こら、ユキ走っちゃだめでしょ」

おっちゃん
「こっちはこっちで三トリオか、このバッキャ野郎どもめ！」

そして今日も商店街ではおっさんの笑い声が響いた。

Ｓｉｄｅ　秘密基地

すでに時間は太陽が黄色に変わり、傾いてきている時間。この時間に秘密基地にいるのはこの二人で、片方はゲームを、片方はダンベルを上げていた。

岳人
「なあ、モロ。ちょっといいか」

モロ
「うん、な～に～」

岳人
「最近さ、ここの集まり悪くないか？」

モロ

「そう？けど金曜にはくるよ、そのための集会だし」

岳人
「そうだけどよ、知っているかモロ？こういう秘密基地ってのは普通小学生までなんだぜ」

モロ
「……まあ僕たちは特殊だと思うよ、色々と」

岳人
「そうだけどよ、俺さま思うんだよ、たぶんよ～俺さま達が避けているんじゃないかって？」

モロ
「絶対違うと思うよ、なんていうかな？あ、あれだよ居場所っていうか、あのコンビニとかでたむろっている不良とかと一緒なのかもね……」

岳人
「居場所ねぇ～けどここよりもいいところなんてあったらどうする？」

モロ
「今日は随分と突っかかってくるね、岳人。それにここよりも居場所のいいところなんてないよ、岳人は？」

岳人
「いいに決まっているだろう、ここ最高だぜ。いやぁ～なんか今日ジムでよ愚痴られたんだよ、彼女が出来ると愛想が悪くなるっていうだろう？」

モロ
「あるね、そんな通説。だけどさ、僕達の近くにもバカップルいるけどそんなことないじゃん」

岳人
「そうだよなぁ～、なにもし俺に彼女が出来ても、まあ怒ろるなよ」

モロ
「と、いうよりも集まりが悪いのはただ単にもう少しではじまる期末考査のせいだと思うよ、岳人」

岳人
「な、それをいいなモロ」

モロ
「それに「お、今日は馬鹿なお二人か～」……大丈夫だと思うよ」

ドアが開くとそこには川神家やキャップなどがいた。

百代
「どうかしたのか、お前ら。そんなに深刻ばってほれ、お姉さんに話してみろ、そして彰人抱き着かせろ」

モロ
「岳人に彼女が出来たっていう話」

彰人・キャップ・一子
「「「そらないわ」」」

岳人
「ハモんなよ！」

モロ
「そう、余計な心配だよ」

まだ、全員がしらない、歯車が動き出した。それは再生か、それとも破壊か……それは誰も知らない。

Ｓｉｄｅ　ｏｕｔ

##第七十七話##（後書き）

そして、この技を知っている人は、もしかしたら私と戦ったことがあるかもしれませんねｗ

それではバイニー！！

##第七十八話##（前書き）

百代を放置した結果です。

##第七十八話##

時間はすでに放課後で今日はキャップの呼び出しで秘密基地に行く途中である、ちなみに百代も隣で普通に俺の匂いを吸っているようだ、完全に吸う音がするからな。

彰人
「まったく、お前は」

実の今日は七夕の七月七日なのだが最近、勉強でまったく百代の相手をしていなかったと思うと、ここで暴挙に出たのは今日の昼の休み時間のこと

百代
『最近私の彼氏が冷たいんだ……なあハゲ、助けろ、それかここに彰人を呼んでくれ』

準
『彰人!!こ、これは何をしたんだ、モモ先輩が机にのの字を書いて意気消沈だぞ。あ、モモ先輩、今日は俺がやりますので、ど、どうぞ彰人の方に』

百代
『あ、あはは。すまんなハゲ～』

準
『彰人!!頼んだぞ』

そして今に至る、実は今日からは期末考査前、普通に言うと期末試

験前だ。今のところはなんともない、元来そこまで成績は悪くないのでどうにかなりそうだ。しかし百代は結構悪かったので、俺がちょいと離れて勉強をさせていたのだが、どうも一日の俺の成分がドンドン足りなくなって言っているらしい、これは京に言われたが。

百代
「はぁ～はぁ～はぁ～彰人の匂い～」

彰人
「別に俺の胸に埋まるのはいいけど、それで普通に歩かないでくれ。周りの目が温かいから」

百代
「いやだ。まったく彼女を夜に部屋にいれないなんて最低だぞ」

彰人
「たったの三日だぞ、今のところ。まったくそれにしても今日のこのメールはなんだろうな？キャップのことだから唐突のことだろうけど」

と、俺らは歩いていると秘密基地のビルにつく、そして丁度前にいたのはまゆっちとクリス。

彰人
「お、お前らもリーダーに呼ばれたようだな」

まゆっち
「あ、彰人さんに、モモ先輩。お二人ですか？」

百代

「おお、お前らか。てかもうここか」

彰人
「……周りを確認しながら抱きついてくれ。頼むから」

クリス
「相変わらずのようですね。」

そんな感じで俺らはいつもの飢えに入る、そしてすでに全員が揃っていた。

キャップ
「遅いぞ、お前ら」

彰人
「すまんすまん、それでなんで今日のこの日に全員で集合したんだ？川神の七夕の祭りは夕方からだろう？」

一子
「確かにそうね、こんな早くどうかしたのかしら？」

キャップ
「ああ、今日の七夕で俺は思い出したことがある」

大和
「思い出したこと？」

一子
「なにかあったかしら？」

彰人
「一子が金魚をすくえないで泣いて、それと百代と同じようにしようとしてこけて泣いて俺がおんぶしたことか？」

大和
「いや、それよりも射的の景品がとれなくて泣いたか？」

クリス
「泣いてばっかだな、犬は」

一子
「昔のことよ～それに大和も彰人もそんなに言わないでよぉ～」

彰人
「すまん、すまん、それでキャップ何を思い出したんだ？」

キャップ
「それはタイムカプセルだ」

全員
「タイムカプセル？」

キャップ
「ああ、なんかそんなものを七夕に埋めた覚えがあったという、夢を見た」

彰人
「夢かよ、しかしそう思えばそんなこともあったな、確か河川敷だなまだその頃はここではないだろうから」

大和
「と、いうよりもなんで今なんだキャップ？」

キャップ
「あれだ、夢でみたってことはなんかの知らせとおもうんだよな」

岳人
「けどよ、それって確か小学校ぐらいだよな。どこにあるかもしかも何を入れたのかもわかっていないぞ」

京
「……未来の自分への目標、それとたしかその時のおもちゃだったかな？」

モロ
「すごいね京は」

と、言うことなので俺らは祭りの前に先に河川敷に出ることにした。ちなみに俺らはそんなところなんてどこも分からないが、京の指示でそのまま一子が掘ると、なんとそこには

一子
「あ、あった。あったわよ！！」

一子が引き上げたのはかんかんだ。それも結構古くなっているものだ、そして俺はその缶に見覚えがあったのは言うまでもなく、なんとなくだった岳人も思い出したようだ。

キャップ
「よし、開けてみようぜ」

そして開けてみると今で思うとガラクタだった。それはソフビや、カードダソなど様々だったが兄弟が紙切れを取り出した。あ、それは

彰人
「兄弟それは」

一子
「大和、それって」

そして兄弟が取り出したのはこういう題名の自由帳

大和
「何々、大和名言集ってなんだそりゃ！」

それは兄弟がニヒルの頃に言ったことが書いてある非常に恥ずかしいものだった

クリス
「なんなんだ、それは」

そしてクリスが取り上げる、そして

大和
「や、辞めてくれ、それは俺が太宰にはまっていた時なんだ！」

しかしその声は虚しくクリスには届かなかったようだ。

クリス
「愛など妄想にしか過ぎない」

岳人
「やべぇ、あの頃思い出して、今でもあはははははは。腹痛ェ」

モロ
「だ、だめだよ岳人。そんなに笑っちゃ！」

と、言いつつもモロも笑っていた、笑っていないのは俺と地に伏せている兄弟ぐらいだ。

クリス
「俺には獣がすんでいる」

一子
「だ、だめ。これはだめだわ、面白すぎる！！」

京
「ククク」

松風
「こんな大和も痛い子だったんだな、今度からさん付けはしたくないぜ」

まゆっち
「大和さんもこんなときがあったんですね」

クリス
「な、なんだこれは☆マークで、『ヒトは死ねばゴミ』と、こんな感じか」

大和
「ガクシ」

すでに兄弟のライフはゼロのようだ。そしてこう叫んだ

大和
「誰だ、こんなものを入れたのは！」

もちろん

彰人・百代
「俺だ（私だ）」

大和
「この二人かよ！！」

百代
「なんだ文句でもあるのか？」

大和
「ああ、あるよ！」

百代
「ならばかかって来い、いつでもいいぞ。今回は彰人も参戦だ、さあどうする？」

大和
「泣き寝入りしかないのか」

京

「は～いこっちこっち」

そして京のいつものジェスチャーだが今回は

大和
「すまんのう」

なんと京の胸にいった。さすがにこれはこたえたらしい。

クリス
「しかしこの☆マークの物は一体なんなんですか、これだけが気になりますね」

彰人
「ああ、それはたぶん……」

一子
「…それはね、お姉さま」

百代
「そうだな、これは言っとく必要があるな。その当時の大和のまねをした彰人の言い方が実にマッチしていてな、一子が大泣きしてしまった、ちなみに私でもビビったぐらいだ」

モロ
「あ、それ思い出した、確か大和が熱で学校休んだ時に彰人が大和風とか言って言ったら先生が泣き出したとか」

クリス
「……どんなものなのだろう？」

一子
「クリ！変なこと言わないの「今言ってみるか？」ああ、止めて」

クリス
「しかし気になるではないか、すいませんが彰人殿お願いします」

彰人
「それでは……ヒトは死ねばゴミだ」

そして流れる沈黙……あれ？

彰人
「え、えっと。なんでしょうか百代さん、俺の腕をそんなにきつく抱いて。」

百代
「怖カッコイイぞ、彰人」

ちなみにそれから全員が戻るのには数分かかった、キャップも棒然だったしな。しかしそんなに怖いのだろうか

一子
「それよりも見つけないといけないものは見つけたの？」

キャップ
「ああ、それはこっちだぜ。それじゃあ開けるぜ」

そしてキャップが開けた、そして今度はキャップが読むこととなった

キャップ
「これは、岳人のだな……それでは、俺はまず朝は肉布団で目を覚ます」

それを聞いた女子連中一瞬で引いた。

岳人
「あ、あれ～？俺こんな感じだっけ？」

大和
「なにも変化が無い」

キャップ
「そして、目覚めはいつも年上のメイドたちに着替え、そして愉しませる。そして愛車オロチで出勤、受付嬢に挨拶代わりに口説かれる」

一子
「どこまで都合がいいのよ」

キャップ
「そしてエレベーターを使って社長室へ」

百代
「おお、社長だったらしいぞ」

キャップ
「そして二百階の社長室までエレベーターガールと愉しむ」

モロ

「二百階ってすでにバベルの塔じゃん！！」

百代
「これで秘書なんていう安直な考えだったら、岳人を一発殴る」

キャップ
「そして社長室に着くと秘書が待っていて、そして愉しむ」

岳人
「はぐっ！！」

百代
「酷いな」

岳人
「なにをいう、これこそ俺様の夢溢れて」

彰人
「溢れすぎてて、話にならん」

キャップ
「次は～ワン子のだな」

一子
「わーい、なんだろう？」

キャップ
「成長期になり、お姉さまに負けないぐらいの体型となった」

岳人

「かわいそうに最初からだめだ」

一子
「うるさいわねぇ～これからよこれから」

キャップ
「武道でもお姉さまや彰人とならび、ニュース出る。」

クリス
「これは面白い事を書くものなのか？」

一子
「これで真剣だったのよ」

キャップ
「次は俺か。宇宙の旅に出る！」

まゆっち
「これは子供らしい、感じでいいですね」

キャップ
「そして俺は探査機、ノワールで月を目指した。そしてそこで開発されていたモビルースーツを奪還する任務にあたる」

クリス
「なんか雲行きが怪しいな」

キャップ
「そして俺はそこでの科学者に助けられ太陽のエネルギーで地球に帰るのであった」

大和
「たぶんこのときのアニメの影響だろうな」

彰人
「スターメモリーだな確実に」

キャップ
「次は大和にモロ。中学にいき、進学し進学し就職。なんだこのお前らの人生設計は！！」

モロ
「現実を見ているといって欲しいね！」

キャップ
「次はモモ先輩だな」

百代
「私も覚えていないんだよな」

クリス
「けどなんか今のを見ていると」

まゆっち
「……ですよね～」

キャップ
「それじゃあいくぞ。私の隣に彰人がいればそれでいい、いなければつれて来い、そして言え、好きだ、と。これだ」

百代
「／／／／／／／／」

大和
「姉さんが赤くなっている」

百代
「う、うるさい！！／／／／／」

彰人
「百代、うれしいぞ俺は」

百代
「あ……うん」

一子
「結局いつもと一緒ね」

キャップ
「それじゃあ次は彰人だな」

彰人
「俺、何書いたんだろう？恥ずかしいのは止めて欲しいが」

キャップ
「百代を守る……これだけだ」

岳人
「ヌオォォォォォォォォォォォォォォォォォォォォォォォォォォォォォォォォォォ！！」

大和
「落ち着け岳人！」

モロ
「しょうがないよ、当時からこんな感じだったじゃん」

京
「けどなんでこんなことを？」

彰人
「……たぶん当時は同じぐらいの力だったからそれを追い越して守ろうとしたかったんだろうな、俺も男の子だったし」

百代
「ああ、彰人～すぐにキスをくれ、しかも深いのを。そうしないとすぐにお前を襲ってしまいそうだ！」

彰人
「はいはい、チュ。今はこれで抑えろ」

百代
「ふぁ～い」

キャップ
「それじゃあ、最後行くぞ」

そしてキャップが最後の願いを言う、そうそれは京の短冊だ。

##第七十八話##（後書き）

と、言うわけで七夕でした。

##第七十九話##（前書き）

後一話で八十話です

##第七十九話##

そして最後は京のになった。

まゆっち
「これはみなくても分かるような」

クリス
「そうだな、これはいつもの光景だろうからな」

一子
「間違いなく、大和とのせきらら新婚ばなしよね」

そして当の京というと

京
「……」

なにも言わずにいた。そしてキャップが最後にこういった

キャップ
「それじゃあいくぞ、みんな一緒にいる……これだけだ」

大和
「これだけ」

京
「うん、これだけ。まあちょっと叶わなかったけどね」

そういって俺を見る京。そう俺はここに一年間いない、しかしなぜこれなのだ?俺はその疑問を持つ、しかしこれはほぼ全員のなぞであったが、しかし

京
「まだ、このときって私もファミリーに入って日が浅かったしそれに大和のことは私でどうにかするって決めていたから」

岳人
「なるほどな、そう思えばお前ってあの時大変だったもんな」

彰人
「お前が言えるセリフかよそれ」

京
「けど、完全に願いを間違えたようなきがするな～」

そしてどっと笑いが起きる、そうなのだ、だって

一子
「全員一緒にいるなんて簡単なことじゃない、実際ここに全員いるわけだし……まあ彰人は途中消えちゃったけど」

モロ
「けど、また一緒にもどったし」

クリス
「加入メンバーつきでな」

京

「そうなんだよねぇ、実際彰人が居ない時も意外といたし」

京は意味ありげに百代の顔をみると百代は顔を赤くしながら伏せていた

岳人

「けどよ、あのときなんて大体、モモ先輩が「う、うるさいぞ岳人！／／／／／／」はぐはっ」

そして岳人は殴られた、しかしここまで来たら気になってしょうがない俺がいたので、すぐに行動に起こした

彰人

「大和、百代は一体俺の居ない間の金曜集会をどう過ごしていた？」

俺はすぐに百代の腕を取り、完全に動けなくして大和に話をさせようとした

百代

「や、大和！もし言ってみろ「百代」……うぅぅぅ……今日は甘えたいぞ……」

彰人

「考えよう」

百代も諦めたようで力をゆるくした。そして大和が話し出した

大和

「まずは、兄弟が外国に行ってから初日に金曜集会はそれは酷かった。なんせあの姉さんがまったくの腑抜けになってしまって、金曜

集会よりも姉さんの励ます会に変わっていた。そしてそれから数回の集会のあとに、ずっと彰人彰人と言い出す姉さんがいて、一時は京よりもじめじめ感がでていた」

京
「あのときのモモ先輩はすごかったね。大体はワン子にしがみ付いていたけど、たまに岳人を殴っていたし、大和は蹴られていたし」

彰人
「……それは随分と荒れていたな」

大和
「それで、当の最近の金曜集会、ようは彰人が帰ってくるまえの金曜集会で姉さんったら、真剣（マジ）で意気消沈しながら、「アキトに飽きられていたら……私は私は」って言っていてある意味大変だった……これぐらいかな」

モロ
「こんな風に毎日モモ先輩と会っていると全然彰人のことを忘れなくてね」

彰人
「てか、俺はそんな風に心配されていたのか、まったくかわいい奴だ。こっちにこい、頭を撫でてやろう」

百代
「♪～♪、続けろ～彰人」

クリス
「しかしそれならば、彰人殿もあったでしょう何回か？」

そしてクリスの爆弾発言に俺は慌てて蛇を使うが、それが一瞬で消された

彰人
「な、百代？」

そして今度は俺を抑えている百代。本気を出せば簡単に外せるがさすがにそんなにマジに成るものでもないので俺はそのままでいた。

大和
「兄弟も、同じようなことを？」

クリス
「いや、どちらかと言うとだな。モモ先輩の事をずっと思っていたのは間違いないと思うぞ。なんせ私がマルさんに聞いた情報だと彰人はなんども現地で求婚されてで「彰人！！」あ、あれ？」

俺はそれを言われた瞬間になみだ目の百代、さらに上目遣いで完全に追い詰められていた

百代
「どういうことだ、私だけだよな、私だけだよな！？もしかして外国に他のつ、妻がいるとか」

彰人
「百代、混乱するなぁぁあ！」

大和
「姉さん、まだクリスの話は終わったいみたいだよ、だから聴いて

みたら」

百代
「ジーーーーーー」

彰人
「うぐっ」

クリス
「しかし、彰人は一度も頷かなかったそうだ。マルさん、ようは私の父様の知り合いからもなんども彼を婿にほしいとドイツ軍からあったそうだが、彰人殿が「俺は百代以外興味が無いので」と、いったそうだ。それに他にもマルさんの部隊の人からもそんなのがあったらしいが全て断っていたそうだ」

百代
「彰人～♪」

まゆっち
「結局これなのですね」

大和
「どっちも似たもの同士ってわけで」

そして俺らは笑った、そして俺らはもう一度このタイムカプセルを見た

岳人
「それでこれどうするよ？」

キャップ
「埋めておこうぜ」

一子
「また？」

キャップ
「今度は大人になったときにでも開けてさ。今時は子供だったなぁ～って思えばいいじゃん」

百代
「その時は娘か息子がいると思うがな」

百代のねたで全員が俺を見る、おい

彰人
「普通ここも笑うところなのだが……どう思う百代？」

百代
「彰人だとしゃれにならないような気がするぞ私は」

と、いうわけで俺らは昔のタイムカプセルをまた埋めるのであった。そして全員動きがバラけ始めた。キャップと一子はそのままお祭りに、そして京と大和はそのまま秘密基地に、岳人とモロも祭りに行ったがあいつらはたぶんナンパだろう。そしてまゆっちとクリスはまゆっちが着付けで浴衣で行くそうで一度寮の方にもどった。そして俺らは

百代
「それでは今日はデートだ！」

彰人
「声をあげていうことじゃないからね、百代」

現在川神院に帰りながら俺らは歩いていた。まあ祭り自体が川神院で行われるので俺らは祭りに行くのも同じなのだが百代がどうしても浴衣がいいだそうで結局一回院内に戻ると言うことになった。

そして祭りがはじまった。そしてなぜか俺は普通に待っていた。なんでもデートの時は一緒にでるのではなく男が待ち合わせに居る方がいいだそうで、百代が言うには。そして待っているとそこにあの弓道部の部長さんが来たようだった。

彰人
「あ、あなたは弓道部の」

弓
「あ、あなたは百代の……彼氏であったな」

彰人
「ええ、どうも。それと京がお世話になっています」

そして京と言う言葉に一瞬、顔を暗くしたような気がしたがそれは気のせいだったのだろうか?

弓
「うむ、それでは失礼するで候。もしこんなところを百代に見られたら私は生きていないだろうからな」

そう言うと早々と消えていった主将であった。しかしなんであんな

キャラを作っているのだろうか?そして丁度百代も来た

彰人
「遅いぞ、百代。お前は和服は結構来やすいほうなんだからもう少し早くても……」

そしてそこには、百代とは思えないほどの大和撫子がいた。最近は髪を上げることはあったがやはり浴衣を着るとまた一段とそれがマッチしていて俺は見とれてしまった。そしてそんな俺に百代は

百代
「なんだ彰人?見とれたてしまったのか私に」

挑発てきだったのだ、そして俺は参ったのポーズのように手を挙げて降参した

彰人
「ああ、本当に参ってしまったぞ百代。この姿を他の誰にも見せたくないと思うほどにな、そうだな、今回はあの兄弟風に言ってみよう……綺麗だぞ百代」

俺がそんな感じでいうと百代は顔を真っ赤にして、俺の腕に抱きついた

百代
「やはり、彰人には適わないな。最初に私に見とれている時は私のほうがリードできると思ったのに、今の言葉ですでに私の負けだな。今、たぶん私は締りの無い顔をしているのだろうな」

彰人

「いいじゃないか、それで。俺の前ではな」

百代
「これでも一応、私の方がお姉さんなんだぞ……まあ彰人にならそれでもいいか、それよりもさっさといくぞ」

そして自分が待たせていたのにわりびれもせずそのまま屋台に行くことにした、しかし祭りといえば定番の射的から、そして飴細工までやはり川神の祭りはこうでないと。

屋台のおっちゃん
「おう、いらっしゃいいらっしゃい！百代ちゃんじゃないかい、どうだい、一回ぐらいってなんだ、男連れで」

百代
「ああ、これは久ぶりですな」

そして声をかけてきたのは射的のおっちゃんだった。

屋台のおっちゃん
「それで、百代ちゃんそれは百代ちゃん彼氏かい？彰人君が怒るよ～？」

と、おもしろうそうに言うが

彰人
「あはは、どうも彰人ですよ。お久しぶりです」

俺がそう言うとおっちゃんは目を丸くしてこう言った

屋台のおっちゃん
「ガハハハ！これはビックリだ。なんだ彰人君かい？随分とでかくなったじゃないか、えっと俺がここに戻ってこれたのが丁度四年前だから、そう考えるとそりゃぁ～変わるか。いやぁ～それにしても彰人君が百代ちゃんの背を抜くとはねぇ～！それで二人は？」

彰人
「夫婦ですよ」

俺はそう答えると百代もそれに頷く

屋台のおっちゃん
「ガハハハ！こりゃ一本取られた。それじゃあその門出祝いでぇ～二人ともただで一回やってきな」

そして俺らは川神の祭りを楽しんだ。

Ｓｉｄｅ　大和

俺は、今日この日。彼女が出来た、それは椎名京……これからみんなに報告だ……

京
「Ｚ～Ｚ～Ｚ～」

俺の隣で寝ている京……ヒトってこんな事もできるんだな～と自分の持久力に驚きながらも満足感で一杯の自分に驚いてた。そして俺は最初にあのバカップルにこんなメールを送ることにした

大和

「俺らも負けないバカップルになると思うよ、兄弟」

そんなメールを打ち込みながら俺は、そう思えばと思った、兄弟のカップルで俺らの関係は何も変わらなかった。だから俺らの価値観も、なにもかも変わるにしてもいい方向がいいと俺は切に願った、なんていったって京は結構溜め込むからな、変な方向に行かないといいが。俺はそう思いながらメールを送信するのであった。

そしてこれからが俺らの波乱の幕開けだったのはこのとき誰も知らない

##第七十九話##（後書き）

と、言うわけで本格的な京ルート開始です……たぶん

##第八十話## （前書き）

とうとう、ココまで来たぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！！

##第八十話##

俺らは祭りの後、まあ簡単に言うと浴衣は肌蹴ているとエロいのだ。通訳でいつもの通り、俺の部屋で寝ているこのお姉さんなのだが、今日は昨日少々やりすぎたようでまだ寝ていた。しかしこの時間だと弁当が作れないだろう…そうだ、今日は俺が作ろう。と、言うことで俺は起床すると、そのままジャージに着替えて台所に向かった。

彰人
「お、今日は料理長だけのようですね」

料理長
「あら～彰人ちゃんかい。最近はずっと百代ちゃんだったけど、久しぶりの彰人ちゃんだねぇ～それじゃあ一緒に作ってみるかい？」

彰人
「そうですね、いつもいつも作ってもらうだけじゃダメですよね。それじゃあ朝食と一緒に作らせていただきますか」

そして俺は久しぶりの料理へと始めた。

Ｓｉｄｅ　百代

私はいつもの心地よさのある人肌の熱がないことにきづき起きる、いつもの密かにキスをしているという朝の儀式が……出来ない、理由は

百代
「あれ、彰人がいないだと」

そして私はすぐに傍にあった時計をみると……まずい

百代
「弁当の作る時間がなぁぁぁぁい！！」

そして私はすぐに着替えると急いで料理場に向かった。

Ｓｉｄｅ　ｏｕｔ

俺らが丁度今日の朝ごはんと、そして弁当の準備を終わらせたところに百代の登場だ。完全に急いでいたらしく髪がぼさぼさだった、俺は普通に百代に挨拶をした

彰人
「お、百代か。おはようさん、どうしたそんなに慌てて？」

俺の言葉に百代は自分の格好を今さら気にしながら、俺の前に来ると

百代
「……もしかして……りょ、料理長～」

料理長
「いやぁ～彰人ちゃんの料理の腕は相変わらず凄いねぇ～私から見ても昔と変わらないというか進化していたよ、百代ちゃんも頑張らないとね」

彰人
「まあ昨日のあれのせいだろうから……その一応な、俺が今日は作ってみたのだが。まずかったか？」

百代
「いや、まずくはない。どちらかといえばうれしいのだが、なんというか乙女心が複雑なのだ…それに私はいつも弁当が精一杯なのになんか、今日の朝食は豪華ということは、彰人が手伝ったのだろう？」

彰人
「まあな、一応」

そして崩れる百代。

百代
「私は……私は……彰人の嫁として失格なのかも「大丈夫だから！！」ああ、私は！」

そうか、これが昨日聴いた、百代のネガティブモード。まずい、これはどうにかしないと。と思ったら料理長が、もういいから頑張んなさいと手で合図をくれたので、俺は軽く会釈をすると、そのまま百代の肩を抱き、俺の部屋にいった。

彰人
「は～、それで落ち着いたか百代」

百代
「……すまん／／／／そのだな、これはだな……」

俺はさっきからこんな感じの会話を聞き流しながら百代の髪の毛で遊んでいた。と、いうよりもこれが意外にも気持ちよくてくせになっていた、俺はそんな感じでいたら、百代が普通に抱きついて

百代
「聴いているか？」

少しご立腹のようだったが、俺はそれでも続けながら

彰人
「はいはい、大丈夫だから。百代は俺の嫁、お分かり？」

百代
「うん」

彰人
「それなら、大丈夫そうだな。それじゃあ朝食に行くよ。いい時間だしね、まあたぶんみんないるだろうけど」

そして俺らはそのまま朝食を食べにいった。

そして時間が過ぎて学校に行く時間、一子は今日の俺特製トレーニングのため先に出ている。そして俺らはいつもの通り二人で登校。すでに後輩からの挨拶、同級生、はたまた先輩からと俺らは挨拶を受ける。そして今日はめずらしくいつもの寮メンバーの若干の変化があった。

彰人
「あれ、兄弟は？」

そうなのだ、兄弟と、そして京がいない。まあ寝坊だと思うのだが、しかし兄弟までもとは意外であった。

岳人
「まあ、部屋にはいたっぽいぞ、なあまゆっち」

まゆっち
「はい！ですけど気配だけで……なんとも／／／／／」

その時一瞬まゆっちの顔が紅くなったということはもしかしてもしかするのかも知れない……そうか、兄弟、お前もとうとう大人になったのだな。俺はそう思いながら学校に到着

そして放課後となった、結局兄弟も京も来なかった。ようはサボりだ……まさかずっととかないだろうな、と、そんなときにメールがきた。それも兄弟からだ、なになに「俺、京と付き合うことになったから」これだけだ、しかしこれで俺はなんとなく分かった。そして俺はいつもの通り百代を迎えに行く。

彰人
「百代～いるか～」

百代
「いるぞぉ～彰人。そして面白いメールがきたな、おい」

そして俺の腕にしがみ付く百代。そして携帯をあけながら俺と同じメールをみせる

百代
「まったくあの弟もやっと身を固めたか……」

彰人
「そうだな～今度の金曜集会で来たら問い詰めるか？」

そんな会話をしながら俺らは帰路に着くのであった、そして俺が川神院につくと、なぜか鉄爺が待っていた

百代
「なんだジジイ……こんなところでヒトでも待っているのか？」

鉄心
「うむ、ある意味そうかもしれんな。彰人、お主を待ってたのだぞ」

そう言う鉄爺はいつものおおらかさは無く、どこか緊張の面持ちであった。

百代
「どうか、したのか爺？」

鉄心
「ふむ、折角の機会じゃとおもってな。この期末前にお主も一回ぐらい全力を出してみてはどうじゃとおもってな。確かに百代も最近では全力でお主に向かっておるがお主にはまったく通らないと聞いてのう、どうじゃワシと一勝負」

そういう鉄爺の感覚はいつもとは違う。俺の蛇、そして俺自身が震えていた……

百代
「ジジイ」

彰人
「いいよ、鉄爺。それじゃあちょっと待ってて」

俺はそう言うとすぐに荷物を置く、そしてすぐに向かおうとすると、その場で百代に止められた

彰人
「どうかしたか、百代」

百代
「なに、そのちょっと今の彰人は怖いから…チュ…行って来い、私はすこし離れてみよう……どうもお前のその感じはあまり好きじゃない。もちろんお前の嫁としてなれないといけないんだけどな……」

そういうと百代は消えた、俺は独り言のように

彰人
「十分すぎるほどの、勝利の女神の微笑だよ百代。」

そして俺は鉄爺の場所に向かった、そして向かうと、ルー師範代に、百代、そして一子がいた。俺はすぐに蛇を解放した。

鉄心
「ほ、ほ、ほ。それがお主の本気かのう?昔とは違うのほどの無限の力じゃのう。それではお主が満足できるぐらいのわしも頑張ってみるかのう……ハァァァァァァァ!!」

そして今までとは違うほどに鉄爺の気が膨れ上がる、それはいつも百代と互角ぐらいの気ではない。たぶんあの、百代がもし殺気も含めればこれぐらいになるのだろうが、今の鉄爺はそれと同じぐらいの気を出している、だから俺はいま、非常に興奮していた。

彰人
「蛇を解放しているのに全然冷めない……行くよ、鉄爺」

そして始まりの言葉など無く、勝負は始まる。どちらとも確実に相手の急所、または死角を狙うしかしどちらもそれには一撃を当たらない、それ以外の攻撃すら常人では確認できない攻撃が無数にある。そして動き出したのは鉄爺だ

鉄心
「川神流奥義！！カワカミ波！！」

俺は向かってくるビームをかわす、しかしその行動に対しての着地点に鉄爺は縮地で俺を追い詰める、だから俺はそう、蛇を全員に纏った。そう、あの、百代にも見せた技と同系種、通常の俺のスネークバイトは俺の左腕に常備されているがこれは違う、そう全員に蛇を覆う。そして俺はこう言う

「蛇竜（ミヅチ）……烈火斬（レッカザン）！！」

そして俺は最初に鉄爺を蛇で捕まえる、鉄爺は抜けだそうとするがしかし蛇噛まれればそれは逃れることができない、そしてそのまま俺に接近される。そして俺はスネークバイトの数倍の強さの腕を両腕に纏い、そのまま連打をくわえる。そして最後は相手が空中に浮いた瞬間に一番デカイ、蛇を俺の両手で形成し、当てる。ちなみにこのとき俺は一歩も動かない。そして鉄爺は吹き飛んだ。百代の時はこれとは違うが発動した瞬間に百代がダウンしたので、最後までやったのは初めてだ、そして壁に衝突した鉄爺

百代
「……これが彰人の必殺技……スネークバイトなど非ではないだと

……それにあの時とも技が違う？」

ルー
「鉄心さまがあそこまで一方的に」

そして崩れる壁の中から鉄爺は出てきたが、しかし

鉄心
「やはり、現役とはうまくいかんのう」

そしてその一言を言うと倒れた。俺はその姿に一礼をする

彰人
「ありがとうございました！！」

そして蛇も満足したように消えた。そしてルー師範代はそのまま鉄爺を慌てて運んでいった、まあ鉄爺自体は元気そうなので心配はいらないだろうが、そして百代が近づいてきた、そして

百代
「お前にはいろんなことで驚かされるな、まったく。」

そう言って俺を真正面から見る、そしてこういわれた

百代
「だけどな、いつかお前の高みい私だって近づいてやる。あのジジイに出来たんだ私にだって出来るさ……なあ彰人？」

彰人
「楽しみにしているよ百代。けど鉄爺には本当にあとで礼を言っと

こう、百代との勝負では蛇が消化不良だったいたいだけど、今のでたぶん蛇も満足しただろうし」

百代
「なんか、その言い方は癪だが。まあしょうがないか。それじゃあ私も少し特訓してくる、それじゃあな」

そして消える百代。そして残ったのは一子だけだ

一子
「彰人……なんかさっきの爺ちゃんの試合私、全然見えなかった」

彰人
「そうか」

それもそうだ、たぶんルー師範代も確認できる攻撃が少ないであろう、けど一子は驚きのことを言った

一子
「……けどなんであの蛇、彰人の腕から両手に移って攻撃したの？そのままでも十分強そうなにって！私も鍛錬のランニングしてくるね」

そう言うと一子は走っていった。けど、俺は驚きを隠せなかった。あの攻撃の最後は一番はやくたぶん攻撃を受けた鉄爺ですら分かっているかわからないはず、けどあいつはそう言った。そして俺は感じた、そう一子はなにかに目覚めようとしている、たぶん武術じゃない方で。

彰人

「蛇の感覚を頭で理解しただと……無我の境地か。一子はそれのスイッチができているのかもしれないな。そろそろもう一段階目の特訓にかえるとしよう」

俺はそういいながら、百代の後をおった。そしていつもの通り、俺は百代に指導しながら死闘を繰り返していた。そしてやはり百代も無限の成長があることを自覚する俺であった。

彰人

「俺の周りは化け物ばかりか……まったく、みんないいことでもあったのかねぇ～……俺、なに言っているんだろう？」

##第八十話##（後書き）

と、言うわけで八十話まで来ました。これも皆様のおかげだと思います。これからもがんばりますのでよろしくお願いします！！

ブラックサレナでした

##第八十一話##（前書き）

旅行って……楽しいですよねｗｗ

##第八十一話##

そして大和と、そして京が付き合いだしてすでに数日、今日は金曜で集会の日だ。そしていつもの通りの朝の通学。岳人のこんな声から始まった。

岳人
「バカップルが、ふ、二人に増えた……だと……」

モロ
「岳人、最近これしか言わなくなったよね。まあ京が幸せそうでよかったけど、まあこれで少しは彰人達も落ち着くでしょうし」

彰人
「百代、今度の土日は、この前の体育祭の景品の旅行券で旅行だぞ～」

百代
「おお、そうか、そうか。うれしいなぁ～しかしキャップには言ったのか?今日はまだ見ていないぞ」

モロ
「……落ち着かなかったようだね。と、言うよりも逆に悪化しているような」

大和
「と、言うかお前らは随分と普通の反応だな。一応結構俺が渋っていたところがあるからそう言うところをおもいっきし弄られると思って覚悟していたのだが」

クリス
「まあいつかこうなると思っていたからな」

まゆっち
「時間の問題でしたから」

一子
「今までそれが無かったのが不思議なぐらいよね～」

うちの女性陣はなんともわかっていたようだ、ちなみに男性陣は本人を除いた四人中二人は分かっていたのだが、後の二人。まあ筋肉とガキなのだが。ちなみに俺はからかうのは辞めて普通に接している、てかお互いに話すときに彼女が腕を抱いているのを見て二人して笑ったものだ。

彰人
「ま。俺らぐらいのカップルになるのだな、兄弟」

大和
「兄弟はどこのボスキャラだ……」

百代
「しかし、否定しないとは……なんかウザイなおい。彰人、もっと私達も見せ付けるぞ」

彰人
「見せ付けるものじゃないだろうが、てかさっきから京静かだな…
…どうかしたのか？」

京
「はっ！幸せすぎてトリップしていた。それで彰人何？」

岳人
「グハッ！！」

そして岳人が倒れたが俺らはそのまま放置していった。ちなみにこの言葉にさすがに俺らで慣れていたはずのクリス達も驚いていた、ちなみに兄弟はそれで照れていたので俺が一発殴っておいた、だってムカつくのだもの

そして学校に到着、ちなみにこれを初日みた生徒達の反応は、『やっとか』と言うことだったらしい。まあこれで今までと変わらなければいいのだが、まあ俺らがそうだったから大丈夫かもしれないな。そして俺らは教室に入った。京の大和依存は激しさを増していたが、しかしそれを全員が暖かい目でみていたのでまあ大丈夫だった。まあある一部を除いてだが

それは廊下の一幕だ。

ヨンパチ
「最近、京と大和が暑くてバーローだぜ」

モロ
「まあ、僕達の場合は彰人たちのおかげでそこまで酷い衝撃はなかったけどね」

岳人
「ふ、ふ、ふ。これでお前らと俺、そして彰人、大和との差が出来た」

彰人
「は?差ってなんだよ岳人」

岳人
「俺様たちクリスマス偶数、お前ら奇数」

彰人
「……そういうことかよ」

モロ
「なにさ!そんな鬼の首を取ったようないい方しなくてもいいじゃないか!!それに彰人もそんな可愛そうな目でみないでよ!」

彰人
「いや、なに、なんていうかだな・・・」

と、俺らが休み時間を過ごしているとそこに来たのは準だった

岳人
「あ、井上じゃねぇか」

S組の彼なので当然、岳人たちは少し睨みながら準を見る、そして準はその目をまるで気にしないようにこっちに来た。

準
「お、お前らか……はぁ〜」

モロ
「あれ、どうかしたの。と、いうよりもなんでそんなに疲れている

の？」

準
「いやぁ～なんていうか、俺らのクラスって期末考査前っていつもほらぁ～ぴりぴりしているから、俺としてはきついわけよ。お前らのような委員長もいないしよ」

ヨンパチ
「と、いうよりもお前みたいなのがＳ組にいて引かれないんだよ」

準
「ああ、それは言うに事欠くがＳ組って個性が豊かだから…制服着ている奴のほうが少ないクラスってそうそうないぞ」

彰人
「なっとくだな」

準
「それでなんの話をしていたんだ？」

モロ
「それがね、彼女がいるか居ないかのそんな感じの話でさ」

準
「そんなの、彰人以外のこのメンバー全員……まさか」

岳人
「そうだぜ、ハゲ！！俺様勝ち組！」

準

「そ、そんなバカな……」

そしてそのままｏｒｚのポーズを廊下で取る準。そんなに悔しかったのだろうか？

モロ

「まあみんな、夏を前にして頑張っているんだよ」

準

「そうなのか……なら俺も頑張ってみるか！」

ヨンパチ

「お、お前まさか！」

そして、廊下の端から歩いてくるのは委員長だった、そして準はこう言いながら委員長ももとへと賭けていった

準

「気迫、熱血、覚醒！俺を止められるのは、佐藤と田中だけだぜぇぇぇ！！」

そして俺らは、それを見守った……そして数秒後

準

「ちっ、このキャラメルしょっぺイや」

もちろん撃沈に終わったようだ。そして俺らはクラスに戻ることにした。

そしてそれから時間が経ち放課後となった。百代は今日は百人組み

手なので、俺は一子についてそのまま鍛錬の相手をしていた。

一子
「……」

彰人
「はぁっ！」

俺の攻撃を読んで避けて、現在それだけで十分は経過している。ちなみに一子はまったくしゃべれない、まあ意識を集中しているせいだろう。そして今の一子の問題点の一つ、それは完璧に避けられても攻撃が出来ないのだ、だから俺が攻撃をやめればそのままだ

彰人
「よし、いいだろう。一子！」

俺の声に一瞬、ビックリすると、一子はいつもの目に戻り、そして俺を見る

一子
「あ、彰人！それでどう、私ちゃんと避けてられてた。あの集中を使っちゃうと、私ってなんだかその時の記憶が曖昧なのよね」

彰人
「そうみたいだな、盾は手に入れたし……よし、それじゃあ次の段階だ、一子……と、言いたいところだが今日はここで終わりだ」

一子
「えええええ！」

彰人
「時間を見ろ、時間を」

そしてその時刻はすでに五時過ぎ。今日は集会もあるのでここで繰り上げておいた方がいいだろう。しかも今日だけは試験勉強を無しにしているので、一子もそれを分かってかそのまますぐに了承をくれた

一子
「そうね、丁度お腹すいたし、帰りましょう、彰人」

分かってくれたはず……

そしていつもの通りに院に戻ると、いつもの通りの人の山が出来ていた、そしてまだ死闘は続いていた。

百代
「はぁぁぁ！」

鉄心
「甘いぞモモ！川神流奥義……カワカミ波」

百代
「そんなもん、すでに彰人の戦いで見切っているだよジジイ！」

そして鉄爺は吹きとんで、そして百代が壇上に立っていた。俺は拍手しながら近づいた

彰人
「百代、さっきの蹴り。随分と上がっていたじゃないか……それに

俺との鉄爺の試合を見ただけで見切るかよ普通」

百代
「あ、彰人～」

そして俺が声を掛けると抱き着いてきた、百代。いやだから

彰人
「さっきの試合についての感想を言っているのに、普通に抱きついてくるのがいるか……まあ嫌いじゃないが。それよりも時間、押しているからシャワー浴びて来い」

百代
「は～いっと、そう思えば今日は集会だったな。だけど京たちは来るのか？なんだがずっと二人で居そうだが」

彰人
「まあそれでもいいじゃないか。それじゃあさっさと行った行った」

そして俺は一子と、百代を待つ。そしてすぐに来たのは百代だ。そして俺の腕に抱きつく

百代
「いやぁ～いいな、彰人の匂いは」

彰人
「百代、まだ髪の毛乾いていないのに俺に当てるな濡れる。」

そんなこんな事をしていると一子も着たので、俺らはそのまま秘密基地に向かった。そしてついてみるとなんと俺らが一番最後だった。

彰人
「すまん、今日は少し遅れたようだな。と、いうか兄弟もちゃんと来たんだな」

大和
「当たり前だろう、な？京」

京
「うんうん」

クリス
「それに、ちゃんとした報告をしてもらっていないからな。私たちは」

そう思えば二人の報告をちゃんと面を向かってしてもらっていなかったな。

キャップ
「ああ、それも今日は議題にしていくぞ、と言う前に今日はバイト先からのピザだ、ドンドン食え」

俺らはピザを食いながらの話となった。

百代
「それじゃあ、ここはすでに夫婦の私達が進行するぞ彰人」

彰人
「了解だ」

モロ
「夫婦って所を訂正してよ、彰人！！」

彰人
「それではまず、質問のある方、挙手をしてその手を拳に変えて岳人に一発入れてください」

岳人
「彰人、お前なんて「そうなのか、彰人殿、それでは」ってクリス、マジでやるｎ、ぐはっ！！」

彰人
「はいどうぞ、クリスさん」

クリス
「一応なのだが、どっちが告白したのだ？やはり京なのか？それと場所もしりたいな」

づかづかと聞くクリス、しかしそれを大和は笑いながら

大和
「告白したのは、お前らが予想している通り京で、そしてその場所はこの上だ」

そして俺らは上、と言うことで上を見る。ようは屋上と言うことだ。なるほど、俺の予想が正しければ

彰人
「七夕補正にやられたな、兄弟」

大和
「さすがの兄弟か、お見通しらしいな。」

そしてそんな感じで俺らは、新たなるカップルを祝福しながら、今日の集会を終わらせた。そして全員帰る時間になり、俺はキャップにこう言った

彰人
「すまん、キャップ。明日、俺と百代はいないから」

全員
「はい！？」

この全員とは百代も含まれる、そして代表で聞いたのはモロだ

モロ
「一体どうかしたの？」

彰人
「ああ、お前ら、体育祭の景品覚えているか？」

モロ
「もちろん」

大和
「……まさか兄弟」

彰人
「ああ、と、言うことで俺はそれで勝ち取った旅行券である、軽井沢へ百代と二人で旅行に行こうとしているのだよ、この休日を使い」

百代
「それは、本当か彰人？」

彰人
「まあ夏休みは例の件が入っているしな」

そして俺が一瞬一子を見たことで百代もなんとなく分かり、そしてそのまま俺に抱きついた、と言うかさっきまで腕を抱きついていたのが肩までに変わっただけだ

百代
「やった！」

彰人
「と、言うことで一応言っておくぞキャップ」

キャップ
「わかった」

そして今日の集会の幕は閉じた。

##第八十一話##（後書き）

旅行ってお金掛かりますよねｗｗｗｗｗｗｗｗｗｗｗ

##第八十二話##（前書き）

夏休みに入りましたね

##第八十二話##

さて今日は土曜日だ。昨日キャップに言ったとおり、俺と百代は二人で旅行に行くことにした、ちなみになぜ今日と明日なのかというと、試験前だが勉強の疲れを取るために、まあ俺が詰めすぎたのが悪いのだが……と、言うことで俺らは今日から旅行だ。ちなみにここは今、川神駅。

百代
「しかし、今日は随分と晴れたな～彰人。まるで私たちのためのような日だな」

そういう現在俺の隣にいる、百代。最近ではこいつが隣でこうやって抱きついていないと心配になる俺なのだが、今日もちゃんと俺の腕に抱きついていた。

彰人
「そうだな。それにしてもお前は離れる気が無いな。今日は一層暑いのによ。ま、嫌いじゃないが」

百代
「これが、ツンデレ「離れるぞ」ごめんなさい～」

そしてさらに強く抱きしめる百代。そして俺が今待っているのは新幹線だ。ちなみにたった一泊なのでそんなに大荷物でもない。そして新幹線が来た

彰人
「それじゃあ、行くとしますか」

そして俺らは新幹線に乗り込んだ。席をみると二人席であった、そして前に座っている人に俺は見覚えがあった、それは

彰人
「レオさん？」

レオ
「ああ、彰人君か」

そう、あの箱根旅行で知り合った、俺と同じく四天王を彼女にしているレオさんだ。と、言うことは

乙女
「すまん、レオ。どうもこう言うのは苦手でな、ジュースは買えたぞ。それと、どうかした……の……御剣、それに川神……お前ら、なぜこんなところに？」

そして缶ジュースをもって来たのは鉄乙女、こと乙女さんだ。俺らの前に座っていると言うことは

百代
「まさか、私らの前って」

彰人
「ああ、そう言うことのようだぞ……百代」

そして俺らは席についた、そして普通にレオさん達は俺らの方に椅子の向きを変えて簡単に言うとまあ大学生の旅行のような感じになっていた。

レオ
「いや、だけど偶然だな～まさか彰人君と一緒にこうなることは」

彰人
「そうですね、レオさんとはよくメールをするようになりましたけど。最初は川神院の自宅電でしたけど……あ、あれ、どうしたんですかレオさん」

レオ
「いやぁ～、お前との電話とメールでちょっとした騒動があってな。危うく俺の今通っている大学が消し飛ぶところだった。」

乙女
「あ、あれはレオが悪いんだ！」

彰人
「なにかあったようで。それにしても大学生なのにいいんですか、こんな日に旅行なんて？と、いうよりもどこまで」

レオ
「あ、ああ俺らは軽井沢だけど、君達は」

百代
「やはり偶然というのはあるようだな、彰人」

乙女
「と、言うと」

百代

「私らも軽井沢なんですよ、乙女さん。本当に偶然ですね」

乙女
「ほほう、それは本当に偶然だな。それにしてもお前らはまだ高校生ではなかったか？それなのに旅行とは随分と金を持っているようだな」

彰人
「ああ、実は」

と、俺らが体育祭で勝ったことを説明し、そしてその景品の中の旅行券を今日この旅行に使っている事を説明している。そしてレオさんからの一言

レオ
「はぁ～、竜鳴館以外にもそんな学校があるとはな……ね、乙女さん」

乙女
「レオ、なにを言っている。川神学園の理事長はあの川神鉄心さんだぞ、それぐらい当たり前じゃないか。そしてそれに勝ちをもぎ取ったお前らもたいしたものだな」

百代
「く、く、く。どうですか、うちの“夫”は、凄いでしょう乙女さん」

そしてなぜか“夫”と言うところを強調して言う。

乙女

「く……ふむ、確かに凄いがうちの“夫”だって可愛いんだぞ！」

そしてはじまってしまった、彼氏の自慢話。俺とレオさんはお互いに苦笑いをしながら俺らは俺らで世間話をはじめた

レオ

「まあ、彼女は彼女同士で、俺らは俺らで話すとしようか彰人君」

彰人

「そうですね、レオさん。それで最近はどうなんですか？メールからでも順調のようですし、それにこんな旅行に出るぐらいなんですから」

レオ

「あ、それがな……」

なんとレオさんらしくなく歯切れの悪い感じだ、そして俺を手招きをして俺はそれに同意してそのまま耳を近づけると

レオ

「実は、俺と乙女さんって親戚同士なんだよ……」

彰人

「はぁ～それで？」

レオ

「それで、オヤジと義父さん達がこの前、酒の席でいつになったら子供は出来るんだ、とかなんとか」

彰人

「あはは、よくある感じですね。それでどうしたんですか？」

レオ
「そしたらこの旅行だったと、言うわけだ」

彰人
「……なるほど」

ようは、いつになったら子供が出来るのだろう……そうかならば二人の空間を作ってやればいい！と、そんな感じで親達が決めたのだろう。

彰人
「一つ、いいですか？」

レオ
「なんだい？」

彰人
「夜の営みの方も順調なんですよね？」

レオ
「君はストレートすぎるような気がするが、答えならイエスだ。」

彰人
「なら後は待つだけでしょう？まあ順調のようで何よりです。それでもまだ学生ですよね？」

レオ
「あ、そうなんだが乙女さんは俺の一個年上でな。だから今年度で

卒業なんだよ、それで俺の籍は鉄ってことらしい」

彰人
「なんか俺と似ていますねそう考えると。俺も百代の一個下ですし。それに俺も婿養子のようです」

レオ
「そうだったのか、君と同い年だとばかり思っていたけど」

彰人
「まああいつはこうですから俺がしっかりしていないと」

百代
「だから、彰人のほうが」

乙女
「いや、レオのほうだ！」

そしてまだ続けていたこの二人。

彰人
「まずはこの二人を落ち着かせましょうか……」

レオ
「……そうだな」

そして二人で自分の彼女を落ち着かせること、それから十五分以上を費やした。まったくどちらとも引かないし周りからは暖かい目で見られるし、レオさんですら苦笑していたし。

百代
「彰人～」

乙女
「レオ～」

と、言うわけで

彰人
「どうにか、お互いの彼女を肩まで腕で抱くと言うことで落ち着きはみせましたね、レオさん」

レオ
「まさかこんなことで乙女さんがおとなしくなるとは。いやいや、彰人君には恐れ入るな。しかしどうしてこうするとおとなしくなると」

彰人
「俺の場合は百代を調きょ……ゴホン、まあこいつは俺がこう、なんていうか密着すると結構鎮火するんですよね、武の方のメーターが。と、いうよりも俺らの彼女って強いじゃないですか、だから守られるような感じで今のように抱かれるとどうもフリーズか、こう溶けるようですね」

レオ
「なるほど、確かに俺の場合は特に乙女さんに守られてバッカだからな」

彰人
「まあ、百代の場合はいつもこんなんですけどね」

レオ
「ははは。ノロケとは凄いな」

彰人
「そうですかね？それにしても乙女さんがこうなるとは」

レオ
「そんなに驚くことかい、意外にも乙女さんは名前の通り乙女だと俺は思うけどね」

乙女
「こ、こらレオ！変な事をいうな／／／／／」

そして紅くなる乙女さん、俺が知っているあの刀のような感じは皆無である。まあ俺の隣で俺の腕を完全に枕のようにしているこの彼女もあの武神とは思えない。

彰人
「まあ、俺の場合は仕事で会うので。とくキリヤカンパニーのご令嬢のボディガードを」

レオ
「ああ、それは姫のことだね。って言っても依頼は護衛が中心だけど。と、言うことはやはり君も武術を？乙女さんに聞くと彰人君は化け物のように強いって聞いているけど」

百代
「そうだぞ！私の彼氏は強いし、そしてかっこいいし、そして優しいし、ちょっといじめるけど最近はそれもいい」

乙女
「まあ確かに私と川神が束になっても勝てるかどうかは分からないのは事実だしな。レオも彰人ぐらいとは言わないが、もう少し鍛錬してもいいだろう？」

レオ
「これでもこの前村田に勝ったでしょ乙女さん……」

乙女
「あれはかっこよかったぞ／／／／／／」

レオ
「あ、ありがとう／／／／／／」

そしてこのたまにみせる初々しさがすごく甘く、そして俺らを刺激する。特に百代、大体百代、てか全部百代

百代
「むぅ～、さすがは大学生達だ。すでに乙女さん達の結婚式が見えるぞ」

彰人
「いや、百代まて！まずは大学卒業だからね。そして俺らはまずは俺が高校卒業だからね！」

レオ
「あはは、君達だったすぐに結婚かな？」

彰人

「ええ、俺が卒業したらすぐにでも」

乙女
「レオ、これが正に男だ。お前がこの年の時は酷かったものな」

レオ
「う、それは言わないでくれよ乙女さん！」

彰人
「え、レオさんって今の感じでずっといたんじゃないんですか？」

乙女
「全然違うよな、レオ」

そんな感じでレオさんと乙女さんの出会いの話、そしてそれらを色々と聞いた。

百代
「はぁ～乙女さんがそんな青春を過ごしていたとは」

彰人
「俺的にはレオさんの熱血モードが気になる」

レオ
「まあ、昔だしな……それよりも俺らの話だけとは行かないよな？」

そして今度は俺らの話になった。と、言っても俺らの場合はいつ好きになったのかの正式な時が分からない

百代

「そうだな～私は彰人が私を倒した時から人目置く様になった気がするが、それからは……なんでだろうな？」

乙女
「そう思えばお前らは同じ川神院の育ちだったな。しかし百代がこうだが御剣はどうなのだ？」

彰人
「いや、俺の場合はたぶん家族だと思ったからじゃないかいかな。たぶん」

レオ・乙女
「「家族？」」

彰人
「まあ恥ずかしい話なのですが、家族を守ろうと昔は思っていたんだと思う。けどいつの間にか百代を守ろうと思っていた自分が居て、それで気にしだしたんだと思いますよ俺の場合は」

百代
「彰人～／／／／／／」

百代
「私は、その言葉だけでもう一度お前に告れそうだ！！」

乙女
「なるほど。しかし守るか……レオも私を守ってくれるか？」

レオ
「なに言っているんですか乙女さん、当たり前ですよ」

乙女
「そうか！！」

そんな感じで結局、バカップルが二組だっただけで何も変わらない新幹線の中だった。

##第八十二話##（後書き）

まさかのつよきすキャラ参戦です。

それではバイニー

##第八十三話##（前書き）

旅行編開始です

##第八十三話##

そして軽井沢についたのだが……なんだこの駅は

百代
「おお、彰人。これはなんだ？目の前にアウトレットがあるとは…
…正しくこれで金を稼ぐのだな！」

彰人
「そういう大人の事情を言わないの！それじゃあ、レオさん、乙女
さん俺らは先に旅館で荷物置いてきちゃうので

レオ
「ああ、俺らは先にこのアウトレットを見ているからもしかしたら
また会うかもな。それじゃあな彰人君」

そしてレオさん達は先にアウトレットの方に向かってしまった。俺
らはそこから少し離れた今回の泊まる旅館に先に荷物を置きに行く
ことにした。そして移動はバスでと言うことで現在バスの中

百代
「しかし、本当にこんなに早くお前と旅行が出来るとはな。まあ明
日には帰るのだがな、それにしても軽井沢か、私は初めてだな」

彰人
「俺も初めてだからね。それにしてもここは緑が多くていいな。降
りて思ったんだがやはりここら一体は涼しくていいな」

俺がそう言うと隣に座ってる百代がさらに俺に接近した、てか普通

に抱きついた

百代
「私は少し寒くなってしまった。彰人よ、暖めてくれ」

俺はそのまま腰に手を置いて

彰人
「はいはい、それじゃあ俺の腕の中でずっと暖まっていなさい百代」

百代
「う～ん、彰人の匂い♪」

そんな事をしているとバスが目的地の目の前に到着。ちなみに百代は少し膨れていたがまあそこは俺が撫でてどうにか納めてもらった。そして俺らは旅館の中に入った。ちなみに旅館名は『すずかり』。旅館と言っていたが、普通に中はホテルみたいに和風と言うよりも洋風のイメージだ。俺らは先にロビーに向かった。そして受付嬢が挨拶をした

受付嬢
「ようこそ、すずかりへ。ご予約の方でしょうか?」

百代
「ああ、御剣だが」

そして受付嬢が確認すると

受付嬢
「はい、御剣様。大人二名ですね、チェックインにはまだ早いので

すが……荷物の方で」

百代
「ああ、それで頼む」

ちなみになんで今回のこの旅館の予約を御剣で予約したのかは、百代が決めた。理由は非常に簡単で、俺がどの道川神院に婿養子として入るのでそれだと自分は御剣の性を名乗れないと言うことで今回は御剣となった。そして俺らはそのまま荷物を預けてアウトレットの方に向かった。

百代
「いやぁ～しかしいいな～」

彰人
「ナニガだ？」

百代
「さっきの聞いたか？私が御剣だが。と言ったのを」

彰人
「ああ、聞いていたよ。てか普通に隣に居たんだからそりゃ聴こえるでしょ。まあ確かにお前から俺の性が出るとなんだか夫婦みたいでよかったけどな」

俺はそう言うと百代は、そのまま真っ赤になった顔を俺の腕で隠しながらそのままバスに乗った。そして座るとまた俺の腕に抱きつく

彰人
「なに、真っ赤にしているんだよ？百代～」

俺はちょっと苛めながら百代を遊んでいた。

百代
「う、うれしかっただけだ／／／／」

彰人
「可愛いやつだな！」

そしてバスがアウトレットに到着。そして俺らは買い物を始めた、俺の現在の私服は軽いシャツにジーパン。百代も似たようなものだ、もちろんあの可愛いリスのプリントをした奴だ。

彰人
「そう思えばお前の夏服って結構そのプリント多いよな。リス」

百代
「ああ、これは結構私のお気に入りでな。色違いで後五枚はあるぞ」

彰人
「俺の場合は無地が多いからな。ここでなんか買っとこう……明日で軽井沢銀座に行くとすればやはりここでなにか買っておきたいな。百代はなにか見たいところとかあったらすぐに言えよ」

百代
「分かっているさ。もちろんな」

このとき俺は知らなかった、百代がまさかあんな事を考えているなんて。

そして俺らは服やを結構見ていたとき、不意に俺の腕の力が強まり、
そして俺は百代を見た

彰人
「どうかしたか？」

百代
「ああ、どうかしたぞ。見たいところがあるのだがついて来てくれるか？」

彰人
「もちろん、ついていってやるよ」

そして俺がそう言うと百代がなぜか笑い

百代
「それじゃあ、ここなのだが」

と、指を指された先にあったのは……ランジェリーショップ……ようは下着屋だ。しかも結構ピンクピンクしている、店の

彰人
「すまん百代、俺は急にトイレに「逃がさない！」く、離せ！さすがにあの中は無理だ」

百代
「何を言う。自分の女が自分の好みの下着を着けているほうが魅力だろう？てか最近着たままとかスルじゃないか！！」

彰人

「大きな声でそういう事を言うな！確かにそのほうが俺も燃え……
ゴホンゴホン。さすがに気まずい」

百代
「さっき、どこにでも着いていくと言っただろう？」

彰人
「ぐ、だがしかしな」

俺は渋るが、しかし次の言葉で俺は撃沈した。それは百代が急に顔を近づけて

百代
「それに、最近小さくなってきたんだが……これはお前のせいだと思うぞ（ボソ）」

彰人
「な……」

百代
「それじゃあ、行こうな」

そして俺は無力にもそのままランジェリーショップに足を入れる事をなった。

そして目の間に広がるのは……下着、下着、下着の数々。客をみると確かに若干の男性もいるようだが……やはりきまずくて死にそうだ。

彰人

「やはり、外に」

百代
「……そんなにやだか？」

なんだと……あの百代が上目遣いとは、今日ほど俺の身長を恨んだことは無いぞ

彰人
「い、いや……居てやるからそういう顔をするな」

百代
「やった♪」

これこそ正に惚れた弱みであろう。しかしこれで終わったと言うわけではない、次の試練がすぐに出てきた。それは

百代
「これのほうがいいか？それともこっちか？」

そう言って見せて来るのは……紐だった、俺はため息をつきながら、それをそのまま棚に戻した。

百代
「なんだ？不満だったか？あれほど際どいのは「際どいと言うかこれは下着じゃなく紐だろうが」なんだ、大丈夫だぞ、着る訳でなくお前を誘惑する時のようだ」

彰人
「尚更問題だな……てか本当にこれを買いにきたのか」

百代
「いや、普通のだ。それじゃあこっちか」

そして行くのは、さらに奥の方だ。そして思ったのだが、百代の胸は普通の女性よりも大きいのはすでに分かってたので普通に数が少ないと思ったのだが……

百代
「う～んやはりアウトレット、私のサイズでもＯＫだな。それに最近さらに大きくなってきているし、これはこれで大変だな」

そういう百代の顔がちょいと調子に乗っているような感じだったので

彰人
「そうだな、それじゃあ少しは自重して週二ぐらいで「私が悪かった」わかればいい」

百代
「しかし、どれにするか迷うな。さすがにここまであるとは……彰人、好きな下着の色はなんだ？」

彰人
「どストレートにこの彼女は何を聴いてきているんだか……」

そして俺はさすがに言葉にするのは、他の客の前なので恥ずかしく指をさした……その色は

百代
「……黒とは、確かに初めての時も黒だったが、これがいいのか彰

人は？」

彰人
「てか、お前さんのを選んで、それは見るとなるとな～黒だろ。まあ私的のはこれでもいいのだが」

そして俺が指すのは隣の普通の水色のブラジャー

百代
「普通だな。彰人の事だからもっとＳＭチックなモノかと」

彰人
「俺をなんだと思ってやがる」

百代
「私の彼氏で……この私を屈服させないと気がすまない鬼畜彼氏？」

彰人
「本当に自重するぞ「ごめん！」まったく」

そして百代は俺がさした黒、そして水色を両方買ってそして俺の視線の地獄を後にした。それから俺らは少し歩いた、このアウトレットは西、東と別れているので、さっきまで居た西から今度は東に移った。今度は俺の時計などだ

百代
「いまどき、時計か。携帯があるから十分だろう？」

彰人
「俺の携帯って、液晶だけだから意外と見ないんだよ。だからこう

いう所で一個はちゃんと欲しいんだよ」

百代
「だけど確か中学の時もっていただろう？」

彰人
「紛争地域でどっかやっちまったんだよな（あの時は…俺も完全に蛇の鎖を解いていたから）気付かなくてな」

百代
「そうなのか……ならば私が選んでやる」

そして俺らは時計屋、名前はシーショックだ。そして俺らはショーケースの中のモノを見ていると百代が俺の腕を引っ張った。

彰人
「どうかしたのか？」

百代
「ああ、お前はソーラーとか、電波とか居るのか？」

彰人
「そうだな、その両方あるのがいいな。」

そして百代は指をさした。

百代
「この黒なんてどうだ？」

彰人

「お、いい感じだな、しかしお前にしてはいいのを見つけたな」

その時計は黒だが少しメタリックの出来で時計は針のスタイルのものだった。

百代

「む、私だってモノを選ぶ目はあるぞ」

彰人

「本音は？」

百代

「実は、私がかっこいいと思ったものでな、これの色違いで赤が横にあるだろう？それがかっこ良くてな。それを見ていたら隣にそれの黒があったというわけだ」

彰人

「自分が欲しかったモデルかよ」

百代

「そう言いながら、その手に持っているのは」

彰人

「店員さん、これください」

百代

「頼むのか！まあうれしいがな！！」

そして俺らはそのまま時計屋を出た。

##第八十三話##（後書き）

原作から離れてしまった…Ｏｒｚ

それではバイバイ

##第八十四話##（前書き）

とうとう、三ケタ台が見えてみました！

##第八十四話##

そして俺らが時計屋を出た、そして歩いている時俺は不意にトイレに行くと言って百代を待ってもらうことにした。そして行ったのはトイレではなく、さっきの時計屋だった。そして俺はもう一つの時計を買って行った、そう俺の買った時計の色違いの赤だ。

彰人
「いやぁ～すまん、トイレが混んでいてな」

百代
「遅いぞ～まったく何人の男に声をかけられたと思っている？」

そして俺はわざと指で数えるモーションを入れながら

彰人
「そうだな、ざっとゼロって「バカ！」はぐっ！顔に入れるかよ、拳を」

百代
「お前が悪い、まあ間違っていないけどな」

そして百代は俺の腕を取りながら、そのまま歩いていった。時間的には既に昼ぐらいだったので俺らは昼にすることにした。そして入ったのはカレー屋だ、なぜカレー屋かと言うと理由はシンプルだった、それは空いていたからだ。ちなみに俺らのほかの客は家族連れが一組だけで俺らはその向かい側に座ることにした。

百代

「はぁ～」

そして百代がその家族を見ている

彰人
「どうかしたのか、百代？あそこの家族を見て」

百代
「いや、別に……あう言う家族っていいよなぁ～っとしみじみ思っているだけだ」

そして俺もその家族を見ると、そこには父親の膝の上に子供を乗せて、そして隣では母親が子供に食べさせてあげていると、なんとも微笑ましい光景が広がっていた。

渚
「朋也くん、せっかくですから。朋也君も先に食べてください」

朋也
「いや、汐が食べ終わるまで待つよ。それに汐もここのほうがいいだろう？」

汐
「うん、パパのお膝がいい！」

渚
「よかったですね、しおちゃん……けどうらやしい」

朋也
「娘に嫉妬してどうするんだよ渚。まあそこもかわいいんだがな、

さすがは岡崎サイコー」

そんな感じだ。なんだが何処かの坂の人たちのような気がしたがきのせいだろうか。ちなみに百代はそれを見ながら、なぜか途中で俺を見ていた。

彰人
「どうかしたのか、百代？」

百代
「う～ん、私らに子供が出来たらやはり彰人は親バカになるのだろうかと思ってな」

彰人
「それはどうだろうな。俺は親の愛を知らんからな、まあある意味鉄爺達からそれぐらいの愛情を貰っているのかもしれないけどさ」

百代
「彰人…そのすまん」

百代が慌ててあやまった。たぶん俺の話題で親はタブーと言う事にしていたのだろう

彰人
「別に気にしていないからいいよ。それにお前からの愛情が俺は嬉しいんだよ、なあ彼女さんよ」

百代
「そうか」

そして注文したカレーがきた。百代はチキンカレー、俺は海鮮カレーだ。そして二人で食べながら……訂正しよう、食べ合いながらカレーを完食した。そして凄まじい目線があったのは言うまでも無いが、それに負け時とあの親子がそれをしていたのは俺と百代で笑ってしまった。

そして俺らは次へと足を進めた。時刻はまだお昼過ぎのせいか、一時だった。俺らは次に雑貨屋を見にいった。

百代
「おお、これはこれですごいな彰人」

そして見るにあるのは雑貨だがその数は異常であった。カーテンからそれこそ食器まで取り揃ってあった、そして百代がいち早く見ていたのは……食器だった、しかも箸

彰人
「百代、なんで箸なんか見ているんだ?」

百代
「いやぁ～この蛇の箸が、どうもお前のにピッタシと思ってしまってな。少し見てしまっていた」

俺はそれを言われるとその横にあるのを、そのまま百代の前に持っていき

彰人
「モモの絵柄もあるぞ、てか同じ種類の箸か……他には、お！犬とかもあるな
それなら」

そして俺は探し始めた、そう川神院の俺らの家族の絵柄を。そして探すこと数分、鉄爺、ルー師範代、一子、そして、百代と俺の箸が見つかった。絵柄は順に袴、ラーメン、犬、桃、蛇、と全員分が見つかり、俺らはそれを土産として購入した。

百代
「よし、これで家族分は買ったな。と、いうか一日目で買うものなのか？普通……明日の予定は」

彰人
「一応、軽井沢銀座に行くって予定を最初に言っただろ。まあそんな感じで」

百代
「はい、あなた」

彰人
「それは未来の俺の呼び方だからな、ママ」

百代
「ママっ／／／／／／」

そしてそれから俺らは色々と周り、一通り欲しいものを手に入れてそして時間はすでに五時となっていた。

彰人
「そろり帰るとしようか百代。結構回ったてか、色んな服買ったしな」

百代
「そうだな、夏物から、秋物、さらには彰人の好きな下着と……私の欲しいものは大体買ったから大丈夫だ」

彰人
「最後のは普通にどうかと思うけど。それじゃあ俺らはそのまま戻るとしようか、今日泊まる宿に」

そして俺らは行きのバスと同じ、バスに乗り込みそしてそのまま宿を目指す。そして到着するのだが、俺らがロビーに来たときにまさかの再会があった。

レオ
「はい、対馬で予約しましたのですが」

受付嬢
「はい、お待ちくださいい……はい、対馬レオさまですね。どうぞお越しくださいました、すずかりへようこそ、それでは大人二人ですね、部屋は２０８となっておりますので」

レオ
「はい、ありがとうございます」

そしてロビーから鍵を受け取ったレオさんはその後ろに俺らが居る事を知ると。普通に苦笑で

レオ
「これこそ正に、運命だな。彰人君」

彰人

「俺もそう思いますよレオさん、それにしても乙女さんは」

レオ
「ああ、トイレでな。もうすぐ「レオ～」ほら着た」

そして出てくるのは乙女さん、そして俺らに気付くとやはり同じく苦笑だった。

百代
「正しく運命～」

乙女
「私も尚更実感したよ。それでは御剣、川神我々は先に行っている、それではな」

そして二人ともバックを持ってそのまま部屋の方に向かっていった。
そして俺らも預かってもらっていたバックを返してもらい、そして俺も鍵を受け取った。

百代
「私らのは１０２か。ここは一階の部屋はここと、もう一つしかないようだな。それにしても面白な、宿なのに部屋は二階までか……まあいいか、いくぞ彰人」

彰人
「了解。だけどどんな部屋だろう？」

そして俺らは部屋のドアを開けてそして出てきたのは広い空間だった。全室和室で凄く綺麗だ、掘りごたつのところや、普通の部屋など、普通に一部屋でも十分のところをここは二部屋ある

百代
「おぉぉぉ、これは凄いな彰人！ここまで凄いとは……連れてきてくれてありがとう、彰人」

彰人
「別にいいよ百代。それに俺もここまでいい部屋とは思っていなかったし、えっとそれじゃあこっちで確認するか」

そして俺が確認するのは食事の時間と、そして風呂の時間だ。風呂の時間は普通に４時から深夜の１時と結構で長めの感じだ。そして食事の時間は６時から８時３０分までに隣の食堂に来ればそれでいいと、言う感じだった。そして俺がそれを見ていると後ろから俺に抱きつきながら俺の肩に顔を乗せて案内を見始める百代……色々当たっているのだか……吐息とか、匂いとか、胸とか。

百代
「彰人～さあ、私たちのイチャイチャ専用風呂はないのか～？」

そういう百代は俺に抱きつく形でそのまま案内の頁をめくる。そしてその百代の期待するものは、この旅館にも存在してしまった。

百代
「あったぞ！！あったぞ彰人。何々、予約制ですので、お早めにか……」

彰人
「いってらっしゃい」

俺がそう声をかけたときは既に聴こえてきたのは、ドアが閉まる音

だったのは言うまでも無い。

Ｓｉｄｅ　百代

私はすぐにさっきの予約をするべくロビーに向かっていた、そして同じぐらいの距離で、ちょうど乙女さんとあった、そして私はすぐに歩くスピードを上げた、乙女さんは私にクづくのが遅く私の方が早かった。

受付嬢
「どうかなさまいました？」

百代
「ああ、あの個人風呂の予約をしたいのだが、大丈夫か？」

受付嬢
「あ、はい。だいじょうぶですよ、今日はまだ一組も来ておりませんから何時からでしょうか」

私は内心ガッツポーズをとり、そして乙女さんが悔しい顔をしたいのを私は見逃さなかった。

百代
「それでは八時から九時の一時間でお願いしたいのだが」

受付嬢
「分かりました、それでは時間になりましたらこちらロビーにお越しください、鍵を渡しますので。それと時間厳守で鍵は九時にここにお返しください」

百代
「分かりました」

受付嬢
「それではお名前をここに」

そして出てきたのは予約の紙で、私はそこに『御剣』と書いてそして乙女さんにVサインしながら帰っていった。そして帰ると、そこには彰人はいなかった

ｓｉｄｅ　ｏｕｔ

俺がトイレに入っている間に百代が帰ってきたのは言うまでもないと思い、俺はわざと気配を消した。そして百代が帰ってきた

百代
「彰人～……いない？気配がない？う、嘘だろ！？彰人、彰人、彰人！！」

そう言うと普通にトイレとかを確認せずにそのまま部屋に入っていく百代。気配に頼りすぎているような気がしていたけどビンゴのようだ、しかしここで予想以上の出来事が起きてしまった

百代
「ひっ、ひっぐ、彰人、彰人、彰人ぉぉぉぉぉ！」

彰人
「待て待て待て、普通泣くか？」

と、俺がトイレから出てくると、そのまま抱きついて、そしてキスを強引にしだす百代。お前は獣かと思いながらそのまま俺は百代とキスをしたままそのまま抱き寄せてお姫様抱っこでソファーに落とした

百代
「彰人、彰人、彰人！はむ、じゅる、ちゅっ、れろ……はぁ、はぁ、はぁ～彰人～」

なぜか、このキス攻撃だ。そしてまた俺に抱きつく百代。それからちょっと時間が経った、たぶん一、二分だろう、やっと落ち着いたのか百代はそのまま俺の腕をはなしてはくれずにそのまま俺をジト目で見ていた

彰人
「……落ち着いたようだな、百代」

百代
「私の心配を返せ……」

そして若干まだ赤目で俺を見る百代は正しく子猫と言う感じだ。

彰人
「まさか、泣くとは思わずだな、だから「ジーーー」……すまん、百代。今日はより一層に可愛がる事を誓う」

百代
「約束だぞ」

彰人

「ああ、約束だ」

百代
「なら、いい！丁度、さっきあの風呂の予約も取れたことだしな」

彰人
「そうか、それはいい。それじゃあ、百代……こっちちゃんと向いて」

百代
「なんだ？」

そして俺はキスをした

彰人
「さあ、可愛がってあげようか？百代」

百代
「わぁぁい」

その時の百代はまるで幼稚園児のような喜び方だった。

##第八十四話##（後書き）

アンケートなのですが……彰人の過去編、読んでみたいでしょうか？

どうも作者の独り言デシタ……それではバイニー

##第八十五話##（前書き）

この作品はフィクションデス！

##第八十五話##

百代といちゃつくこと、一時間ちょい。時間はもうすでに夕飯の時間となっていた。

彰人
「おっと、少し百代といちゃつきすぎたかな？」

百代
「ふえ？もっと！」

そういう百代の仕草は猫そのものなのだが、さすがにお腹も空いたので俺はもう一回深いキスをすると

彰人
「それじゃあ、いくよ……さすがにお腹も空いたし」

百代
「私は今の十分なのだが「なら俺だけで」あ～き～と～」

彰人
「分かっているって、行きますか百代」

と、俺はそのまま百代の手を引きながら部屋を出た。てか百代よ、あのままだと俺の理性が死んでいるからどの道外には連れ出したよ俺は。そして俺らは隣の食堂に到着、ちなきに食堂と行っても同じ空間にバーも隣接しているせいか結構大人な感じだ。俺らはそのまま自分達の部屋の番号の席についた。そしてその後ろの部屋の人が

乙女
「ふむ、お前らがここのテーブルだったらしいな」

普通に帯刀をしている乙女さん、そして苦笑いしながら普通に御ひつからご飯をよそってる主夫、もといレオさん

レオ
「まあこうなると俺はなんか予想できたけどね」

彰人
「俺もですよレオさん、あのう、それと乙女さん」

俺はその物騒な物を指差すと、すかさずレオさんが間に入り

レオ
「すまん、これはどうしても無理だった。乙女さんが言うにはいつでも戦闘できるようにしておいて損は無いと言うことで……俺的には完全に怯えた目や奇怪な眼を向けられている感じがしてならないのだが」

百代・彰人
「「……あはは……」」

俺らは笑うしかなく、そして当の本人と言うと

乙女
「なんだお前ら?私とレオの夕食の邪魔はするなよ」

これである、ある意味百代に似ているところがあるのだが、やはり乙女さんの方が一枚上と言うかさらにネジが外れている感じだが。

百代
「彰人！私らも食べよう。それに結構私もお腹が空いていてな、このまま行くとお腹が鳴きそうだ」

彰人
「百代のお腹の音ね、興味深い「彰人！！」分かっているから、分かっているから。それじゃあ俺らも食べますか」

そして俺らはそのまま普通の食事を楽しんだ。そして俺らがすでにデザートに差し掛かった時に事件は起きた。

客Ａ
「“ガシャーン！！”っと、おい！！なにしやがる、てめぇ！！」

それは急に起きた、たぶん店員がグラスかなにかを落としてしまったのだろう……俺はそう思いその音がしたところをみたが、そこにあった光景は、俺の予想を大きくこえたモノだった。男性が完全にワインがかかっているのだが、それよりも問題は割ってしまった相手のほうだ、それは普通に子供だった。そうあれは間違いない

子供
「ご、ごめん…な……さい」

あのカレー屋にいた、子供だ。どうにかグラスは割れているようだがそれは子供の逆方向に落ちて割れていてけがは無い様だが

客Ａ
「ああ、きこえねぇよ！」

完全に酒が回っているせいかその客はその子供に怒鳴っている、それに気付いたお母さんと、お父さんが謝っているが、それでもそのおっさんはまったく納まらず、店員がなだめているがそれでも納まらず

客A
「ちっ、いい気分がこんなガキのせいで台無しだよ」

と、その時俺のなにかが変わった

おっさん
「こんなのじゃ、てめぇらの親も「おい、おっさん。随分と酔っているようじゃないか？」あ、てめぇ、ゴアッ！」

そしてそのおっさんの顔面に水がかかった、それは俺ではない、俺の後ろにいる、そうレオさんだ。

乙女
「れ、レオ！？」

俺も乙女さんと同じく、そのレオさんの行動に完全に驚かされた、そしてもちろんそれに怒り出すのはおっさん。

おっさん
「なにしやがる、若造が！」

レオ
「おっさん、その子供はさっきから謝っているじゃねぇか！それなのにさっきから同じような罵声浴びさせてよ……知っているかそれはな、弱いもの虐めって言うんだよ！」

おっさん
「ちっ！うっせいな、それがどうしたそれでもこのガキが悪いのは「おい、おっさん黙れよ」ちっ、またガキ、ひっ！？」

俺はさっきを当てながらおっさんの顔をみた。

彰人
「どうした、おっさん？それにさっきあんた、親がどうとか言っていたな、だけどよ悪い事をしたらすぐに謝っているこの子の親がそんなに酷い教育か？今現在、お前からの罵声を浴びてなにも言わない彼らがそんなに酷いのか？あ、答えろよ、おっさん？」

おっさん
「ひっ！く、いいか、この私は！九鬼のモノの近くのものだぞ、お前らそんなに偉そうにしていいのか」

それを聞いたほかの全員は驚愕した、しかし俺と百代、さらには乙女さんは動じず、レオさんはまだ興奮しているようでわかっていない、その親はわかっているようで結構焦っていた。俺はすぐに携帯をだして連絡を取る

おっさん
「いいか、これ以上言えば俺がお前らをそのまま世間から抹消してやるよ！まずは手始めにさっきのガキの家族を「おっさん電話だぜ」は、なに言って、「面倒だ、おっさんの名前なんていうんだ」あ、俺は合田「合田だ、そうだぞ英雄」このガキ、なに電話なんて」

そんな時おっさんの胸ポケから振動がしていた、そしておっさんは相手をみるとすぐに出た

おっさん
「これは九鬼様、は?え。それは一体……彰人?彰人殿……そのお方が…は、いえいえ、それは一体、いえ、そのような、え、ど、どういう、え……お、お待ちを、九鬼様、九鬼様」

おっさんはその電話の後なぜかそのまま膝をついてしまった、それを見た百代は不思議がり俺に聞いてきた

百代
「“彰人”一体なにをしたんだ?」

百代の言葉におっさんが反応した

おっさん
「彰人……だと……」

彰人
「ああ、そうかおっさんにも俺の紹介をしていなかったな、俺の名は御剣彰人……九鬼英雄とはちょっとした仲でな……それとお前さん早く消えたほうがいいぞ」

おっさん
「なにを言って「お前が合田か?」な、お前は九鬼様に仕えていたメイド「てめぇにそう言われるのはなんだが癪だな!」ぐふっ!」

おっさんの腹に一発入れて完全に伸ばしたのは女王蜂だった。

あずみ
「彰人、すまんな。九鬼の名をつかってこんな事を」

彰人
「俺はどうでもいい。それよりもあの子とそしてこの惨事をどうにかしてくれ」

あずみ
「それなら見な。もう終わっているよ、それでどうする、この男。英雄様からは彰人に一任すると言っていたが？」

彰人
「うん、山に捨てといて♪」

あずみ
「笑顔で怖い事を。まああたいもそれには賛成だな、後始末はこっちでしとく。お前は……旅行を彼女と楽しめ」

彰人
「もちろん」

そう言うとメイドの集団は消えた。そしてその場ではなにもなかったように綺麗されたテーブル。俺は座りそのまま飯を食おうとしたら、拍手が起きた……はい？俺は周囲を見ると俺とレオさんをみながら周りが皆拍手をしてくれていた。

レオ
「あはははは、なんだがな……」

彰人
「え、えっと？」

乙女
「うんうん、さすがはレオだ。私はさらに惚れてしまったぞ」

百代
「いやぁ～彰人も鮮やかだったな」

そう思えば俺らあのおっさんを撃退したんだな、絵的には。そしてさっきの家族が俺らの前に来て、お父さんであろう人が

お父さん
「ありがとう、お前らのおかげで俺がキレなくてすんだよ」

俺はそこで空耳なのか……なぜか非常にこの人の声が英雄にそっくりだったのがきのせいだろうか？

レオ
「いえいえ、そ、その余計な「いえ、余計なんて、ね、汐ちゃん？」え？」

汐
「うん、ありがとうお兄ちゃん達」

お母さん
「うちの汐ちゃんをありがとうございます。私はこの汐のお母さんです、岡崎渚っていいます」

お母さんが、いや渚さんがそういいながら頭を下げた

お父さん
「あ、まずは礼だな、俺は岡崎朋也だ。本当にありがとう」

そして頭を下げられた、俺らは急いで

彰人
「いいです、いいです。俺らが勝手にしたことですし」

レオ
「そうですよ、それよりも娘さんに怪我は」

渚
「はい、それは大丈夫です。すぐに確認しましたので」

朋也
「しかし、九鬼の名前が出たときは本当に焦ったな、しかしあのおっさんの焦りといい、その後のメイドといい、あれは」

彰人
「ユメは見れましたか？」

朋也
「え？」

彰人
「いえ、気にしないでください。娘さんにも何もなかったようですし、バンバイザイですよ。それじゃあ食事に戻りますかね」

そしてその後は、普通の食事に戻った。ちなみに百代からは褒められるし、そして後ろは後ろでそのまま褒められているようで、お互いにある意味大変だった。

それから俺らは岡崎さんの家にいつか遊びにいくと行って部屋に戻ることにした。

彰人
「う～ん、さすがは旅館の飯はうまかったな」

百代
「う～ん、さすがは旅行の事件は格別に彰人をかっこよくさせるな～」

出だしが一緒なのに、どことなく違う俺ら。そして百代がすぐに部屋に戻り用意をしだした、そう風呂の用意だ。俺は簡単な物、例えば旅館に入っている浴衣だとか、だから俺の荷物は実質パンツだけだ。俺は用意を完了し、百代は

百代
「よし！勝負下着も持った。これで二度美味しく食べられてしまいそうだ」

と、言葉とは逆によだれを出していた。そして普通に黒い布を俺に見せながら入れるな、わざとだと思っていても欲情してしまうのは男の性のようだ。

彰人
「それじゃあいくとしますか」

百代
「は～い♪」

俺らはそれから歩くこと一分、ロビーの人から専用の鍵を貰ってそ

の家族よう風呂に到着。そう思えば箱根の時もこんなことがあったな

百代
「♪～♪～♪～」

なんでこの彼女は普通に俺の前で着替え始めるんだよ、しかもたまに俺の方向くし……てか普通にここは着替えるところが共同かよ！

百代
「彰人に見られてすでに私は興奮気味だ～」

彰人
「あほなこと言っていないでタオルを巻きなさい、さすがに俺もここで一回戦目はしたくない」

百代
「は～い♪……だけどそんなこと言うとお姉さん期待するぞ？」

俺はそんな言葉を無視して百代をさきに追い出した。そして俺は優雅に服を脱いでいった、そして俺もその風呂場に行くと、そこには

百代
「おそ～い！もう準備は出来ていますよ……あ・な・た♪」

そして俺は……野獣となった。

##第八十五話##（後書き）

好きな小説が消えテイル……だと

##第八十六話##（前書き）

最近、オリジナル書いてます……発表はしないとおもいますが

##第八十六話##

今日も一日がはじまった。結局あの後、俺らは非常に爛れていたのは言うまでも無く。そして今の尚俺の腕の中で寝ているこの彼女。ちなみに起きているが狸寝入りの様子。と、言うことで俺も悪戯をすることに

彰人
「百代は……まだ寝ているのか」

百代
「（お、今日は気付かないぞ……まあ昨日のあれではな、疲れていてもしょうがない。結局合計で二桁はいってしまったからな。まったくこいつの容赦なく中にとは、まったく。まあこのまま寝ているフリでもしよう）」

彰人
「寝ているのか、ならばちょっとぐらいは、遊んでも」

百代
「（こ、これは夢にまで見た！彼女が寝ているからちょっと悪戯しちゃえのパターン！！あ、彰人に悪戯されてしまうのか私は！おっと想像しただけで、ちょっとぬれて……）」

彰人
「本当に寝ているのか？本当に？ｗｗ」

百代
「（そうだ、寝ているぞ。そのまま悪戯を…）」

おいおい、ちょっと肩が震えているぞ百代。完全に笑っているだろう。そして俺はまず、百代を後ろから抱きつき

彰人
「はぁ～落ち着くねぇ。（あとは、なんか甘い言葉でも囁いてみるか……面白そうだし）」

百代
「（やはり彰人も私に抱きついて落ち着くのか、なんだなんだ、あんなに抱きつくな、とかくっ付きすぎたとか言っているくせに。まあそこも可愛いのだがな…おっ耳元に顔を近づけているな、こ、これはなんだ？）」

彰人
「百代、好きだ」

そして百代から湯気が発生した。

彰人
「おお、さすがに効果は覿面のようだな、ええ百代？」

百代
「ひゃい！？も、もしかして……」

彰人
「おう、ばっちしお前が起きていたことぐらい俺が知らないわけ無いだろう……それに若干、肩ゆれていたし…もしかして百代」

百代

「な、なんだ？」

彰人
「俺が悪戯しないかと、興奮なんかしてないよな」

百代
「も、もちろんだ！！それに、べ、別にそ、そんなことは…ちょっとは、い、いやなんでもないぞ。耳元でいきなり囁かれたのがちょっとビックリだっただけだ」

彰人
「ほう、それでこんなに濡らしていたのか？」

百代
「ふえ？」

と、言うことで今日一日の第一回戦がスタートした。

それから二時間後、朝風呂があり、丁度よく俺らは汗を流して、そして部屋で合流した。

百代
「彰人に襲われた……けどこれが癖になっている私♪」

笑顔で、と言うか破顔でそんなことを言っている。

彰人
「ふん。俺を騙そうとするからだ、まったく。ってもうこんな時間か、百代着替えて俺らはそろそろ朝食にしないとな、確か朝食の時間が八時十五分からだったからもうそろそろだろう」

百代
「その前に」

と、唇を俺の前に出す

彰人
「さっきやった「さっきのとは違くて、ソフト」はいはい」

と、俺がしたのだが、結局深くに変化した。

彰人
「ソフトでは？」

百代
「す、すまん／／／／／」

そして俺らは着替えた、そして普通に朝食となったのだが。俺らの前にあの汐ちゃんが来た

汐
「あ、お兄ちゃん、お姉ちゃん。おはよう」

百代
「ああ、おはよう」

彰人
「おはよう汐ちゃん、お母さん達は？」

汐

「あっち」

そして指を指す方向には完全にピンク色の空間を作っている夫婦が1組居た。

汐
「なんだか汐、お邪魔みたいだったからちょっと端にいたら、お兄ちゃんたちにあった」

なんて空気の読める子だろうと思っていたらさすがに、あの夫婦は新婚さんでもあり、親ばかでもあったようで。

渚
「汐ちゃ～ん」

汐
「ママが呼んでいるからバイバイ」

と、言って汐ちゃんもかけていった、またこけなければいいが。

百代
「なあ彰人？」

彰人
「なんだ？なんだか予想が出来ているが聞こう」

百代
「子供っていいな」

彰人

「百代、そう言うのは夫婦になったら言おうな。ちなみに出来ていても可笑しくないからな、俺ら。だからある意味怖い事を言うな」

百代
「ブゥーブゥー、甲斐性を見せろ」

彰人
「それよりもお前と、そのガキの幸せだろう、パパなら／／／／」

百代
「な！？……卑怯だぞ、彰人／／／／」

そして俺らは朝食となった。

それから俺らは部屋にもどりテイクアウトの準備。そしてそれが一段落したので俺は百代を呼んだ

彰人
「百代……大事な話があるんだ」

百代
「……なんだ」

俺らは緊張した空間で、見合った。そして俺はこう言った

彰人
「……土産をどうしようか？」

百代
「そうだよなぁ、家族というか川神院の私のファミリーには買って

あるんだがな。まだ風間達と、それと門下生達のものあるからなぁ～。今日の軽井沢銀座で見つかるかな？」

彰人
「見つかると思うのだが、けど結構な量だろうな。」

俺らはそんな覚悟をしながら、軽井沢銀座に赴くことにした。旅館ではチェックアウトとすでに済まして、帰りに荷物をとりに行くといった感じで俺らは現在、お土産探しの旅に出ていた。

最初はジャム屋さん

百代
「お、おい彰人！桃のジャムがあるぞ」

彰人
「百代、土産だよ……土産」

百代
「うぅ～桃のジャム！」

彰人
「お前は子供かよ……はぁ～それじゃあ川神院の調理場にはジャムの詰め合わせにして……まったく後は個人で桃のジャム」

百代
「わ～い」

正しく、惚れた弱みといった感じだが。しかし次のみせに行く間、ちょっと苛めてみた。簡単に言うと全ての返しをそっけなくした結

果。

百代
「彰人～、彰人～」

求めてくる声に変化、俺はこの変化に満足して。そのまま百代の腕組みから腰を抱いて

彰人
「次は、ファミリーにだな百代」

百代
「ああ。そうだな！それじゃああそこなんてどうだ」

と、言うことで入ったのは紅茶のしかも、葉っぱのほうの売っているところだ。

百代
「……彰人、私が見つけて入ってみたのだが……なんなのだがさっぱりだ」

彰人
「そうか？俺もさすがにそこまで紅茶を飲むわけじゃないが、これならクッキーの土産に最高かもしれんな」

百代
「なぜ、あのロボ？」

彰人
「秘密基地での執事的な感じなのがあいつだし、それに九鬼のロボ

ならそれぐらいインストールしてあるだろうさ。と、言うことであいつにはこれでＯＫで。まだファミリー全体がないな」

そんなこんなで、俺らは土産屋を回りに回り、そして結局

彰人
「地元限定のお菓子の大人買いだな。これであいつらは黙るだろう、てか黙らせる。と、いうかキャップと一子はこれで十分だろうな」

百代
「そうだな、それで彰人。そのもう一つのはなんだ？私以外の女とかだったらこの惑星を破壊するぞ」

彰人
「はいはい、そんなわけがないだろうが。これは忠勝のだよ、いつも色々と世話になっているしな」

百代
「ああ、源か。それじゃあこれでお仕舞いだな、今回の旅行の土産は」

彰人
「そうだな」

俺はそう言いながら携帯で時間を確認していた。帰りもさすがに新幹線で帰りたいので……乗り継ぎの乗り継ぎなんて御免なのでな。

彰人
「今から旅館に行けば丁度いいだろう。それじゃあ帰るか、川神に」

百代
「レッツゴー！」

と、元気よくかけていった。

それから三十分後

彰人
「あの帰りの元気はどこにいったのだか」

現在、俺らはすでに新幹線の中だ。まあさすがに帰りの新幹線まではレオさん達とは一緒にならず、二人での帰りだった。そしていつの間にか百代は、俺の腕を完全に抱き枕にして寝ている。しかも降りる降りる人に本当に生暖かい目で見られながら。ちなみにさっきなどは

百代
「……彰人、彰人～」

などと寝言を結構大きな声でいい、さすがに俺は恥ずかしかった。

アナウンス
「次は七浜、七浜」

アナウンスの声でもう次が隣町だと分かり、俺は百代を起こした。

彰人
「百代、百代。起きろ、もうそろそろ着くぞ」

百代

「はふぅ～。あれ？なんで彰人が普通の服を？さっきまで制服でエッチを」

彰人
「お前はなんていうユメを見ているんだよ」

俺は突っ込みチョップを決めて、百代を起こした。そしてさすがに俺のチョップのおかげかすぐに普通に戻った。そして

百代
「彰人！帰ったら子作り「アホっ」はぐっ……うう痛いぞ、彰人。」

彰人
「正気でもなんて事をいいやがる、お前は。それにさっきも言ったけどそろそろだぞ、荷物の確認しろよ」

百代
「了解、と、言っても大体は彰人が持ってくれるからな。私は、最初に持ってきた荷物ぐらいだけだしな」

アナウンス
「次は、川神～川神～」

彰人
「そろそろだな」

百代
「そうだな」

彰人

「楽しかったか、今日の旅行は？」

百代
「何を今さら……凄く楽しかったぞ、彰人と一緒だからな。それに約束だっしな二人だけの旅行。まあ本当はバイト代を使うはずだったのだがな……」

彰人
「ま、タダで行けたんだ。それに今の俺の貯金額だと……海外だしな……そうなると婚約後の新婚の方がいいだろうしな。それに夏は……分かっているな」

百代
「ああ、お前に任せるぞ妹を」

彰人
「任された」

そして俺らは川神に到着。

百代
「ああ、そうだ忘れていた」

駅についてこの人はこんな事を言い出す。

彰人
「……なにを忘れたんだ？」

俺はちょっと呆れ気味に聞いた、そしたら百代が急に近づき

百代
「彰人、今回の旅行ありがとうな。これは軽い礼だ……チュっ」

キスをされ、そして。そのまま俺の腕を引っ張り

百代
「さ、帰るまでが旅行だ」

その時も百代の笑顔は非常にまぶしくて俺は

彰人
「……それは遠足だぞ」

と、言うのが精一杯だった。

##第八十六話## （後書き）

旅行編終了。いやぁ～原作から離れると大変です

##第八十七話## （前書き）

もう夏休みも終わりですね

##第八十七話##

俺らは川神院に着いたのだが、俺はあることを思い出した。

彰人
「そう思えば、百代？」

現在、俺の腕に機嫌よくからんでいる百代。そして俺が質問をしたのだが、若干の顔をこっちに向けるだけで大体は俺の体に密着している。

百代
「うん？どうかしたのか、彰人。もうすぐで家だぞ」

彰人
「いやぁ～明日から学校だなっと思い出してな……明日から期末だなぁ～っとおもってな」

百代
「……彰人」

彰人
「なんだ百代、そんなアハハ忘れていたよ、みたいな感じは」

百代
「え、えっと」

そして百代は抱きついていた腕にさらに力を入れて

百代
「忘れていたぁ～……あ、けど彰人に言われていたことはやっていたな」

そう、こんな急な旅行などがあると予想というか保険をかけていたのでたぶん、百代も赤点を取らないですむだろう。

彰人
「なら、大丈夫だろう。さあついたぞ」

そして俺らが家に帰ると、そこには鉄爺、そして一子、ルー師範代が待っていた。

鉄心
「うむ、二人ともお帰りじゃ」

一子
「ふたりともおかえり～」

ルー
「おかえりネ」

彰人
「ええただいまです。一子、勉強は

一子
「し、していたわよ……五分ほど」

彰人
「明日からだから、以上」

そして俺らはそのまま家に入ろうとしたら

一子
「うわぁぁぁ！彰人、見捨てないでぇ～」

泣き着かれてしまったので、俺と百代は苦笑いをしながら

彰人
「それじゃあ、風呂と飯食ったら……復習するか、な、百代？」

百代
「私までもか……だけど彰人と一緒ならどこまでも」

そして俺らはその後、さきに夕食を取ることに

彰人
「それじゃあまずは修行僧、師範代のみなさん、それと料理長たちにこれね、ありきたりですまんな」

修行僧
「いえいえ、我々ももらえるとは。それでは他のところには我々が」

彰人
「すまないな」

定番のご当地お菓子だ、これが一番の荷物でもあったのだが。そして次は

百代

「よし、それでは合間ってのルー師範代、一子、ジジイの土産だ」

鉄爺
「ワシ、泣きそう」

ルー
「うん、いい感じの箸だね。今度からはこれで食べるとしようかネ」

一子
「わぁー、犬の絵柄。お姉さま、彰人ありがとう」

そして、俺らの土産配りは終わり、明日からの試験に準備を進めていた。

そして次の日。

Ｓｉｄｅ　大和

俺らは今日から期末考査という、試験前なのだが

キャップ
「俺なら焼き海苔をご飯だけでもいけるぜ！」

クッキー
「そこでたまに食べるたくあんがいい仕事をしているんだよね」

クリス
「う～ん、今日はアジか。やはり日本の朝は焼き魚に味噌汁だなぁ～心に染み渡る」

まゆっち
「けど、もう少し綺麗に食べられますよ」

松風
「ほら、クリ吉。まだまだ食べられるところもあるぞぉ～まゆっちのこれをみな」

クリス
「本当だ、ここまで綺麗食べてあるとは。骨しか残っていないなんて」

京
「大和、あ～ん」

大和
「あ～ん」

俺らは皆がいる前とはいえ関係なく現在、バカップル全開でお送りしています、しかし全員の反応がいまいちなので聞いてみた

大和
「しかし、お前ら俺らが付き合いだして随分と普通に受け入れていたな」

源
「片方のべた付きがもう片方に移っただけだしな。それにお前らのところには大物バカップルがさらに居るしな」

これは珍しい、あの源さんが笑っている。やはりワン子と彰人の話だと彼なりの信頼があっての笑みなのだろうか？

クリス
「それに私はこうなると思っていたしな」

まゆっち
「はい、京さんの押して押してがいい感じになっただけですもんね」

京
「ブイブイ」

まゆっち
「けど、本当に彰人さん達に感謝かもしれませんね。この京さんたちの状態を普通で見られるのは間違いなく、あの」

大和
「新婚二人だな、俺もあそこまでは「ええ、大和～しようよ」……してしまうのだろうか……」

俺は京の押しに完全に防御不可になってきているところに、ここの寮母さん事岳人のお母さん麗子さんが現れた

麗子
「あんたら、これから期末だって言うのに随分と優雅ね」

クリス
「私とまゆっちは予習と復習をしていますから」

京
「私らは大体いつもとおんなじって感じ」

キャップ
「俺と源さんはもとより成績関係ないし」

忠勝
「なに、恥をかかないぐらいはとるさ」

麗子
「一番慌てないといけないのはここまで落胆か。うちの岳人なんてもう、それはそれは情けなくてねまだ往生際悪くやっているわよ。もう少し勉強しておけば良いのに」

と、そんな感じで俺らは朝食を食べていた。

Ｓｉｄｅ　ｏｕｔ

川神院での朝食では現在、昨日の勉強で一子はオーバーヒート、そして百代は俺に虐められて、興奮。こんな感じで俺らはと言っても百代よ一子は焦っていた。

一子
「うえぇ～ん、なんで昨日私は寝ちゃうのよ！」

一子は、今回の成績が悪いとご飯の量が減らされる。そして

百代
「うおぉぉぉぉ！基礎がデキルだと、この私が」

いつもとは違う百代なのだが、今回は昨日見た限りでは６０は行きそうだったので、俺が平均８０を超えれば一つ何か言う事を聞くと言う条件を出したら、ちなみに出したのは今日の朝なのだが、この

頑張りよう。すでに二人とも朝食は終わっており二人してギリギリまで勉強するようだ。

鉄心
「これは夢かのう?あのモモが勉強しておる」

彰人
「あはは、俺がちょっと条件を出したら」

そして鉄爺に握手された、しかも涙を流しながら

鉄心
「やはり、お主がモモの彼氏でよかった!これで川神院は安泰じゃ。それで、どんな条件を?」

彰人
「……俺の一日束縛権みたいなもの」

鉄心
「それが平日に施行か?」

彰人
「たぶん、そう。俺も平均８０って分かった瞬間から百代が決めるって言ったから」

鉄心
「……すまんの、何から何まで」

彰人
「別にそれぐらいなんでもないさ、それよりも……夏休み、頼むよ

鉄爺、いや川神鉄心殿」

鉄心
「分かっておる」

そして俺らの朝食は幕を閉じた、それから時間を経ち、一子はいつもの三倍の速さで学校に向かい、そして百代は

百代
「さぁー彰人、私の点数のためにお姫様抱っこだ」

歩きながらの教科書読みは危険と言ったらこうなった、俺は後悔しかしていない。百代なら普通に大丈夫だと言うのを忘れていた。

彰人
「それじゃあ、よいしょっと行くとするか？」

百代
「……まさか本当にしてくれるとは」

彰人
「落とすか？」

百代
「そのままで、彰人の匂いで勉強も頑張れそうだ。それと時計似合っているじゃあいか、さすがは私」

彰人
「さすがはお前」

ちなみに俺が買ったこの赤モデルは百代の誕生日である、八月の３１日まで封印だ。なんせ俺らは夏休みを離れて過ごす。まあ一言言えば俺はきつい、本当に百代の依存が移ったようで、昨日までの旅行で強まった、まあこれも義妹のためだと、思いながらいつもの通り俺らの集合している道に出た、やはり注目度は一番最初に戻った感じだ、そしてファミリーと合流

彰人
「うっすお前ら」

そして全員が硬直、それもそうだやはりこんな状況なら

全員
「モモ先輩が勉強をしている！！」

彰人・モロ
「「そっちに突っ込みかい！！」」

百代
「うるさいぞ、お前ら。私は今非常に忙しいのだ、それと彰人もっとギュッっとしてくれないと落ちる」

彰人
「ああ、すまん。それとモロ、お前がたぶん普通の反応だ」

モロ
「うん、僕も一瞬僕が変なのかと思ったよ」

キャップ
「けどビックリだぜ、モモ先輩が勉強しているなんて。そう思えば

ワン子は」

彰人
「俺よりも先に出たよ、たぶん今は教室で勉強しているよ「兄弟！」ど、どうした大和、いきなり大声をあげて」

大和
「よくやってくれた、いつも俺がドンだけ大変だったか」

彰人
「……そういうこと」

まあ一子は俺が鍛錬をしているために勉強をさせていた、そして百代はまあそんなのだ。ちなみに京と完全に腕を抱き合っている大和に俺は

彰人
「うんうん、いいカップルだ」

京
「えへ♪」

大和
「正直にうれしいのだが兄弟……その状態で言われても」

彰人
「俺もこの状況になる前に思ったよ。口は災いの元だって」

クリス
「しかし、普通に絵になるのも恐ろしいですね彰人殿は」

松風
「本当だぜ、急に視たら完全に怪我をした彼女は運んでいる彼氏。てか王子様とお姫様かこのやろう！一人身には毒だぜ！！」

モロ
「松風、すでに遅いみたいだよ。見てよあれ」

そしてモロが指差す方向には

岳人
「グァァァァァア、あめぇ！これが甘さか」

倒れている岳人、俺はそんなものは放置してそのまま学校に向かった。

岳人
「って！ちょっとまてよお前ら」

学校に到着、百代は今日はすんなりと放してくれたが

百代
「頑張ってくるぞ、チュっ。それじゃあな彰人」

彰人
「ああ、頑張って来い」

京
「離れているからこそ出来る芸当。恐るべしモモ先輩」

大和
「兄弟、さすがにこれ以上は京を刺激しないでくれ！俺でもあれは恥ずかしい」

彰人
「兄弟、慣れって怖いな」

モロ
「すでに遠い目ですか。それよりも僕らってテストだよ今日から」

モロがため息をつきながら教室に入る、やはりここでも起きていたのは川神姉妹の勉強騒動だった、俺らの期末は今から始まる。

##第八十七話##（後書き）

それでは次回会いましょう！

##第八十八話##（前書き）

マジコイSのオープニング配信中

##第八十八話##

Ｓｉｄｅ　Ｓ組

今日は試験だと言うのに、このクラスはまったく慌てていない、それもそうこのクラスは優秀者のクラスのためそんなに焦っていない、いつもと変わらない風景

不死川
「今日は自分とＦクラスは静かじゃのう」

英雄
「ハ、ハ、ハ。庶民達は最後の悪あがきをしておるのだろう。なんともかわいらしいではないか」

九鬼英雄はいつも通り声高らかに笑っている、そしてここのトップに君臨する葵冬馬は

マルギッテ
「なんでも直江大和と椎名京が付き合いだしたとか」

冬馬
「それは本当ですか！？」

マルギッテ
「お嬢様からの情報だ間違いない」

冬馬
「それは本当ですか！？……これはショックです、もう空が落ちて

きそうです」

マルギッテ
「葵はあういうのがタイプだったか？」

冬馬
「ええ、大和君は結構本気で狙っていたのですが」

マルギッテ
「男の方とは業が深い、慎みなさい。それと珍しくあなたが教科書を開けている理由を教えなさい」

準
「待て待て、普通にテスト勉強しているだけだろうが……って！若、一体どうしたんだ！？」

小雪
「もう、ハゲうるさいぞ！僕は寝たいんだ」

冬馬
「ほら、準。ユキは寝たいそうですから静かに」

準
「あ、ああすまんってそうじゃくて、一体どうしたんだ若？お前さんがテスト前に教科書を開いているのなんて初めて見るぞ」

英雄
「なんと、冬馬よお主どうしたのだ？」

冬馬

「まあ簡単に言えば今回は一位になれないかもしれませんから、ちゃんと勉強しておかないと思いましてね」

Sクラスメート
「葵君が誰かに負けるわけ無いじゃないか」

マルギッテ
「彰人殿ですか……ならば勉強に励みなさい」

マルギッテは何か一人で納得したのか自分の席に戻っていった。そして英雄は更に笑いだして

英雄
「そうか、今回からは彰人がいるからな！これは注意しないと我も順位を落としそうだ、あずみ」

あずみ
「はい英雄様、すでに教科書の準備は出来ております」

準
「彰人って彰人か？あいつは確かに頭も切れるから直江と同じぐらいの脳はあるかもしれんが「満点なんですよ彼」満点？」

冬馬
「ええ、準。彼は編入試験のテストを満点でここに来ているんですよ、これはマルギッテなどの情報では彼の答案が答えだったと言うことでほぼ間違いないかと」

準
「満点って……確か、あの編入試験って満点を取らせないための」

冬馬
「ええ、大学で行うようなモノが必ず一問は入っていますよ」

準
「化け物だな」

ｓｉｄｅ　ｏｕｔ

現在、俺らのクラスでは非常に悪い悪あがきをしていた、それは朝の時間まだＨＲ前の時、なぜか宇佐美先生がここにふらっと来て、そして

ヨンパチ
「よっと」

生徒が脇に小銭をねじ込み

宇佐美
「Ｐ２３の例題２、それとＰ２５の問題５」

ヨンパチ
「ウーッス」

生徒にテスト問題を教える代わりに金を貰っていた……これ高校だよな？

立花
「はい」

宇佐美
「すくねえな、ならページだけだ。Ｐ２３、Ｐ２５」

立花
「ああん、分からない」

まあこんな事をしていれば確実に正義の使者が出てくるだろうな、
それこそ

クリス
「先生、なにをしているのだですか？」

クリスティアーネ・フリードリヒだ。まあこうなるだろうな、そして

宇佐美
「なにって、俺はただ独り言を言っているだけだぜ、それに」

宇佐美先生が周りを見るように、クリスも周りを見るとそこには「
余計な事をするな」と睨んでいる人が大勢いた、しかしそんなもの
はこのＫＹには通用するはずもなく、また酷い空気になると思いきや

京
「先生、そろり時間」

京がそう言うと確かに時間的にそろそろくるだろう、うちの担任が

宇佐美
「おっと、さすがに梅先生に迷惑はかけられん。それじゃあこの金
で今日の飯は豪華にするかな」

クリス
「援護感謝するぞ京、しかし困ったものだ宇佐美先生にも。今度カメラとかレコーダーとかでなにか証拠を」

大和
「無理だと思うぞ、それ。俺の何回かやってみたけどあの人すぐに見破るしな」

忠勝
「こういう事だけには良いぐらいに勘が鋭いんだよ、あのバカ親父は」

梅子
「皆の者、おはよう！それではこれより、試験を開始するから机の中を空にしろ。まあカンニングをしてみたいと言うものは、まあ三ヶ月ぐらいを離島で生活すると思え」

うちの担任のジョークはまったく笑えず、全員その言葉を鵜呑みにして完全に仕舞っている。そして俺らの試験は始まった。

Ｓｉｄｅ　百代

今日は彰人との約束を守ってもらうための第一戦だ。慎重に行くぞ

三年生Ａ
「お、おい。今日の百代さん、なんか迫力が違うぞ」

三年生Ｂ
「こ、このテストになにかあるのか？」

そして配られテスト用紙。私はこれを見て笑う

百代
「（この程度の問題、彰人のお仕置き前の問題に比べれば……お仕置きか……彰人……もっと虐めてくれるかな？っと集中集中）」

今日の百代は周りが驚くほどにテストに集中し、そして全部の空欄を埋めていた。

Ｓｉｄｅ　ｏｕｔ

Ｓｉｄｅ　大和

現在、俺は非常に集中できていない、理由は彼女なのだが……いかん、また想像が邪魔をする。京は完全に集中力が強いし兄弟はなんでこんな俺らよりも甘い生活しているはずなのに、普通に

梅子
「おい、御剣寝るな……はぁ、そうか、そう思えばそうだったなお前は」

寝ているんだよ！しかもあの梅先生ですら納得ってなんだ？なんなんだ？
次の問題ＸＹ…Ｙああ、だめだぁぁぁぁ

今日の大和は非常に集中が出来なくて大変でした。

Ｓｉｄｅ　ｏｕｔ

俺らは一日目の試験が終わり早々に帰る者や、残って勉強する者な

ど様々だった。そして兄弟がこっちに来た、どうかしたのだろうか？

大和
「兄弟、お前はやっぱり凄いよ」

彰人
「いきなりどうかしたのか兄弟？」

なぜか褒められた。ちなみに俺は開始１０分で終わってしまいすぐに寝てしまったのだが、一子は現在忠勝に教えてもらっている。なんでも一子が普通の問題の質問が出来ているのが驚きだったらしい。一子よ、お前は俺がいない一年間の勉強はどんなものだったのだ？

京
「大和、帰ろう」

大和
「ああ。それじゃあな、お前ら」

彰人
「ああ、じゃぁ～な～」

大和たちはそのまま帰宅、現在教室に残っているのは俺、忠勝、一子、そして委員長、モロ、岳人、そして梅先生だ

梅子
「川神が普通に勉強しているとは……奇跡だな」

彰人
「担任なのに、酷い言いようですね」

梅子
「ああ、それにしても御剣。もう少しペース配分をだな……いやこの場合はペース配分でいいのだろうか？兎に角、もう少し時間をかけてやってくれないか。あれでは教科の先生達に非常に悪い態度だぞ」

彰人
「と、言われましても。何事にも全力を尽くすのが俺なので、それにちゃんと１０分は起きていましたよ」

梅子
「あの時間でさえ、ゆっくりだったのか……」

モロ
「だから！どうしてそんな風になるのさ！？可笑しいでしょ、歴史の偉人が全員筋肉バカって」

岳人
「はぁ～何言ってやがる、三国志とか戦争だと大体筋力のあるやつが強いじゃん、呂布とか」

モロ
「それはゲームの話！普通は軍師とか、作戦で変わるの！」

この二人は馬鹿げた話を二人でしているし、隣の一子達は

忠勝
「これでいいだろう。一子、お前はもう少し先の事も見越せ」

一子
「さすがたっちゃん！こうなると、こうなのね。うんうん、ありがとう！」

忠勝
「か、勘違いするんじゃねぇよ／／／／だたのお節介だ」

一子
「うんうん、本当に助かるよ」

うん、なんでだろう。俺は近いうちに新しいカップルの匂いがするぞ。

梅子
「しかし、なんでお前までもがここに残っているのだ？普通なら帰るだろう、お前ぐらいの脳なら」

俺は梅先生の言葉を答えるように廊下を指差して、そのまま鞄を持った。

彰人
「それでは失礼しますよ、先生。それじゃあなお前ら、一子！遅くなるなら連絡寄越せ、それとこれから一週間のトレーニングは早朝だけにするからな」

一子
「は～い」

梅子
「なるほどな、そういうことか」

梅先生は何か納得しながら、いやこの場合は呆れてながらなのだろうか。

百代
「すまんな、彰人。待たせてしまって、ちょっと弓に聞いていてな」

彰人
「構わないよ、それじゃあ帰るか」

百代
「ああ、それにしても今日のテストは簡単だったな……ああ、だけど途中でお前のことばかり考えてしまって逆に大変だったぞ、どうしてくれる？」

彰人
「それは俺のせいなのか？まあいい、今日は俺の部屋で勉強だろうどうせ」

百代
「保健体育の？」

彰人
「……それでもいいが……それでいいのか？」

百代
「く、こういう時だけそんな事を！しかし我慢だ、そう我慢だ。あとでのお楽しみのための我慢だ！……キスだけで我慢だ」

彰人

「下がったな一瞬」

百代
「一緒に寝てはくれるだろう？」

彰人
「さらに下がった。だがそうだな、これを気に「あ～き～と～」冗談だ、安心しろ。それに最近お前を抱きしめていないと不安なのが正直なのだがな」

百代
「彰人／／／／今日はいつにもまして優しい……」

彰人
「これで成績が落ちるのなら「あ～き～と～！」さ、さあ帰るぞ！」

百代
「もう、覚えていろよ。絶対満点でもとって言うことを聞いてもらう！」

テストの初日が終了した。

##第八十八話##（後書き）

夏休みももう終わりですね

##第八十九話##（前書き）

一子師範代育成計画、続行中！

##第八十九話##

今日は期末考査二日目なのだが、今日は俺ら百代、そして一子は昨日の勉強などで昨日みたいに朝まで勉強とはいかず普通に登校している。

キャップ
「お、お前らは今日は普通のようじゃねぇか。モモ先輩が勉強していない」

いつもの通りの朝の風景だった、そんな時急にモロが言ってきた

モロ
「僕思ったんだけど、この世界ってループしていたりして」

百代
「ループか……彰人にずっと初めてを与え続けるループ、彰人に永遠と調教されるループか。非常に悪くない」

京
「ループ……大和にずっと処女をささげ続けるループ……ゴクリ。そしてあの告白を受け取ってもらえる快感ループ」

大和・彰人
「「だめだ、この彼女。どうにかしないと」」

京・百代
「「だけど、結婚出来ないのはつらいな」」

大和
「はぁ～兄弟どうにかしてくれ」

彰人
「確かに、結婚出来ないのは俺もいやだな」

大和
「兄弟こっちに帰ってきてくれ！」

百代
「と、言ってもモロロ。この世界がループしているなんてありえないと思うぞ。なんて言ったってあの岳人に彼女が出来ている」

岳人
「なんだモモ先輩、妬いて「ああ？」いませんよね……そうですとも」

モロ
「う～ん、期末の初日の地獄からの現実逃避には足りなかったかな？」

一子
「ねぇ、まゆっちループってなに？」

松風
「おっとこれはユーモアを試される一言だぞまゆっち」

まゆっち
「普通に答えましょうよ、松風」

彰人
「（うまい、ボケが見つからないとその場は松風で対策。これはいい返しだな）……」

クリス
「しかし現状を聞く限り岳人のは付き合っているのか？」

モロ
「あはは、それは僕も思うよ……正直微妙だと思う。どちらかといえば女王様かな？」

クリス
「そう考えると岳人は体と同じで心も耐久力があるんだな、どんだけタフなんだ？」

岳人
「クリス、俺はそんなにタフネスでもねぇぞ。実際今日はへこんでいるし、母ちゃんに俺のお宝本が見つかってな」

モロ
「お宝っていってもエロ方面だけどね」

百代
「そういうのはちゃんと隠しておけ、大和のように」

大和
「なにを言うかな姉さん」

百代
「畳の下とか、どう思う彼女さん」

京
「あういうのが好みだとすると、ちょっと思考を凝らさないと。それでそちらさんの旦那様は？」

百代
「一日中同じ空間にいるしな～まずは、一人にすることがないとこれはどうも言えないな。ちなみに部屋の中は一年いない間に見たけど無し、そしてここ最近も無し。ちなみに全部探したのだが」

大和
「兄弟も大変だな」

彰人
「百代、お前は一体いつ俺の部屋に入っているんだよ……」

岳人
「（ああ、彼女とヤりたいなぁ～）……ああ、彼女とヤりたいなぁ～」

百代
「おい、こいつ思っていることが言葉に出ているぞ……はぁ～私も彰人も甘えたいなぁ～」

彰人
「そういうのは今現在も抱きついている腕を離してから言ってくれ。そうしないとどれ位が甘えると言うことなのかわからなくなるから……しかし今日はテストだというのに」

俺はそんなことを言いながら橋の前まで来た

百代
「どうかしたのか、彰人急にそんな事を言って……ん？」

百代は俺の言葉に気付いたのだろう、橋の道路のところに人影が居ると。そしてそいつが今までの相手とはまったく違う別格と言う事を。

格闘家
「はじめまして、だね？川神百代、そして御剣彰人。私はメッシ、南米最強と言われているが、まだまだだ。そこで世界の壁が知りたい、学校の登校中だがよろしいか？」

クリス
「（このモノ、かなりのポテンシャルだ）」

一子
「（あれ？強いのに……なんだろう、この無心の感じ？彰人やお姉さまの周りに居すぎたのかしら？）」

大和
「あ、テレビで特集されていた人だ。確か太陽の子とかで」

彰人
「勝負か……いいだろう、しかし二人いるがどちらがいい？」

メッシ
「はい、私は川神百代と一戦してみたい、君は……分からないからね」

俺は笑った、やはりこいつぐらいになると俺がどう言うのか分かってくるのだろう。俺はこう言う挑戦者の際には必ず気を消す、そしてそれに気付かずや、または百代が女と理由で俺と当たるがこいつは俺の本質を少し見ているのだろう、だから普通に気で分かる百代を選択、そして

メッシ
「それとすまないが、私の弟子であるこのズッケロとも対戦して欲しいのだが……彼は私に及ばないが、光るものがある」

ズッケロ
「シッスっ！」

彰人
「そうか、なら一子。いけるな……」

クリス
「彰人殿、ここは私が……わ、分かりました……ですから、そのこの蛇を」

俺は瞬時にこのＫＹさんに蛇を巻かせた、今回のはちょっとした実験だ、邪魔は許さないからな

まゆっち
「クリスさん、大丈夫ですか？」

クリス
「あ、ああ」

一子

「うん、大丈夫よ。それじゃあよろしくお願いします」

一子はそう言うと構える、そしてズッケロも構える。そして始まる勝負

ズッケロ
「ショッツ！ショショショショショショショショショショショショ！」

ズッケロの高速な攻撃、しかし一子は

一子
「……」

避けている、そして

一子
「……今！」

一瞬の隙をついての回転蹴り、これが相手の顔面にはいりＫＯ。そしてその動きに

モロ
「なんか、今のワン子……なんか違ったよね？」

岳人
「ああ、そうか？あいつのスピードが上がっただけだろう？」

キャップ
「と言うか、なんかワン子強くなっていないか？俺の気のせいか、なあ大和どう思うよ？さっきの動き」

大和
「兄弟が特訓してるからなんだろうけど……京どう思う？」

京
「……結論から言えば今の私じゃ、たぶんワン子に攻撃が当たるかどうか分からないかも（あの避けている時のワン子の目、なんも感じなかった、あれじゃあ動きが読めない）」

まゆっち
「……一子さん、一体どうして？」

クリス
「……」

彰人
「お疲れさん、一子。いい動きだ、やっと切り替えも早くなってきている」

一子
「え、ホント!?「しかし」……う」

彰人
「まだ、甘い。テストが終わったらまたみっちりだ」

一子
「はぁ～い」

彰人
「よし、それじゃあ行くぞお前ら」

モロ
「あれ彰人？モモ先輩は」

彰人
「あいつがあんな奴に時間かかるかよ、行くぞ」

百代
「は～い、彰人」

全員
「マジ！？」

大和
「姉さん、たしかこの人って強いんだよね」

百代
「うん、確かにそうだが。彰人よりも下の下だ、まったくのな……
まだまだだ」

キャップ
「まあ何はともわれ、いくぞ！」

そしていつもの学校が始まる。

～それから一週間後～

放課後の合図、そしてそれは今までのテストの終わりを示す。

大串

「おっし、これでテストはお仕舞いか。帰ってまめたゲームでもやるか」

モロ
「今回のバルドの新作はおもしろかったよ。分割商法だったけどあれなら得だね」

岳人
「なんか、こう女王さまを屈服させるようなゲームないか？」

今日で期末考査の全科目は終了。そのせいか完全に浮き出しだっているＦクラス、ちなみに一子はそのままショート。現在は兄弟と京が扇いでいる、そんな時忠勝がお知らせをいた。

忠勝
「ちょっとした仕事の話なんだが……映画に興味のある奴いるか？」

ＳｉｄｅＳクラス

宇佐美
「と、言うことでオジサンからの映画の宣伝だ」

もちろんこのＳクラスの大体は興味が無く、そしてここの一番の葵も

冬馬
「はぁ～」

宇佐美
「うん？どうかしたのか、葵。ため息なんてついてさ」

冬馬
「ええ、色々と……可愛い女の子とか、それと可愛い男の子とか」

準
「若は、テスト勉強に加え病院に手伝いとか色々大変なんだよ。」

小雪
「そうだ、そうだ！そんなに話がしたいんなら、この暇な僕にしろ！」

そして宇佐美の前で飛び跳ねる小雪。そしてその行動に完全に嫌がっているこの担任

宇佐美
「わかったから、俺の前で跳ねるな」

準
「回収します」

先生の言葉に援護と言う形で準が首根っこを掴み、回収。しかしこの行動すら

小雪
「おお！これはおもしろぞ……わぁ～い」

なぜか喜んでいる、小雪。そしてそんな会話をしていると周りからは

Ｓクラス男子Ａ
「それでも一位の葵君はすごいよな」

とか、そんな声だ。しかしその葵冬馬はこう言った

冬馬
「今回は私が一位とは限らないかもしれませんよ……彼が居ますからね、御剣君が」

Ｓクラス生徒Ｂ
「まあ、それでも俺らの目標だからな葵君は」

宇佐美
「ふぅ～」

小雪
「こんな、暖かい奴らは俺がため息をついていたらこれぐらい心配してくれるだろうか……答えは……ＮＯだぁっ！アハハハアハハハハ」

宇佐美
「こいつ、なんてこといいやがる」

小雪
「日ごろの生徒に対する態度を考えれば？」

宇佐美
「いてぇ！胸が痛いぜ！」

ｓｉｄｅ　ｏｕｔ

##第八十九話##（後書き）

京ルート、シリアスになるのかな？

それでは次回、会いましょう

##第九十話## （前書き）

とうとう九十話はキターーーーーーーー！！

##第九十話##

と、言うわけで俺らは期末試験も終わり非常にだらけていた、一番のそれは

百代
「ふわぁ～今日から彰人に甘えられる～そしてキスをしてくれ～」

俺の腕を抱きながらも寝ているこの彼女。俺らファミリーは全員で河川敷で普通に談笑していた、それは昔の秘密基地のように

大和
「今回は……色々と大変だったなぁ～」

京
「ちゃんと払うよ、体で♪」

一子
「なんだかエロチックだわ……お姉さまと彰人みたい。そう思えば彰人、練習の再開は明日からでしょ？」

彰人
「ああ、自主練は今日は俺は百代をかわいがる使命があるから無理だな、それとも一子、百代に……」

俺が振り向くと、そこには俺の腕を抱きつきながら犬を睨む般若だった。

一子

「もう、殺されそう！！大丈夫よ、お姉さま！邪魔なんてしないからぁぁぁぁぁぁぁ！！」

彰人
「はいはい、百代。落ち着こうね」

百代
「はぁ～い」

そして俺らがそんな事をしていると急にキャップが立ち上がり

キャップ
「ああ、やっぱり我慢できねぇ！」

大声で声を挙げて立ち上がるとそのままバク中、それに負けじと一子もバク中

一子
「負けないわよって言ってもどうかしたのキャップ？」

キャップ
「ああ、オヤジからこの前メールが着てよ。なんでもヨルダンで見つけた遺跡に突入ってときに兵士が負傷したらしくてな、延期で現在そのまま滞在しているらしいんだ」

モロ
「ってそれ凄く危ないじゃん！のろいでしょう、どう考えても」

大和
「と、言うかキャップはそれを聞いて心配ではなく、どちらかと言

うと絶対自分が呼ばれる事を待っているような気がするぞ」

クリス
「なんと言うか……凄まじいな」

まゆっち
「そうですね、けどなんだがキャップさんらしいです。ね、松風」

松風
「オラは、い、遺跡なんて怖くないぞぉ～。それよりも今の岳人の方が凄いだろう？」

まゆっち
「こら、松風」

モロ・大和
「「いや、今のは松風が正しい」」

京
「けど、状況を聞く限りでは、なんだが女王みたいだしやっぱり彼女じゃなくて女王様に言い方変えればいいんじゃない？」

岳人
「うるせいよこのバカップルどもめ、俺だっていつかお前ら以上にラブラブになってやるからよ！」

キャップ
「さきに慰めておく、また次がある」

岳人

「なんだと、このぉ～」

そしていつもの通りのキャップが逃げて、そして岳人に捕まり……
捕まり？

キャップ
「なに！？この風の俺を捕まえるとは、小癪な！」

大和
「珍しい事もあるんだな」

モロ
「まあ今日は期末も終わって結構気分いいほうだしね」

岳人
「俺は愛を手に入れて強くなったのだ！これはモモ先輩、京なら分かるだろう？」

京
「……まあ」

百代
「……お前がそれを言うのはなんだがな」

岳人
「でりゃぁぁぁぁぁぁ！」

そして岳人とキャップはそのまま川にダイブ……なにをしているんだ、このバカは

一子
「うわぁっなにやっているのよ！？」

岳人
「キャップが暴れたせいだよ。それよりも腕貸してくれ」

一子
「もうしょうがないって！きゃぁぁぁぁっ！」

岳人の伸ばした手をそのまま一子が握った瞬間に岳人は逆に川の方に引きずり込んだ、どこぞの河童だよ、お前は。そして俺の隣に居るこの彼女は

百代
「面白そうだな！弟、モロ。お前ら行って来い！」

モロ
「うわぁぁぁぁ」

大和
「だから制服の首を持ってそのまま飛ばすな！」

モロと兄弟は盛大に川の中に放り込まれ、そして大和が放り込まれたことで京は自分自身からのダイブ

京
「大和、今行くね」

百代はその勢いでそのままクリス、まゆっちを放り投げる

彰人
「まゆっち、松風はちゃんと持っておけ」

まゆっち
「私よりも松風なんですか～」

と、言うわけで俺と百代以外は全員川の中に入っている、てなわけで。俺はそのまま百代の胸を掴み

百代
「あ、彰人こんなところで急に何を？「ほい、行くぞ」し、しまった気が緩んだ！」

百代と俺は共にそのまま川の中にダイブ。

大和
「てか、なんで全員こんな川の中なんだよ！元はといえば岳人が変な技をキャップにかけるからだろうが」

兄弟が言葉に乗せて水をかけた、それが始まりだった。

岳人
「なにをこの筋肉技を見て見やがれ必殺俺様の必殺技パート「援護射撃」ごほっ！み、京てめぇ！」

援護射撃で顔面に水を食らう岳人はそのまま筋力にまかせた水をかけるが、しかし京は隣に居た一子を使い

京
「ワン子ガード！夫を影からサポートする、これ妻の務め」

ちゃっかし、大和にアピールしながらも今の危機を回避、しかし敵が増えた

一子
「なにするのよ岳人！それに京」

これで四人のバトル、しかも

キャップ
「おもしそうなことしてるじゃねぇか！俺も入れろ入れろ」

つうわけで五人、そして極めつけたは

モロ
「そろ～り、そろ～り」

彰人
「なに、一人だけ抜けようとしているんだモロ？」

モロ
「うわぁぁぁぁぁあ彰人！？」

彰人
「ふふふ、これで決まりだ！モロ爆弾」

モロ
「また投げられた！」

モロを掴み俺はそれを五人の中心に落とす、これで全員がびしょ濡

れに変わる。しかし問題は五人以外にもぬれたことだ。その人物は

百代
「彰人！私にかかったぞ、もうこれじゃあブラが透けるぞ！いいのかそれで」

彰人
「今日は確か黒か……不味いな、百代すぐに俺に「言われなくても！」飛びついたな、ちゃんと背中に！」

俺らはこんな年になったのにも関わらずそのまま川遊びをしていた。

Ｓｉｄｅ　冬馬

私は準とそしてユキ三人でいつもの通り帰っていた。そんなとき橋にかかった着たときに先生が話しかけてきた

宇佐美
「よ、お前ら。ちょうどいい、ちょっとおじさんの話聞いてくれないか？と言っても連絡事項みたいなもんだがな、お前らチャイルドパレスって知っているか？」

冬馬
「ええ、なんでもここらでは一番大きなアミューズメントパークとかで」

宇佐美
「ああ、そうなんだがどうもあそこはきな臭いからな……お前ら立ち寄りとかするなよ」

冬馬
「そこまでですか？」

宇佐美
「こっちら少しは修羅場潜ってきているんでな、その俺の勘が言うんだ」

準
「そういうのは普通ＨＲで言えよ、一応担任なんだから」

宇佐美
「あういう所はあいつらみたいな優等生は元から近づかないだろう。だけどお前結構三人でふらふらしているみたいだしな。葵は葵病院に継者だし、榊原は女だからな、まあ井上はどうでもいいが」

準
「ばっさりだな」

冬馬
「ええ、分かりました近づかないようにしましょう。それでは帰りますよ準、ユキ」

そして私たちは先生と別れる、そして話を戻す

準
「若、ヒゲ中々に鋭いみたいだな。あそこがきな臭いなんてな」

冬馬
「伊達に代業屋はしていないようですね。それに私たちは私たちで行動しなければ」

準
「彰人は、いやこの場合は風間ファミリーはどうするんだ？」

冬馬
「彼らなら力になってくれると思いますが、さすがに巻き込みたくもありません……それにまだこっちも確かな証拠を掴んでいませんからねここは慎重に行くべきかと」

準
「分かった若。それよりもユキなにしているんだ？」

ユキ
「見てみて、僕のヒーロー達が川遊びしているよ」

準
「あいつらいい年こいてなにをして」

冬馬
「いいではありませんか、彼らは彼らの日常を、僕らは僕らの日常をですよ。行きますよユキ、今日は我慢してくれますね」

ユキ
「うん、トーマと準についていくのが僕だもん♪」

そして我々はまたもどるのであった。

Ｓｉｄｅ　ｏｕｔ

Ｓｉｄｅ　宇佐美

あの三人組と分かれたあと俺はそのまま代行店にもどろうとした、しかし代業屋の事務者はこの橋の逆。俺はなぜあの三人に話しかけたかと言うと

「（あいつら、いや実際には井上と葵の目は何か、問題を抱え込んでいる目だったな）」

俺はこう言う修羅場を多く見ているせいか、そういうやつらを見つけるのがうまい、そしてあの二人がそう見えた俺だ、しかしそんな事を考えていると橋の下での河川敷で川遊びをしているあの集団

宇佐美
「あいつら、面白いことしているな」

梅子
「まったく何をしているのだ」

俺の声にかぶるような形で耳に聞こえてきたのは

宇佐美
「これはこれは、梅先生ではありませんか」

梅子
「ああ、宇佐美先生。もう今日はお帰りで」

宇佐美
「ええ、まあ。それにしても面白い事をしていますね」

梅子

「まったくあのバカどもが……だがあういうバカもいても良いかもしれませんな、宇佐美先生」

おお、今日は以上に雰囲気がいいぞ、これなら

宇佐美
「どうでしょう、これからランチでも」

梅子
「申し訳ありませんが、今日は冷や中で学校。テストの〇付けがあるので」

と、きびすを返すようにそのまま俺から離れて行き、残ったのは俺だけとなった

宇佐美
「はぁ～カキ氷でも食べるかな」

##第九十話## （後書き）

てな、わけで黒い部分も見えてきましたね……見えているだけですが。それでは次回会いましょう

##第九十一話##（前書き）

遅れてすいません

##第九十一話##

Ｓｉｄｅ　川神院

鉄心
「そう思えばあの者は起きたかの」

ルー
「はい、メッシですね。先ほど起きましたが驚いておりましたよ、それと彰人についても」

鉄心
「ふむ、やはり強いらしいの彼は。彰人の不穏な気配を感じ取るとはのう。しかし百代には上限が無くなってきたのう。今はまだ大丈夫であろうがそろそろかのう」

ルー
「そうですね、これ以上力を手に入れれば必ず誘惑があるでしょうからね」

鉄心
「うむ、一子の事もあるしの。百代には山に潜ってもらおうとおもうぞい、水と一体、土と一体となるのじゃ」

ルー
「心を鍛えると言うことですね。わかりました、しかしそれだけだと百代の対戦相手は？」

鉄心

「安心せい、それぐらいはワシにも考えがあるしの。それよりもルーは一子のこと、そして彰人の事を頼むぞい」

ルー
「心得ております……しかし一子の成長振りには驚いてばかりですネ。まさかあそこまで成長できるとは」

鉄心
「我々は少し間違っていたのかもしれんな。血などそれこそ、彰人の前では無意味であったのだと思ってあったがそれよりも先にワシらがもう少し考えれば一子も変わったかもしれんからのう」

ルー
「そうですネ」

ｓｉｄｅ　ｏｕｔ

それから更に数日が経過し俺らは忠勝が言っていた映画の撮影会に来た。ちなみに百代は応募していないので俺の付き添いだ。

宇佐美
「お、結構いるじゃねぇかって大体がＦクラスじゃねぇか。まあ集まっただけいいか」

彰人
「まあ、これはこれでおもしろうそうだしな。な、ユッキー」

小雪
「うん。だけどこのクリームパン、おいしい」

誰に餌付けされたのかと思うと、近くにヨンパチと岳人が何かメモを取っていた

ヨンパチ
「うん、甘いものは食べるらしいな」

準
「こらユキ、また餌付けされて……」

冬馬
「ユキ、こっちに来なさい」

ヨンパチ
「あ、イケメンのほうに行っちまいやがったか」

岳人
「だけど、イケメンのお前がここに来るとは思わなかったぜ」

冬馬
「この仕事に運命的なモノを感じましてね」

岳人
「普通にしゃべれねぇのか！」

冬馬
「まあ実のところ、ただ暇だったのですよ。それにユキが参加したいと言っていたのでね」

小雪
「ねえモモ先輩。これってなにに使うの？」

百代
「これはな、彰人が……」

後ろでなにか危ない会話がしてあるような気がしたので俺は敢えて見ないことにした一体なにをユッキーにみしているのやら。そして宇佐美先生が戻ってきたのでこの中での合否が出たようだ

宇佐美
「それじゃあ今から発表する奴は残れよ、それ以外は参加賞貰って帰れ。それじゃあ、まずは風間、島津、師岡、井上、葵、甘枷、立花、川神、御剣、榊原以上だ。それ以外は帰ってよし」

クリス
「あれ？」

不死川
「なんと！？」

ええ、俺らファミリーでこれにまず兄弟と京、まゆっちは不参加、さらに百代も。そうなると落ちたのは

岳人
「すげぇ！俺ら全員受かっているじゃん」

いやだから

一子
「違うわよ岳人。クリスが落ちてるもの」

岳人
「あ、わりぃ」

キャップ
「キャップとしていっておくぞ、強く生きるんだぞ」

クリス
「なんか悔しいぞ！」

彰人
「受かったか、これで少しは金になるかな」

百代
「まあ私の彰人なら当然だろうさ」

彰人
「私の？」

百代
「彰人の私だったな。すまないすまない、私はもう身も心もお前のものだぞ彰人」

モロ
「可笑しいでしょ！その訂正！」

小雪
「もしかして心、落ちたの？」

Sクラスも騒がしいが、それから五分が経過。これにより俺らはそのまま台本を渡されて指導に入るようだ。

宇佐美
「よし、全員台本は貰ったな」

千花
「先生、これはちょっと」

立花の役はまあ簡単に言うとキャラのそのままあっていたのだが彼女が抗議、しかしそれをキャップがなだめて万事解決、そのキャップは準と葵君との三人でホストだとよ、ちなみにこれに嫌だといったキャップをなだめたのは俺なのだが

百代
「一子の役はどんなものなのだ？」

一子
「えっと私の役は……今時の女子高生みたいね、こいうのは羽黒とかの方がうまいとおもうんだけど、だけど頑張ってみるわお姉さま」

百代
「ああ、頑張れ。それで岳人の方は」

岳人
「おい、源。俺の純粋な心もて遊んだな！なんだよこのタクシー強盗でしかもそのまま火達磨って」

忠勝
「だから言っただろうが、お前自慢の筋肉が火を噴くぞって」

岳人

「物理的に火を噴いてどう済んだよ」

忠勝
「安心しろ、俺が横で消火器もってスタンバッテいるからよ」

岳人
「火に覆われたら源から白い液体を喰らうのかよ……はぁ～ついていないぜ」

忠勝
「それじゃあ、島津からだぞ撮影」

彰人
「俺の役は……新婚の夫……だと」

俺の言葉に全員が爆笑、ちなみに百代はうれしそうに俺の腕に抱きついている

宇佐美
「なんでも監督の方は川神姉も出してもいいと言っているぞ、お前らセットでならそれで回すってさ」

百代
「出る！」

彰人
「早っ！」

百代
「と、なると私は新婚の妻か。新妻と言うわけか……お風呂にする

（一緒に入る）？ご飯にする（裸エプロンの私を食べる）？それともワ・タ・シ♪？……ああ、いい、良すぎる」

小雪
「ねえ準、なんでモモ先輩は彰人の腕に抱きつきながら悶絶しているの？」

準
「あれがね、親愛っていうのだよユキ」

準から生暖かい目を感じながら宇佐美先生は監督と話、そしてすぐに台本が渡された、俺のは交換された。そして中を見たら……さっきの文章が書いてあった。なんでタクシーの話なのに、俺のところは普通のマンションのドア前なんだよ！

モロ
「彰人も大変そうだね」

モロがそんなことを言いながら台本を見ているが

彰人
「大変そうってお前、俺らよりも全然太いじゃないか台本」

宇佐美
「ああ、なんでもその中のサラリーマン役に師岡がピッタリらしくてな。素人でも私が教えながら撮影したいって事でどうしてもだとさ」

甘枷
「凄いです！師岡君」

モロ
「まあ演技で怒られるのが目に見えているけどね……頑張ってみようと思うんだ」

モロが久しぶりに燃えているのを確認し、そして

岳人
「ぎゃぁぁぁぁぁぁぁ！燃える！！」

監督
「いいぞ、そのままカメラを回せ！これはいい映像になるぞ」

岳人も燃えていた。

それから学校の日、今日は成績の発表の日である。映画の話は俺からはしたくない……だって日常だったからな。俺は大和、そして京、クリスを共に連れて廊下の張り紙を見にいった。ちなみに後ろからキャップたちが着いてきた

キャップ
「なんかおもしろうだな、まあ成績なんて関係ないけどな俺なんかは」

岳人
「まあ、それでもこれからの彰人の運命が決まるわけだしよ」

モロ
「と、いうよりも素で彰人の成績が気になるし」

そして俺らは張り紙が張っているところの到着。そして下５０位から発表されていく、ちなみに京は４８位に入っていた。

京
「これも大和パワーのおかげかな」

大和パワー、恐るべし、そして三位は九鬼英雄平均点９７、８だ。
二位は葵冬馬平均点９８、９、そして第一位は

モロ
「やっぱりね」

キャップ
「さすがは俺のファミリーだぜ」

クリス
「改めて尊敬します」

岳人
「やっぱりかよ！」

一子
「私とお姉さまの勉強も見てくれていたのにありえないわ、ジーザス」

大和
「ワン子分かっていないのに横文字を使わない。そして兄弟、お前サンは凄すぎる」

彰人

「まあこんなもんか」

そこにはこう書いてあった、一位、御剣彰人平均点１００。だが俺はこんなものは別に気にしていなかった問題は隣だ。そう三年生の張り紙だ。

モロ

「さて、問題の三年生だね……５０位の生徒が平均点７６，８それでずるずると同立も行くと、あったよ、１４位から平均点が８０超えているよ…あ」

モロの声が聞こえた、しかもなにか不味いモノを見た感じのものだ。そして俺意外のファミリー全員が見た、そして全員がこう言う

全員

「あ」

俺は意を決して見た、そう、そこには、第四位、川神百代平均点９０、４。だったのだ……余裕で超えているじゃねぇかよ。そこに鉄爺の登場

鉄心

「ホ、ホ、ホ。あのモモが、モモが張り紙に載るとは！」

泣いていました……そこにさらに三年生の人たちが登場。

弓

「あれは百代！？……で候。これは一体？怪奇現象か」

まあ確かに考えてみれば二年の今回のトップはＳクラスじゃないも

んな。それに百代で四位か……これはこれで

百代
「あ～き～と♪」

悪魔の囁きが聴こえてきた。俺はファミリーを頼ろうとするが、すでに全員

百代
「フ、フ、フ。他の奴らなら私が来た瞬間に消えていったぞ。それで私はどうだった彰人？」

彰人
「知っているくせに、ぬけぬけと」

百代
「むふふ、と言うわけで彰人……一回、私に従ってもらうぞ。いいな」

彰人
「まあ約束だからな、それじゃあ何がいいんだ？」

百代
「決まっている、そんなものは」

そして百代はこう言った

百代
「夏休みの最終日の夜……私と本気で死合いをしてくれ。これだけだ、お前の本当の力を私は見てみたい。それは例え一瞬でもいいだ

から私に見せてくれ」

百代の目は真剣そのものだった。俺はそれに答えるように

彰人

「いいだろう……この御剣…いや違うか、“神代彰人”が相手しよう、川神百代！」

俺は百代のそう耳打ちすると自分のクラスに戻っていった。

##第九十一話##（後書き）

と、言うわけでうちの主人公の本気がみれそうです……まだ書けてませんが。それではバイニー

##第九十二話##（前書き）

もう少しでおしまいですね

##第九十二話##

七月二十四日、今日から夏休み……てか普通に終業式。一時間目は全員アリーナでの式だ

大和
「結局、姉さんからのお願いも聞いたんだろう？」

彰人
「まあな、それよりも先にやる事もあるしな。そろそろ式も終わるな、てかキャップはどこにいったんだよ？」

大和
「まあいつものことだからな……こう勝手にいないというか、なんと言うか……」

俺らは互いにため息をつきながらも式を終えた。俺らはそのまま式を終えて帰ろうとしたら、百代が向かい側から来た。

大和
「あれ？姉さんだ」

岳人
「う～ん、なんだあの形相は……彰人、お前なにかしたのか？」

岳人の言うとおりいつもの百代とは違いなぜか勢いがあり廊下に居た生徒達が全員道をあけるぐらいだ、はて？俺はなにかしたか？

百代

「あ～き～と～」

目があってそのまま叫んで抱きつく、うん普通だ

モロ

「普通じゃないと思うよそれ」

彰人

「だけどどうかしのか？百代、学校でこんなに露骨に甘えてくるなんて。まあ理由には心当たりはあるが、だからってこういう風にすぐに抱きつかない」

百代

「嫌」

彰人

「だから「嫌」聞け「嫌」……はぁ～チャイムが鳴るまでだぞ」

何処かの軽音部のベース弾き並みの拒絶反応だったので俺は人も目をきにせずこのまま居ることにした。

クリス

「そう思えば今日の朝はより一層甘えていたなモモ先輩。どうかしたのだろうか」

一子

「家では爺ちゃんから何かを言われてからこうなのよね……なんか彰人は分かっているみたいだけど私はさっぱりだわ」

後ろでなぜか和まれていたがチャイムが鳴った

彰人
「はい、百代終了。それじゃああとでな」

百代
「うん」

それから教室に入るも先生が来ることはなく、まあ終業式の後って
必ず少し先生たち遅れるからな……そんなときに急なる来訪が訪れた

千花
「や！せみ！！」

教室内に蝉が入ってきて女子連中が騒ぎ出す、と言うことで

彰人・大和
「「一子（ワン子）、頼む」」

一子
「受けたまわった、とう……君は飛べる！」

そして蝉をそのまま掴みこんどは窓になげてやった。

蝉
「彼女に感謝を……もう少し頑張ってみるかなあ」

一子
「って蝉も言っているわ」

岳人

「いや、今その蝉捕食されたからな」

一子
「うわぁ～切ないわ～」

蝉の来訪が終わったあとに急に窓の向こう、そう外から声が聞こえた、しかも先生達の声だ

麻呂
「こわぁ～何をしているのおじゃる！」

ルー
「危険だヨ～」

キャップ
「おっし着地」

彰人
「おい、蝉じゃなくて今度はキャップが窓から入ってきたぞ。どうせ木でも登ってきたのか……で、どうした今日も朝から居なかったようだが」

キャップ
「実はよオヤジのヨルダンでの遺跡探索で頭数が足りなくてよ。俺、呼ばれたぁぁぁぁ！それでこれ休学届け、それじゃあなお前ら」

大和
「待て待て、今日は金曜集会だぞ、どうするきだ？」

キャップ

「もちろん代役で大和……もしくは彰人で頼んだ、じゃあなぁ～」

そして来た道を帰るようにそのまま窓から降りていった。そしてそれを同時に聴こえてくるのは先生の怒声だけだった。更に廊下から走ってきたのは担任の梅先生

梅子
「おい、風間……かぁ～すまん、誰か説明を頼む。頭が痛くなりそうだ」

頭に手を当てながらため息をついている先生に俺が説明に入った。

彰人
「たぶん、その休学届けの中に全部書いてあると思いますがたぶん……旅に出ました、しかも壮大な」

梅子
「そうか……と、なると二学期も出るかどうかわからないのか、はぁ～また面倒な」

彰人
「苦労かけます、内のリーダーのせいで」

大和
「小島先生、ファイトです……すいません」

梅子
「まともな奴らがもう少し居ればな……それじゃあＨＲを始めるぞ」

そして一学期最後のＨＲが始まった。

時間も経ち放課となった。俺はいつのも通りに百代を待っていた、そんな時弓道部の主将にあった。

弓
「あら、貴方は百代の……彼氏であって候？」

彰人
「あ、お久しぶりですね弓道部の主将さん。どうしたんですか」

弓
「弓で候。百代からはよく話も聞くのでな、こちらも御剣と言わせれ貰うが」

彰人
「ええ、構いませんよ弓先輩。それで百代は？」

弓
「ふむ、先ほど学園長に呼ばれていたで候。少しよろしいでしょうか？」

さっきまでの言葉とは違い偶に出てくる女の子口調で話す人、俺はそのまま三年の教室に入った。

彰人
「それでどうかしたんですか？いつもの口調ではなく、普通の女の子の口調に。まあたぶん見かけでも強くしておかないとって感じですか、確か武家ですよね？」

弓

「あはは、さすがは百代の彼氏って感じですね。まあそんな感じです、それであのときの腕を見させてもらって、お願いがあるんですけど」

そう思えばあの百代勘違い事件の時に弓術を見せたな、そう思えば

彰人
「ああ、ありましたね。けどもしかして指導って言うのならパスですよ、今回の夏休みが予定が「ああ、それじゃないです。確かにそれも本当はしてほしいのですが」…それではなんですか？」

そして目の前の弓先輩はこう切り出した

弓
「椎名さんのことなんですけど……」

俺も一つ思うところがあった、それはたぶん兄弟と付き合いだしたせいでさらに視野を狭くした感じがしたからな。

彰人
「京のことですか？なにか問題でも」

弓
「問題というか……そのう、元からそんなに部活に参加してなかったのだけど最近さらに出なくなってね…腕は確かなんだけど」

彰人
「察するに、先輩としての面子もあるわけだ。後輩が気ままに来て、後輩の面倒見るわけでもなく、さらにうまいから荒らして帰るといった感じですかね……間違っていますか？」

弓
「あなた本当に百代の彼氏なのよね」

彰人
「ええ、よく言われますが正真正銘百代の旦那ですよ。しかしそうでしたか……ですけど、たぶん貴方の今考えている通りに京を辞めさせると、たぶん」

弓
「たぶん？」

彰人
「あいつは未練もなく、そのまま辞めていきますよ。元からあいつは弓道ではなく弓術なのですから別に部活をしなくても、それこそ何か大きなことが無い限りそのままやめていきますよ」

弓
「そうなんですね、やっぱり。けど！」

彰人
「分かってます。もう十分に待ったと言うことなのでしょう、今部活に来ていないのもたぶん彼氏と遊んでいるって言うふざけた理由なのでしょうが……あいつにとっては全てなのかもしれませんね……はぁ～兄弟は苦労者だな。それで俺は何をすれば？」

弓
「え？」

彰人

「そのために態々こんな人気の無い教室なのでしょう？普通なら部活の時間ですよね……それぐらい俺だって分かります」

弓
「それじゃあ……お願い、出来るかしら」

彰人
「ふむ、結局これは京の問題だからな。しかしまあ考えて見ましょう、ふぅ～そうすると、兄弟に頼んでみますよ、まあそれでも決めるのは京ですけどね。それでも「お願いします」そうですか……ですがなんで先輩はそんなにも京に？」

弓
「あの子、小島先生が連れてきたんだけど初めて射を見たときに私、あそこまで凄く綺麗なをの見たの初めてで。それでずっと憧れていて。だからかな？」

彰人
「そうですか……」

弓
「後輩に頼るようじゃあ私もまだまだかな～……それでは失礼するで候……」

彰人
「はい、失礼します」

弓先輩はそのままいつのも口調に戻し部活にいったのだろう。俺は教室の後ろのドアの方に声をかけた

彰人
「それで百代、いい加減出てきたらどうだ……先輩ならもう部活に行ったよ。逆の方向が弓道部のところだから、大丈夫だぞ」

百代が後ろのドアからなぜかそっと入ってきた

百代
「気付いていたのか……まあ当然か」

彰人
「もちろん、俺の蛇が教えてくれてね。それでなんでそんな風に隠れていたんだ？」

百代
「だって！彰人がしかも弓と二人っきりでこんな、人気の無い……」

彰人
「心配させたようだな、すまんすまん」

俺はそのまま百代を抱きしめて、そして

彰人
「それじゃあ、行くか……金曜集会に」

百代
「う～、もう少し。今日は少し」

彰人
「いいぞ、今日は存分に甘えろ。俺も存分に甘えるからさ」

百代
「お前、もしかして分かって」

彰人
「鉄爺に呼ばれたんだろう?義妹のためだからな、これでも未来の義兄だからな。それにあいつは俺の弟子みたいなものだしな。だからすまんが明日からな」

百代
「ああ、すまない」

百代の腕のしがみ付きが一層強くなるなら、俺はつかまれている手を百代の手を払い

百代
「え?」

百代の驚く声に笑いながらも百代の腰に手を当てて自分の体の方にさらに押し寄せた。それにきづいた百代は俺の体に抱きつきながら校門を出て行った。

百代
「今度からこうしてくれ♪」

彰人
「善処しよう」

##第九十二話##（後書き）

この小説の第一部が、ですが。

それではバイニー！

##第九十三話## （前書き）

章をつけようと思います！

##第九十三話##

俺らは学校に出るとそのまま俺らは秘密基地に向かった、とその前に

彰人
「飯買いにいこうぜ、このままいけばちょうど昼飯の時につくぞ秘密基地」

終業式は午前中に終わり百代を待っていた時間を含めても現在、午後１１時半だった。これは完全に昼前だ。だから俺らはどこかで食べることにした

百代
「そうだな、しかしこの時間だとゴストはもう混んでいると思うぞ。そうなると」

彰人
「ワックだろ、ここは無難に」

百代
「そうだな、ここならばそれが一番近いか。それじゃあお持ち帰りで秘密基地で食おうではないか」

彰人
「はいはい、それじゃあとりあえずそっちに向かうとするか」

俺らはそのまま商店街の方に向かった。そして俺らはファーストフード店に到着し、レジの列に並んだ。さすがにこの時間は混む様だ、そんな時俺らの後ろから聞き慣れた声が聞こえた

羽黒
「だから、それぐらいがいいんじゃねぇ～」

千花
「ありえないっつぅーの、それにあの合コンだってはずれだったしさ。はぁ～」

真与
「千花ちゃんにはもっといい人がいるはずですよ。モモ先輩と御剣君のようになれる様な人がきっと」

千花
「あれはどちらかと言うと特殊でしょ！あそこまで凄いのは「特殊ですまなかったな」え？」

真与
「ああ！御剣君にモモ先輩じゃないですか。こんな所では珍しいですね」

百代
「ああ、今日はな。彰人からの提案でな、このまま持ち帰りと言うわけだ。それよりも委員長よ、別に私らは普通の付き合いだぞ、な彰人？」

彰人
「それはどうかと思うが……まあそれはそれだ、おっと俺らの番だぞ百代。」

百代

「もう、照れてくぁいい奴だ」

羽黒
「超羨ましいんですけど～なんかさ、モモ先輩と並んでいてなんつぅ～の見合うっていうか、合っていると言うか」

千花
「お似合いなのよね、あの二人って。モモ先輩が惚れこんでいるのも分かるし、それに御剣君はあのモモ先輩を女として守ろうという心があるしね」

真与
「何はともわれ、お二人はお似合いと言うことですね」

千花
「真与が純情よね」

後ろで色々と言われているが百代はそれを聞きながら上機嫌だし、俺は恥ずかしいしで俺らはそのまま出て行った。

彰人
「さすがにさっきのは恥ずかしいな。人からああも賞賛されるとな、どうも歯がゆい」

百代
「私は非常に機嫌がいいのだがな。あう言う風に言ってくれると言うことは客観的にもそう見えて内面でもそうと言えているなんて、彰人！私らは凄い夫婦だな」

彰人

「カップルね、まだ夫婦になれる年齢じゃないからね、俺が」

百代
「早く彰人が私にプロポーズしてくれないかなぁ～」

彰人
「はいはい、そのうちしてあげるからねっと着いたぞ百代。まあ誰もいないだろうけどな」

百代
「いやぁ～絶対あのロボットいるかもしれないぞ！まああいつのことだ邪魔をしないだろうけどな～」

百代の言うとおりクッキーは俺らが着た瞬間にまるで保護者の如く消えていった。あいつは本当にロボットか？

百代
「彰人～それじゃあ私にポテトをくれ！」

彰人
「自分でたべような」

Ｓｉｄｅ　一子

今日は彰人はなんでもお姉さまとデートらしく居ない、けどそれはいつのも事なんだよね。

一子
「はぁ～けど、彰人は夏休み私の特訓するって言っていたけどお姉さまの相手は大丈夫なのかしら？まあ今までどおりのトレーニング

ならば大丈夫だろうけど……ん！この気は」

私は河川敷でいつもの通りのランニングが、この人にあった瞬間に変わった

釈迦堂
「おうおう、随分と面白い鍛え方になっているじゃねぇか、一子」

一子
「釈迦堂師範代？」

私は構えを解いた

釈迦堂
「元だ、しかしおうおう、殺気の理解を出来るようになったとはあの蛇野郎は凄いな、そうおもわねぇか、一子？」

一子
「彰人をそういうのはやめて下さい、釈迦堂さん。それに蛇は無害ですよ、ほら」

私の周りにいる一匹の緑色の蛇、私はそれを撫でながら蛇は釈迦堂さんを睨んでいた

釈迦堂
「おうおう、怖い怖い。けど一子、お前その蛇がなついているのか？」

一子
「え、だってここに居るじゃないですか。こんなにも愛嬌のある子」

釈迦堂
「あはははは、そうかそうか。これは本当に面白いなぁ。それじゃあな一子」

一子
「え、あ、はい。失礼します」

私はなぜか拍子抜けしてしまった、それはなぜか釈迦動さんが今の私よりも弱く感じたからだ。

一子と離れた釈迦堂さん

釈迦堂
「ふ、一子め、あの顔だと俺の本気隠しているのを見抜いていそうだな。それにあの蛇を懐かせる事が出来るのは……俺のように落ちたモノ……いや、彰人のように極の武術を極めたモノにしかできないんだよ、あのジジイも百代も、そしてあの中国人も、蛇の殺気で反応しているからな、まあ百代は別か？あいつはなんか色々と違うからな……く、く、く。だがやはりお前はこっちの人間さ、憑き物は消えたようだが……まあ楽しみだな」

？？？
「おい、師匠！なにブツブツ言っているんだ？」

釈迦堂
「お前の対戦相手のことだよ」

？？？
「おお、それはおもしろうそうだな！」

釈迦堂
「ああ、そんな未来に俺は期待するとしようかぁ」

ｓｉｄｅ　ｏｕｔ

俺らはワックをここで食べていちゃいちゃしていると時間がすぐに経ってしまったようですでにいつもの金曜集会の時間となったようだ、まあ理由はモロとまゆっちが来たからなのだが。

まゆっち
「あれは驚きモノを超えて硬直モノでしたね」

モロ
「入っていきなり、抱き合っているとかもうホラー映画よりも怖いよ。心臓に凄くわるいしね」

百代
「はむはむ」

彰人
「百代、耳を噛むのは辞めてくれ。くすぐったい」

モロ
「あんたらは人の話を少しはきけぇ！クッキーも教えてくれればよかったのに」

クッキー
「ごめんごめん、上の階での掃除に手間取っちゃってさ。はい、それよりも紅茶だよ。彰人のお土産の品だから美味しいはずだよ」

百代
「あ、この気は岳人だな」

彰人
「まて……一子も一緒だぞ」

百代
「は？彰人何を言って」

岳人
「うーっす、いつもの通りだな。まあ俺らのリーダーであるあのバカはいないけどな」

一子
「ああ、もう結構みんないる見たいね。それにどう、彰人！結構うまくなった？」

百代は俺の膝の上に居ながら驚愕していた……百代でさえも気を隠せるようになった一子、これはもう成長の紛れもない結果である

彰人
「ああ。いいかんじだ。だけどまだ甘いぞ、もう少し高めないとそれこそバレちまう。それと釈迦堂さんに会ったみたいだな一子」

一子
「あれ？なんで彰人分かるの？」

彰人
「なんとなくだ。まあ何もなければいいさ」

実際は一子の周りに配置してある蛇が今までに無いほどに警戒していたからこれぐらいだとたぶん師範代だろうけど、蛇が警戒していたから釈迦堂さんと俺が踏んだだけなんだかな。

百代
「ワン子。この姉を騙すとはやるなぁ～」

一子
「お姉さまもだませた、バンザーイ！」

百代
「彰人～♪、これはこれでなんだか寂しいな。うれしいんだけどな」

彰人
「泣くのは後でしなさい。けど兄弟はどうしたんだ？京とどうせいちゃついているだろうけど」

岳人
「今現在、イチャついている奴が言う言葉じゃねぇよ」

彰人
「なんだ岳人？嫌味か？まったく痛くないぞ、それにもう来た様だぞ、この気は間違いなく京、兄弟、それにクリスだな。これで全員か」

京
「夫と登場です～」

大和

「夫ではなく彼氏だ」

クリス
「頼むから、私の入る前にそんなノロケをしないでくれないか？完全に入り難いのだが」

まゆっち
「あ。これで全員揃いましたね」

彰人
「兄弟、それじゃあ金曜集会を始めるか？」

大和
「そうだな、それで今日はって言ってもキャップがいないんだよな！これはどうする？」

モロ
「と、言うよりも確実に嵐だったよね？」

百代
「ああ、そのことなのだが私も夏休みはたぶん出れないと思うぞ。すまないな……ジジイからの呼び出しでな、私は明日から中国の山に入ることになったのだ」

全員ー彰人
「はぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！！」

モロ
「だから今日はそんなに甘えているのかって！そういうことじゃないでしょう！てか彰人は知っていたの？」

百代
「いや、今初めて言ったぞ」

彰人
「そこは俺と百代の仲なのでカバーが出来た。ああ、そう言うのなら俺と一子もちょっと出るのが……難しいかもしれないな」

大和
「それはなんでだ？」

彰人
「こいつの将来を、決めに行くんだよ」

一子
「あはは、ごめんね皆。だけど私はお姉さまと違ってこの国にはいるから大丈夫だよ……ね、彰人？」

彰人
「ああ、出来る限りそうする気だ」

大和
「そうか、わかった。ワン子も頑張れよ」

一子
「うん！」

彰人
「それじゃあ今日の飯はキャップが居ないので……コンビニで誰か買いに行くかじゃんけんだ！」

モロ
「結局、そうなるのね。けど人数を考えるとさすがに一人じゃ無理だよね」

岳人
「それじゃ、いこうぜ！最初はグっ！じゃんけん！」

じゃんけんの結果は、それは

百代
「なんで私が負けるんだ……彰人～」

一子
「まあまあお姉さま。それに私も負けちゃったし……それじゃあいってきま～す」

百代
「彰人～」

一子が腕を引きながら百代を連れて行くといった、今までに無い状況を俺らは見ていた。

彰人
「少し、リミッターを解除しすぎたかな」

大和
「依存になってきてないか？」

彰人

「さすが依存の彼女を持つ、彼氏」

京
「えへっ♪」

俺はそれに大和に耳打ちで……こう言った

彰人
「すまん、この集会の後お前一人で屋上に来てくれ」

大和
「……分かった」

俺はそう言うとそれっきり百代がもどるまで普通に居た。

##第九十三話##（後書き）

さて、さてみんな夏休みに向かってエンジン、かけにかけて行きます！

皆さんに質問なんですが、一部が終わった際に御剣　彰人、の紹介をしたほうがいいでしょうか……回答待ってます！

##第九十四話##（前書き）

バイト、始めました

##第九十四話##

夏休みが始まった。そして今日は百代が中国に行く日だ、昨日の夜は……聞かないでくれ。

百代
「うぁぁぁぁぁぁ！彰人、彰人！！」

最初に言っておく、ここは空港だ。俺ら風間ファミリーで今日は送ろうとしているのだが、しかし現在百代は俺の体に抱き着いて離れない

鉄心
「モモ、すでにそれで三十分、いい加減いくぞ！」

百代
「うるさいジジイ！これは私の試練なんだ、だからこれは最後の甘えだ……後五分」

揚羽
「それですでに十五分だぞ川神の。まあ私もこうならないように小十郎は縛り上げておいたがのう。なんせ着いて来ようとしていたからな」

彰人
「はぁ～ほら百代。そろそろ時間だぞ、それと視線的に俺のメンタルがもたないから。な？何、夏休みなんてあっというまだ。それに八月の二十六には日本だ、安心しろってな？」

百代
「もう少し、彰人の匂いを「百代？」……う、わかった。それじゃあ最後に「チュッ」……ああ、これで十分だ。今回は私の方か、ふん、行ってくるぞ彰人」

彰人
「ああ、早い帰りを……なんてのは言わないさ、それじゃあ川神百代、頼んだぞ……俺の嫁としてな」

そして百代達は飛行機に乗って行った。

彰人
「さて、帰ろう…か…な？どうしたんだお前ら？」

大和
「いやぁ～なんて言うか」

モロ
「そうのう、僕達必要だったかなぁ～と、本当に思って。冗談で僕、行く前にこれは彰人だけど十分じゃんって言ったけど、言ったけどさ……本当にいらなかったね」

岳人
「俺様も頑張るからな先輩！」

岳人はなにか違う方向で俺の事を先輩と呼んでいるし……まあ他のみんなも大体こんなもんなか、もちろん一子は除外しろよ。キャップもいなくなりさらに百代、そしてある意味一子も俺も出れなくなっていく……久しぶりなんだろうなこんなに人がいなくなるのは。

クリス
「それでは我々も帰ろうか」

まゆっち
「そうですね」

俺らが帰ろうとした時に電話がなった。それはモロの携帯だった、
モロはすぐに取ると俺らに

モロ
「ごめん、すぐに撮影みたいなんだ、タクシー捕まえてくれって」

彰人
「そうか、モロは映画の指導だもんな。了解、それじゃあお前は先
に行け。どうせ俺らはバスだから、お前はタクシーで」

モロ
「うん、ごめんね。それじゃあね皆」

大和
「ああ、頑張って来い」

モロはそしてかけていった。残った俺らはバスを待ち川神に帰るこ
とにした。

川神院に戻る、時間はまだ午前。そしてこれから始まるのが本格的
な一子の特訓だ、前から頼んであるようにルー師範代はすでに待機
していた。

彰人
「一子、お前に話がある。ちょっとこい」

俺はいつにもなく真剣な口調で言うと一子もなにかに気付いたのか、すぐにこちらに来てくれてそのまま正座で俺のことを見た。

一子
「それで話ってなに彰人？なんだか真剣みたい……」

彰人
「ああ、まず最初に言おう……一子、お前の夢を教えくれるか？」

一子
「そんなの決まっているわ！川神院の師範代よ！！彰人だってそんなの知っているでしょう？今さらどうしたの？」

彰人
「そうだな、そうだよな。お前は昔からそう言って来ていたもんな……それじゃあ言おう、一子……いや、川神一子！この夏休みの八月の二十九日に川神百代と戦ってもらい、そして…お前は川神院師範代にふさわしいかどうかのテストする、異論は認めない、お前はこれを受けるか、受けないかだけだ。一子、お前は「受けるに決まっているじゃない！！」……そうか」

俺は内心笑いながらも未だに強い口調で言う。

彰人
「ならばこれより、夏休みは……俺とルー師範代との特訓となるいいか？」

一子
「……本当に？」

彰人
「今のお前でも百代にすれば一瞬で終わる赤子同然だ……それを俺らが鍛えなおす、お前が師範代に相応しいかどうかな」

ルー
「そうだヨ、この夏休みで育てるネ。それこそあの百代と互角にはね……彰人と私で」

一子
「うん、よろしくお願いします！」

彰人
「それじゃあ、始めるか。まずはルー師範代と戦ってくれ、もちろん一子は本気で、そして」

ルー
「分かっているネ本気で行くネ」

二人は構えた、それは俺らの死合いに似たものだ。殺気と殺気がぶつかり合いそして相殺しながらその場の空気を呑んでいく。

一子
「……」

一子の空気は無いに等しく変化を遂げる、ルー師範代はそれに気付いてすぐに右足での回し蹴りに入るが。それは止められる、一子の手につかまれた状態で

ルー
「く、これならドウダイ？」

ルー師範代は捕まれた足を軸にさらに縦に回り一子の腹を狙った。
そして起きたのは無音だった。なぜか、それはルー師範代の軸をさらに一子は軸として避けたのだ。

一子
「今！」

ルー師範代の着地と同時に攻撃をしかける一子。相手の顔面にナックルが入る、しかしルー師範代はそれを見切りそのまま避ける

ルー
「ふぅ～まさかここまでとはネ。それじゃあこっちも本気で行くネ！」

ルー師範代はさっきまでとは比べ物にならないほどの気を出して攻撃を始める。しかし一子は冷静だ……まあこれで五分は持つだろうな。

俺の予想は的中した、そう五分は持ったのだがしかし

一子
「……っ！……まだ……」

一子が一瞬ゆがんだ顔をした。そうこの反射的に避ける技、問題は一子の本能がどれだけ危機管理能力に適していても所詮人間の脳。動物のように本能だけで生きているわけでもないのだから脳に負担

が行くのは当然だ。しかもルー師範代は死角と言う死角と連続で突く、これでは避けているてもいつかは当たる。そう当たるのだ

ルー
「今ネ！」

ルー師範代の裏拳が見事一子の腹を直撃した、そして一子は吹き飛んだと思われたがしかし

一子
「……まだ、ま…だ…」

なんと裏拳を自分の手で抑えながらも吹き飛んでいた。

彰人
「そろそろ限界だな……蛇、間に入れ」

俺の解き離れた蛇は二人の間に入る。ルー師範代はそれに気付き動きを止める、そして一子はそのまま倒れた

ルー
「……今の一子の限界だね、これが」

彰人
「ええ、ルー師範代の本気状態を避けることで五分が精一杯です。それに最後の裏拳はたぶん気力で防いだんでしょうね。それでルー師範代、今後の計画を組み立てましょう……まずは一子を運ばないといけないけど」

ルー

「そうだね、まさか一子に私の本気を見せることになるとは予想以上ネ。それに一子は薙刀があって始めて一子のスタイルネ。無手でこれだけなら大きな成長だね」

俺らは倒れた一子を院の中に入れて計画にはいった。

彰人
「ごらんの通り、一子の防御面では大きな才を手に入れました……だけど」

ルー
「うん、戦ってみてよく分かったけど攻撃の手段が無さ過ぎるね。しかもあの無心状態は攻撃の際一瞬だけ途切れるネ～あれじゃあカウンターが入り安すぎるからちょっと問題ネ。それとあの無心状態も持って五分」

彰人
「まあ死角にしか攻撃をしないルー師範代の早い攻撃をあれだけ裁いていたのですから、まあ百代の場合は防御じゃいけないんですけどね」

ルー
「百代の攻撃はガードごと破壊するモノダカラネ。私の攻撃を防いでいてはだめネ」

彰人
「そうですね、ふう。川神流は、お願いしますよ。俺は一子の基礎の方を固めますから」

ルー

「了解ネ。それじゃあ一子が起きたら私のところに来るようにいってほしいね、私も師範代だからネ、一人の生徒見ているわけにはいかないのね」

ルー師範代はそう言うと修行僧の方にいった。夏休みは始まったばかりだ。

Ｓｉｄｅ　百代

飛行に乗ってすでに三時間が経過、もう少しで中国の山につくらしいが

揚羽
「まったく川神の、もう少しそれをどうにかできないのか？」

揚羽さんが何か言って来るが？

百代
「なんのことでしょうか？」

私は別に可笑しいことなどしていない、ただ彰人の写真を見ながら精神安定を図っているだけだ

鉄心
「それが問題じゃといっているのに、すまんのう九鬼も」

揚羽
「なに、あのギラギラだった殺気が今では非常にバランスの取れた闘気と殺気に変わっておるが故、彰人も相当強くなったようだな」

鉄心
「彰人はすでにワシなど超えておるからのう」

揚羽
「は、は、は。武神と言われた鉄心様がそう言うとはな、彰人とは一戦ぐらい交えたいものだ。のう川神の？」

百代
「揚羽さんには渡しませんよ。勝負するもの私が先です……と言うよりもジジイ、彰人の技をどうにかできないのか？」

鉄心
「そう思えばモモは発動しただけで気絶だったからのう……まあそれはこの山篭りで分かるであろう、どれだけからだが強くても心が追いついていない事を」

ジジイは何か知っていそうな感じだったが、私たちには何も言わずにただ笑っている。むかつく

ｓｉｄｅ　ｏｕｔ

夏休み今日は既に一週間が経とうとしていた。俺と一子は現在組み手をしながら特訓に励んでいた

彰人
「ほらほら、もっと集中しないと一瞬で負けるぞ？」

一子
「……」

一子の目はどこかのＳＥＥＤ並みに目の色を消してそして何も考えず俺の攻撃を避けていた、だが

一子
「……っ！！」

一子の回し蹴りが出る。しかし俺はそれを待っていたかのように掴んでそのまま蛇で拘束

彰人
「はい、焦った一子の負け」

一子
「……えええええええ！！また！？」

彰人
「ほらほら、もう今日ですでに三回の負けだぞ一子。もっと集中しろ、そして粘れ。やっとお前の才なのだぞこの力は。それを有効活用しないでどうする？それに川神流の薙刀もやっているんだ、そんな無手で攻めようとするな。実際はリーチがあるんだからな」

一子
「はぁ～い」

彰人
「はぁ～……これでまずは一段階かな？そっちはどうだい百代？」

俺は空を見ながら独り言を呟いた

Ｓｉｄｅ　百代

百代

「彰人～～～に、会いたい……だけど修行……はぁ～」

side out

##第九十四話##（後書き）

さあ、夏休みが始まりましたよ！？

##第九十五話##（前書き）

アニメ、始まりました！！

##第九十五話##

それは突然と起きた。そう、もう夏休みも中盤だ。俺と一子は久しぶりの集会である、その前の集会は申し訳ないが修行でいけないと予め兄弟メールしていた、……だが、そう、恐れていたことが起こってしまったのだ。

過去に戻って説明しよう、それは百代が中国に旅立つ前日の集会の後、俺は大和を屋上に呼び出した。

彰人
「よ、兄弟……いや、大和。」

大和
「……なんか呼び出しってことから想像するに何か重いモノだと思っていたけど、兄弟が、いや彰人が俺のことを名前で呼ぶってことは重要ってことだろう?それでどうかしたのか、安心しろ京もここには居ない、たぶん姉さんと一緒に下に居るよ」

彰人
「そうか、ならば言おう。お前……今危険な状態って分かっているな?」

大和
「……京の事か……」

彰人
「依存、分かっているようだな……まあ抜け出す事も出来ないフリもしているみたいだな」

大和
「ふ、フリって……た、確かに京は完全に俺に依存してきている、それは分かっているけど…けど姉さんだって」

彰人
「確かに俺らも依存しているところはある、だけどな……なら今回の修行を見ろ、俺はついていかない、それは百代のためでもあり、俺のためでもある。俺らは依存ではなく、互いを求めるだけで今はとどめているんだ」

大和
「そういうなら俺らだって「いや違うな！」……なにが違うんだ！」

彰人
「そんなの簡単さ！今の京は完全に大和、お前に頼ってばかりで、まるで視野が狭い。昔お前がなんで京の告白を拒絶したいたのかの理由はあいつにもっと広い視野を見てもらうためじゃなかったのか！！」

大和
「……あ……」

大和は何かに気付いたように、俺の顔を見る。

彰人
「今の京をみるとな、なんか怖いんだよ……あいつは元からお前のためなら何でもしそうな奴だった、だけど、今はそれのドが過ぎて、そして焦ってそれこそ何もかも壊しそうでな……ただそれを言いに来ただけだ」

大和
「いや、確かに……思い当たることがある、ありがとう彰人。ちょっとかんばってみるよ、確かにあいつには少し外を見てもらわないとな、それに色々とあるし」

彰人
「まあそれは彼氏の役目だろうさ。それでも困った時は頼れよ、なんて言ったってお前は俺と百代の舎弟だからな」

大和
「ああ、本当にすまない」

これがその時屋上で交わした言葉だった、そして今の状況を説明する。俺は遅れてきた、理由はリー師範代に今後の一子の鍛錬メニューの追加とかの打ち合わせが急に入ったため俺は一子に先に行っておいてくれと頼んだ、そして俺がいない間にそれは起きた。

一子
「今の京見ていると私、また喧嘩しちゃいそうだから、私帰るわね……彰人、ごめん、私」

彰人
「いいさ、別に。帰れ、お前は今ハンパな力だからな。使われても困るからいい判断だ、今日は帰れ」

一子
「うん」

岳人

「ちっ、俺も帰るぞ！ああ、くそっ！」

なにか、イラつきながら帰る二人。

彰人
「そうか分かった、モロもいいぞ。携帯なっているしな……映画だろう？お前だって初めてぐらいの気合を入れたもんだ……こっちでなんとかするから、行ってこい」

モロ
「あはは、ごめんね彰人。それじゃあ」

そして残ったのは、俺と兄弟、まゆっちにクリス、そして京だった。

彰人
「状況の報告は要らないぞ、大体分かっているからな……兄弟、大丈夫か？たぶん二発ほど入っているだろう？クリスと京の分が、まともに入っているみたいだな。軍師のくせに体張ったみたいだな」

大和
「く、ははは。ちょっと作戦失敗だ」

クリス
「だが、私の蹴りはモロに入っていたはずだが」

大和
「大丈夫だから、それよりも京……屋上に来てくれるか、話がある」

兄弟が、いや大和がたぶん決断をするのだろうな。俺は一子が出て行く際にここに入ったが、今の空気で大体が分かる。そして二人と

も出て行った、残った俺はそのまま話を聞くことにした

彰人
「ふむ、それでまゆっちと一子はギリギリで大和に攻撃するのを止められたっぽいけど、そこまでの経緯が分からないから、教えてくれるか？」

それから聞いたことは、まあ京からの提案だ、いやこれは防波堤なのかもしれないな。

彰人
「そうか……肝心な時に居なくてしまなかったな」

まゆっち
「いえ、私も少し熱くなりすぎましたから」

彰人
「それだけ俺らの事を思ってくれていたのだろう？ならばいいさ、クリスもな」

まゆっち
「ですが、よく直江さんに攻撃を加えてしまったのがクリスさんと京だんだって分かりましたね」

彰人
「まゆっちの本気ぐらいなら出来るだろうし…それに今の一子なら可能だろうと思ってな。まったくじゃじゃ馬どもめが。まゆっちも今日は帰って良いよ、と言うよりもまゆっちがそこまでなるぐらいじゃ、今は冷静でもないだろうしな」

松風
「彰人～その言葉に感謝して、オラ達撤退スルだ」

クリス
「私は……私は残りたいとおもう、京が少し心配でな」

彰人
「それも勝ってさ。俺も少し大和と話さないといけなさそうだからな……はぁ～だけどこれは本当に破滅の危機だな……俺としたことがな」

クリス
「彰人殿がそんな責められることはしておりません！今だってみなを迅速に纏めて「それでも俺は後処理なんだよ、いつも」違います！彰人殿はたぶん最低限の被害に食い止めてくれたのだと思います、犬だってそうです、私には分かりました京と喧嘩だってすぐにかかったわけでもなく最初は話だったんですよ、これだって彰人殿の特訓のおかげだと思っています、今では私の中での犬の評価は高いです」

彰人
「そうか。あ、すまん……大和はそのまま帰るようだ、俺は話をしに行って来る」

クリス
「あ、分かりました」

俺はそのまま秘密基地の窓から下に降りた。もちろん兄弟の目の前で

彰人

「よ……大和」

大和
「ああ、彰人。すまないな……結局「いや、大成功だろう？」え？」

彰人
「なにを言ったのかは知らないし、俺も聞こうとは思わん。だけどお前がここにいるってことは、最低でもお前は頑張ったんだよ」

大和
「そうかな、俺頑張ればれたかな？」

彰人
「胸を張れよ少しは。まあこの後はお前らに期待するとしよう……ファミリーの方は俺の方で少し頑張ってみようと思う。まあその前に一子をどうにかしないとな」

大和
「ワン子が？」

彰人
「そう思えばちゃんと言っていなかったな。一子は今回の夏休みの終盤に百代と勝負して、川神院の師範代になれるかの試練があるんだよ、だからあまりこう言ったゴタゴタがないようにしていたのだが、さすがに無理だったようだな」

大和
「だから、夏休みの最初に」

彰人

「あはは、我ながら策として酷かったようだ。その顔から察するに俺の助言が余計だったのかもしれないかな?」

大和
「いや、そんなことはないよ。これであいつも一歩進めればいいと思う、俺はそれを待つことにしたからさ」

彰人
「そうか……じゃあもう兄弟じゃないほうがいいな、一人の女を守る男は、誰でも平等だからな、さよなら兄弟。そしてじゃあな大和」

大和
「ああ、じゃあな彰人……世話かけるな」

彰人
「いいさ」

そして大和の後ろ姿を俺は見ながらそのまま逆にビルに戻ることにした。二人とも降りているようで俺はさっきと同じ容量でそのまま上に上った。

彰人
「よ、クッキー。すまないな今日は解散だ」

クッキー
「そうみたいだね、じゃあ片づけしておくね。どうせすぐ、みんな来るんだから。その時汚いと嫌だもんね」

彰人
「そうしてくれ、すまないな」

そして俺は最後に秘密基地を出た。

Ｓｉｄｅ　キャップ

風間の父
「おお、これがコウモリの血だぞ。うまいだろう」

キャップ
「ああ、オヤジこれ最高だぜ！だけどこの肉にさらにこの芋虫をつけるとさらにうまいぜ」

すでに遺跡に入って二週間ぐらいだろうか、俺はこの環境になれて現在そのまま遺跡捜索中、ただ

風間の父
「しかし、軍から逃れることができて幸いだったな」

キャップ
「ああ、これで俺らも楽にできそうだぜ」

そして俺は不意に思ってしまった。

キャップ
「そう思えば今日は金曜か……あいつら元気にしているだろうか？」

そう、いつもの日常の事を

ｓｉｄｅ　ｏｕｔ

Ｓｉｄｅ　百代

揚羽
「はぁぁぁぁぁっ！せいっ！」

百代
「それだけでは彰人の足すらもつかわれませんよ！！」

久しぶりの試合、だけど私も揚羽さんもお互いに目隠しの状態でだ。
そしてそれが終わり、私らはひと段落ついていた。

鉄心
「もうこの修行に入って二週間、ここまでよくもまぁ心を鍛えられたワイ。」

二週間か……ってことは金曜か。あいつら元気だろうか？それと

百代
「彰人が恋しい……彰人ぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉ！！」

揚羽
「今日だけで、すでに六回だぞ、川神の」

鉄心
「まあ、若いと言うことじゃろうな。それでは二人とも、次の修行に入るぞい」

ｓｉｄｅ　ｏｕｔ

##第九十五話##（後書き）

ちょいと、甘さがなるなる展開なってしまい申し訳ありませんでした

##第九十六話## （前書き）

ラブコメって難しいです～

##第九十六話##

そして今日はあの集会の事件から三日がたった後だ。ちなみに大和からのメールを確認するに、なんとあいつはこの夏休みから部活に行ったらしい。うんうん、いい具合に変わってきているようだ、そして一子なのだが……あの後すぐにメールが来たようで、その際の一文に「大丈夫、ワン子ならかならず師範代になるから」と入っていて一子はちょっと涙を出しながら「当たり前よ……ありがとう」と呟き、そして俺の修行に戻った。そんな激動があって、今日だ。

一子
「……川神流…奥義！山崩し」

ルー
「おっと、危ないネ「まだ」、なんと！？」

一子
「川神流奥義！！蛇屠り」

一子はうまくルー師範代の足場に薙刀を入れ込みそしてなんと、あのルー師範代を……こけさせたのだ

ルー
「しまった、足場を。だけど、フィストファイヤー！！」

気迫だけでも光線が出せるルー師範代もそうだが…だけど一子がその技を使わせられるとは、相当一子は上がったな……

彰人

「く、く、く。いいだろう、ルー師範代……終わりですよ」

一子
「……終ワリヲ告ゲル……川神流…顎（アギト）！！」

そして勝敗は決した……一子の…負けだ

一子
「え！？」

ルー師範代は顎を顎で相殺させていたのだ、ルー師範代こそがこの川神流顎を一子に教えた張本人、その張本人がその技で負けるはずがない。そう顎と顎の勝負ではルー師範代が勝つに決まっている、しかし

ルー
「く、意外に痛かったネ……けど首に私の手刀が入っているから私の勝ちネ」

ルー師範代の言葉を聞いているどうかは定かじゃないが、一子はそのまま倒れた。

彰人
「試合終了。勝者ルー・イー、と、言いたい所ですが……」

ルー
「分かっているネ。まさかここまで私を追い詰められるとは。と、言うよりもこれはある意味負けたに等しいネ、まさか私の光線を受けながらそれでも前にくるなんてネ……正直驚かされたよ」

彰人
「まあ急所はたぶん本能でかわしたようですね……まさしく危機管理能力は長けているみたいですね。これでだいぶ完成してきましたね」

ルー
「そうだね、まさかこの僕でも本気で相手しないと勝てなくなるとは、さすがは彰人君と言うべきかな？たぶん鉄心さまが見たら号泣ものだと思うネ」

彰人
「あいつは、ただ師範代になりたい夢を追っていただけですよ、おっ目覚めたな」

一子
「あふぅ～川神の焼肉は……たれでも塩でも良いわよ……はっ！ここは？」

彰人
「おはようさん、一子。そしておめでとう、敗北だ」

一子
「うえぇぇぇぇぇぇ！！また！？だって私顎決めたわよ、その後にしかもお腹に「入ったけどお前は気絶していたぞ、光線もろに受けて」が、ガーン……走ってきます」

彰人
「ああ、罰ゲームだからな。いつもの通りのトレーニングどおりやつだからな、蛇、護衛だ、頼むぞ行け」

そして一子はいつもの通り走り出し、そして俺の蛇は気配を消しながら一子の後ろについていった。

ルー
「これなら川神武道会に間に合うね。と、言うよりも鉄心さまはそれまでに帰ってくるんだろうか？」

彰人
「……一応この前のメールでは鉄爺はちゃんと戻ってくるって言っていたよ。まあどの道この戦いで勝たないと百代との勝負もできなしな……」

ルー
「あれ？確か一子の試合はそれ無しじゃなかったのかい？」

彰人
「……今のあいつなら、太陽の子も楽でしょうね……それこそ川神の師範代、はたまた四天王クラスでないと話になりませんよ」

ルー
「そうだね……君の戦闘センス、そして一子本人で完成させた新たなる川神流奥義『無天方才』これだけでも強烈だからね」

彰人
「まあ完成させるに、いろいろと川神院の師範代のみなさんにも協力願いましたが」

ルー
「……まさか百人組み手をさせるとは…驚きだったネ」

彰人
「だけど、一子なら嬉々して喜びましたよ。私もデビューだ、とか……」

ルー
「本当に楽しみネ。これからが」

Ｓｉｄｅ　一子

今日も負けてしまった、正直私は焦っていた。確かに今までルー師範代とはいい勝負なんて物は出来なかった、だけど今は違う……けど、それでもお姉さまと戦ってちゃんと戦えるだろうか……今までのあたしは完全に無知だった、それこそ自分に才がない事彰人は教えてくれた……けどそれでも私は頑張った、けど私はまだ怖い……この夢が壊れてしまいそうな事も

蛇
『シャァー！』

彰人の蛇君が私に言ってくれた、そろそろ休憩の時間のようだ。私はいつもの河川敷で寝転がった、そしてそこにある人が来た、それは

一子
「あ、たっちゃん！」

そう、私とは孤児院から一緒でいつも頼りになる、お兄ちゃんみたいな人、だけど最近はどちらかというと……

忠勝
「お、一子が。また鍛錬か、ご苦労だな……そうだ、ほい、水でも

飲むか？」

一子
「ありがとうたっちゃん。たっちゃんはどうしたの、夏休みの間なのに……」

忠勝
「何、いつもの仕事さ。なあ一子……何？迷っているんだ？」

一子
「え」

私はたっちゃんからの一言に固まってしまった……

一子
「そんな風に見えたかな」

忠勝
「まあな……どうかしたのか？」

そして私は話した、今までの事も……そしてこのままで大丈夫なのかという、不安を。そしたらたっちゃんは俺の前に来て……怒鳴った

忠勝
「お前は一体誰だ！！」

一子
「え？」

忠勝

「お前は、一体誰だ！」

一子
「わ、私は……川神一子……」

忠勝
「なら、答えだろう、それが……お前はその目指しているモモ先輩の妹で、そしてお前の師匠はその彼氏のあのバカなんだろう？いいか、こんないい環境で何言ってやがる、いいか？夢ってもんはかなえないとな、溺れて死んじまうんだぞ……なあ、お前がいつも夢を追いかけて走っていたのは…今のように迷うためか！？違うだろう、一子！彰人だってそうだ、お前の事を信頼して、だからこそ……お前の夢をサポートしてんだろう？いいか、一子結局な、自分の夢は自分で掴むしかないんだよ！人がレールを引いてくれても走るのはおまえ自身の力なんだよ」

私はその言葉でなにか重荷が取れた感じがした。

一子
「そうだよね、私がこんなくよくよしていちゃ、彰人にもルー師範代にも失礼だもんね、それに私は川神一子……川神百代の妹、そうよ私だって……ありがとうたっちゃん」

忠勝
「勘違いするんじゃねぇ／／／／ただ、その、俺はお前をす、すっああ！そろそろ仕事に戻らないといけねぇ時間だ、じゃあな一子」

そして走って逃げていくように行ってしまったたっちゃん、だけど

一子

「あ、たっちゃん……あ、あれ？なんか急に胸が／／／／／」

凄くどきどきしていた……だけど、たっちゃんのくれた言葉…そうだよ、私が自分の夢を自分が諦めちゃダメなんだよ……だから私は、まず最初に

一子

「川神武道会に勝つ！これがまず最初の目標！！」

そして私は一層に気合を入れなおして、走った。

Ｓｉｄｅ　ｏｕｔ

Ｓｉｄｅ　鉄心

この山奥に来てもう二週間は過ぎた、百代もそれと九鬼の娘の心を磨き、そしてさらに力の芯を強めて言っておる。

百代

「ふぅ、今日はこれで畑もいい具合に手入れができただろう？それに今日はいい、魚も取れたし、久しぶりに三枚に下ろして焼くかな、焼き魚、なんてどうです、揚羽さん？」

揚羽

「いいではないか、川神の。それにしもこの山奥に入ってからお前はずっとそんなに料理もして、まるで何処かの奥さんだな」

百代

「もちろん、これも彰人の嫁となるべくそのための修行ですよ。そう思えばそろそろ帰国の時間ですかね」

揚羽
「そうであったな、そろそろ夏休みも終わり。これからも狡猾な老人を相手しなければな、川神はどうするんだ？」

鉄心
「もちろん、これから行われる川神武道会の挑戦者との戦いじゃぞ、百代」

百代
「そう思えば、そんな時期だったなジジイ。だけどいいのか、ジジイ。なら先に帰らなくて」

鉄心
「うむ、その通りじゃな。だからワシは先に帰るぞい、ただおぬしらはまだここで生活してもらうぞい」

揚羽
「うむ、期間の精一杯は居たいのでな。ここは非常に落ち着くからな」

百代
「ああ、私もその挑戦者が分かるまで帰る気は無いな。まあどの道、二十八までには帰るさ、大事な妹の決断だ」

鉄心
「そうであったな」

下手をすれば、挑戦者がそうなるかも知れないのう、これは面白いことになったワイ、じゃが……百代の目にはもう一つなにか、何か

をまるで待っているかのように楽しみにしていることがありそうじゃ、そのためか、ワシのこの鍛錬にも文句も言わずにひたすらに頑張っていた。やはり……なにかあるのだろうか？

百代
「おいジジイ、今日の収穫はここまでだろう？帰って飯にしようぜ」

鉄心
「うむ、そうだな」

揚羽
「鉄心さま、今日は焼き魚だとか」

鉄心
「そうか、それは楽しみじゃ。」

ｓｉｄｅ　ｏｕｔ

今日の日付は八月二十五日……場所、川神院……時間、九時。

ルー
「それじゃあ、ここに川神武道会の開始を宣言するネ！！」

群集
『ワァァァァァァァァァァァァァァァァァ！！』

そう、今日この日に開幕を告げた

彰人
「緊張しているか？」

一子
「全然、だって私は……川神一子だもん。」

彰人
「そうか……なら行って来い。川神一子！」

一子
「はいっ！！」

夏休み、最初最後の一子大勝負、開幕を。

##第九十六話##（後書き）

と、言うわけで一子の力が分かります。それでは次回会いましょう！

##第九十七話##（前書き）

もう少しで百話です

##第九十七話##

Ｓｉｄｅ　裏工場

時間が少し戻る、それは昨日のこと。ここは川神市のおくの方、裏の世界と言えるであろう。工業地帯にあるとある無法地帯の場所。そしてそこのとある倉庫にはパソコン、そして男女が合わせて五人居た。

???

『うむ、どうだねこの仕事は』

釈迦堂

「いいじゃないですか！まあこれも仕事でもありますからね。それでどうしたんですか、こんな急にしかもいつものメールではなく今回はパソコン越しとはいえ、顔を見せるとは。しかもうちの弟子も使うとは」

???

『こちらにも風の噂でな……ミツルギと言う名の武道家を知っているか？』

釈迦堂

「く、く、く。ああ、知っているさ」

辰子

「あれぇ～それって彰人君のこと？」

なんと男女の中で一番背の高い子が、いつもは話さないのに声を出

した

？？？

「ああ、辰姉。それ誰だ？」

釈迦堂

「あはははは、そうか辰子は分かってるか。まあいいや、それでどうかしたんすか、そいつが俺らに何か関係ですか？」

？？？

『ああ、“我々”だって風と言っても確かな情報でな……それで頼みがあるのだが、一回戦闘を頼みたいのだが』

釈迦堂

「ああ、それなら安心してくだせぇ。もう一戦していますから」

？？？

『そうか、それでどうだった？』

釈迦堂

「正直に話しますと……あいつがもしあんたらの計画（パーティ）を知ったら、潰しに来ますぜ」

？？？

『そんなことは聞いていない、お前で勝てるのかと聞いているのだ？』

釈迦堂

「そうですねぇ～なら本当のことを言いましょう……川神鉄心の現役時代を三人持ってくれれば、いや五人だな、五人いれば勝てますぜ」

???
『ふざけているのか！』

釈迦堂
「本気なんですけどね～、まあこれは後々にしたほうが言いと思いますがね……それで、もしかしてそれで呼んだんですか？」

???
『ふ、違う。明日開催する川神院での武道会に出て欲しいのだよ、君の弟子一人をね、まあ理由は我々の障害になり得るものの発見だ』

釈迦堂
「了解ですよ大将、それじゃあそういうことで」

そしてパソコンの通信は切れた

釈迦堂
「てなわけで、お前ら……出たい奴いるか？」

ちびっ子
「はいはい、私が出る！」

釈迦堂
「おお、天使。そうだな、確か一子も……よし、お前に決定だ。だけど武器はゴルフドライバーじゃまずいから模擬のなんかにしろよ」

天使
「へ、了解だぜ！なあなあ、師匠。これに勝てば賞金もらえるか？」

釈迦堂
「ああ、なんて言ったってあそかは天下の川神院だ。賞金もがっぽり、そしてその長となる川神百代との勝負もできるが、まあいいか」
そしてそこにいた五人は消えていった。
Ｓｉｄｅ　ｏｕｔ
今日はそう、川神武道会の開催日だ。鉄爺は昨日の夜帰ってきてそのまま今日の審判だ。一応俺も気遣って聞いたのだが「わしをなめるでない、これぐらい大丈夫じゃ」と言うことで俺は今回完全に一子のサポートに回っていた。対戦者をみるとそれこそ強豪と言われる人々ばっかだった。
一子
「初戦はたしか、セルゲイ？だったかしら？まあいいわ、私は頑張るだけだもん」
彰人
「ああ、その意気だ一子。あ、ちなみに分かっていると思うが無天方才はまあ出来るだけ使うなよ、今のお前ならそうそうあれを使わずとも勝てるさ、けど」
一子
「慢心せずね？」
彰人
「正解だ。それじゃあ俺は戻るからな、今回俺は不参加だからここに居られるのもルー師範代の計らいだ。それじゃあ俺はファミリーが居る方に行くからな……頑張って来い」

一子
「あ、皆着てくれたんだ……ねぇ、たっちゃんは来るって？」

彰人
「ああ、忠勝ならさっきメールで……準決勝までには来るって書いてあったから、それまで勝ち残らないとな」

一子
「うん、それじゃあ彰人、行ってきます！」

俺と一子はハイタッチをして、俺は観客席に向かう。外はすでに人で溢れており、そして放送関係も大勢いた。まあそれもこの川神武道会の世界から集まる人たちのせいだろうがな、さっきトーナメント表見たら、メッシとか居たしな……まあそれもここの優勝はある意味一番百代とのリベンヂはたまた、挑戦できる公式の試合でもあるからな、そりゃあ盛り上がるだろうな。

弓
「あ、御剣で候か？」

後ろから声がかかったのが、なんと弓道部主将

彰人
「お久しぶりです、弓先輩。どうしたんですか、こんなところでって言ってもまあここに居るってことは決まっていますけどね」

弓
「うむ、私もこの川神武道会は好きで候……はぁ～ちょっと普通に戻すね」

弓先輩はそう言うといつもとは違う女子高生の言葉に変わった。

弓
「貴方が言ってくれたおかげで椎名さん……戻ってきてくれたわ。あの時あなたに言って貰えなかったらたぶん私は退部させてしまってそのままだったかもしれないから、ありがとう。」

彰人
「ああ、京ですか？どうですか、かんばってますか？」

弓
「それがもう、凄いの！夏休みの中盤から来て、それから私ら全員に謝って、それでまあ私は本当は無罪放免にしたかったけど形上、一年生と同じく片付けってことにしたんだけど！もう、皆椎名さんの真似とかしちゃって……あ、ごめんさない」

彰人
「いえ、京もそっちで頑張っているようで良かったですよ。それで京は？」

弓
「弓道部のほかの子たちとで出店に行っているわ」

俺は笑いたい気持ちを抑えて

彰人
「そうですか、それでは俺も友達を待たせているので」

弓

「それは……失礼で候。またね、御剣君」

そして俺はファミリーのところに行った。

彰人
「う～い、ってこれだけか！」

モロ
「あはは、まさかね。僕もびっくりしているよ、岳人に僕、さらに大和、まゆっち、それと彰人だもんね」

総勢五人である、ちなみに百代はまだ中国、うちのリーダーは音信不通、そしてクリスは？

マルギッテ
「彰人殿……少々お話が」

彰人
「マルギッテ？ああ、すまん、少し話してくる。それと大和、いい感じだな」

大和
「ああ」

そして俺はマルギッテの近くに行くと

マルギッテ
「実はですね、お嬢様がこの大会に参戦しておりまして」

彰人

「は？」

俺はトーナメント表を見た限りではクリスティアーネなんて言葉は無かったが、と思っていると

マルギッテ
「お嬢様は偽名を使って今回のこの大会に参戦しておられます」

彰人
「質問いいか？なんでクリスこんな大会に？」

マルギッテ
「は、実は犬のことについて、気になることがあると言うことで…あの犬の成長が異常だと言っておりましてその真意を確かめるためにお嬢様は。ですから偽名を」

彰人
「ああ、意外と心配させてしまったようだな…てかクリスは俺が現在稽古をつけていること言っていた？」

マルギッテ
「はい！？彰人殿が直々にですか？」

彰人
「そんな驚くことか？」

マルギッテ
「当たり前です。それならば我々の部隊も指導していただきたいぐらいです、もちろん報酬は中将殿はじめ、私からも出しましょう」

彰人
「そういう話は今はやめてくれ。まあそう言うことだからたぶん」

マルギッテ
「そうでしたか、分かりました。しかしお嬢様も騎士ですので」

彰人
「分かっている、参加した以上全力ってな。それは一子も一緒さ、だから遠慮なんていらんさ」

俺はマルギッテにそう言うと今度こそ席にもどった。

まゆっち
「彰人さん、どうしたんですか？」

彰人
「ああ、クリスの居場所が判明しただけだ」

大和
「そうか、それで」

ルー
『それじゃあ次の三回戦、行くネ。西、ゲイツ兄弟。東、ミスキシドウー』

彰人
「居ただろ？」

大和
「あいつは一体なにがしたいんだよ？まあいいや、俺らは応援に徹

するとするよ」

岳人
「大和～俺様腹減ったから何か買ってきていいか？」

大和
「いいけど。ナンパは辞めとけよ」

モロ
「まあそんなこと言って聞く岳人じゃないけどね。そう思えばさっき京が弓道部と一緒にいたけど、あれって」

彰人
「まああいつも今頑張っているってことだろう。まったく今日は皆ランクアップする日か？」

そんなこんなで話しているうちにクリスは勝利を収めていた。次は一子の番、一言言えば圧勝だった。そして一子の試合が終わると俺らの周りに人が着た、それは

千花
「凄い、ワン子ちゃん！一体どうしったっていうのよ直江っち、それと椎名っちも普通に挨拶しているし、みんな夏でなんか変わったの？」

大和
「まあ、みんな頑張っているってことで」

彰人
「お、うまそうな、飴だな。クンクンクン……これは、あんこだな」

千花
「ウッソ、隠し味がばれているし。あ、けど丁度いいか、これみんなの分だからあげる、大体こういう川神院でのイベントの時は助かっているしさ。それに椎名っちとワン子ちゃんを応援ってことで」

彰人
「ならありがたく。それじゃあ仕事頑張れよ」

千花
「もちろん、それじゃあね」

そして消えて行った俺らは飴を食べながらそのまま観戦することにした。そして次の勝負で俺は気になるやつを見つけた、それは

天使
「おっしゃぁー！これであたいの勝ちだぜ、おっさん」

その女の子の武器は一子と同じ薙刀だったが、しかし構えが可笑しいのだ。そうそれは川神流にそっくりで、そして川神流は門外だ、となると……俺はそのまま移動してある木の近くまで行く。

彰人
「はぁ～、居るとは思いませんでしたよ……釈迦動さん」

そこには誰にも居ないがしかし声は返ってきた

釈迦堂
「あらら、すぐにばれちゃうとは俺も鈍ったもんだね……それで彰人、俺を捕まえるかい？」

彰人
「今日はパスですね、俺は今日は一子のサポートとしてここにいるので、別に川神院次期院長の夫でもありませんから」

釈迦堂
「がははは、そうかいそうか。それじゃあいい、大会ってのはそうじゃないとな。それで俺のあれが弟子さ、どうだいいい筋だろう？」

彰人
「ええ、ですが……一子が潰しますよ」

釈迦堂
「く、く、く。楽しみにしているぜ、彰人」

俺はそしてさっきまでの異質は気配が消えた事を確認して大和たちのところに戻った。

##第九十七話##（後書き）

申し訳ありませんが、次回は少し遅れるかもしれません。ご了承ください。お願いします

##第九十八話##（前書き）

と、言うわけでもうすぐで一章、終わりです！！

##第九十八話##

一子は順調に勝ち進み、現在は昼飯を俺らファミリーで食べている。京もこっちに来た、まあ他の皆は帰ったようでこっちに来たといった感じである。

京
「お疲れ、ワン子。順調に勝っているみたいね」

一子
「あ、京！京もさっき、控え室で仲道見てたらなんか楽しそうだったじゃない」

京
「いえ～い」

一子
「いぇ～い」

こいつらは喧嘩するが、仲直りも早くてさすがだと思いながらも俺らは弁当を食べていた。ちなみに作ってくれたのはまゆっち……そして忠勝らしいのだが、まだ姿は見えない

大和
「源さんも早くくればいいのに、こんな差し入れくれているんだったらなぁ～」

彰人
「まあそう言っても忠勝は仕事だしな。それにメールではそろそろ

これるみたいだぞ……まあ現在一子は順調に勝っていると伝えてはいるしな」

岳人
「ああ、それよりもワン子、すげぇな。今のところ無傷じゃないか」

彰人
「いや、岳人……第一戦の際に、一子は一撃喰らっているぞ。なぁ？」

一子
「ううう、彰人にはばれていたんだ……ちょっとねまさかの足だったんだ？」

彰人
「はぁ～、まあいいが。しかしまゆっちの飯もうまいなぁ～」

モロ
「そう言いながら涙を流している理由は？」

彰人
「百代～俺はお前の飯が食いたいよぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉ！！あぁぁぁぁぁ百代、百代！！」

モロ
「うわぁぁぁぁ、彰人がとうとう可笑しくなってきた！？」

と、こんな事もあったりなかったり。そして午後の部のスタートである、残っているのはもう大体が有名どころの戦いだ

Ｓｉｄｅ　鉄心

ふむ、今回の大会は予想以上に白熱しておってよいのう。その分…問題もあるようじゃな。板垣天使……天使と書いて天使（エンジェル）とは随分と粋な名前じゃが、やっている武道の型が問題じゃな……彰人と一子、それにルーも気付いておるようじゃのう。まあ午前の初めぐらいにあった黒い気が消えておるのを見ると、また彰人が何かしてくれたのだろう……まったく申し訳ないのう。

鉄心
「それに、気になることは他にも」

そしてワシの目に見えるのは孫である一子達。さっきまでの戦いで分かったのだが、一子がまるで底知れない何かを持って挑んでいることに気付けたのじゃが……一子はまだ、本気を出していない……一回戦目の相手は確か世間でも有名なはず、しかし一子はまだ本気をだしていない

鉄心
「これは、おもしろいことになりそうだわい「百代ぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉ！！」……彰人には完全に世話になっておるからのう、百代が帰ってきたら何か送らんとな……」

ルー
「鉄心様、時間でございます」

鉄心
「うむ、それでは向かうかの」

ｓｉｄｅ　ｏｕｔ

次の一子の勝負の相手は……ミス・キシドーことクリスだ。一子はすでにこいつがさっきまでとは違う相手と分かったらしく、本気の状態に入っている。そんなときだ

忠勝
「どうにか、間に合ったようだな」

大和
「あ、源さん」

彰人
「お、案外早かったな。メールを見る限りだと、もう一戦ぐらいは先になると思っていたが、仕事でも放り出してきたのか？」

俺がわざとらしく惚けてみると

忠勝
「勘違いするんじゃねぇよっ！ちゃんと仕事は終わらせてきたさ。それに一子の将来だ、俺だって気になるさ」

彰人
「それは、幼馴染としてってことにしておいてあげる忠勝」

忠勝
「ちっ、勝手にしやがれ」

そして一子ＶＳクリスの勝負が始まった。さきに攻撃をだすのはクリスのレイピアだ。しかし一子には当たるはずがない。あんな遅い攻撃などな……しかし

一子
「あんた強いじゃない！」

一子はまったくクリスの招待に気付いていないようだ。まったく普通にきづくだろうが、まあそれはそれで面白いが……まあここに面白がって居ないのが一人居るがな

彰人
「そんなに一子を睨むなマルギッテ、まだ避けているだけだぞ……今はな」

マルギッテ
「……申し訳ありません、ですが……あの犬、まったく気配を感じませんね。あれが彰人殿の？」

彰人
「ああ、もうそんな感じになってきているな……エンジンをかけているな、あ、それとこれは俺が鍛えただけで完成させたのはあいつだぞ。俺はただ手助けしただけだ……勘違いするなよ」

マルギッテ
「は、はい。あ、動きが」

マルギッテが言うように動きが起きた、それはクリスからのレイピアではなくて一子の川神流の業だ。あれは

彰人
「山崩しだな」

闘技場でのクリスの顔は仮面をしていてもわかる、焦っていると

ミス・キシドー（クリス？）

「（く、最初に戦った時とは比べ物にならないほどの強さだ。私の突きがまったく当たる気配が無い。まるで彰人殿との試合のようだ。だけど……けりなら）」

レイピアの攻撃から今度は足に変わるがしかし

一子

「……」

何も驚かず一子はそれを避けた。いや、正確には当たるはずがなかった、理由は簡単だ……なんせ、クリスが足を使った瞬間に、川神流の大車輪をつかったのだから

一子

「今っ！川神流、大車輪！！」

回転からの攻撃だが、しかしそれを防げないクリスでもない。それにこの大車輪は回した分だけ強くなる分、早く出せばそれほどの威力でない……だが、今までの一子なら今ので終了だろう。しかし

一子

「さらに川神流奥義！大輪花火」

更なる攻撃、これにはクリスも反応が遅れて

クリス

「し、しまった！？」

腹を直撃した……これで終わりかと思いきや、それは早合点だった。
なんとそこには

マルギッテ
「仕込んでおいて正解だったようです……まさかこのような事態になるとは」

マルギッテが驚いている理由は、まず最初にクリスに完全なる一太刀が入ったこと、そして相手があせもかかず、クリスが非常に追い詰められていること。

彰人
「ふむ、ここまで見事になったものだよ」

マルギッテ
「確かに今の犬は異常なほどの強さとなりましたね。これならば四天王にはいけるかと」

マルギッテの言葉に俺は即答で

彰人
「無理だな。あいつは避けることには長けているが、攻撃となるとさすがにな。四天王はそこら辺の次元での話でもはいしな。いい例が俺の彼女だ。あいつは攻撃を攻撃で返すような女だぞ。まあ力任せとも言えるがな。そんな中に一子が入ってもそれこそ防御できても攻撃は難しいだろうな。日本の戦で昔籠城と言う言葉があったが結局持久戦になれば負けだ。お、決まるぞ」

俺の声がかかった瞬間、クリスは仮面が割れて、地に伏せた。しか

し一子の手には武器が無かった、そう。結局は最後は殴ったのだ。
仮面ごと。

一子
「……川神流、無双正拳突き！」

それは百代の技でもあり、そして川神流の技でも高度の方にあたる技であった。そして地に伏せて正体がクリスだとわかった一子だが、すぐには駆け寄らなかった、理由は簡単だ。審判である鉄爺が無言でアイコンタクトしていたため接近せず、カウントを聞いていた

鉄心
「カウント、5、4、3、2、1……試合終了、勝者。川神一子！」

そして一子はすぐに駆け寄った

一子
「く、クリス！大丈夫！？……と、言うかクリだったの？」

まあこんな感じでてんやわんやだった。そしてクリスが気付いたようだ

クリス
「あはは、負けてしまったか。私が」

一子
「よかった気付いたみたいね。もうびっくりしたわよ、仮面割ったらクリスだったんだもん。それよりも大丈夫？」

クリス

「なに、真剣勝負にそれは無粋であるというものだぞ、犬。それに私は試したかったのだ」

一子
「試す？」

クリス
「ああ、お前のここ最近、なぜか虚ろなことが多くてな、少し心配だったんだ。父様がよく、いい兵士ほど、すぐに落ちてしまうと言っていたのが昔からあってな、それで今日のこれで試したのだが…試合が始まる前にすでに犬の中には信念があったからな、あとは私は全力でよかっただけだったのだ……」

一子
「クリのくせに生意気よ、けど……心配してくれてありがとう。」

クリス
「ふ、仲間ならな。当然さ」

一子
「まあその虚ろって言うのは彰人の修行の一環だったんだけどね…アハハハハ」

クリス
「な、なんだと！／／／／／そんなことを聞いていないぞ」

と、こんな感じでいつものバカ騒ぎになってしまったので、ファミリーが回収していった。俺は忠勝の隣に来て

彰人

「お前さん、なんかしてくれただろう?今日の一子は、いつもよりもなんて言うか違うからな……シシシシ」

忠勝
「知るか／／／／」

彰人
「そうかい、そうかい。まあいいか、ちょっと待て……電話だ……はいもしもし」

百代
『もしもし…彰人だな……彰人だよな!』

彰人
「その声は、百代か!いやぁ～元気そうだな!本当に!」

百代
『あ、ああ。声が聞けるだけで私が、私は……へぐっ!』

彰人
「こら、百代。泣かないの、それでどうかしたのか?確か国際電話は高いからしないって言っていただろう?」

百代
『我慢できなくなった』

彰人
「可愛い事をいうな、お前は」

百代

『それと明日の日本時間朝、六時に揚羽さんの飛行機で帰ってくるからその連絡だ。爺にも伝え置いてくれ』

彰人
「ああ、わかった。それじゃあ、気をつけてな」

百代
『ああ、それじゃあな、愛しているぞ彰人／／／／／／ああ、恥ずかしいっ！』

そして切れた……そして隣にいた忠勝に

忠勝
「おい、お前。今、完全にしまりがない顔をしているぞ……頬が緩みっぱなしじゃないか。まあお前ららしいがな」

そして次に試合となった、それは

鉄心
「それでは次に準決勝を始める！東は板垣天使、西はメッシ！前へ」

そして一子のライバルが、こんなところで現れるとは思いもしなかった。

##第九十八話##（後書き）

最後には彰人君の甘い話でした。すいません！

##第九十九話##（前書き）

やっと、やっとココまで来ました！！

##第九十九話##

板垣天使、こいつは現在一子と同じ薙刀を使って勝負にでていた、あいてはメッシ。しかし相手に関係なく、あいつの動きは異常だ。まあ釈迦堂さんの弟子と言っていたからそれもそうだろうが、しかしなんでこんなリスクを伴う事を?俺はそんな事を考えていると鉄爺の声が聞こえた

鉄心
「勝者、板垣天使！」

天使
「おっしゃ、これで後一回かちゃあ、お仕舞いや！」

これで準決勝の片方は終了、次は一子の番だ。俺らはもうなにも言わずにただ見守ることにした。もう俺も言うことは無い、そう、あいつはもう一人の武道家だ。ならばあいつは自分の意思で大丈夫だろう

鉄心
「それでは、準決勝の二回戦といくかのう。それでは選手、前へ」

そして一子と、そしてもう一人は、確かセルゲイだ。身長を２３０を越す大男でさらに地元のロシアの荒熊と言われている非常に攻撃的な奴だったはずだ。俺が海外に行っていたときに聞いたことがあるのはこれぐらいだろう。そして勝負が始まる

セルゲイ
「ハァァァァア！」

相手の豪腕な腕が一子を襲う、しかし一子はそれを受け止めた……
あいつ、発動しやがった。

一子
「川神流……無天方才発動」

さて、これで勝敗は決した。あいつのあの技はそれこそクリスでも防ぐことができない、ある意味発動すればそれを回避することはない。なんて言ったってあれは俺や百代、鉄爺のような川神院師範代でも梃子摺る型だからな。

セルゲイ
「う、この動き。だが！私が負けることは許されないのだ！ガァァァァ」

相手のセルゲイも攻撃をもっと野性的な攻撃に変わる、しかし一子は避ける。そして隙を待つ、後はそれが相手の終幕だ。そしてそれはすぐに来た

一子
「終ワリ……川神流奥義、顎！」

それはまるで一瞬だけの静寂を永遠とさせるような一言。そして一子の薙刀はセルゲイの腹の溝打ちに入っているのだから、そして一子は静かに薙刀を抜く、そうすると巨体のセルゲイはそのまま倒れた。これで準決勝の勝負はついた。

クリス
「……あの犬がここまでに」

岳人
「マジカよ、あの巨体を一撃だぜ。夏休み中になにがあったんだよあいつに」

モロ
「す、凄い……なんて火力とスピードなんだよワン子は……」

京
「……彰人のおかげ？」

彰人
「いや、俺だけじゃないさ、お前らだってたぶんあいつの支えだろうさ。俺はただそれを手助けしただけさ」

忠勝
「へっ、あの弱虫だったあいつが今じゃあんなに強いのか……俺もちょっと勇気だされねぇとな」

大和・彰人
「「ま、頑張れ」」

忠勝
「てめぇら、何聞いてやがるんだよ！／／／／／」

そして俺らはラストの戦いを見ることにした、これが最初に始まる一子の業だと知ったのは俺らも試合が終わるまで分からなかった。

Ｓｉｄｅ　鉄心

とうとう一子がここまで来おったわい。才が無いなどトンでもないものを見せてもらったわい、川神流奥義……無天方才、ルーから技の概要は聞いておったがあの技、ただの技では無さそうじゃな、ワシの使う顕現のように人それぞれの業のようじゃ、しかしこれを見抜いた彰人もさすがじゃ。それでは最後の勝負、間違いなくこの板垣天使は釈迦堂の弟子であろう、さっきから型が未完全ながらも川神流じゃったからのう。まあ今の一子なら何も問題もいらんだろう……なにも起こらなければのう

ｓｉｄｅ　ｏｕｔ

鉄心
「それではこれより川神武道会の決勝を行う……東、川神一子！」

一子
「オッス！」

鉄心
「西、板垣天使！」

天使
「うちは、天使って書いてエンジェルや！そこら辺間違えないでくれや！！」

とうとう、始まった決勝戦。時間としてはもう夕方の四時、これで一子の将来が決まる。俺は固唾を呑みながらもなぜか興奮していた、たぶんあいつの無天方才が俺の蛇のボルテージをあげているのだろう。そして激闘の幕開けだ

鉄心

「それでは……始めいっ！！」

鉄爺の言葉を皮切りに二人は互いの薙刀を交差させる。それは一瞬の出来事なのに、しかし空間からは、いや空気には分かるこの振動。今ここに決まろうとしているのだ、勝者が

天使

「へ、お前中々強いじゃないか、まるで師匠と戦っているみたいだぜ、だけど。これなら」

そして相手は構えを変える、今までの構えからなんとそれは肩に薙刀を背負うような形で構える、初めて見る構え、しかし今の一子は無駄だ

一子

「……フッ！」

すでに最初から無天方才を発動している一子に型や業はある意味意味がない、必要なのはあれと同等のスピードと火力、それだけだ。

大和

「二人とも、すげぇ……まるで風を切っているみたいに薙刀をふっていやがる」

大和ですらこの空気に触れている。そして薙刀はさらに交互に交じり合う、しかし一子も無傷とは行かない、相手のスピードが少し一子よりも上のようだ。足元を見ると少し紅くなっている

天使

「へ、いつまでそんな、おっと！攻撃も出来たのか。ちっ、こうな

ったら、これで」

相手は今度は構えを戻し、そして突撃。それからすぐに薙刀を軸にしたの蹴り、しかし一子もそれを読んで、蹴り上げた

天使
「ガハッ！」

相手の腹部に直撃、そして空中に上がっている相手に一子はすかさずに一撃を加えた

一子
「川神流奥義……山崩シ……吊ラレロ、大車輪！」

相手を落とし、そして突き上げた……一子、お前は今、怒っているのか？俺はそう思い、あいつの顔を見る、そこにはなにかを侮辱された、そんな一子の顔があった。そうか、あいつほどこの川神院を愛していたやつはいない、だからこんな紛い物になんか負けないのか……なら

彰人
「忠勝、一声ぐらい、かけてやれよ、今の一子はお前だって嫌いだろう？」

そう、今のままでは釈迦動さんと同じ事になる可能性がある。

忠勝
「ああ、あの女が原因ってこともわかってはいるが、なんか今のあいつは……なにか違うがお前らに救われる前に似ている……はぁ～しゃあねぇ、がらじゃなぇが」

そして忠勝はリングの傍まで行き

忠勝
「おい、一子！お前は…お前らしく夢を掴め。勘違いしてんじゃぇぞ！前も言ったがレールは引いてもらっても、自分で動かないと意味がないんだよ！そうだろう、一子！」

彰人
「うむ、青春だね」

大和
「……知っていたんだ、彰人。源さんがワン子のこと」

彰人
「ふ、これでも人の恋路には簡単に気付く性格でな。まあ今日のことはいい思い出さ、それに岳人達なんて試合のほう集中していて完全に忠勝の言葉聞いていないぜ」

大和
「そうだな、この大観衆の中じゃ。ワン子も」

彰人
「いや、あいつはわかるだろうな……なんせ犬だぞ、あいつはさ」

俺の言葉と同時に一子の動きは鈍った、いや違うな正確には……本来の力を発揮し出した。

一子
「……あれ？……私、さっき暗い何かに「貫った」…フン！」

天使
「ギャフッ！」

一子
「たっちゃんの声？……うん、私今なら自分に自信もてるよ、たっちゃん！……川神流、奥義！」

天使
「ち、さっきとは違う！？気？」

一子
「顎（アギト）！！」

そして……一子の勝負は幕を閉じた。

鉄心
「勝者！川神一子！！」

川神武道会は閉幕を向かえた。

Ｓｉｄｅ　百代

私は今現在空港にいる、揚羽さんのチャーターでそのまま日本に帰るのだ、現在はその準備待ちだ。明日の日本時刻六時に空港につけば彰人に会える、最初にキスは絶対だし、抱擁もするだろう、後々

揚羽
「川神の、少しその緩んだ顔を隠さぬか……まったくどうせ御剣の事を考えていたのであろう？」

百代
「当たり前の事を聞かないでください、揚羽さん」

揚羽
「当たり前か……まあそれは良いとして、川神武道会の方も終わっただろうな。今回は誰がお前との対戦権を掴んだか」

百代
「ああ、そう思えばそうだったな」

今の私にはそれよりも重要な件が二つもある、それはまず我が妹のワン子とは試合そして彰人との本気の死合い。今はそれだけが私の半分を仕切ってあり、そして半分は彰人にどう甘えるかである。

揚羽
「また顔が緩んできおって。まあよいか、それもそれで。川神の、用意ができたようじゃ、行くぞ」

百代
「あ、はい揚羽さん」

待っていろよ、ワン子……そして彰人♪

ｓｉｄｅ　ｏｕｔ

今、一子は今日の疲れのせいか爆睡している。俺はというと今日のこの武道会の片づけ中だ、そして

忠勝

「俺がいる理由は？」

鉄心
「なに、一子が一瞬黒い気になったのをおぬしが止めてくれたようじゃったからの……なに、一子にも一言言ってやれということじゃ……」

忠勝
「は、はぁ～」

さすがに忠勝も鉄爺には勝てないらしい。俺はそんな風景を眺めながら修行僧と一緒に骨組みの片付けに精を入れた。大和達はすでにもどっていった。

ルー
「はい、それはこっちにいれネ」

ルー師範代はもう、完全に喜んでいた。まあ最後のあの黒い気の事は正直焦ったらしい、まあ釈迦動さんの事もあったから余計なのかもしれないが、なんていうか、恋愛の力ってすごいな、俺が思うのもなんだけど。

鉄心
「彰人、ちょっとこっちにこれぬか？」

片づけ中に鉄爺が俺に声をかけた

彰人
「あ、はい。それじゃあすまないけど後よろしく」

修行僧
「あ、はい彰人殿」

そして俺はすぐに鉄心とそして忠勝の座っている境内の階段に腰を下ろす

鉄心
「ご苦労であったな、彰人。おぬしには感謝しても仕切れぬ大きなことをしてもらったぞ」

彰人
「別に俺は何も。ただあいつが夢を諦めなかった結果ですよ……それに褒めるならこの忠勝を。一子が憎しみで最後戦いそうになった時に止めたのはこいつですよ」

鉄心
「ホ、ホ、ホ．そうじゃのう、して彰人、おぬしには最初から一子の闇を知って追ったの？」

彰人
「ああ、蛇が懐いていたからさ」

鉄心
「……そうか、だが今回の戦いでも見せてもらえば分かるぞい、忠勝といったのう」

忠勝
「あ、はい。源忠勝です」

鉄心

「一子を頼むぞい」

忠勝
「はっ！？」

鉄心
「ほんの冗談じゃのう、彰人？」

彰人
「まあそうなったら、俺はお前の兄なｗｗ」

俺は久しぶりに笑った。

現在の日付、八月二十五日……夏休みは後六日となった、今日だった。

##第九十九話##（後書き）

あと一話で百話です。これも皆さんのおかげです！それでは次回会いましょう！！

##第百話## （前書き）

夏休み終了！

##第百話##

Ｓｉｄｅ　???

川神武道会が終わり、そしてそれを見終えた者が今ここでなにか会議をしていた。

サウンドオンリー１
「やはり、我々のシナリオにはあの川神院の連中は邪魔でしかなさそうだな」

サウンドオンリー２
「しかし、それを考えるのならまずはあの御剣と言う者だろう？なんせ釈迦堂ですら相手をしたくないと言うものだぞ、川神鉄心、川神百代、そして御剣彰人。三枚のジョーカーなどトランプで言うのならイカサマでしかない」

サウンドオンリー１
「そのために我々は用意したのだ……そうだろう？」

？？？
「ええ、そうですね、彼には私が当たります……この“神代”綾人がね」

サウンドオンリー２
「期待しているぞ、釈迦堂が言うのなら…川神百代と言うのはあやつの弟子でどうにかなる、そうなればあとは……くくく。これで十分だろう」

サウンドオンリー1

「そうだな、後はあの不出来な“息子”か、問題は」

その会議な、なんでそしてなんのシナリオなのかは、今はこの三人、そして釈迦堂しか知らないのであった。

綾人

「（お前だけは俺が倒すのだ。そのためにお前を観察してきたのだ、この俺は……そうだろう？“神代”彰人よ）」

ｓｉｄｅ　ｏｕｔ

今の時刻を説明しよう。現在五時の半過ぎぐらいなのだが、俺は空港に向かって車にのっている、まあ車と言ってもバスなのだが。六時丁度到着すると言っていたが何せ九鬼家の飛行機、性能は良いだろうし。それに百代が先に出ていると思い、俺は一応二十分前に到着を目標に空港に向かっている。

運転手

「終点の空港です。それでは良いフライト。そしてよき帰りを」

凄く渋い声の運転手さんの声で俺は空港を降りた。後は待つだけだ。そしてそれはほんの数分もしなかった。理由は

百代

「彰人～！！」

盛大に大声でそう言いながら俺に抱きついてくるこの彼女。そう、俺の彼女だ

彰人
「百代、おかえり「はむ」ちょ、ま、「レロ、チュパ、チュル」……」

現在、犬のマーキングの如くキスの嵐と、そして顔をなめられている。いやぁ～揚羽さん、やれやれって顔をする前に、その前にどうにかしてください

揚羽
「まったく、飛行機内では御剣の自慢話。帰ってきたらこれか？まったく、まあ今日ぐらいはいいのかもしれんな「揚羽さまぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！」……うちにも似たようなバカがいたな……小十郎！」

小十郎
「揚羽さ「こんなところで大声をあげるとは何事か！馬鹿者！」揚羽さまぁぁぁぁ！」

そしていつものように吹き飛ぶ小十郎、俺らはそんなをも気にしないぐらいの抱擁とキス。そしてそれが一段落して現在空港内にあるレストランで食事中。なぜ、揚羽さんがいるのにここかと言うと、まあ簡単に言うと飛行機は疲れたそうであまり畏まっていては困ると言うことでこんな簡易的なファミレスだ。

彰人
「揚羽さん、本当にありがとうございます。百代に付き合っていただきまして」

揚羽
「何、私も色々とあってのう。それゆえに鉄心殿の話の乗っただけ

さ、それよりも昨日川神院で武道大会が行われたな」

彰人
「ええ、中々なものでしたよ」

揚羽
「ほう、それでは誰がこの今現在、お前の腕に抱きついている女と戦う権利を得たんだ？」

彰人
「ええ、それは……プロではありませんとだけ言っておくよ」

揚羽
「フハハハハハ、そうか……それはおもしろいな、そうだろう川神の？」

百代
「……素人が、勝っただと。あの武道会にはそれこそ多くの挑戦者がいたはず、それもプロの格闘家や、武道家などがな」

彰人
「ああ、もちろん勝ったさ。“素人”がな」

百代
「そうか、そうか」

何か安心するようにその顔はまるで赤ちゃんを見るようなお母さんの顔で何かを見るようなそんな顔の百代だった。俺はそれを手で肩を抱きながらそのまま甘える百代で遊んでいた。

揚羽
「まったく。小十郎、お前ももう少し今度鍛錬を上げてみるか？そうすればもしかしたら少しは上がるかも知れんな」

小十郎
「は、揚羽様のためならば」

そして俺らは空港で別れて俺らは川神市に戻ることにした。

それからさらに一時間をかけて俺らは川神院に戻る。もちろん誰も出迎えないのだがなんていうか……本当に助かった。

百代
「彰人～彰人～彰人～♪今日は一緒に寝るぞ、さらに一緒にお風呂だろう、それに今日はこのままデートな」

ずっとこんな調子だ。腕に抱きついているのはいつもなのだがなんて言うのだろう……今日は余計に胸を押し付けていないか百代？

彰人
「百代、随分となんていうか甘え上手になっていないか？」

百代
「う～、なんだかんだでさすがに二週間以上の彰人成分の摂取不良は体と共に精神にも異常のようだ…なんだか、すぐにでも彰人にメチャクチャにされたい気分だ」

彰人
「今日の夜まで待とうな……ついたな」

そして川神院につくとそこには一応出迎えのようでルー師範代と鉄爺が待っていてくれた

ルー
「おかえりネ百代」

鉄心
「ふむ、無事に帰ってこれたようじゃのう」

百代
「彰人に会いたいんだから当然だろう。もし飛行機なんて落ちてみろ、泳いで帰ってくるぞ私は」

ルー
「それもそうネ。それじゃあここでの立ち話はなんだから、まずは院に戻って話そうか」

百代
「ああ、そうしよう。それに私の挑戦者が誰になったかも気になるしな」

そして俺らは院に戻っていった。一子はまだ寝ているらしい、まあんなに連続しての無天方才は初めてだっただろうからな。そして話は武道会についてとなった

鉄心
「それでは百代、今回の対戦相手を発表するぞい」

百代
「ああ、誰だろうと相手になろう。それに早く終わらせて私にはま

だやらないといけないことが多いからな」

そのやらないといけないことは、俺との勝負。そして一子の勝負だろう、まだ百代は相手が一子だと知らないから……これはどういう反応だろうか楽しみだ。

鉄心
「それでは今回の対戦相手は……川神一子じゃ、百代」

百代
「は？」

あっけに取られた顔だった。

百代
「ジジイ、冗談は「本当だよ百代」……彰人…それじゃあ本当にワン子が？」

彰人
「ああ、あいつは有名な武道家達を倒して、そして今回の武道会に勝ったんだよ……まあ様は百代との挑戦権をガチで手に入れたってことだ、あいつは」

百代
「そうか……そうか……そうか！それじゃあ、すぐにでも相手にしてやらないとな、それでワン子は？」

ルー
「ちょっと待って欲しいね、それは。今現在、一子はまだ寝ている

ヨ。まああんなにも戦ったのは久しぶりだろうしネ、だから一応今日は起きるだろうけど戦いは明日にしてほしいね」

百代
「ふ、そんなことならばいくらでもいいぞ。私は妹の成長をフルで見たいからな！」

今までに無いぐらいの機嫌の良さの百代がそこにはいた、俺でもここまでは最近では夜ぐらいしか出せないと言うのに……それだけこいつも心配していたんだろうな、一子の事を

鉄心
「うむ、それでは前よりに決まっていたこの一子への試練についてじゃが、分かっておるのうモモ？」

百代
「ああ、私が決める。一子が川神師範代に相応しいかどうかをな」

彰人
「なあ、それに一人だけ呼んでいいか？」

百代
「うん、これは真剣な試合だぞ彰人「分かってはいるんだが……あいつだけは呼びたいんだ、ダメか？」…私が彰人のお願いが断れるわけがないだろうが、ジジイ、どうだ？」

鉄心
「彰人よ、それは彼の事かのう？」

彰人

「イエス♪」

鉄心

「許可じゃ♪」

そして俺らは、次の日を待つだけとなった……夜のこと、それはまあ作者が言うには１８禁を超えて２１禁だから詳しく聞くな、もとい書けないだってさ。

現在の日付……八月二十六日、夏休み終了まであと五日となった今日である。

Ｓｉｄｅ　百代

今日は、ワン子の、私の妹の将来を決める重要は試合だ。この試合に手加減なんてそれこそ失礼だ。私は全力を持って妹を潰しにかかろうと今、胴着を着た。

彰人

「それじゃあ、いくぞ百代」

私の大好きな夫がすでに外で待ってくれていた。着替えを見ていても良かったのだが。そして私はワン子の前に立つ。そして良く見ると後ろには源がいた。彰人が呼ぶたかった奴はあいつだったとは。まあいいだろう、そして私は川神院次期院長として、その場に立った。

Ｓｉｄｅ　ｏｕｔ

俺は百代を呼ぶと、すぐに唯一の観客である忠勝の隣に座った。

忠勝
「いいのかよ、あのバカどもじゃなくて俺でよ」

彰人
「いいんだよ、お前だからこそな…で、いい加減に決心したか？」

忠勝
「昨日一日中考えたさ……決まった」

彰人
「はぁ～どこかのラブコメだな、これじゃあ」

忠勝
「勘違いするんじゃねぇよ。てめぇらよりかは十分に現実的だ」

俺らはそんな話をしながら、この言葉で話をやめた。

鉄心
「それではこれより川神百代対川神一子の仕合を開始する、両者共に用意は良いかのう？」

百代
「ああ、いつでも来い！（ワン子が、ここまでに）」

一子
「もちろん（今、私は夢の舞台に立っているんだ。さすがはお姉さま、無天方才を開かないとすぐに負けちゃいそう）」

鉄心

「うむ、それでは良い仕合を……始めいっ！！！」

そして勝負は始まる、先手を打ったのは一子からだ。一子はすぐに構えを解いてそして発動、無天方才。百代はこれにすぐに気付くといつもの調子の拳を繰り出す、しかし

百代
「何！？」

百代の拳は避けられていて、そして逆に一子の拳が腹に当たっていた。さすがにあの程度の攻撃では百代にダメージは与えられないが、それでもいつも河川敷で挑戦している初撃でやられる連中とは訳が違うのだ。

一子
「お姉さま、本気で来て！」

それは一子の歓喜の叫びでもある。そしてそれがあいつの願望だ。そして百代の構えを一層変わる、いやこの場合は空気が変わったのだろう。そして一子の攻撃に百代も避けそして今度はさらに早い拳が飛ぶ、次に見えたのはその追撃の蹴り。しかし一子も負けじと避けてそして隙を見ては攻撃を仕掛ける、しかしその隙は百代にとっては容易にガードが出来てしまう。そんなめまぐるしい攻防がさらに続く。一子は武器として薙刀を持ってはいるが今は蹴りの攻撃を基本として、まだ川神流の技を出していない。それに無天方才も一子の意思がある状態での発揮など今までに無いほどの力の出しようだ。

一子
「まだ、ここなら山崩し！」

ここで初の技を使う。しかし百代もそれに合わせるかのように

百代
「星砕き！」

拳にパワーを溜めての一撃、これにはさすがに一子の判断では薙刀での軌道変換が一杯一杯だが、しかしこれでもう分かっていることだが、一子の師範代は決定だ。あとはこれに川神師範代への教育、そしてそれに似合った教養さえあればいいのだ、それはまだあと未来でいいわけで。しかし百代はそれ以上に、一人の武人として川神一子を相手していた。

一子
「はぁ～はぁ～はぁ～」

百代
「ふ、次で決めるぞ妹よ！」

一子
「ハァァァァァ！！」

一子が気を薙刀に集中させた、そして放つのは……まさか

一子
「この一撃、手向けを受け取ってお姉さま！」

あれは、俺が昔見せた無理やり軌道を変える技。相手には下払いがなぜか、気付くと自分の胸に刺さると言う非情の技、しかし百代はそれをまさかの

百代
「川神流、大爆発！」
気を爆発させることで円形状の攻撃をブロック、しかし一子はそれが誘導でしかなかった
一子
「今！川神流奥義！顎（アギト）！！」
そう一子はこれが本当の狙いだ。そして決まると思ったが……しかしそれは百代が許さなかった。百代はその薙刀の刃の後ろの部分に手を置きそのまま空中にとび、そして一子に向かってこう告げた。
百代
「川神流奥義！星耀抹殺（スターライトブレイカー）！！」
そのエネルギーの中心に一子は巻き込まれた……これで勝敗は決した
鉄心
「そこまで！勝者、川神百代じゃ。ルー直ぐに担架を」
一子
「ま、まって爺ちゃん！」
鉄心
「無理をするでない、一子。お前は百代の本気を喰らっておるのだぞ」
一子

「それよりも……ねえ、お姉さま私、頑張れたかな？」

一子はすでに倒れているがそこに百代はすぐ側により、しゃがんだ。

百代

「ああ、私ですら驚いたさ……ああ、お前は間違いなく、そしてこれからも永遠に私の可愛い妹だ。そして川神一子さ」

一子

「アハハ、なんでだろう、うれしいのに涙が出ちゃっているよ……」

そんな一子の姿に、百代は立ち上がりこう言った

百代

「川神院、次期院長川神百代が言おう。川神一子は……師範代の資格がありと判断する……これに異を唱えるものは」

それにルー師範代も、そして鉄爺も笑い

百代

「異議が無いので……川神…一子を、ヒグッ、師範代としての資格を認めよう」

ちょいと百代は泣きながら、それを高らかに宣言してそしてこの勝負は終末を迎えた。

八月二十八日の出来事。

――――八月三十一日、川神院にて。

二つの殺気がぶつかり合い、そしてまるでそれは龍と蛇が戦いの嵐のような、そんな空気であった。

鉄心
「西、川神百代」

百代
「ああ。」

鉄心
「東、神代彰人」

彰人
「ふん」

鉄心
「それでは、両者共に……始めぃ！！」

第一部完

##第百話##（後書き）

ブ「と、言うわけでこれにて真剣で最強に恋をした、第一部終了です、わ～い、わ～い」

彰「おいこら、まず最初に謝れよ、このバカ作者」

ブ「……あ、はい。皆様、後書きにまったくラジオが出来なくなってしまい申し訳ありませんでした！！……自分のネタの無さに泣きました、ごめんなさい」

彰「そうだぞ、このバカ作者。てかこれで第一部終わったけどよ、更新はどうするんだ？」

ブ「え、変わらないよ…何を当たり前のことを言っているんだい彰人君？」

彰「は？」

ブ「だって、この一部で終わらせたかったことは一子の件だけだもん。まだ京でしょ、それに最初にあった暗躍とかもそろそろ出さないとね、アニメもやっていることだし」

彰「…出来ているのか」

ブ「モウマンタイ！」

彰「信じられるか、スネーク」

ブ「甘い、スネーク」

彰・ブ「「バイト！！」」

彰「本物との格をしれ。ということで作者は吹き飛びましたので、これにて今回の後書きラジオは終了だ。しかしここまで来れたのもみんなのおかげだ、感謝する。感想をくれたり意見があるとさらにうれしいらしいのこの作者は。それでは、次回、また会おう」

彰「バイニー」

ブ「ありがとうございました……ガクシ」

####第百一話####（前書き）

第二章、始まります

###第百一話###

九月一日。昨日の戦闘が終わり今日から二学期が始まる。それは新しい区切りでもあり人を変える……そんな時期でもある。

……第二部……始動

彰人
「百代！起きろ、遅刻するぞ……ち・こ・く！！」

百代
「もう少し寝かせてくれ、彰人。昨日はお前も激しかったから私は眠いんだ！」

彰人
「何を力説にいってやがるんだ、起きないとキスをしな「おはよう彰人」いい子だ」

いつもの通りの朝を迎えた俺らなのだが、見事一子は川神師範代の切符を手に入れ、前よりも増して修行に励んでいた。ちなみに百代は俺に昨日、結局負けてしまい自分の弱さを認めある意味、修行にも打ち込むようになった。

百代
「ま、まてよ今日から学校だと！」

彰人
「そりゃ、九月一日だからな」

いつもの通り俺の部屋で制服に着替えながら百代は何かに気付いたように言った。

百代
「しまった！今日の弁当が完全に作れていない」

彰人
「ああ、さっきまで俺と一緒に寝ていましたからね……今日はパンかな？」

そんな二学期のスタートだった。

朝食も食べていつもの通りの朝の通学路だ。一子は今日も俺のメニューを持続しながらやっているので居ない。そしていつもの通りに俺の腕に抱きついている百代、そして

大和
「と、いうよりもまだ暑いよな二学期」

クリス
「確かにそうかもしれないな……蝉もまだ鳴いているしな」

京
「まあまだ夏服だから大丈夫でしょ」

前にはいつもの通りの連中がそこには居た。大和、クリス、京、まゆっち、モロ、岳人とこんな感じだ。俺らはいつもの通り

彰人

「お～い、お前ら～」

大和
「あ、彰人！おはようさん」

と、大和が俺に声をかけたときに全員が大和を注目した。なぜだ？

クリス
「なあ、大和？一体どうしたと言うのだ？彰人殿の事を呼び捨てなんて……今までは兄弟ではなかったのか？」

大和
「まあ、夏休みにな…ちょっと」

彰人
「そういう事だ。まあ舎弟のままではあるが、俺も大和と呼ぶことにしたからまあそこら辺の変化だよ」

モロ
「あはは、なんか大和が彰人って言うのはなんか新鮮だね。それからモモ先輩は相変わらずみたいだね」

百代
「おう、お前らおはよう。今日も夫の腕から失礼ってな」

彰人
「百代、調子に乗りすぎだ……まったく」

まゆっち
「と、言っても顔が笑っていますよ彰人さん」

松風
「まゆっち、それは行っては行けないことだぜ！あれが世に言うバカップルってもんだ」

クリス
「そう思えば犬はどうしたと言うのだ？てっきり一緒に来ると思っていたのだが？」

彰人
「ああ、あいつは本格的に師範代のメニューに入ったから今日も朝練しているぞ。あの仕合の後からずっとそんな感じだしな」

クリス
「そうか、しかし彰人殿がそこまで鍛えていたとは。夏休みの最終週は驚かされてばかりだぞ、京のこともあるしな」

百代
「ああ、それは弓から聞いたぞ。部活真面目に参加しているようじゃないか」

京
「うん、ちょっとしたペナルティがあるけど…これも自分で蒔いた種だもん。それに今は楽しいしさ」

岳人
「へっ。夏休みで全員変わって来ているって事か？京もこれだと彼氏としては寂しいんじゃないのか？」

大和

「京が頑張っているんだぞ、彼氏が頑張らなくてどうするんだよ」

モロ
「見事なバカップルだね」

彰人
「確かにな」

全員
「お前が言うな!!」

そんなことで、俺らの二学期の通学路は今まで以上に楽しく時間を過ごしていった。そして俺らは教室に到着、ちなみに百代は……どうにかした

大和
「相変わらず彰人も大変そうだね、姉さん相手に」

彰人
「何、夏休みを一緒に入れなかった反動だろうさ。それさえ済めば」

京
「終わるのかな?」

彰人・大和
「「……」」

京のきつい突っ込みに俺も、大和も完全に黙ってしまった。理由は簡単だ、百代がそんな簡単な女じゃないことは俺が一番知っているからだ。

千花
「あ、直江っちに、御剣君。それに椎名っち、おはよう」
教室に入ると直ぐに挨拶をしてくれるのは立花だ。
彰人
「ああ、おはよう」
大和
「おはようさん」
京
「おはよう」
彰人
「……ふっ」
大和
「……おぉ」
俺は少し笑ってしまい、そして大和は改めて京が変わりだした事を認識したのだろう。そしてそれに驚いたのは大和だけではなく、目の前の立花も一緒で
千花
「あれ、椎名っち？この夏でなんか変わった？」
京
「うん？そうかな？」

千花
「うんなんか、いい感じに変わっていると私思うわ。ああ、いいな恋って」

と、そんな感じで京は頑張っているようだった。そしてそれと同じ感じできたのは

一子
「みんな！おはよう！」

元気一杯に入ってくるのはいつも通りの一子だ。

千花
「あ、おはよう。そう思えば川神武道会見たよ、凄かったわ」

一子
「アハハ、ありがとう。だけど私だけの力じゃなかったから」

と、ドアのところで話していると

忠勝
「すまん、どいてくれるか／／／／／／？」

一子
「あ、う、うん／／／／／／たっちゃんもおはよう／／／／／」

忠勝
「う、あ、ああ」

と、なんとも……言いがたい空間が出来ていた。これは真剣（マジ）だな、とこんな空間にキャラのぶれない人の登場である

真与
「みなさん、おはようございます！」

我らの委員長こと、委員長だった。

一子
「あ、おはよう」

一子はすぐに切替し、そして忠勝はそのまま席に着く。

大和
「ああ、おはよう」

彰人
「夏休みが終わっても相変わらずだな、委員長」

真与
「私はみんなのお姉さんですから、こんな休暇ではキャラはかわりませんよ」

彰人
「あはは、さすがだ」

真与
「椎名ちゃんもおはようです」

京

「おはよう、委員長」

そして委員長もこれには感激したらしく、そのまま頭を撫でていたぐらいだ。なにかがいい方向に向かっていると本当に思う、今日だった。ちなみに

千花
「そう思えば風間君は？」

彰人
「まだ冒険中だろうな、どうせ」

と、まだキャップは帰ってきていなかった。

今日は始業式と言うことで早く学校が終わるわけなのだが、俺はすぐに……学長室に呼ばれた、俺なんかしたか？話が長くなりそうなので俺はそのまま百代には先に帰ってもらうことにした。まあメールの返信で「その分は家でしてもらう」と書いてあったからそんなに怒っていない様で助かった。

彰人
「失礼します」

俺はノックをしてそして重いドアを開けた。そしてそこに居たのは鉄爺とルー師範代だった。と、いうよりもこのダーツはなんだ？

ルー
「お、彰人。よく来てくれたネ、こっちに来てくれるかい？」

そして俺はなぜか、学長室のお客様専用の椅子に座られた。

鉄心
「うむ、いきなり呼び出してしまい申し訳ないのう、彰人」

彰人
「いえ、まあ大丈夫ですよ。それで何か？」

鉄心
「うむ、お主も知っておるようにもう直ぐで二年生は修学旅行じゃろう？」

彰人
「ええ、そうですね。ですがまだどこに行くか聞いていないんですけど」

ルー
「彰人、川神学園の修学旅行は毎回違うんだヨ。前年は京都だったし、それより前は埼玉だったりしたからネ」

彰人
「埼玉って……まあそれは分かりましたがそれでなんで俺が？」

鉄心
「うむ、夏休みの間のお前の活躍は聞いておる。さらに武道会の時にも何かしら助けって貰ったようじゃのう？」

彰人
「気付いていたんだ、鉄爺」

鉄心

「うむ、それでの。ワシもさすがにこれで礼をしないのは失礼だと思っての……今回の旅行に、彰人……お主が行き先を決めてもらおうと思っての」

彰人
「……それ、本当ですか？」

鉄心
「うむ、そのために呼んだのじゃ」

そしてルー師範代が出してきたのはさっきのダーツの矢、そしてよくど真ん中がタワシって書いてありそうな、あの的が出てきた

鉄心
「いつもはワシが投げて決めておるのじゃが、今回はお主と言うことじゃ。まあ美奈には内緒にのう」

そして的を見ると、まずデカイ的が埼玉、次に京都、そしてあとは中国、カナダ、さらにアメリカと書いてあった。これは確実に国外を狙うしかないだろう。

ルー
「それじゃあ、彰人行くヨ」

俺はそして投げた……結果は

鉄心
「……アメリカ、じゃのう」

彰人

「よし！」

ルー
「それでは鉄心様、アメリカと言うことでこちらも準備に」

鉄心
「うむ、それでたのむぞい」

と、話が終わりそうなときに俺はこんな事を言った。

彰人
「あ、そうだ鉄爺。体育祭の時のあの条件覚えていますよね？」

鉄心
「ん？ああ、お主に一回だけワシと同じ権限の奴じゃのう？一体それがどうしたのじゃ？」

彰人
「……今、使うけどいい？」

鉄心
「うむ、大丈夫じゃが。なんじゃ行き先を変えたいのかのう？」

彰人
「……ちがうよ、ちょっとしたお願いでね……」

そして俺は一回だけの権限を使った。ルー師範代も鉄爺も俺が責任持てば言いと言ってくれたので、俺はそのまま帰る事にした。そして帰る際に、酷い滑稽なモノを見た。

マロ
「おだまりゃ！！」

これが俺の帰る際に聞いた一言目だった。

###第百一話###（後書き）

え、戦闘シーンがあると思いましたか?はい、ごめんなさい。まさかの百代の戦闘で彰人君、本気になってしまいましてネタバレの恐れでカットさせていた抱かしました。ごめんなさい

それでは次回会いましょう!!

####第百二話#####（前書き）

映画では、何か食べますか？

###第百二話###

それはすでに昼も過ぎ、すでに夕方になってきたそんな時刻だ。さっき俺が廊下を歩いている時にチャイムが鳴った、あれはたぶん部活生を返すチャイムだ。

マロ
「おだまりゃ！」

この声が俺には聞こえた。この声は間違いなくうちの歴史の先生で、あの顔面白塗りというどうみても居る時代が可笑しい先生だ、俺はそして校庭を見るとなんか生徒をしかっているようだ。

マロ
「麻呂に口出しをしのか、おぬしら！」

なんか、非常に変な指導だな……俺はそう思いながらもそのまま帰ろうとしたが…こんな言葉が聞こえてきた

マロ
「麻呂を侮辱すると言うことは綾小路を侮辱するのも同じじゃ！おぬしらそれをわかっておるのかのう？」

なんとも、権力かよ……綾小路家、少し腐っているのか？そんな時に宇佐美教師が来たようだ。

宇佐美
「なんですか、綾小路先生今のやり方は」

マロ
「おう、宇佐美先生ではありませんか。どうでおじゃった麻呂の指導の仕方は」

宇佐美
「見ていたから声をかけたんですが……さすがにあれはやりすぎでしょう？」

マロ
「宇佐美先生、生徒達が体育の先生の言う事を聞くのはなぜじゃと思っておるの？」

宇佐美
「そりゃ、もちろん怖いからに決まっているじゃないですか」

マロ
「麻呂もそうしておるだけのことじゃ、麻呂の場合は力と言っても権力のほうじゃがのう……それでは失礼するでおじゃる」

そしてあの顔面蒼白は帰って行った、そして宇佐美先生はそんな背中に

宇佐美
「いいのかね、あれで」

彰人
「ダメでしょう、どう見ても」

宇佐美
「お、御剣じゃないか。なんだお前もこんな帰りが遅いなんてどう

かしたのか？」

彰人
「ええ、ちょっと学長に呼ばれましてね。それよりもあれって」

宇佐美
「はぁ～まあ、大人のことには大人がどうにかするさ……それかガキがどうにかするさ、さ、お前も帰ろ」

彰人
「はーい」

と、俺は少し、あの教師がすこし教師っぽく見えた瞬間でもあったのだが、それよりもあのおじゃる野朗がもし、俺の仲間に何かすれば俺は許さないだろうな……はぁ～面倒だ。しかしもっと面倒なことがあったな

百代
「はぁぁぁぁ！！」

一子
「せぇぇぇいっ！！」

気だけでクレーターが出来ているのはこいつらと師範代でもルー師範代か、鉄爺とかなんだろうな。俺はそう思いながらも川神院にもどることにした。

彰人
「随分と今日は精がでているな二人とも」

一子
「あ、お兄様！」

百代
「あ、あなた！」

彰人
「おい、お前ら！言い方が変だろうが！？まったく一子も百代の影響を受けないでくれ。それと百代、お前は妹に変な事を植え付けないの！」

百代
「未来ではそう呼ぶのだから今から言ってもいいでじゃないか彰人。それじゃあ彰人も帰ってきたことだし、ここまでにしようかワン子」

一子
「あ、はいお姉さま」

一子も然ることながら百代も少し武に対する見かたを変えたような気がする。たぶん俺の本気のせいなんだろうな……蛇という鎖が消えた俺の本気を見ての変化か…まあ釈迦堂さんみたいにならないで本当に良かったけど

百代
「それじゃあ彰人、一緒に風呂に行くぞ。拒否権はないからな」

彰人
「もう、それは諦めているさ……さっさと行くぞ」

そして俺らは院に戻って行った。

風呂の中にて俺と百代はだっこした状態ではいっていた。ちなみに百代は俺の手を握って胸にあてながら遊んでいた。

百代
「はぁ～もう二学期だな彰人。」

彰人
「機嫌がいいと言うか、完全に憑き物が落ちているというか……一子の事もお前は随分と悩んでいたことにさらに確認できるよ……」

百代
「そうだったのかもな、だけどそれもお前がどうにかしてくれた。本当にお前は私の夫でよかったとつくづく思うぞ。それに最終日のあれもな」

最終日、それは俺が本当の本気、いやあの場合は殺気をあてて百代と勝負した時だろう。あの後からと言うもの百代はあの戦闘衝動が完全に消えていた。今はさっきのように一子との組み手など、武だけではなく技も磨いているのが現状。と、俺が考えていると百代が俺の手を遊ぶのを辞めて俺の方を一瞬見た、これは

彰人
「まったく、このいやしんぼめ」

俺は百代を前にだっこしているので後ろから強く抱きしめる。すでに行った後なのでまあ普通に理性は保っていた。

百代
「しょうがないだろう、戦闘衝動はなくなったせいでもっと彰人を

求めてしまう衝動が強くなったんだ。これもある意味お前のおかげだぞ、だからいっぱい頼むぞ。」

彰人
「はぁ～京の次はお前が依存か？」

百代
「ああ、そう思えば京の依存、あれは一体どういった変化だったんだ？私が中国で修行している間に何があったのだ。」

彰人
「まあ、大和が頑張っただけさ。それよりも百代がもし、京みたいに歪んだ依存になったら切り捨てるからよろしく」

百代
「ゆ、歪んだって……まああいつからの気で今は普通ではあるが…だけど彰人、その切り捨てると言うのは「まあ簡単に言うと別れ」そこまででいい。それ以上言うと私が崩壊しそうだ。まあ依存が酷すぎれば弟のようにしてくれていいからな、私が少し邪魔なら……そのなんだ、少しぐらいならちゃんと、ちゃん……グスっ、す、ずるぞ……」

彰人
「完全に涙声でそんなこと言っても説得力が皆無なのだが。はぁ～こっち向いて百代、抱きしめてあげるから……大丈夫、俺はお前を捨てることなんてありえないから、現状」

百代
「うぅ～。ガシっ！」

なんと言うか、俺と百代の“子供”がもしパパっ子だったら、大変かもな。俺はそう思った……それが本当になるとは知らずに、ただ今はそんな未来を楽しみにしているようなそんな感じだった。

次の朝が来た、眠い体を起こす、しかしそれは非常に目覚めが良かった理由は

百代
「おはよう、彰人。どうだ、エプロン姿のお嫁さんがモーニングコールなんて素敵だろう？」

彰人
「嫁、じゃなくて彼女だろうが百代。それよりもおはよう、今日は弁当作りに精でも入れているのか？」

百代
「ああ、昨日の分も挽回しなければならないしな、それに彰人のキスがほしいから丁度よかったのだ」

俺らはキスをして、そして朝を迎える。百代はキスをすると満足そうに部屋を出た、俺も今日は目覚めが良くてそのまま起きることにした。そして着替えてそのまま皆の居る場所に向かう。そんな時に鉄爺に話しかけられた

鉄心
「ホ、ホ、ホ。あのモモが朝早くから起きてしている事がお弁当作りとは、まったくこれこそ大和撫子と言うべきじゃのう、彰人」

彰人
「おはよう、鉄爺。それよりも百代の朝の弁当作りは一学期からし

ていたでしょうが」

鉄心
「何をいうか彰人。おぬしの居なかった一年を考えればそれこそ見違えるようになったわい。彰人のためにと、毎日花嫁修業をしておるからのう。まったく川神院もこれで安泰じゃ。それと……百代の衝動が消えておるのにはどう言うことじゃかな、あれは天性的なモノじゃったはずじゃが？」

鉄爺の本当の会話はこっちにあった

彰人
「なに、“俺が俺としての本気”を見せたせいなのかしれないけど、なんか百代がああなっていた」

鉄心
「……多いなる力の反動かのう。まあ衝動がなくなってもあの武は残っておるからのう、しかし昔のように冷や冷やしなくてすむのはこんな老いぼれにとっても楽でよいわ」

彰人
「よく言うよ、俺の攻撃を対処できるおじいさんなんていないと思うけどね、鉄爺？」

と、俺らはそんな会話をしながら朝食となった。もちろん百代は俺の隣に、そして一子はいつもの通り、走り回りながらも全員に配膳をすませていた。

一子
「は～い、梅干が欲しい人はこっちね」

修行僧
「一子殿、こっちにもください」

一子
「は～い」

ルー
「う～ん、今日もおいしそうね。これならさらに食が進みそうだよ」

一子
「食べすぎは注意してくださいね……胃は鍛えられるものですけど、それでも人によって限界が違うんですから、お酒の強い弱いと同じで」

ルー
「おう、私も怒られてしまったネ」

そんな和やかな、朝を迎えた川神院だった。

Ｓｉｄｅ　釈迦堂

釈迦堂
「おい、天使。どうだったよ、川神院の奴はさ」

天使
「あたいがこんな風に一週間も寝ていたんだぞ。これで分かれよ師匠」

釈迦堂

「へへ、それはすまねぇな。ちょっと俺も目をつけられちまってな。あれがもし大勢のあの場所じゃなきゃおれも捕まっていたぜ」

？？？

「むにゃむにゃ……彰人君は強いぞ～」

？？？

「辰子は相変わらずだねぇ」

釈迦堂

「おいおい、こいつ、いまなんて」

？？？

「おい、今帰ったぞ」

それは始まりの……いやある意味、終わりの一歩のようなそんな世界の笛がなったであった。

Ｓｉｄｅ　ｏｕｔ

いつもの通りの朝の通学路からのいつも通りの教室。そしてそんな今日のたぶん一番のイベント、それは六時間目の担任の梅先生の授業であろう。そう、今日は

梅子

「今日は、席替えをするぞ！」

ヨンパチ

「うっしキタァァァァァァ！」

岳人
「ふ、これで廊下側ならば先輩達の目にも俺様の肉体が見えるぜ」
と、若干層のアホたちもいるがそれはまあ内のクラス特有と言うことで。
梅子
「今回はまあ、御剣や、クリスもいるからくじ引きで行きたいと思うぞ。それじゃあまずは端の奴らじゃんけんしてくれ」
そして俺らFクラスの席替えが始まった。

###第百二話###（後書き）

てな、わけで日常を少し書きます。ヨロシク、ちなみに私は映画館ではポップコーンの一番小さいサイズをチマチマ食べる派です

####第百三話####（前書き）

Sの発売日までもうすぐ……

でもないかな？

###第百三話###

結局勝ったのは大串のほうからとなった、俺は真ん中の席に等しいのでどちらが勝とうかどの道一緒といった感じだった。そして俺は窓側の席となった、その時大串がなぜか

大串
「そ、そこは憂鬱主人公の定ポディション！俺が狙っていたと言うのに、ふ、所詮は三次元か……」

と、よく分からないことを言っていたが。ちなみに俺の後ろは忠勝で絶賛寝ている。そして隣は一子で、前は大和と、中々の場所に取り付けた。

大和
「なんていうか、あまり変化がないな、ここの席の周りは」

彰人
「そうだな、一子に忠勝。お前までついてきている、さらに窓側とは俺も運がいいようだ。な、忠勝？」

忠勝
「……」

一子
「たっちゃん、こんなときまで寝なくても……」

大和
「授業中に寝ているお前が言うな。それにしても結構ばらけたな」

と、大和が周りを見ると、結構変化があった。まずは岳人、女子が周りにいるが逆に疎外感がマックスのようだ。モロ、普通に教室の真ん中にあたる元大和の席。クリスと京は隣同士で一番後ろの廊下側の端。キャップは前から変化がなくドア付近でこいつも寝ている。

彰人
「まあうまく、ばらけたな。けどなんでヨンパチとか、他の男子は喜んでいたり泣いていたりしているんだ?席替えだよな?」

大和
「まあそれはたぶん、俺ら彼女持ちには分からないものなんだろうな……くわばらくわばら」

大和の言葉で俺も気付けた、ようは女子の周りにいけたかどうかだ、席が近ければそれだけ話す機会も増えるだろうとそんなかんじであろう……しかし俺は思ってしまった

彰人
「それって関係あるのか?」

俺の呟きは、一子と大和に首を振られながら終了した。

梅子
「よし、これで終わりだな。それと目が悪い奴は先にやったから大丈夫だろうが、もしあったら今ならば交換してやるぞ。居ないか?いないなら席替えはこれで終了とする……丁度いい時間だ、このままHRに入るぞそれでは委員長」

真与

「はい、起立…気をつけ、礼。」

梅子
「うむ、それでは連絡事項を言うぞ。明後日には進路相談第二段を開始する、お前らもそろそろ夢を持ってもいい時期に入った。三年の今はもうすでに進路の話だろう、だがお前らはまだ一年もあるのだ、じっくり考えてくれ。以上だ、川神、明日からなんだって？」

一子
「はい！進路相談です」

梅子
「よし、いいだろう。あ、それと椎名、お前は後で職員室に来い。それは終わりにする委員長」

真与
「はいです、起立、礼」

そして皆は帰りだした。ちなみに掃除当番は岳人の列のようで俺らはそのままかえれるようだが

京
「それじゃあ、先生にも呼ばれているし部活だから大和、先に帰っていてね」

大和
「ああ、それじゃあな」

京
「うん！」

彰人
「うんうん、青春しているね、少年」

大和
「ちゃかさないでくれるか？それよりも梅先生からの呼び出しってなんだろうな？」

彰人
「う～ん、たぶん部活のことだろうが……てか、お前は本人から聞けばいいだろう？まあ俺の予想じゃ、面倒なことではないだろうけどさ「彰人～」俺の彼女もきたようだ」

大和
「彼女？嫁の間違いだろう？」

彰人
「未来の、が抜けているぞ。じゃあな」

大和
「おう、明日」

俺らはそのまま手を振りながら別れた。廊下にまつのはもちろん百代…そしてなんとこれは珍しいことにユッキーと、準、さらに

彰人
「これは本当に珍しいな、葵君までいるとは」

冬馬
「うふふ、あなたとは一回じっくりとお話がしたかったので。」

彰人
「はぁぁぁ」

俺は深いため息をした

冬馬
「ま、そんな冗談はここらへんで。さすがにモモ先輩の逆鱗に触れる気は私にはありませんし。それに今日はユキが一緒に帰りたいといってきたので」

小雪
「そういうことだよ、彰人。ちなみにモモ先輩には完全了承を貰ってきているから大丈夫！」

準
「まあ、条件にこのあと俺がおごらないといけないんだがな……」

彰人
「百代、俺もいいのかそれ？」

準
「彰人！」

百代
「もちろんだ」

準
「え、俺には拒否権がないのですか？」

小雪
「あったら、こんなことにはなってないよ準」

ユッキーの言葉に落胆しながら、俺らこの珍しい五人での下校となった。

百代
「しかし、ユッキーは随分と可愛くなってしまったな。これは危ないな、彰人にアプローチしだしたら問題だ、地球のな」

小雪
「ニャハハ、大丈夫だよ彰人だってモモ先輩一筋だから。それにふたりは僕のヒーローとヒロインだもん、絶対それはないよ」

と、前方の二人は完全なガールズトーク中。そして俺ら男性陣と言うと

冬馬
「ふう、御剣君とはこうしてちゃんと話しておきたかったのである意味ユキには感謝しないといけませんね」

彰人
「あ、俺のことは彰人でいいぞ。それと俺には先に言っておくが百代以外は興味が無いからな」

冬馬
「ふむ、これは完全要塞といった感じでしょうか？分かりました。私の事も冬馬で結構ですので。準もユキも馴染んでいるようなので」

準

「まあ、こいつなら俺らはすぐに仲良くなるさ……あんなことがあっちまった時のチームでもあるしな」

準がいう、あんなこと、とはユッキーの虐待のことだろう。しかし、今のユッキーにはそんな感じはまったくない。これもこの二人のおかげなんだろうさ。

彰人
「そうだったな。まあ中学は違ったからそうだったけど、こうやって高校が一緒になったことだしな」

準
「そう思えば最初に俺らところにも挨拶に来てくれていたな。まあその時は若が遊んでいた時だけど」

冬馬
「ふふふ、それはある意味失礼な事をしてしまいましたね。しかし、そこまで礼儀正しく、そして今回のテストの点数ならば、我々のSクラスに来る事もできたでしょうに。なぜ、Fクラスに？」

彰人
「あ、ああそれはまあ、ファミリーの事もあったしな。それにSとFは隣だったからな、別にこれならユッキー達ともすぐに会えるとおもってな」

準
「なんていうか、彰人ってよ若に似て頭が切れるよな」

彰人
「そうか？一応これでも大和…って言っても分からんか、うちのク

ラスの直江の師匠っぽい所に居たわけだしな」

冬馬
「あの大和君の師ですか……確かにそれならば頷けられます。それでは、着きましたよ……ここです」

そこは、洒落ている喫茶店だった。俺らは中に入ると、そこはマスター一人だけも経営のようで、そのままマスターが手で誘導するような感じで適当に座った。ちなみに俺の横に百代、そして机越しに三人だ。

小雪
「それじゃあ、まず僕はパフェ！モモ先輩、ここのパフェ凄くおいしいんだよ……ちょっと高いけど」

百代
「なに、ハゲのおごりなんだから気にするか……私もそのパフェだ、彰人はコーヒーだろう？」

彰人
「ああ、それで頼む……」

冬馬
「それでは僕はアイスティーで」

準
「お前ら……遠慮をしてくれ。まあいいか、それじゃあ俺もコーヒーで」

と、マスターに言うとマスターは一瞬で書きとめていたのだろう。

すぐに料理にかかった。

冬馬
「まあ、今回はこんな事を呼び出してしまったのには「訳があるんだろう?」……気付いていたのですか?」

彰人
「ああ、ユッキーからってのはうなずけられるのだが、ならばお前は別に来なくてもいいのだろう?もしものことは準に任せられるはずだ。だけど今回は冬馬も居る、これだけで大体の大筋でいつもとは違うことぐらい分かるさ」

冬馬
「伊達にあの風間ファミリーの最終兵器ではないようですね」

百代
「まったく、だけどユキは私たちと話したかったのは本当なんだろう?」

小雪
「もちろん♪けど御免ね、こんな感じで騙すような感じで」

百代
「なに、ユキが私たちと話したいというのは本当なんだろうし。ならば騙してなどいないだろう?それじゃあ、話してくれるか?」

冬馬
「……今はまだ、そこまでちゃんとしたことをいえないのですが…
…もしかしたらあなた方の力を私に貸してくれませんか?」

彰人
「……それが、もしファミリーなど危害が加わらない限り、いいだろう。ユッキーの事もあるしな、な、百代？」

百代
「ああ、だけど……内容にも変わると思ってくれていい」

冬馬
「……その答えだけで十分です、ね、準」

準
「ああ、やっぱりあんたらはいい人達だ」

彰人
「…それじゃあこの話は終わりだな？」

冬馬
「聞かないんですね、こんな事を急に言い、さらにこんなところでと言うのに」

彰人
「お前らの顔で分かるさ。まあ“そんなことにならない事”を祈るさ、お前は大和と同じで慎重派だからな。俺らは保険なんだろう、ならば保険は保険らしくするさ。さてユッキーの話にしよう、一体なんだい？」

冬馬
「……そうですか」

その時の冬馬の呟いた時の顔は今までにない笑顔だった。そしてユ

ッキーが体を乗り上げながらこんな質問だった

小雪
「うん、うん、聞いてよ！この前の冬馬の話なんだけどね」

と、本人が居る前での愚痴だった。ちなみに聞いているのは百代だった

百代
「まったく、しょうがいな男と言う奴は。だけどな彰人はそんなこと絶対無いぞ、まずもってだな」

なんでその流れで俺の自慢話になるんだよ、百代

冬馬
「…妬けちゃう位お似合いですね、お二人は」

紅茶を優雅に飲みながらそういう冬馬

彰人
「ユッキーにここまで愚痴られるお前も凄いと俺は思うけどね。そしてなんで準は真っ白になっているんだ？」

そう、そこには真っ白に燃え尽きている準が居た

冬馬
「たぶん、レシートを見てこうなったのでしょう？」

彰人
「ああ、なるほどな」

小雪
「いいな、モモ先輩……彰人ぐらい素敵な人かいないかなぁ～」

百代
「ふふふ、いいだろういいだろう。だけどやらんからな」

その時ユッキーの目が一瞬冬馬を見たのはきのせいだろうか？まあそれよりもこのデカイパフェをくえるのか、俺は心配だった。

準
「……誰か、俺を慰めてくれ」

そんな準の呟きは誰にも響かなかった。

###第百三話###（後書き）

何のフラグ？作者はしりません、え、なんでって？知らないものは知らないからです。それではバイニー！！

###第百四話###（前書き）

寒くなりました

###第百四話###

そして数日が経過した、今日は金曜日である。あの冬馬の頼みは、いつかの話であろう。だから俺は何も心配しないで、いつもの通りの通学路だった。ちなみに京はいなかった、理由は

彰人
「うっす、お前らおはようさん。それで大和、お前の彼女は？」

大和
「ああ、今日は朝練だってさ。だからここにはいないぞってそっちのワン子は？」

百代
「ああ、今日はなんでも彰人のメニューでは走りこみのせいでここには居ないぞ。それよりも彰人、もう少し私の腰に力を入れてくれ」

ここまで密着しているのに何を言うんだ、この彼女は。そしてその言葉に普通にモロからのツッコミで

モロ
「可笑しいでしょ！完全に彰人の半分を占拠していて、まだ言うの！？」

クリス
「……なんと言うか、これはこれで良いのではないか？なんかもう、慣れてきてしまったぞ」

まゆっち

「その感覚が問題なんでしょうね、私たち」

大和
「まゆっちがもう、フォローじゃなくて普通に突っ込みまわっているのに……普通にそのまま行かないでくれよ、彰人に姉さん」

彰人
「と、言われてもな」

と、俺らがこんな会話をしていると岳人がこんなことを言ってしまった。

岳人
「と、言ってもよ。これらはもう少しで修学旅行だよな？大丈夫かよ、モモ先輩。一週間は確実に会えないぜ」

彰人
「おい、夏休みなんてほぼ一ヶ月いなかったんだぞ…って百代？」

岳人の言葉に俺が突っ込みを入れた。もちろん夏休みの経験もあるので百代は大丈夫だと思ったのだが

百代
「あ、あ、彰人が居ないなんていやだぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！！」

と、いきなり叫んで、岳人を殴り

岳人
「なんで、俺！ハグハッ！！」

百代
「そうだ彰人は不参加だ！不参加！学校で私と二人で特別授業だ、そうだ、それでいこう！！」

彰人
「はいはい、抑えようね百代」

そして少し俺の腕の中で暴れているので、ちょっと腰に回している手をそのまま百代の頭に置いて撫でた

百代
「にゃむ」

モロ
「……モモ先輩が、猫みたいに落ち着いているよ」

クリス
「愛のなせる技という奴だな。すばらしい」

大和
「なんか、もうねぇ～」

と、こんな感じで俺らも今日の朝は終わった。そして俺らは教室に入る、最近では京も女子の輪の中に入っているのを俺は席替えした席でそれを眺めていたり、岳人とヨンパチとかのあアホな会話を見ながら、過ごす

彰人
「これはこれで豪勢だよな」

大和
「偶に思うんだけど、彰人ってなんか、ナイーブなところがあるよな……今だって遠い目だったぞ」

意外にも俺の事を見ている奴がいたので俺は前の席に目線を向ける

彰人
「そうか？俺はただ、普通にこのクラスを見ているだけさ。二学期になっても変わらないなぁ～とおもってな」

大和
「変わらないって、まあ確かにこのクラスでの変化なんてそれこそビビたるものじゃ何も変わらないと一緒か。てか俺ら二年生は今日の朝言ったとおりに、修学旅行だぞ。わかっているのか？」

彰人
「ああ、お前も見ただろうが…百代、ま、「大丈夫なんだろう？」……ああ」

大和
「どんな手だか俺は非常にきになるが、まあそれは今日の集会で聞くとしようかな」

彰人
「と、言うか集会で思い出したんだけどうちのリーダーはまだか？もう夏休みも終わっているぞ……いつになったらこの日本に帰ってくるんだよ」

大和
「……まああいつのことだから生きてはいるだろうけど、確かに遅

いな」

一子
「と、言うよりもなんか帰ってきていそうよね、今日の集会の時にひょこっと」

大和
「ワン子、急に話かけるな！ビックリしただろうが…って！何をしているんだよ？」

一子
「え、もちろんダンベル上げよ。と、言うよりも最近はこれにも増して少しづつだけど勉強もね」

彰人
「この弟子（アホ）には、少し日本語を学んでもらわないといけないからな。説明しているのに感覚で話すのはきついのだ、俺がな」

一子
「あはは、面目ない」

大和
「一子が彰人の弟子みたいになっているのは前からだけど。なんだがどうも最近のワン子って変わったよな……」

一子
「そうかしら？」

彰人
「ああ、それは俺も心あたりがあるな（たぶん、忠勝関係だな……

よく言うよな、女は恋をすると綺麗になるって）……てか、先生遅くないか？」

そう、今日は朝の一時間目の使ってのＨＲらしいのだが……まだ来ていないのだ。最初のその知らせをしただけで、すぐに職員室に行ってしまった。

梅子
「すまないな、遅くなった。それでは委員長、号令をくれるか？」

真与
「はいです、起立、気をつけ礼」

そして全員が着席、そして注目が集中しているのは教卓に置かれている紙の束だ。これはたぶん

梅子
「それでは今回の修学旅行のしおりを配るぞ！」

ヨンパチ
「よっしゃぁぁぁぁぁ！先生！質問、質問で～す」

その時ヨンパチは勢いよく、手を挙げた

梅子
「なんだ？」

ヨンパチ
「今回の旅行先はどこになっているんですか？」

梅子
「ふ、そうだな。それでは配る前に発表してやろう、今回の旅行先は……アメリカの西海岸だ！」

岳人
「うおおぉぉぉぉぉぉぉぉ、アメリカキタァァアァ！」

モロ
「す、凄いよ。学校でまさかのアメリカって」

千花
「やばっ！マジで今回は運いいじゃん私たち」

と、クラスの連中はおおはしゃぎだ。ちなみに俺は知っていたのでなんとも無いし、後ろの忠勝は寝てるし、一子は意味を分かっていないし。

梅子
「静かにしろ！まったく、はしゃぐ気持ちも分かるが…今回は外国だ。その分の危険もあると思ってくれよ、まったく。それではまず、しおりを配って所注意を言うぞ」

と、言うことで俺らはまあ外国での諸注意を受けた。まあまずはあっちは銃社会だ、それを考えると確かに日本と全然違う、あとは班行動をしろとのこと、一人に絶対になるな、とかそれと無闇に外国人の話を聞くなとか、色々だ。まあ俺は少しぐらいなら話せるからどうにかなるけど……まあ大丈夫かなと、思っていると

梅子
「それではこれより、バスの席を決めるぞ……ああ、それと御剣は

こっちに来い」

…でしょうね、俺もそう思ってすぐに行く。大和は疑問に思いながらも一応隣は席はキャップと言うことで丸く収まっていた、横に京、クリス、そして前には忠勝、一子…これは忠勝が寝ていたのでそのまま一子が名前を入れたようだ。

梅子
「……御剣、一応学長より聞いているぞ。まあ確かにあの権利については我々先生陣も了承している。だから、まあ責任はお前だからな……分かっているな？」

彰人
「もちろんですよ」

梅子
「ああ、それと一応、お前は一人席で、一人だが……二人部屋だ。これはまあ、学長から言わせれば若さ、だそうだ。まあ、私から言えば……避妊はしろ、とだけだ。まあ、何、私もアメリカは楽しみなのだ」

彰人
「じゃあ、これで貸し借り無しで」

梅子
「ああ」

俺はそして戻ると、すでにバスの席は大分埋まっていたので、俺もすぐに書き込んだ。ちなみに席は後ろだ、一応、バスの一番後ろの席は補助として空席だ。俺らの前には忠勝、一子ペアがいるし、横

に京、クリス、斜め前には大和、キャップ、そして一子達の前が岳人、モロと、なんていうか完璧な席となっていた、そして一時間目は終わった。

時間が経過して、俺らの昼の時間となった。

彰人
「うん、うまいな」

大和
「普通にご飯にＬＯＶＥ彰人って書いてある弁当を食べないでくれ彰人。それで今日は、ラジオか？」

彰人
「ああ、そろそろじゃないか？」

そして放送が始まった。

準
『今日も始まりました、ＬＯＶＥ川神。え？久しぶりじゃないかって？何をいう、毎週放送しているぞ（作者のネタが完全に尽きました）…と、言うわけでどうもパーソナリティの井上準です、そして』

百代
『彰人が修学旅行にいくのがつらい、どうも川神百代だ』

準
『あ、今日の朝にどこにいくか言われましたよ、そう思えば「うるさい！私の前でその話をするな！！」のはｓぃでぃ！。あ、彰人！助けｊぢぁｄがうｂｋ！』

そのまま音楽がかかったのは言うまでも無く

大和
「……本当に対策はあるんだよな、彰人？」

彰人
「大丈夫だろう、たぶん？」

と、こうして、今日の昼も終わった。

今日は金曜日と言うことで俺と百代は一度院に帰り、そして戻ってみると、そこには

キャップ
「それでよ、軍の奴らがもうそれは大変で」

足に包帯を巻いた状態でのキャップが普通に座っていた。

彰人
「帰ってきていたのか？キャップ、久しぶりだな、と言うかお帰りだな」

キャップ
「お、彰人にモモ先輩！久しぶりだぜ。今日の昼に帰ってこれた」

と、普通に話しているが、俺はこの足を指差したら、キャップはこう答えた

キャップ

「ああ、これか？これは冒険の際に軍に打たれたんだぜ！」

いや、そこで自慢されても

大和
「なんでも、親父さんのその冒険する遺跡が軍の支援だったらしくて、それでまあいろんなことしてこうなったらしいぞ」

すでに俺らよりも先に全員が揃っていたので大和が変わりに説明してくれた

彰人
「いつもの通りのアホが、いつものとおりの事をしたんだな？」

キャップ
「なんだ、その言い方は！まあいいか、それよりも良かったぜ……何回か死ぬかと思ったときもあってよ……そのとき本当にここの風景がちらついてよ…金曜かって思うこともなんどもあったぜ」

京
「……そうなんだ」

クリス
「だから言ったろ京。ここはそういう場所なんだから」

京
「うん」

岳人
「よし、こんなところで楽に俺も、話そう」

彰人
「なんだ?岳人?……おい、みんな岳人が何かいうぞ」

岳人
「げ!彰人、てめぇ!……まあいいか、それじゃあ俺様、別れた」

と、岳人の一言に全員でこう言った

全員
『やっとか』

岳人
「おい!!」

岳人の叫びが基地に響いた。そしてキャップに色んな報告をしていると、こんな話題になった

キャップ
「もう直ぐで修学旅行だぜ!絶対に逃せないだろうが、お前らと旅ってのも絶対におもしろいし」

まゆっち
「いいですね、私達は来年になるんですけど……楽しんできてくださいね」

モロ
「あ、その話題は」

一子

「ま、不味いわ」

岳人
「彰人、どうにかしてくれよ！俺が殴られる」

キャップ
「うん？なんかあったのか？」

百代
「彰人は修学旅行なんていかないからなぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁあぁぁぁぁっぁぁっぁっぁ！！」

百代の断末魔が基地に響いた…しかしそれもすぐに終わった

彰人
「ああ、まあいいか…お前ら、俺からちょっとして発表があるんだか……いいか？」

モロ
「まさか、本当にいかないとか？」

百代
「ホントか！？」

彰人
「それは無いから、俺も修学旅行には行きたいから。まあそれ関係なんだが……じつは」

そして俺は鉄爺と同じ学長権利を一度きりとはいえ使った事、そして内容をこいつらに伝えた。

####第百四話####（後書き）

修学旅行、みなさんはどこに行きましたか？

それでは次回会いましょう、バイバイ

###第百五話###（前書き）

修学旅行です、

###第百五話###

今日は九月の十四日の朝だ。それは非常に早い朝だった、学校の集合時間はなんと七時だ。その理由は

一子
「今日から、修学旅行だもんね。もう凄く楽しみなのよね！！」

そう、今日は俺がダーツで決まった修学旅行の日である。だから朝早く学校に行き、俺らはそのままリムジンバスで空港に向かうはずなのだが……ここに、もう一人の参加者が俺の腕にしがみ付いていた。

百代
「ふ～んふ～ん、ふ～ん♪ハネムーンは、アメリカの～♪」

一子
「お、お姉さま、機嫌が凄くいいみたいね……あの時から」

一子のあの時と言うのは、この前の金曜集会の事だろう。まあ全員に説明をしてそれで終了、とはいかずに……

～回想シーン～

彰人
「と、言うわけで百代も今回の修学旅行に同行することになりました～いえ～い」

百代

「う、嘘？」

岳人
「マジカよ？」

モロ
「……あ、アハハ？」

大和
「……彰人のさっきからのその落ち着きの原因はそれだったのか？けど、どうやって」

彰人
「まあ鉄爺とちょっと駆け引きをしただけだよ、俺はさ。と、言うことで百代は俺が責任を持っていればいいと言うことで……もちろん、百代行くよな？」

百代
「はい！もちろんです！！」

百代が可笑しくなったらしくなんと敬語になっていた。なんかもう、撫でたくてしょうがない

京
「撫でたくてしょうがないっていうか、撫でてるよ彰人……しょうもない」

キャップ
「こりゃ、本当に戻ってきて正解だったぞ」

～回想シーン終了～

と、こんな感じで百代も俺らのバスから班まで全部一緒となっている。ちなみにホテルの部屋も俺と一緒、まあ先生にも釘を刺されたのでちゃんと持っていくことにしている。クラスではもちろんFクラスでも行動である。ちなみにファミリー以外のメンバーはしらない。今日の朝のクラスの反応が楽しみでしょうがない。ちなみに百代が二年次は不参加……理由はまあ、なんて言うか戦闘のせいらしく、ある意味これが原因でもあって今回は許可されたのかもしれないな。

百代
「よし、パスポートOK、荷物OK、彰人OK、避妊具（コンドーム）OK！さあ、いくぞ、旦那様、そして妹」

一子
「レッツゴー！」

彰人
「一子、普通にスルーするな！百代、だからまだ、だって」

と、俺らはいつもよりも早い時間の通学となった。

俺らが歩いていると、後ろからアタッシュケースのコロコロが聴こえてきたので気を察知しなくても分かった、これは

大和
「おはようさん」

京

「おはよう」

岳人
「ガチかよ、モモ先輩がいるよ……よ、お前ら」

モロ
「まあ、なんていうか彰人があういううそは言わないでしょう。それに後が絶対に怖いしさ、なんて言ったってモモ先輩だよ」

クリス
「おはようございます」

キャップ
「こりゃ、どうにかしてまゆっちも連れて行けばよかったぜ」

彰人
「全員おはようさん、キャップ。さすがにまゆっちは無理だろう、来年だしあいつは」

百代
「よお、お前ら。」

一子
「みんなおはよう」

と、ここにアメリカに行くファミリーが全員集合した。ちなみにまゆっちは一人の寮は寂しそうなので、川神院で少しお世話になるそうよう計らっといた。俺らはそしてアメリカの話となった。

大和

「確か今回のアメリカって西海岸なんだよな」

彰人
「そうみたいだぞ、まずはロサンゼルスだろう、それにハリウッド、さらにカジノで有名なラスベガスってこんな感じかな?」

京
「けど、飛行機とか大丈夫なのワン子とか?」

一子
「気合でどうにかなるでしょ」

モロ
「気合って…そんなのでどうにもならないでしょう、飛行機は」

クリス
「なんだ、犬は飛行機に乗ったことが無いのか?」

一子
「うん、大体この日本だって関東圏ぐらいしか出ないもの。まあ修学旅行とかなら別だけどさ…なによ、そういうクリスこそ」

京
「や、ワン子。クリスは外国から来ているからどう考えても飛行機はのっているからね」

一子
「あ、それもそうね」

彰人

「と、言うか……なんだ大和、京とは戻したのか？」

そういう理由は、俺らと同じぐらいに密着して歩いているこの二人だからなのだが

大和

「ああ、最近こいつも頑張っているようだしな……その、まあご褒美だ」

京

「うん、昨日の夜からも一杯貰っているもん♪」

モロ

「大和、あんたって人は」

岳人

「ああ、俺様にも新しい春はこないかなぁ～」

一子

「こないでしょう、当分」

クリス

「犬の意見に同感だな」

岳人

「ガクシ」

二人の罵倒にやられた岳人、そして俺らはそれを見て笑った。そして俺らは川神学園に到着した。そして集まるのは視線の数々だ。まあそれもそうか、なんせ三年で有名な百代が俺らと同じくアタッシ

ュケースを持ってそのままバスに荷物を預けているからな。と、そんな時に学校の方から一人歩いてきたのは、あれは

京
「あれ?部長?どうしたんですか?」

弓
「え、ああ椎名さん。……ええ、じつは昨日の夜に百代からのメールがあったで候。そして内容が、非常に可笑しかったので真相を掴みにきたで候」

京
「ああ、それはですね。まあ、本人から聞いてみるのが一番かと」

いつものようにキャラを作っている部長さん。そして俺らはバスの下に荷物を預けて手荷物だけの状態となったのでそのまま部長の所に向かった。

百代
「おう、弓じゃないか。なんだ見送りでもきてくれたのか?」

弓
「そうじゃなくて……ふぅ、そうでは無くてなぜ、百代がこちらに。確かに我々の時は確か、どこかの国で勝負をしていたと学長から聞いていたのだが?」

百代
「ああ、なんでもそれの振り替えもかねているらしくてな……まあそれを、その彼氏がちょっと頑張ってくれてな、それで私も同伴できるのだ」

そう言う百代は、少しだけ照れて居たのは俺だけがわかったのかもしれない。そしてなぜか、眼で「やっぱりアナタのしわざ？」みたいな目で見るのは辞めて欲しいのだが……まあ確かに俺のせいでもあるんだけど。

弓

「まあいいで候。百代のことだから授業はどうでもいいだろうから、なにかあったら帰ってきた際に教えて上げるで候。それでは二人とも気をつけて、それと彼氏さんも頑張ってね」

そう言うと部長サンは学校に戻っていった。そして俺らは自分のクラスのバスに乗り込むことにした。そしてやはりここでも百代は注目されるが、だが

千花

「わお、モモ先輩も一緒なんですか！？

百代

「ああ、知っている奴らもいると思うが、私は去年参加できなかったのでな。それとまあうちの旦那のおかげだ」

と、百代が言うと「ああ、やっぱり」みたいな顔や目線で俺を見ている。だからなんでさ？

真与

「先輩がいようとも私がここの委員長ですからよろしくお願いしますモモ先輩」

彰人

「安心してくれ委員長。何かあれば俺がどうにかするから。と言うかそれが条件で今回のこんな無茶が聞いたんだけどな」

真与
「分かりました、それじゃあモモ先輩は御剣君の一任で。ちょうど御剣君のバスのせきは一人ですからそのままモモ先輩が隣と言うことで」

彰人
「了解」

百代
「なんだ、彰人だって私と行くの楽しみだったんじゃないか？」

彰人
「ふ、かわいい彼女と一緒の修学旅行で楽しみじゃないわけないだろう？」

百代
「……そ、そうだな／／／／」

あらら、あかくなっちゃってかわいいったらありゃしない。

岳人
「はやく、行ってくれ……頼むから」

ヨンパチ
「リア充は爆ぜればいいと思うぜ」

ヨンパチは物騒なことを言っているし、ちなみに岳人が後ろにつっ

かかっているので俺らはいそいそと座った。そして百代は窓がいいと言うことで先に座らせたのだが問題が発生した。それは

彰人
「百代、ここでもそれがいいのか？」

百代
「ああ、だってこの周りは大体が知り合いだぞ。ならばいいだろう？彰人？」

彰人
「ダメでしょ、ああ、そう言う顔をしないでくれ犯したくなるから……普通にな、普通に……少し、遊んであげるからさ、な？」

百代
「は～い」

大和
「……彰人、その会話も俺らの中だと丸聞ごえだからな」

京
「ああ、大和～」

大和
「ああ、こっちにも伝染した！！」

モロ
「なんか、大変そうだね僕達の後ろのみんなはって岳人！泣かないでよ」

クリス
「ええい、京！」

あれ？俺が火種でカオスになっていないか、まあいいか。それよりも

彰人
「忠勝はまだ、寝ているのか？」

一子
「あはは、たっちゃんの事だからたぶん昨日も遅くまで仕事していたんだと思うんだけどね」

モロ
「そう思えば、源君がここに居るのってワン子が書いたからなんでしょう？」

一子
「うん、だって決めるときも寝ていたんだもん。さすがにそれで一人とか可愛そうでしょう？」

百代
「あはは、妹はやさしいな」

キャップ
「ま、源さんだしいいだろう。いつもお世話になりっぱなしだしな」

大和
「お世話になっているのは俺らだけだろうキャップ……まあ確かにいいんじゃないか、なあモロ？」

モロ
「う、うん?別に悪いとは言ってないよ、ただ珍しいからさ」

一子
「そうかしら／／／」

視たぞ、一子。お前、無天方才を一瞬だけ使って誤魔化したようだが一瞬、そうほんの一瞬だけ紅くなったような気がした。そしてそれは百代も分かったらしく

百代
「おい、彰人…あれは?」

彰人
「両方だけど、両方ともって感じです、はい」

百代
「頑張れ妹!」

と、俺らは小声での二人を応援するのであった。

###第百五話###（後書き）

と、いう感じです。どうでしょうか、このカップリング。感想待ってます！

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

　ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n3637n/

真剣で最強に恋をした。

2011年12月17日08時57分発行